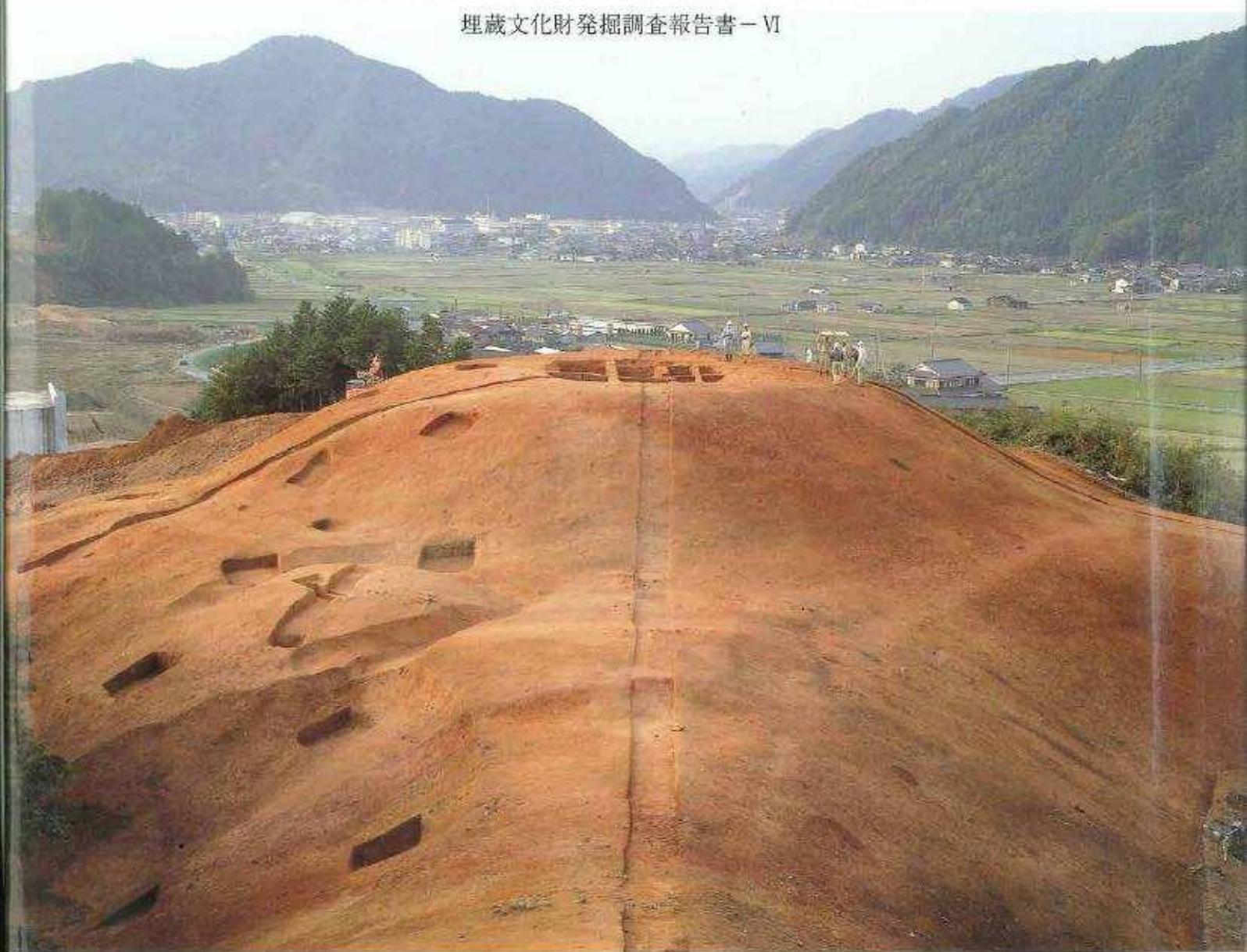


兵庫県文化財調査報告 第364冊

若水古墳群・城跡

一般国道483号北近畿豊岡自動車道春日和田山道路Ⅱ建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅵ



2009（平成21）年3月

兵庫県教育委員会

若水古墳群・城跡

一般国道483号北近畿豊岡自動車道春日和田山道路Ⅱ建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅵ



2009 (平成21) 年3月

兵庫県教育委員会

例 言

1. 本書は一般国道483号北近畿豊岡自動車道春日和田山道路Ⅱ建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書のうち、兵庫県朝来市山東町粟鹿に所在する若水古墳群および若水城跡の報告である。
2. 発掘調査および整理作業は、国土交通省近畿地方整備局の依頼を受けて兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所および兵庫県立考古博物館で実施した。
3. 若水古墳群および若水城跡の発掘調査は、平成11年度から平成13年度の3ヵ年にわたって行った。各年度の発掘調査担当者および兵庫県が設定した遺跡調査番号は以下のとおりである。

平成11年度	東地区確認調査（調査番号 990190）	別府洋二	川村慎也	田中秀明
平成12年度	西・中央地区確認調査（調査番号2000191）	久保弘幸	藤田淳	荒木幸治
平成12年度	西地区全面調査（調査番号2000272）	平田博幸	小川弦太	内野さくら
平成13年度	中央・東地区全面調査（調査番号2001042）	平田博幸	岸本一宏	荒木幸治
4. 発掘調査のうち、平成12年度の全面調査は西地区の古墳群を中心に行い、平成13年度は東地区および中央地区の古墳群ならびに城跡の全面調査を行なった。発掘調査は上記の職員のほか、発掘調査補助員として山本亮司・戸田真美子の参加があった。
5. 発掘調査時の地形および遺構の全体実測は空中写真測量図化とし、平成12年度はアジア航測株式会社、平成13年度は株式会社ジオテクノ関西に委託して実施した。その他の詳細実測は補助員および調査員が実施した。また、出土品整理時の遺物実測および遺構・遺物図の浄写は嘱託員が行なった。
6. 出土品整理事業は平成17（2005）年度から兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所、平成19年7月以降は兵庫県立考古博物館で実施した。主として下記の嘱託員等が整理作業を担当し、発掘調査担当者のうちの事務所・博物館所属職員が作業指示等を行い、これに工程管理の職員が加わって実施した。また、金属器保存処理は事務所・博物館職員の指導のもとに当事務所および財団法人元興寺文化財研究所で行なった。

4年にわたる出土品整理事業の担当者は下記のとおりである。

作業指示担当職員	岡田章一・岸本一宏（工程管理兼務）・仁尾一人
保存処理担当職員	岡本一秀
作業担当嘱託員等	八木和子 垣本明美 池田悦子 前川悦子 渡辺（津田）友子 長濱（三島）重美（実測、トレース等） 吉田優子 西口由紀 河上智晴 三好綾子 又江立子 荒木由美子 藤池かづき 嶺岡美見（接合・補強、復元） 栗山美奈 大前篤子 藤井光代 清水幸子（保存処理）
7. 本書に使用した写真のうち、遺構については調査員が撮影したもの、発掘中の空中写真撮影は各空測会社に委託して撮影したものを使用した。また、遺物写真については株式会社タニグチ・フォトに委託して撮影したものを使用した。
8. 若水古墳群出土試料の自然科学分析のうち、放射性炭素年代測定については株式会社加速器分析研究所、ガラス玉および赤色顔料の蛍光X線分析は株式会社パレオ・ラボ、漆膜の構造分析は株式会社吉田生物研究所にそれぞれ委託して実施した。
9. 本書の執筆は、発掘調査担当者であり、県立考古博物館所属の小川（第2章第2節）・岸本（第2

章第2節・第2章第3節鏡・第3章・第4章第3節以外)が行なったが、鏡についての報告および総括は大手前大学史学研究所オープンリサーチセンターの岩本崇氏にお願いし、玉稿を頂戴した。また、自然科学分析については各社の報告文の一部を掲載した。なお、編集は八木・垣本両嘱託員の補助のもと、岸本が行なった。

なお、執筆担当のうち若水古墳(A11号墳)等一部については、現地調査に携わっていなかった岸本が執筆せざるを得ない状況となり、調査担当者との意見の調整も不完全なまま執筆した。したがって、事実関係や判断において誤りがあるとすれば、その責は岸本にある。

10. 本報告で使用した図面・写真および遺物は、兵庫県立考古博物館および魚住分館で保管している。
11. 発掘調査および報告書作成にあたり、以下の方々から多大なる御協力を得た。記して感謝の意を表します。(以下、順不同敬称略)

岡村秀典 櫃本誠一 北垣聡一郎 木戸雅寿 西尾孝昌 田畑基 中島雄二 細川晋太郎

凡 例

1. 本書で使用した方位は第V系国土座標(日本測地系)を基準とし、北は座標北をさす。標高の数値は国土地理院1等水準点を利用した海拔高(T.P.)を使用した。
2. 地区名については、本報告の西地区が調査時にはA地区、同様に中央地区がB地区、東地区はC地区と呼称していたが、B地区に若水古墳群A支群とB支群、C地区には若水古墳群B支群が存在し、その名称が紛らわしいことから、調査区の存在位置によって西地区、中央地区、東地区と呼び換えた。ただし、各調査区の範囲は調査時のまま変更していない。
3. 遺構番号は、調査時には地区ごとに名称を付したが、報告の際に重複したため、必要に応じて調査時の名称と略号の両方を記載した。また、略号を付するにあたっては、遺構番号の前に各地区名を略したアルファベット(西地区:W、中央地区:C、東地区:E)を冠し、判別の一助とした。
遺構名の略号は、古墳と判断できない埋葬施設および不明遺構は「SX」、土壌は「SK」、溝は「SD」、土器棺は「SP」を使用した。
4. 遺構等の土層色調名および土器の色調名は『新版標準土色帳』(農林水産省農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所色票監修)によるものであり、土層名のうち、堆積物の粒度区分については、『新版地学ハンドブック』(大久保雅弘・藤田至則編著、築地書館株式会社発行)により、調査担当者が経験的に触感により判断したのものがある。
5. 遺物番号は本文・挿図・写真とも同一とし、遺物の種類ごとに通し番号としている。
また、遺物番号のうち、金属製品には番号の前に「M」、石製品には「S」、有機質には「W」をそれぞれ冠し、種類ごとに通し番号としている。
6. 土器類実測図のうち、須恵器は断面黒塗りにしている。
7. 本書に掲載した挿図のうち、第1図は国土地理院発行の1/25,000地形図、第2図は西尾孝昌氏の作成図、第3・4図は国土交通省から提供を受けたものをそれぞれ使用した。

本文目次

第1章 はじめに

第1節 遺跡の位置と環境	1
1. 遺跡の位置	1
2. 遺跡の環境	1
第2節 調査の経緯と経過	
1. 発掘調査	5
2. 出土品整理	8

第2章 調査の結果

第1節 概要	9
第2節 西地区の遺構と遺物	15
1. 古墳	19
2. 小結	70
第3節 中央地区の遺構と遺物	
1. 古墳	72
2. 土器棺・溝・土壌・集石	132
3. 城跡	142
4. 弥生環壕	149
5. 小結	158
第4節 東地区の遺構と遺物	
1. 古墳	159
2. 小規模墳墓	184
3. その他	202
4. 小結	204

第3章 自然科学分析結果

第1節 放射性炭素年代測定	(株式会社 加速器分析研究所) 205
第2節 ガラス玉の蛍光X線分析	(株式会社 パレオ・ラボ) 209
第3節 漆塗り製品の漆膜構造調査	(株式会社 吉田生物研究所) 212
第4節 赤色顔料の蛍光X線分析	(株式会社 パレオ・ラボ) 214

第4章 総括と考察

第1節 若水遺跡出土弥生土器の編年的位置	219
第2節 若水古墳の埋葬施設構造と築造時期	222
第3節 若水古墳出土鏡と古墳時代開始期における但馬地域出土鏡	227

挿図目次

第1図	遺跡分布図	2	第63図	A15号墳 第6・7主体部	65
第2図	若水城跡縄張り図	4	第64図	A15号墳 第6・7主体部・包含層 出土土器	66
第3図	道路用地範囲と遺跡調査部分	7	第65図	A15号墳 主体部 出土鉄器	67
第4図	若水古墳群・城跡 調査前全体地形	11	第66図	土器棺(SP-W3)	67
第5図	西地区・中央地区 調査前地形	13	第67図	土器棺(SP-W3) 出土土器	68
第6図	西地区・中央地区 調査後地形	14	第68図	木棺墓(SX-W10)	68
西地区			第69図	A16号墳 出土土器	70
第7図	調査前地形	16	中央地区		
第8図	調査後地形	17	第70図	尾根稜線方向土層断面	73
第9図	南尾根縦断土層断面	18	第71図	若水古墳(A11号) および周辺の調査前地形	75
第10図	A6号墳 平面・断面	19	第72図	若水古墳(A11号) および周辺の調査後地形	76
第11図	A6号墳 墳丘土層断面	20	第73図	若水古墳(A11号) 墳丘平面	77
第12図	A6号墳 第1主体部	21	第74図	若水古墳(A11号) 墳丘断面	78
第13図	A6号墳 第2主体部	22	第75図	若水古墳(A11号) 墳丘盛土断面	79
第14図	A7号墳・8号墳 平面・断面	23	第76図	若水古墳(A11号) 主体部平面	80
第15図	A7号墳 墳丘土層断面	24	第77図	若水古墳(A11号) 主体部墓壇	81
第16図	A7号墳 主体部	25	第78図	若水古墳(A11号) 主体部埋土縦断面	82
第17図	木棺墓(SX-W1)	26	第79図	若水古墳(A11号) 第1主体部 埋土横断面	83
第18図	木棺墓(SX-W2)	27	第80図	若水古墳(A11号) 第1主体部 埋葬施設	84
第19図	A7号墳 出土土器	27	第81図	若水古墳(A11号) 第1主体部 東側小口部 詰石	85
第20図	A7号墳 出土鉄器	27	第82図	若水古墳(A11号) 第1主体部 西側小口部 詰石(上面)	86
第21図	土壌(SK-W1)	28	第83図	若水古墳(A11号) 第1主体部 西側小口部 詰石(基底面)	87
第22図	土壌墓(SK-W2) 出土土器	28	第84図	若水古墳(A11号) 第1主体部 遺物出土状況	89
第23図	土壌墓(SK-W2・3)	29	第85図	若水古墳(A11号) 第1主体部 出土鏡	91
第24図	A8号墳 主体部	30	第86図	若水古墳(A11号) 第1主体部 出土鉄器	93
第25図	A8号墳 墳丘土層断面	31	第87図	若水古墳(A11号) 第1主体部 出土合子(1)	94
第26図	土器棺(SP-W1)	32	第88図	若水古墳(A11号) 第1主体部 出土合子(2)	95
第27図	土器棺(SP-W1) 出土土器	33	第89図	若水古墳(A11号) 第2主体部 土層断面(1)	96
第28図	土壌(SK-W4・5)	34	第90図	若水古墳(A11号) 第2主体部 土層断面(2)	97
第29図	土壌(SK-W4) 出土土器	35	第91図	若水古墳(A11号) 第2主体部 埋葬施設	98
第30図	土壌(SK-W6・7)	36	第92図	若水古墳(A11号) 第2主体部 埋葬施設 壁体側面	99
第31図	集石(SX-W3)	37	第93図	若水古墳(A11号) 第2主体部 埋葬部分	100
第32図	溝(SD-W2) 出土土器	38	第94図	若水古墳(A11号) 第2主体部 東側小口部 詰石	101
第33図	溝(SD-W1・2)	39	第95図	若水古墳(A11号) 第2主体部 東側小口部 詰石 第2面	102
第34図	溝(SD-W4・5)	40	第96図	若水古墳(A11号) 第2主体部 東側小口部 詰石 第3面	103
第35図	A13号墳 平面・断面	41	第97図	若水古墳(A11号) 第2主体部 西側小口部 詰石	104
第36図	A13号墳 墳丘土層断面	42	第98図	若水古墳(A11号) 第2主体部 出土鉄器	106
第37図	A13号墳 第1・第2主体部	43	第99図	若水古墳(A11号) 主体部上部他 出土土器	106
第38図	A13号墳 主体部・包含層出土土器	44	第100図	若水古墳(A11号) 墳頂北東部 出土土器	107
第39図	土器棺(SP-W2)	44	第101図	若水古墳(A11号) 墳丘西裾採取 鉄斧	107
第40図	土器棺(SP-W2) 出土土器	45	第102図	A10号(墳)	109
第41図	木棺墓(SX-W4)	45	第103図	A18号(墳)	110
第42図	木棺墓(SX-W4) 出土鉄器	46	第104図	A18号(墳) 土層断面	111
第43図	木棺墓(SX-5・6)	47	第105図	A18号(墳)・19号墳出土土器	111
第44図	木棺墓(SX-W7)	48	第106図	A19号墳 調査後平面	112
第45図	土壌(SK-W8)	48	第107図	A19号墳 墳丘土層断面	113
第46図	A14号墳 平面・断面	49	第108図	A19号墳 主体部平面	114
第47図	A14号墳 墳丘土層断面	50	第109図	A19号墳 第1主体部	115
第48図	A14号墳 主体部・南西部斜面出土土器	50			
第49図	A14号墳 主体部	51			
第50図	石棺墓(SX-W9) 出土鉄器	52			
第51図	石棺墓(SX-W8)(1)	53			
第52図	石棺墓(SX-W8)(2)	54			
第53図	石棺墓(SX-W9)(1)	55			
第54図	石棺墓(SX-W9)(2)	56			
第55図	石棺墓(SX-W9) 出土土器・石器	57			
第56図	A15号墳 平面・断面	58			
第57図	A15号墳 墳丘土層断面	59			
第58図	A15号墳 第1・4主体部	60			
第59図	A15号墳 第1主体部供獻土器出土状況	61			
第60図	A15号墳 第2主体部	62			
第61図	A15号墳 第1・2主体部 出土土器	63			
第62図	A15号墳 第3・8主体部	64			

第110図	A19号墳 第1主体部 棺身平面	116	第158図	B2号墳 墳丘土層断面	171
第111図	A19号墳 第2主体部	117	第159図	B2号墳 主体部平面	172
第112図	A20号墳 出土須恵器	118	第160図	B2号墳 主体部土層断面(1)	173
第113図	B7号墳 調査後墳丘	119	第161図	B2号墳 主体部土層断面(2)	174
第114図	B7号墳 墳丘土層断面	120	第162図	B2号墳 主体部出土土器	174
第115図	B7号墳 主体部	121	第163図	B3号墳 墳丘土層断面	176
第116図	B7号墳 主体部埋土土層断面	122	第164図	B3号墳 主体部平面	177
第117図	B7号墳 主体部墓壇平面	123	第165図	B3号墳 主体部土層断面	178
第118図	B8号墳 調査後墳丘	125	第166図	B3号墳 主体部遺物出土状況	179
第119図	B8号墳 墳丘土層断面(1)	126	第167図	B3号墳 主体部等出土金属器	180
第120図	B8号墳 墳丘土層断面(2)	127	第168図	B3号墳 出土土器	181
第121図	B8号墳 主体部(1)	128	第169図	B4~B6号墳 調査後地形	182
第122図	B8号墳 主体部(2)	129	第170図	B4~B6号墳 墳丘土層断面	183
第123図	B8号墳 主体部(3)	130	第171図	B5号墳 墳丘土層断面	184
第124図	土器棺1 (SP-C1)	131	第172図	木棺墓1 (SX-E01)	185
第125図	土器棺1 (SP-C1) 出土土器	132	第173図	木棺墓1 (SX-E01) 土層断面	186
第126図	土器棺2 (SP-C2) 位置図	133	第174図	木棺墓13 (SX-E13)	187
第127図	土器棺2 (SP-C2) 検出状況	134	第175図	木棺墓13 (SX-E13) 土層断面	188
第128図	土器棺2・3 (SP-C2・3) 出土土器	135	第176図	木棺墓10 (SX-E10)	189
第129図	土器棺3 (SP-C3)	136	第177図	木棺墓・石棺墓等 出土土器	190
第130図	溝状遺構 (SD-C1)	137	第178図	石棺墓2 (SX-E02)	191
第131図	土壌1 (SK-C1)	138	第179図	石棺墓3 (SX-E03) (1)	192
第132図	谷部出土須恵器	139	第180図	石棺墓3 (SX-E03) (2)	193
第133図	集石1 (SX-C1)	140	第181図	石棺墓4 (SX-E04)	195
第134図	集石2 (SX-C2)	141	第182図	石棺墓5 (SX-E05)	196
第135図	若水城跡 平面	143	第183図	石棺墓11 (SX-E11)	198
第136図	若水城跡 土層断面(東部)	144	第184図	SX-E07	199
第137図	若水城跡 虎口部平面	145	第185図	SX-E08	200
第138図	若水城跡 虎口部 側面・断面	146	第186図	SK-E4・SX-E06・SX-E09	201
第139図	若水城跡 虎口部 断面	147	第187図	土壌1~3 (SK-E1~3)	203
第140図	弥生環壕 平面	150	自然化学分析		
第141図	弥生環壕1 土層断面(1)	151	第188図	暦年較正結果	208
第142図	弥生環壕1 土層断面(2)	152	第189図	若水古墳出土ガラス小玉蛍光X線分析 スペクトル	211
第143図	弥生環壕2 土層断面	153	第190図	赤色物の蛍光X線スペクトル図①	216
第144図	弥生環壕 出土土器(1)	155	第191図	赤色物の蛍光X線スペクトル図②	217
第145図	弥生環壕 出土土器(2)	156	総括と考察		
第146図	弥生環壕 出土土器(3)	157	第192図	南但馬を中心とした但馬地域弥生後期 土器編年試案	221
東地区			第193図	若水古墳埋葬施設平面	222
第147図	東地区 調査前地形	160	第194図	小口部詰石および長側部積石の諸例(1)	224
第148図	東地区 調査後地形	161	第195図	小口部詰石および長側部積石の諸例(2)	225
第149図	B1~B3号墳 断面	162	第196図	山東省棗莊市渴口漢墓出土飛禽文鏡	227
第150図	B1~B3号墳 調査前地形	163	第197図	四葉座間・弧文間文様の比較	229
第151図	B1~B3号墳 調査後地形	164	第198図	連弧文鏡の断面形態	230
第152図	B1号墳 墳丘土層断面	165			
第153図	B1号墳 主体部	166			
第154図	B1号墳 主体部 棺・墓壇	167			
第155図	B1号墳 主体部土層断面	168			
第156図	B1号墳 主体部出土鉄器	169			
第157図	B1号墳 主体部出土土器	169			

写真目次

写真1	中央地区出土 寛永通宝	108	写真4	漆膜の断面写真②	213
写真2	若水古墳出土ガラス小玉実体顕微鏡写真	211	写真5	赤色顔料の顕微鏡写真	218
写真3	漆膜の断面写真①	213			

表目次

第1表	遺跡名表	3	第7表	塗膜断面観察結果	212
第2表	放射性炭素年代測定結果	207	第8表	赤色顔料の分析資料とその詳細	214
第3表	参考資料：暦年較正用年代	207	第9表	赤色顔料の蛍光X線分析結果	215
第4表	分析対象ガラス玉一覧	209	第10表	各試料の赤色顔料の種類	215
第5表	半定量分析結果一覧	209	第11表	但馬地域における前期古墳出土鏡	231
第6表	漆膜構造調査資料	212			

カラー写真図版目次

- 若水古墳群・城跡
 カラー写真図版 1
 遺跡の位置
 カラー写真図版 2
 上 遺跡遠景 (北西から・平成12年撮影)
 下 遺跡遠景 (東から・平成12年撮影)
 カラー写真図版 3
 上 遺跡遠景 (東から・平成13年撮影)
 下 遺跡近景 (東から・平成13年撮影)
 カラー写真図版 4
 上 遺跡遠景 (北東から・平成13年撮影)
 下 遺跡近景 (北東から・平成13年撮影)
 カラー写真図版 5
 上 遺跡近景 (西北西から・平成13年撮影)
 下 調査区全景 (北東から・平成13年撮影)
 カラー写真図版 6
 上 調査区全景 (南から・平成13年撮影)
 下 調査区西部全景 (西南西から・平成12年撮影)
- 西地区
 カラー写真図版 7
 上 調査後全景 (上が北)
 下 調査後全景 (西上空から)
 カラー写真図版 8
 上 調査後全景 (西から)
 中 北尾根全景 (南東から)
 下 南尾根全景 (北東から)
 カラー写真図版 9
 上 A13～15号墳全景 (北東から)
 中 A13～15号墳全景 (北から)
 下 A15号墳全景 (北から)
 カラー写真図版10 A6号墳
 上 主体部全景 (北西から)
 中 第1主体部土層断面 (南から)
 下 第2主体部 (南から)
 カラー写真図版11 A7号墳
 上 主体部全景 (北西から)
 下左 主体部棺完掘 (南西から)
 下右 主体部墓壇 (南西から)
 カラー写真図版12 A7号墳
 上 木棺墓(SX-W1) (西から)
 中 木棺墓(SX-W2) (西から)
 下 土壌(SK-W1) (東から)
 カラー写真図版13 A8号墳
 上 主体部全景 (北西から)
 中 主体部 (南から)
 下 土器棺(SP-W1) (北東から)
 カラー写真図版14 A7・8号墳
 ① 土壌墓(SK-W2) 土器出土状況 (南西から)
 ② 土壌墓(SK-W2) (南西から)
 ③ 土壌墓(SK-W3) (南西から)
 ④ 土壌(SK-W5)土層断面 (南から)
 ⑤ 土壌(SK-W4)土器出土状況 (南西から)
 ⑥ 土壌(SK-W6)土層断面 (北から)
 ⑦ 土壌(SK-W7)土層断面 (南から)
 ⑧ 集石遺構(SX-W3) (北から)
 カラー写真図版15 A8・13号墳
 上左 溝(SD-W1)土層断面図 (西から)
 上右 溝(SD-W2)土層断面図 (北西から)
 中 A13号墳 主体部全景 (西から)
 下 A13号墳 第1主体部 (南西から)
 カラー写真図版16 A13号墳
 上 第2主体部 (東から)
 中 木棺墓(SX-W4) (南から)
 カラー写真図版16 A13号墳
 下 木棺墓(SX-W4)鉄鎌出土状況 (南から)
 カラー写真図版17 A13号墳
 上 木棺墓(SX-W5・6) (南東から)
 中 木棺墓(SX-W5) (南から)
 下 木棺墓(SX-W6) (南から)
 カラー写真図版18 A13号墳
 上 土器棺(SP-W2)検出状況 (北東から)
 中 土器棺(SP-W2) (北東から)
 下 土壌(SK-W8)土層断面 (西から)
 カラー写真図版19 A14号墳
 上 主体部全景 (西から)
 中 主体部木棺検出状況 (西から)
 下 主体部木棺完掘 (西から)
 カラー写真図版20 A14号墳
 上 石棺墓全景 (西から)
 中 石棺墓(SX-W8)粘土被覆状況 (南西から)
 下 石棺墓(SX-W8)蓋石検出状況 (南西から)
 カラー写真図版21 A14号墳
 上 石棺墓(SX-W8)棺身 (北東から)
 中 石棺墓(SX-W8)棺身 (南西から)
 下 石棺墓(SX-W8)墓壇 (南西から)
 カラー写真図版22 A14号墳
 上 石棺墓(SX-W9)粘土被覆状況 (南から)
 中 石棺墓(SX-W9)蓋石検出状況 (南から)
 下 石棺墓(SX-W9)棺内 (南から)
 カラー写真図版23 A14号墳
 上左 石棺墓(SX-W9)棺内の状況 (西から)
 上右 石棺墓(SX-W9)人骨・鉄器出土状況 (西から)
 下 石棺墓(SX-W9)人骨・鉄器出土状況 (南から)
 カラー写真図版24 A14号墳
 上左 石棺墓(SX-W9)棺底面検出状況 (南から)
 上右 石棺墓(SX-W9)棺底面検出状況 (東から)
 中 石棺墓(SX-W9)墓壇 (南から)
 下 石棺墓(SX-W9)出土遺物
 カラー写真図版25 A15号墳
 上 主体部全景 (西から)
 中 主体部 (西から)
 下 主体部棺完掘状況 (西から)
 カラー写真図版26 A15号墳
 上 主体部棺完掘状況 (北東から)
 中 第1主体部木棺検出状況 (西から)
 下左 第1主体部供献土器出土状況 (西から)
 下右 第1主体部供献土器出土状況 (東から)
 カラー写真図版27 A15号墳
 ① 第1主体部棺完掘 (西から)
 ② 第1主体部鉄器出土状況 (西から)
 ③ 第4主体部 (西から)
 ④ 第4主体部鉄器出土状況 (西から)
 ⑤ 第6主体部 (東から)
 ⑥ 第6主体部鉄器出土状況 (東から)
 カラー写真図版28 A15号墳
 上 第3・8主体部 (南から)
 中 第3主体部北小口 (南から)
 下 第8主体部鉄器出土状況 (北から)
 カラー写真図版29 A15号墳
 上 第7主体部 (南から)
 中 区画溝内土器出土状況 (北から)
 下 土器棺(SP-W3) (南から)
 カラー写真図版30
 上 A15号墳 出土遺物
 下 A8・A13・A15号墳 土器棺

中央地区

カラー写真図版31

- 上 調査後全景 (上が南)
- 下 調査区西部 (北東から)

カラー写真図版32 若水古墳 (A11号)

- 上 調査前全景 (東南東から)
- 下 調査後全景 (南東から)

カラー写真図版33 若水古墳 (A11号)

- 上 調査後墳丘全景 (北東平野部から)
- 下 調査後墳丘全景 (西北西から)

カラー写真図版34 若水古墳 (A11号)

- 上 墓壇検出状況 (北西から)
- 下 第1主体部 墓壇埋土土層断面 (北西から)

カラー写真図版35 若水古墳 (A11号)

- 上 第1主体部 棺痕跡検出状況 (南東から)
- 下 第1主体部 棺痕跡検出状況 (北西から)

カラー写真図版36 若水古墳 (A11号)

- 上 第1主体部 棺全景 (東から)
- 下 第1・第2主体部 棺全景 (北から)

カラー写真図版37 若水古墳 (A11号)

- 上 第1・第2主体部 全景 (北西から)
- 下 第1・第2主体部 棺全景 (南東から)

カラー写真図版38 若水古墳 (A11号)

- 上 第1主体部 棺全景 (北西から)
- 下 第1主体部 棺西側小口部詰石基底面 (南東から)

カラー写真図版39 若水古墳 (A11号)

- 上 第1主体部 棺西側小口部詰石最上面 (南東から)
- 下 第1主体部 棺東側小口部詰石基底面 (北西から)

カラー写真図版40 若水古墳 (A11号)

- 上 第1主体部 棺内鏡出土状況 (北西から)
- 下 第1主体部 棺内鏡出土状況 (上が南東)

カラー写真図版41 若水古墳 (A11号)

- 上 第1主体部 棺内飛禽文鏡出土状況 (南西から)
- 中 第1主体部 棺内連弧文鏡検出状況 (南西から)
- 下 第1主体部 棺内連弧文鏡取り上げ後下面の状況 (南西から)

カラー写真図版42 若水古墳 (A11号)

- 左 第1主体部 棺小口部詰石除去後全景 (北西から)
- 右 第1主体部 棺部分墓壇全景 (南東から)

カラー写真図版43 若水古墳 (A11号)

- 上 第2主体部 全景 (西から)
- 下 第2主体部 墓壇上半部埋土土層断面 (北西から)

カラー写真図版44 若水古墳 (A11号)

- 上 第2主体部 棺部分全景 (北西から)
- 下 第2主体部 棺部分全景 (南東から)

カラー写真図版45 若水古墳 (A11号)

- 上 第2主体部 棺内埋葬部分 (北西から)
- 下 第2主体部 棺内埋葬部分南東端遺物出土状況 (北西から)

カラー写真図版46 若水古墳 (A11号)

- 上 第2主体部 棺東小口部詰石上面の被覆粘土 (北東から)
- 中 第2主体部 棺東小口部詰石上面 (北北西から)
- 下 第2主体部 棺西小口部詰石 (南東から)

カラー写真図版47 若水古墳 (A11号)

- 左 第2主体部 棺部分全景 (北西から)
- 右 第2主体部 棺部分詰石除去後全景 (北西から)

カラー写真図版48 若水古墳 (A11号)

- 上 主体部 墓壇全景 (北西から)
- 下 主体部 墓壇全景 (南東から)

カラー写真図版49 若水古墳 (A11号)

- ① 第1主体部 墓壇内東側柱痕跡土層断面 (北東から)
- ② 第1主体部 墓壇内西側柱痕跡土層断面 (北東から)
- ③ 第1主体部 墓壇内東側柱痕跡完掘状況 (北から)
- ④ 第1・第2主体部 重複関係土層断面 (左側が第2主体部・西から)
- ⑤ 第1主体部 棺内合子・鉄器出土状況 (北西から)
- ⑥ 第2主体部 棺内鏡・小玉出土状況 (北西から)
- ⑦ 第2主体部 棺内小玉出土状況
- ⑧ 墳丘盛土土層断面 (東から)

カラー写真図版50 若水古墳 (A11号)

- 上 第1主体部出土 1号鏡 (飛禽文鏡) 鏡背
- 中 第1主体部出土 1号鏡 (飛禽文鏡) 鳥瞰
- 下 第1主体部出土 1号鏡 (飛禽文鏡) 鏡面

カラー写真図版51 若水古墳 (A11号)

- ① 1号鏡 X線透過写真
- ② 1号鏡内区文拡大
- ③ 1号鏡鏡面の布痕
- ④ 1号鏡樹歯文帯の内区へのはみ出し
- ⑤ 1号鏡外区から縁部斜めからの拡大
- ⑥ 1号鏡鈕孔内部の狀態
- ⑦ 1号鏡鈕孔 (下側)
- ⑧ 1号鏡鈕孔 (上側)

カラー写真図版52 若水古墳 (A11号)

- 上 第1主体部出土 2号鏡 (連弧文鏡) 鏡背
- 下 第1主体部出土 2号鏡 (連弧文鏡) 鳥瞰

カラー写真図版53 若水古墳 (A11号)

- ① 2号鏡 (鏡面)
- ② 2号鏡 X線透過写真
- ③ 2号鏡内区文様部分
- ④ 2号鏡鏡面の布痕
- ⑤ 2号鏡四葉座と連弧文の上面の研磨
- ⑥ 2号鏡鈕座の面をなすような研磨
- ⑦ 2号鏡鈕孔 (下側)
- ⑧ 2号鏡鈕孔 (上側)

カラー写真図版54 若水古墳 (A11号)

- 上 第1・第2主体部出土 鉄器 (平面)
- 下 第1・第2主体部出土 鉄器 (側面)

カラー写真図版55 若水古墳 (A11号)

- 上 第1主体部出土 合子 (上面)
- 下 第1主体部出土 合子 (下面)

カラー写真図版56 若水古墳 (A11号)

- 上 第2主体部出土 小玉
- 下 墳丘西裾採取 鉄斧

カラー写真図版57 A19号墳

- 上 調査後全景 (西から)
- 下 第2主体部 (西から)

カラー写真図版58 B7号墳

- 上 調査後全景 (南から)
- 下 主体部全景 (北東から)

カラー写真図版59 B7号墳

- 上 主体部木棺全景 (北西から)
- 下 主体部棺内歯牙出土状況 (南東から)

カラー写真図版60 B8号墳

- 上 主体部石棺蓋石の状況 (南東から)
- 下 主体部石棺内の状況 (南西から)

- カラー写真図版61
上 中央地区東部 全景（北上空から）
下 中央地区東部 近景（北上空から）
- カラー写真図版62
上 弥生環壕1・2（北東から）
下 弥生環壕1・2近景（北東から）
- カラー写真図版63
上 弥生環壕1（南西から）
下 弥生環壕2（南から）
- カラー写真図版64
上 弥生環壕1 埋土土層断面（南西から）
下 弥生環壕2 埋土土層断面（西から）
- カラー写真図版65 若水城跡
上 平成13年度調査区 全景（北東から）
下 若水城跡 調査後全景（北東平野部から）
- カラー写真図版66 若水城跡
上 若水城跡および若水古墳 調査後遠景（北から）
下 若水城跡 調査後全景（北側平野部から）
- カラー写真図版67 若水城跡
上 調査後全景（北西側尾根部から）
下 調査後北西側尾根部の状況（北から）
- カラー写真図版68 若水城跡
上 調査前（北から）
下 調査後全景（北東から）
- カラー写真図版69 若水城跡
上 谷状部分の状況（北から）
下 東部地すべりの状況（西から）
- カラー写真図版70 若水城跡
上 石材転落状況（西から）
下 石材転落状況（北東から）
- カラー写真図版71 若水城跡
上 東部地すべりによる段差（北西から）
下 虎口石材転落状況（東から）
- カラー写真図版72 若水城跡
上 虎口部分と弥生環壕1の関係（東北東から）
下 帯曲輪1と弥生環壕1の関係（北東から）
- カラー写真図版73 若水城跡
上 虎口部分石材検出状況（北東から）
下 虎口南部石材検出状況（西から）
- カラー写真図版74 若水城跡
上 虎口部第2面と第1面の関係（北西から）
下 虎口部第2面と第1面の関係土層断面（北西から）
- カラー写真図版75 若水城跡
上 虎口北部第2面と第1面の関係（西北西から）
下 虎口部西側石積壁面（東南東から）
- カラー写真図版76 若水城跡
上 虎口部全景（東北東から）
下 虎口部全景（南東から）
- カラー写真図版77 若水城跡
上 虎口部傾斜面（北から）
下 虎口部西側石積壁面全景（東から）
- カラー写真図版78 若水城跡
上 虎口部東側石積壁面全景（西から）
下 虎口斜面部石積下部の状況（北から）
- カラー写真図版79 若水城跡
上 虎口南部石積下部の状況（北から）
下 虎口部石積除去後（北から）
- カラー写真図版80 若水城跡
① 帯曲輪1 調査前（東北東から）
② 調査区外南西部の帯曲輪1の状況（北東から）
③ 帯曲輪1 調査前（西南西から）
④ 北垣聡一郎先生による現地指導
- カラー写真図版80 若水城跡
⑤ 木戸雅寿先生による現地指導
⑥ 帯曲輪1と弥生環壕1の関係（北東から）
⑦ 帯曲輪2と弥生環壕2の関係（北東から）
⑧ 帯曲輪2および弥生環壕2断ち割り土層断面（西から）
- カラー写真図版81
上 土器棺1（SP-C1）土器検出状況（南から）
下 土器棺3（SP-C3）土器検出状況（南から）
- カラー写真図版82
上 土器棺2（SP-C2）土器検出状況（南から）
下 土層1（SK-C1）全景および埋土土層断面（北から）
- カラー写真図版83
上 集石1（SX-C1）全景（南から）
下 集石2（SX-C2）上面全景（南西から）
- カラー写真図版84
上 集石2（SX-C2）第2面（南西から）
① B7号墳 調査前（南から）
② B7号墳 墓壇内足掛状施設（南西から）
③ B7号墳 調査風景（南東から）
④ B8号墳 溝状遺構埋土土層断面（西南西から）
- 東地区
- カラー写真図版85
上 東地区 調査後全景（北東上空から）
下 東地区 調査後全景（北北西上空から）
- カラー写真図版86
上 東地区 調査後全景（北西上空から）
下 東地区 調査後全景（南東上空から）
- カラー写真図版87
上 東地区 調査前全景（北西から）
下 東地区 調査後全景（北西から）
- カラー写真図版88
上 東地区 調査前全景（西から）
下 B3号～B6号墳 調査前の状況（北北西から）
- カラー写真図版89
上 東地区 調査後全景（北から）
下 B1号～B3号墳 調査後全景（南西から）
- カラー写真図版90 B1号墳
上 主体部棺上供献土器出土状況（北東から）
下 主体部横断方向埋土土層断面（南東から）
- カラー写真図版91 B1号墳
上 主体部全景（北西から）
下 主体部破砕土器検出状況（北西から）
- カラー写真図版92
上 B2号墳 第2主体部埋土横断面（北東から）
下 B3号墳 主体部全景（南東から）
- カラー写真図版93 B3号墳
上 主体部墓壇上須恵器出土状況（南西から）
下 主体部棺内礫床と副葬品検出状況（南西から）
- カラー写真図版94
上 B1号・B3号墳 出土土器
下 B3号墳 主体部棺内出土鉄器
- カラー写真図版95
上 木棺墓1（SX-E01）全景（北から）
下 木棺墓1（SX-E01）墓壇（南から）
- カラー写真図版96
上 石棺墓2（SX-E02）上面（北北西から）
下 石棺墓2（SX-E02）上面（東南東から）
- カラー写真図版97
上 石棺墓2（SX-E02）棺蓋（北北西から）
下 石棺墓2（SX-E02）棺身（北北西から）

- カラー写真図版98
 上 石棺墓3 (SX-E03) 上面 (西から)
 下 石棺墓3 (SX-E03) 棺蓋 (北から)
- カラー写真図版99
 上 石棺墓3 (SX-E03) 棺身 (北から)
 下 石棺墓3 (SX-E03) 墓壇および区画溝 (西から)
- カラー写真図版100
 上 石棺墓4 (SX-E04) 全景 (北北西から)
 下 石棺墓4 (SX-E04) 全景 (東北東から)
- カラー写真図版101
 上 石棺墓5 (SX-E05) 上面 (北から)
 下 石棺墓5 (SX-E05) 棺蓋 (北から)
- カラー写真図版102
 上 石棺墓11 (SX-E11) 上面 (北北西から)
 下 石棺墓11 (SX-E11) 棺身 (北東から)
- カラー写真図版103
 上 木棺墓13 (SX-E13) 全景 (南から)
 ① B1号墳 主体部西端上面破砕土器検出状況 (南西から)
 ② B1号墳 主体部西端上面破砕土器第2面検出状況 (南東から)
 ③ B1号墳 主体部上面破砕土器の棺内への落ち込み状況 (北西から)
 ④ B2号墳 区画溝付近埋土土層断面 (北西から)
- カラー写真図版104
 ① B3号墳 東斜面土器出土状況
 ② B5号墳 北側墳丘断ち割り土層断面 (東から)

- カラー写真図版104
 ③ 石棺墓3 (SX-E03) 上面検出状況 (西から)
 ④ SX-E06 上面検出状況 (西北西から)
 ⑤ SX-E07 上面検出状況 (北西から)
 ⑥ SX-E08 埋土土層断面 (北から)
 ⑦ 木棺墓10 (SX-E10) 埋土土層断面 (東北東から)
 ⑧ v石棺墓11 (SX-E11) 棺内土器検出状況 (南東から)
- カラー写真図版105
 ① 石棺墓2 (SX-E02) 墓壇 (北北西から)
 ② 石棺墓11 (SX-E11) 調査風景 (西から)
 ③ SX-E12 埋土土層断面 (南西から)
 ④ 土壇2 (SK-E2) 炭層面 (北から)
 ⑤ 土壇3 (SK-E3) 埋土土層断面 (西から)
 ⑥ 土壇4 (SK-E4) (北西から)
 ⑦ 東地区 調査風景 (北から)
 ⑧ 東地区 調査風景 (南西から)

確認調査

- カラー写真図版106
 ① 4トレンチ 全景 (東から)
 ② 5トレンチ 東半部 (北西から)
 ③ 5トレンチ 西半部 (南東から)
 ④ 5トレンチ西部 若水古墳南東斜面 (南東から)
 ⑤ 5トレンチ西端 若水古墳墳頂部 (南東から)
 ⑥ 9トレンチ 全景 (東から)
 ⑦ 11トレンチ 全景 (北東から)
 ⑧ 11-aトレンチ 3段目テラス (A15号墳) 土器出土状況 (南から)

モノクロ写真図版目次

西地区

- モノクロ写真図版 1
 A7・8号墳 出土遺物
- モノクロ写真図版 2 A8号墳
 土壇(SK-W4)・溝(SD-W2)出土土器
- モノクロ写真図版 3 A13号墳
 上 主体部出土土器(1)
 下 主体部出土土器(2)
- モノクロ写真図版 4 A13号墳
 土器棺(SP-W2)・木棺墓(SX-W4)出土遺物
- モノクロ写真図版 5 A14号墳
 上 出土土器(1)
 下 出土土器(2)
- モノクロ写真図版 6 A14・15号墳
 上 石棺墓(SX-W9)出土遺物
 下 A15号墳 主体部出土土器(1)
- モノクロ写真図版 7 A15号墳
 主体部出土土器(2)
- モノクロ写真図版 8 A15号墳
 主体部出土土器(3)
- モノクロ写真図版 9 A15号墳
 上 主体部出土土器(4)
 下 土器棺(SP-W3)
- モノクロ写真図版10 A15・16号墳
 上 A15号墳 出土鉄器
 下 A16号墳 出土土器

中央地区

- モノクロ写真図版11 若水古墳 (A11号)
 上 第1主体部 墓壇埋土長軸方向土層断面 (南から)
 下 第1主体部 墓壇埋土短軸方向土層断面 (南東から)

- モノクロ写真図版12 若水古墳 (A11号)
 上 第1主体部 棺痕跡検出状況 (北西から)
 下 第1主体部 棺痕跡検出状況 (南東から)
- モノクロ写真図版13 若水古墳 (A11号)
 上 第1・第2主体部 全景 (北西から)
 下 第1主体部 全景 (北西から)
- モノクロ写真図版14 若水古墳 (A11号)
 上 第1・第2主体部 棺全景 (北西から)
 中 第1主体部 棺東側小口部詰石被覆粘土 (北西から)
 下 第1主体部 棺東側小口部詰石上面 (北西から)
- モノクロ写真図版15 若水古墳 (A11号)
 上 第1主体部 遺物検出状況 (南東から)
 中 第1主体部 飛禽文鏡出土状況 (南西から)
 下 第1主体部 棺下部・第2主体部 棺の状況 (北西から)
- モノクロ写真図版16 若水古墳 (A11号)
 上 第1主体部 墓壇下部埋土土層断面 (北西から)
 下 第1主体部 墓壇下部埋土土層断面 (南東から)
- モノクロ写真図版17 若水古墳 (A11号)
 上 第2主体部 棺痕跡検出状況 (北から)
 下 第2主体部 棺東側小口部詰石被覆粘土 (北西から)
- モノクロ写真図版18 若水古墳 (A11号)
 上 第2主体部 棺底敷石 (北西から)
 ① 調査前の墳丘 (東から)
 ② 墳頂北東部 土器検出状況
 ③ 第2主体部 棺西側小口部詰石最下面 (南東から)

- モノクロ写真図版18 若水古墳 (A11号)
④ 榎本誠一先生による学術指導状況 (南東から)
- モノクロ写真図版19 若水古墳 (A11号)
上 主体部上部他出土土器 (内面)
下 主体部上部他出土土器 (外面)
- モノクロ写真図版20 若水古墳 (A11号)
上 墳頂北東部 出土土器
下 墳頂北東部・A19号墳・A20号墳・土器棺1
出土土器
- モノクロ写真図版21
上 A20号墳 調査後全景 (西から)
① 若水古墳 (A11号) 西裾 鉄斧出土状況
② A19号墳 第2主体部 棺西側小口板押さえ石
(東から)
③ A20号墳 調査後全景 (南から)
④ A20号墳 周溝内須恵器出土状況 (北西から)
- モノクロ写真図版22 A19号墳
上 調査後全景 (北から)
下 第2主体部 棺痕跡検出状況 (西から)
- モノクロ写真図版23 A19号墳
上 第1主体部 棺上面 (東から)
下 第1主体部 棺身 (東から)
- モノクロ写真図版24 B7号墳
上 墓壇埋土 土層断面 (東北東から)
下 主体部 全景 (南南東から)
- モノクロ写真図版25 B8号墳
上 主体部 棺身 (南東から)
下 主体部 棺身 (南西から)
- モノクロ写真図版26
土器棺2・3、谷部 出土土器等
- モノクロ写真図版27
上 若水古墳および城跡等 全景 (北東平野部か
ら)
下 弥生環壕1 全景 (西から)
- モノクロ写真図版28
弥生環壕 出土土器 (1)
- モノクロ写真図版29
上 弥生環壕 出土土器 (2)
下 弥生環壕 出土土器 (3)
- モノクロ写真図版30
上 弥生環壕 出土土器 (4)
下 弥生環壕 出土土器 (5)
- モノクロ写真図版31
弥生環壕 出土土器 (6)
- モノクロ写真図版32 若水城跡
上 調査前の虎口部 (北から)
下 虎口部 石積除去後 (南から)
- 東地区**
- モノクロ写真図版33
上 調査前 全景 (西から)
下 調査後 全景 (北西から)
- モノクロ写真図版34
上 北部 調査後全景 (北から)
下 B2号墳 主体部全景 (南西から)
- モノクロ写真図版35 B1号墳
上 区画溝付近 埋土土層断面 (北西から)
下 主体部 墓壇上面供献土器検出状況 (北西か
ら)
- モノクロ写真図版36 B1号墳
上 主体部 埋土長軸方向土層断面 (南西から)
下 棺内埋土 短軸方向土層断面 (南東から)
- モノクロ写真図版37 B1号墳
上 主体部 全景 (南西から)
下 主体部 棺内破砕土器出土状況 (南西から)
- モノクロ写真図版38
上 B1号墳 主体部墓壇全景 (北西から)
下 B2号墳 第1主体部棺内埋土土層断面 (南
東から)
- モノクロ写真図版39
B1・B3号墳 出土土器
- モノクロ写真図版40 B1号墳
上 主体部 出土土器 (1)
下 主体部 出土土器 (2)
- モノクロ写真図版41 B1号墳
上 主体部 出土土器 (3)
下 主体部 出土土器 (4)
- モノクロ写真図版42 B2号墳
上 第2主体部 棺内埋土土層断面 (北東から)
下 第2主体部 墓壇埋土土層断面 (北東から)
- モノクロ写真図版43 B2号墳
上 第2主体部 墓壇 (南東から)
下 第1主体部 墓壇埋土土層断面 (南東から)
- モノクロ写真図版44
上 B2号墳 第2主体部墓壇 (南西から)
下 B3号墳 墳丘土層断面 (北西から)
- モノクロ写真図版45
上 B3号墳 裾出土土器細部
下 B2号墳 主体部等出土土器
- モノクロ写真図版46 B3号墳
上 主体部 棺痕跡検出状況 (南西から)
下 主体部上面 須恵器検出状況 (南東から)
- モノクロ写真図版47 B3号墳
上 主体部 棺内埋土土層断面 (南東から)
下 主体部 全景 (南西から)
- モノクロ写真図版48 B3号墳
上 主体部 墓壇埋土土層断面 (南東から)
下 主体部 墓壇全景 (南西から)
- モノクロ写真図版49
上 木棺墓1 (SX-E01) 埋土土層断面 (東北東か
ら)
下 木棺墓1 (SX-E01) 全景 (北北西から)
- モノクロ写真図版50
上 木棺墓13 (SX-E13) 埋土土層断面 (西から)
下 木棺墓13 (SX-E13) 墓壇 (南から)
- モノクロ写真図版51
上 石棺墓2 (SX-E02) 棺蓋 (第2面・西南西か
ら)
下 石棺墓2 (SX-E02) 棺身 (西南西から)
- モノクロ写真図版52
上 石棺墓2 (SX-E02) 墓壇 (北北西から)
下 石棺墓3 (SX-E03) 棺蓋 (北から)
- モノクロ写真図版53
上 石棺墓3 (SX-E03) 棺蓋 (第2面・北から)
下 石棺墓4 (SX-E04) 墓壇 (北から)
- モノクロ写真図版54
上 石棺墓5 (SX-E05) 棺蓋 (北から)
下 石棺墓5 (SX-E05) 墓壇 (北から)
- モノクロ写真図版55
上 石棺墓11 (SX-E11) 棺蓋 (東北東から)
下 石棺墓11 (SX-E11) 棺蓋・棺身 (北西から)
- モノクロ写真図版56
上 石棺墓11 (SX-E11) 棺身 (北西から)
下 石棺墓11 (SX-E11) 墓壇 (北西から)

第1章 はじめに

第1節 遺跡の位置と環境

1. 遺跡の位置

若水古墳群・若水城跡は朝来市山東町粟鹿に所在し、山東盆地の中央部南側の丘陵上および斜面に位置している。

遺跡が存在する朝来市は、東側の一部が京都府と境を接し、兵庫県北部の旧「但馬国」の南東部にあたり、同様に南は「播磨国」、東は「丹波国」と境を接している。

朝来市は古代山陰道と「但馬道」と称される道路の合流地点であるが、現在は京都府から国道9号線が朝来市内の山東町・和田山町を通り、国道427号線が丹波市から遠阪峠を越えて山東町で国道9号線と合流する。一方、姫路市につながる国道312号線は和田山町で国道9号線と合流し、但馬最大の河川である円山川も国道312号線に沿って北流し、和田山町中心部で北西方向に流れを変え日本海に注ぐ。

古代山陰道は国道427号線とほぼ並行して丹波から遠阪峠を越え、同様に国道312号線と並行する「但馬道」と和田山町中心部付近で山陰道と合流するようである。

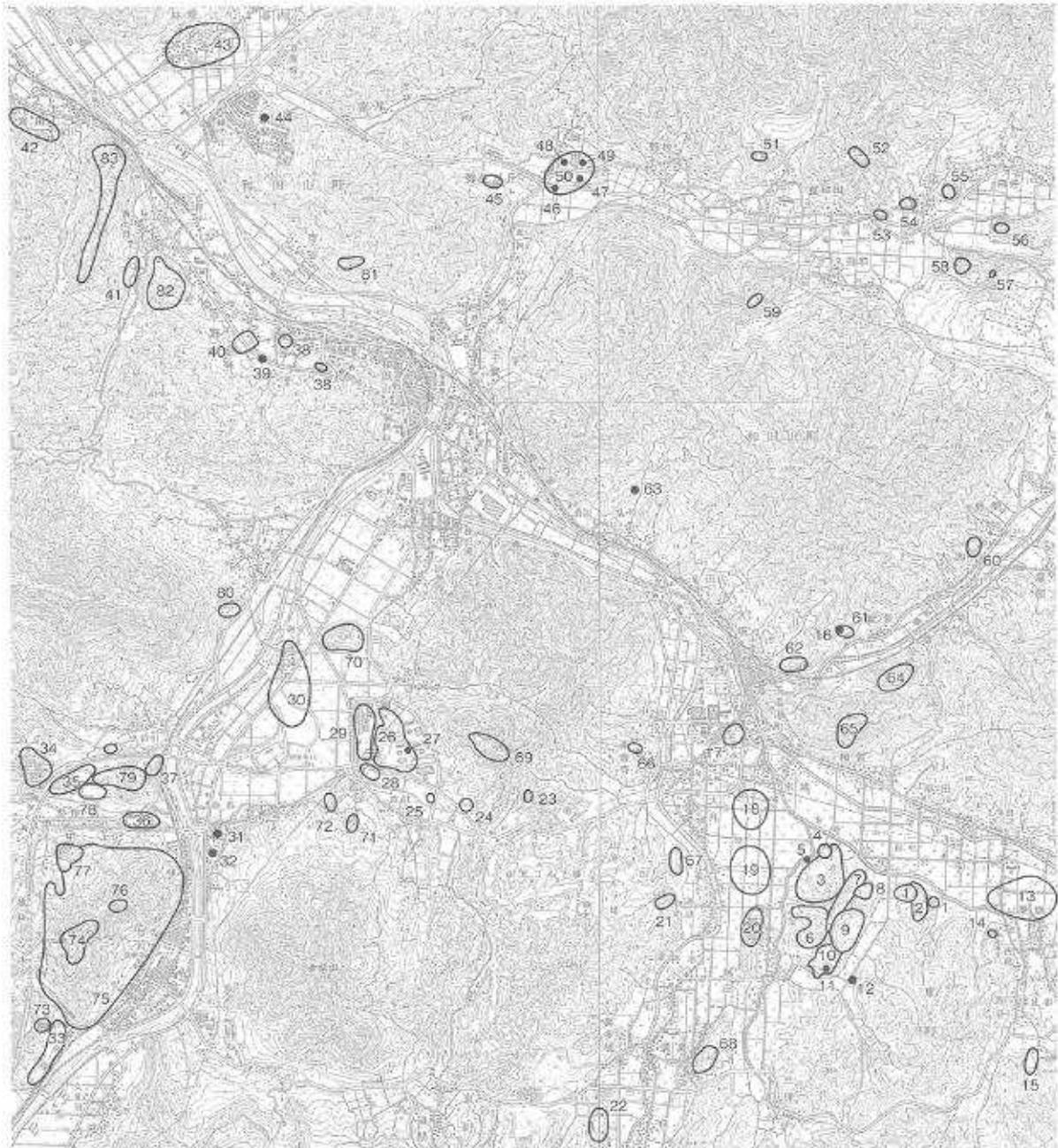
このように、朝来市内でも和田山町・山東町域は古代からの主要道路の接点が存在し、円山川も含めて陸運・舟運の要衝の地であったことが容易に判断できる。

円山川は、朝来市和田山町中心部での流れの方向が変わる地点で山東町側から流れ込む与布土川と合流する。その与布土川も山東町北西部でいくつかの小河川と合流しているが、それら小河川の流域は盆地状地形を呈している。この山東盆地の東西に長い平地部分南端を流れるのが粟鹿川であるが、粟鹿川東部は谷中から北流したのち盆地南端の山裾をほぼ西に流れ、その後、三保川と合流して盆地を北西方向に横断する。この粟鹿川の南側と三保川東側の地域は丘陵地帯となっているが、両河川に近い部分では、小支谷に分断されたようなかたちで独立丘陵状を呈する箇所がある。合流地点に最も近い山塊は南北約1km、東西約600mで標高189mを最高所とし、尾根上を中心として130基以上もの多数の古墳が存在している。

若水古墳群・若水城跡が存在する部分は、上述の丘陵とは谷を挟んだ東側に位置し、北は粟鹿川が流れ、南側および東側も谷状地形によって山塊から分断された独立丘陵となっており、その規模は南北約400m、東西約330mで、尾根主軸は南北方向に近いが、北端で東側および北西側に分かれ、「Y」字状を呈する。最高所の標高は173mで、北側低地との比高差は約47mである。

2. 遺跡の環境

若水古墳群・城跡が存在する朝来市山東町周辺には、各時代にわたって数多くの遺跡が存在しているが、それらについては北近畿豊岡自動車道関係埋蔵文化財調査の各報告書において繰り返し述べられていることから、ここでは本遺跡に直接関連する弥生時代～古墳時代および城跡関係に限って歴史的環境を述べることにする。ただし、弥生時代～古墳時代については本遺跡の西隣に所在する芝花弥生墓群・古墳群の報告書において詳細に記述しているため、それらの時代は簡潔に述べることにする。



第1図 遺跡分布図 (1:50,000)

本遺跡の調査の結果、丘陵上部を取り巻くと推定される2条の塚が検出され、調査時には若水城跡に伴う横堀と判断していたが、後述するように弥生時代後期前半の高地性集落に伴う環濠の可能性が高く、若水城の時期には凹地状を呈する程度まで埋まっていたと推定される。ただし、高地性集落に伴う住居跡等は調査範囲の制約もあり、検出されていないことから高地性集落と断定することはできない。仮に2重の環濠を巡らせた高地性集落とした場合、朝来市域では和田山町大盛山遺跡(45)に次いで2例目となる。大盛山遺跡(田畑・中島1995)は丘陵東端部分を東西約66m、南北約50mの規模で楕円形に2重の環濠を巡らし、環濠で囲まれた標高151mの頂部および環濠外の丘陵裾部に竪穴住居跡が存在し、環濠などの出土土器から弥生後期初頭に編年されている。なお、丘陵東側低地との比高差は約50mである。

大盛山遺跡や若水遺跡が示す弥生時代後期初頭～中葉は、朝来市域では低地の集落である山東町粟鹿遺跡(13)や和田山町加都遺跡(30)があり、大盛山遺跡東側の盆地低部には岡田遺跡が存在している。

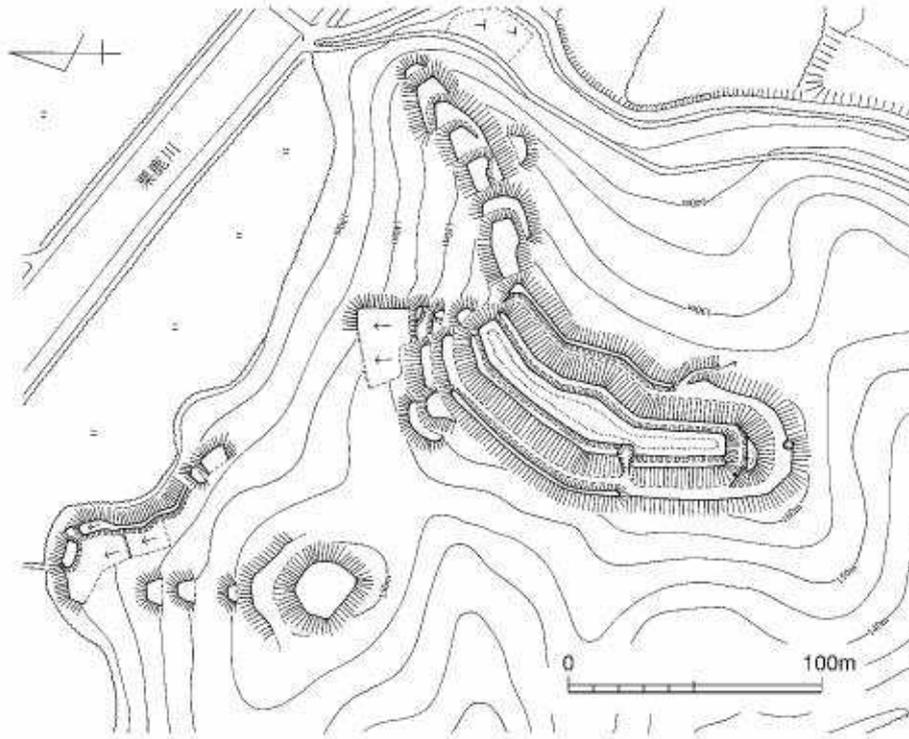
1 若水古墳群	18 永徳遺跡	35 梅田古墳群	52 黒田城跡	69 比治城跡
2 若水城跡	19 柿坪遺跡	36 安井遺跡	53 寺木城跡	70 市御堂城跡
3 芝花弥生墓群・古墳群	20 柿坪中山古墳群	37 梅田東古墳群	54 小川城跡	71 筒江城跡
4 芝ヶ端遺跡	21 東南山古墳群	38 宮ノ本遺跡	55 宮城跡	72 加都城跡
5 芝ヶ端古墳	22 森向山古墳群	39 城の山古墳	56 白井城跡	73 ムクノ木城跡
6 柿坪向山古墳群	23 大月北山古墳群	40 池田古墳	57 岩壁谷城跡	74 竹田城跡
7 和賀向山古墳群	24 茶すり山古墳・城跡	41 東見寺遺跡	58 フタタ城跡	75 竹田城跡周辺遺跡
8 切戸山古墳群	25 筒江大畑(浦石)遺跡	42 高瀬遺跡	59 久田和城跡	76 観音寺山岩跡
9 五反田遺跡群	26 筒江中山古墳群	43 林坂遺跡	60 磯部氏館跡	77 前期太田垣氏館跡
10 馬場古墳群	27 筒江中山23号墳	44 秋葉山2号墳	61 新堂見尾城跡	78 安井天満宮遺跡
11 馬場19号墳	28 筒江中山遺跡	45 大盛山遺跡	62 陳東氏館跡	79 安井城跡
12 持谷古墳	29 筒江片引遺跡	46 岡田2号墳	63 小谷城跡	80 秋田城跡
13 粟鹿遺跡	30 加都遺跡	47 岡田1号墳	64 向山城跡	81 寺谷城跡
14 粟鹿神社経塚	31 加都車塚古墳	48 長塚古墳	65 滝野城跡	82 観音山城跡
15 柳名谷古墳群	32 加都王塚古墳	49 青塚古墳	66 天満氏館跡	83 土田城跡
16 新堂見尾1号墳	33 ムクノ木遺跡	50 岡田遺跡	67 諏訪城跡	
17 仲田遺跡	34 向山古墳群	51 小栗城跡	68 与布土氏館跡	

第1表 遺跡名表

一方、和田山町宮ノ本遺跡(38)や山東町森向山遺跡(22)、五反田A遺跡(9)といった台地上の小規模集落も存在している。また、弥生中期後半に遡っても、山東町仲田遺跡(17)や粟鹿遺跡、和田山町林垣遺跡(43)、同町寺内遺跡のように低地に存在するものと、山東町芝ヶ端遺跡(4)や宮ノ本遺跡といった台地に立地する遺跡も同時存在している。このように弥生中期後半から後期中葉までの朝来市域では、低地の集落と台地上の集落が継続して存在しており、そこに大盛山遺跡や若水遺跡といった高地性集落が出現しているようである。ただし、大盛山遺跡では重複も含めて4棟の竪穴住居跡が検出されているにとどまり、大規模な高地性集落ではないことから、低地の集落が断絶して高地性集落や台地上の集落が出現しているのではなく、それらが同時に存在している状況が朝来市域の様相である。

弥生時代後期末～古墳時代初頭には柿坪遺跡(19)や粟鹿遺跡が古墳時代前期につながる集落として成立しているが、他に目立った集落跡は見つかっていない。古墳時代前期初頭～前半の墳墓では、本報告の若水古墳および若水古墳群(1)があるが、柿坪中山古墳群(20)や梅田東古墳群(37)など伝統的な丘陵上の連続する墳墓が多く、山東町新堂見尾1号墳(16)や和田山町向山2号墳(34)といった小規模墳もわずかながら認められる。新堂見尾1号墳第1主体部は石室系石棺で、重圏文鏡などが副葬され、向山2号墳でも同構造の第2主体部に破砕された内行花文(連弧文)鏡が置かれており、出土土器と鏡の型式から前期前半に相次いで築造されたものと思われる。

さて、若水城跡については、西尾孝昌氏(和田山町教育委員会1994)によれば、「標高170mの丘陵に所在する山城と山裾の大手虎口aからなっている。大手虎口は幅7.9mを測り、幅4～5m、高さ1.1～1.5mを測る土塁で囲まれている。山城は南北110m、東西18mを測る主郭を、幅4m、深さ1.5mを測る『折れ』をもつ横堀と帯曲輪が取り巻いている単純な縄張りである。堀切や堅堀はみられない。」と観察され、縄張りの特徴から、天正8年(1580年)の羽柴秀吉(秀長)が但馬勢を攻めた時に織豊勢力



第2図 若水城跡縄張図

が築城した「陣城」(付城)であると位置づけられている。また、ほかに織豊系城郭と思われるものとして、和田山町法道寺の法道寺城と和田山町岡の岡城をあげておられる。

一方、秀吉(秀長)を迎え撃つ但馬側の城であると判断される山東町域の城として、大内の磯部城(館跡)(60)、新堂の向山城(64)、和賀の滝野城(65)、柴の柴山城、諏訪の諏訪城(67)、川上の衣笠山城をあげられている。諏訪城跡は平成11年度に一部の発掘調査が行なわれ、曲輪や堀切などが検出されている。

ところで、朝来市域で古い時代に築かれた城には、南北朝期に築造され戦国末期に改修された和田山町土田の土田城(83)や室町～戦国初期に築かれた和田山町土田の観音山城(82)のほか、室町期の和田山町枚田の枚田城(80)があるが、南北朝期からしだいに勢力を増した太田垣氏の竹田城(74)が築城されると、その支城として数多くの城が築かれた。朝来市域に残る城跡の多くが竹田城の支城と考えられており、朝来町域では山内の山内城、岩津の岩洲城、山東町域では矢名瀬の陳東氏館(62)、溝黒の与布土氏館(68)、小谷の小谷城、金浦の夜久野城などがあげられる。また、和田山町域では宮の黒田城(52)や上山城、久田和の久田和城(59)、比治の比治城(69)、市御堂の市御堂城(70)、筒江の筒江城(71)、加都の安井城(79)、寺谷の寺谷城(81)などがある。なお、比治城の南にのびる尾根先端部では、茶すり山古墳調査の際に城跡が調査され、尾根端の平坦面斜面を多角形に加工した痕跡や、平坦面先端に横列の柱列や建物跡と思われる柱穴が検出され、法螺貝や輸入磁器などが出土している。

若水城跡については、今回調査したのは北側部分にあたり、主郭の北西端および北東に階段状にのびる曲輪の先端一帯と、西側尾根上の曲輪部分にあたる。調査の結果、曲輪は古墳の墳丘を利用した部分が多く、但馬地域の他の城跡のうち、尾根上の階段状で列状に認められる曲輪は、多くが古墳の墳丘をそのままあるいは若干の加工を加えて利用したものと判断できよう。

第2節 調査の経緯と経過

1. 発掘調査

発掘調査の経緯と経過

国土交通省近畿地方整備局豊岡河川国道事務所（当時は建設省近畿地方建設局豊岡工事事務所）による、一般国道483号北近畿豊岡自動車道春日和田山道路Ⅱ建設事業にかかる埋蔵文化財の分布調査は、平成5年4月に兵庫県教育委員会が実施し、埋蔵文化財調査事務所が担当した（遺跡調査番号：930013）。

若水古墳群・城跡のうち、当時は若水池群集墳として古墳群のみが周知されていたが、分布調査の結果、古墳とともに中世の山城跡が確認され、若水城跡と命名された。分布調査の結果によれば、路線内および周辺に主郭、帯曲輪、横堀などが明瞭に観察され、北側の山裾には土塁をもつ居館の存在も確認したと記述されている。分布調査の結果、これらの古墳群・城跡・居館を含めて北近畿豊岡自動車道No110地点として登録された。

その後、事業地の範囲が変更になったことから、平成10年5月に再度分布調査（遺跡調査番号：980072）を行なった結果、No110地点の事業地範囲内に10基の古墳が存在していることを確認した。ただし、この時点では若水古墳（A11号墳）は若水城の曲輪のひとつとしてのみ認識されていた。

以上の分布調査の結果および豊岡河川国道事務所（豊岡工事事務所）からの依頼を受け、遺構や遺物の有無および遺跡の範囲や性格を知るための確認調査を実施した。以下、確認調査の概要を述べる。

平成11年度 東地区確認調査（遺跡調査番号：990190）

担当者：兵庫県教育委員会 埋蔵文化財調査事務所 別府洋二 川村慎也 田中秀明

調査期間：平成11年（1999年）8月3日～8月4日

調査面積：47㎡

今回報告の東地区およびその北側平坦部分の調査で、掘削前から東地区の丘陵尾根部分には古墳状隆起および山城の曲輪が5基以上明瞭に確認されていた。幅1mのトレンチ11本のうち、尾根上に4本、その西側の館が想定されていた丘陵緩斜面にも4本、丘陵北側下の平坦部分には3本を設定して調査を行なった。調査の結果、丘陵緩斜面と丘陵下の平坦面では遺構・遺物ともに検出されなかったが、尾根上のトレンチでは、古墳および城跡の2時期の遺構が存在している可能性が指摘された。

平成12年度 西・中央地区確認調査（遺跡調査番号：2000191）

担当者：兵庫県教育委員会 埋蔵文化財調査事務所 久保弘幸 藤田淳 荒木幸治

調査期間：平成12年（2000年）6月12日～8月21日

調査面積：432㎡

今回報告の西地区および中央地区の確認調査である。幅1mと2mのトレンチを尾根筋を中心に合計22本設定して調査した結果、西地区にあたる部分で6基の古墳を確認し、古墳時代初頭～前期の土師器や中期の須恵器などのほか、弥生時代後期の土器も検出された。中央地区にあたる部分では、山城に伴う平坦面のほか、可能性があるものも含めて古墳3基を確認し、古墳時代の須恵器や鎌倉時代の土師器などが出土した。ただし、この時点でも若水古墳は郭状平坦面として記述されている。

以上の確認調査の結果により、遺構・遺物が存在する範囲がほぼ確定し、第2回目の確認調査と同年

度に豊岡河川国道事務所（豊岡工事事務所）からの依頼により西地区の全面調査を実施し、翌年度には中央地区と東地区の全面調査を実施した。

発掘調査の体制

若水古墳群・城跡の全面調査は前述のように地区を分け、2年度にまたがって実施した。

それぞれの年度の調査体制・調査期間・面積等およびそれぞれの地区における調査経過は以下のとおりである。

平成12年度(2000年度) 西地区全面調査(遺跡調査番号:2000272)

担当者:兵庫県教育委員会 埋蔵文化財調査事務所 調査第1班 平田博幸 小川弦太 内野さくら

調査期間:平成13年(2001年)1月5日~3月15日

調査面積:2,015㎡

調査区のはほぼ全域が下草や樹木で覆われていたため、約4,000㎡の範囲の雑木を伐採し、現況地形の空中写真測量を行なった。その後掘削を開始したが、調査にあたっては大きく北尾根と南尾根の2箇所に分けて調査を行なった。北尾根には6号墳~8号墳の3基の古墳、南尾根には13号墳~16号墳の4基の古墳が調査対象となっていた。それぞれの尾根に存在する古墳の主体部は合計21基検出され、南尾根に所在する古墳の墳丘が大きく、北尾根のものは明確な古墳の区画や墳丘が検出されなかった。また、南尾根の古墳の南側墳裾には木棺墓4基と石棺墓2基が存在していたことから、平野部を眺望できない選地があった可能性が指摘された。なお、調査終了後には調査区全体の空中写真測量を実施した。

平成13年度(2001年度) 中央・東地区全面調査(調査番号:2001042)

担当者:兵庫県教育委員会 埋蔵文化財調査事務所 調査第1班 平田博幸 岸本一宏 荒木幸治

現場補助員:戸田真美子 山本亮司

調査期間:平成13年(2001年)6月15日~12月14日

調査面積:8,009㎡

調査開始時に調査区内の雑木・下草の伐採を行った後、空中写真測量によって城跡や古墳および全体の現況地形測量を実施した。平成13年度調査区は調査区が東西に分割されていたため、平成12年度調査区に続く部分(中央地区)をB地区、丘陵東端の部分(東地区)をC地区と呼称した。B地区(中央地区)は丘陵頂部とそこから西側に続く尾根部分で、城跡と古墳が存在しており、C地区(東地区)は丘陵東端の尾根部分とその西側に続く斜面地で、古墳などが存在していた。各地区の調査面積はB地区(中央地区)が約7,300㎡、C地区(東地区)は約700㎡である。

発掘調査はC地区(東地区)の表土剥ぎから実施し、B地区(中央地区)の表土剥ぎはC地区(東地区)の掘削がほぼ完了した7月下旬から開始した。C地区(東地区)の調査は8月末まで実施し、主として岸本・荒木が調査にあたった。なお、7月28日にはC地区(東地区)の地元説明会を開催した。

続くB地区(中央地区)の調査は若水城の主郭部分から開始し、徐々に西側に広げていった。9月末以降、岸本が報告書作成のため埋蔵文化財調査事務所勤務となったため、その後のB地区(中央地区)の調査は平田・荒木の2名で担当することになった。その後、若水古墳(A11号墳)が古墳であることが判明し、調査成果が得られた11月25日に一般を対象とした現地説明会を実施し、12月14日に調査を終了した。なお、各調査区の遺構掘削が終了した時点で航空写真測量を実施した。



第3図 道路用地範囲と遺跡調査部分

2. 出土品整理

出土品整理作業の経過

若水古墳群・城跡の出土品整理作業は、豊岡河川国道事務所からの依頼により平成17年度から平成20年度までの4年間実施した。

平成17年度は土器の接合・補強、土器の実測、土器の復元作業を兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所で行い、一部の金属器の保存処理を元興寺文化財研究所に委託して実施した。平成18年度は金属器の実測、遺物の写真撮影、分析鑑定および金属器保存処理を兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所で行った。平成19年度は兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所が組織改変によって兵庫県立考古博物館埋蔵文化財調査部となり、同年の7月からは加古郡播磨町大中500に所在する兵庫県立考古博物館に場所を移して、遺構図補正および遺構・遺物のトレース作業を実施した。平成20年度は兵庫県立考古博物館においてレイアウト作業および報告書印刷・製本を行ない、報告書を刊行した。

出土品整理作業の体制

若水古墳群・城跡の出土品整理作業における、それぞれの年度の担当者は下記のとおりである。

平成17年度	接合・補強、実測、復元
整理担当職員	調査第2班 岸本一宏（作業指示） 普及活用班 小川弦太（作業指示） 整理保存班 仁尾一人（工程管理） 非常勤嘱託員 八木和子 垣本明美 池田悦子 前川悦子 渡辺（津田）友子（実測） 吉田優子 西口由紀 河上智晴 三好綾子 又江立子 荒木由美子 藤池かづさ 嶺岡美見（接合・補強、復元）
平成18年度	金属器実測、遺物写真撮影、分析・鑑定、金属器保存処理
整理担当職員	調査第3班 小川弦太（作業指示） 整理保存班 岸本一宏（作業指示・工程管理兼務） 岡本一秀（金属器保存処理） 非常勤嘱託員 八木和子 垣本明美（実測） 栗山美奈 大前篤子 藤井光代 清水幸子（保存処理）
平成19年度	遺構図補正、トレース
整理担当職員	調査第1班 小川弦太（作業指示） 整理保存班 岸本一宏（作業指示・工程管理兼務） 非常勤嘱託員 八木和子 垣本明美 長濱（三島）重美
平成20年度	レイアウト、印刷・製本
整理担当職員	企画調整班 小川弦太（作業指示・原稿執筆） 調査第2班 岸本一宏（作業指示・原稿執筆） 整理保存班 岡田章一（工程管理） 非常勤嘱託員 八木和子 垣本明美（レイアウト）

第2章 調査の結果

第1節 概要

調査区の概要

調査区は若水古墳群および若水城跡が存在する丘陵の北部にあたるが、道路範囲は丘陵北部を東西に横断し、丘陵頂部に存在する若水城跡の主郭北端部と若水古墳（A11号）が存在する丘陵支尾根頂部および若水古墳群B支群が存在する丘陵東端を通る計画であった。したがって、道路はそれらの部分を削平し、丘陵北部端を残すかたちとなっている。

道路予定範囲丘陵西側支尾根頂部に存在する若水古墳よりも西側には、北西方向に支尾根が続くと同時に南西方向にも小さな支尾根がのびている。道路予定範囲内はこれらの北側支尾根南東部と南西方向の小支尾根およびその間のやや凹面をなす斜面であり、約2,000㎡のこの範囲が平成12年度に調査を実施した西地区（A地区）である。

中央地区（B地区）は先述の丘陵頂部北端と北西方向支尾根の頂部までの範囲で、西側は西地区と接する、面積約7,300㎡の調査区である。中央地区の東側丘陵頂部には若水城跡があり、その主郭と帯曲輪の一部が調査範囲内に存在した。帯曲輪の北西側は支尾根稜線がのび、徐々に低くなるが、若水古墳の部分でもう一度隆起している。その鞍部を境として西側が若水古墳群A支群、東側がB支群と呼称されている。中央地区内の若水古墳群B支群は城の曲輪に利用され、かなりの改変を受けていた。一方、若水古墳群A支群は若水古墳をはじめ城による改変はほとんど受けていないようであった。

東地区（C地区）は面積約700㎡の独立した調査区で、中央地区とは約70mの距離を隔て、東側にのびる丘陵支尾根端の尾根稜線および西側斜面である。この地区には若水古墳群B支群が存在し、古墳群および小石棺墓などの調査を行なった。また、弥生時代と想定される木棺墓も存在していた。

西地区の概要

西地区では、調査区内北側の支尾根稜線上と南側の小支尾根稜線上に存在する若水古墳群A支群の調査を中心に実施した。北側尾根稜線上にはA6号墳～A8号墳の3基の古墳（墳墓）が間隔をあけて位置しており、最も高い位置にA8号墳が存在する。南側小支尾根稜線上にもA13号墳～A15号墳の3基の古墳（墳墓）が存在しているが、古墳（墳墓）間は非常に狭く、丘陵山側を削る加工や溝によって各古墳（墳墓）間の境としている。このような加工は北側尾根に存在するA6号墳・A7号墳には認められない。このことは、北側尾根の方が南側尾根に較べて緩傾斜であることと関係しているかもしれない。なお、A13号墳～A15号墳のうち、最高所に位置するのは標高約140mのA13号墳であるが、A8号墳の方がさらに高所の標高約146mに位置している。また、A16号墳は時期を異にする。

南側小支尾根上のA13号墳では2基の木棺墓と土器棺1基が検出され、A14号墳の埋葬施設は木棺墓であり、A15号墳には区画溝重複も含めて7基の木棺墓と1基の土器棺が埋葬施設となっていた。これらの墓域内・棺上出土土器および土器棺に使用された土器から、3基の古墳（墳墓）は庄内期に築造されたものであることが判明した。また、A13号墳・A14号墳の南側斜面には墳丘をもたない木棺墓4基と石棺墓2基および土壙墓と推定されるもの1基が検出されたが、これらは出土遺物などから古墳時代中期後半に構築されたものであり、小支尾根下端に位置するA16号墳が中期末～後期前半の可能性が高

いことから、A16号墳やその周辺に存在する古墳との関連でとらえられるものと思われる。

なお、A13号墳とA8号墳の間には明確な古墳（墳墓）が検出されなかったが、庄内期新相の土器が出土した土壌SK-W4をはじめ、SD-W4やSD-W5およびSK-W6とSK-W7も含めて一つの古墳（墳墓）とすることができるかもしれない。

北側尾根上に築造されたA6号墳～A8号墳は主体部の木棺墓が各1基ないし2基と少ないが、A7号墳の斜面山側に存在する木棺墓2基をA7号墳あるいはA8号墳の周辺埋葬とすることもできよう。A8号墳の北側には土器棺と溝状遺構があり、A7号墳の南西側斜面には木棺墓や土器を含めて墓と推定される遺構が3基検出されており、これらを含めてA7号墳あるいはA8号墳の周辺埋葬と考えることができるかもしれない。A6号墳～A8号墳の主体部からは遺物が出土しなかったが、周辺部の遺構などから庄内期新相の土器が出土していることから、A6号墳～A8号墳も当該時期に築造された可能性が高いと推定されよう。

中央地区の概要

中央地区は検出された遺構の状況から、中央の尾根鞍部を境にして東西の二つに大きく分けることができる。西半部は標高153mの支尾根頂上部に位置する若水古墳（A11号）とその墳裾平坦面外側に位置するA10号墳・A18号墳・A19号墳・A20号墳で構成されるが、若水古墳およびA19号墳以外では埋葬施設は検出されなかった。また、若水古墳は庄内期末～布留期の築造と推定されるが、A18号墳やA20号墳から出土した土器は古墳時代後期であり、A19号墳も埋葬施設の状況から古墳時代中期～後期の可能性が高い。また、土器棺が3基検出されているが、そのうち2基は古墳時代後期末の土器である。

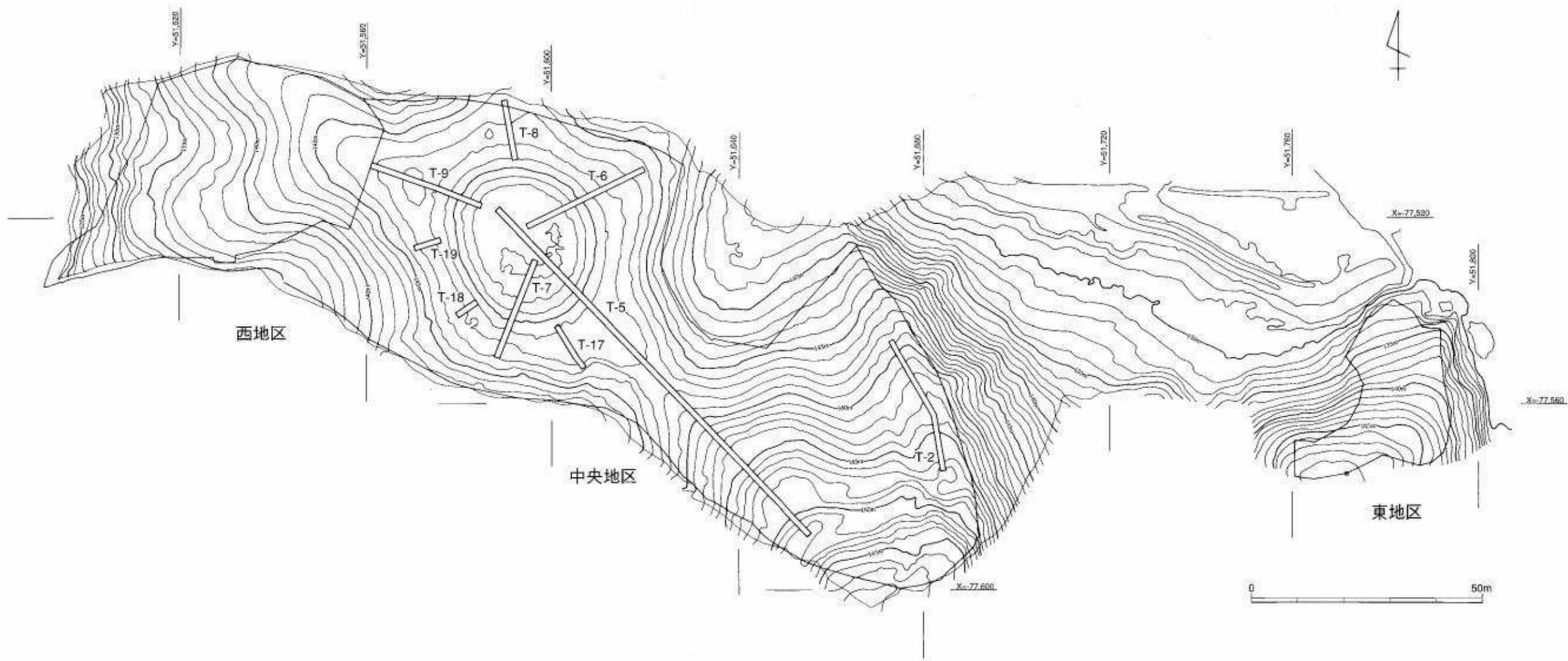
なお、中央地区中央部の鞍部北側斜面で奈良時代の土器が1基発見されている。

中央地区東半部は弥生時代後期の環壕と思われる溝2条と、B7号墳・B8号墳の古墳2基および若水城関連の遺構が検出された。弥生時代の溝2条は調査時には若水城の横堀と考えられていたものであるが、検討の結果、弥生時代に帰属するものであるとの結論に達した。2基の古墳の時期は不明であるが、木棺墓と石棺墓を埋葬主体としている。若水城関連では、2つの帯曲輪と主郭北西隅で石積み虎口を検出した。なお、帯曲輪の北端付近は2m以上の落差をもって一度低くなっており、地すべりによるものと思われる。また、そこから約10m北側で北西～南東方向で落差約10m～20mの崖面となっているが、この部分は土取りによるものか、あるいは地滑りの可能性もある。

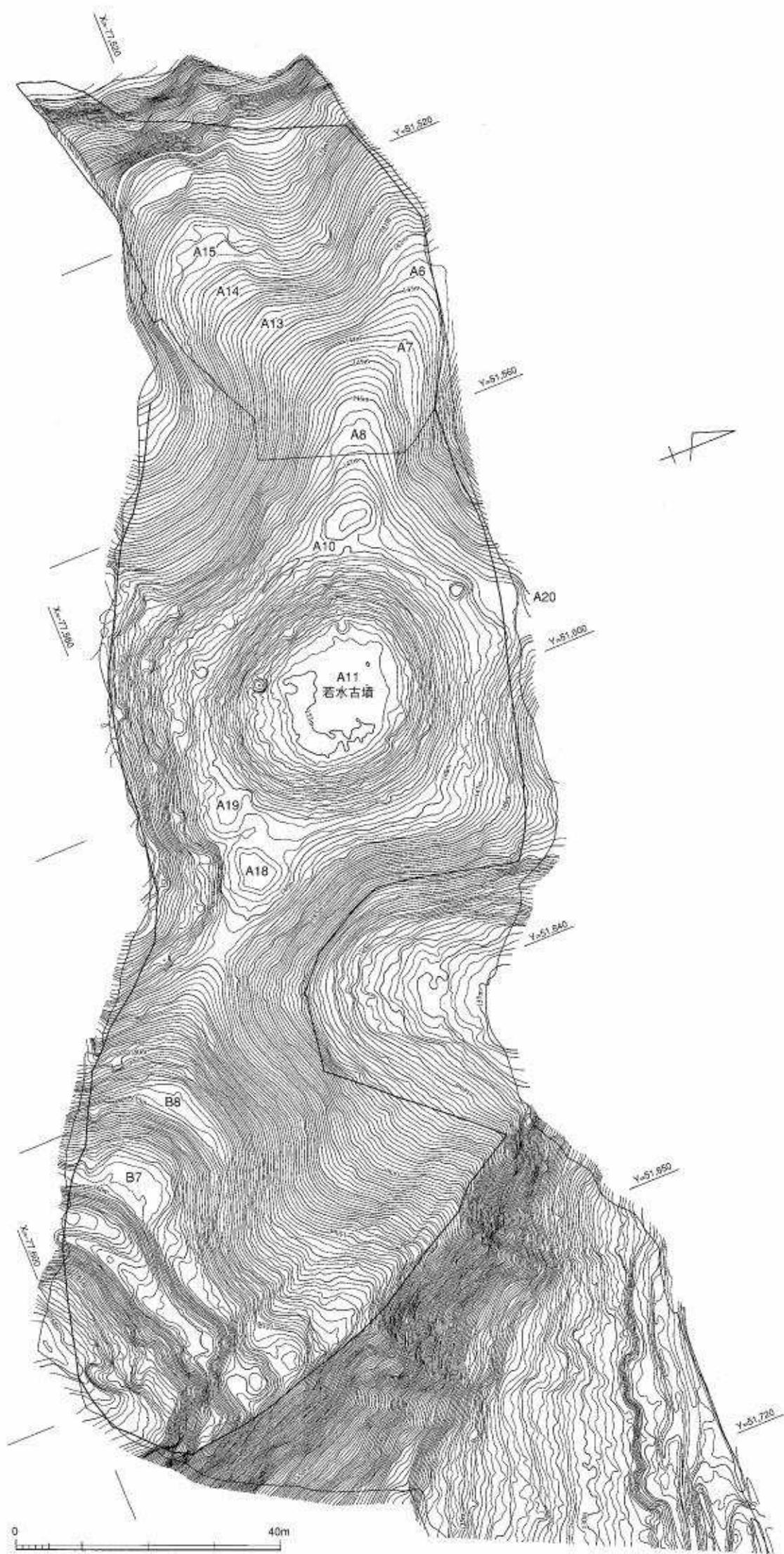
東地区の概要

東地区の尾根稜線にはB1号墳～B6号墳が位置しているが、道路用地境の関係から、古墳のほぼ全体を調査できたのはB1号墳～B3号墳の3基である。また、最も低い位置のB1号墳が存在する部分の尾根稜線東側は崖面となっていた。B1号墳の主体部は木棺墓1基で、庄内期の土器が供献されていた。B2号墳は木棺墓2基を内部主体とし、古墳時代前期頃の高杯片が出土した。尾根稜線変換部分に位置するB3号墳は、礎床を有する木棺墓1基を埋葬施設とし、鉄刀や鉄鏃などが副葬され、墓壙上には古墳時代中期の須恵器甕が置かれていた。これら3古墳はいずれも丘陵尾根山側を削ることによって古墳範囲を明確にしたもので、いわゆる階段式または卓状墓と呼ばれる形態である。

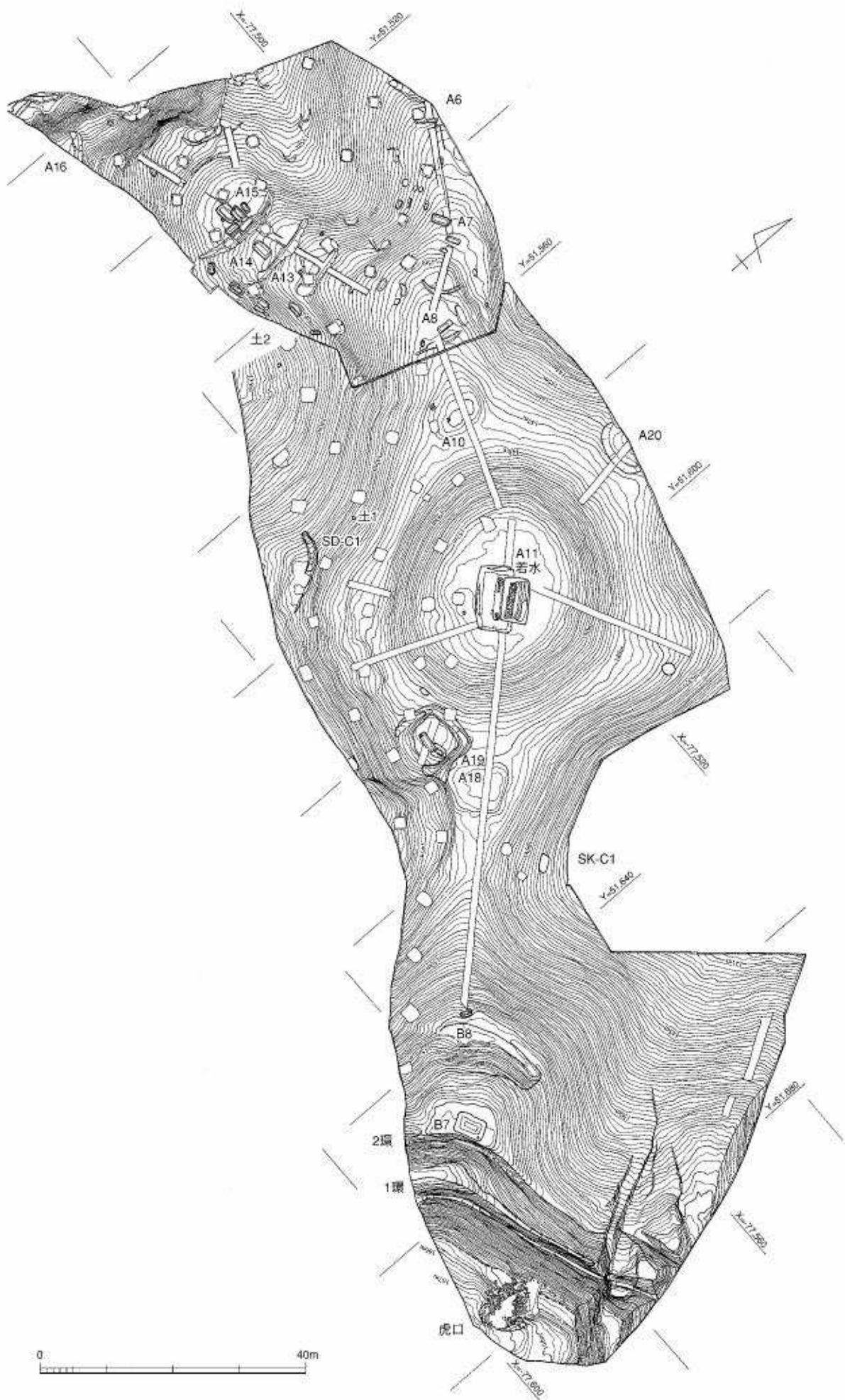
古墳群の西側斜面には、子供埋葬用と思われる小石棺墓が確実なもので5基と、弥生時代も含めた木棺墓が3基のほか、土器などが検出された。伴出遺物が限られ、小石棺墓の時期は確定できなかった。



第4図 調査前全体地形



第5图 西地区・中央地区調査前地形



第6圖 西地区・中央地区調査後地形

第2節 西地区の遺構と遺物

西地区の概要

若水古墳群西地区の調査は、北近畿豊岡自動車道春日和田山道路Ⅱ整備事業に伴う埋蔵文化財調査として行われた平成5年度の分布調査に始まる。その後、事業地の変更によって平成10年5月に再度分布調査を行った。これらの分布調査によって、若水城跡や古墳10基が確認され、No110地点と名付けられた。

分布調査

遺跡調査番号 980072

調査担当者 久保弘幸、守岡克倫、岡 昌秀

調査期間 平成10年5月20日～5月22日

調査面積 約60ha

平成5年度に行った分布調査成果を追認し、各地点において古墳の員数を確認した。No110地点においては、城跡と古墳10基を確認している。

確認調査

遺跡調査番号 2000191

調査担当者 久保弘幸、藤田淳、荒木幸治

調査期間 平成12年6月12日～平成12年8月21日

調査面積 432m²

調査は幅1m、長さ5m～99mの確認トレンチを22本設定し行った。西地区にはT-9、T-10(a)、T-10(b)、T-11(A)、T-11(B)、T-20、T-21の計7本が設定された。T-9は若水古墳から両尾根の合流地点まで、T-10(a)(b)は北尾根、T-11(a)(b)、T-20、T-21は南尾根にあたる。各トレンチから、平坦面や墓壇が検出され古墳の存在が確認された。

本発掘調査

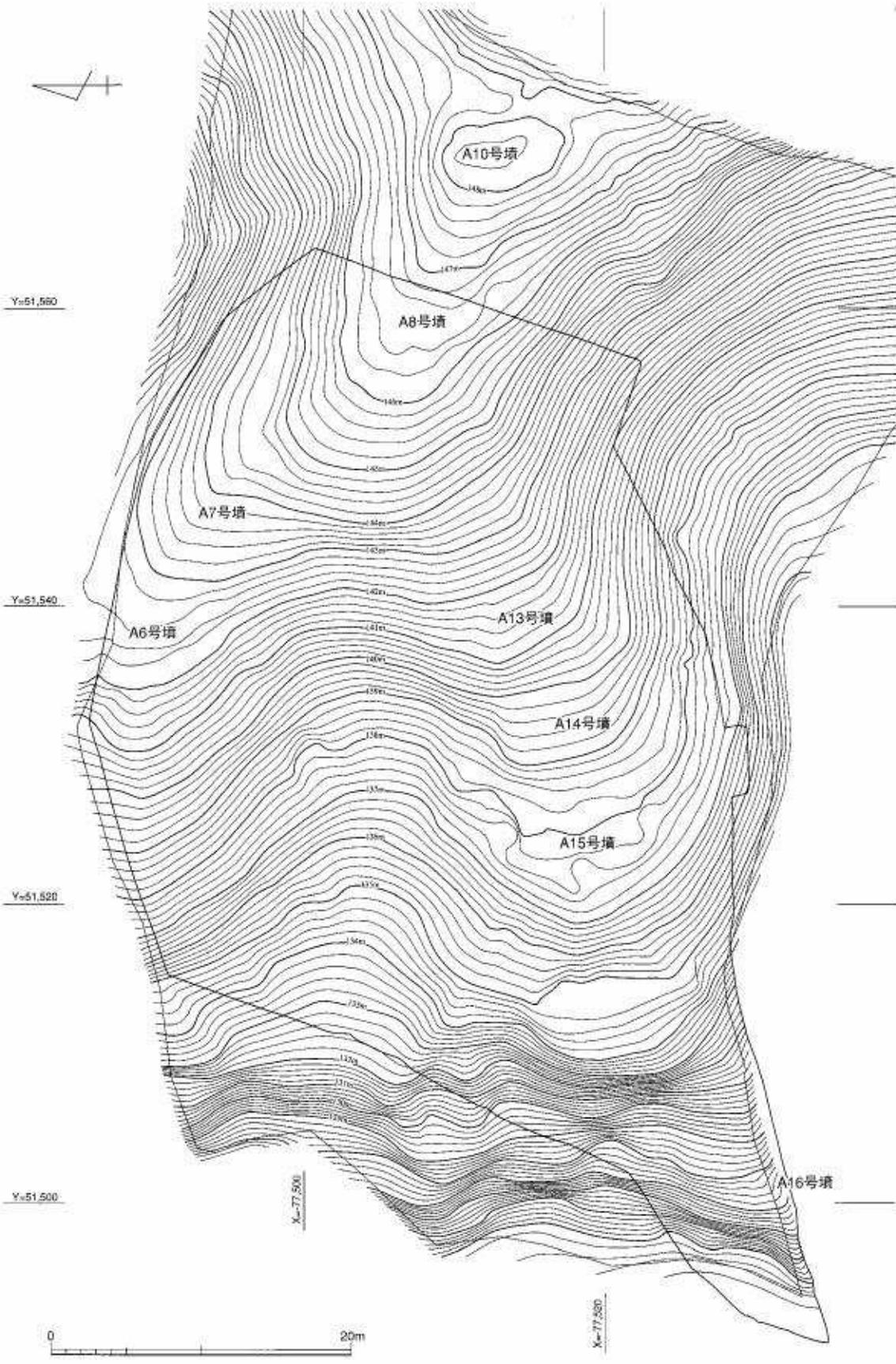
遺跡調査番号 2000271

調査担当者 平田博幸、小川弦太、内野さくら

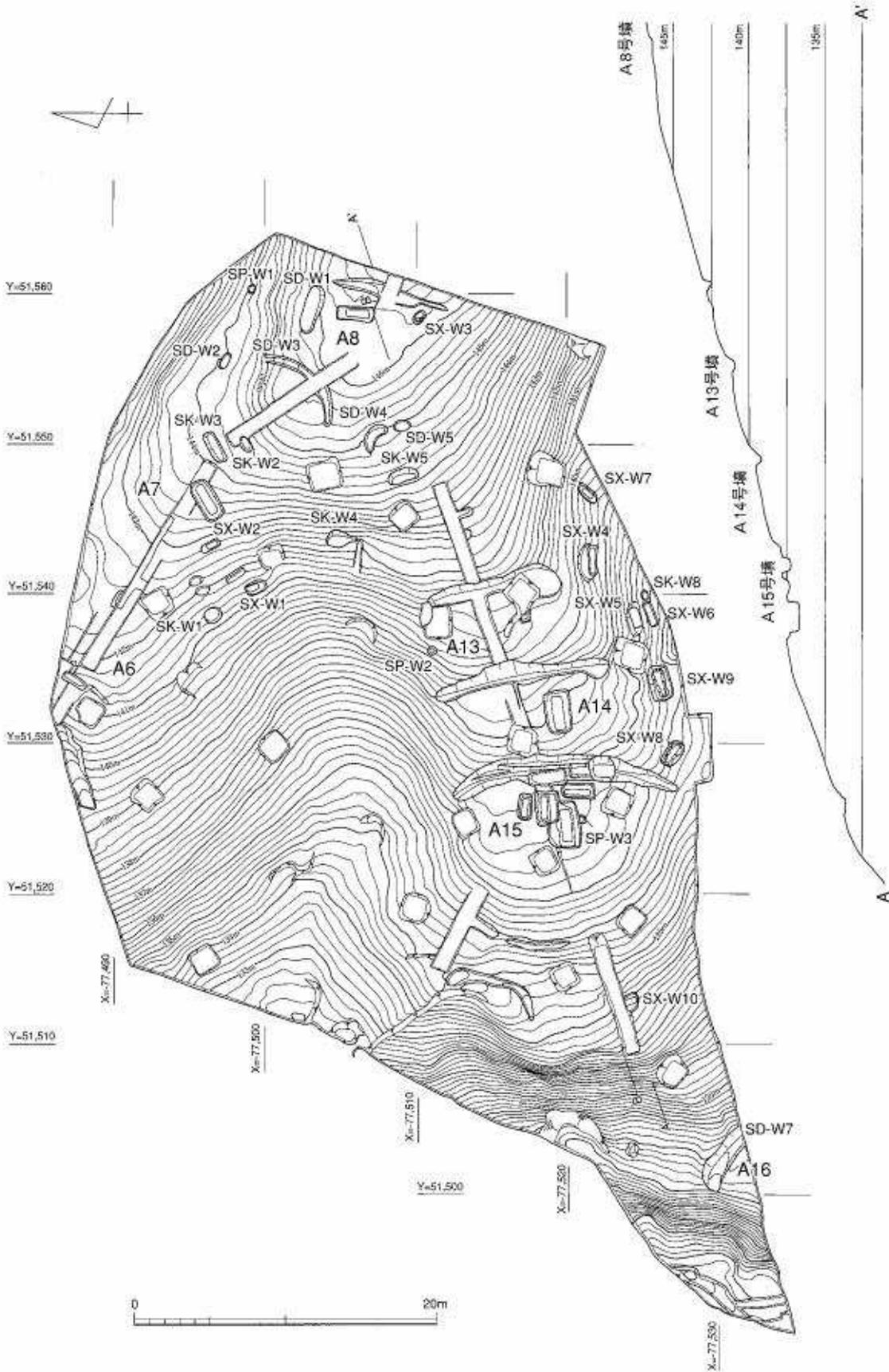
調査期間 平成13年1月5日～平成13年3月15日

調査面積 2,015m²

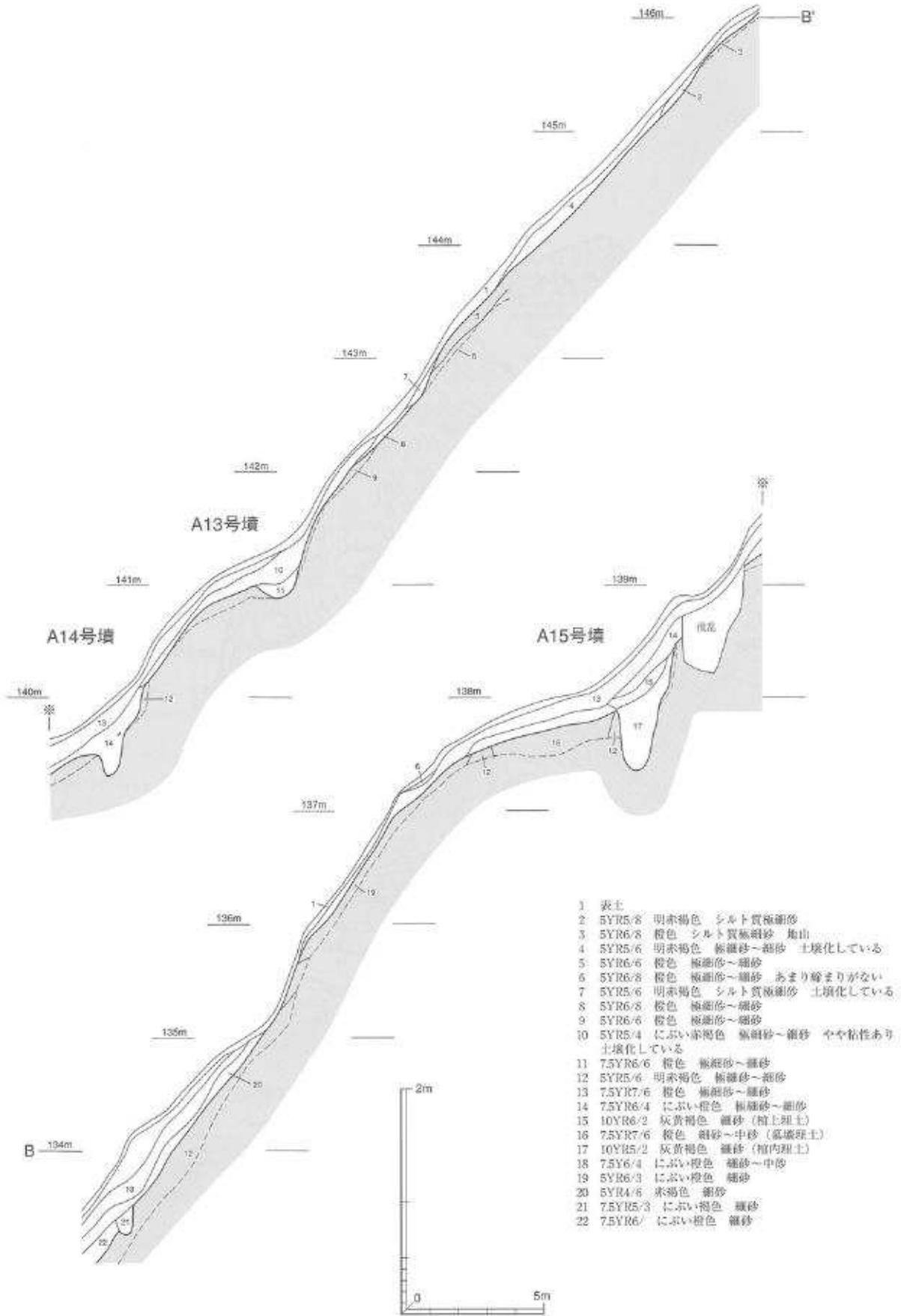
北尾根で古墳3基(A6号墳、A7号墳、A8号墳)、南尾根で古墳3基(A13号墳、A14号墳、A15号墳)、南尾根裾で古墳1基(A16号墳)の合計7基の古墳を調査した。北尾根の古墳は墳丘を造成せず、比較的平坦な場所に主体部を築く古墳である。A16号墳以外の南尾根の古墳は区画溝を掘り、平坦面を造成した残土を盛って墳丘としている古墳である。いずれの主体部も木棺直葬であるが、A8号墳、A13号墳では土器棺墓を主体部の周辺で検出した。これらはいずれも古墳時代初頭(庄内式併行期)に造墓されたと考えられる。また、A14号墳の南裾で検出した石棺墓は、A13号墳南裾の木棺墓と同様に古墳時代中期後半の所産と考えられ、A16号墳が同時期である可能性がある。



第7図 西地区 調査前地形



第8図 西地区 調査後地形



第9図 西地区 南尾根縦断土層断面

1. 古墳

A 6号墳

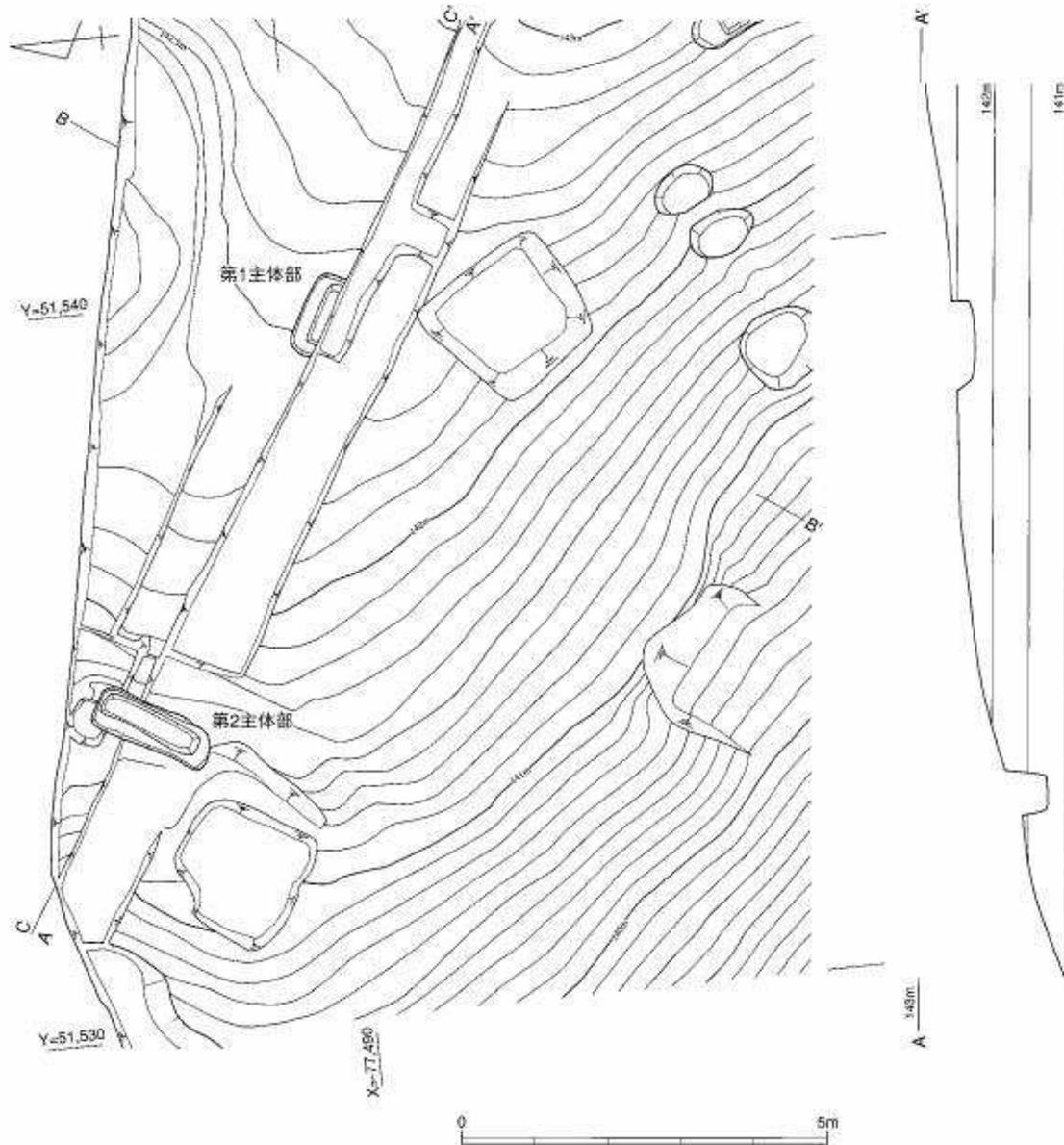
墳丘（第10、11図、カラー写真図版10）

位置と検出状況

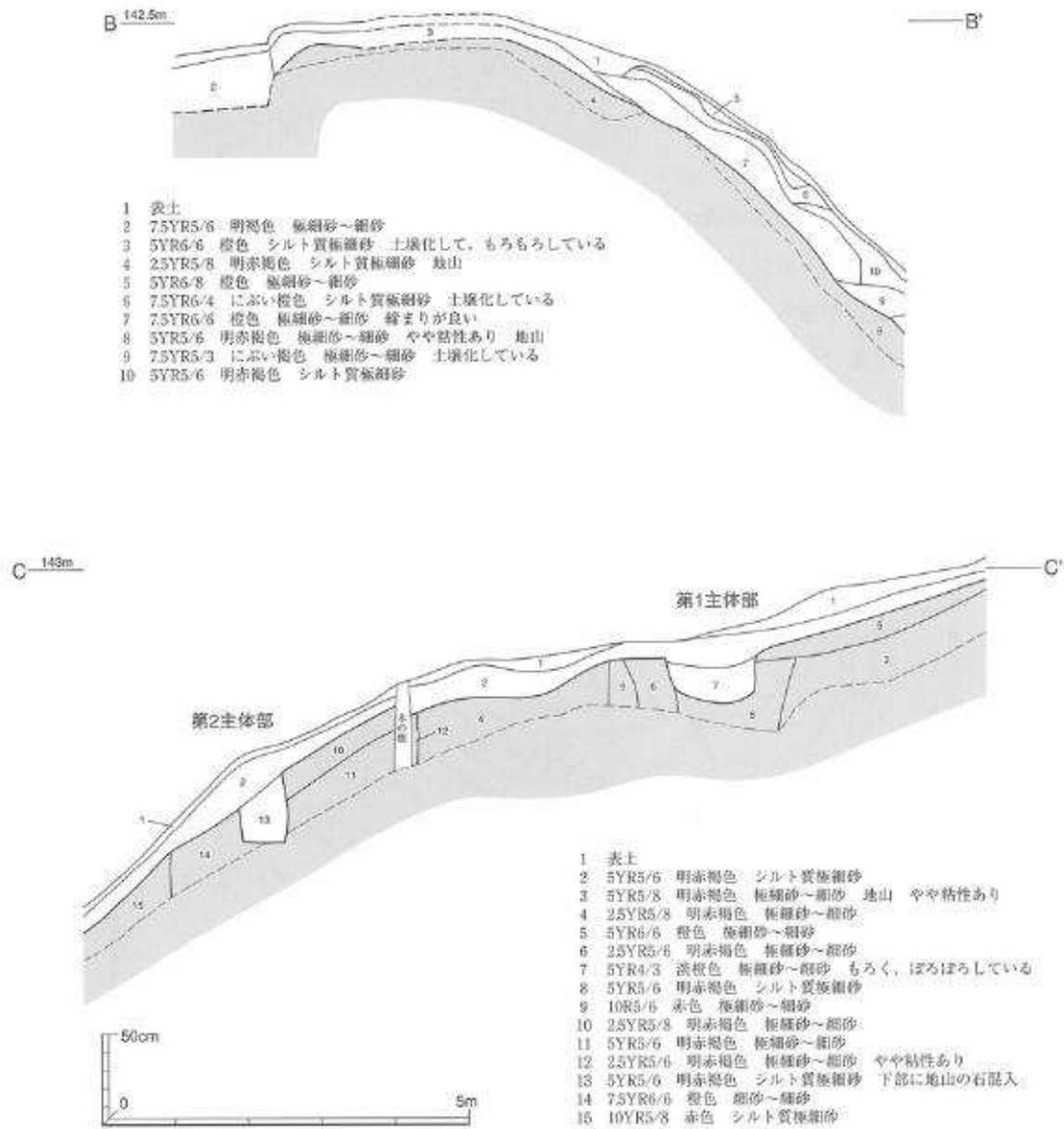
A 6号墳はA 8号墳から北西方向へと細長く伸びる北尾根上の標高141m～142mの所に立地する。今回調査した北尾根では最も低所に位置し、平野からの比高差は約18mである。古墳は平坦地や区画溝などで明確な区画や墳丘が造られず、稜線上の緩やかな傾斜面に主体部を2基築いている。確認調査において、表土直下で2基の主体部は検出されていた。

形態・規模

墳丘を造成した明確な痕跡はない。また、明確な平坦地も確認できないが、主体部周辺が緩やかな傾



第10図 A 6号墳 平面・断面



第11図 A6号墳 墳丘土層断面

斜面となっているため、なんらかの整地が行われた可能性はある。さらに、第2主体部の北側は調査区外へとやや平坦に近い地形が続く。そのため、今回検出した主体部以外の埋葬施設が調査区外に存在する可能性が考えられる。

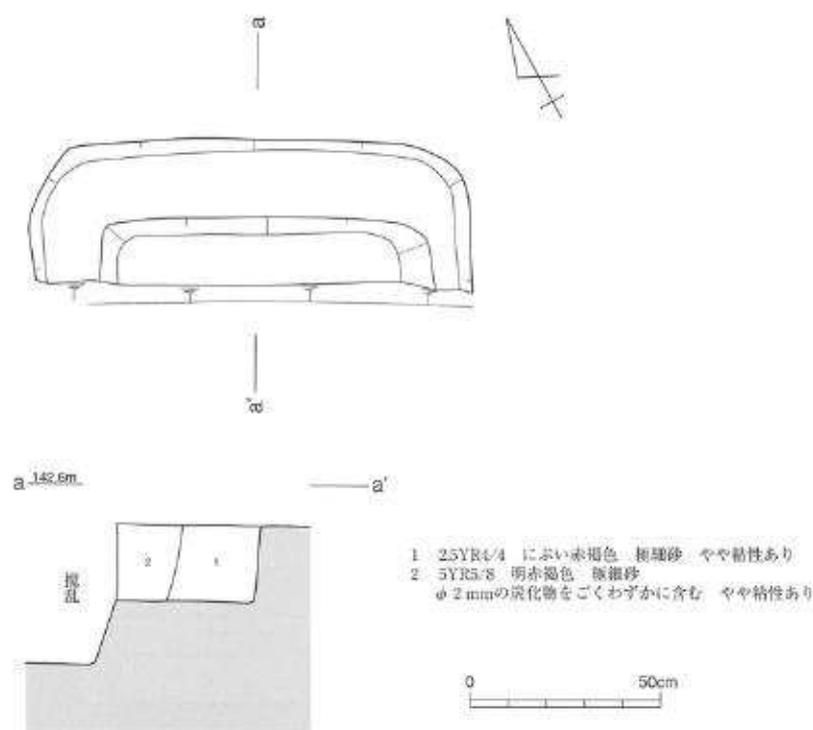
埋葬施設

主体部は2基検出した。どちらも木棺墓である。第1主体部は尾根稜線と平行方向に主軸を置き、第2主体部は尾根稜線と直交方向に主軸を置く。第2主体部周辺が平坦面となっているため、6号墳の中心部は第2主体部であるといえる。また、それぞれの主体部が別々の古墳である可能性もある。

第1主体部（第12図、カラー写真図版10）

棺

平面及び土層断面から木棺の痕跡を確認した。検出した木棺の痕跡は、長さ86cm、残存幅17cm、深さ20cmである。側壁は垂直であり、棺の底もほぼ水平であるため箱形木棺であったと考えられる。



第12図 A6号墳 第1主体部

墓域

墓域は隅丸長方形で長さ1.17m、残存幅38cm、検出面からの深さ20cmを測る。墓域横断面は長方形を呈し底は水平である。攪乱によって墓域の南半分は失われている。

出土遺物

遺物の出土はない。

第2主体部（第13図、カラー写真図版10）

棺

平面及び土層断面から木棺の痕跡を確認した。検出した木棺の痕跡は、長さ1.43m、幅35cm、深さ24cmである。側壁はほぼ垂直であり、棺の底もほぼ水平であるため箱形木棺であったと考えられる。

墓域

墓域は隅丸長方形で長さ1.63m、幅58cm、検出面からの深さ60cmを測る。墓域横断面は長方形に近く、底は水平である。攪乱によって南側上面が削られているが、比較的残りの状態は良い。

出土遺物

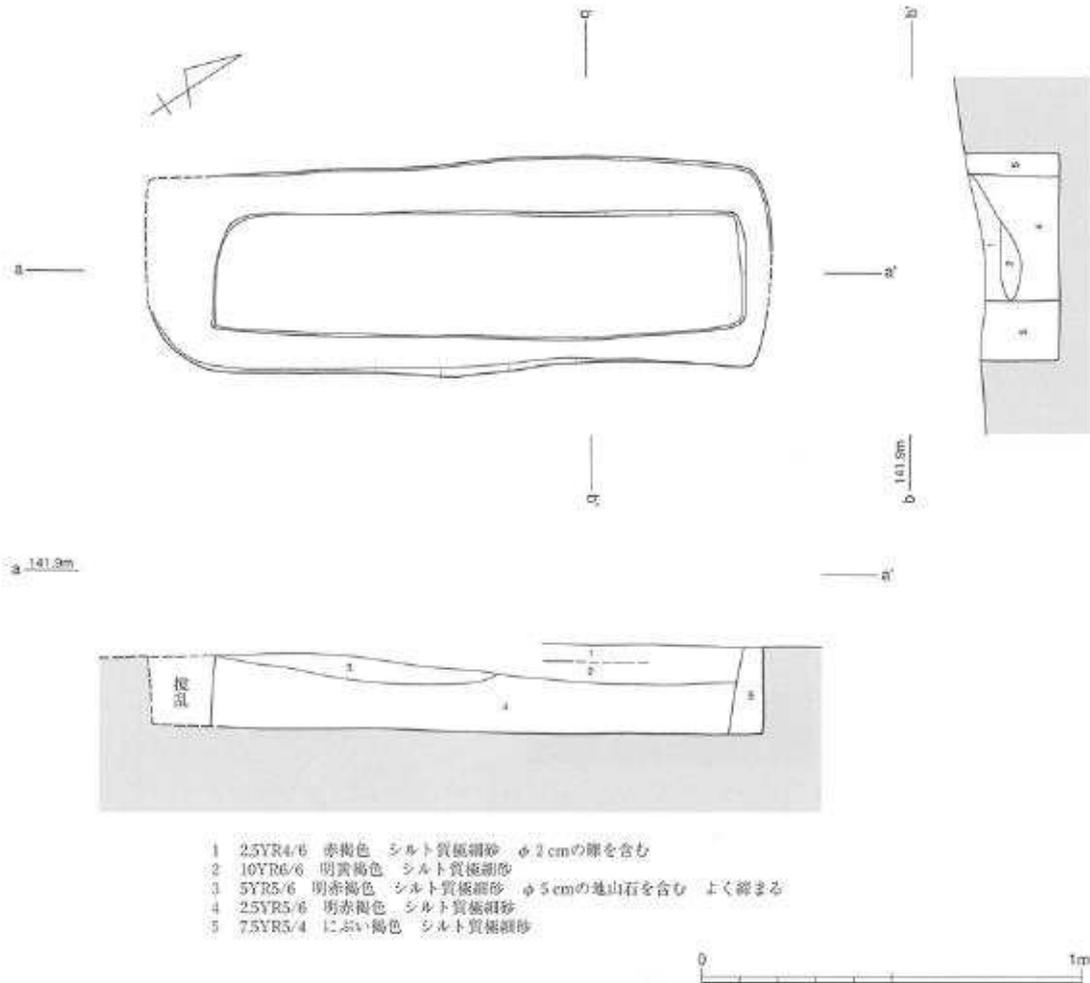
遺物の出土はない。

A7号墳

墳丘（第14・15図、カラー写真図版11）

位置と検出状況

A7号墳は北尾根上の標高143m～144mの所に立地する。A6号墳同様、明確な墳丘はなく、緩やか



第13図 A6号墳 第2主体部

な傾斜面に主体部が築かれている。確認調査で主体部が検出されていた。主体部の西側で木棺墓2基（SX-W1、2）、土坑1基（SK-W1）、東側で土坑2基（SK-W2、3）を検出している。

形態・規模

墳丘を造成した明確な痕跡は検出されなかった。また、明確な平坦地も確認できないが、主体部からSK-W3にかけては緩やかな傾斜面となり、やや平坦な面が広がっている。そのため、主体部を築く時になんらかの整地が行われた可能性がある。

埋葬施設

主体部（第16図、カラー写真図版11）

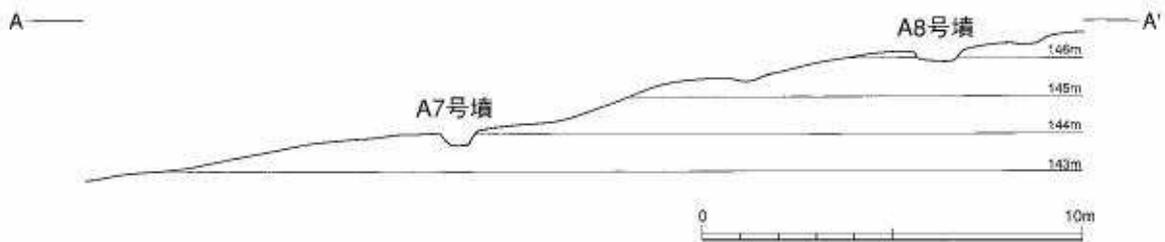
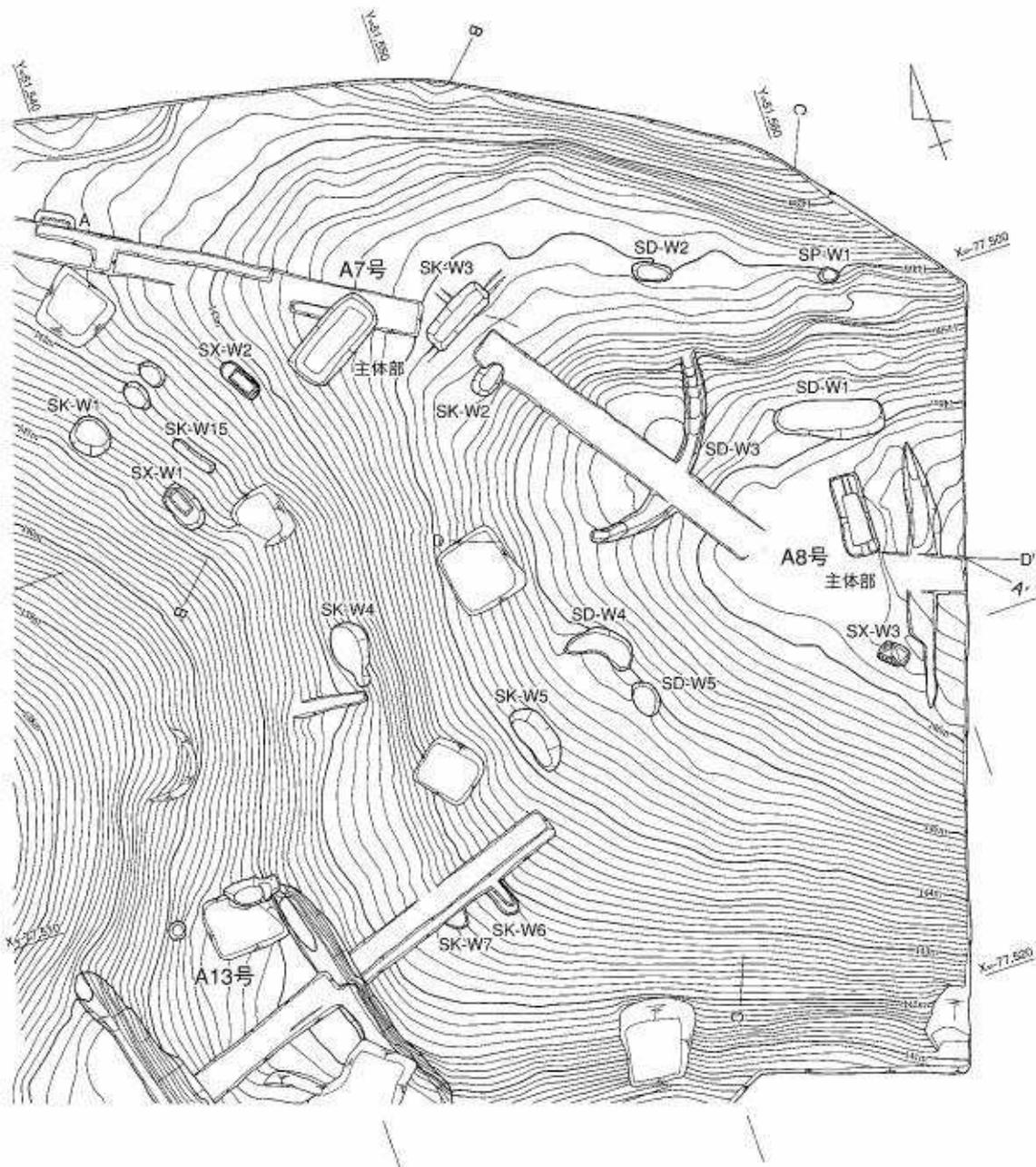
主体部は木棺墓を1基検出した。棺の主軸は尾根筋と直交方向に置く。

棺

検出した木棺の痕跡は、南側壁で長さ2.14m、北側壁で長さ2.06m、幅62cm、深さは横断部分で60cmを測る。木棺の側壁は垂直であり、棺の底も水平であることから箱形木棺であったと考えられる。

墓壇

墓壇は隅丸長方形で長さ2.9m、幅1.44m、検出面からの深さ62cmを測る。平面及び土層断面から、墓壇のほぼ中央に木棺の痕跡を確認した。



第14図 A7号墳・A8号墳 平面・断面



第15図 A7号墳 墳丘土層断面

出土遺物 (第19図)

墳丘表土から(2)が出土している。2は脚部である。内外面ともナデで仕上げる。

木棺墓

S X-W1 (第17図、カラー写真図版12)

位置と検出状況

A7号墳主体部の西側標高140mに位置し、表土直下で検出した。北尾根稜線の南側にあたり、谷に向かう斜面に築かれている。棺の主軸方向は等高線と平行方向である。

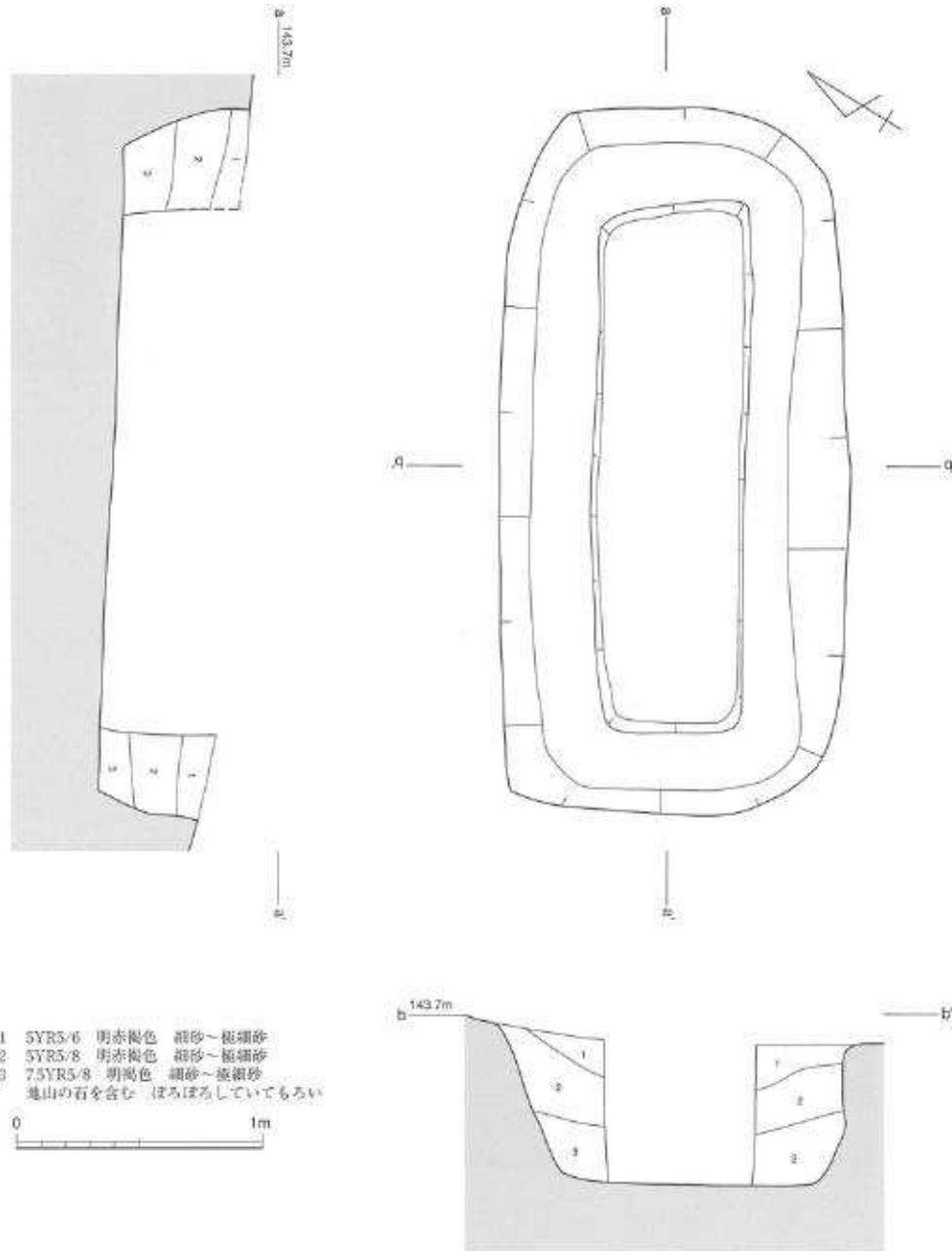
形態・規模

墓壇の平面形は楕円ぎみに膨らんだ隅丸長方形を呈し、棺を設置するために1段深く掘り下げた2段墓壇となっている。検出面での墓壇は長さ1.4m、幅最大90cmを測る。検出面から段差までの深さは山側で56cm、谷側で30cmとなる。墓壇底の北より部分が1段掘り下げられ、そこに棺の痕跡を検出した。棺は長さ77cm、幅35cm、深さ20cmを測る。木棺の側壁は垂直であり、棺の底も水平であることから箱形木棺であったと考えられる。木棺の北東隅から破砕された甕が出土している。

出土遺物

土器 (第19図、モノクロ写真図版1)

木棺内部から甕(1)が出土した。1は口縁部端面に擬凹線を施し、体部内面の頸部までヘラケズリを施す。



第16図 A7号墳 主体部

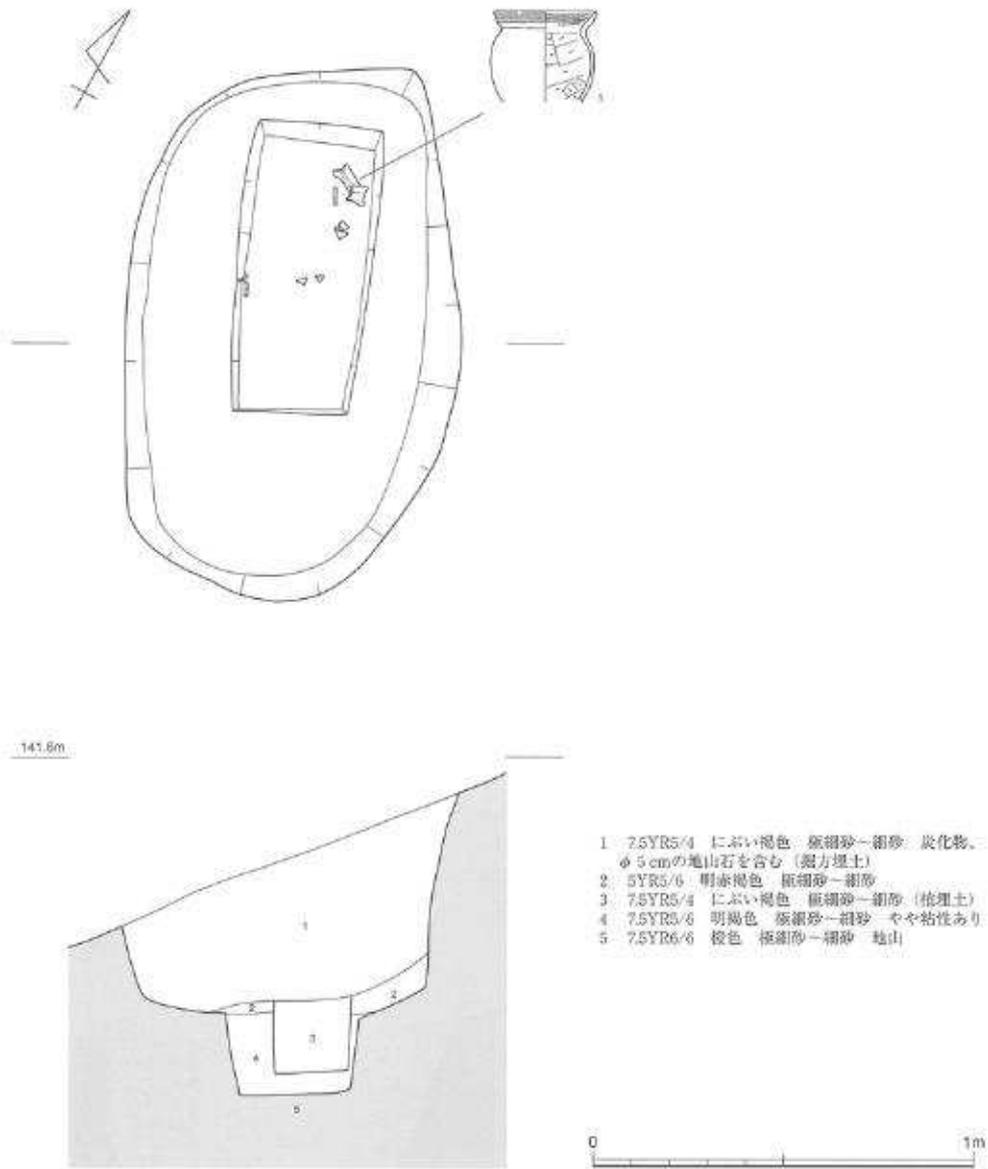
鉄器（第20図、モノクロ写真図版1）

木棺内部から鉄鏃（M1）が出土している。M1は残存する長さ3.3cmを測る。鏃の基部から鏃身部にかけての破片である。

SX-W2（第18図、カラー写真図版12）

位置と検出状況

A7号墳主体部の西側標高142mに位置し、表土直下で検出した。北尾根稜線の南側にあたり、谷に向かう斜面に築かれている。墓壙、棺の主軸方向は等高線と平行方向である。



第17図 木棺墓（SX-W1）

形態・規模

墓域の平面形は隅丸長方形で、長さ1.35m、幅56cm、検出面からの深さ35cmを測る。平面及び土層断面から木棺の痕跡を確認した。検出した木棺の痕跡は、長さ80cm、幅40cm、深さ30cmである。側壁は垂直であり、棺の底もほぼ水平であるため箱形木棺であったと考えられる。棺内埋土に若干の炭化物が含まれる。

出土遺物

遺物の出土はない。

土墳墓

SK-W1 (第21図、カラー写真図版12)

位置と検出状況

A7号墳主体部の西側、標高141m、北尾根稜線より南側の斜面に位置する。表土直下で検出した。

形態・規模

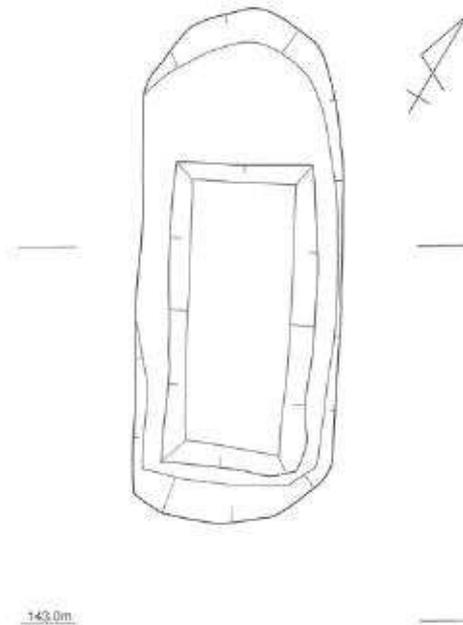
平面形は円形を呈し、直径1.14m、深さ1.1mを測る。土墳はほぼ垂直に掘られ、底はほぼ水平となる。

柱穴

土墳底に柱状のものを挿したと考えられる直径26cm、深さ24cmの穴が2箇所並ぶ。土墳の形状などから、狩りのための落とし穴と考えられる。

出土遺物

遺物の出土はない。



SK-W2 (第23図、カラー写真図版14)

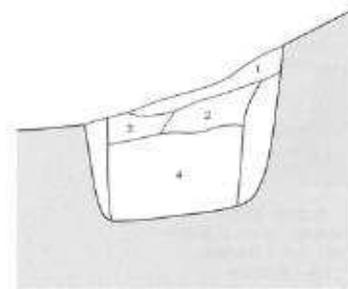
位置と検出状況

7号墳主体部の東側、標高144mに位置し、表土直下で検出した。A8号墳から続く傾斜がA7号墳に向かって緩やかとなる傾斜の変換点であり、北尾根稜線上となる。SK-W3と近接する。

形態・規模

平面形は楕円形を呈し、長軸1.1m、短軸70cm、検出面からの深さ最大65cmを測る。土墳東側上部は確認トレンチによって破壊されていた。土墳横断面は半円形を呈し、底部の壁際には10cm程度の大きさの石が入れている。棺の痕跡は確認できなかったが、木棺墓である可能性も残る。

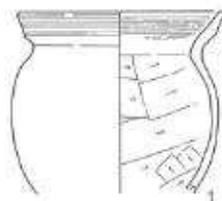
土墳底部東隅の壁際から破碎された甕(3)が出土した。壁際で検出されたことから、棺が入れられた後、棺と土墳壁との隙間に入れられた可能性が考えられるものの、棺の痕跡は検出されなかった。



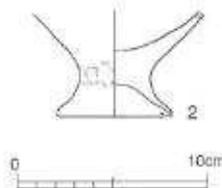
- 1 5YR5/6 明赤褐色 粘雑砂 粘性あり
- 2 5YR4/8 赤褐色 粘雑砂 粘性あり
- 3 2.5YR5/8 明赤褐色 粘雑砂 粘性あり
- 4 5YR5/6 明赤褐色 粘雑砂 粘性あり
炭化物を含む(棺内埋土)



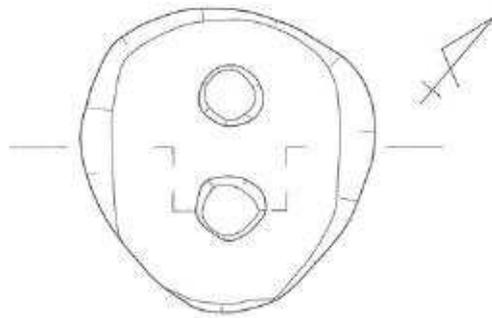
第18図 木棺墓 (SK-W2)



第19図 A7号墳 出土土器



第20図 A7号墳 出土鉄器



- 1 7.5YR5/6 明褐色 極細砂 粘性あり
- 2 2.5YR4/4 に近い赤褐色 シルト質極細砂
- 3 2.5YR4/6 明赤褐色 シルト質極細砂
- 4 5YR4/6 赤褐色 シルト質極細砂
- 5 5YR5/6 明赤褐色 シルト質極細砂 ごくわずかに炭化物を含む
- 6 2.5YR3/4 明赤褐色 シルト質極細砂
- 7 2.5YR4/6 赤褐色 極細砂-中細砂 粘性あり
- 8 5YR4/6 赤褐色 シルト質中細砂
- 9 5YR5/6 明赤褐色 シルト質中細砂
- 10 5YR5/6 明赤褐色 シルト質中細砂 炭化物を含む



第21図 土壌 (SK-W1)

出土遺物

土器 (第22図、モノクロ写真図版1)

土壇底部で破碎された甕 (3) が出土した。3は体部内外面にハケを施し、口縁部内面にも横方向のハケを施す。外面全体に煤が付着している。

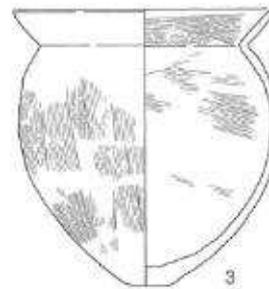
SK-W3 (図版第23図、カラー写真図版14)

位置と検出状況

A7号墳主体部の東側、標高144mに位置し、表土直下で検出した。北尾根稜線上にあたり、SK-W2、A7号墳主体部と近接する。A7号墳主体部とは主軸方向が同一である。

形態・規模

平面形は隅丸長方形を呈し、長さ2.2m、幅90cm、検出面からの深さ最大40cmを測る。土壇横断面は台形を呈し、土壇底部は東側がやや窪むが、それ以外はほぼ水平である。土層断面から棺の痕跡は確認できなかった。埋土に若干の炭化物を含む。



第22図 土壇墓 (SK-W2)
出土土器

出土遺物

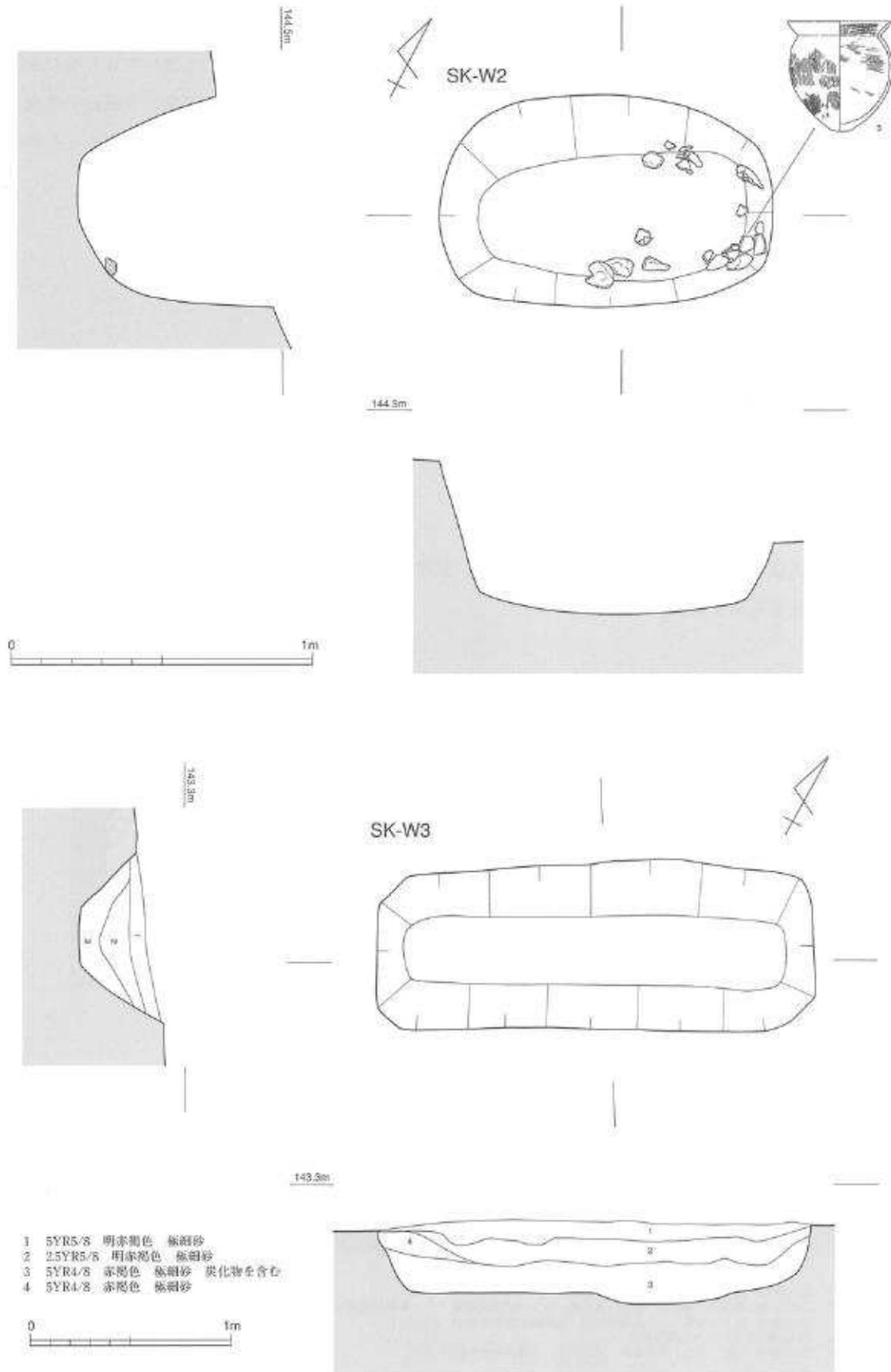
図化できる遺物は出土しなかった。

A8号墳

墳丘 (第14・25図、カラー写真図版13)

位置と検出状況

A8号墳は西地区を形成する北尾根と南尾根が分岐する標高146mの地点に立地する。平野部との比高差は約23mである。8号墳の東側40mには若水古墳がある。確認調査時に墓壇と遺物が検出されていた。主体部の北側では土器棺 (SP-W1)、溝 (SD-W1、2)、南側で築石遺構 (SX-W3)、西側で土壇4基 (SK-W4、5、6、7)、溝2条 (SD-W4、5) を検出している。



第23図 土墳墓 (SK-W2・3)

平坦面

明確な墳丘はないが、主体部の山側にわずかな深さの区画溝がある。また、7号墳との間にも溝（S D-W3）があり、墓域として8号墳の空間が確保されている。6号墳、7号墳と比べて8号墳の主体部周辺は5m四方ほどの広い平坦面となる。しかし、続く13～15号墳のような、明確に平坦地を造成している痕跡はない。これは、8号墳周辺が尾根の頂上部にあたり、もともと傾斜が緩やかであったためと考えられる。

埋葬施設

主体部（第24図、カラー写真図版13）

平坦地の東端で木棺墓を1基検出した。

棺

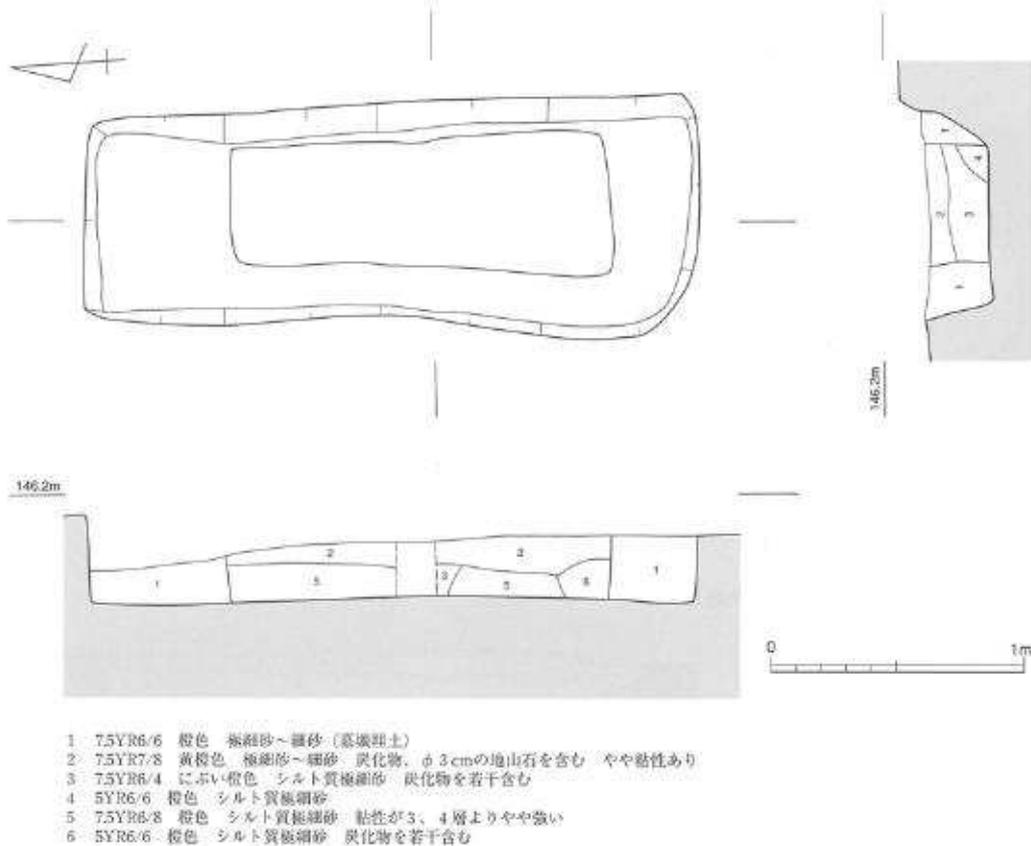
棺の主軸は尾根と直交方向に置く。平面及び土層断面から、墓域の中央のやや東よりに木棺の痕跡を確認した。検出した木棺の痕跡は、長さ1.5m、幅が北小口で46cm、南小口で58cmとなり、やや南小口が広い。深さは26cmを測る。木棺の側壁は垂直であり、棺の底も水平であることから箱形木棺であったと考えられる。

墓域

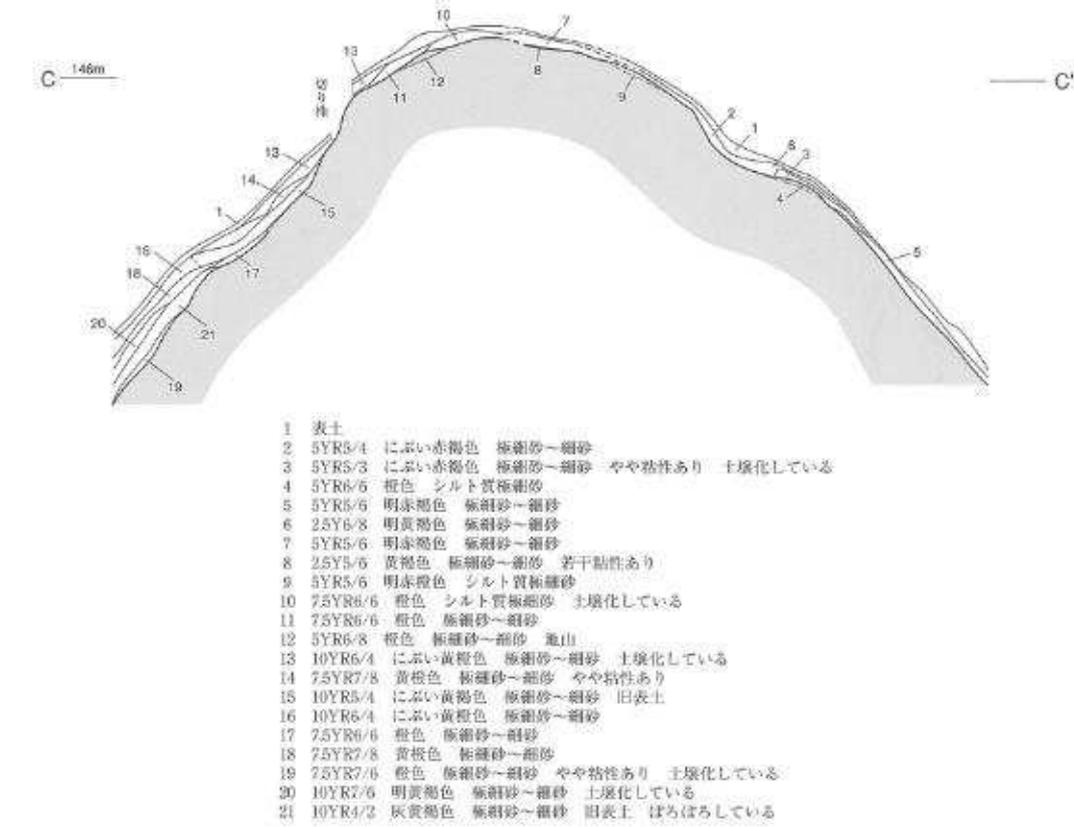
墓域は階丸長方形で長さ2.42m、南辺の幅98cm、北辺の幅80cm、検出面からの深さ36cmを測る。墓域の横断面は台形を呈する。

出土遺物

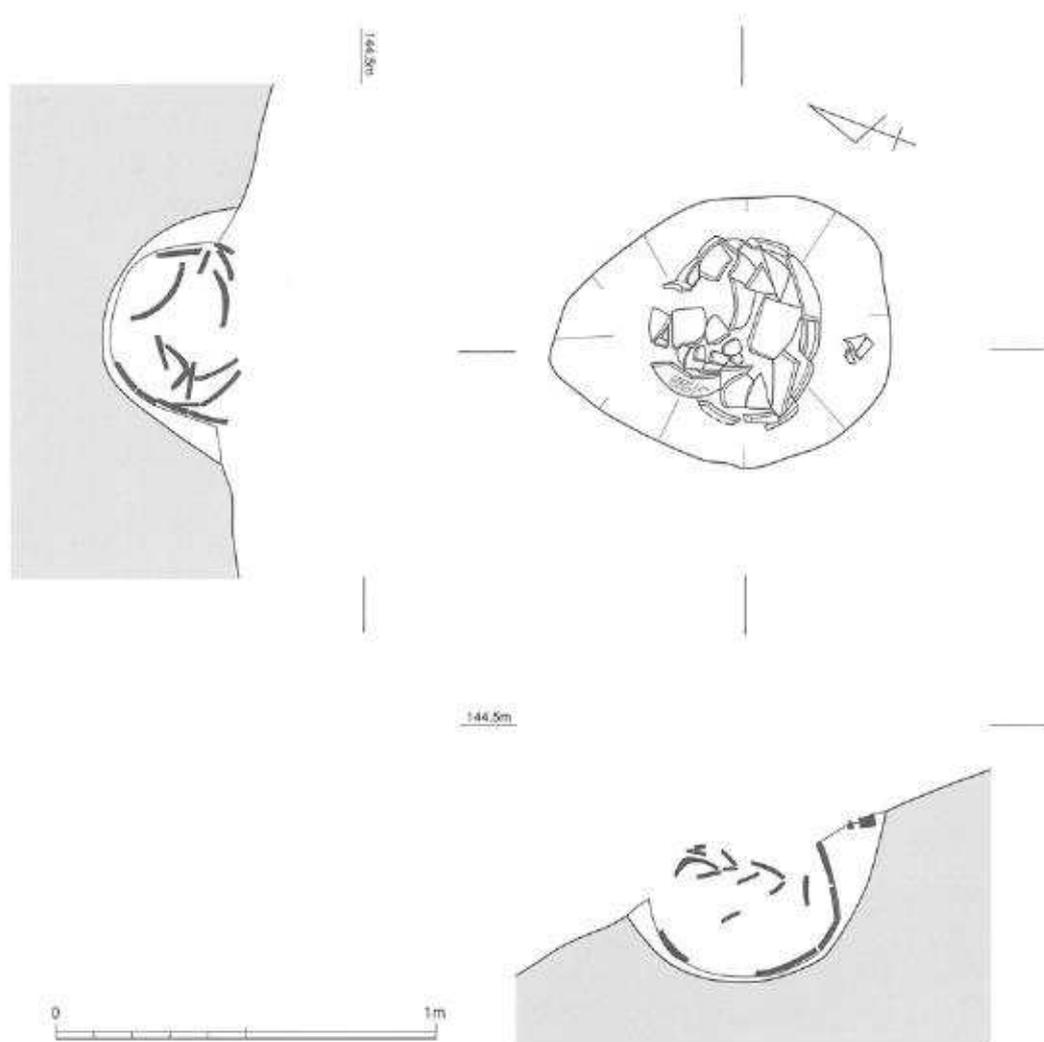
遺物の出土はない。



第24図 A 8号墳 主体部



第25図 A 8号墳 墳丘土層断面



第26図 土器棺 (SP-W1)

土器棺

SP-W1 (第26図、カラー写真図版13)

位置と検出状況

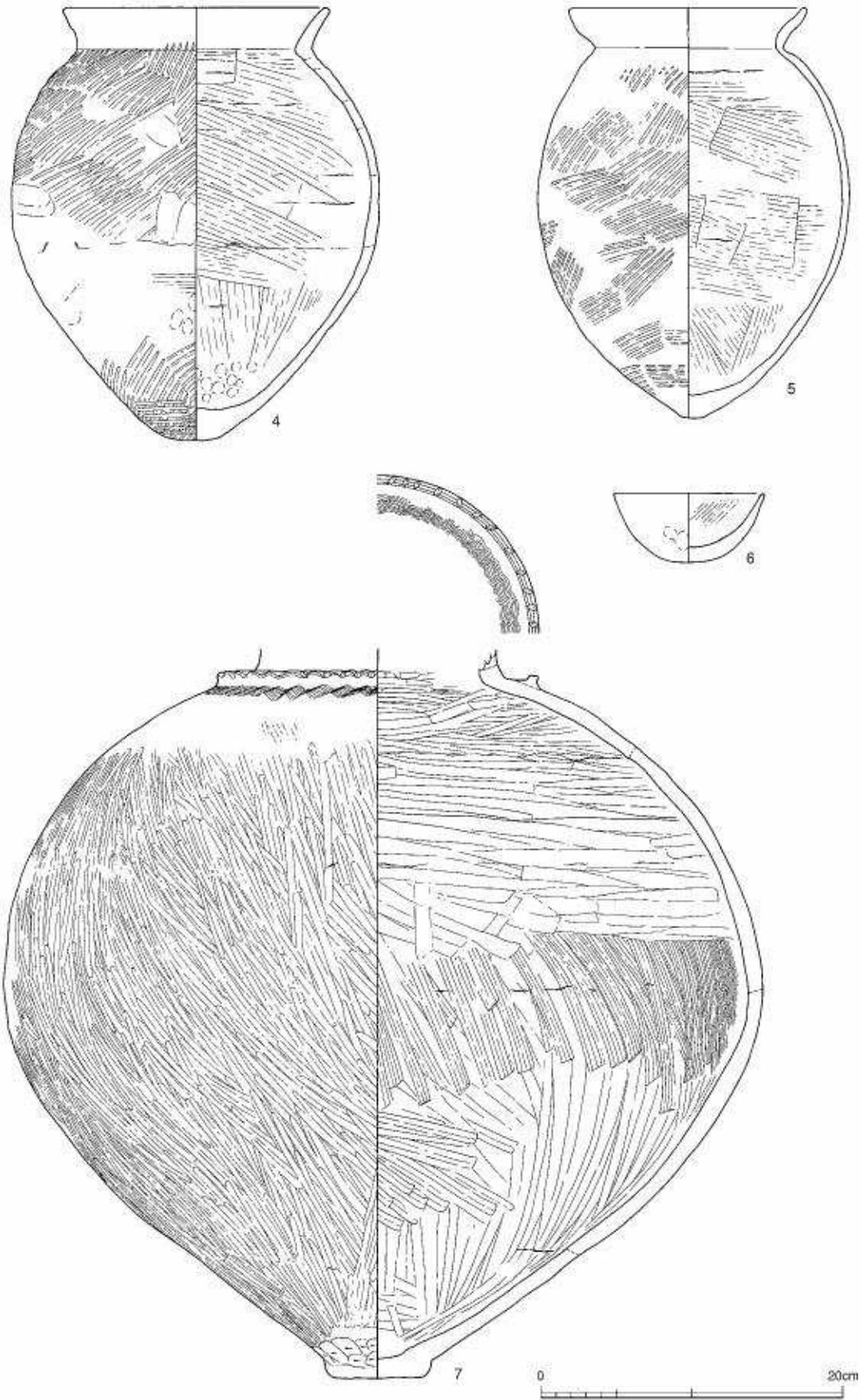
A 8号墳主体部の北側、標高144mに位置し、表土直下で検出した。今回調査した北尾根北斜面で確認できた唯一の墓となる。

形態・規模

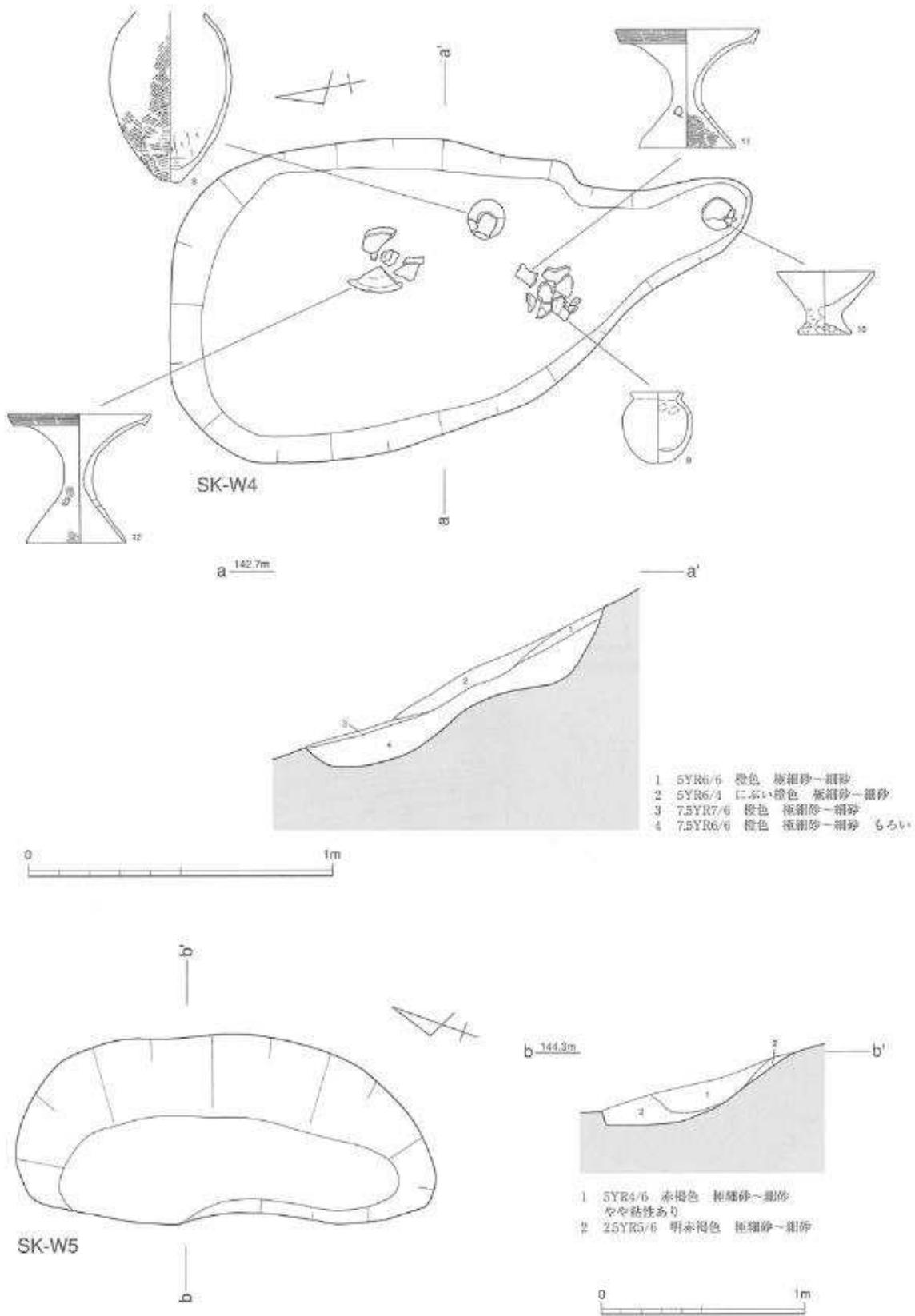
墓壙の平面形は卵形を呈し、長軸90cm、短軸70cm、検出面からの深さ38cmを測る。墓壙の横断面は半円形を呈し、土器棺がちょうど納まる程度の墓壙である。

土器棺

墓壙内には壺(7)と甕(4、5)を組み合わせた土器棺が納められていた。棺本体となるのは、口頸部を欠いた壺で、復元した高さ49cm、体部の最大径50cmを測る大型のものである。甕は、壺の頸部を欠いた場所を覆うように蓋として使用されている。検出したとき棺の上部は、土圧などにより壊れていたが下部は原形を留めていた。棺内には土が充満しており、骨や副葬品などの出土はなかった。



第27図 土器棺 (SP-W1) 出土土器



第28図 土壌 (SK-W4・5)

出土遺物

土器（第27図、モノクロ写真図版1）

甕（4、5）、鉢（6）、壺（7）が出土している。4、5は、体部外面にタタキを施し、内面にはハケを施す。外面に煤付着。6は手づくねで成形し、外面はナデ、内面はハケで調整を行う。7は体部の上部に突帯を1条貼り付け、その両側に縞描波状文を施した後、突帯端面に刻み目を加えている。体部外面はヘラミガキを行い、体部内面はハケとヘラケズリを施す。底部は直径7cmほどありユビナデで仕上げる。

土壌

SK-W4（第28図、カラー写真図版14）

位置と検出状況

A 8号墳主体部の西側、標高141～142mに位置する。表土直下で検出した。

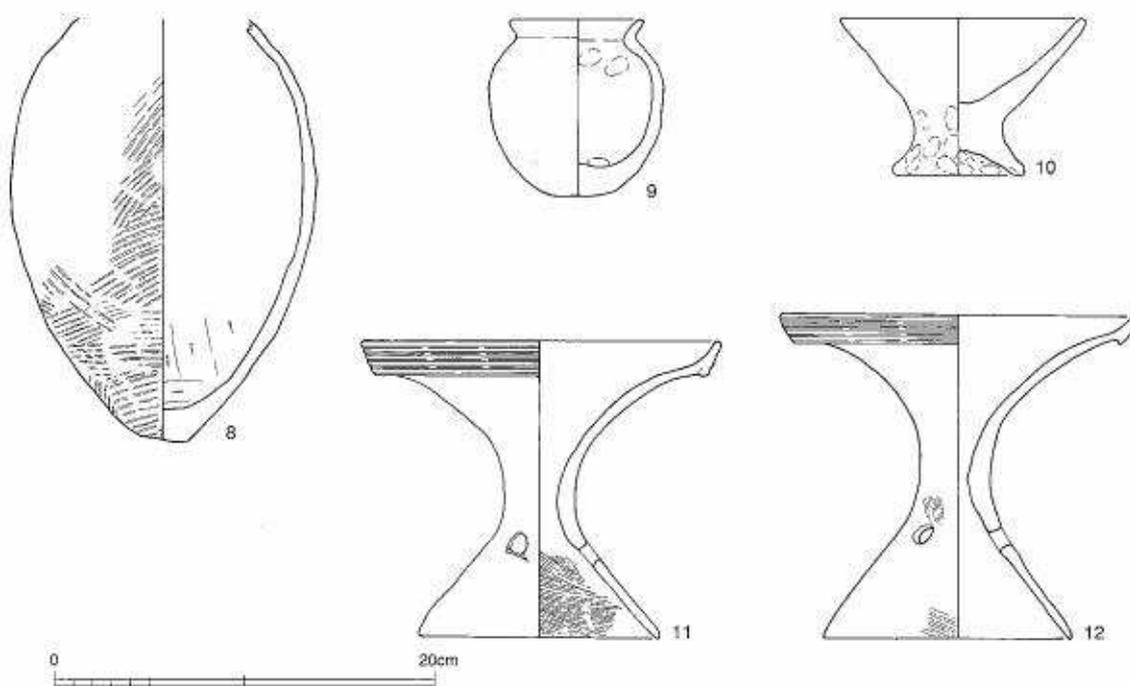
形態・規模

斜面を浅く掘りこみ、南北に長い不整形な平面形をしている。南北で長さ1.85m、東西で幅80cmを測る。土壌は等高線に平行するように掘られ、横断の形が階段状になる。検出面からの深さは、上段で約15cm、下段で12cmを測る。上段からはまとまって土器が出土している。これらの土器はおそらく上段に置かれていたものと考えられる。

出土遺物（第29図、モノクロ写真図版2）

土器

甕（8、9）、鉢（10）、器台（11、12）が出土した。8は細長い体部をし、外面にタタキ、内面にヘラケズリを施す。外面に煤付着。9は高さ9.4cmの小型の甕で手づくねで成形を行い、ナデで仕上げる。体部内面にはユビオサエの痕跡が残る。10は台付きの鉢で手づくねで成形を行い、ナデで仕上げる。脚



第29図 土壌（SK-W4）出土土器

部には内外面ともにユビオサエの痕跡が残る。11、12は口縁部端面に擬凹線を施す。脚部内外面にはハケメを施す。透かし穴は3箇所開けられている。

S K-W 5 (第28図、カラー写真図版14)

位置と検出状況

A 8号墳主体部の西側、標高144mに位置する。

形態・規模

平面形は南北に長い楕円形を呈し、長さ2m、幅90cm、検出面からの深さ16cmを測る。土壌は等高線に平行するように浅く掘られている。

出土遺物

遺物の出土はない。

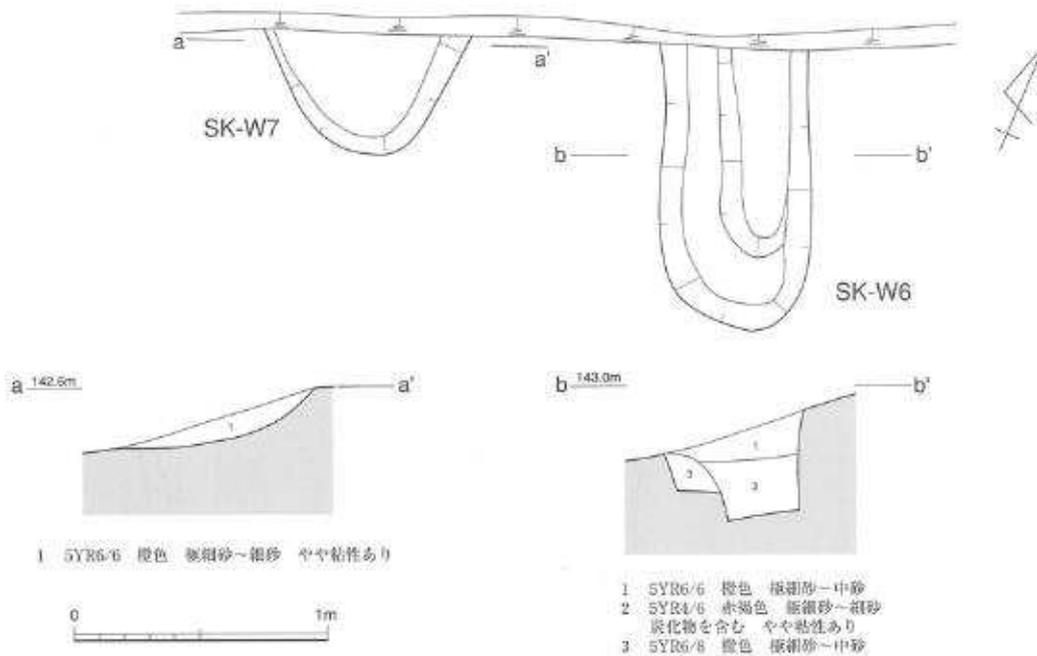
S K-W 6 (第30図、カラー写真図版14)

位置と検出状況

A 8号墳主体部の西南側斜面下方、標高143mに位置する。検出場所は13号墳に近く、南尾根上である。S K-W 7とは主軸方向が平行する。遺構は確認トレンチで一部が破壊されていた。

形態・規模

遺構の北部分は確認トレンチによって破壊されていた。平面形は隅丸長方形を呈し、検出した南北の長さ1.1m、幅54cmを測る。土壌横断面は東側が1段深く掘り込まれ方形を呈し、検出面からの深さ40cmを測る。西側は段まで深さ20cmとなる。このことから、土壌の東側は木棺を納めるために、1段深く



第30図 土壌 (S K-W 6・7)

掘られた可能性が考えられる。しかし、平面及び断面では明確な木棺の痕跡を確認できなかった。

出土遺物

遺物の出土はない。

S K-W 7 (第30図、カラー写真図版14)

位置と検出状況

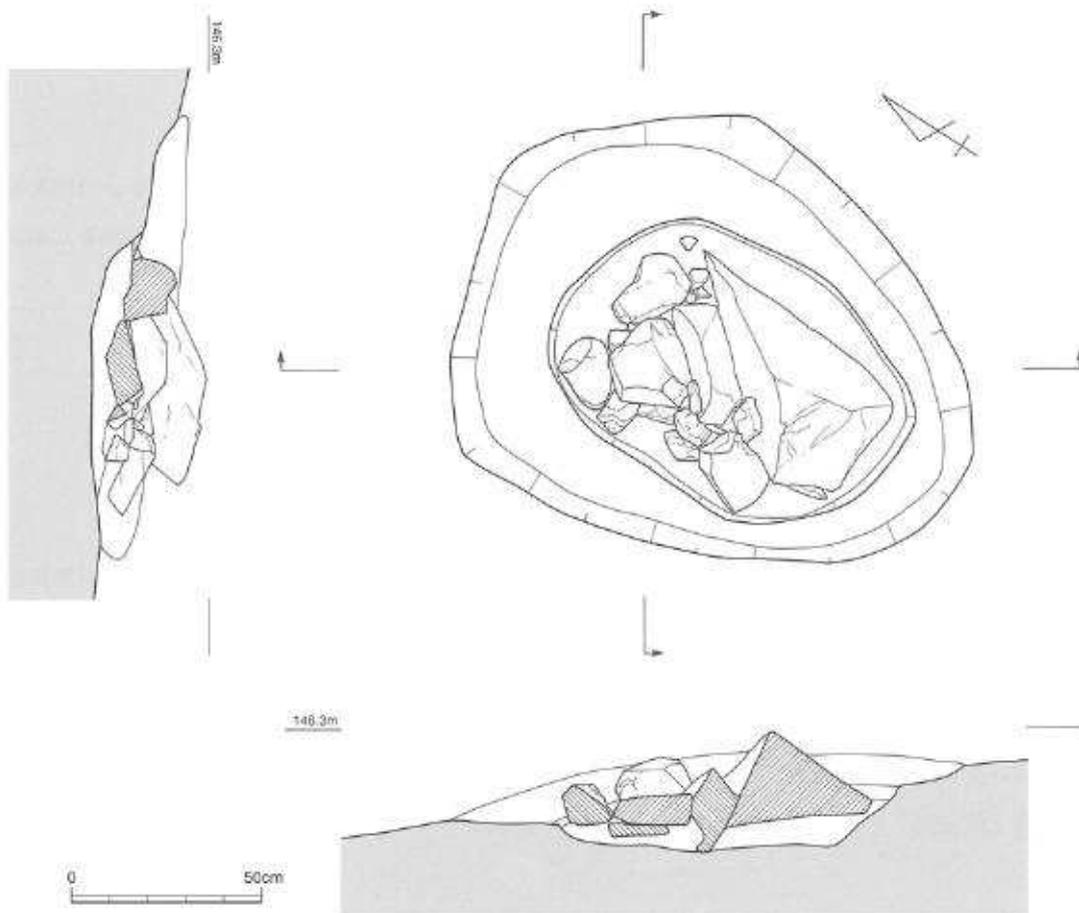
A 8号墳主体部の西南側、標高142mに位置する。検出場所は13号墳に近く、南尾根上である。S K-W 6とは主軸方向が平行する。遺構は確認トレンチで一部が破壊されていた。

形態・規模

遺構の北部分は確認トレンチによって破壊されていた。検出した平面形は楕円形を呈し、検出した南北の長さ50cm、幅74cm、深さ10cmを測る。土壌の横断面は皿状を呈する。土壌底部は平均して平坦な面となる。

出土遺物

遺物の出土はない。



第31図 集石 (S X-W 3)

集石遺構

S X-W 3 (第31図、カラー写真図版14)

位置と検出状況

A 8号墳主体部の南側、標高146mに位置する。主体部のある平坦面の南端で検出した。調査前から石材の一部が地表面に露出していた。遺構は表土直下で検出した。

形態・規模

平面形は不正形な楕円形を呈し、南北の長さ1.4m、東西の最大幅1.2mを測る。土壌の中央部に石が集められており、その部分が一段深く掘り下げられている。掘り下げられた部分の平面形は、隅丸長方形を呈し、長さ94cm、幅68cm、深さ5～15cmを測り、底はほぼ水平である。集石部分は長さ70cm、幅40cmの大きめの石を南側に置き、その北側に20～30cm前後の石を乱雑に置いている。石は一部2段に積み重ねられているが、規則的な積み方ではない。

出土遺物

遺物の出土はない。

溝

S D-W 1 (第33図、カラー写真図版15)

位置と検出状況

A 8号墳主体部の北側、標高146mに位置する。表土直下で検出した。溝の北側には土器棺(S P-W 1)がある。

形態・規模

検出した長さ3.25m、幅1.1m、深さ10cmを測る。横断面は皿状を呈し極浅い溝である。山側をカットするように掘り、溝の底部に水平面を作っている。すぐ北側に土器棺(S P-W 1)があるため、それを区画する溝の可能性もある。

出土遺物

遺物の出土はない。

S D-W 2 (第33図、カラー写真図版15)

位置と検出状況

A 8号墳主体部の北側、標高144mに位置する。表土直下で検出した。今回調査した北尾根北斜面において唯一検出した溝である。

形態・規模

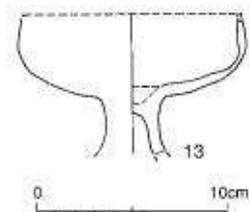
検出した長さは1.2m、幅45～50cm、深さ5cmを測る。横断面は皿状を呈し、極浅い溝である。溝は等高線と平行になるように掘られている。

出土遺物(第32図、モノクロ写真図版2)

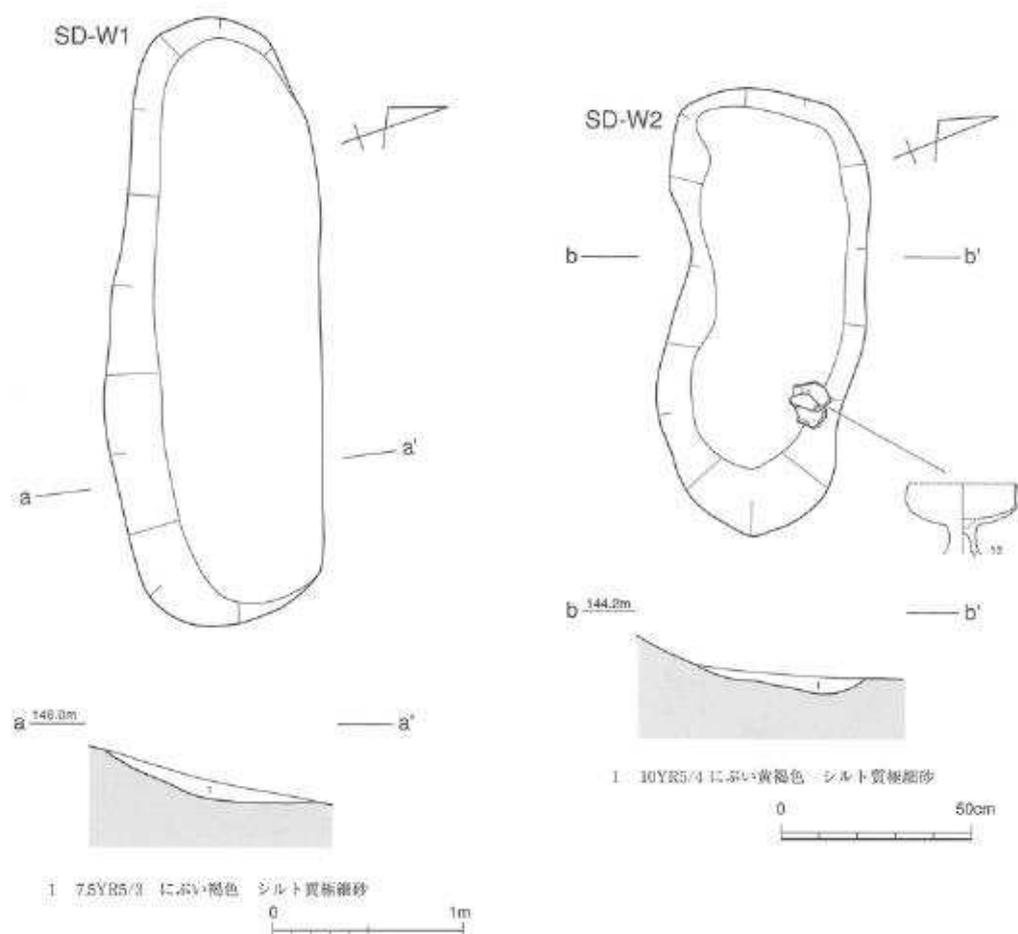
土器

高杯(13)が出土している。13はやや内湾ぎみに立ち上がる杯部を持つ。

摩滅がはげしいため調整は不明である。



第32図 溝(S D-W 2)
出土土器



第33図 溝 (SD-W1・2)

SD-W3

位置と検出状況

A 8号墳主体部の西側、標高145～146mに位置する。A 8号墳とA 7号墳の間に位置し、両古墳を区画する溝である。遺構は表土直下で検出した。溝の一部は確認トレンチによって破壊されていた。溝の西側には等高線が広がる緩やかな傾斜地となり平坦面となる。そのため、平坦面に古墳の存在が予想できたが遺構は検出できなかった。

形態・規模

平面形は南東方向に膨れる緩やかな弧状を呈する。北尾根の稜線に直交する方向であり、長さ6.5m、幅50～70cmを測る。溝は後線頂上部から両端に向かって深くなる。頂上部で深さ7cm、両端では深さ10cm前後となる。

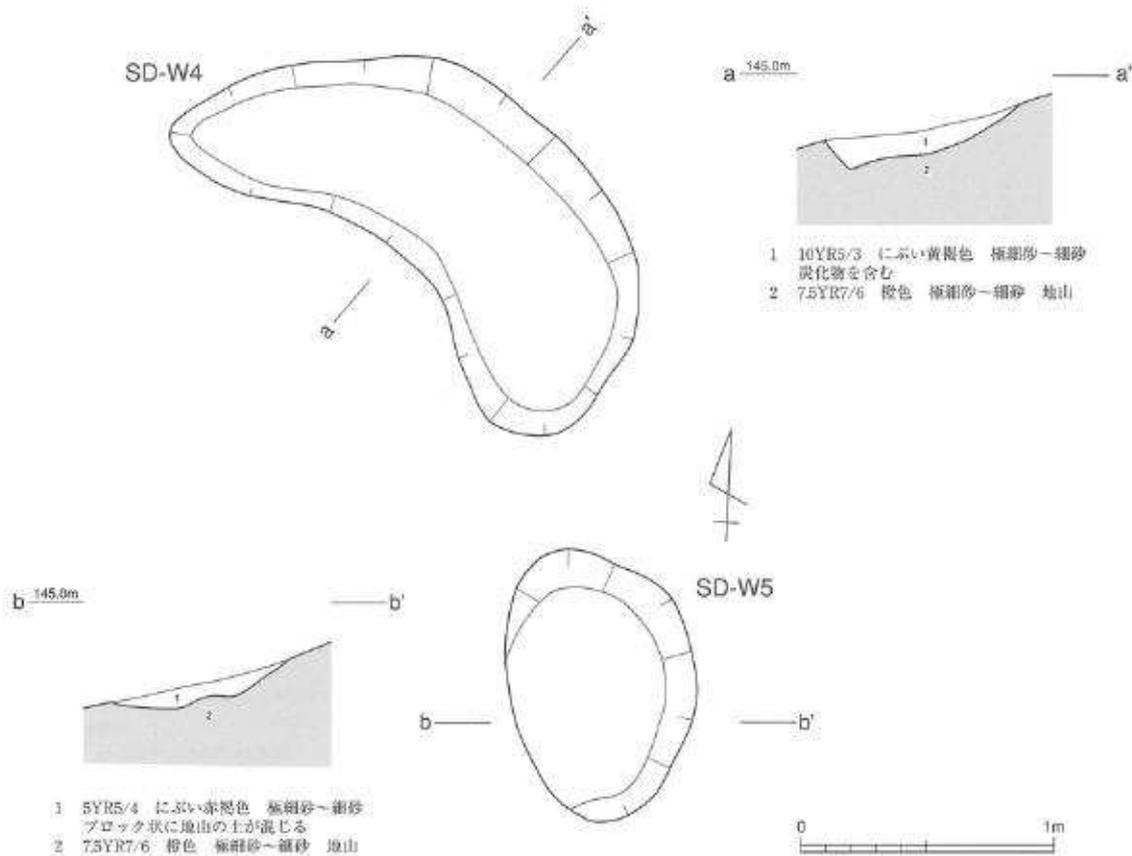
出土遺物

遺物の出土はない。

SD-W4 (第34図)

位置と検出状況

A 8号墳主体部の西南側、標高145mに位置し、南尾根上にあたる。SD-W5と隣接するため、一



第34図 溝 (SD-W4・5)

連の溝であった可能性がある。遺構は表土直下で検出した。

形態・規模

平面形は北東方向に膨れる弧状を呈し、長さ2m、幅80cmを測る。横断面は台形を呈し、溝底部が水平となる。検出面から底部までの深さ14cmを測る。埋土に若干炭化物が混じる。

出土遺物

遺物の出土はない。

SD-W5 (第34図)

位置と検出状況

A8号墳主体部の西南側、標高145mに位置し、南尾根上にあたる。SD-W4と隣接するため、一連の溝であった可能性がある。遺構は表土直下で検出した。

形態・規模

平面形は楕円形を呈し、長軸1.1m、短軸80cm、深さ8cmを測る。横断面は皿状を呈し、溝底部が水平となる。埋土の地山土がブロックで混じるため人為的に埋め戻された可能性がある。

出土遺物

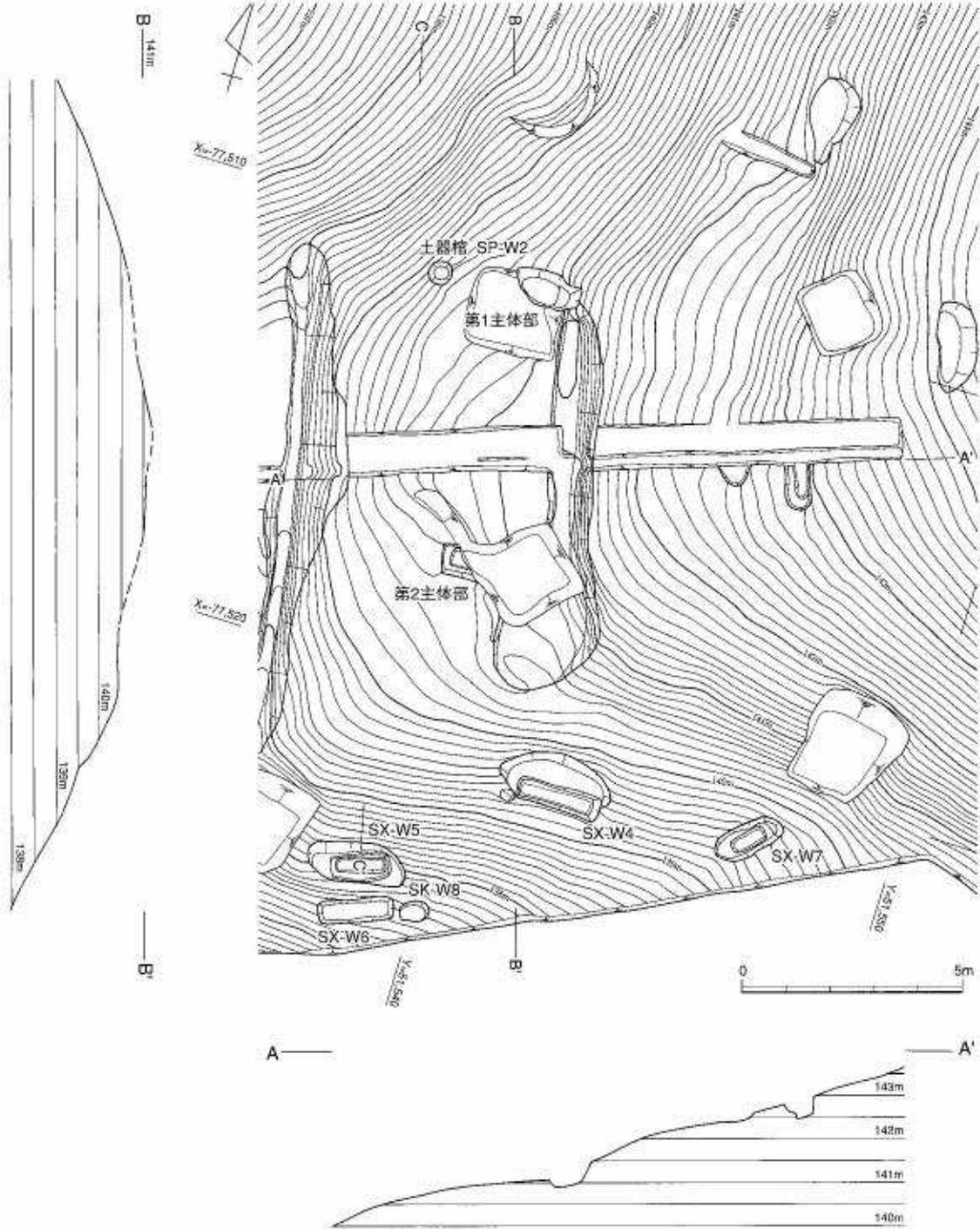
遺物の出土はない。

A13号墳

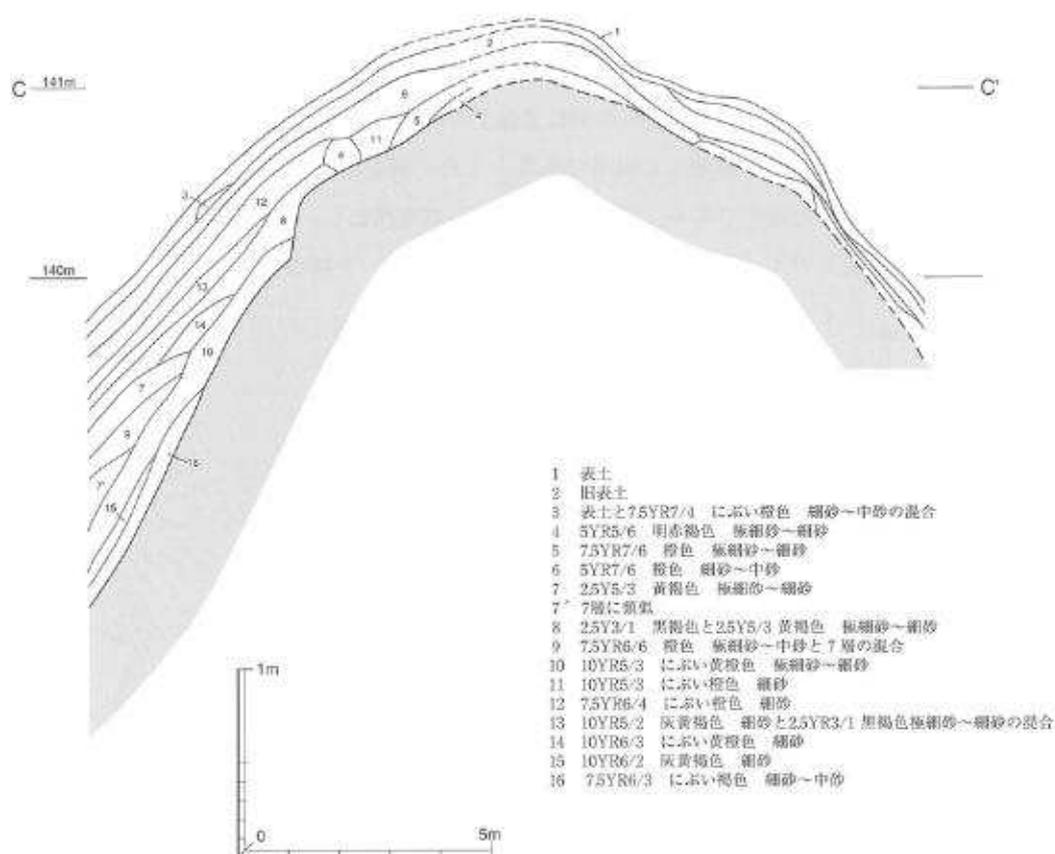
墳丘（第35・36図、カラー写真図版15）

位置と検出状況

A13号墳は南尾根上の標高140～141mの所に立地する。平野部からの比高差は約17mである。確認調査において平坦面と区画溝を確認した場所である。また、調査前の測量によっても平坦面を確認でき、古墳の存在が予想された場所である。平坦面で主体部2基を検出し、その北側で土器棺（SP-W2）、南側で木棺墓（SX-W4、5、6、7）、土溝（SK-W8）を検出した。



第35図 A13号墳 平面・断面



第36図 A13号墳 墳丘土層断面

平坦面

方形を意識した長さ5m、幅10mの平坦面を造成しているが、両側辺部では造成の痕跡は確認できなかった。基本的に自然地形を利用したと考えられる。墳丘を造成した明確な痕跡はないが、主体部周辺に5m四方ほどの平坦な面がある。平坦面の東西には斜面を掘り込んだ区画溝があり、A14号墳が西へと続く。

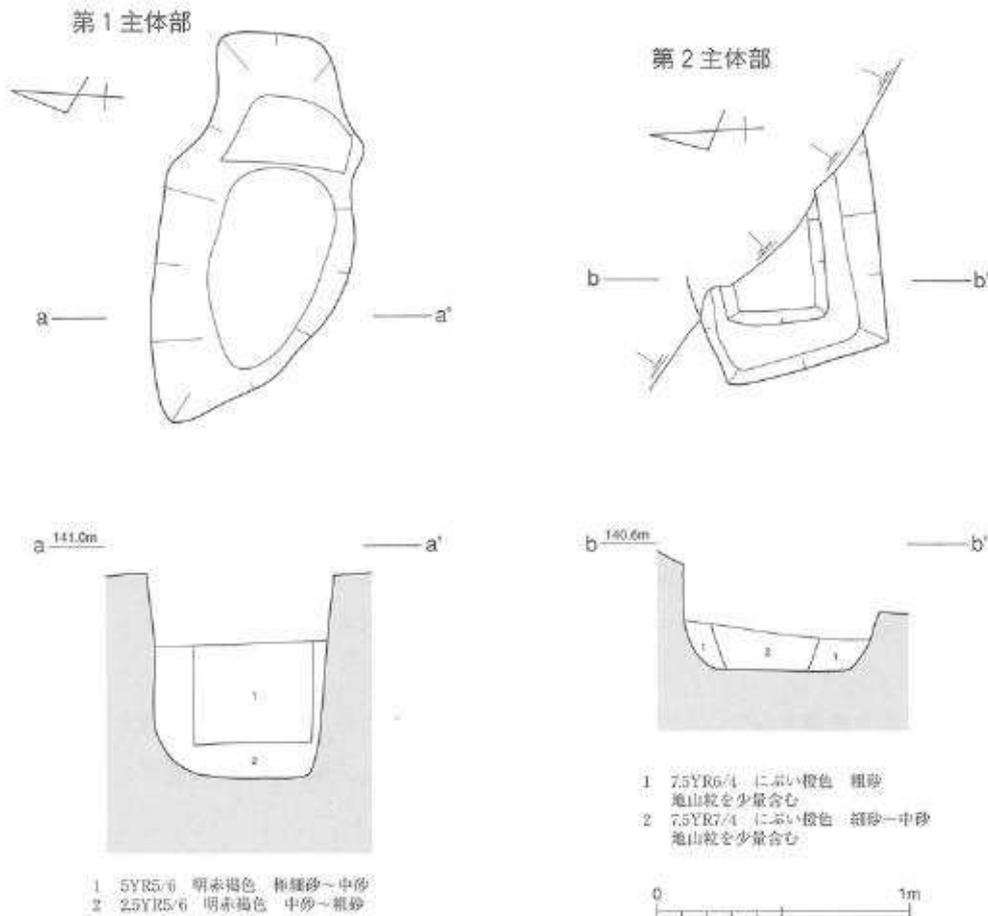
区画溝

南尾根稜線に直行する南北の溝により区画されている。溝は直線的に掘られており、その長さは検出した底部で9mを測る。溝の横断面は台形をなし底部における最小幅は20cmである。尾根稜線部分での標高は140.9mであり、平坦面より15cm低い。溝は自然堆積で覆われており、遺物の出土はない。

出土遺物

土器（第38図、モノクロ写真図版3）

墳丘包含層から高杯（16）、甕（17）、杯蓋（18）が出土している。16は有段口縁の高杯である。杯部みの出土である。口縁端部端面に擬凹線を施す。17は甕底部である。体部外面に縦方向のヘラミガキを施す。18は須恵器杯蓋である。直径16cmを測り、扁平なつまみがつく。



第37図 A13号墳 第1・第2主体部

埋葬施設

主体部は2基検出した。どちらも木棺墓である。第1主体部は平坦面の北端にあり、区画溝の北端と接している。遺構の南側は攪乱により破壊されている。第2主体部は平坦面の南端に位置し、東半分を攪乱により破壊されている。第1主体部、第2主体部共に尾根稜線と平行方向に主軸を置く。

第1主体部（第37図、カラー写真図版15）

棺

平面では検出できなかったが、土層断面で木棺の痕跡を確認した。検出した木棺の痕跡は、幅50cm、深さ40cmを測る。木棺の長さは不明である。木棺底部と墓壙底部との間には15cmほどの隙間がある。そのため、木棺を据える時に墓壙内の整地を行った可能性が考えられる。木棺の側壁は垂直であり、棺の底も水平であることから箱形木棺であったと考えられる。

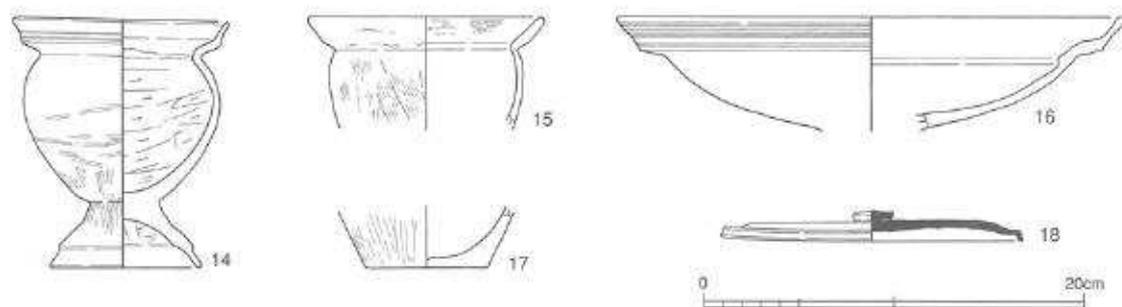
墓壙

墓壙は攪乱によりいびつな平面形をしている。検出した長さ1.5m、幅80cm、検出面からの深さ80cmを測る。墓壙横断面は長方形を呈し、底は水平である。

出土遺物（第38図、モノクロ写真図版3）

土器

墓壙から台付き甕（14）が出土している。14は複合口縁部の屈曲が緩く、形骸化したものとなる。体部外面にヘラミガキ、内面は頸部までヘラケズリを施す。外面に煤が付着している。



第38図 A13号墳 主体部・包含層出土土器

第2主体部（第37図、カラー写真図版16）

棺

平面及び土層断面で木棺の痕跡を確認した。検出した木棺痕跡は、長さ50cm、幅40cm、深さ最大18cmを測る。棺の幅は底部では32cmを測り、木棺痕跡の横断面は台形を呈する。

墓壇

墓壇は攪乱により破壊されているが、検出した平面形から隅丸長方形であったと考えられる。検出した長さは南辺82cm、西辺65cm、北辺30cm、深さは最大42cmを測る。墓壇横断面は台形を呈し、底は水平である。

出土遺物（第38図、写真図版3）

墓壇西端の棺検出面よりやや上で甕（15）が出土している。15は小型の甕で体部外面にハケメ、口縁内面に横方向のハケメを施す。

土器棺

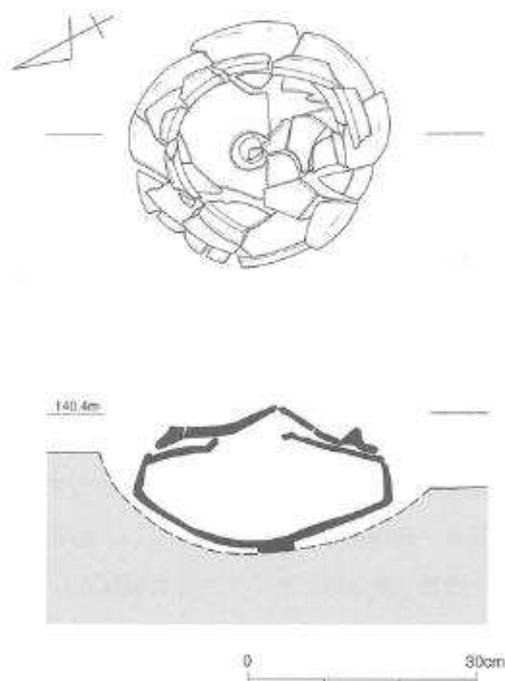
SP-W2（第39図、カラー写真図版18）

位置と検出状況

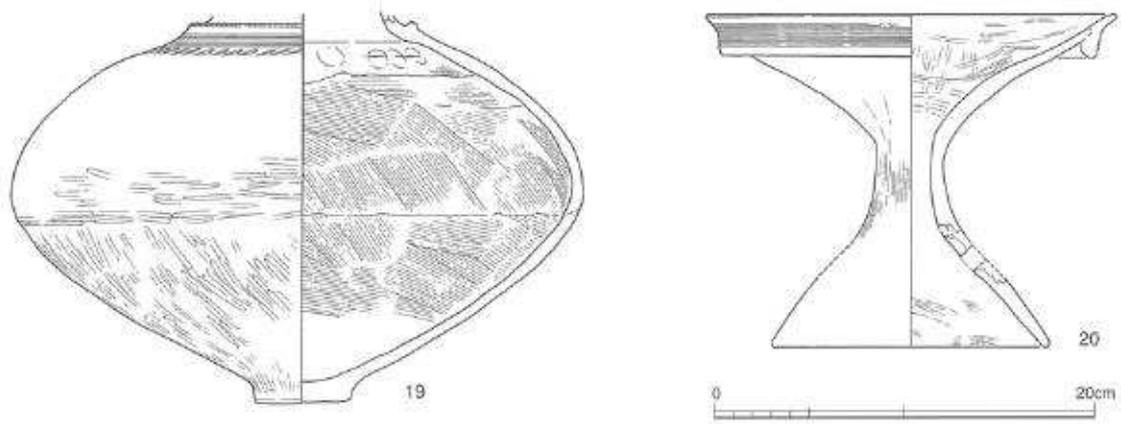
A13号墳第1主体部の西側、標高140mに位置する。主体部のある平坦面上にはなく、谷へ向かう斜面上で検出した。谷は表土の下に黒ボクが堆積している。土器棺は黒ボクの掘削中に検出した。谷の堆積土であるため、旧表土との区別が難しく、土器棺身を検出した時点で土器棺墓であることを認識した。そのため、土壇の上部はすでに掘削してしまっていた。

形態・規模

墓壇の平面形は円形を呈し、直径43cmを測る。残存する墓壇の深さは14cmである。横断面は皿状を呈し、土器棺がちょうど納まる程度の墓壇である。



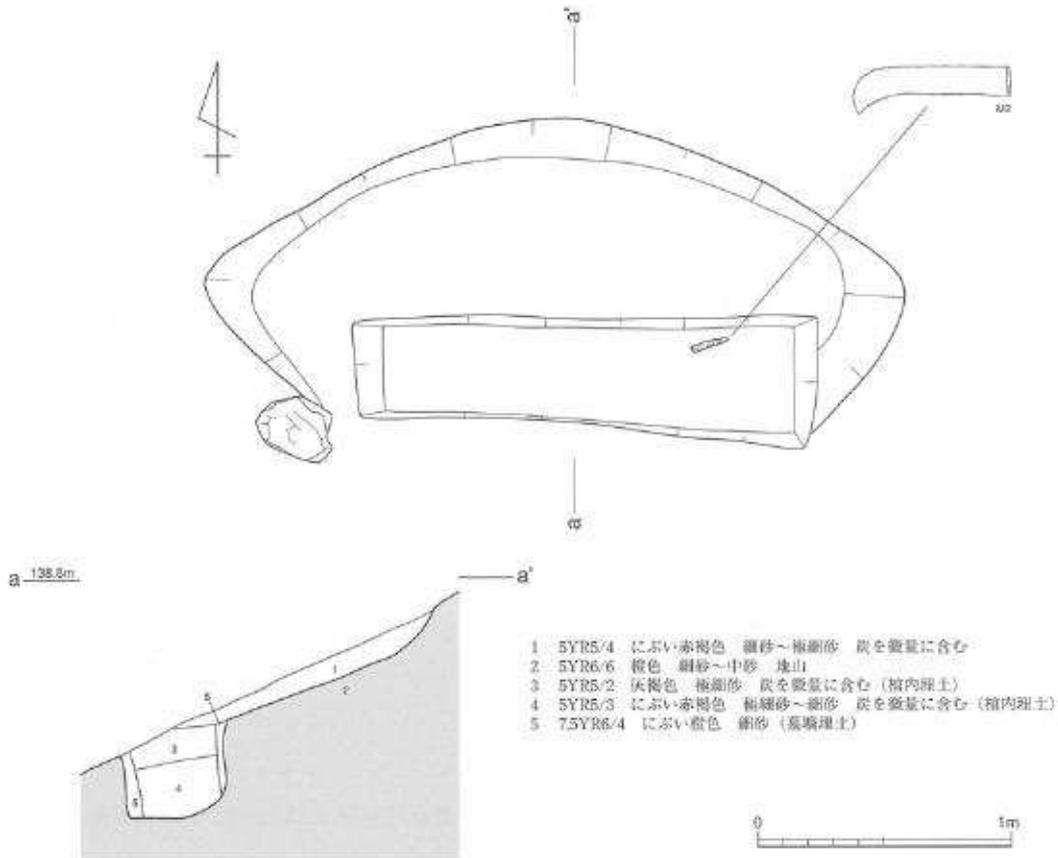
第39図 土器棺（SP-W2）



第40図 土器棺 (SP-W2) 出土土器

土器棺

墓墳内には壺と器台を組み合わせた土器棺が納められていた。棺本体となるのは、口頭部を欠いた壺(19)で、復元した高さは22cm、体部最大径は30cmを測る。器台(20)は上下を逆さにし、壺の上に蓋として使用されている。土器棺を検出したとき棺上部は、土圧などにより押しつぶされていたが下部は原形を留めていた。棺内には土が充満しており、骨や副葬品などの出土はなかった。



- 1 5YR5/4 にぶい赤褐色 細砂～極細砂 炭を微量に含む
- 2 5YR6/6 褐色 細砂～中砂 埴山
- 3 5YR5/2 灰褐色 極細砂 炭を微量に含む (棺内埋土)
- 4 5YR5/3 にぶい赤褐色 極細砂～細砂 炭を微量に含む (棺内埋土)
- 5 7.5YR6/4 にぶい藍色 細砂 (墓墳埋土)

第41図 木棺墓 (SX-W4)

出土遺物（第40図、モノクロ写真図版4）

土器

壺（19）、器台（20）が出土している。19は、体部上部に突帯を1本貼り付け刻み目をつける。その下に直線文、列点文を施す。体部外面はヘラミガキを行い、内面はハケを施す。20は口縁部端部を下方に拡張し、口縁部に凹線を施す。体部外面はハケメ、内面はヘラミガキを施し、脚部には円形の透かし孔を開ける。

木棺墓

S X—W 4（第41図、カラー写真図版16）

位置と検出状況

A13号墳第2主体部の南東側標高138mに位置し、表土直下で検出した。斜面に築かれており、墓域・棺の主軸方向は等高線と平行方向である。

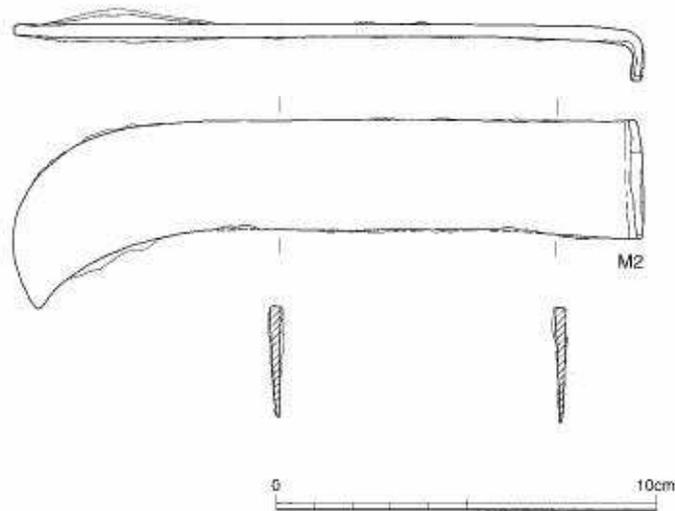
形態・規模

山側を削って平坦面を造成しており、その平面形は楕円形を呈している。検出面での掘削部分は長さ2.8m、幅最大1.2mを測る。検出面から段差までの深さは18cmである。掘削面の南端に埋葬施設が存在し、棺の痕跡を検出した。棺は長さ1.64m、東小口幅42cm、西小口幅34cm、深さ38cmを測る。棺内北東部から鉄鎌が出土している。木棺の側壁は垂直であり、棺の底も水平であることから箱形木棺であったと考えられる。

出土遺物

鉄器（第42図、モノクロ写真図版4）

棺内から鉄鎌（M2）が出土している。M2は全長16.6cm、幅3cmの曲刃鎌である。柄が装着される側の端部は短く折り返されている。



第42図 木棺墓（S X—W 4）出土鉄器

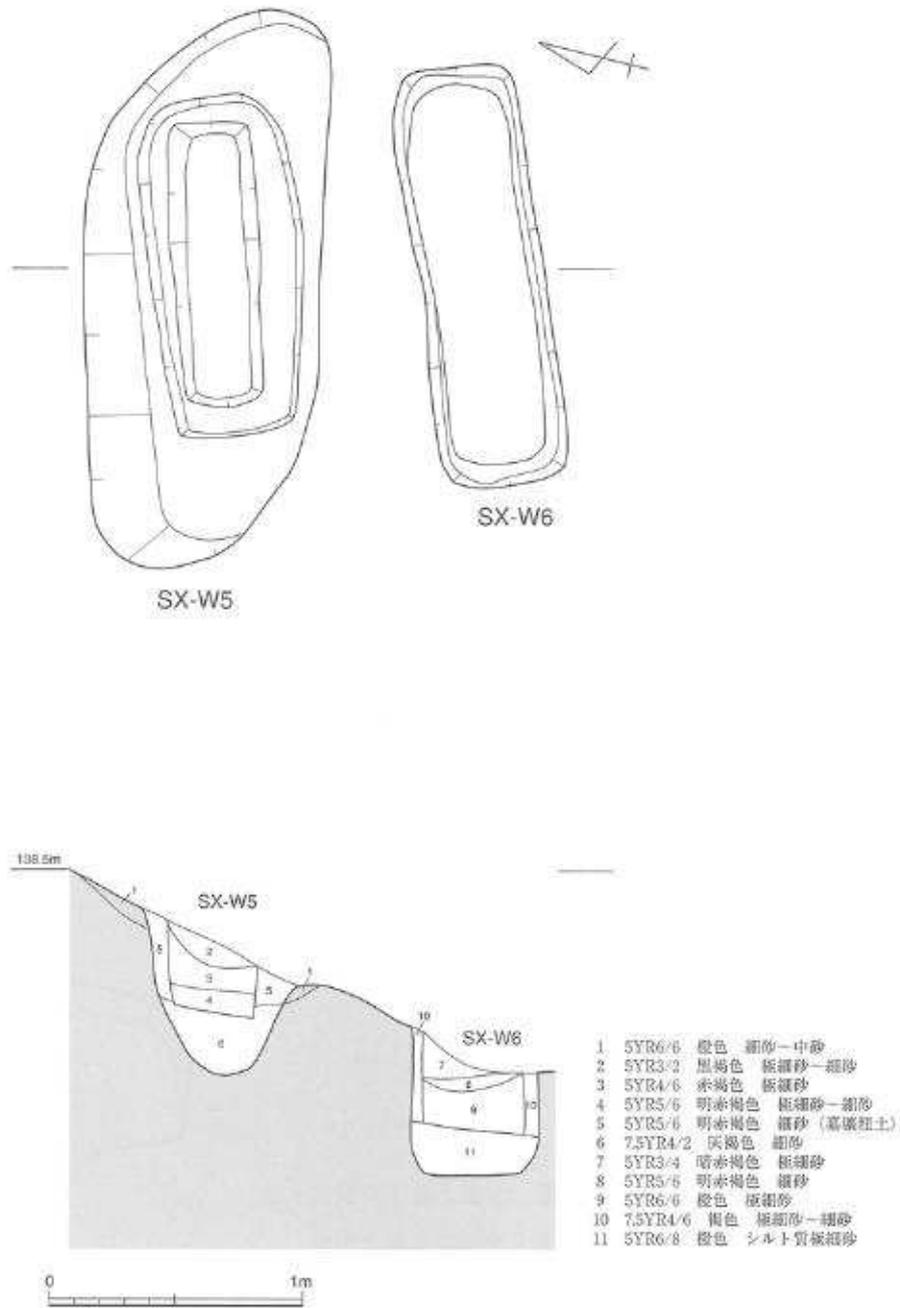
S X—W 5（第43図、カラー写真図版17）

位置と検出状況

A13号墳主体部の南側標高138mに位置し、表土直下で検出した。斜面に築かれており、墓域・棺の主軸方向は等高線と平行方向である。

形態・規模

墓域の平面形は隅丸長方形で、長さ1.35m、幅56cm、検出面からの深さ35cmを測る。平面及び土層断面から木棺の痕跡を確認した。検出した木棺の痕跡は、長さ105cm、幅24cm、深さ30cmである。側壁は垂直であり、棺の底もほぼ水平であるため箱形木棺であったと考えられる。棺内埋土に若干の炭化物が含まれる。墓域の周囲には長さ2.3m、幅93cmの平面楕円形に近い掘削部分がある。



第43図 木棺墓 (S X-W 5・6)

出土遺物

遺物の出土はない。

S X-W 6 (第43図、カラー写真図版17)

位置と検出状況

A13号墳主体部の西側標高137.5mに位置し、表土直下で検出した。斜面に築かれており、棺の主軸

方向は等高線と平行方向である。

形態・規模

墓壇の平面形は隅丸長方形で、長さ1.7m、幅50cm、検出面からの深さ56cmを測る。平面及び土層断面から木棺の痕跡を確認した。検出した木棺の痕跡は、長さ1.53m、幅40cm、深さ25cmである。側壁は垂直であり、棺の底もほぼ水平であるため箱形木棺であったと考えられる。

出土遺物

遺物の出土はない。

S X-W 7 (第44図)

位置と検出状況

A 7号墳主体部の西側標高139.5mに位置し、表土直下で検出した。斜面に築かれており、棺の軸方向は等高線と直交方向に近い。

形態・規模

墓壇の平面形は隅丸長方形で、長さ1.64m、幅70cm、検出面からの深さ30cmを測る。平面及び土層断面から木棺の痕跡を確認した。検出した木棺の痕跡は、長さ83cm、幅34cm、深さ30cmである。側壁は垂直であり、棺底もほぼ水平であるため箱形木棺であったと考えられる。

出土遺物

遺物の出土はない。

土壇 (第45図、カラー写真図版18)

S K-W 8

位置と検出状況

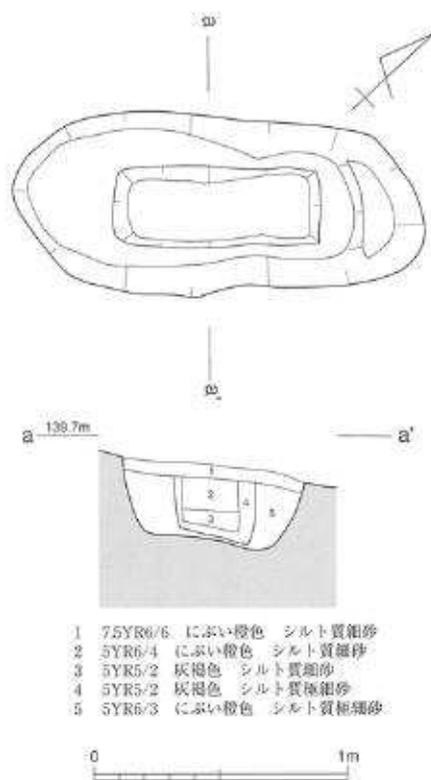
S X-W 6の東側標高137.5mに位置し、表土直下で検出した。斜面に築かれており、土壇の軸方向は等高線と平行方向となる。

形態・規模

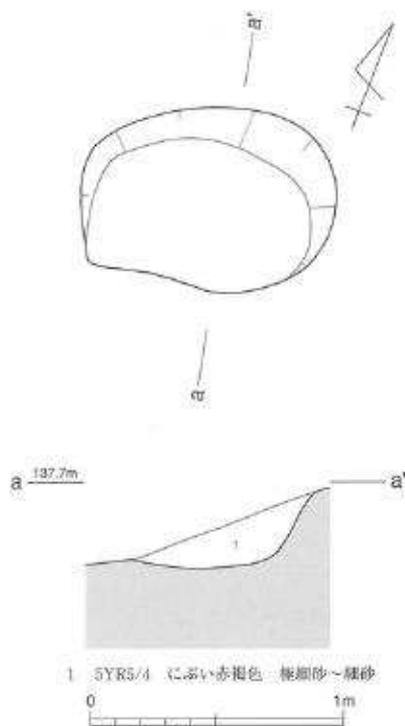
土壇の平面形は楕円形を呈し、長軸1m、短軸74cm、深さ20cmを測る。平面および土層断面から木棺などの痕跡は確認できなかった。土壇は、底が水平になるように掘られており長さ70cm、幅50cmほどの平坦面となる。

出土遺物

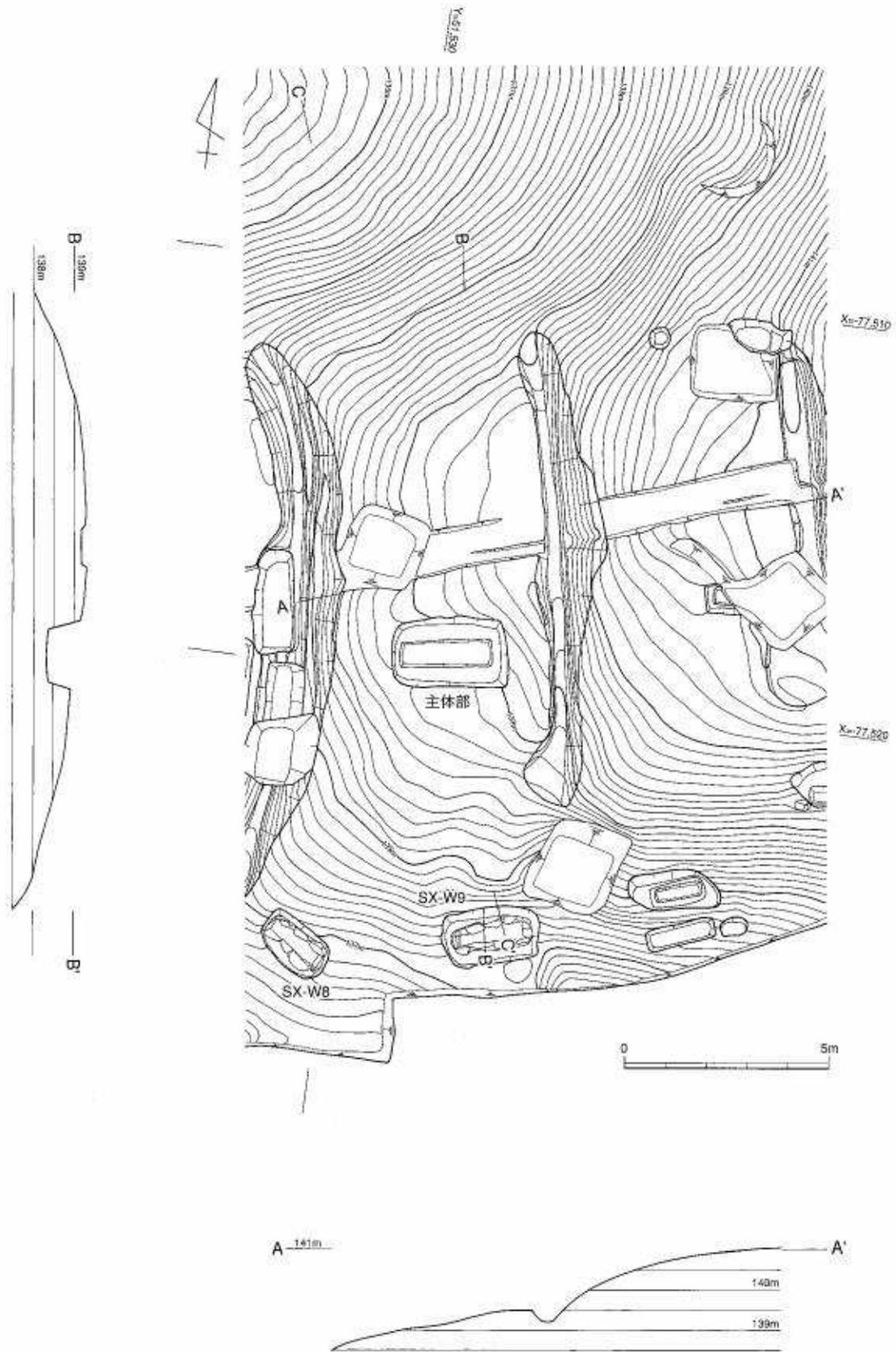
遺物の出土はない。



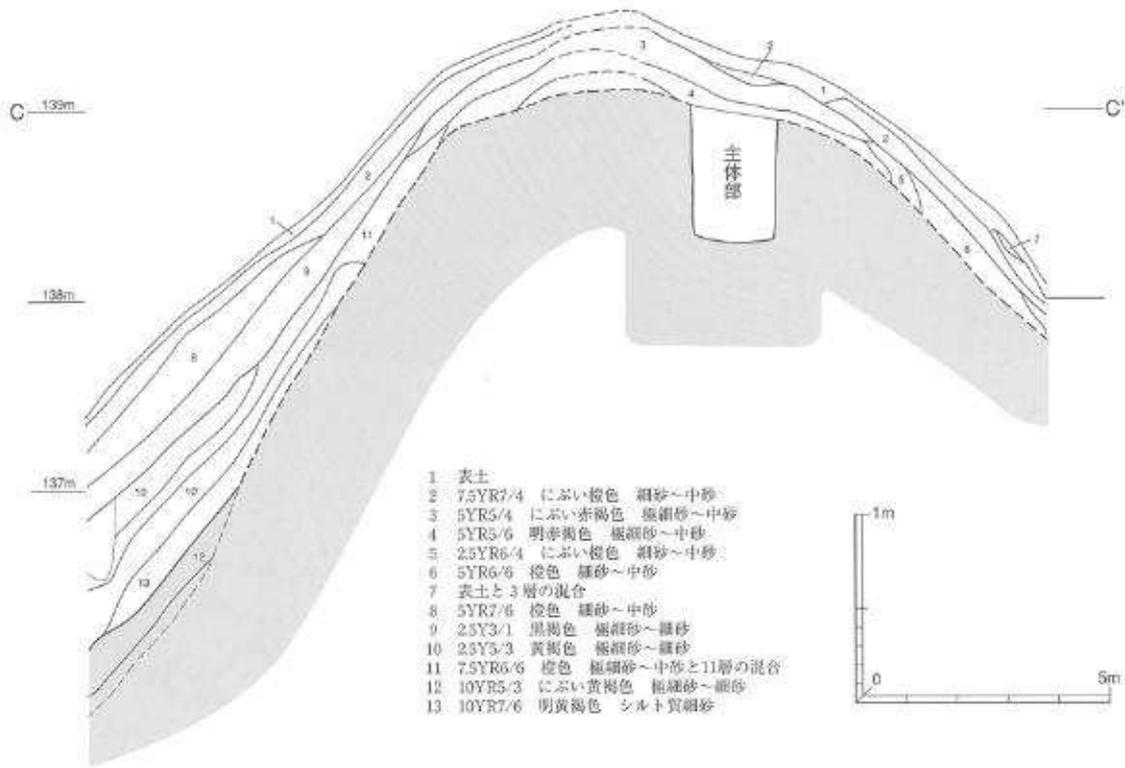
第44図 木棺墓 (S X-W 7)



第45図 土壇 (S K-W 8)



第46図 A14号墳 平面・断面



第47図 A14号墳 墳丘土層断面

A14号墳

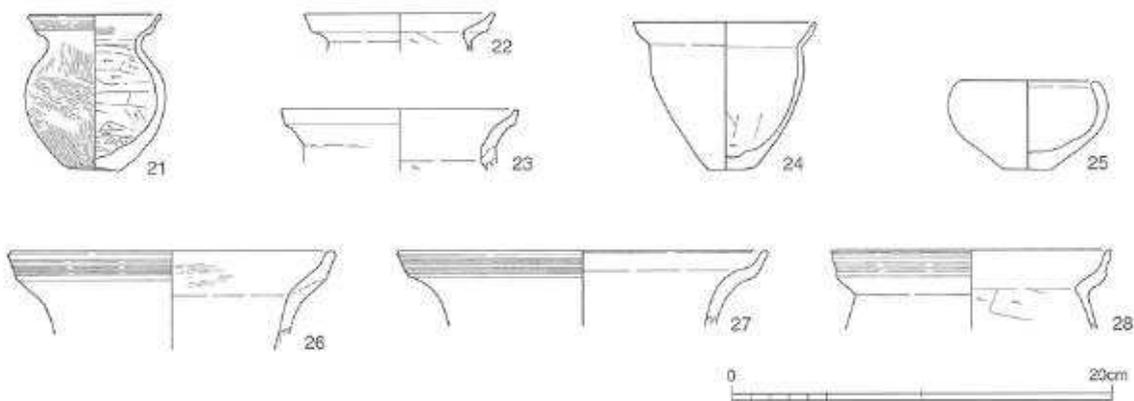
墳丘（第46・47図、カラー写真図版19）

位置と検出状況

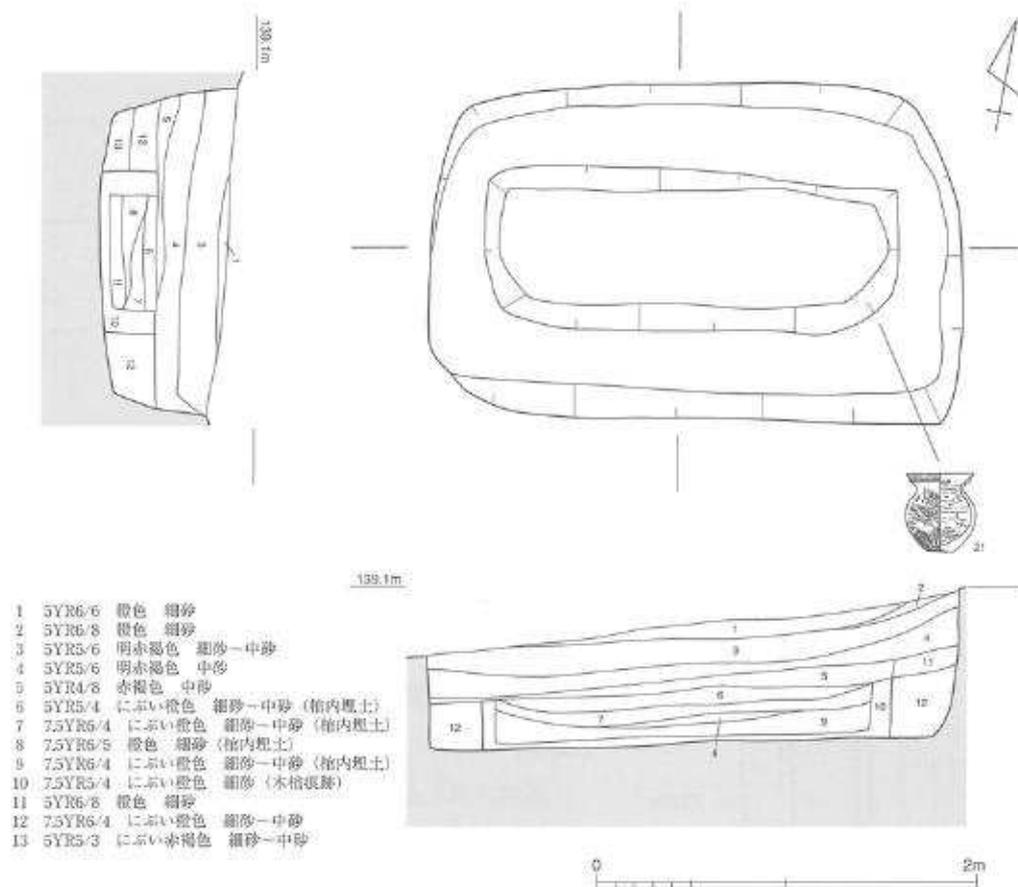
A14号墳は南尾根上の標高138～139mの所に立地する。確認調査において平坦面と区画溝を確認した場所である。また、調査前の測量によって平坦面を確認でき、古墳の存在が予想された場所である。平坦面で主体部1基を検出し、その南側斜面で石棺墓2基（SX-W8、9）を検出した。

平坦面

尾根に直行する区画溝によって、東西約5m、南北幅約10mを測る平坦地が確保されている。しかし、



第48図 A14号墳 主体部・南西部斜面出土土器



第49図 A14号墳 主体部

両側辺部に関しては造成された痕跡が認められないため、基本的には自然地形を利用した墳丘である。

区画溝

14号墳は南尾根稜線に直行する南北の溝により区画されている。溝は直線的に掘られており、その長さは検出した底部で約12mを測る。溝の横断面は上層部がU字形となり、さらにその中央部が一段深くなる二段掘り状の断面となる。尾根稜線部分での標高は139.2mであり、平坦面より約20cm低い。溝は自然堆積で覆われており、遺物の出土はない。

出土遺物 (第48図、モノクロ写真図版5)

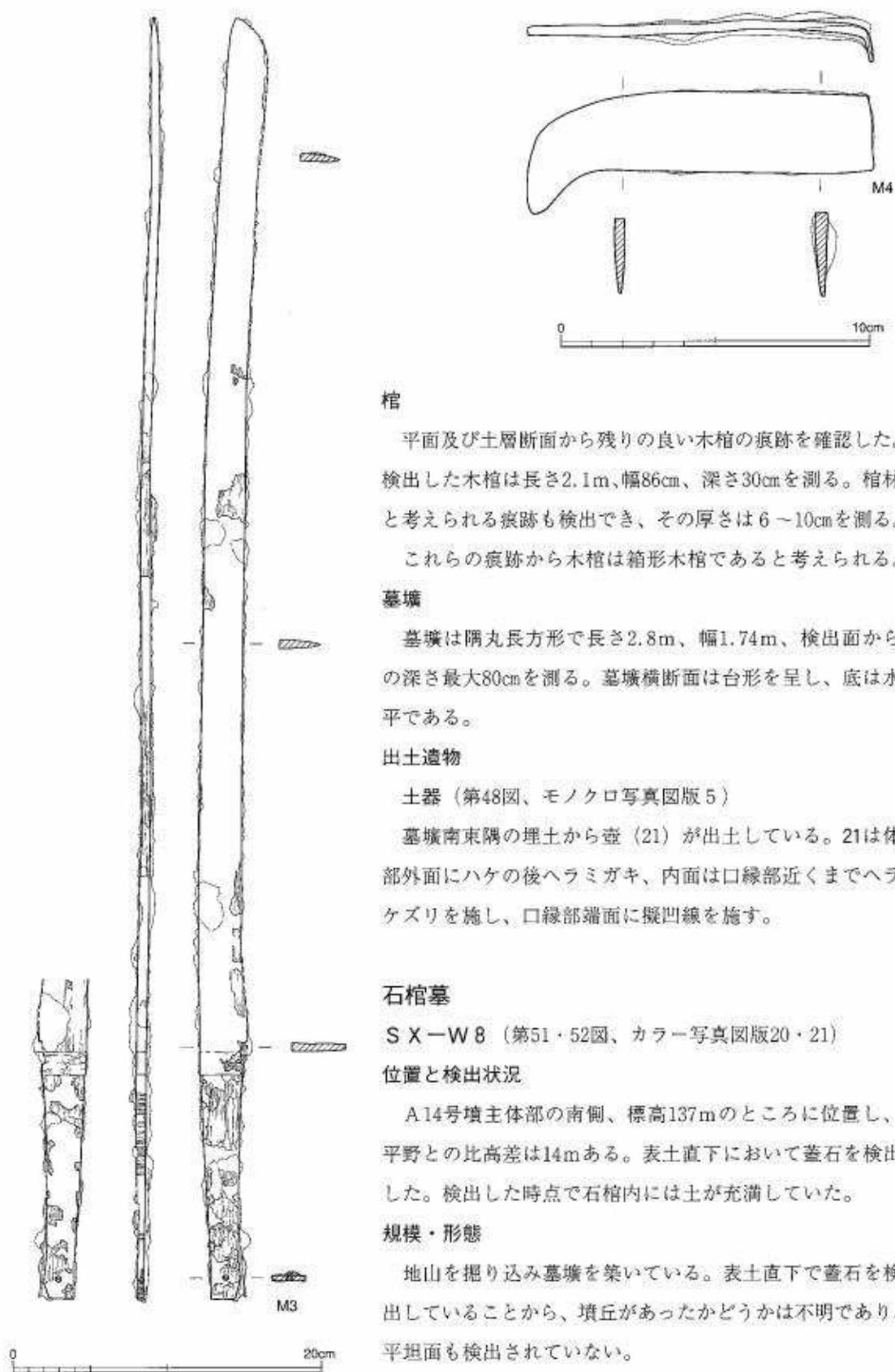
土器

墳丘南西部斜面から、甕 (22~24, 28)、鉢 (25)、壺 (26, 27) が出土している。22, 23は口縁部端部をつまみあげる。内面は頸部までヘラケズリを施す。24は小型の甕であり、内面の底部にヘラケズリを施す。28は口縁部端面に擬凹線を施し、内面は頸部までヘラケズリを施す。25は口縁部が内湾する。摩滅が激しく調整は不明である。26, 27は口縁部端面に擬凹線を施す。

埋葬施設

主体部 (第49図、カラー写真図版19)

平坦面中央南寄りでも木棺墓1基を検出した。木棺は尾根稜線と平行方向に主軸を置く。



第50図 石棺墓 (S X-W 9) 出土鉄器

棺

平面及び土層断面から残りの良い木棺の痕跡を確認した。検出した木棺は長さ2.1m、幅86cm、深さ30cmを測る。棺材と考えられる痕跡も検出でき、その厚さは6～10cmを測る。これらの痕跡から木棺は箱形木棺であると考えられる。

墓壇

墓壇は隅丸長方形で長さ2.8m、幅1.74m、検出面からの深さ最大80cmを測る。墓壇横断面は台形を呈し、底は水平である。

出土遺物

土器 (第48図、モノクロ写真図版5)

墓壇南東隅の埋土から壺(21)が出土している。21は体部外面にハケの後ヘラミガキ、内面は口縁部近くまでヘラケズリを施し、口縁部端面に擬凹線を施す。

石棺墓

S X-W 8 (第51・52図、カラー写真図版20・21)

位置と検出状況

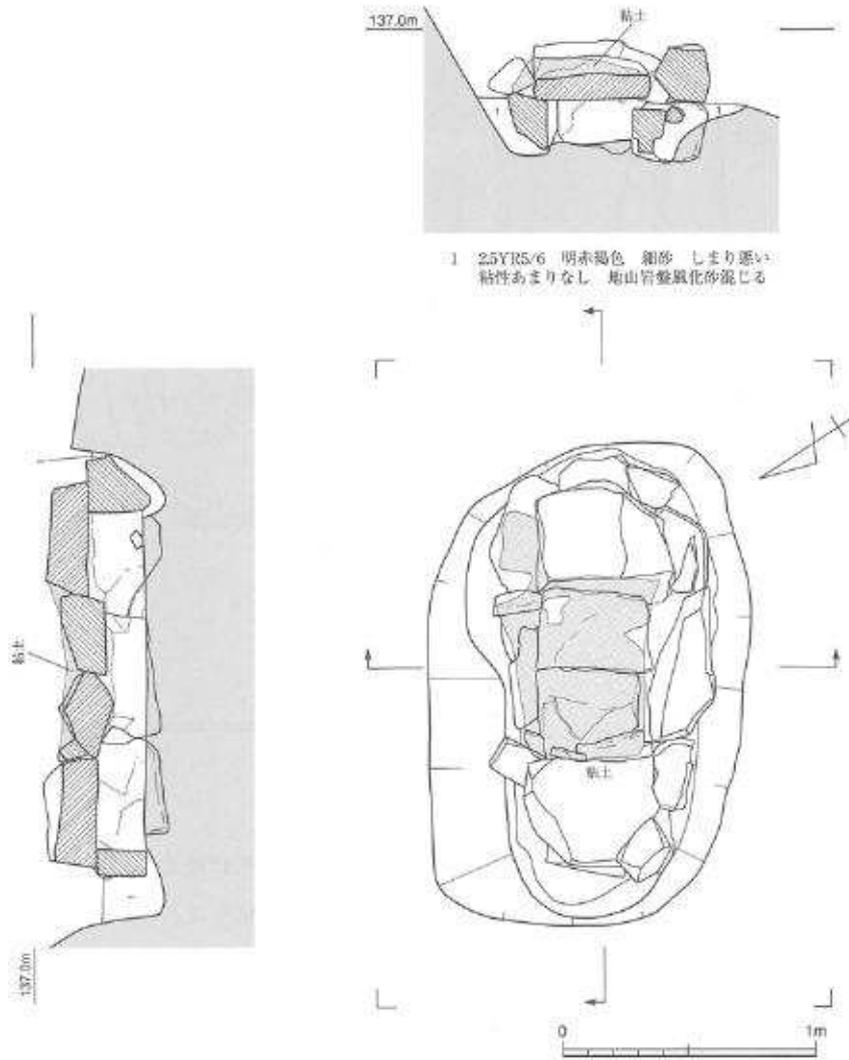
A 14号墳主体部の南側、標高137mのところに位置し、平野との比高差は14mある。表土直下において蓋石を検出した。検出した時点で石棺内には土が充満していた。

規模・形態

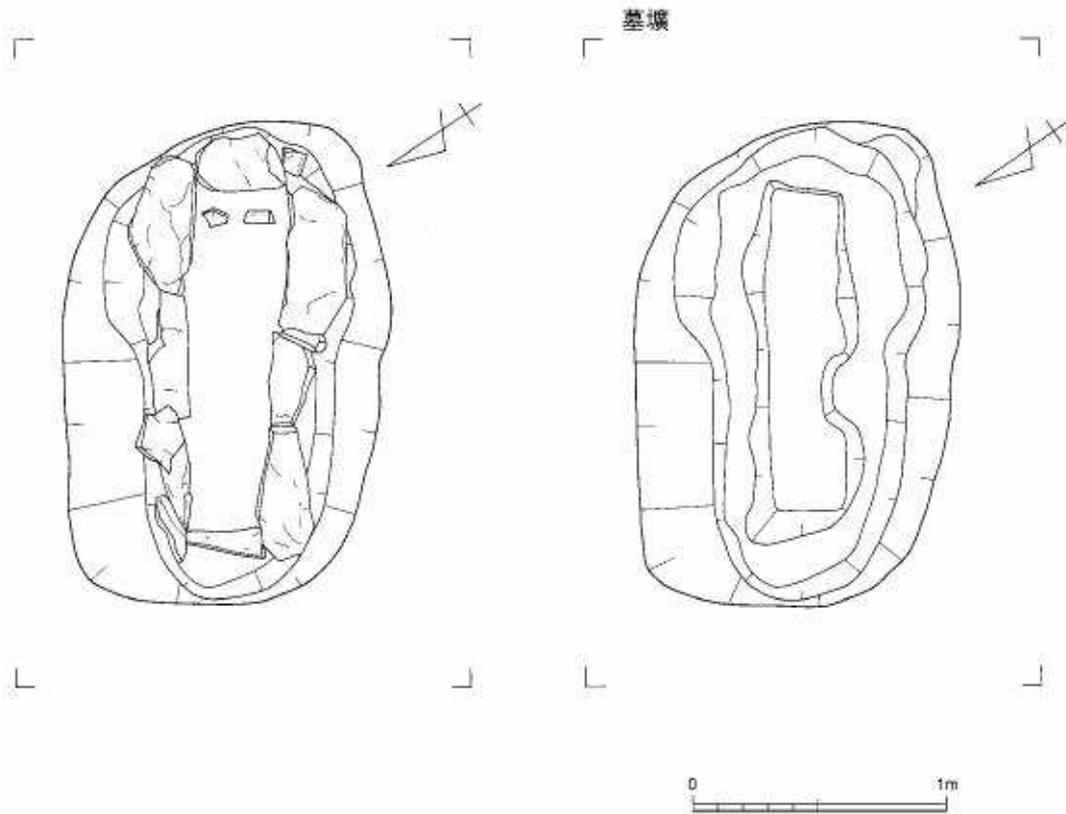
地山を掘り込み墓壇を築いている。表土直下で蓋石を検出していることから、墳丘があったかどうかは不明であり、平坦面も検出されていない。

石棺

石棺は箱式石棺である。蓋石に4石使い、隙間に細長い



第51図 石棺墓 (SX-W8) (1)



第52図 石棺墓 (SX-W8) (2)

石を2石詰める。蓋石両端2石には大きめの台形の石を使い、中央の2石は長辺40cm、短辺30cmの長方形の石を据えている。蓋石の外部上面は緑灰色の粘土で覆われている。粘土は、棺全体を覆うのではなく、蓋石のみに使用される。粘土の厚さは平均2cmであり、剥がれているところもある。

石棺の内法は長さ1.3m、東側小口で35cm、西側小口で27cmを測り、西側小口に向かって幅が狭くなる。棺の深さは中央部で20cmを測る。石棺の側石にはそれぞれ3石使われており、石の高さの四分の一程度を地中に埋めて安定させる。

墓壇

墓壇は石棺がほぼいっぱいに入る程度の規模で、長さ1.9m、幅1.3mを測る。

底面には敷石などは無く、地山面を平らに仕上げ底としている。底面東側には枕石があり、頭部が安定するように楔形の石を、中央がくぼむ様に2石並べて置いている。

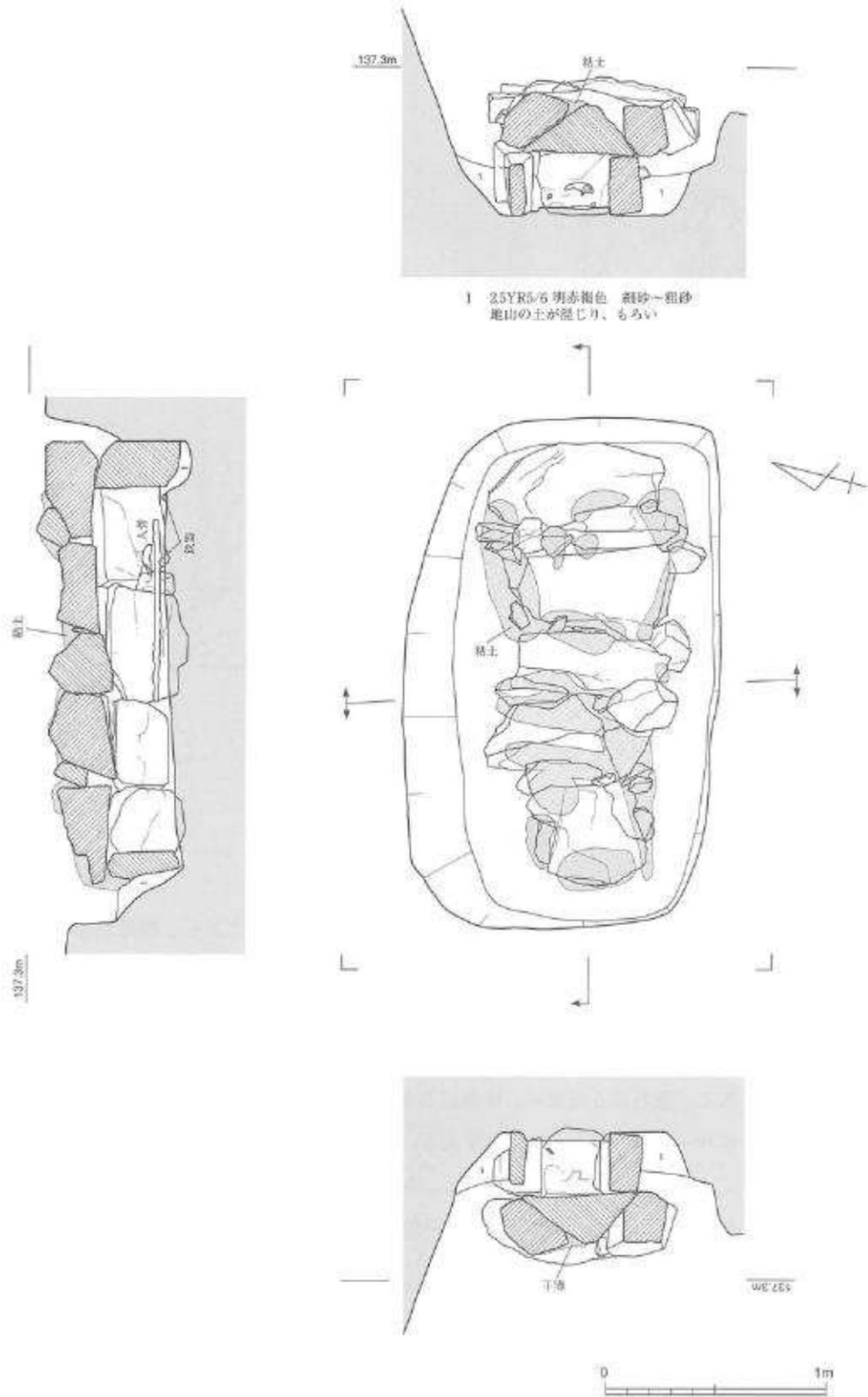
出土遺物

遺物の出土はない。

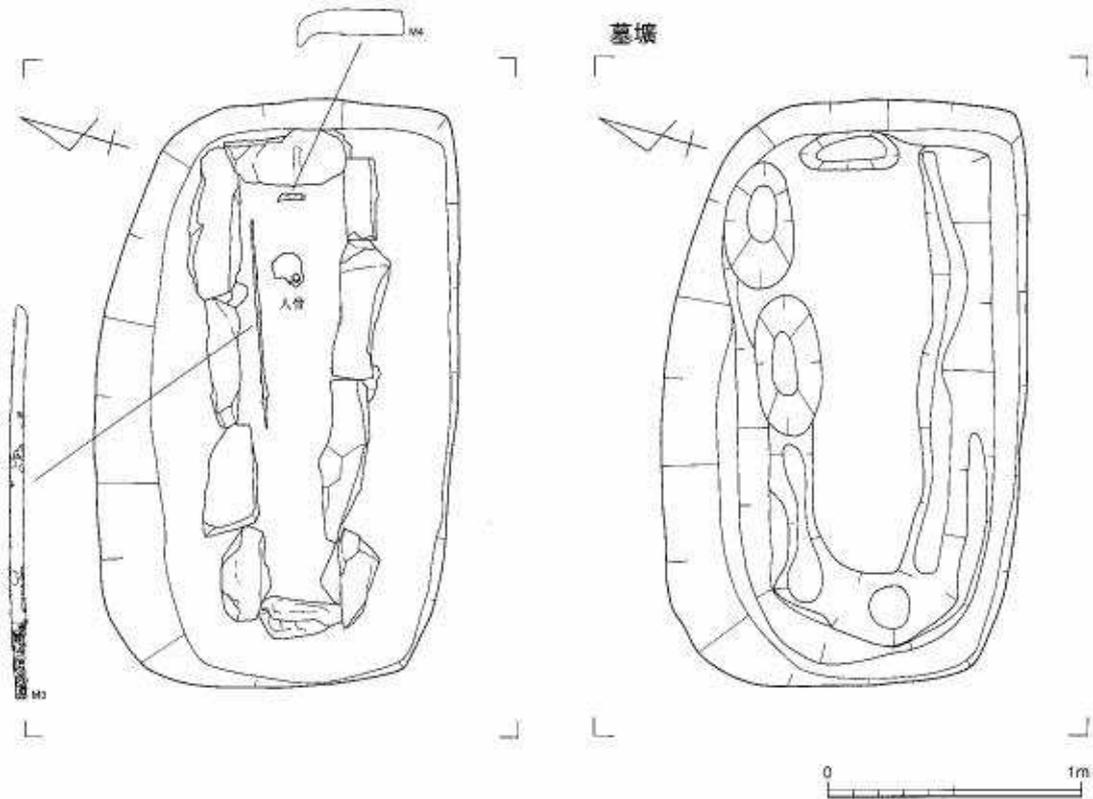
SX-W9 (第53・54図、カラー写真図版22～24)

位置と検出状況

A14号墳主体部の南側、標高137.5mのところに位置し、平野との比高差は14.5mある。表土直下において蓋石を検出した。検出した時点で石棺内には底から10cmほど土が堆積していた。



第53図 石棺墓 (SX-W9) (1)



第54図 石棺墓 (S X-W 9) (2)

規模・形態

地山を掘り込み墓塚を築いている。表土直下で蓋石を検出していることから、墳丘があったかどうかは不明であり、平坦面も検出されていない。墓塚は石棺が余裕をもって納まる程度の規模で、長さ2.3m、幅1.4m、検出面からの深さ50cmを測る。

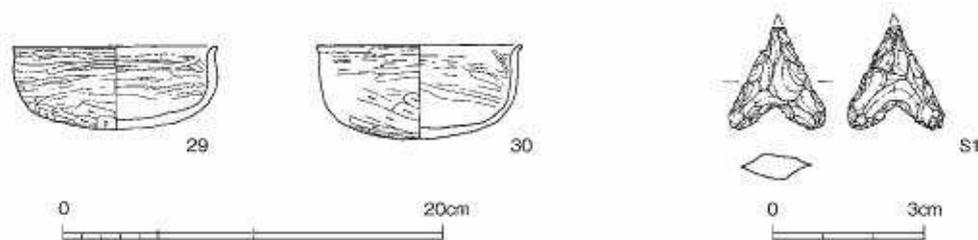
石棺

石棺は箱式石棺である。蓋石に5石使い、隙間に石を詰める。西端の蓋石が長さ50cmと小さく、その他は長さ70~80cm、幅30~45cm、厚さ15~30cmを測る。蓋石から側石の上半にかけて厚さ5cmほどの緑灰色の粘土で覆われている。被覆状態が比較的良く、棺内への土の流入は少量にとどまっている。

石棺の内法は長さ1.6m、東側小口で40cm、西側小口で20cmを測り、西側小口に向かって幅が狭くなる。棺の深さは中央部で30cmを測る。側石は片側に4石使われ、部分的に据え付け用の溝に置かれる。また、側石はそれぞれが若干重なるように並べられている。石棺内に敷石や枕石などは無く、地山面を平らに仕上げ底としているが、棺底の高さは東側が西側よりも6cm程度高くなっている。石棺内には人骨右側部分に鉄刀1本、頭蓋骨上方に鉄鏃1本が置かれていた。鉄刀は残存状態が良く、切先を足側である西に向け刃は下を向く。鉄鏃は刃先を西に向けている。

人骨

石棺内は、床面から10cmほど流入土で埋まっていたため、人骨の遺存状態は悪い。出土した人骨は、頭蓋骨の左眼窩より上の部分のみである。頭蓋骨周辺からは歯が数本出土している。出土した頭蓋骨は、



第55図 石棺墓（S X-W 9）出土土器・石器

長さ15cm、幅12cmと小柄であり、眉間の隆起が認められない。未鑑定のため性別などは不明である。

出土遺物

鉄器（第50図、モノクロ写真図版6）

鉄刀（M3）は現状での長さ84cm、幅4cm、最大厚0.7cmを測る。刃部は、刃を内側にし極僅かに湾曲する。隅状となっている茎尻近くには目釘孔が1箇所あり、孔の直径は4mmを測る。孔の中には有機物が遺存している。把縁装具や鞘・把の木質および把巻きが一部遺存しているが、腐食が進んでおり、その形態は不明である。鉄鎌（M4）は、曲刃鎌で全長11cm、幅3cm、厚さ3.9mmを測る。柄を装着する側の端部が短く折り返されている。

土器（第55図、モノクロ写真図版6）

石棺の周辺から、土師器杯（29、30）が出土している。29、30は口縁部が短く開く。体部内外面ともにヘラミガキを施し、体部外面の底部はヘラケズリを施す。

石器（第55図、モノクロ写真図版6）

石棺の西側から石鏃（S1）が出土している。凹基式の石鏃である。

A15号墳

墳丘（第56・57図、カラー写真図版9）

位置と検出状況

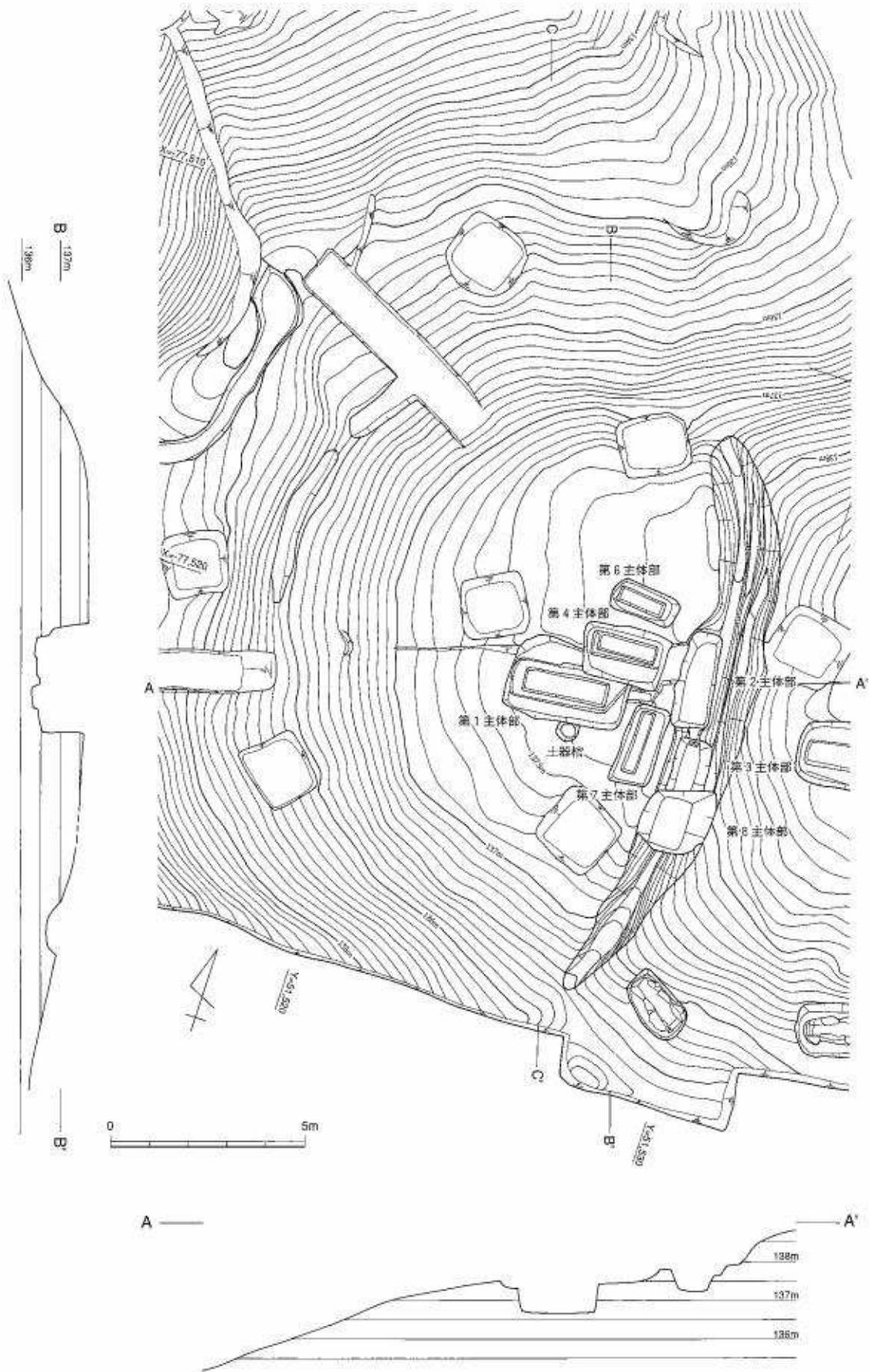
A15号墳は南尾根上の標高137～138mの所に立地する。確認調査において平坦面を確認した場所である。また、調査前の測量によって最も明確な平坦面を確認でき、古墳の存在が予想された場所である。平坦面で主体部4基、土器棺墓1基を検出し、区画溝内で主体部3基を検出した。

平坦面

尾根に直交する区画溝によって、東西約7m、南北幅約11mを測る平坦地が確保されている。本来は長方形の平坦面を造成していたと考えられるが、南西部分が流失しているため台形状の平坦面となる。平坦面上に盛り土がされていた痕跡は確認できない。

区画溝

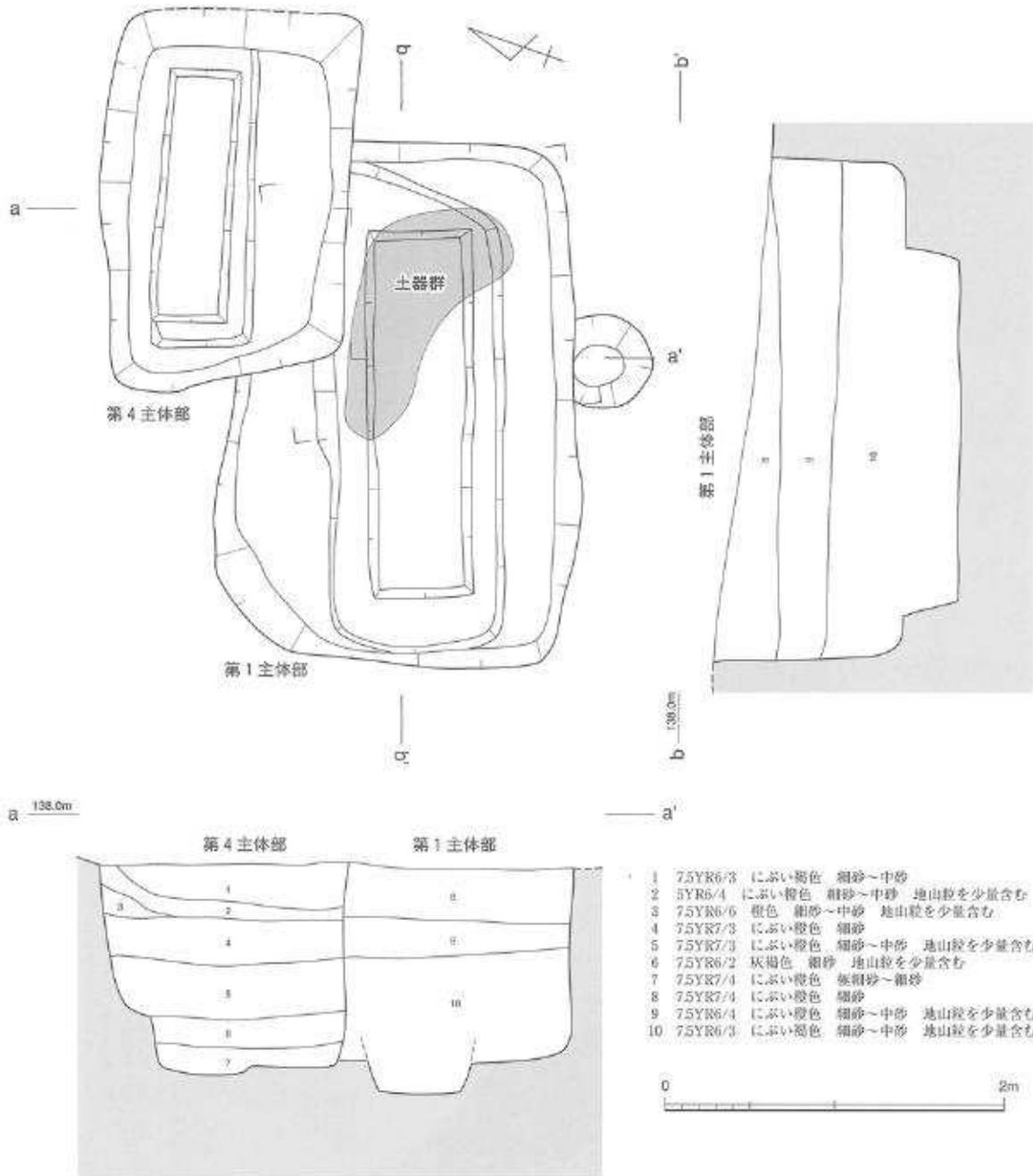
15号墳は南尾根稜線に直交する南北の溝により区画されている。溝は直線的に掘られており、その長さは検出した底部で約15mを測る。A14号墳と同じく、溝の横断面は上層部がU字形となり、その中央部が一段深くなる二段掘りの断面となる。尾根稜線部分での標高は137.9mであり、平坦面より約10cm低い。溝内から主体部を3基検出した。これら主体部は溝が完全に埋没した後に、溝と平行するように築かれている。溝が人工的に埋め戻されたのか、自然堆積なのかは区別できなかった。



第56図 A15号墳 平面・断面



第57図 A15号墳 横丘土層断面



第58図 A15号墳 第1・4主体部

出土遺物（第64図、モノクロ写真図版9）

土器

墳丘北側斜面から土師器片（48）が出土している。細片であるが、小型器台か脚台部の可能性がある。

埋葬施設

主体部（第56図、カラー写真図版25～29）

主体部は8基検出した。第1主体部～第4・第6～第8主体部は木棺墓、もうひとつは土器棺墓である。主体部は、平坦面東側に寄せて配せられている。木棺墓のうち、第1、第4、第6主体部は尾根稜線と平行方向に主軸を置く。その他の第2、第3、第7、第8主体部は尾根稜線と直交方向に主軸を置き、第2、第3、第8主体部は区画溝の中に位置する。

第1主体部（第58図、カラー写真図版26、27）

棺

平面や土層断面では木棺の痕跡を確認できなかったが、墓壇底で棺を据えたと考えられる掘り込みがある。掘り込みは、長さ2.2m、底部の幅50cm、検出面からの深さ18cmを測る。掘り込みの形状から木棺は箱形木棺であったと考えられる。棺内から鈍と思われる鉄器片（M6）が出土している。

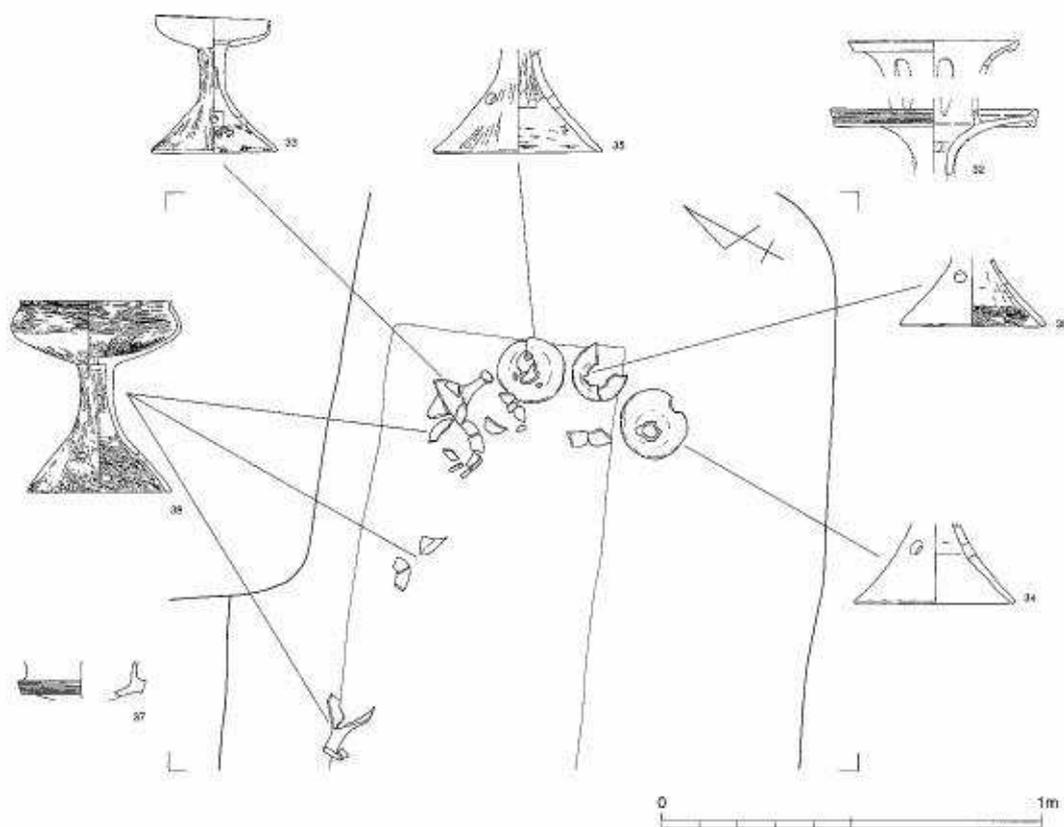
墓壇

検出した中で最も大きい主体部である。墓壇の北東隅は第4主体部によって切られる。墓壇の平面形は隅丸長方形で長さ3.1m、幅2m、検出面からの深さ1.2mを測る。墓壇底の中央部分は木棺を据えるために一段深く掘られており、その大きさは長さ2.1m、幅70cm、深さ30cmを測る。墓壇上からは、高杯（33～36、38）、装飾器台（32、37）が出土している。

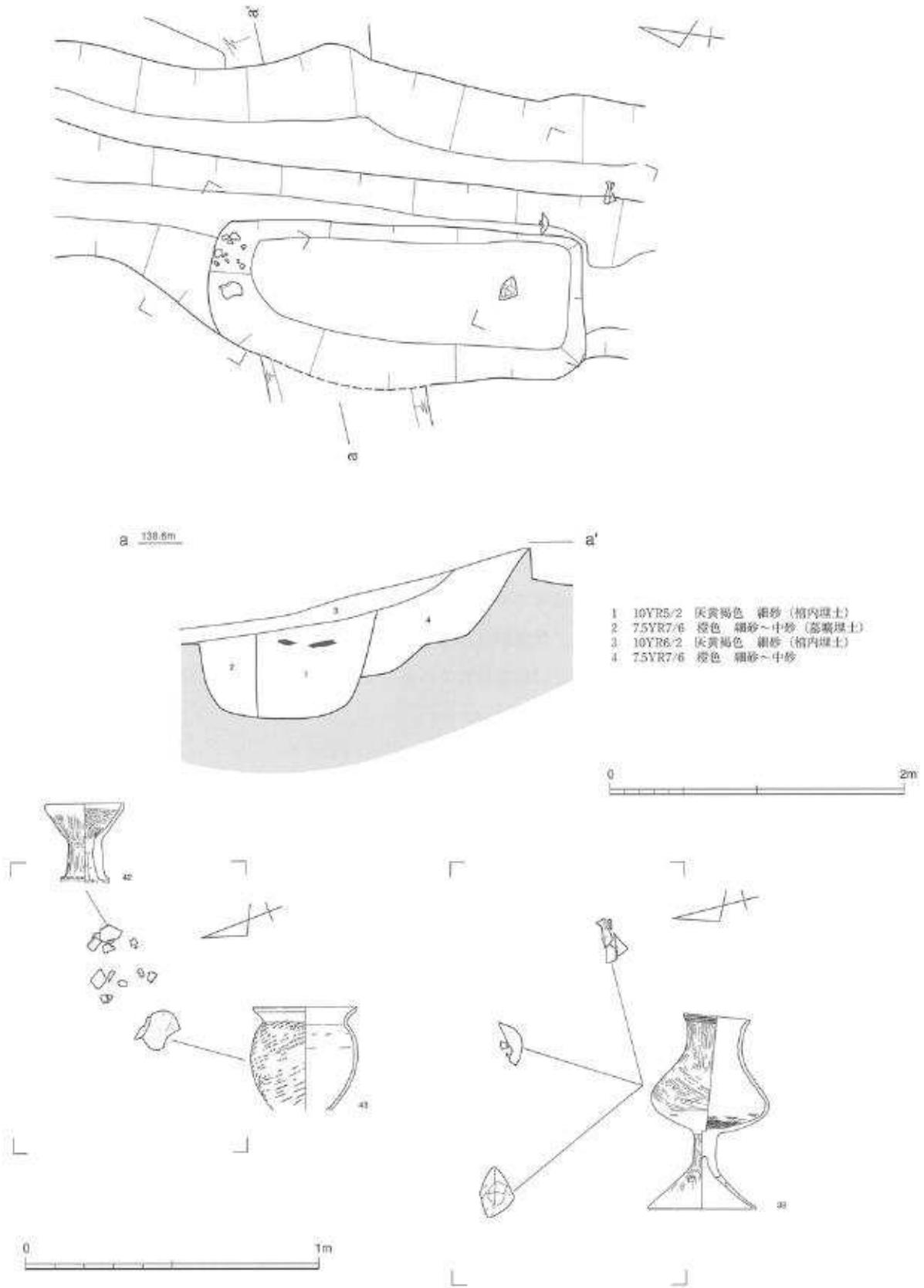
出土遺物

土器（第61図、モノクロ写真図版6・7・9）

墓壇内から甕（31）、墓壇上から高杯（33、38）、脚部（34～36）、装飾器台（32、37）が出土している。31は体部内面の頸部近くまでヘラ削りを施し、32同様口縁部端面に擬凹線を入れる。外面煤付着。32は北陸系の丹後型装飾器台である。装飾部分に逆水滴形の透かし孔を開ける。37も北陸系の装飾器台と考えられる。33は脚部外面にヘラミガキを施す。杯部は摩滅のため調整は不明である。脚部には円形の透かし孔が1箇所開けられ、脚部裾はゆるやかに開く。34～36は器台または高杯の脚部である。それぞれ円形の透かし孔が3箇所開けられ、脚部裾はゆるやかに開く。38は全体にヘラミガキを施し丁寧に仕上げる。杯部は内湾して立ち上がり、口縁部は短く外反して立ち上がる。口縁部端面には2条の凹線

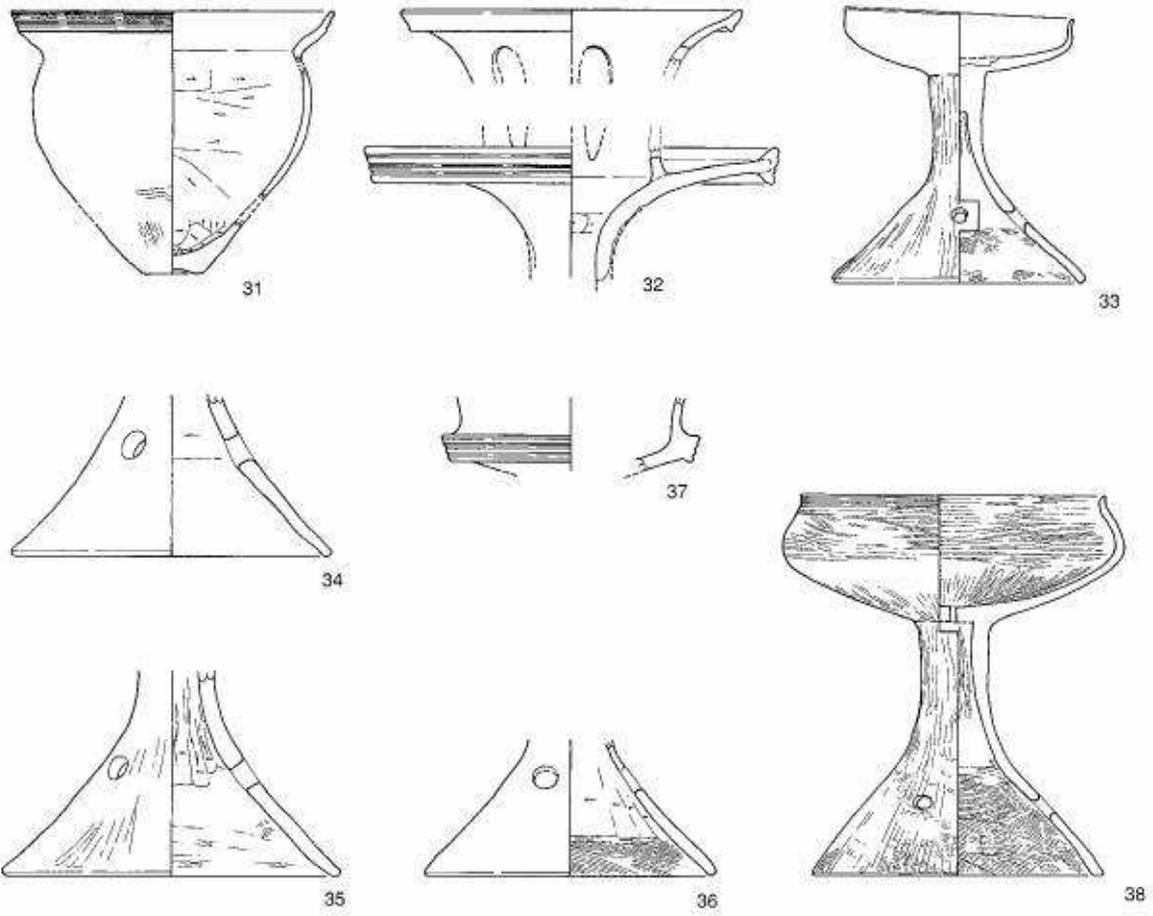


第59図 A15号墳 第1主体部供献土器出土状況

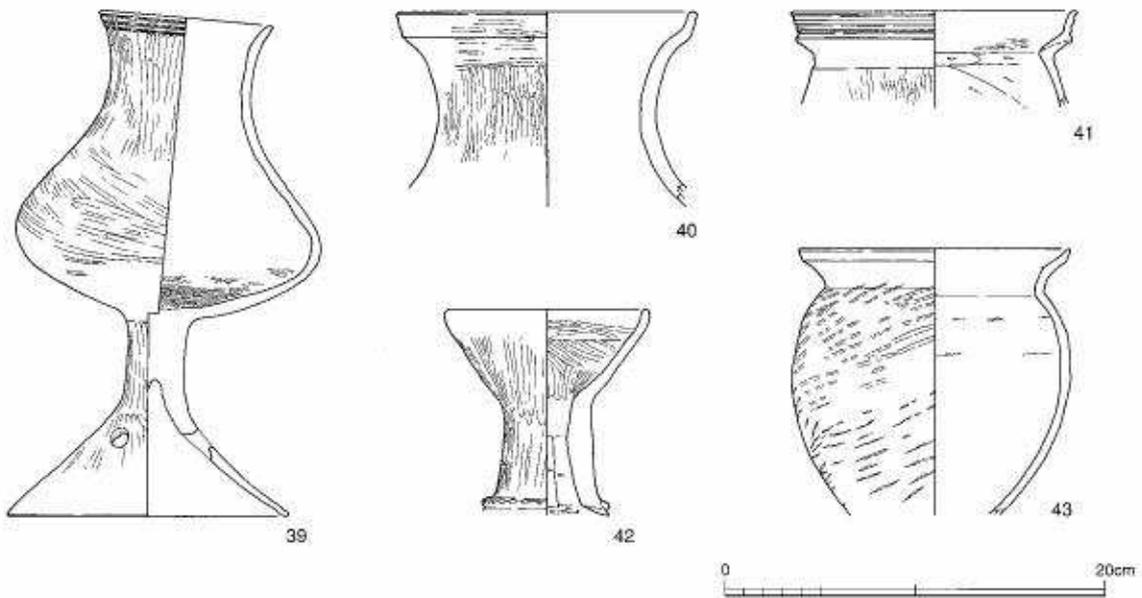


第60図 A15号墳 第2主体部

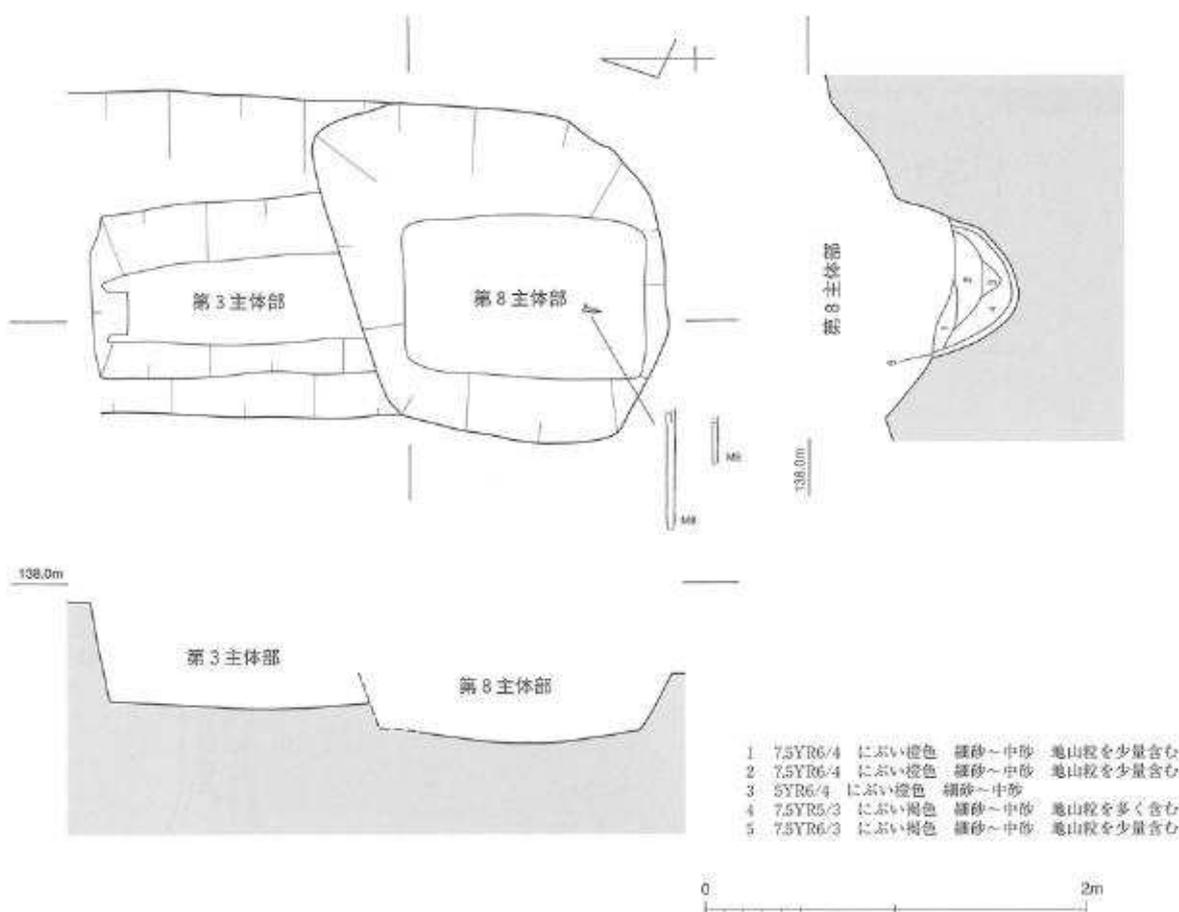
第1主体部



第2主体部



第61図 A15号墳 第1・2主体部出土土器



第62図 A15号墳 第3・8主体部

を施す。杯部底部には焼成前の直径4mmの孔が脚部へと貫通している。脚部には円形の透かし孔が3箇所開けられ、脚部裾はゆるやかに開く。丁寧な作りの土器であり、儀式用に作られた土器であろう。

鉄器（第65図、モノクロ写真図版10）

M6は鉈の可能性があり、残存する長さ9.5cm、幅1.4cm、最大厚6mmを測る。

第2主体部（第60図、カラー写真図版29）

第1主体部の東側に位置し、区画溝内に築かれている。区画溝を掘削中に検出した。土層の観察から第2主体部は区画溝が埋没した後に掘削されている。埋葬施設ではない可能性も残されている。

棺

墓壇の横断面から、幅80cm前後の棺痕跡を確認したが、平面では検出できなかった。

墓壇

墓壇の平面形は隅丸長方形で長さ2.55m、幅1.1m、検出面からの深さ64cmを測る。墓壇横断面は半円状を呈し、墓壇底は平坦である。墓壇内棺上から、壺（39、40、42）、甕（43）が出土している。

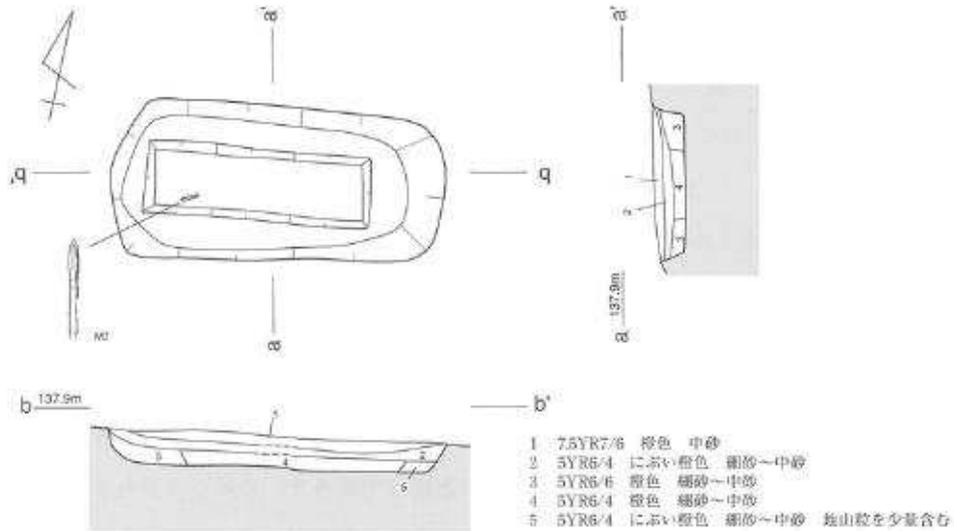
出土遺物

土器（第61図、モノクロ写真図版7・8）

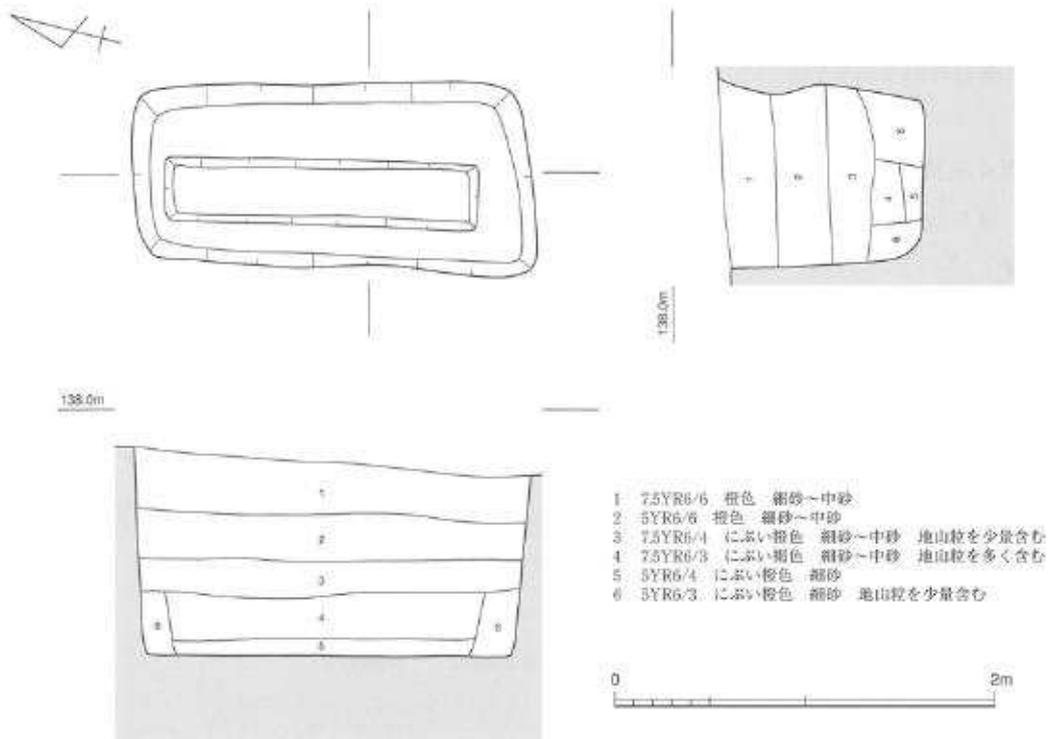
39は脚部のある壺である。壺部の体部外面には全体に丁寧にヘラミガキを施す。口縁部には凹線を3条施すが、一部ヘラミガキによって消えているところがある。脚部は、外面にヘラミガキを施し、内面

は摩滅のため調整は不明である。脚部には円形の透かし孔を3箇所開け、裾は緩やかに開く。40は壺の頭部から口縁部にかけての破片である。体部外面にはヘラミガキを施し、口縁部端面に横方向のヘラミガキを施す。41は口縁部端面に3条の凹線を施す。体部外面はハケ、内面には口縁部までヘラケズリを施す。42は壺の頭部から口縁部にかけての破片である。棒状にまっすぐ伸びる頭部に、ゆるやかにハの字に開く口縁部である。体部外面及び、口縁部の内面にはヘラミガキを施す。頭部最下端には1条の突帯を貼り付け、刻み目を施す。43はいわゆるタタキ甕である。体部外面に右上がりのタタキを施し、体部下半分はタタキをナデ消している。口縁部はヨコナデ、体部内面は板ナデで仕上げる。

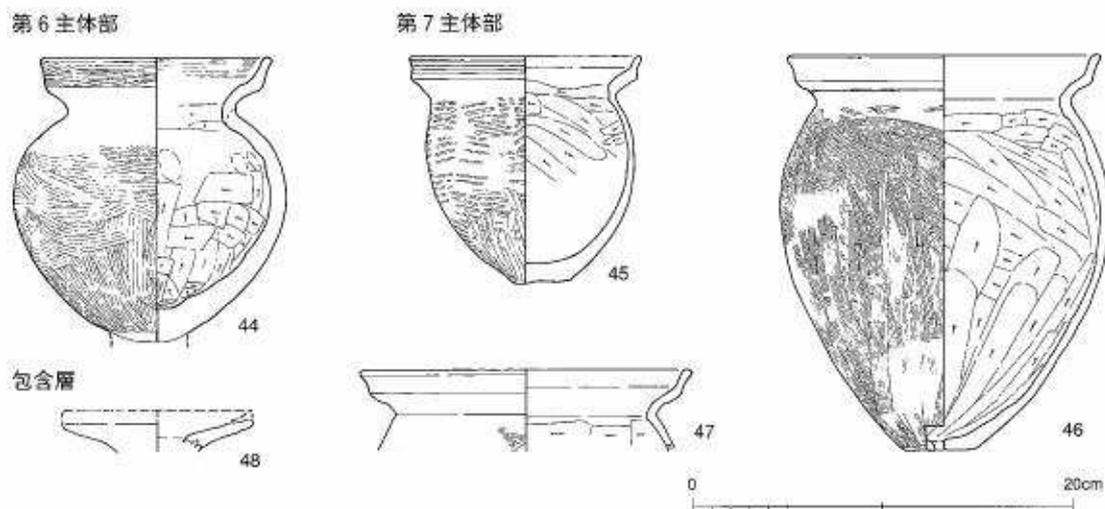
第6主体部



第7主体部



第63図 15号墳 第6・7主体部



第64図 A15号墳 第6・7主体部・包含層出土土器

第3主体部 (第62図、カラー写真図版28)

第1主体部の南東側に位置し、区画溝内に築かれている。南部を第8主体部に切られている。区画溝が埋没してから掘削されている。第2主体部と同じように、埋葬施設ではない可能性も残る。

棺

木棺の北小口に側板をはめこんで固定する掘りこみを検出した。南小口は第8主体部によって破壊されており形状は不明であるが、おそらく北小口と同様であろう。このことから木棺は箱形木棺であると考えられる。北小口から木棺の内法は20cm前後と考えられるが、その他の大きさは不明である。

墓壇

平面形は長方形で検出した長さ1.45m、幅95cm、検出面からの深さ50cmを測る。

出土遺物

遺物の出土はない。

第4主体部 (第58図、カラー写真図版27)

第1主体部の北東に位置し、第1主体部を切る。

棺

平面や土層断面では木棺の痕跡を確認できなかったが、墓壇底で棺を据えたと考えられる掘り込みがある。掘り込みは、長さ1.5m、底部の幅46cm、検出面からの深さ8cmを測る。掘り込みの形状から木棺は箱形木棺であったと考えられる。棺内東端から鈍(M5)が出土している。

墓壇

平面形はやや歪な隅丸長方形で長さ2.3m、幅1.5m、検出面からの深さ1.2mを測る。

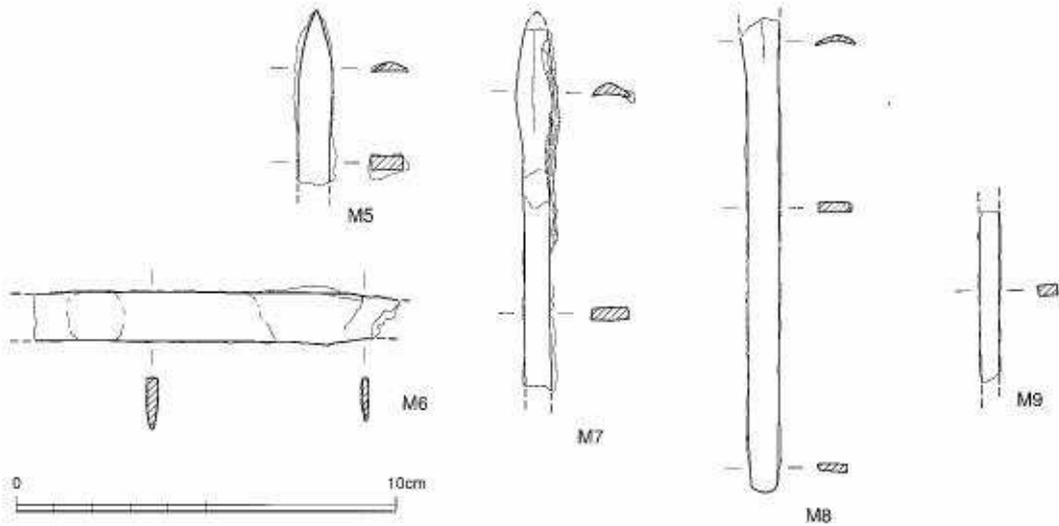
出土遺物

鉄器 (第65図、モノクロ写真図版10)

M5は鈍の刃部である。残存する長さ4.7cm、幅1.1cmを測る。

第6主体部 (第63図、カラー写真図版27)

第4主体部の北に位置し、第4主体部と主軸方向がほぼ平行である。



第65図 A15号墳 主体部出土鉄器

棺

平面及び土層断面から木棺の痕跡を確認した。検出した木棺の痕跡は、長さ1.2m、幅37cm、深さ13cmを測る。墓壙自体は遺存状況が良好であったが、木棺痕跡は検出面からわずかに確認されたにとどまる。棺内の南西隅から鉋（M7）が出土している。

墓壙

平面形はやや歪な隅丸長方形で長さ1.75m、幅82cmを測る。検出面からの深さ63cmを測り、削平を受けていることがわかる。平面及び土層断面から木棺の痕跡を確認した。墓壙内から台付壺（44）が出土している。

出土遺物

土器（第64図、モノクロ写真図版8）

墓壙内から壺（44）が出土している。体部外面にハケ、内面は頸部までヘラケズリを施す。口縁部端面にもハケを施す。底部に脚部が剥離した痕跡がある。

鉄器（第65図、モノクロ写真図版10）

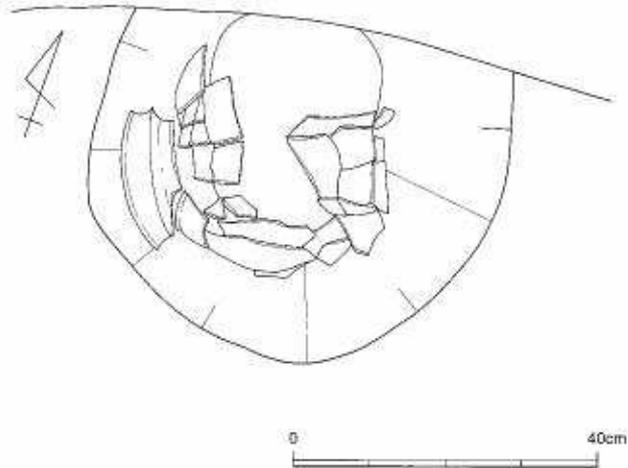
M7は刃部が鐔形で、首が一旦くびれ茎部が刃部より細くなる。先端及び茎部を欠き、残存する長さ10cm、刃部の最大幅1cm、茎部の幅7mmを測る。一部木質が付着している。

第7主体部（第63図、カラー写真図版29）

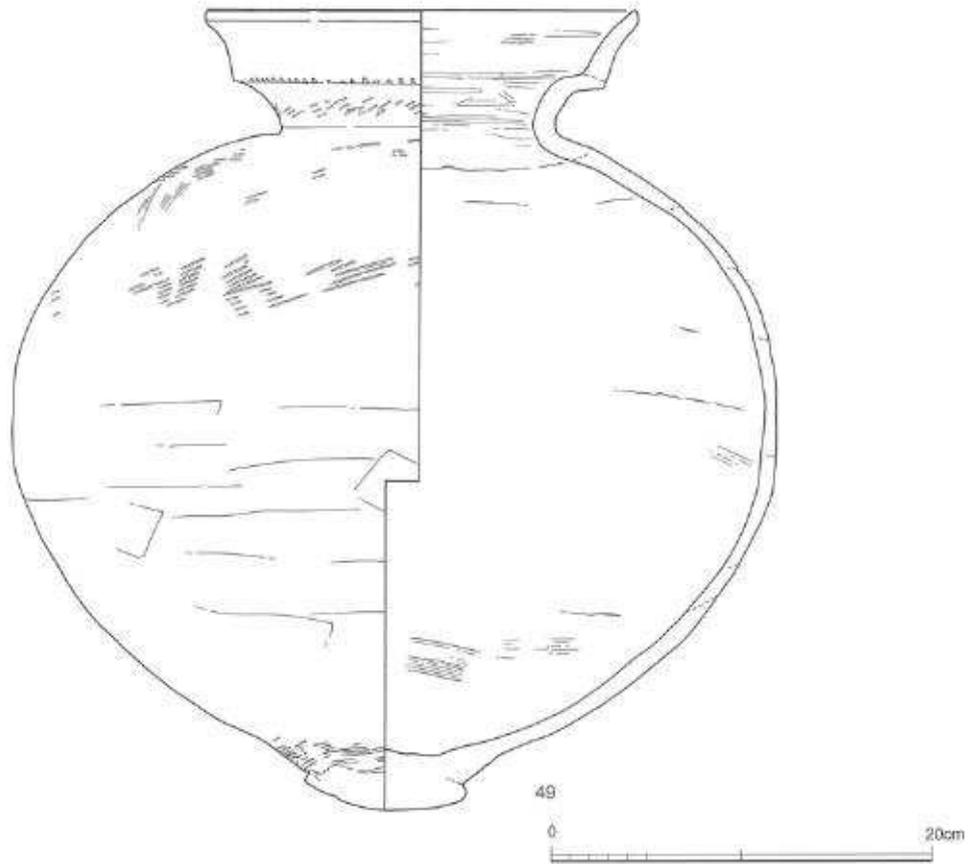
第1主体部の東側、区画溝との間に位置する。

棺

平面及び土層断面から木棺の痕跡を確認した。検出した木棺の痕跡は、上面で長さ1.7m、幅35cm、下面で長さ1.55m、幅26cmを測



第66図 土器棺（SP-W3）



第67図 土器棺 (S P-W3) 出土土器

り、下面が少し狭くなる。深さは30cmを測り比較的残りが良い。

墓壇

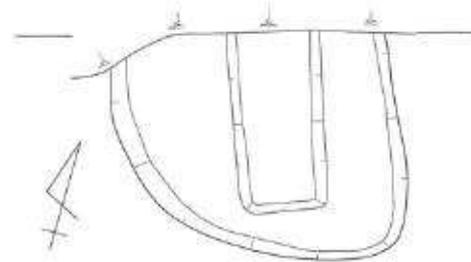
平面形は隅丸長方形で長さ2.1m、幅97cm、検出面からの深さ1.1mを測る。墓壇内から甕(45~47)が出土している。

出土遺物

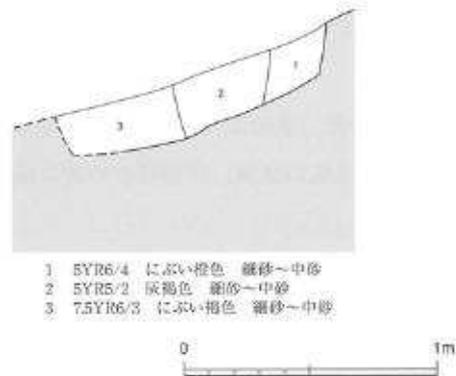
土器(第64図、モノクロ写真図版8)

墓壇内から甕(45~47)が出土している。45は体部外面にタタキを施し、底部付近はヘラミガキを施す。

体部内面は頸部までヘラケズリを行う。口縁部端面には擬凹線を施す。46は体部外面にハケ、体部内面には頸部までヘラケズリを施す。口縁部は端面を持つがヨコナデで仕上げる。底部に長径6mmの孔が認められるが、欠損の可能性もある。45・46ともに外面に煤が付着している。



134.2m



- 1 5YR6/4 にぶい棕色 細砂~中砂
- 2 5YR5/2 灰褐色 細砂~中砂
- 3 7.5YR6/3 にぶい褐色 細砂~中砂

第68図 木棺墓 (S X-W10)

第8 主体部 (第62図、カラー写真図版28)

第1主体部の南東、区画溝内に位置し、第3主体部を切る。

棺

平面や土層断面では木棺の痕跡を確認できなかった。

墓壇

平面形はやや歪な隅丸長方形で長さ1.55m、幅75m、検出面からの深さ45cmを測る。墓壇の東側は、区画溝の肩と重なっている。墓壇底の横断面は半円状を呈する。墓壇内南寄りから鈍M8、9が出土しているが、出土した地点が棺内であった可能性が考えられる。

出土遺物

鉄器

墓壇内から鈍M8、9が出土している。M8は刃部の中ほどから先端部分を欠くが、その他の部分は残存している。長さ12.6cm、刃部最大幅1.1cm、茎部幅9mm、厚さ3mmを測る。M9は鈍の茎部である。両端を欠き、残存する長さ4.6cm、幅5mm、厚さ3.5mmを測る。

土器棺墓

S P-W3 (第66図、カラー写真図版29)

位置と検出状況

15号墳第1主体部の南側、標高137.5mに位置する。墓壇は第1主体部に切られている可能性がある。第1主体部検出時に見つかった。

形態・規模

墓壇の平面形は円形を呈し、直径55cmを測る。残存する墓壇の深さは28cmである。墓壇は土器棺よりやや大きい程度である。

出土遺物 (図版67、モノクロ写真図版9)

49は体部外面にタタキを施したのち、ナデや板ナデを施す。口縁部内面はヘラミガキを施し、体部内面にはハケを施す。口縁部は二重口縁となり、屈曲する箇所刻み目を施す。木葉底である。

木棺墓

S X-W10 (第68図)

位置と検出状況

15号墳主体部の西側標高134mに位置し、表土直下で検出した。斜面に築かれており、棺の主軸方向は等高線と平行方向である。

形態・規模

墓壇の平面形は隅丸長方形で、残存長は90cm、幅1.1m、検出面からの深さ20cmを測る。平面及び土層断面から木棺の痕跡を確認した。検出した木棺の痕跡は、残存長72cm、幅36cm、深さ20cmである。

側板の痕跡は垂直であり、棺の底もほぼ水平であるため箱形木棺であったと考えられる。

出土遺物

遺物の出土はない。

A16号墳

墳丘（第8図）

位置と検出状況

16号墳は南尾根で最も低い標高127.6mの所に立地する。区画溝（SD-W7）を検出し古墳と認識した。墳丘のほとんどが調査区外となる。

平坦面

区画溝の西側にわずかながら平坦面を検出したが、大部分は調査区外となる。検出できた平坦面から判断してA16号墳は径10m程度の円墳になると考えられる。墳丘の西側は後世の削平により消失している。調査区内の平坦面に主体部は検出されていない。

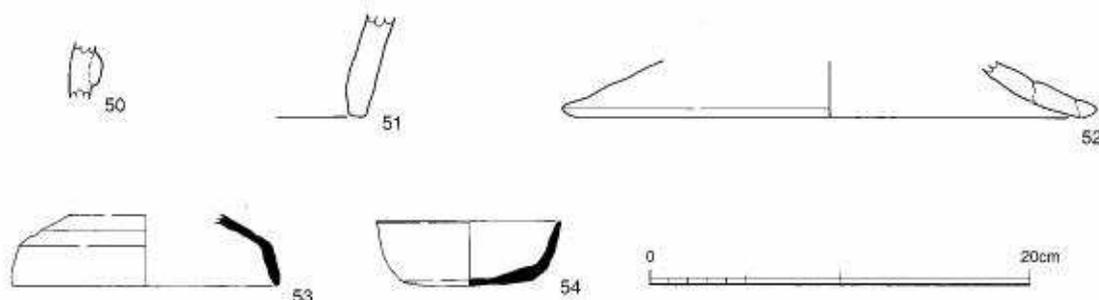
区画溝

墳丘の山手側に幅1mの溝の一部を確認した。溝埋土から、円筒埴輪片（50、51）、朝顔形あるいは形象埴輪片（52）が出土した。

出土遺物（第69図、モノクロ写真図版10）

土器

区画溝（SD-W7）内から円筒埴輪片（50、51）、不明埴輪片（52）、墳丘斜面の包含層から須恵器杯（53、54）が出土している。50は円筒埴輪片である。表面に突帯がわずかに残るが、それ以外の部分は欠損しており、調整は不明である。また小片であるため径は不明である。51は埴輪基底部の破片である。破片は、やや外向きに立ち上がっていく。表面が摩耗している小片のため、調整や直径などは不明である。52は不明埴輪の破片である。蓋笠部先端部分の一部の可能性もあるが、朝顔形かもしれない。表面は摩耗のため調整は不明であるが、粘土のつなぎ目が表裏ともにはっきりと観察できる。53は杯蓋である。復元した口径14cmを測る。天井部にヘラケズリを施す。54は口径9.8cm、器高は3.5cmを測る。口縁部は直線的に立ち上がる。底部は回転ヘラ切り後にナアで調整を行う。



第69図 A16号墳 区画溝・包含層出土土器

2. 小結

今回調査を行った西地区は、若水古墳群においては若水古墳より西側の地区を指す。また、この西地区は平成12年度、13年度の2カ年にわたって行われた若水古墳群の調査のうち、平成12年度に調査を行った地区である。

若水古墳群は粟鹿山から北西方向へ伸びる尾根上に分布する。この尾根の東西には開折谷が入り込んでおり、一見すると独立丘陵と見間違える地形である。さらに西地区には東西方向に小さな開折谷が入りこんでおり、そのため北尾根と南尾根の2本の尾根地形に分かれる。それら尾根上に古墳が立地し、西

地区の古墳となる。これら北尾根と南尾根には、調査した古墳以外を含めて全体で16基の古墳が確認されており、今回の調査では北尾根でA6号墳～A8号墳、南尾根でA13号墳～A16号墳の合計6基を調査した。

西地区北尾根の標高は142m～146mにあたり、低所からA6号墳、A7号墳、A8号墳となる。北尾根の古墳は明確な墳丘を造らず、いずれも緩やかな斜面に主体部を築いている。墳丘を区画する溝はA8号墳のみで検出し、南尾根とは大きく様相が違う。各古墳の主体部は木棺墓1基が中心であるが、A6号墳のみが主体部を2基築いている。A7号墳、A8号墳では主体部の周囲に木棺墓や土坑、土器棺墓などが築かれている。これら北尾根に古墳を築いた集団は、尾根上の傾斜の緩やかな平坦部分を墳丘として意識しているようである。これら古墳の主体部は6号墳第1主体部を除いて、すべて尾根と直交する南北方向となる。遺物は、A7号墳、A8号墳から出土している。これら遺物から考えられる造墓の時期としては弥生時代末～古墳時代初頭が考えられる。

西地区南尾根は標高125m～146mにあたり、高所からA13号墳、A14号墳、A15号墳、A16号墳となる。南尾根の古墳は尾根を切断する区画溝と平坦面によって明確な墳丘を造り出す古墳である。主体部はそれぞれ木棺墓であるが、A13号墳とA15号墳は複数の主体部を持つ。A16号墳は区画溝だけの検出である。遺物は、A13号墳、A14号墳、A15号墳から出土している。特に、A15号墳では墓竈上にまどまって土器が置かれており、北陸系の装飾器台が出土している。これら土器から考えられる造墓の時期としては弥生時代末～古墳時代初頭が考えられ、北尾根と大きな時期差はない。鉄製品は、A15号墳の主体部から鉄鎌や鍬等が出土している。

北尾根、南尾根ともに時期差があまりなく造墓されている。しかし、古墳の形状においては北尾根と南尾根では大きく違うことが判明した。北尾根は墳丘を造り出さない古墳であり、南尾根は墳丘を造り出す古墳である。さらに、南尾根の古墳は主体部を複数持つものが多く、遺物の出土量も多い。特に、15号墳では北陸系の土器が出土するなど、北尾根の古墳との違いが明確である。このように、近接する南北の尾根において、このような違いが見られることが西地区の古墳の特徴であるといえる。

また、古墳時代中期後半には、A13号墳、A14号墳の南斜面に集中して木棺墓や石棺墓が築かれている。A16号墳についても、A6～A8号墳、A13～A15号墳とは時期が異なる可能性が高い。しかも、これらの古墳、木棺墓、石棺墓がほぼ同時期に順次構築されたと推測される。特に木棺墓・石棺墓については、現段階では無区画墓と判断できるものであり、集中して存在している点は興味深い。なお、SX-W9石棺内からは刀と鉄鎌、木棺墓SX-W4では鉄鎌といった鉄製品が副葬されており、一般的な古墳の埋葬主体の副葬品とそれほど遜色ない点もまた、意味深いものであろう。

第3節 中央地区の遺構と遺物

中央地区で検出した遺構には、若水古墳をはじめとする古墳群、古墳時代や奈良時代および時期不明の土器棺・溝・土壇・集石、織豊期と思われる若水城の主郭・帯曲輪関係、弥生時代の環壕と推定される溝がある。以下では遺構およびその遺物について、上記の順に詳述する。

1. 古墳

中央地区内に存在し、調査した古墳は若水古墳（A11号墳）のほか、A支群ではA10号墳・A18号墳・A19号墳・A20号墳があるが、これら小規模の4基の古墳のうち、埋葬施設が検出されたのはA19号墳に限られる。中央地区東半部ではB支群のB7号墳とB8号墳を調査し、いずれも埋葬施設が残存していたが、2基とも後世の城として利用された形跡が明らかであった。

若水古墳（A11号墳）

若水古墳はA支群11号墳の名称も持つが、本古墳群の盟主墳としてふさわしい名称として、若水古墳と呼称することにする。

墳丘（第70～75図、カラー写真図版31～33、モノクロ写真図版18）

位置と検出状況

丘陵主尾根の北端から北西方向にのびる支尾根稜線上の標高153mの最高所に存在しており、眺望のよい位置にある。特に墳頂部からは、北西方向の山東町滝田から和田山町桑原にかけての狭隘な部分および和田山市街地の一部といった遠方まで見通すことができ、和田山町中心部から山東町に続く国道9号線を通ると、正面遠方に古墳を確認することができる。一方、南方向については丘陵が邪魔をしており、南西方向から東方向までの間については見通すことができない。ただし、東の遠坂時については望むことができる位置にある。

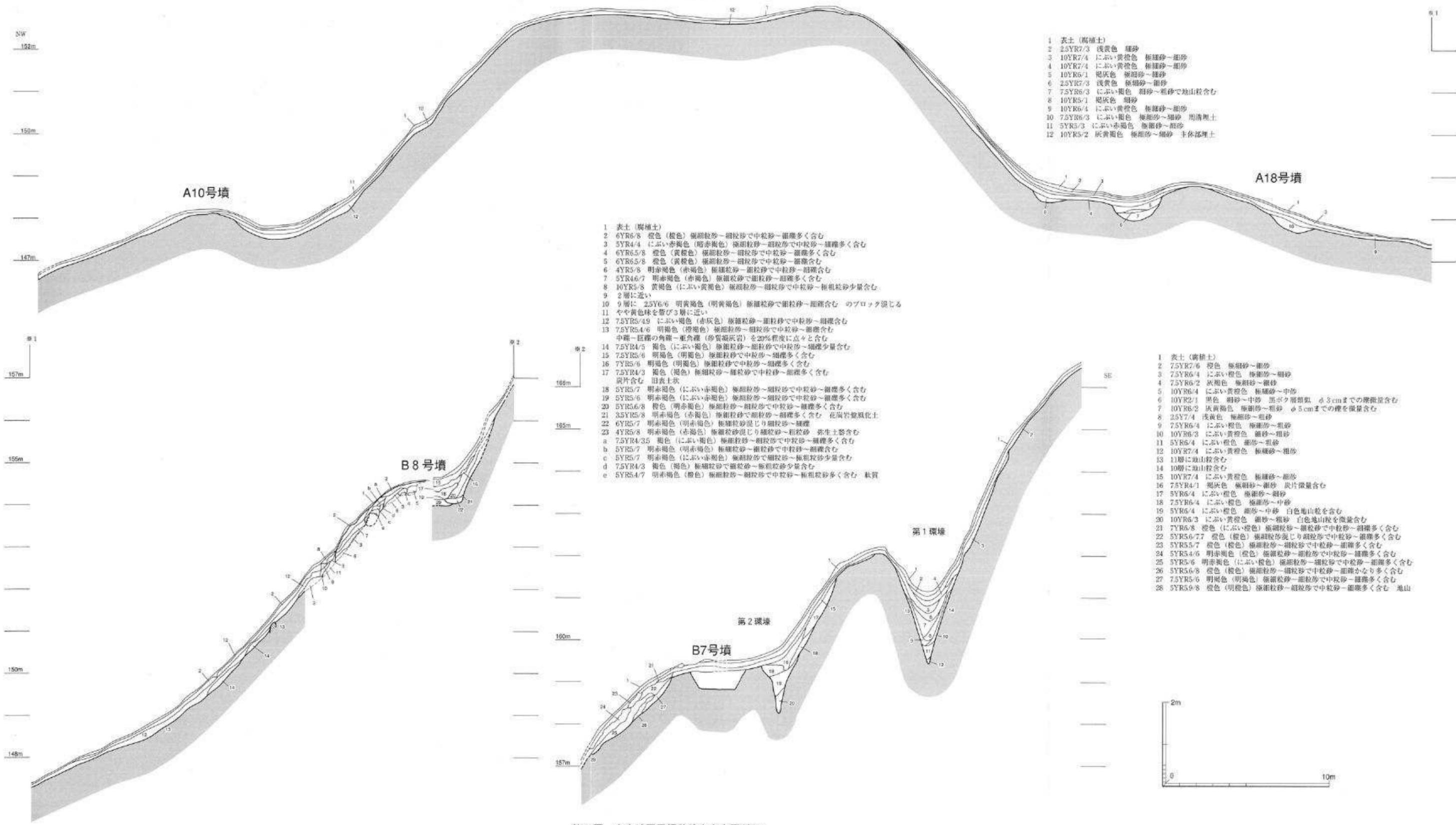
本古墳は若水城の曲輪として利用された可能性があり、地形の改変が行なわれた可能性も否定できないが、樹木伐採後の調査前の現況からも明確に古墳と断定できる墳丘および墳形を呈していた。

形態・規模

墳径は概ね平面円形を呈するが、北西―南東の尾根筋方向にやや長く楕円形に近い。また、北東側は丸みが強いものの、南西側は直線的である。この墳形の歪みは地形の制約のためと思われるが、墳頂平坦面の平面形状も裾ラインの形状と同様の形態、すなわち同心円状を呈している。調査前の裾ラインの標高は148m～148.2mで、墳裾が明確な南東側と北西側でのレベル差はほとんどなく、ほぼ水平である。この様相および標高は調査後もほとんど変わらない。裾部での北西―南東方向の長径は40.8m、北東―南西方向の短径は36.0mである。

墳頂部は広い平坦面を有し、斜面部への変換部分は丸みがあるものの、墳頂部の上方への影らみは極めて少ない。平坦面の平面規模は長径24.0m、短径20.4mで、調査前の最高所の標高は153.1m、調査後は152.9mである。したがって、墳高は調査前で5.1mとなり、低墳丘の円墳となるが、前述のように後世の削平など地形改変を受けた可能性も否定できない。

若水古墳 (A11号墳)

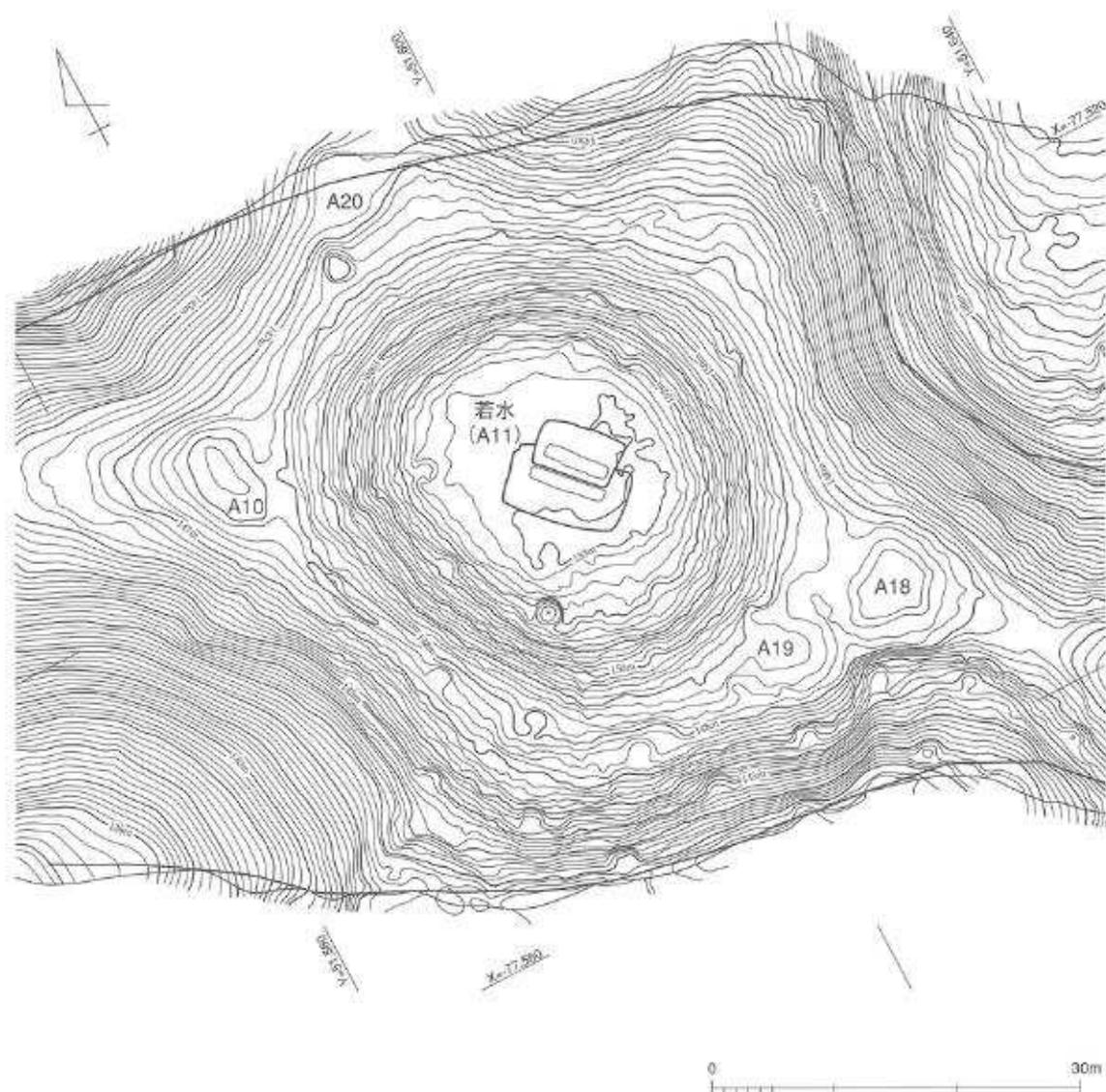


- 1 表土 (腐植土)
- 2 2.5YR7/3 浅黄色 細砂
- 3 10YR7/4 にぶい黄褐色 極細砂-細砂
- 4 10YR7/4 にぶい黄褐色 極細砂-細砂
- 5 10YR6/1 褐色 極細砂-細砂
- 6 2.5YR7/3 浅黄色 極細砂-細砂
- 7 7.5YR6/3 にぶい褐色 細砂-粗砂で地山粒含む
- 8 10YR5/1 褐色 細砂
- 9 10YR6/4 にぶい黄褐色 極細砂-細砂
- 10 7.5YR6/3 にぶい褐色 極細砂-細砂 周溝埋土
- 11 5YR5/3 にぶい赤褐色 極細砂-細砂
- 12 10YR5/2 灰黄褐色 極細砂-細砂 主体部埋土

- 1 表土 (腐植土)
- 2 6YR6/8 橙色 (褐色) 極細砂-細砂で中粒砂-粗粒砂多く含む
- 3 5YR4/4 にぶい赤褐色 (暗赤褐色) 極細砂-細砂で中粒砂-粗粒砂多く含む
- 4 6YR6.5/8 橙色 (黄褐色) 極細砂-細砂で中粒砂-粗粒砂多く含む
- 5 6YR6.5/8 橙色 (黄褐色) 極細砂-細砂で中粒砂-粗粒砂多く含む
- 6 4YR5/8 明赤褐色 (赤褐色) 極細砂-細砂で中粒砂-粗粒砂多く含む
- 7 5YR4.6/7 明赤褐色 (赤褐色) 極細砂-細砂で中粒砂-粗粒砂多く含む
- 8 10YR5/8 黄褐色 (にぶい黄褐色) 極細砂-細砂で中粒砂-粗粒砂少量含む
- 9 2層に近い
- 10 9層に 2.5Y6/6 明黄褐色 (明黄褐色) 極細砂-細砂-粗粒砂含む のアロック混じる
- 11 やや黄色味を帯び3層に近い
- 12 7.5YR5/4.9 にぶい褐色 (赤褐色) 極細砂-細砂で中粒砂-粗粒砂多く含む
- 13 7.5YR5.4/6 明褐色 (橙褐色) 極細砂-細砂で中粒砂-粗粒砂多く含む
- 14 中層-巨礫の角礫-重角礫 (砂質腐灰岩) を20%程度に点々と含む
- 15 7.5YR4/5 褐色 (にぶい褐色) 極細砂-細砂で中粒砂-粗粒砂少量含む
- 16 7.5YR5/6 明褐色 (明褐色) 極細砂-細砂で中粒砂-粗粒砂多く含む
- 17 7.5YR4/3 褐色 (褐色) 極細砂-細砂で中粒砂-粗粒砂多く含む 炭片含む 旧表土状
- 18 5YR5/7 明赤褐色 (にぶい赤褐色) 極細砂-細砂で中粒砂-粗粒砂多く含む
- 19 5YR5/6 明赤褐色 (にぶい赤褐色) 極細砂-細砂で中粒砂-粗粒砂多く含む
- 20 5YR5.6/8 褐色 (明赤褐色) 極細砂-細砂で中粒砂-粗粒砂多く含む
- 21 3.5YR5/8 明赤褐色 (赤褐色) 極細砂-細砂で中粒砂-粗粒砂多く含む 花崗岩燻灰土
- 22 6YR5/7 明赤褐色 (明赤褐色) 極細砂-細砂-粗粒砂
- 23 4YR5/8 明赤褐色 (赤褐色) 極細砂-粗粒砂-粗粒砂 赤土層含む
- a 7.5YR4/3.5 褐色 (にぶい褐色) 極細砂-細砂で中粒砂-粗粒砂多く含む
- b 5YR5/7 明赤褐色 (明赤褐色) 極細砂-細砂で中粒砂-粗粒砂多く含む
- c 5YR5/7 明赤褐色 (にぶい赤褐色) 極細砂-細砂で中粒砂-粗粒砂少量含む
- d 7.5YR4/3 褐色 (褐色) 極細砂-細砂で中粒砂-粗粒砂少量含む
- e 5YR5.4/7 明赤褐色 (褐色) 極細砂-細砂で中粒砂-粗粒砂多く含む 軟質

- 1 表土 (腐植土)
- 2 7.5YR7/6 褐色 極細砂-細砂
- 3 7.5YR6/4 にぶい褐色 極細砂-粗砂
- 4 7.5YR6/2 灰褐色 極細砂-粗砂
- 5 10YR6/4 にぶい黄褐色 極細砂-中砂
- 6 10YR2/1 黒色 細砂-中砂 黒ボク屑類 ϕ 3cmまでの礫少量含む
- 7 10YR6/2 灰黄褐色 極細砂-粗砂 ϕ 5cmまでの礫を微量含む
- 8 2.5Y7/4 浅黄色 極細砂-粗砂
- 9 7.5YR6/4 にぶい褐色 極細砂-粗砂
- 10 10YR6/3 にぶい黄褐色 細砂-粗砂
- 11 5YR6/4 にぶい褐色 細砂-粗砂
- 12 10YR7/4 にぶい黄褐色 極細砂-粗砂
- 13 11層に地山粒含む
- 14 10層に地山粒含む
- 15 10YR7/4 にぶい黄褐色 極細砂-粗砂
- 16 7.5YR4/1 褐色 極細砂-粗砂 炭片微量含む
- 17 5YR6/4 にぶい褐色 極細砂-粗砂
- 18 7.5YR6/4 にぶい褐色 極細砂-中砂
- 19 5YR6/4 にぶい褐色 細砂-中砂 白色地山粒を含む
- 20 10YR6/3 にぶい黄褐色 細砂-粗砂 白色地山粒を微量含む
- 21 7YR6/8 褐色 (にぶい褐色) 極細砂-細砂で中粒砂-粗粒砂多く含む
- 22 5YR5.6/7.7 褐色 (褐色) 極細砂-粗粒砂で中粒砂-粗粒砂多く含む
- 23 5YR5.5/7 褐色 (褐色) 極細砂-細砂で中粒砂-粗粒砂多く含む
- 24 5YR5.4/6 明赤褐色 (褐色) 極細砂-細砂で中粒砂-粗粒砂多く含む
- 25 5YR5/6 明赤褐色 (にぶい褐色) 極細砂-細砂で中粒砂-粗粒砂多く含む
- 26 5YR5.6/8 褐色 (褐色) 極細砂-細砂で中粒砂-粗粒砂かなり多く含む
- 27 7.5YR5/6 明褐色 (明褐色) 極細砂-細砂で中粒砂-粗粒砂多く含む
- 28 5YR5.9/8 褐色 (明褐色) 極細砂-細砂で中粒砂-粗粒砂多く含む 地山

第70図 中央地区尾根稜線方向土層断面



第71図 若水古墳（A11号）および周辺の調査前地形

なお、墳頂南西部に一部分のみ盛土が認められたが、その他は軟質花崗岩の地山削り出しである。

墳頂部の盛土は、墳頂平坦部の南西側にはほぼ限られ、約11.5m×約6.5mの範囲（第73図点線囲み部分）で確認できた。盛土範囲の北東端は第1主体部の墓壁に切られていたが、盛土がされていた範囲は浅く緩やかな谷状地形となっていたようであり、盛土の北東端では厚みが少なく約15cm、墳頂平坦部と斜面部への変換点が最も厚く最大で約70cmである。盛土は地山である花崗岩風化土の上層にある旧表土およびその後堆積した斜面部下部の淡い褐色土の上から盛り上げられており、基本的には褐灰色でやや締まりが悪い土を薄く何層にも重ねてかさ上げをし、上部には赤褐色の土で覆っていた。

なお、墳頂平坦部南端で古墳時代後期末の土器棺（SP-C3）が1基検出され、墳頂平坦部の北東部では第100図に示した平安時代と思われる土師器が集中して出土し、その部分からは同時期の平安時代と思われる須恵器杯も出土している。

外部施設

若水古墳には葺石や埴輪といった外部施設は全く検出されず、段築も認められなかった。ただし、墳裾の外側には幅3.0m～4.8mの犬走り状の平坦面がほぼ全周しており、墳丘を際立たせている。築造時に加工されたものである可能性が高いものの、確定できる遺物等は検出されなかった。また、尾根筋と



第72図 若水古墳（A11号）および周辺の調査後地形

なる北西側および南東側にはA10号墳およびA18号墳が存在しているが、それらとの間はそれぞれ2.2m、4.8mの浅く幅広い「U」字形の溝状に掘り抜かれている。あるいは、A10号墳・A19号墳ともに主体部が検出されなかったことは、古墳ではなく自然地形を残した可能性も捨て切れない。

なお、西側墳裾から有肩袋状鉄斧（第101図）が1点出土したが、正確な位置は不明となっている。

埋葬施設

若水古墳の埋葬施設は北西－南東方向に2基が同じ方向に設置され、小規模で後出と思われる第2主体部は第1主体部の墓壇北東長辺を切り込んで構築されていた。両者とも組合せの箱形木棺墓である。

第1主体部

墓壇（第76～79図、カラー写真図版34・48・49、モノクロ写真図版11・16）

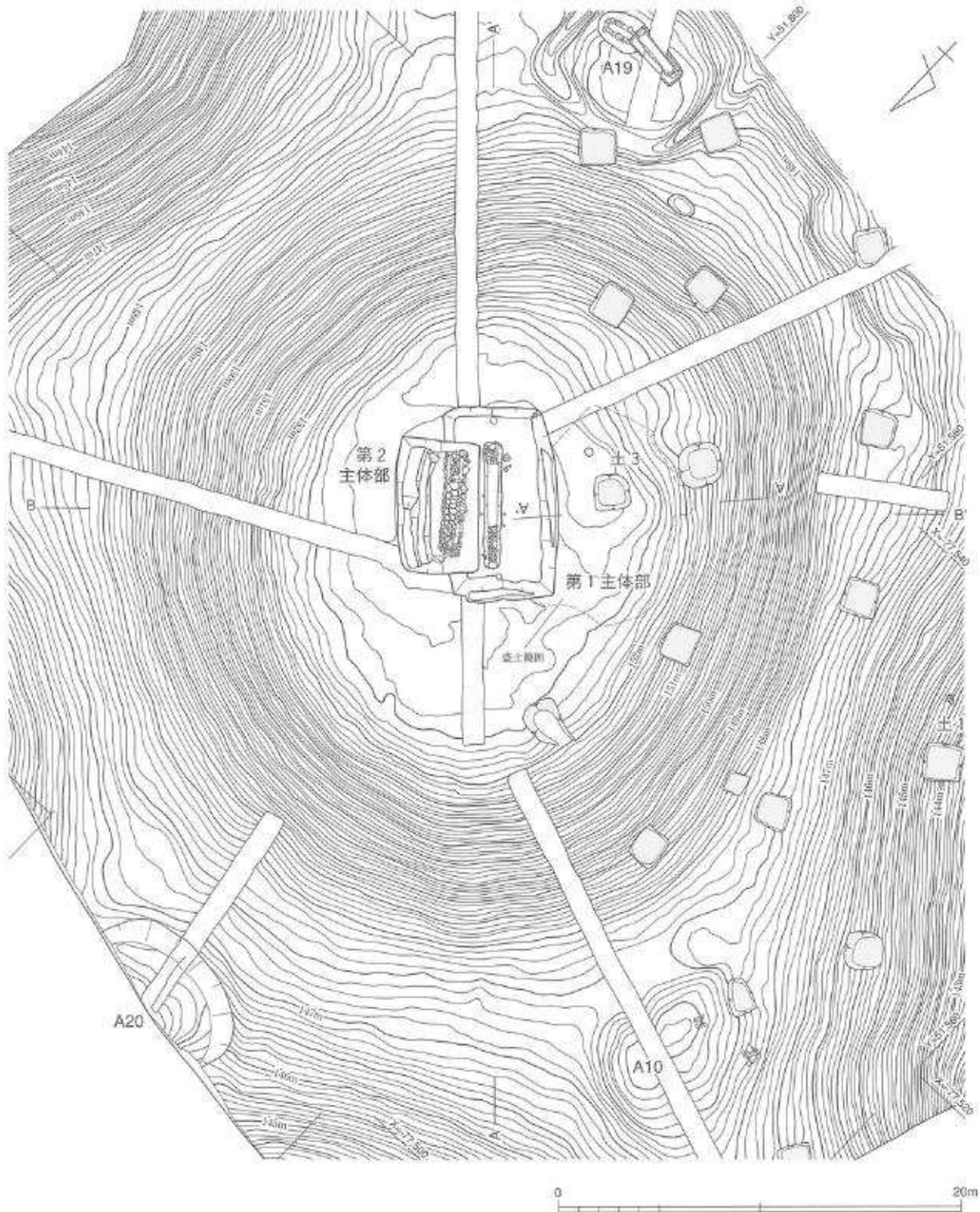
墓壇形態・規模 第1主体部は墳頂平坦面のほぼ中心から少し南東に寄った部分に位置しており、墳頂平坦面の中心部分は、後述する第1主体部の足部詰石の南東端付近である。

墓壇は平面長方形を呈し、北東側長辺は第2主体部と重複しており、不明となっている。

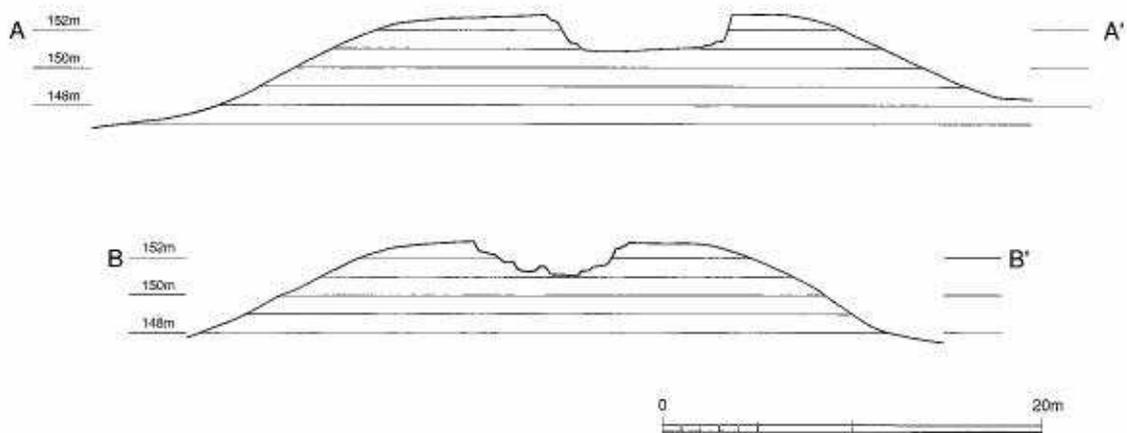
なお、第1主体部から第2主体部まで連続して横断する墓壇埋土土層断面図が現地で作成されなかつ

ため、図による両者の前後関係を提示できないが、カラー写真図版49の④に掲載した重複部分のメモ写真によれば、第2主体部が後出するように断面線が引かれている。

第1主体部の墓壇南西側長辺と北西側短辺の上部にはほぼ水平な小段が削り出されており、長側辺の小段は長さ5.05m、最大幅40cmで、墓壇検出面から小段までの高さは最大で35cmである。小段が造出された長側辺は外側に膨らむ弧状を呈しており、最大55cm程度張り出している。短側辺の小段は長さ3.25



第73図 若水古墳 (A11号) 墳丘平面



第74図 若水古墳（A11号）墳丘断面

m、最大幅45cmで、小段と墓壇検出面との高さの差は23cmである。墓壇検出面の北西側短側線は小段が存在する部分を四角く拡張しており、拡張幅は40cmである。これらの小段は棺材や詰石などを選び入れるといった運搬作業用が主な機能と考えられる。

一方、墓壇内に入るための足場としての機能が主なものとして、墓壇内側斜面の南隅に掘削された小穴が「足掛け」として推定することができる。幅17cm～29cmの削り込みが3段認められ、墓壇検出面からの各段の高さの差は上から28cm、45cm、20cmで、最下は落差40cmで棺検出面となる。

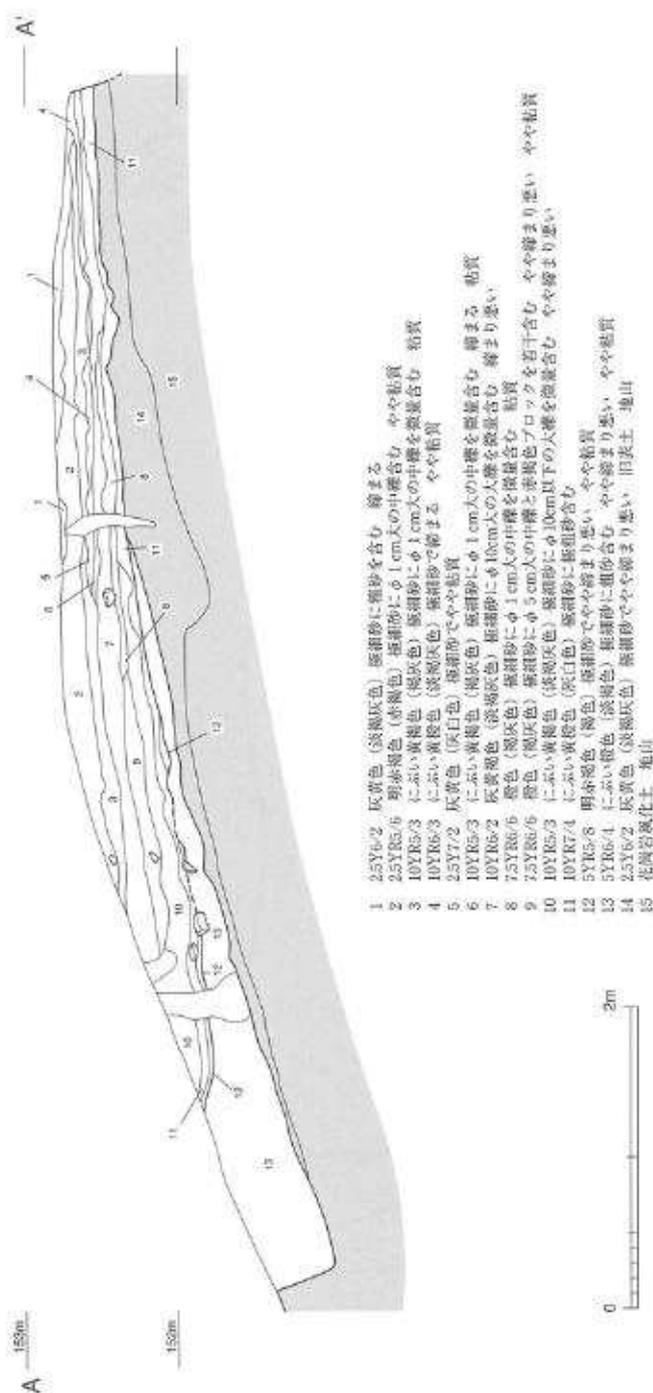
墓壇上部の詳細な形状は以上のとおりであり、検出面での墓壇の長さは9.55m、幅6.05mとなっている。墓壇底は長さ8.25m、幅4.05mで、底面は南西長辺側と南東短辺側で3段に掘り込まれているが、北東側と北西側では2段になっている。また、2段目は墓壇のほぼ中心部分を掘削しているが、3段目は北東側に少し偏っている。最下段の規模は長さ6.9m、幅1.8m程度で、2段目は長さ7.4m、幅2.5mを測る。最下段と2段目の落差は20cm程度と少なく、2段目と1段目も20cm前後とその差は小さい。墓壇検出面から1段目までの高さは1.34mで、最下段底から墓壇検出面までの深さは1.8mである。

また、最下段の底は長軸方向で高さの差があり、南東側が北西側よりも約15cm高くなっている。このことは、被葬者の頭位側が高くなっていることを示している。

墓壇埋土のうち、棺長辺の外側上部は灰白色と褐色の層を10cm程度の厚みで互層に埋めており、下部でも少し厚いが互層になっていた。また、これらの堆積はやや内傾していたが、棺の腐朽に伴って内側に流入したとしても墓壇壁付近まで傾斜が及ぶことは考えられないため、棺埋納に伴う墓壇埋め戻し時の傾斜を残しているものと思われ、外側の壁際から順に埋めていったことが窺えよう。

棺部分については棺の腐朽に伴って落ち込んだ層が全体的に船底状の堆積を示していたが、調査時には墳頂部に棺部分の窪みが残存していなかったことから、調査時よりも墳頂部がもう少し高かった可能性がある。特に北西側には礫を多量に含んだ層（第78図第10層）が棺内方向に落ち込んでいたことから、墳頂部全体ではなく墓壇上部の北西側にのみ礫の集積のような盛土があった可能性もある。

また、墓壇掘削の過程で、土層観察用に残っていた断面に柱穴状の落ち込みが墓壇内北西端と南東端の2箇所に存在していることが判明した。柱穴は直径30cm前後（28cmと33cm）で、深さは75cmと92cmもあった。この柱穴は掘り方を伴うものではなく、墓壇を埋める際に柱を立ててその周りを埋土で埋めかためたものである。平面位置は棺の小口部外側にほぼ相当し、これら2本の柱穴以外には検出されなかった。



第75図 若水古墳 (A11号) 墳丘盛土断面

- 1 25Y6/2 灰黄色 (淡褐色) 凝縮砂に粗砂を含む 締まる
- 2 25Y8/5 明赤褐色 (赤褐色) 凝縮砂にφ1cm大の中礫を含む やや粘質
- 3 10YR5/3 にぶい黄褐色 (褐色) 凝縮砂にφ1cm大の中礫を多量含む 粘質
- 4 10YR6/3 にぶい黄褐色 (淡褐色) 凝縮砂で締まる やや粘質
- 5 25Y7/2 灰黄色 (灰白色) 凝縮砂でやや粘質
- 6 10YR5/3 にぶい黄褐色 (褐色) 凝縮砂にφ1cm大の中礫を少量含む 締まる 粘質
- 7 10YR5/2 灰黄褐色 (淡褐色) 凝縮砂にφ10cm大の中礫を少量含む 締まり悪い
- 8 7.5YR6/6 紫色 (褐色) 凝縮砂にφ1cm大の中礫を少量含む 粘質
- 9 7.5YR6/6 紫色 (褐色) 凝縮砂にφ5cm大の中礫と赤褐色のブロックを若干含む やや締まり悪い やや粘質
- 10 10YR5/3 にぶい黄褐色 (淡褐色) 凝縮砂にφ10cm以下の大礫を少量含む やや締まり悪い
- 11 10YR7/4 にぶい黄褐色 (灰白色) 凝縮砂に粗砂を含む
- 12 5YR5/8 明赤褐色 (褐色) 凝縮砂でやや締まり悪い やや粘質
- 13 5YR6/4 にぶい褐色 (淡褐色) 凝縮砂に粗砂を含む やや締まり悪い やや粘質
- 14 25Y6/2 灰黄色 (淡褐色) 凝縮砂でやや締まり悪い 旧表土 埋土
- 15 花崗岩風化土 埋土

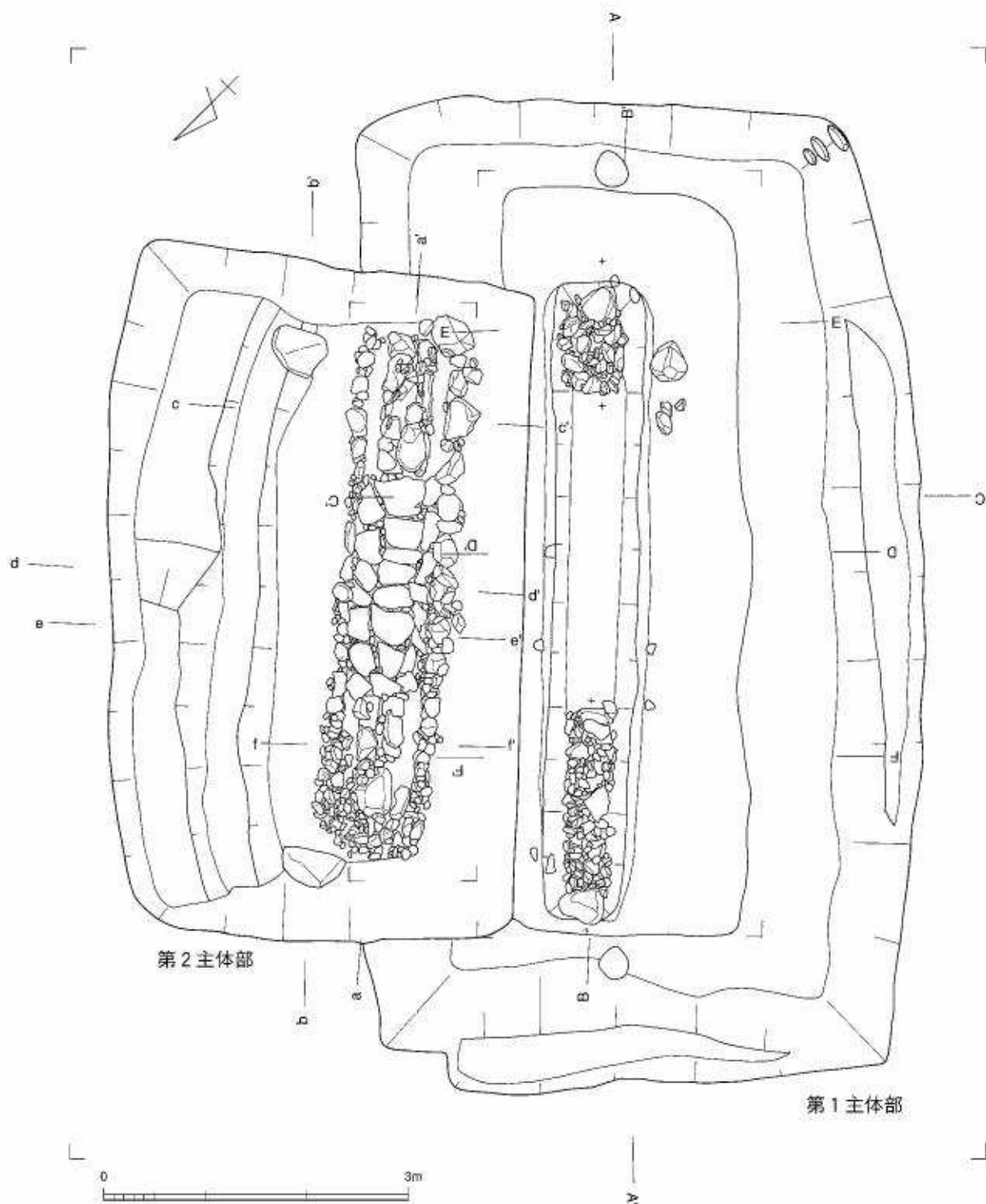
柱穴の埋土上方は、柱穴の蓋をするように墓室内への流入土で埋まっていることから、調査者は、墓室を完全に埋めるまでの間に何らかの作業用に立てていた柱であって、墓室を完全に埋める際には柱は抜かれた、あるいは切り取られたと判断している。しかし、被葬者を棺に納めるまでの墓室内は、少なくとも棺側板上面の高さまでしか墓室内を埋めていないのであるから、柱の高さにもよるが、墓室壁際に立てておくあるいは埋めて立てることは不可能であると思われる。また、被葬者を棺に納めて蓋を被せた後は、そのまましばらく置くことはせずに早い段階で墓室上面まで埋めたことが推定されることから、作業用としての立柱の機能が成り立たなくなるであろう。

調査者の判断の理由として、柱穴の上部が埋まっていることが挙げられるが、南東側柱穴では、柱穴の南東壁は墓室検出面まで続いており、蓋をしている埋土の厚さは30cmである。しかもこの土層は中央に向かって傾斜している。

これは、棺の腐朽に伴って墓室埋土が内側下方向に向かって動くためであるが、その際に腐朽した柱穴の上部が同時に崩壊しながら動いた可能性がある。また、北西側柱穴は墓室検出面から約30cm下部までしか柱穴の痕跡がないが、上部を埋めているこの層も南東側と同様に、中央下方に向かって流入していった状況を示しており、この層が礫を多量に含むことから、柱穴上部を崩壊させながら動いた可能性が高いと考えられる。

したがって、これらの柱は、被葬者を棺に納めた後、棺小口外側墓室際に立てられたもので、そのまま墓室が埋められ、完全に墓室が埋められた直後も切られたり、抜かれたりすることなく、腐朽するまで立っていた可能性があるが、しばらく後のある時点には、抜かれた可能性も考慮しておく必要がある。

その機能については、立柱は2本であり、柱間は7.6mもあるため、建物にはできないことから、喪



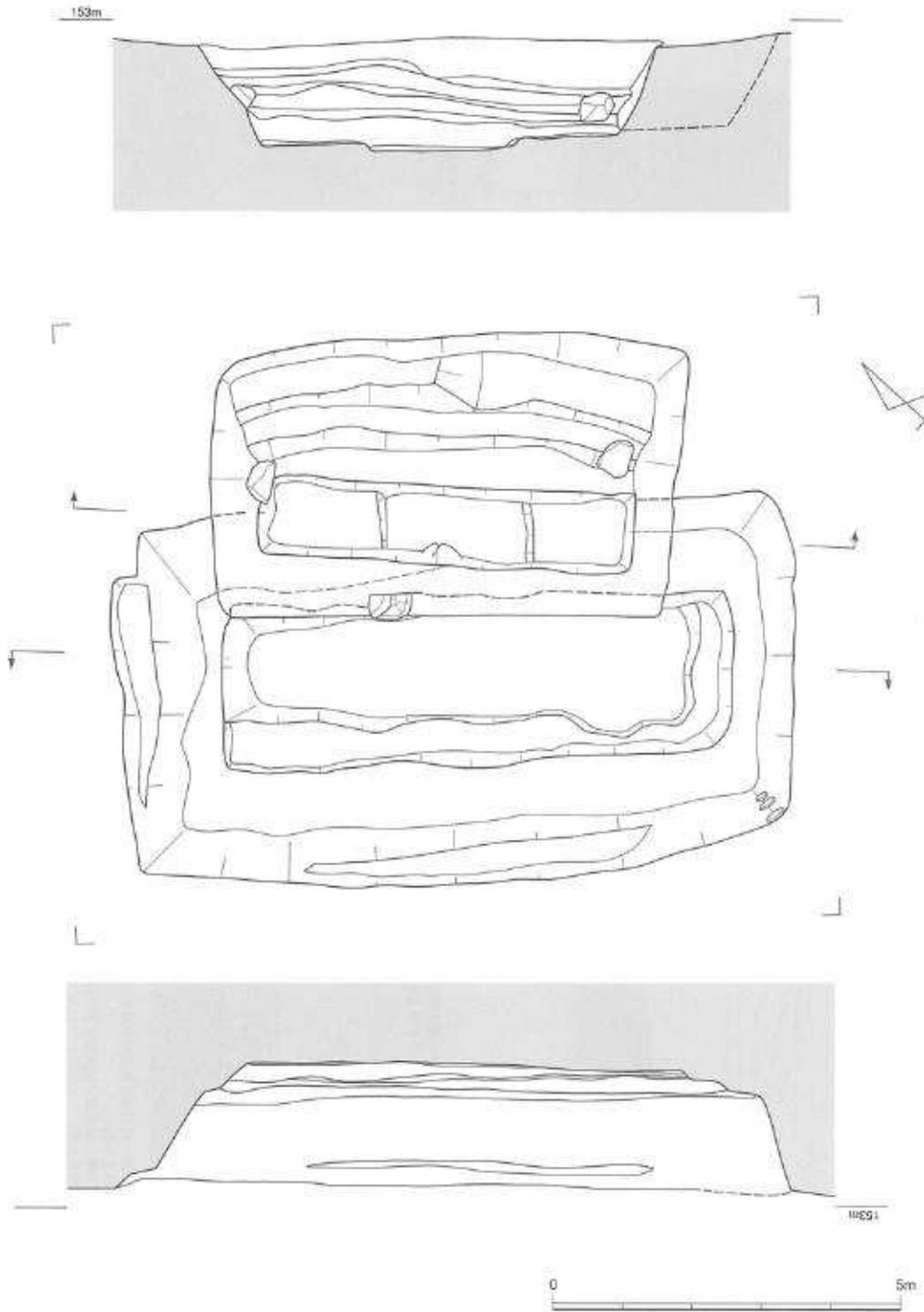
第76図 若水古墳（A11号）主体部平面

屋のような施設は不可能であろう。結論を急ぐが、ここでは「簾」あるいはそれに類似したものが立てられていたと想定しておきたい。

なお、墓壁の上面検出中に第99図に示した土師器甕口縁部片が出土している。

棺（第76・78～84図、カラー写真図版34～41、モノクロ写真図版12～15）

棺形態・規模 第1主体部の棺はいわゆる「H」形の組合せ式箱形木棺であるが、調査途中まで割竹

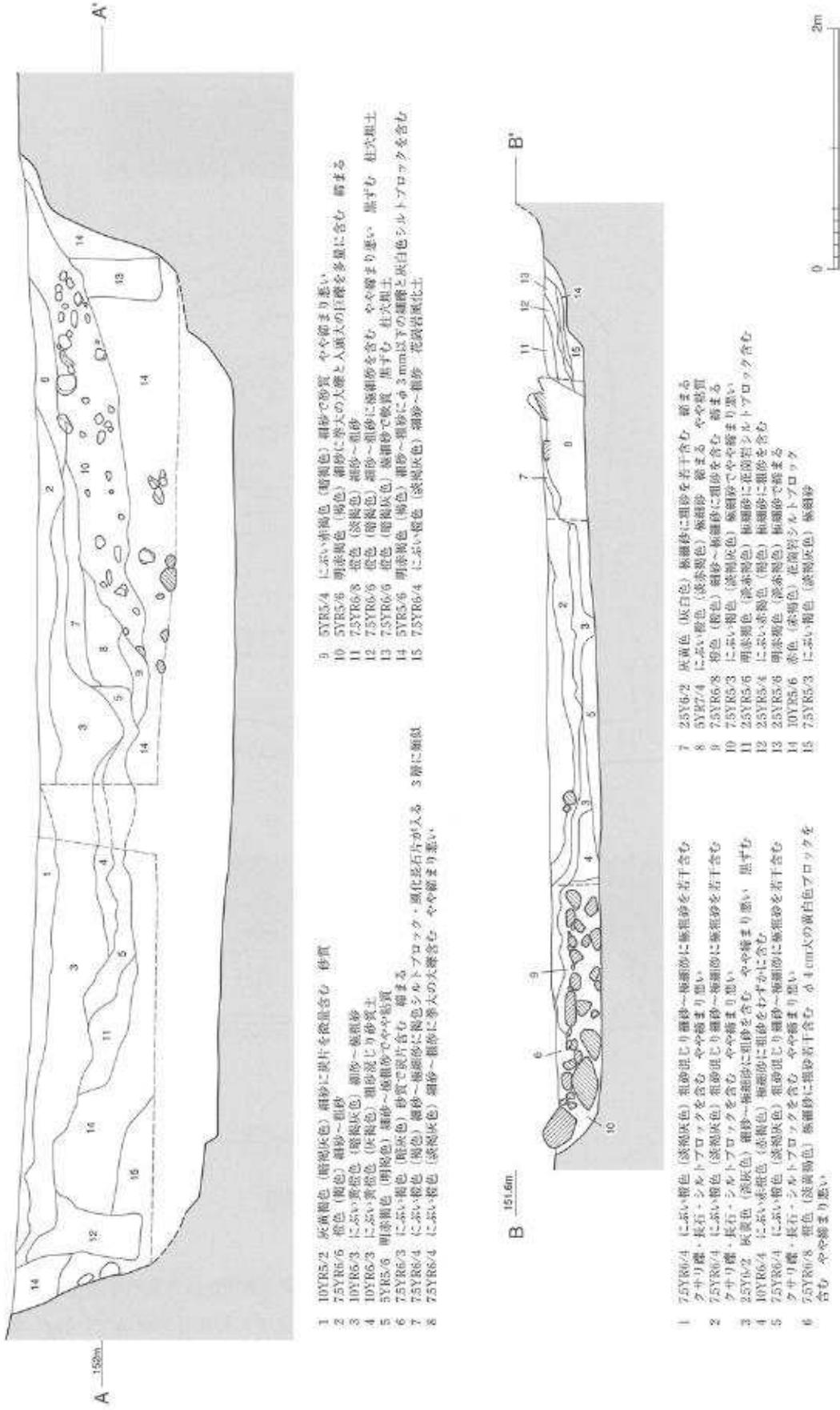


第77図 若水古墳（A11号）主体部墓壇

形木棺と誤認して調査を進めていた。

長側板が存在していたと思われる部分の長さは6.3mと長く、土層で確認された板の厚みは推定15cm程度である。南東端での棺内幅は66cm、北西側では48cmであり、外側での棺幅は南東端で1.0m、北西端では80cmである。棺検出面からの深さは40cm程度であるが、土層断面によれば75cm程度とみることができよう。いずれにしても、棺長や幅に比べてあまり高くなかったことが言えそうである。

棺内の埋葬空間は長さ3.04mで、頭位である南東端での内幅は54cm、足位では48cmである。埋葬部分

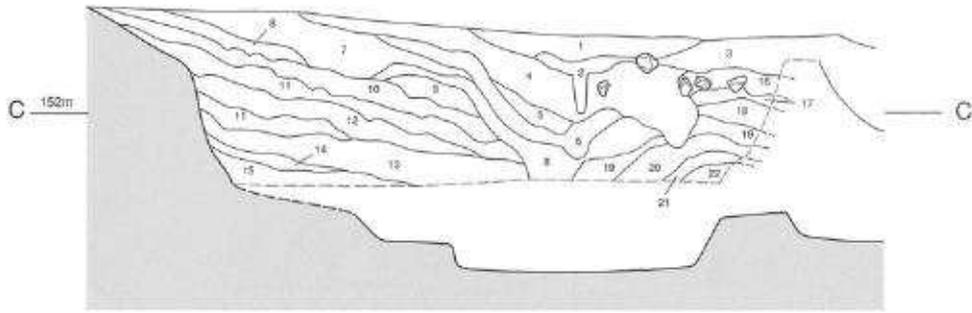


- 9 5YR5/4 にぶい赤褐色 (暗褐色) 粗砂で砂質、やや粘り強い
- 10 5YR5/6 明赤褐色 (褐色) 粗砂に赤土の大塊と人頭火の巨礫を多量に含む、粘まる
- 11 7.5YR6/8 灰色 (淡褐色) 粗砂~粗砂
- 12 7.5YR6/6 灰色 (暗褐色) 粗砂~粗砂に炭屑砂を含む、やや粘り強い、黒ずむ、柱状堅土
- 13 7.5YR6/6 灰色 (暗褐色) 炭屑砂で砂質、黒ずむ、柱状堅土
- 14 5YR5/6 明赤褐色 (褐色) 粗砂~粗砂に約 3mm以下の連続した灰白色シルトプロックを含む
- 15 7.5YR6/4 にぶい灰色 (淡褐色) 粗砂~粗砂、花崗岩風化石

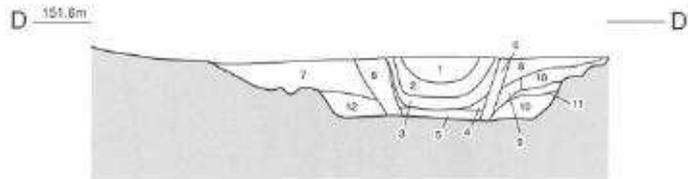
- 1 10YR5/2 灰黄褐色 (暗褐色) 粗砂に炭屑を微量含む、砂質
- 2 7.5YR6/6 灰色 (褐色) 粗砂~粗砂
- 3 10YR5/3 にぶい赤褐色 (暗褐色) 粗砂~粗砂
- 4 10YR6/3 にぶい赤褐色 (暗褐色) 粗砂に黒い砂質土
- 5 5YR5/6 明赤褐色 (暗褐色) 粗砂~粗砂でやや粘り強い、粘まる
- 6 7.5YR6/3 にぶい赤褐色 (暗褐色) 砂質で炭屑を含む、粘まる
- 7 7.5YR6/4 にぶい赤褐色 (褐色) 粗砂~粗砂的に褐色シルトプロック・風化岩石片が入る、3層に類似
- 8 7.5YR6/4 にぶい赤褐色 (淡褐色) 粗砂~粗砂に赤土の大塊を含む、やや粘り強い

- 1 7.5YR6/4 にぶい赤褐色 (淡褐色) 粗砂に黒い炭屑~粗砂に炭屑砂を若干含む、粘り強い
- 2 7.5YR6/4 にぶい赤褐色 (淡褐色) 粗砂に黒い炭屑~粗砂に炭屑砂を若干含む
- 3 2.5Y/2 灰黄色 (淡褐色) 粗砂~粗砂に炭屑砂を含む、やや粘り強い
- 4 10YR6/4 にぶい赤褐色 (暗褐色) 粗砂に粗砂を含む、粘り強い、黒ずむ
- 5 7.5YR6/4 にぶい赤褐色 (淡褐色) 粗砂に粗砂を含む、粘り強い
- 6 クチリ層・長石・シルトプロックを含む、やや粘り強い
- 7 2.5Y6/2 灰黄色 (灰白色) 粗砂中に粗砂を若干含む、粘まる
- 8 5YR7/4 にぶい灰色 (淡赤褐色) 粗砂、粘まる、やや粘り強い
- 9 7.5YR6/8 灰色 (褐色) 粗砂~粗砂に粗砂を含む、粘まる
- 10 7.5YR5/3 にぶい赤褐色 (淡赤褐色) 粗砂でやや粘り強い
- 11 2.5YR5/6 明赤褐色 (淡赤褐色) 粗砂中に花崗岩シルトプロックを含む
- 12 2.5YR5/4 にぶい赤褐色 (褐色) 粗砂に粗砂を含む
- 13 2.5YR5/6 明赤褐色 (淡赤褐色) 粗砂で粘まる
- 14 10YR5/6 灰色 (淡褐色) 花崗岩シルトプロック
- 15 7.5YR5/3 にぶい赤褐色 (淡褐色) 粗砂

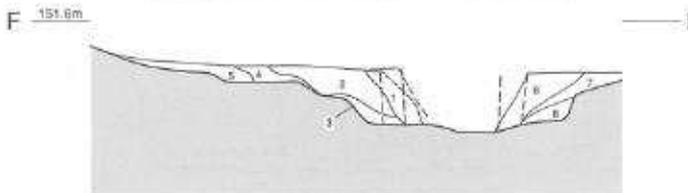
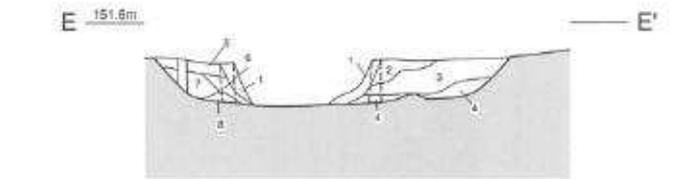
第78図 若水古墳 (A11号) 主体部埋土縦断面



- 1 10YR5/2 灰黄褐色 (暗褐色) 細砂で炭片を多量に含む 砂質
- 2 7.5YR5/6 明褐色 (灰褐色) ϕ 2cm大の中礫を少量含む砂質土
- 3 10YR6/3 にぶい黄褐色 (灰褐色) 粗砂混じりの砂質土 若干白く、花崗岩系の土が入る
- 4 10YR6/3 にぶい黄褐色 (暗褐色) 細砂～極細砂
- 5 7.5YR6/3 にぶい褐色 (暗褐色) 砂質土で炭片を含む 締まる
- 6 5YR5/6 明赤褐色 (明褐色) 細砂～極細砂でやや粘質
- 7 7.5YR6/4 にぶい褐色 (褐色) 細砂～極細砂に褐色シルトブロック・風化長石片が混じる 4層に類似
- 8 5YR5/6 明赤褐色 (明褐色) 細砂～粗砂に ϕ 3mm以下の細礫・灰白色シルトブロックを含む
- 9 10YR6/3 にぶい黄褐色 (暗褐色) 細砂～極細砂
- 10 10Y6/1 灰色 (灰白色) 細砂～粗砂に ϕ 3mm以下の細礫を含む 褐色シルトブロックを微量含む やや締まり悪い
- 11 7.5YR6/4 にぶい褐色 (褐色) 細砂～極細砂に褐色シルトブロック・風化長石片が混じる 4層に類似
- 12 10Y6/1 灰色 (灰白色) 細砂～粗砂に ϕ 3mm以下の細礫を含む 褐色シルトブロックを微量含む やや締まり悪い 10層と同じ
- 13 10Y6/1 灰色 (灰白色) 細砂～粗砂に ϕ 3mm以下の細礫を含む 褐色シルトブロックを微量含む やや締まり悪い 10層と同じ
- 14 10YR6/3 にぶい黄褐色 (暗褐色) 細砂～極細砂に褐色シルトブロックを多く含む
- 15 10Y6/1 灰色 (灰白色) 細砂～粗砂に ϕ 3mm以下の細礫を含む 褐色シルトブロックを微量含む やや締まり悪い
- 16 10YR6/3 にぶい黄褐色 (灰褐色) 粗砂混じりの砂質土 若干白く、花崗岩系の土が入る
- 17 10YR6/3 にぶい黄褐色 (灰褐色) 粗砂混じりの砂質土 若干白く、花崗岩系の土が入る
- 18 5YR5/6 明赤褐色 (暗褐色) 細砂で砂質土 やや締まり悪い 花崗岩系の土が入り若干赤い
- 19 5YR6/6 褐色 (褐色) 極細砂に粗砂を含む 赤色ブロックを若干含む やや締まり悪い
- 20 7.5YR6/4 にぶい褐色 (褐色) 細砂に花崗岩風化土を多く含む 赤・白色が目立つ やや締まり悪い
- 21 5YR5/6 明赤褐色 (暗褐色) 細砂で砂質土 やや締まり悪い 花崗岩系の土が入り若干赤い 18層と同じ
- 22 7.5YR6/4 にぶい褐色 (褐色) 細砂に花崗岩風化土を多く含む 赤・白色が目立つ やや締まり悪い 20層と同じ



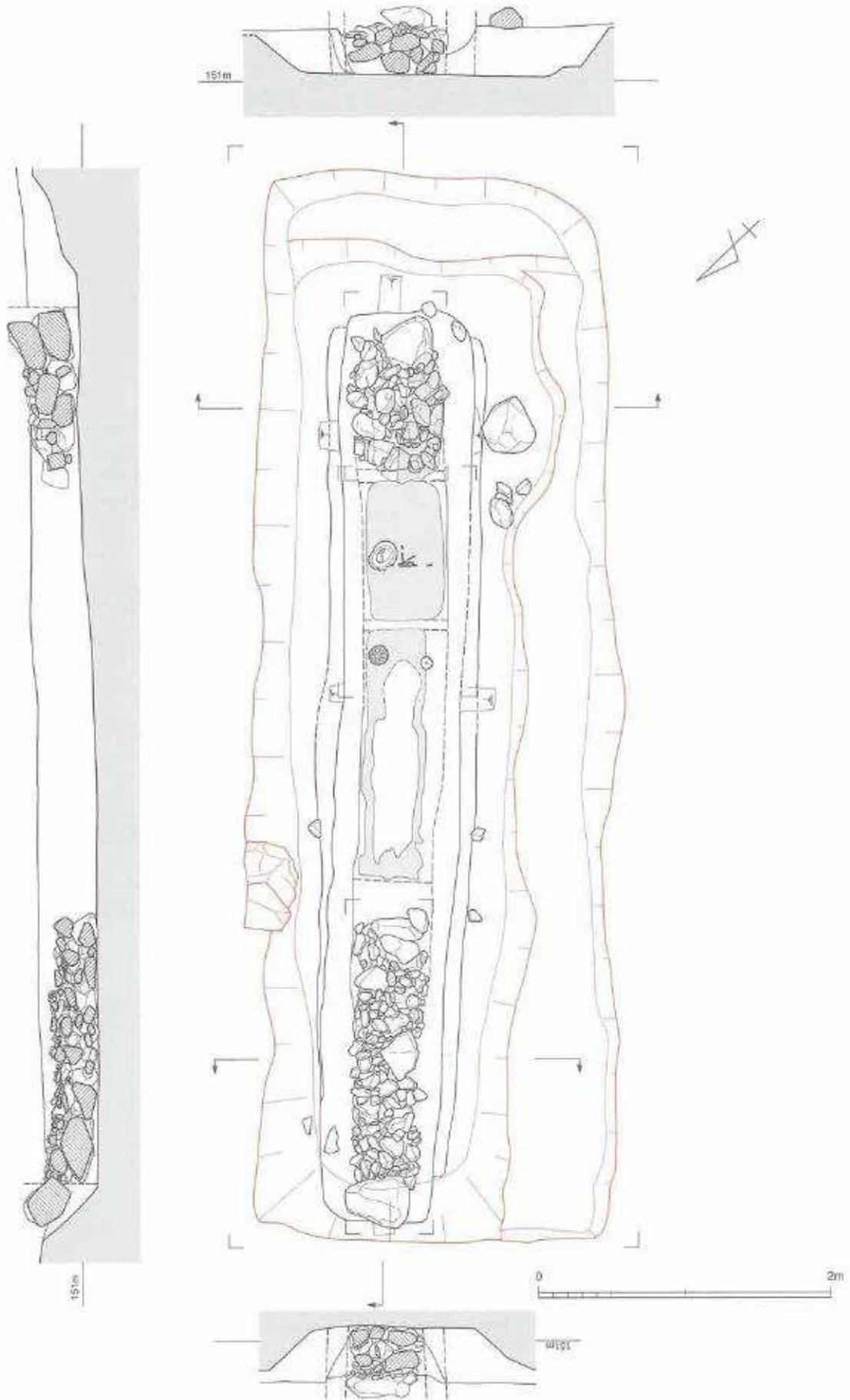
- 1 7.5YR6/4 にぶい褐色 (淡褐色) 粗砂混じり細砂～極細砂に粗砂を若干含む 褐色クサリ礫・白色長石シルトブロックを含む やや締まり悪い
- 2 7.5YR6/4 にぶい褐色 (淡褐色) 粗砂混じり細砂～極細砂に粗砂を若干含む シルトブロックの褐色クサリ礫多く、白色長石シルトブロックを含む やや締まり悪い
- 3 2.5Y6/2 灰黄色 (淡灰色) 細砂～極細砂で粗砂を含む やや締まり悪い
- 4 2.5Y7/2 灰黄色 (灰黄色) 花崗岩風化土を含み淡褐色シルトブロックを若干含む
- 5 10YR6/4 にぶい赤褐色 (赤褐色) 極細砂で粗砂をわずかに含む 花崗岩風化土
- 6 7.5YR5/2 褐色 (淡褐色) 極細砂で締まり悪い
- 7 7.5YR5/3 にぶい褐色 (淡褐色) 極細砂で花崗岩風化土を多く含む
- 8 7.5YR5/3 にぶい褐色 (褐色) シルトブロック混じり極細砂で進山ブロックを多く含む
- 9 7.5YR5/3 にぶい褐色 (淡褐色) 極細砂で花崗岩風化土を含まない
- 10 7.5YR5/3 にぶい褐色 (淡褐色) 極細砂で花崗岩風化土を含む
- 11 7.5YR5/3 にぶい褐色 (褐色) シルトブロック
- 12 10YR5/2 灰黄褐色 (淡褐色) 極細砂に花崗岩風化土を多く含む やや締まり悪い



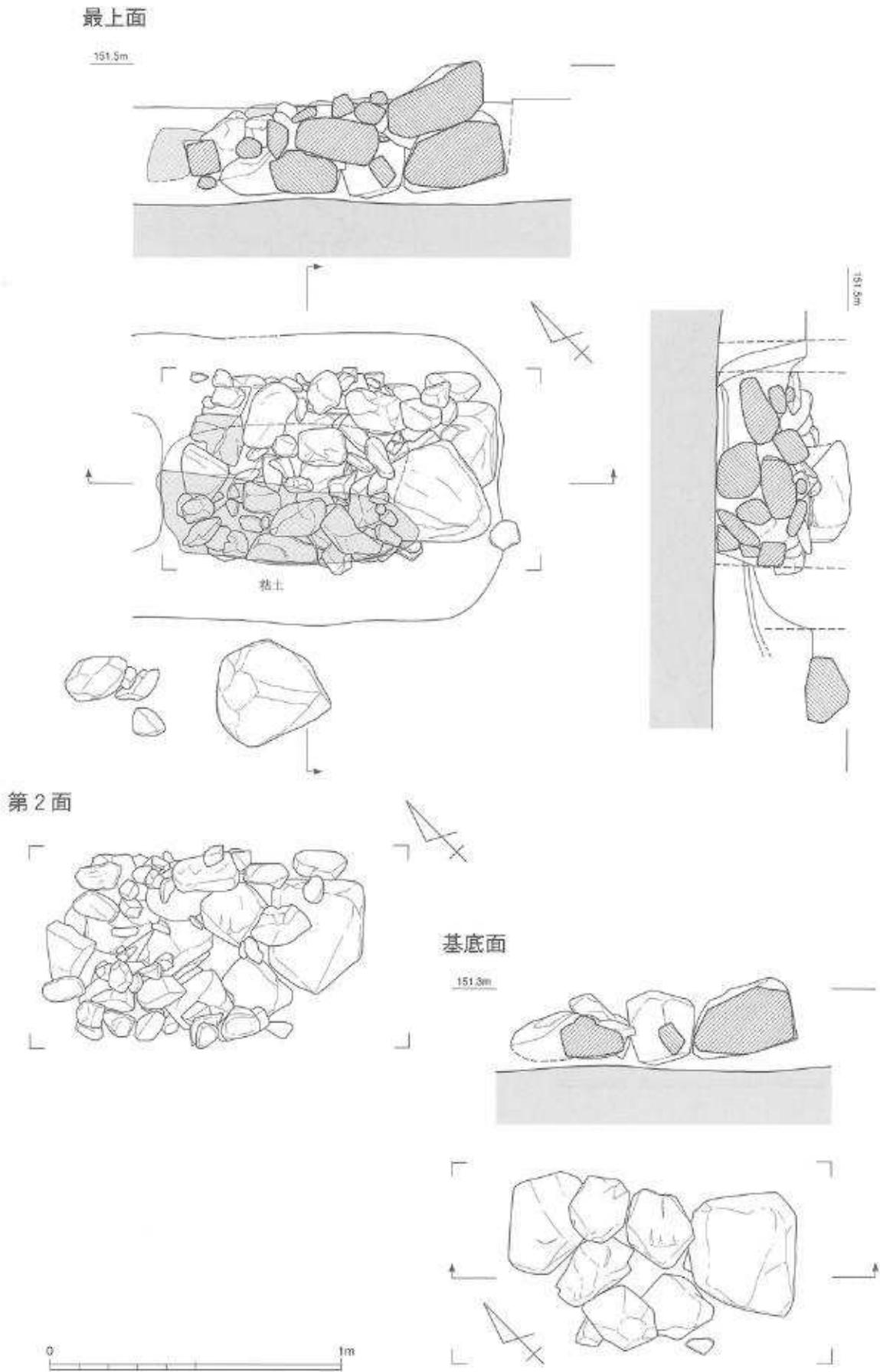
- 1
- 2 7.5YR5/4 にぶい褐色 (淡褐色) 極細砂で褐色シルトブロックと ϕ 1mm以下の粗砂を含む 締まる
- 3 7.5YR5/6 明褐色 (暗褐色) 極細砂で褐色シルトブロックと ϕ 1mm以下の粗砂を含む やや締まり悪い
- 4 2層と同じだがシルトブロックは含まない
- 5 2層と同じ
- 6 5YR5/6 明赤褐色 (淡褐色) シルトブロックで礫を多く含む 締まる
- 7 7.5YR6/8 褐色 (淡黄褐色) シルトブロックで礫は含まない 締まる
- 8 7.5YR5/4 にぶい褐色 (淡褐色) シルトブロックで締まる



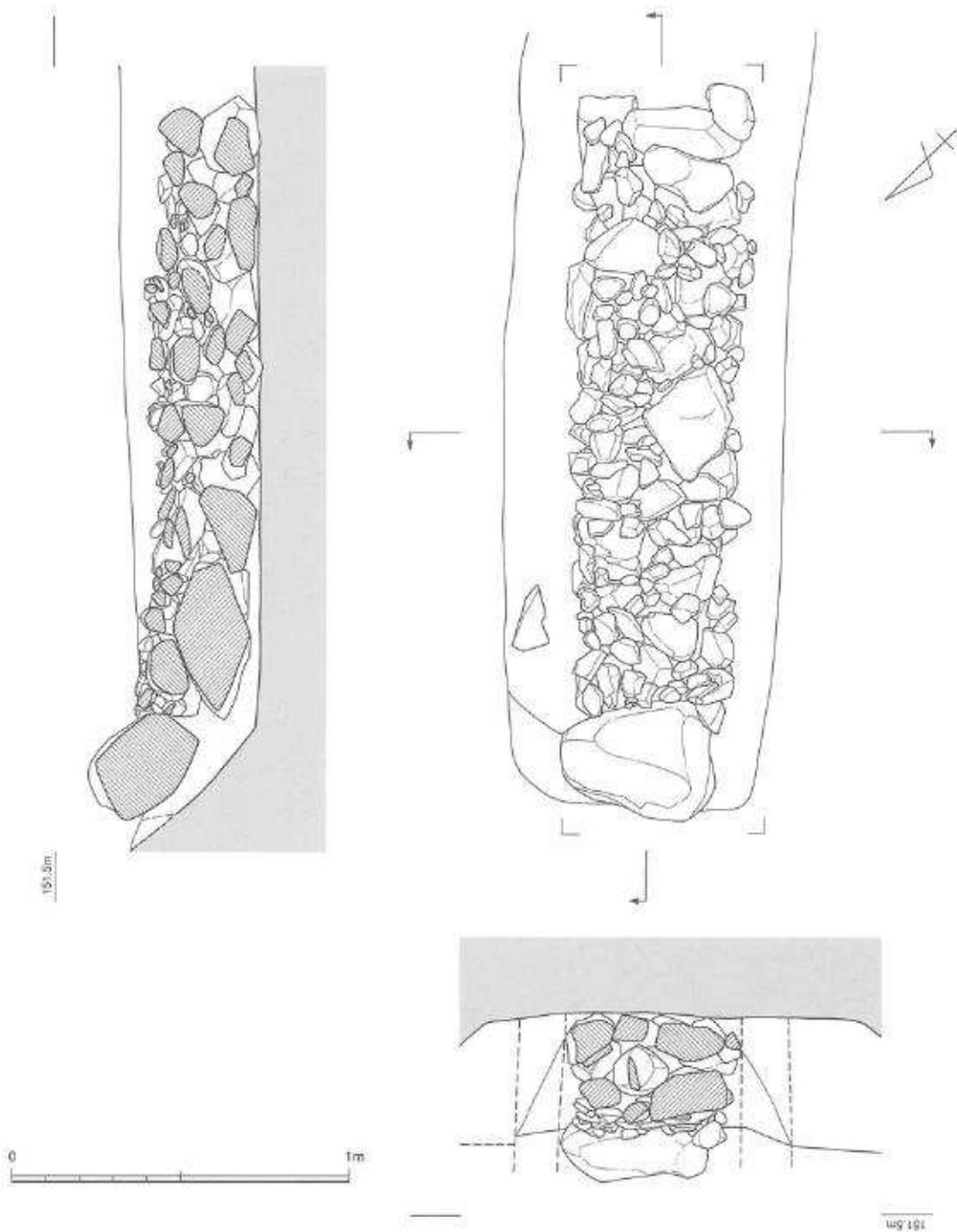
第79図 若水古墳 (A11号) 第1主体部 埋土横断面



第80図 若水古墳（A11号）第1主体部 埋葬施設



第81図 若水古墳 (A11号) 第1主体部 東側小口部詰石

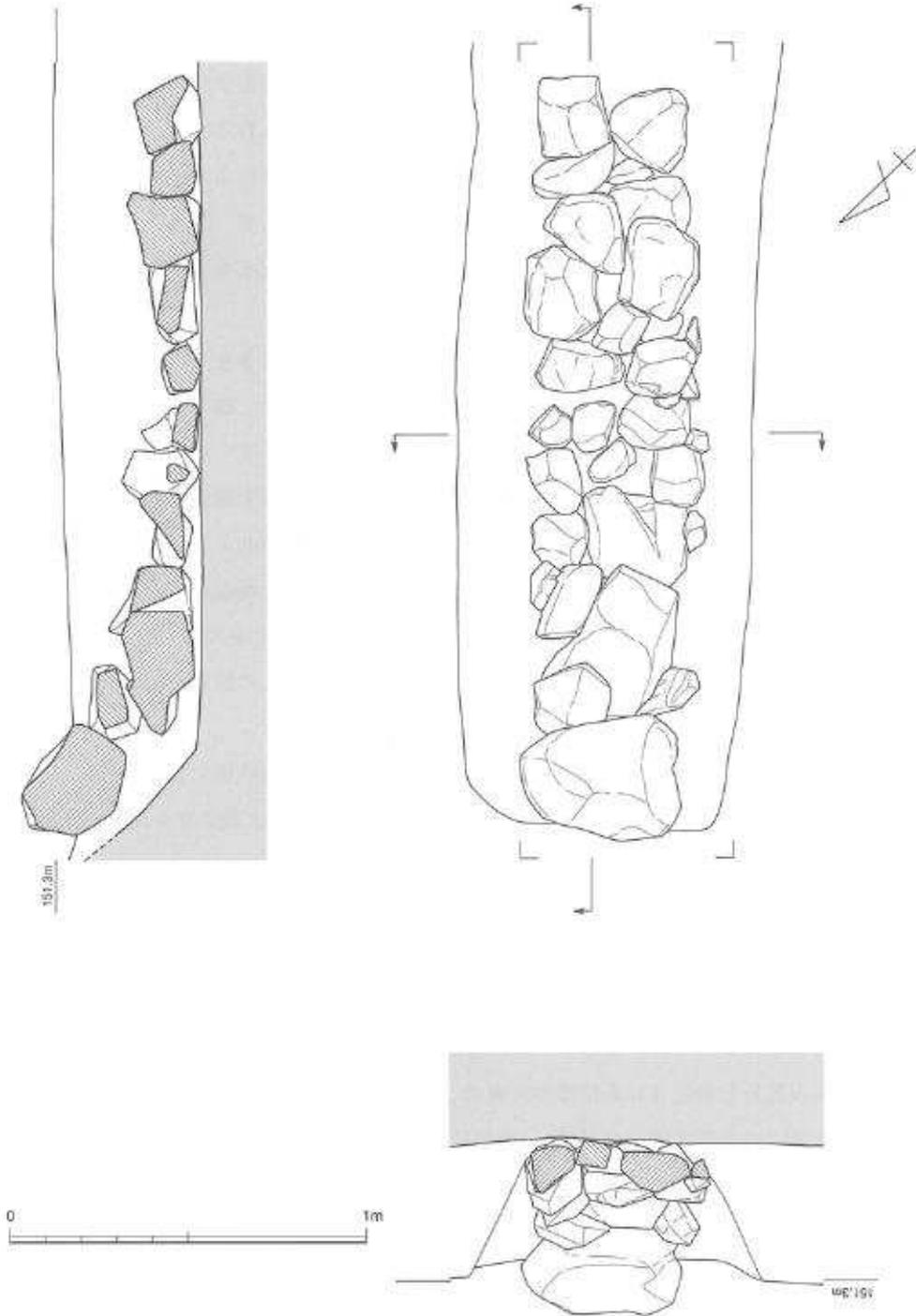


第82図 若水古墳（A11号）第1主体部 西側小口部詰石（上面）

の小口側には、後述する詰石が構築されていたことから、その内側に接して仕切板が設置されていたものと思われる。特に東側では、詰石との間の赤色顔料の途切れ部分が7cmの幅で認められ、小口板の厚みを示していると推定される。足側についても赤色顔料が途切れる部分が存在したが、詰石との間隔は30cmと非常に広いため、そのまま仕切板の厚みを示しているものではないであろう。

なお、棺主軸方向はE47°Sで、棺底の高さは南東側が北西側に比べて15cm高くなっている。

埋葬部分をさらに詳細に見ると、合子や鉄器が出土した部分の赤色顔料が、銅鏡が出土した部分までの間で、棺主軸と直交方向に途切れていることから、この部分にも仕切板が設置されていた可能性が高



第83図 若水古墳（A11号）第1主体部 西側小口部詰石（基底面）

い。この仕切板の厚みは推定で8cmである。そうすると、被葬者を埋葬した部分の主室の長さは約1.92m、合子や鉄器を副葬した副室は長さ約96cmとなる。なお、赤色顔料の状態から類推すると、棺の内面に塗布されていたものと思われ、また、棺の底板は設置されなかったと推定される。

棺内の埋土のうち、第78図の第3層や第79図DD'の第3層は締りが悪く黒ずんだ層であることから、腐朽して棺内に落ち込んだ棺蓋の痕跡であろう。この第3層は、第78図の棺内長軸方向埋土土層断面図によれば、棺の埋葬部分を越えて北西側に続いていることから、棺蓋は埋葬部を中心とした主室や副室部分に限定せずに、後述の詰石部分にも及んでいたと判断できそうである。そうすると、棺蓋の長さは

長側板と同じ、あるいは近い長さになり、棺蓋を被せた後は、両側の詰石は棺蓋や長側板に覆われて見えなくなる。その姿は長大な木棺墓として映ることとなり、それを意図していた可能性がある。すなわち、長大な木棺墓として埋葬することが主眼であって、後の時代の茶すり山古墳のように長大な木棺墓内を4区画に仕切ったうえに、長側板の両端まで多量の副葬品を入れるのとは異なって、副葬品および副葬品を入れる区画数は少ない。しかしながら、棺の長さや大きさによって、言い換えれば、数多くの品々を副葬する風習が顕在化する以前のステータス・シンボルとして、長大な木棺墓とすることが重視されたと推定でき、さらに、木棺の長さや大きさによって階層の上下を判断することも可能であると考えられる。

なお、土層断面図をみる限りにおいては、棺底板の痕跡と判断できそうな層は認められない。

さて、棺の長側板が短側板よりも外側に突き出た部分の間隙には、礫が詰められていた。礫は一辺10cm～36cmの角礫～亜円礫で礫の長辺や平坦面を長側板内面に接するように置いており、詰石外側長側面は垂直に近く、外側面から見れば石垣に近い景観であったため、調査初期には石棺と誤判断して調査を進めていた。詰石の下部には比較的大きな礫を置き、上面や礫間隙および長側板との間隙には、やや小さめの礫とともに3cm程度の小礫も使用している。さらに詰石の上面は黄色粘土で被覆されており、頭位側で顕著に認められたものの、足位側ではわずかであった。頭位側の詰石の長さは0.8m、高さは36cm、足位側では1.85mの長さ、32cm程度の高さであった。なお、この詰石については、簡略したかたちと思われる類例が付近および周辺に散見される。

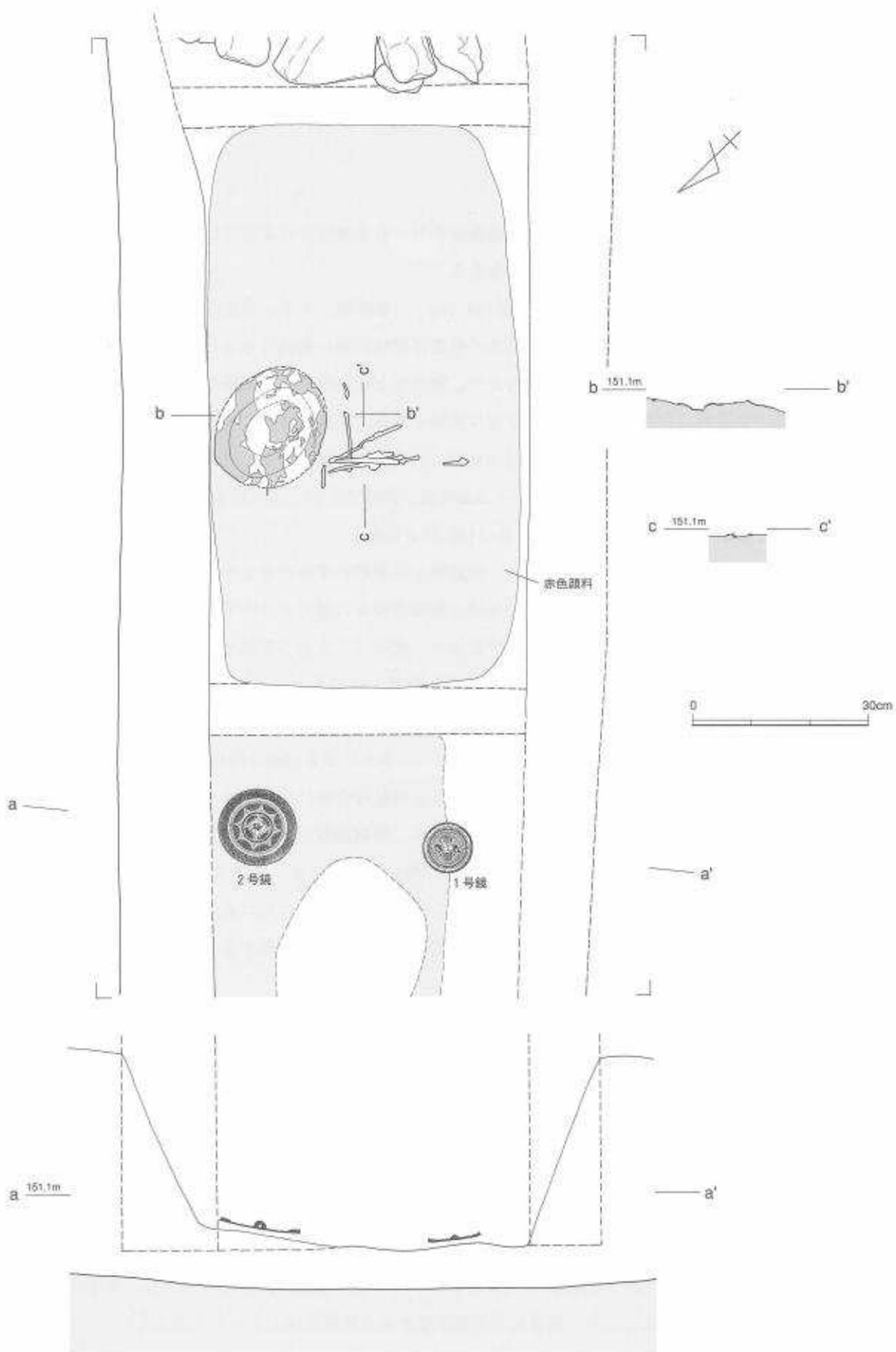
また、詰石に接して最も外側には、一辺40cm程度の垂角大礫が頭位側で2点、足位側では1点が置かれており、小口部閉塞石の可能性が高い。なお、大礫上端は詰石の上面よりも10cm上部に突き出ている。

棺内副葬品出土状況

棺内の副葬品として銅鏡2点と合子および鉄製品が出土した。これらのうち、合子と鉄製品は副室に埋納されていたものであり、銅鏡は被葬者埋葬部分に置かれていた。

被葬者埋葬部分には人のかたちの周囲に赤色顔料が残存していたようで、その状況から、赤色顔料は棺の内面に塗布されていたものであり、被葬者に直接塗布していたものではなさそうである。銅鏡2点は被葬者の頭頂部分と推定される位置の両側で、どちらも鏡背の文様側を上にした状態で検出された。北側は連弧文鏡（内行花文鏡：2号鏡）、南側は飛禽文鏡（1号鏡）であり、どちらも水平に近い状態であったが、棺内側に少し内傾していた。また、1号鏡～2号鏡間の距離は21cmであり、2号鏡上端の方が1号鏡上端よりもレベル的に4cm～5cm上であった。1号鏡は文様の頭部が南側を向いていた。なお、1号鏡が検出されたのは11月8日であるが、2号鏡はその約1ヵ月後の12月11日に発見された。これは、割竹形木棺と誤認して調査していたためで、2号鏡が発見された時点では小口部の詰石もほとんど除去し、墓壇底面の状態に近くなっていた。遺物全体の良好な出土状況写真がないのはそのためである。

副室の中央部では、北側で合子、その南側の副室中央部で鉄製品が出土した。合子の上面および周囲には赤色顔料が認められたが、合子の底面の土を除去した際には赤色顔料が認められなかったことから、棺内面のうち、底には赤色顔料が塗布されていなかった可能性が高い。合子は蓋と思われる外表面の残存漆膜の面を検出したのち、土ごと切り取って持ち帰り、底の土を除去したが、その際、合子蓋が横にずれて潰れていたことが後に判明した。しかも、結果的に底部高台部分の3分の1を欠損することになった。これは、蓋の形状で垂直に切り取ったためである。また、下側の土を除去したのが出土後7年を経過した後であったため、上面の漆膜の劣化が著しく、黒カビで覆われた状態であった。



第84図 若水古墳（A11号）第1主体部 遺物出土状況

なお、第1主体部で使用されていた赤色顔料は、すべて朱であることが分析の結果判明している。

出土遺物

第1主体部の出土遺物には、主室の鏡2面と副室の鉄製品5点および合子1点がある。

第1主体部

鏡 鑑

若水古墳の第1主体部においては、棺内の被葬者頭部付近と想定される場所から2面の青銅鏡が出土した。以下、それぞれについて若干の説明を加える。

1号鏡 (M10) 飛禽文鏡 径9.1cm 重量149.10g (第85図、カラー写真図版50・51)

遺存状況 欠損はなく完形品である。鏡背面の色調は黒味の強い鉛色を基本とし、一部が白銅色である。たいして鏡面は白銅色を呈する部分が目立つ。錆化などの劣化により表面が浮いた部分や縁部にごく小さな欠損があるが、全体としての遺存状況は良好である。鏡面にはところどころに赤色顔料が付着する。また、布そのものは遺存しないが、鏡面全面に目の細かい布が付着した痕跡がある。

法 量 直径9.1cm、厚さは内区で1.0～1.5mm程度、外区で2.0～2.5mm程度、縁端部で約4.0mmである。鏡面の反りは3.0mm弱。保存処理前の重量は149.69gである。

文様・形態 中心に円座にのった鈕がある。鈕は整った形態の半球形をなす。ただし、わずかに高さが高く、やや扁平な形となる。鈕座となる円座は、周縁がほかの部分より若干高くなる。鈕孔は両方ともに丸みを帯びる。この点については、後述するように使用にともなう摩滅を本鏡には想定することが可能であり、鈕孔の丸みについても摩滅によるものと理解しておきたい。鈕孔の本来の形については、はっきりしないものの、現状からみて半円形を指向したものとする。孔付近には平坦になった部分を確認できるが、摩滅の影響が強いためにこれを製作時の面取りによる痕跡と確認することはできない。なお、鈕孔下辺はわずかに円座より浮いた位置にあり、鈕孔は全体に片側へとわずかながら傾く。

内区は円座にのった乳で4区画する。乳は高さが高く、断面形態が半円形に近いものである。乳座の円座は周縁がほかの部分より突出しており、円座に近いものとなる。主像は俯瞰形の飛鳥文であり、内区の区画のそれぞれに頭部、両翼、尾部を配する。鳥文は頭部を右に向ける。各部はやや平板な浮き彫り、つまり薄肉彫りによってあらかし、羽毛の一部や脚部を細線で表現する。翼の羽については立体的な表現である。

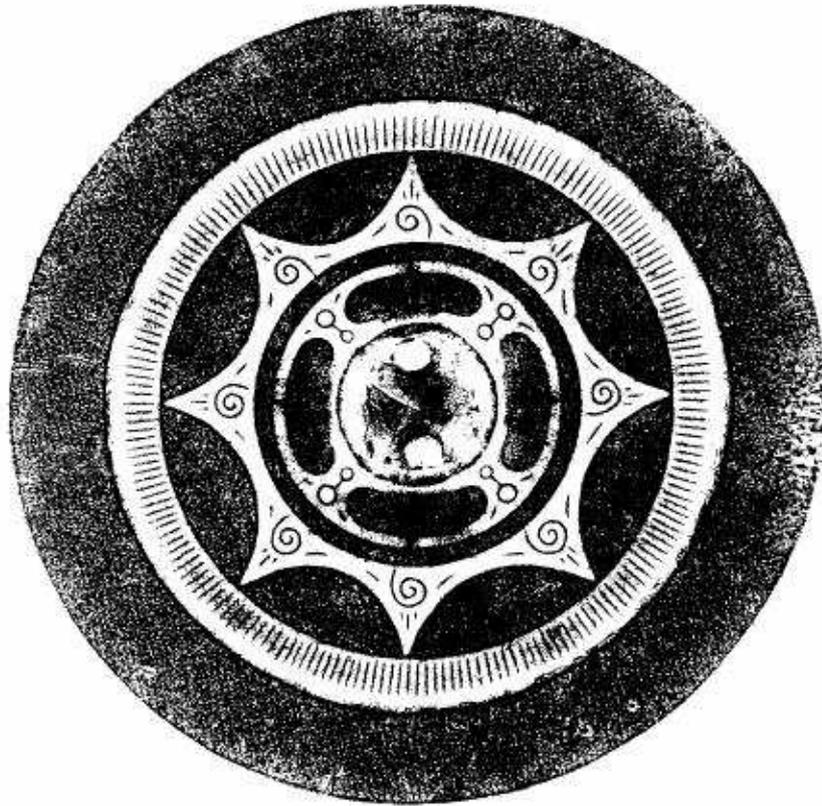
内区の外周は圏線によって画された無文帯と櫛歯文帯からなる。櫛歯文帯は突線が太く、その間隔も粗い。また、部分的に内側の無文帯にはみだすところがある。

一段高い外区には約1.0mmの小さく緩やかな段差をへて至る。外区には外向きの鋸歯文帯を配する。鋸歯文帯のひとつひとつをやや大きく表現する。さらに鋸歯文帯の外周には突線をめぐらし、突出の小さな斜線につながる。

鑄造・研磨 文様の表出はやや甘い。鈕の表面には凹凸がなく、縁頂部も丸みをもつ。ただし、鈕孔の内部などは丸みのない形状であり、鑄造時の状況がある程度とどめる。その状況は、本来は現状よりはるかに鮮鋭な鑄上がりであった可能性をうかがわせる。また、鈕孔の内部だけでなく、文様の凹部も表面の状態は鮮鋭さをとどめており、鑄造時の表面状態をある程度反映したものとする。したがって、現状において本鏡にみる文様の曖昧さは、鑄造など製作にかかわることが要因ではなく、使用にともなう摩滅と考えてよいだろう。なお、摩滅が著しいため、研磨などの製作痕跡についてはみいだせない。



M10



M11

0 5cm

第85図 若水古墳（A11号）第1主体部 出土鏡

湯口については、表面上の観察のみから、その位置を特定することはやや困難である。ただし、図で上の区画に相当する範囲の外区がほかより薄くなる点は注目できる。また、X線透過写真では、外区の薄い部分には鑄巣が目立っており、鑄込みの際に上部に位置していたことをうかがわせる。以上の2点から、図で上に位置する鈕孔の開口方向延長上の縁部付近に湯口が取り付けられた可能性がきわめて高いと考える。なお、内区外周の櫛歯文帯や外区の鋸歯文帯にわずかではあるが、範傷を確認できる。

2号鏡 (M11) 連弧文鏡 径14.1cm 重量429.25g (第85図、カラー写真図版52・53)

遺存状況 欠損はなく完形品である。色調は鏡背面が漆黒色あるいは白銅色、鏡面はおおむね鉛色を呈する。鏡面に表面の浮いた部分のごくわずかにあるが、遺存状況はきわめて良好といえよう。鏡面にはところどころに緑錆があり、くわしく観察すると布が付着しているのを確認できる。また、わずかだが文様などの凹部に薄く赤色顔料が残る。なお、縁部から外区にかけての一部に肌色に近い色調の有機質が付着する。肉眼観察では鹿角もしくは人骨と考えるものである。出土状況において想定した遺体の範囲に、もっとも近い部位にのみに確認できることから、被葬者の人骨が付着したものである可能性がきわめて高い。

法 量 直径は14.1cmである。厚さは内区で1.0~1.5mm程度、外区で約4.0mm、縁端部で約5.0mmである。鏡面の反りはおよそ5.0mmと強い。

文様・形態 中心に円座にのった鈕がある。周囲には四葉座がめぐる。鈕の形態はやや高さのある整った半球形を呈する。鈕孔はおおむね半円形であり、孔付近をごくわずかに面取りする。鈕孔下辺は円座の上面よりわずかに浮いており、段差がある。鈕孔の開口方向は、対向する葉文の先端を結ぶ方向と一致する。鈕座を構成する円座は、高さが一定のものである。鈕座の葉文の形状は扁平である。葉文の間のベース面には結び目文が形骸化したような図文を単位文としてくり返す。

内区には幅約4.0mmの圏帯をへて至る。内区には連弧文8個を、四葉座と対応させて配する。文様を刻み込むベース面には弧文に沿った突線があり、各弧文に2つつ付属する。また、連弧文の間には山形文の一部を渦巻文と組み合わせたとような図文を単位文としてくり返す。

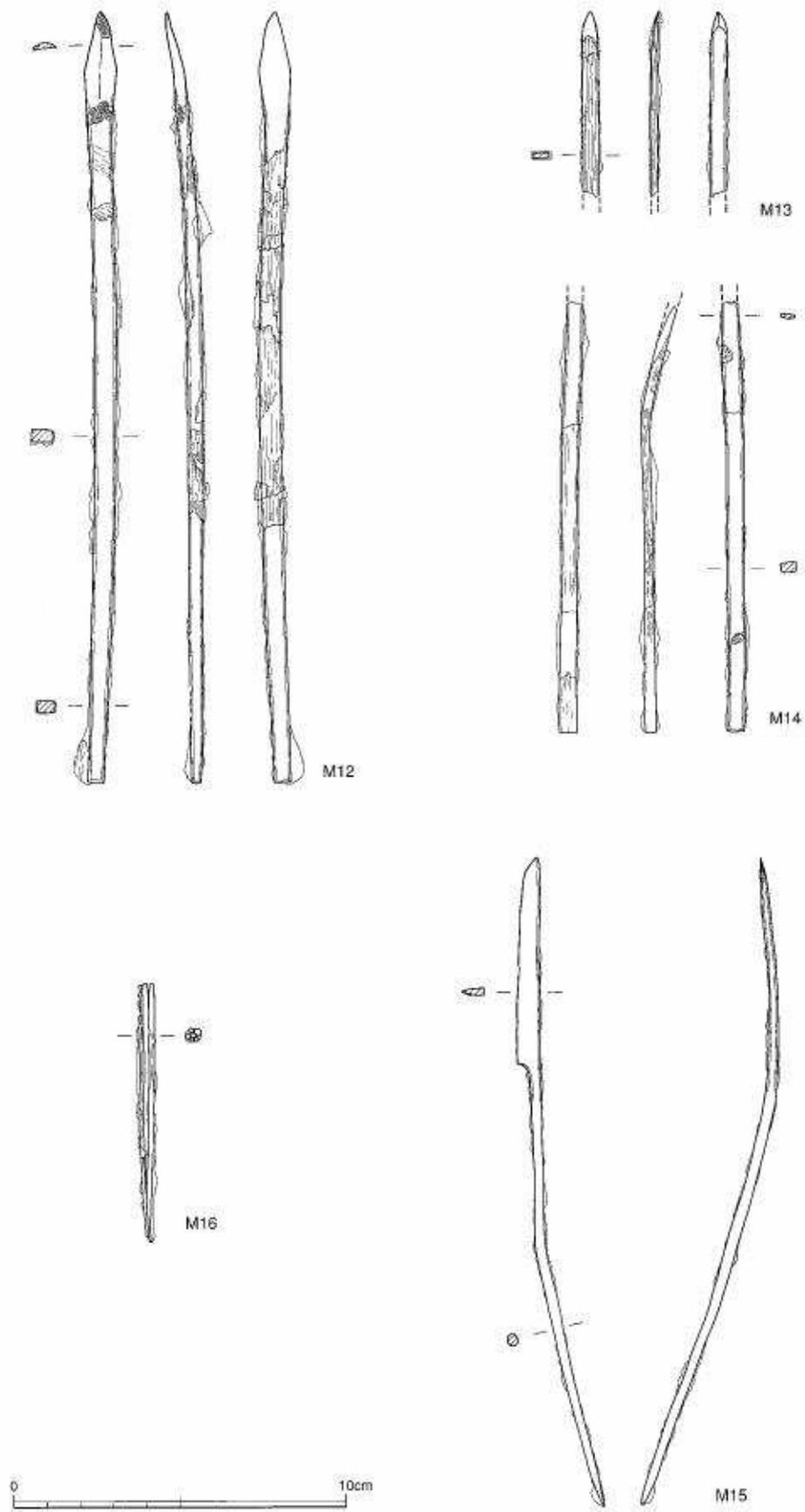
内区外周部には櫛歯文帯をめぐらす。きわめて細い突線を密に配列する。

一段高い外区には約2.5mmの明瞭な段差をへて至る。外区は素文であり、上面は直線的な形態を呈する平縁である。また、縁部傾斜端面の立ち上がりは、鏡面の反りが強いせいもあって、やや緩やかにみえる。なお、傾斜端面は直線的ではなく、わずかに丸みを帯びる。

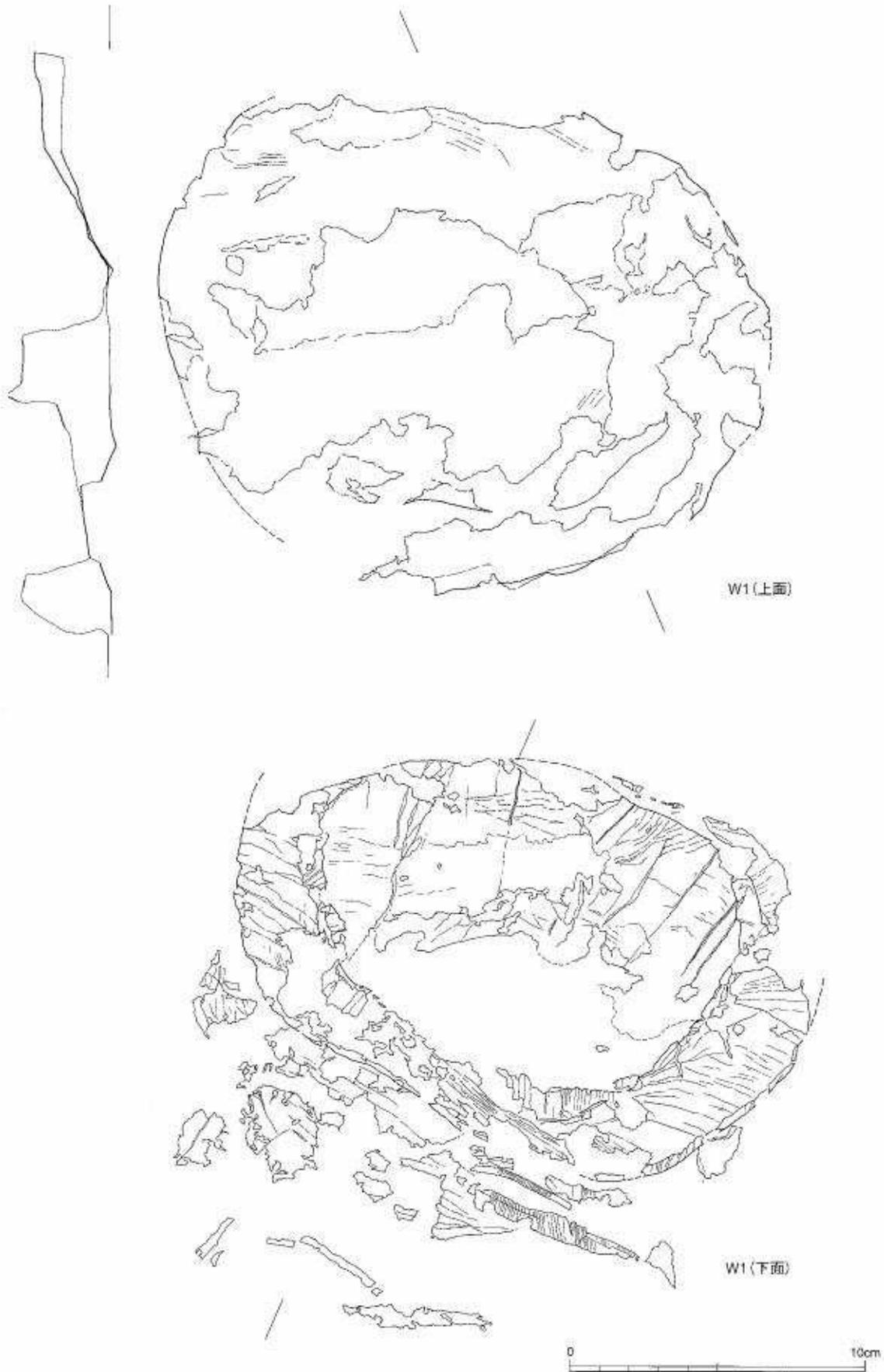
鑄造・研磨 文様の表出はきわめて鮮明であり、鑄上がりは非常に良好である。X線透過写真をみても目立つような鑄巣などの鑄造欠陥がみあたらない。したがって、湯口の位置も判然としない。ただし、図で左側下半分程度の範囲の外区がわずかに薄くなっている。またそれに対応するように内区外周の櫛歯文に不鮮明となったところがある。こうした外区の厚みの違いや文様の不鮮明な部分のあり方を積極的に評価すれば、そうした現象のみとめられる部分を中心とした付近の縁部端に湯口が取り付けられた可能性を推測できるかもしれない。

もう1点、鑄造にかかわる痕跡として注目できるのが、文様凹部の表面状態である。とくに、櫛歯文帯のベース面は粗い表面状態であり、範の材質を反映するものと考えられる。砂型などの粗い表面状態の範を使用した可能性を想定できるだろう。同様の表面状態は鈕孔内部においても観察できる。

仕上げの後処理など研磨の痕跡も部分的ながら確認できる。とくに、四葉座と連弧文の上面が顕著であり、横方向に無数の細かな擦痕が残る。外区においても同様の痕跡が部分的にある。鏡面は一定方向



第86図 若水古墳（A11号）第1主体部 出土鉄器



第87図 若水古墳(A11号)第1主体部 出土合子(1)

の研磨ではなく、不整方向にほどこす。鈕座には面をなすような研磨の痕跡があることにも留意しておきたい。なお、鈕の表面には横方向に擦痕状の細かな痕跡が確認できる。ただし、確認できる部位が鈕の立ち上がりの窪んだ部分であることから、研磨によるものではなく、型挽きにもよって生じた痕跡と考えるほうが理解しやすいであろう。(岩本 崇)

鉄器 (M12~M16) (第86図、カラー写真図版54)

第1主体部の副室から出土した鉄器には、鉈3点と不明鉄製品1点および針束がある。

鉈 (M12~M14) 2種類3点出土しているが、M13とM14は身部幅が同じであるため、同一個体であろう。M12は全長23.4cm、刃部長2.9cm、刃部幅9.4mm、刃部ぎわの身部幅は7.0mmであるが、身部端は4.6mmと細くなっている。身部の厚さは4.2mmである。刃部の一部には布が錆着しており、身部下半には木質が残存している。M13は刃部から身部にかけての破片で、下半に木質が残存し、刃部は幅狭く短い。身部幅6.0mm、厚さ2.5mmを測る。M14の身部は幅5.5mm、厚さ3.0mmで、残存長は13.1cmである。

不明鉄器 (M15) 柄の断面が丸い棒状で、刃部が刀子状を呈する不明品である。刃部長は6.3cm、幅7.0mm、背幅2.5mmで、柄の直径は3.5mmであるが、端は全体に細くなり尖る。全長19.7cmで、平面・側面が歪んでいるが、当初からこの形態であったのか不明である。

針束 (M16) 残存長7.9cmで、断面径1.2~2.0mmの針が6本程度まとまった束である。周囲に木質が残存していることから、細竹のような筒に入れられていたものと思われる。孔の有無は不明である。

合子 (W1) (第87・88図、カラー写真図版55)

副室の中央北東端で、正立状態で置かれていた合子である。調査時に楕円形の漆膜が発見されたため、水で濡らした筆を使って丁寧に漆膜を検出した結果、二重の圈線のようなものも認められた。上面を薬品で硬化して土ごと取り上げたのち、底側の土を除去した結果、輪高台部分の漆膜が残存しており、同時に、側板や底板と考えられる部分の漆膜も検出できたため、その形状から漆塗り合子が腐朽した状態であると判断できたと同時に、蓋が西方向にずれながら斜めに崩れた状況が観取できた。ただ、残念なことに、現地で蓋の形状に合わせて土を切り取ったために、高台の半分近くを失ってしまった。

合子は長径約20.5cm、短径約16cmの楕円形で、底には幅3cm程度の輪高台がめぐり、内側は約7mm、外側は約3mm突出している。側面の漆膜の残存状況から、高さは5cm程度と推定される。側面内面には縦方向に明確なしわが残存しているが、組合せ式かどうか不明である。また、高台部分漆膜表面の状況から、木製であったことが推定できる。

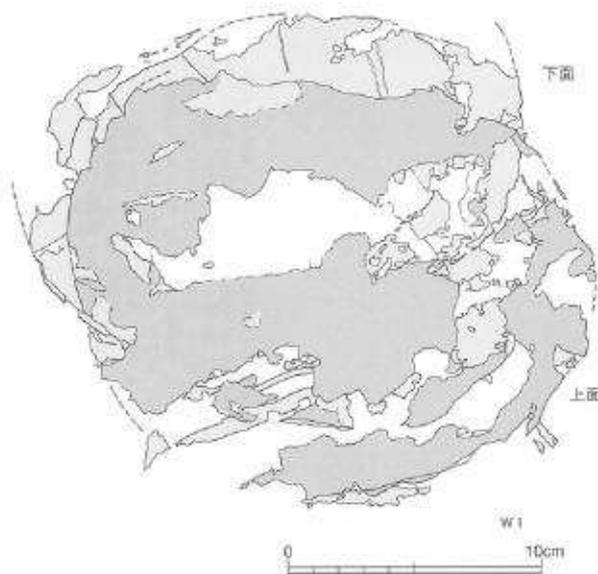
なお、合子内部に残存していた遺物はなかった。また、第88図は下面を反転させて上面の図と重ね合わせたものである。

第2主体部

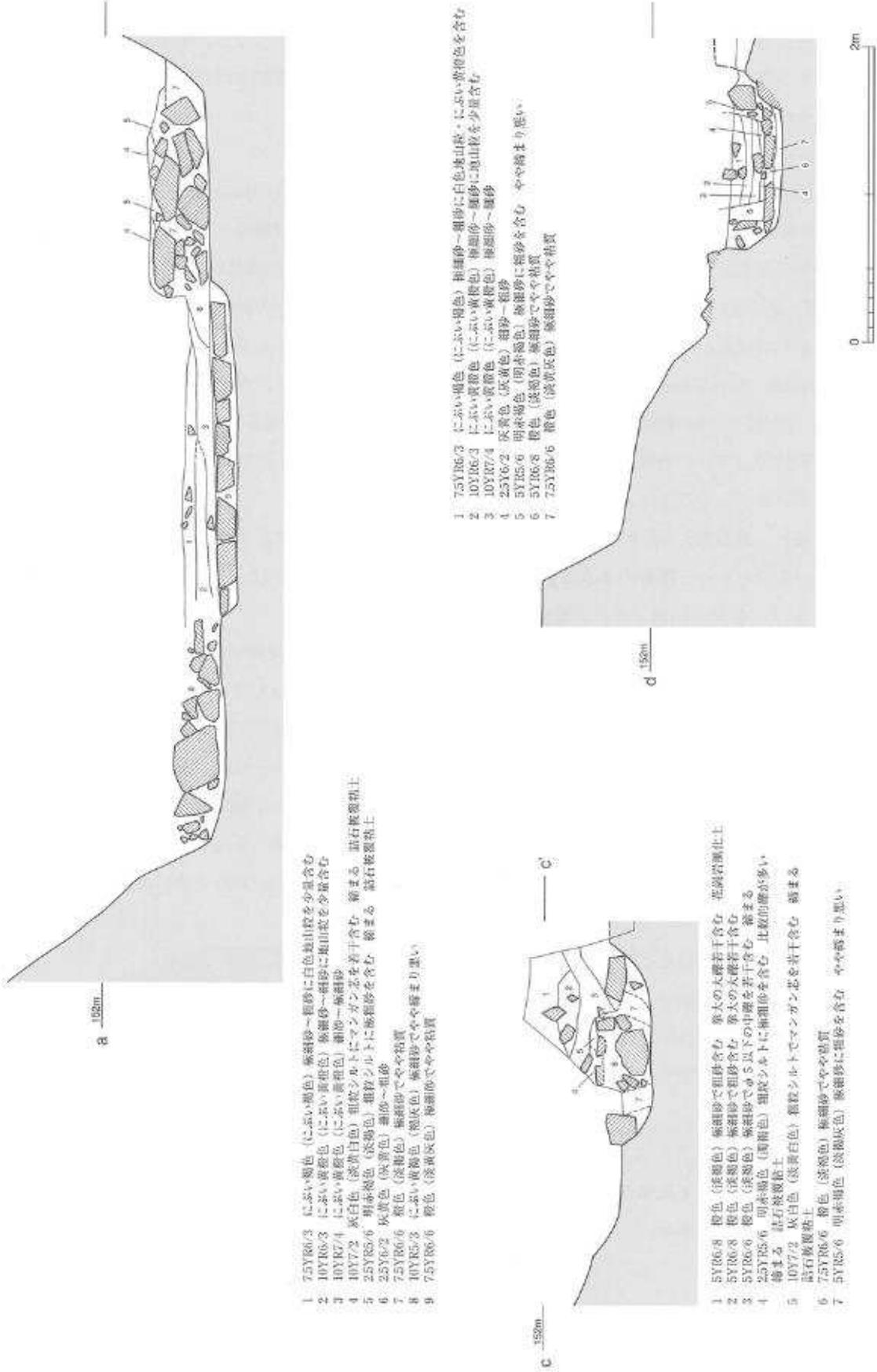
墓壇 (第76・77・90図、カラー写真図版

43・48、モノクロ写真図版18)

墓壇形態・規模 第2主体部は第1主体部

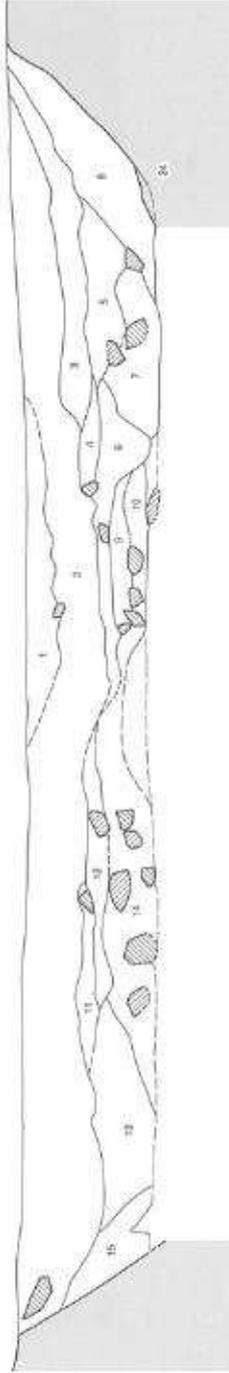


第88図 若水古墳 (A11号) 第1主体部 出土合子 (2)

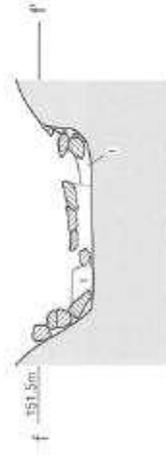
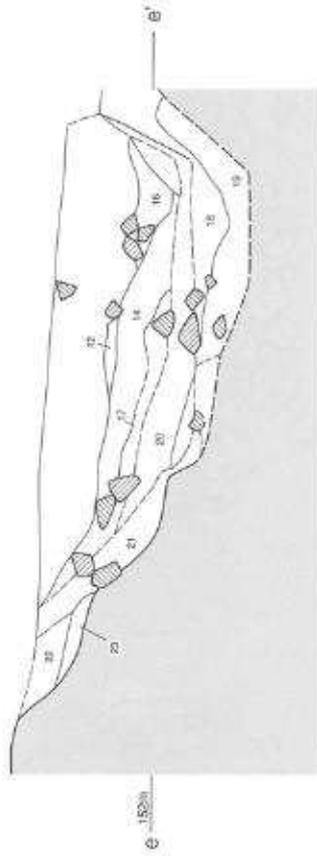


第89図 若水古墳 (A11号) 第2主体部 土層断面 (1)

b — 153m — b'



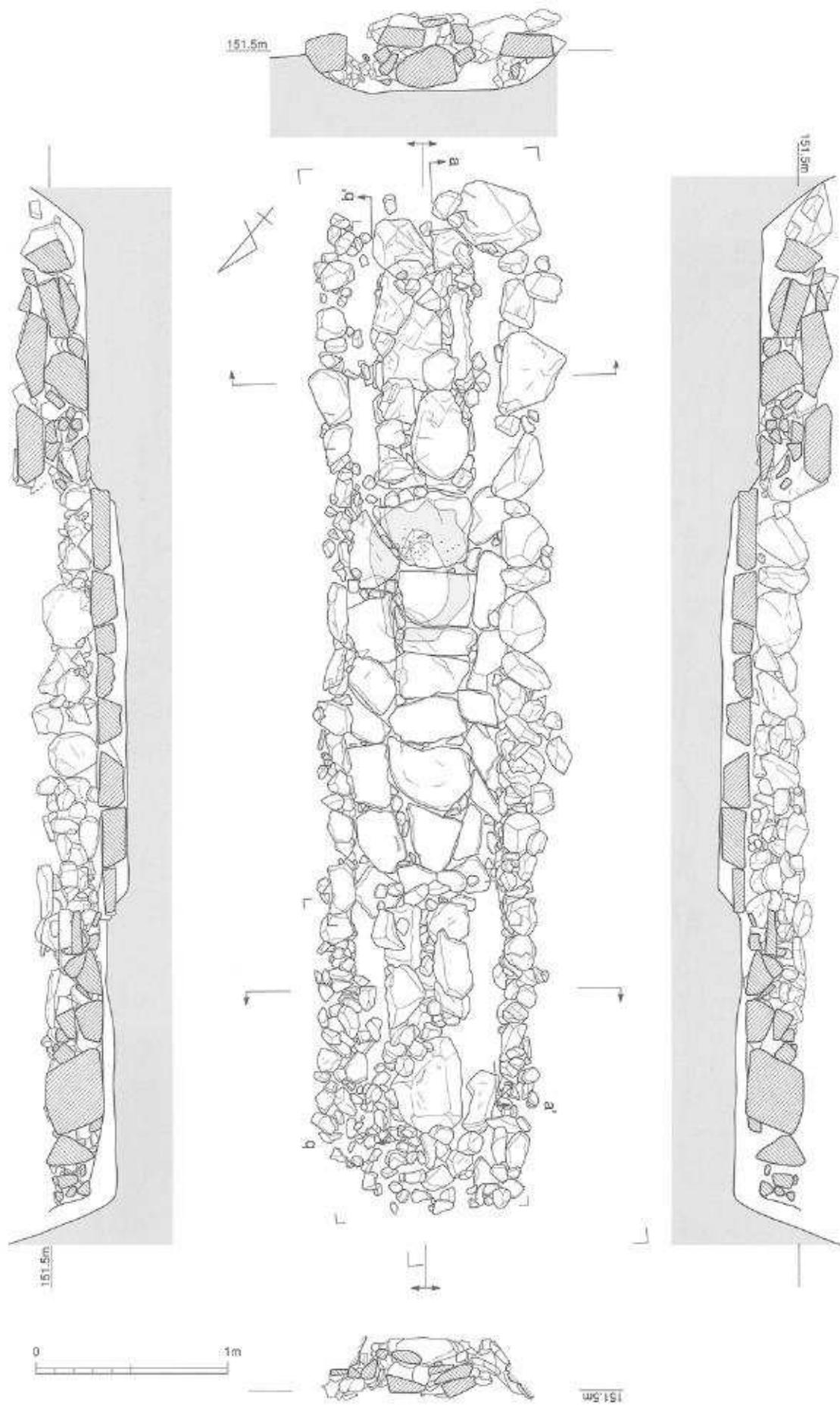
- 1 5YR5/6 橙色 (明褐色) 細顆砂に花崗岩風化土 (白・赤色) を多く含む 粘まる
- 2 7.5YR6/8 棕色 (褐色) 粘顆砂に赤土の大礫を若干含む やや粘まり悪い
- 3 5YR6/6 棕色 (明褐色) 粘顆砂に花崗岩風化土 (白・赤色) を多く含む 粘まる
- 4 5YR6/6 棕色 (明褐色) 粘顆砂に花崗岩風化土 (白・赤色) を多く含む 粘まる
- 5 7.5YR6/8 棕色 (褐色) 粘顆砂に赤土の大礫を含む やや粘まり悪い
- 6 5YR6/6 棕色 (明褐色) 粘顆砂に花崗岩風化土を含む やや粘まり悪い
- 7 7.5YR6/6 棕色 (明褐色) 粘顆砂に赤土の大礫を含む 黄色シルトブロックを少量含む
- 8 5YR6/8 棕色 (明褐色) 粘顆砂に花崗岩風化土・黄色シルトブロックを多く含む やや粘まり悪い
- 9 10YR7/6 明黄褐色 (黄色) シルトブロックに赤土の大礫を多く含む
- 10 5YR6/6 棕色 (明褐色) 粘顆砂に赤土の大礫を多く含む 花崗岩風化土を含む
- 11 7.5YR6/6 棕色 (明褐色) 粘顆砂に黄色シルトブロックを若干含む
- 12 5YR6/6 棕色 (明褐色) 粘顆砂に花崗岩風化土を含む やや粘まり悪い
- 13 7.5YR6/8 棕色 (褐色) 粘顆砂に赤土の大礫を含む 粘まる
- 14 5YR6/8 棕色 (明褐色) 粘顆砂に赤土の大礫を多く含む 花崗岩風化土を含む
- 15 5YR6/8 棕色 (明褐色) 粘顆砂に花崗岩風化土・黄色シルトブロックを多く含む
- 16 7.5YR6/4 に近い棕色 (暗褐色) 粘顆砂でやや粘まり悪い
- 17 5YR6/6 棕色 (明褐色) 粘顆砂に花崗岩風化土を含む やや粘まり悪い
- 18 5YR6/6 棕色 (明褐色) 粘顆砂に赤土の大礫を多く含む φ3cm以下の褐色シルトブロックを含む
- 19 5YR6/6 棕色 (明褐色) 粘顆砂にφ5cmの大礫を若干含む 18層に比べて花崗岩風化土 (緑石・白色黒) を多く含む
- 20 10YR5/2 赤黄褐色 (赤褐色) 粘顆砂にφ1cm大の中礫~赤土の大礫を多く含む 花崗岩風化土 (白色) を多く含む 粘まり悪い
- 21 2.5Y6/6 明黄褐色 (暗赤褐色) 粘顆砂に赤~φ20cm大の大礫を多く含む やや粘まり悪い
- 22 7.5YR6/8 棕色 (深黄褐色) 粘顆砂にφ1~5cm大の中礫を若干含む やや粘まり悪い
- 23 5YR6/8 棕色 (褐色) 粘顆砂で粘まる 粘り 地山か
- 24 花崗岩 地山



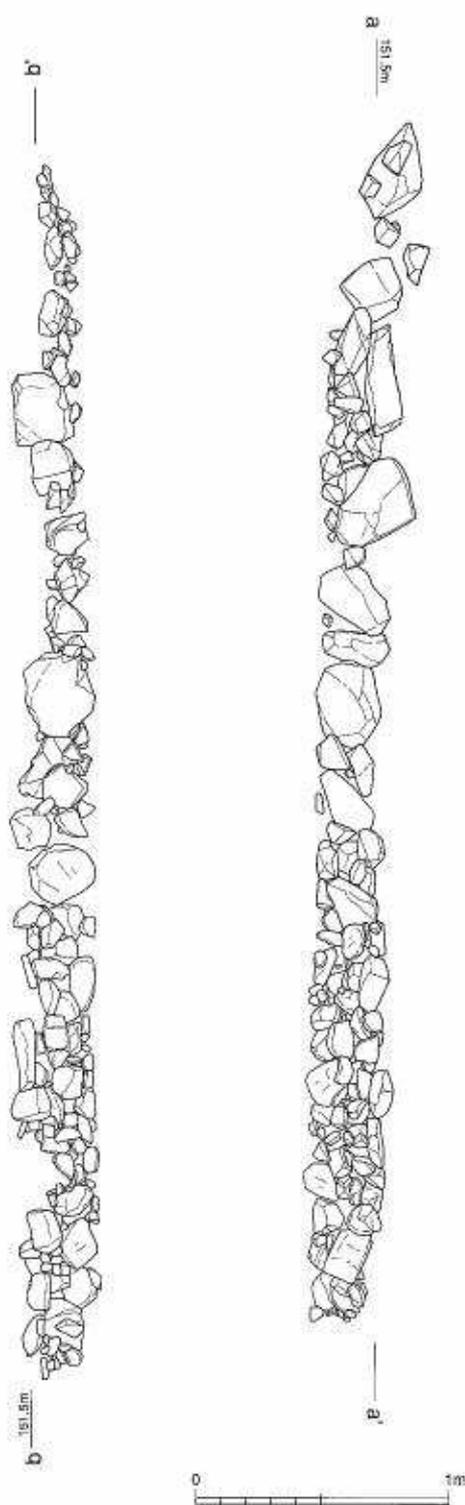
1 5YR6/8 明赤褐色 (深褐色) 粘顆砂でブロック状に粘り

0 2m

第90図 若水古墳 (A11号) 第2主体部 土層断面 (2)



第91図 若水古墳 (A11号) 第2主体部 埋葬施設



第92図 若水古墳(A11号)第2主体部
埋葬施設壁体側面

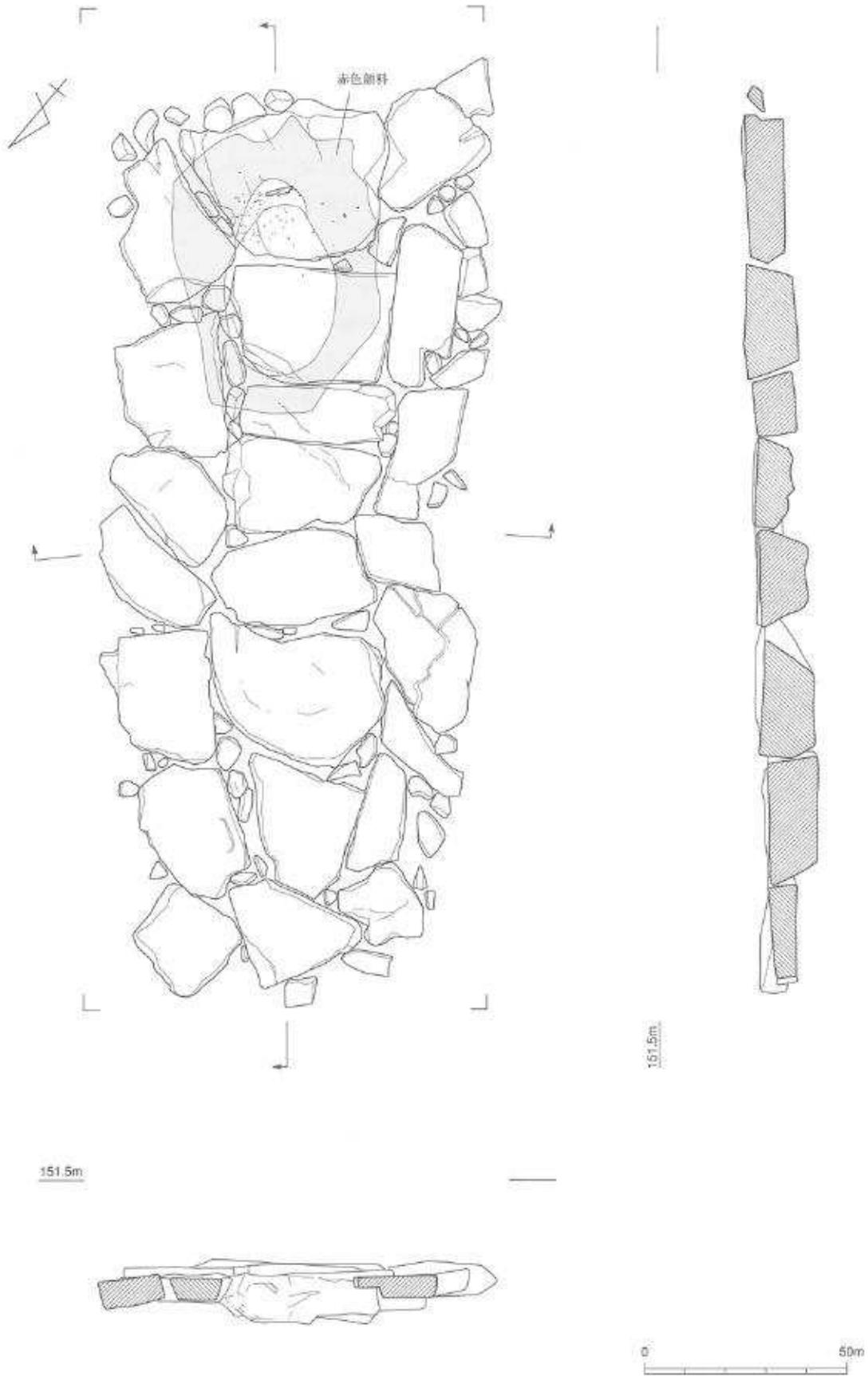
北西側がやや高く残されている。第1段の平坦部幅は、高い側が50cm、低い側はやや幅広く60cm～80cmである。上から第2段目はやや傾斜している部分もあるが、平坦面幅は概ね40cmとほぼ一定している。最下段平坦面は棺までの幅が60cmである。墓壇検出面から第1段目までの深さは30cm～80cmで、第1段目と第2段目の高さの差は30cm程度、第2段目から第3段までは30cm程度の落差がある。第4段目は棺

の北東側で第1主体部の長軸方向と平行方向に存在するが、第1主体部の内側に約1.7m入り込んで構築されており、重なりが大きいため、第2主体部の棺部分は第1主体部の北東端の墓壇内に存在するかたちとなっている。なお、第1主体部との重複関係では第2主体部の方が後出すると判断されている。

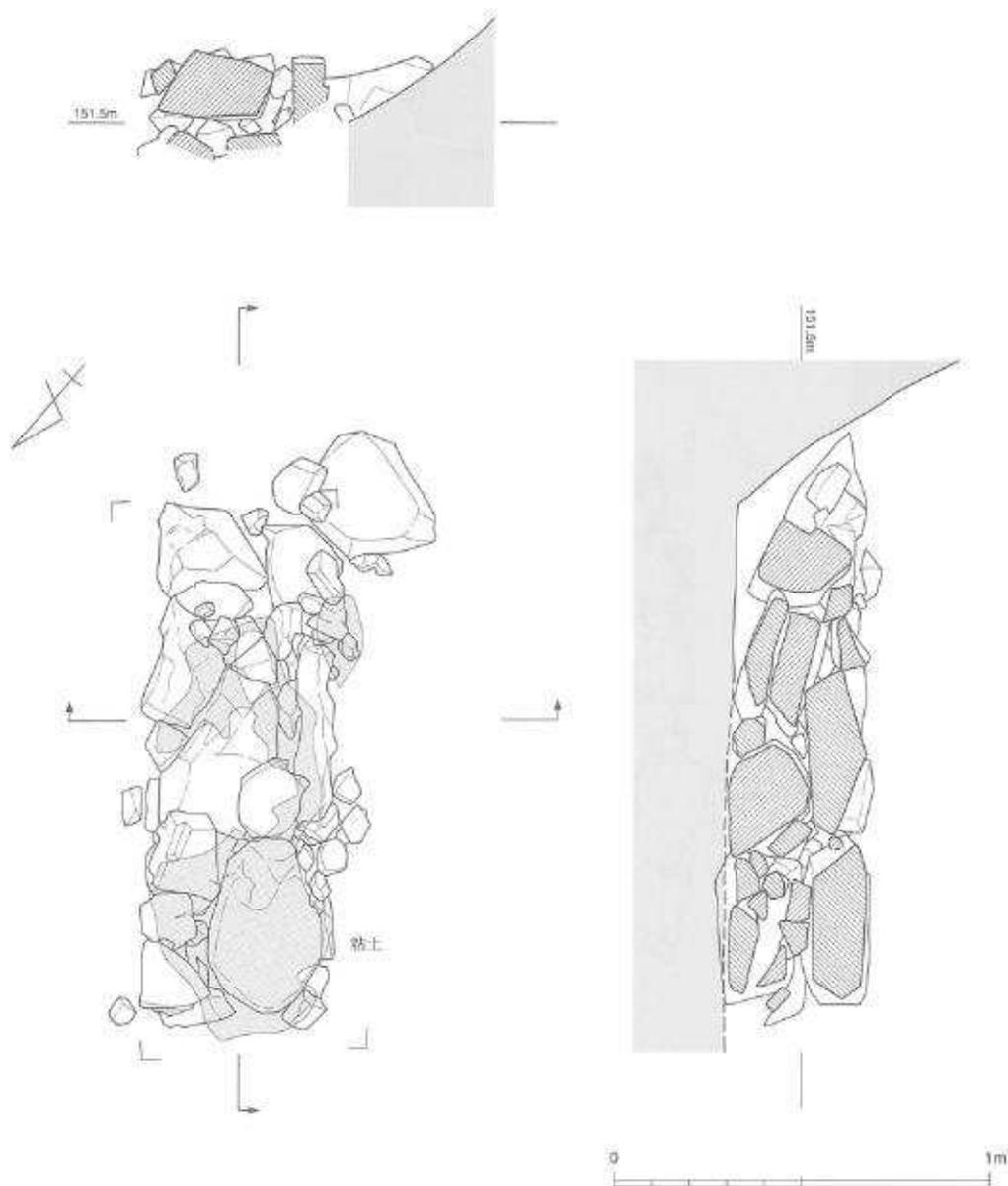
調査後の墓壇平面形は長方形を呈し、南東-北西方向の長軸規模は検出面で6.70m、短軸方向の幅は4.15mであるが、第1主体部墓壇範囲内の第2主体部墓壇上面を検出せず、確認されたのは下部のみであったために、第76・77図の墓壇南西側の線は墓壇下端から80cm程度上側での不確定な想定線である。したがって、墓壇構築時の南西側墓壇上端位置との乖離が大きいことは確実であり、そのことを示すように、第2主体部の棺は北東南西方向での中心部には位置せず、大きく南西側に偏っている。また、墓壇北東側斜面部では概ね3段に掘削されているが、南西側では段が存在していない。そこで、仮に棺中心線から墓壇北東端までの距離を南西側にあてはめると、北東南西幅は6m近くになって、墓壇上端の位置が第1主体部墓壇の大半と重複することになり、平面形も正方形に近くなるが、第1主体部の横断面図をみるとそこまでは及んでいないようである。

このように、調査の過程において、墓壇が重複していることを平面的に認識しておきながら、その重複関係およびそれぞれの平面形の記録を残さずに調査を進めたことは非常に残念で、第2主体部の正確な墓壇平面形および重複関係を示す図は呈示できない。

さて、墓壇北東辺はやや弧状を呈し、外側に膨らんでおり、その幅は約30cmである。墓壇は南東側および北西側では1段で掘られているが、北東側は概ね4段に掘られている。さらに、上から第1段目は



第93図 若水古墳（A11号）第2主体部 埋葬部分

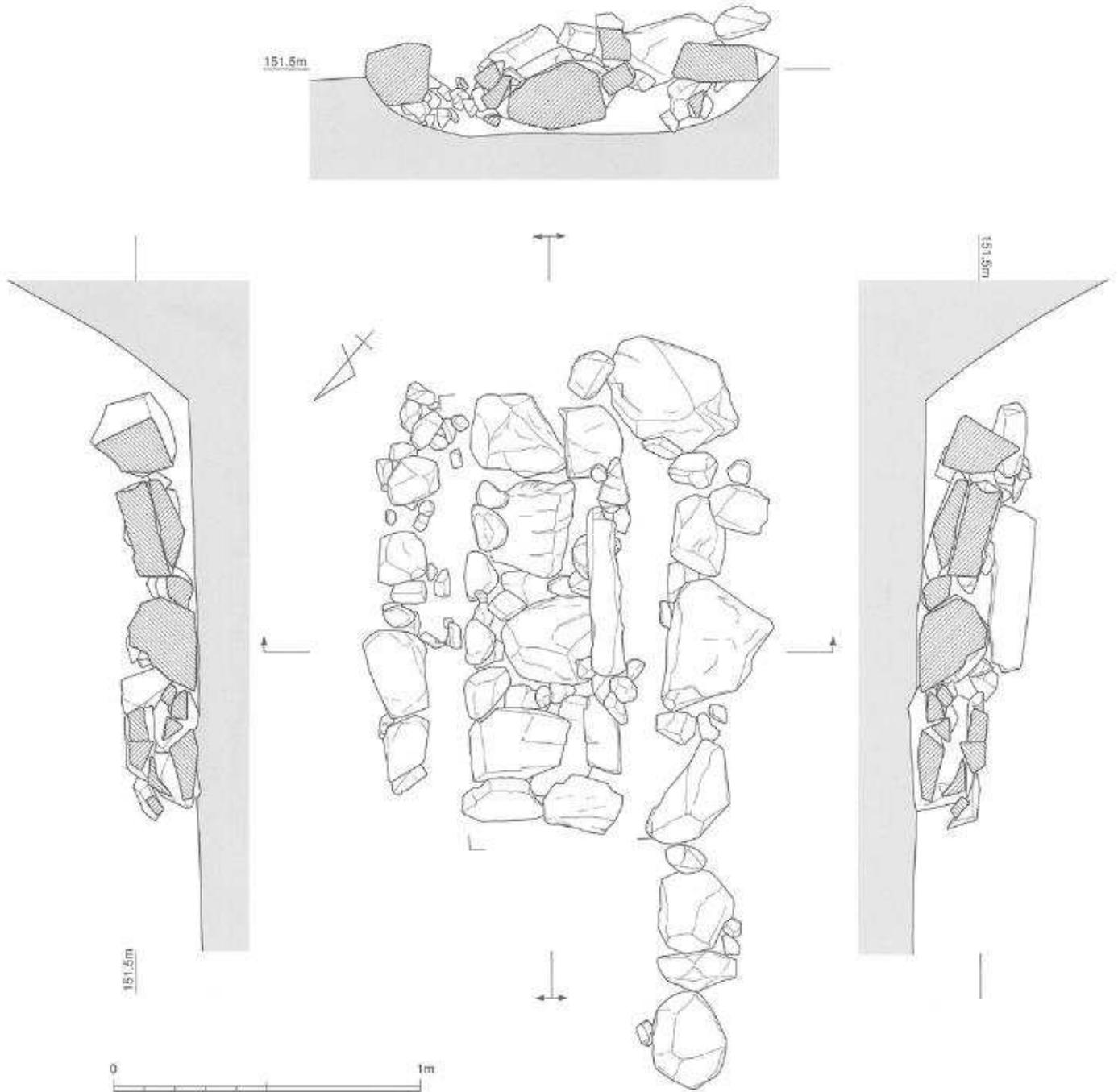


第94図 若水古墳（A11号）第2主体部 東側小口部詰石

部分にあたり、長さ5.4m、幅1.2mの長方形に掘り窪められ、その深さは20cm～40cmである。また、墓
 城底南東側は、南西側に比べて15cm高い。

墓城中央の棺の埋葬部分には敷石が施されており、その部分について、長さ2.2m、幅1.15の長方形
 に10cmの深さに掘り窪められていた。そこに板石を敷き、上面が南東・北西側の棺部分墓城底の高さに
 なるように並べられていた。なお、墓城検出面から最下段までの深さは1.56mを測る。

墓城内の南東および北西端には、55cm程度の大角礫・大重角礫が、南東側は第2段目と第3段目の間、
 北西側は第3段目の底平坦部にそれぞれ1個置かれていたが、棺の小口部からは離れた位置であり、閉
 塞石ではないようである。あるいはもう1基、小口部に閉塞石のみを置いた木棺墓が存在していたのか
 もしれないが、若水古墳の埋葬施設は2基である前提からすると、大礫がどちらも棺上面に近い高さで
 あることから、第2主体部の墓標石の可能性もある。ただし、第2主体部が後出であるとの前提に立つ



第95図 若水古墳（A11号）第2主体部 東側小口部詰石 第2面

と、さらに埋葬施設を設ける予定であった可能性が出てくる。また、大礫は第2主体部小口部閉塞石として準備されていたが、それを使用するスペースがなかったため、放棄されたものと考えられることもできよう。現段階では大礫の意味は不明である。

棺

棺形態・規模（第76・89～97図、カラー写真図版36・37・43～47、モノクロ写真図版13～15・17・18）

第2主体部の棺形態も第1主体部と同様のいわゆる「H」形木棺であり、小口部の詰石も丁寧に行なわれているが、棺底および棺長側板外側の構造において第1主体部とは大きく異なっている。



第96図 若水古墳(A11号)第2主体部
東側小口部詰石 第3面

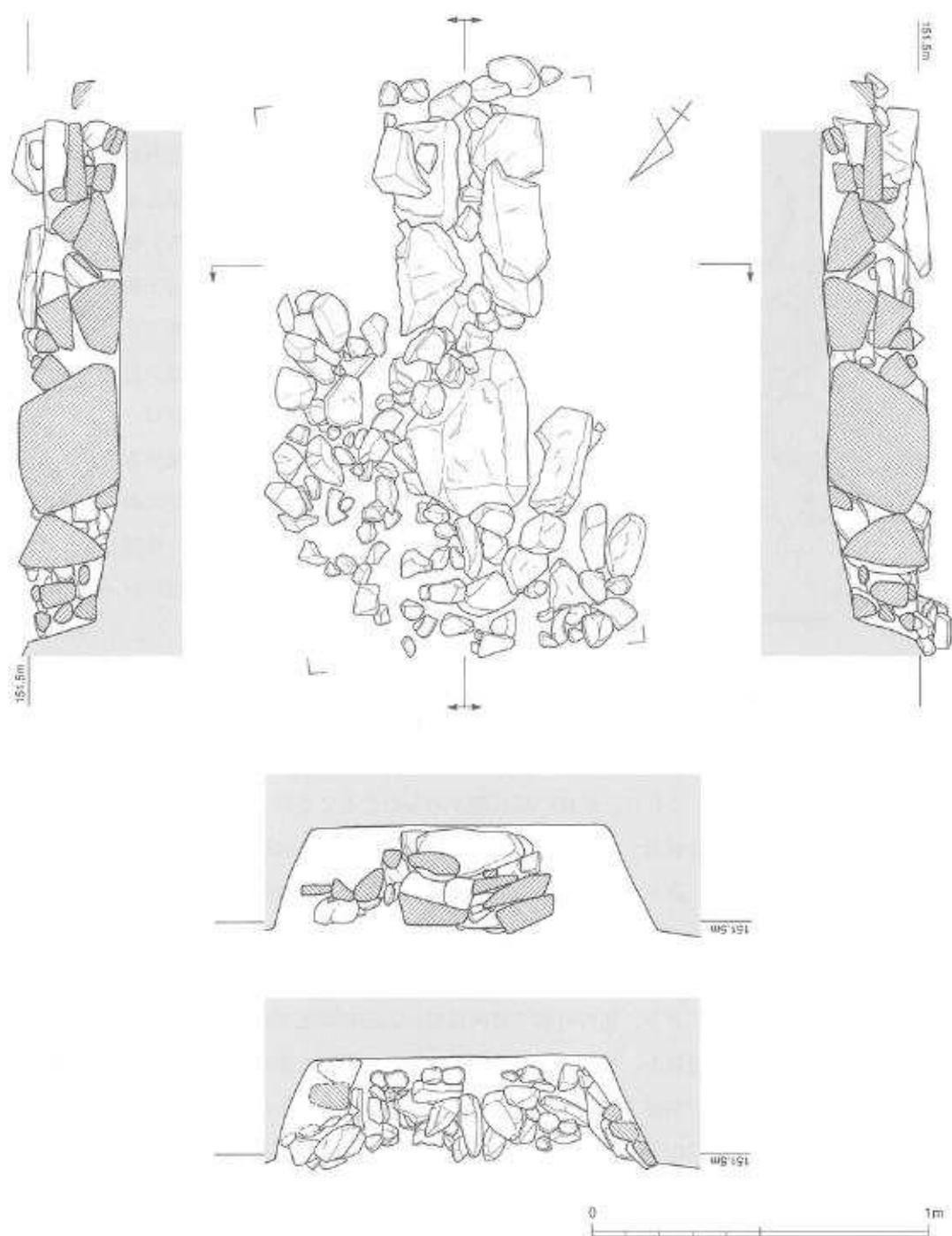
第2主体部が第1主体部と大きく異なる点は、埋葬部分の底面の敷石と棺外側の積石の存在である。

第2主体部の棺は組合せ式の箱形木棺であり、周囲の積石や小口部詰石の状況から、南西側長側板で全長4.92m、北東側では4.83mと想定され、長側板の長さに差がある可能性がある。また、長側板の厚みは約15cmと判断される。棺外側での幅は南東端で78cm、北西端で74cmと、南東側が若干幅広い。棺内側の幅は南東端で52cm、北西端では42cmと判断され、その差は10cmと大きい。ただし、棺北西側小口付近では、長側板の厚みと考えられる礫の空白部分が20cmに近い。これは、大礫の部分であることと、長側板の位置に存在している長方形に近い角礫は転落した可能性が高く、この角礫はもともと大礫上の南西側に乗せられていたものと想定できることから、長側板の厚みは同じであった可能性が高い。すなわち、長側板は4.8mを超える長さの一枚板を使用していたことが推定される。その傍証として、長側板外側積石の板に沿った面がほとんど歪まずに一直線であることが挙げられる。

長側板の高さについては、小口部詰石の上端までと推定すると、南東側では40cm、北西側では33cm程であり、南東側が少し高い。これは、板材の幅に差があったことになり、原木の株元と上部での幹周りの太さの差に起因していると判断されよう。また同時に、棺底の高さにおいても、南東端と北西端では14cmの差がある。すなわち、詰石の上面は、頭位である南東側が足位の南西側よりも18cm高く、組まれた状態での棺長側板の推定上端面は傾斜していたことになる。一方、第1主体部の長側板では、棺両端での詰石の高さには差がないことから、長側板の幅には差がないものの、頭位側の棺上面が高くなるように地盤の傾斜がつけられており、棺の外観では両端で約20cmの高低差があったと判断される。

以上のことから、若水古墳第1・第2主体部における棺の外観は、頭位側が幅広だけでなく、足側よりも高くなっていたことが判断できる。棺外観の頭位が幅広く高さも高い例としては、京都府大田南5号墳第1主体部や京都府切山古墳、鳥取県大口11号墳などの板石使用の組合せ式石棺があり、時期や棺形式は異なるものの、京都府八幡市茶臼山古墳の船形石棺をはじめ、京都府丹後の産土山古墳や法王寺古墳、佐賀県谷口古墳の長持形石棺、大阪府松岳山古墳や岡山県花光寺山古墳の長持形石棺においても、高さの差は少ないが、同様の外観を呈している。このように多くの類例が認められることは、若水古墳の木棺のみならず他の古墳の木棺においても、平面的な幅だけではなく、高さにおいても差があるといった同様の外観を呈するものが存在している可能性が高いことを示している。

若水古墳第2主体部棺内は、中央の埋葬部分とその両側の詰石部分に分かれるが、詰石間の埋葬部分の長さは2.25mである。埋葬部内の南東側には赤色顔料が認められたが、赤色顔料南東端と詰石との間には幅14cmの赤色顔料空白部分があり、ここでも第1主体部と同様に埋葬部分両側に小口板が存在していたと思われる。北西側の小口板については、その痕跡が認められないものの、ここでも存在していた可能性が高い。埋葬部分の両側に小口板が存在していたとすれば、埋葬部分の内法は1.97m程度となろう。この長さは、第1主体部主室の長さにはほぼ等しい。



第97図 若水古墳（A11号）第2主体部 西側小口部詰石

埋葬部分の底には板石が敷かれており、目地を合わせたように見える部分もあり、比較的丁寧なつくりとなっている。敷石は3列に敷かれており、中央部とその両側で使用石材の形態と並べ方が異なっている。すなわち、どちらも概ね長軸長30～45cmの長方形に近い角礫を使用しているものの、中央部分では横位に並べるのに対し、両側では概ね縦位に並べている。使用石材の厚さも中央列では9cm～14cmであるが、外側列では6cmまでの薄い板石を使用している。また、中央列と外側列では上面が同じ高さになるように並べられ、間隙には小石を充填している。そして、敷石外側列は、ちょうど長側板の位置に

あたり、敷石の上に長側板が乗っていたことになる。しかも、想定される長側板の厚さと敷石外側列の幅とがほぼ合致している。このように3列に分けられた敷石は、長側板が押さえ込むことによる敷石の浮き上がり防止が一つの理由として想定される。なお、敷石上面の高さは詰石下端と同じ高さとなっていることから、棺には底板がなかった可能性が高い。

蓋板については、墓壙上面から棺底部分までを通した土層断面図が作成されていないため、土層による判断ができない。調査者は、小口部詰石上部を粘土で覆っていたことから、蓋は埋葬部分に限られていたと想定していたが、本報告では、第1主体部において土層断面により詰石上部にも蓋が被っていたことが判断できたことから、第2主体部においても詰石上面にも蓋板が及んでいたと推定しておく。そして、ステータス・シンボルとしての長大な木棺であることを視覚的に誇示するためにも、棺蓋が埋葬区画部分に限られることはなかったと想定しておきたい。なお、棺長による階層差の萌芽は、弥生時代後期前半の芝花弥生墓群においてすでに認められる。

棺の南東側小口部の詰石は長さ1.4m、幅約50cm、高さ約40cmで、基底部には40cm程度の大礫を並べ、棺長側板内面と接する部分には長辺15cm程度の礫や棒状の角礫を使用して、長側板内面と接する面が最も多くなるように詰めている。また、詰石上面は黄白色の粘土で被覆されていた。このことから、棺の長側板設置後に詰石が完成したことが判断されよう。ただし、基底石は長側板設置前でも可能である。

棺北西側小口部詰石は、長さ1.2m、幅45cm、高さ約30cmで、基底部には長辺30cm程度の角礫の長辺を長側板に沿わせるように置き、北西端には50cm×35cmの大礫1点が置かれていた。礫の間隙には10cm程度の亜角～亜円礫を詰めている。大礫の北西側には5cm～10数cm大の亜角～亜円礫のみが集中して遺存していたが、長側板部分に空間があるようではないことから、小口部の閉塞石の可能性が高い。

第1主体部においては北西側詰石が南東側詰石に比べて1m以上も長いですが、第2主体部においては北西側詰石の長さは南東側詰石よりも20cm短く、微視的には長短の位置が逆転している。しかし、巨視的には、第2主体部の南東・北西側の両詰石はほぼ等しい長さである。

第2主体部では、長側板の外面に接して礫が1～2段積まれており、その高さは15cm～30cm以下であることから、棺蓋が棺身幅よりも広く、外側にはみ出していた可能性がある。使用されている礫の大きさは5cm程度から30cmを超えるものまで認められるが、埋葬部分の側面には大きな礫が使用されている傾向がある。

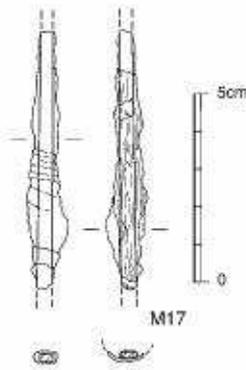
この石積みは一種の礫柵構造のようにも見えるが、棺部分を長方形に掘り込んだ墓壙最下段の内部に設置されており、長側板に沿った位置に一行のみ認められ、小口部を取り巻くものではないため、柵構造とは呼べない。また同時に、石積みの両端は小口部詰石側面の両端に及び、長側板と接していたようであることから、長側板を外側から押さえるための機能を有していたものと思われる。したがって、この石積みは棺押さえの機能をもった配石と考えられる。

北東側の石積みは長さ4.8m、南西側延長も4.8mである。

なお、第2主体部の棺主軸方向はE50°S方向である。

棺内副葬品出土状況 (第93図、カラー写真図版45・49)

第2主体部棺内埋葬部分の南東部棺底には長径73cm、短径52cmのほぼ楕円形の範囲に赤色顔料が遺存していたが、その内側の長径48cm、短径28cmの楕円形範囲については、調査時の所見では赤色顔料とは認められていなかった。このような赤色顔料の確認状況からは、その散布方法が不明であり、推定できない。ところが、試料分析の結果、最も外側の試料のみならず、内側で赤色顔料とは認識されなかった



第98図 若水古墳(A11号)
第2主体部 出土鉄器

試料においてもベンガラであるとの結果報告となった。したがって、この範囲内のすべてにおいて赤色顔料が散布していたことになり、他の遺物の出土位置から、被葬者の頭部にベンガラが塗布されていたことが推定できることとなった。ただし、赤色顔料の認識が上に述べた確認状況であったため、他の部分にも赤色顔料が使用され遺存していたものの、調査時に認識されなかったことも推定されることから、赤色顔料は頭部に限らず棺内全体に遺存していた可能性も十分考えられる。

被葬者頭部の赤色顔料の南東寄りの位置で鉄器が1点出土し、鉄器も含めた35cm×27cmの範囲にガラス小玉が散布していた。玉は特に北西部に集中しており、その範囲は約17cm×約12cmである。出土した高さの詳細は不明であるが、敷石よりも若干上であった。ガラス小玉は風化が進んでおり、単体で取り上げたものは瞬時に粉碎してしまったため、土ごとに取り上げた。また、土ごとに取り上げたものについて、埋まっている小玉の数を知らぬためX線写真撮影を何度か行なったが、確認不可能であった。したがって、現在知りうる小玉の総数は98点以上であり、なかには5点が連なった状態のものも認められた。

出土遺物

第2主体部

玉類 (カラー写真図版49・56)

ガラス小玉 単体で取り上げることができず、周囲の土を除去しただけで自崩壊してしまうため、詳細および正確さを欠くが、暗めのコバルトブルー色を呈する。直径2mm～3mm程度で、長さ2mm～2.5mm程度である。孔径は0.8mm前後で、断面のガラス部分の厚さは0.4mm前後と薄い。2～3点や5点が連接した状態のものもあり、切り離されていないようであるが、明確にできない。

鉄器 (第98図、カラー写真図版54)

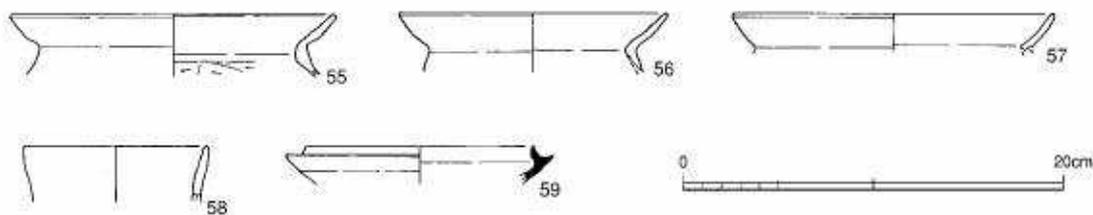
鉈 身部の破片で、前後を欠失する。残存長6.9cm、幅6mm、厚さ3.5mmである。上面には柄と思われる木質が残存し、下面には蔓で巻いたような痕跡が残る。柄が断面円形であるとすれば、直径は1.6cm程度になる。

第1主体部墓壇出土遺物

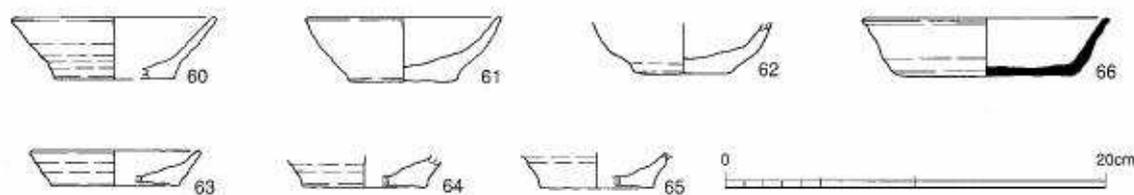
第1主体部墓壇検出時に出土した土器小片(55～57)と第1主体部北東区埋土出土とされる須恵器(59)および第1主体部墓壇内南東側下部より出土したと判断される弥生土器(58)がある。

土器 (第99図、モノクロ写真図版19)

甕 55～57は甕口縁部3点である。口縁部は若干内湾し、端部はやや丸いが尖り気味である。55の屈



第99図 若水古墳(A11号)主体部上部他 出土土器



第100図 若水古墳（A11号）墳頂北東部 出土土器

曲部はにぶいが、56は鋭い。55の肩部内面はヘラケズリ調整である。庄内末～布留初期であろう。

壺 58は直口壺口縁部片である。弥生時代後期の所産と思われる、混入したものであろう。

杯 59の須恵器杯は、口径12.0cmで、口縁部や立ち上がり部の様相から、TK217型式に属する。A19号墳出土須恵器杯（67）と同時期の所産である。

墳頂北東部出土遺物

若水古墳墳頂北東土器集中部から平安時代と思われる土師器と須恵器が出土している。

土器（第100図、モノクロ写真図版20）

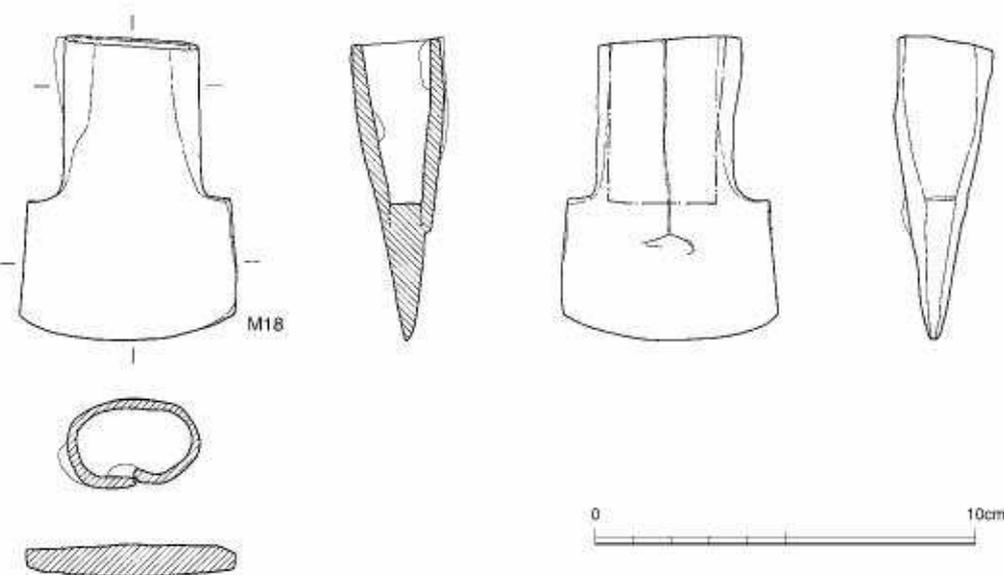
土師器 60・61は杯であろう。60の口径は10.5cm、器高3.3cm、底径6.4cmを測る。外面にはロクロ目が顕著に残る。底面は回転糸切りである。61は口径10.1cm、器高3.5cmで、体部はやや湾曲し、径5.8cmの底面は楕円形を呈し、回転糸切りである。62は体部がかなり丸いが杯と思われる。底径5.2cmで、回転糸切りである。63は小皿である。口径8.7cm、器高1.9cmで、ロクロ目が顕著である。底径は6.8cmで、回転糸切り。64・65も小皿と思われる。65は底径6.6cm、66の底径は6.0cmである。どちらも底面は回転糸切りである。以上の土師器は10世紀頃の所産と思われる。

須恵器 66は口径12.6cm、器高3.1cmの杯である。平らな底部から曲折して外上方に直線的にのびる口縁部となる。口縁端部は小さく外反する。底面は回転ヘラ切り後ナデである。土師器と同時期であろう。

墳丘西裾出土遺物

鉄器（第101図、カラー写真図版56）

鉄斧 M18は若水古墳西裾で採集された有肩鉄斧である。全長12.1cm、刃部幅8.5cm、肩部から刃部



第101図 若水古墳（A11号）墳丘西裾採取 鉄斧

までの長さは5.6cmで、肩部は尖る。袋部は楕円形を呈し、外側での長径5.6cm、短径3.5cmである。刃部の鉄板と袋部を鍛接した痕跡が明瞭に残る。袋部の合わせ部分はあまり明瞭ではないが、残っている。保存処理後の重量は441gである。

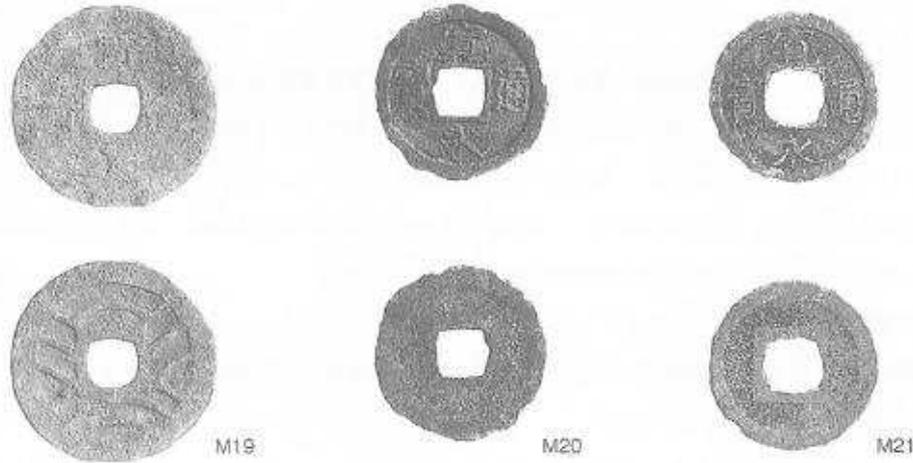


写真1 中央地区出土 寛永通宝

墳頂部ほか出土銭貨

銅銭（写真1）

寛永通宝 M19は大型のもので、直径2.65cmである。波文は11波で、安政期の西文銭と思われる。若水古墳墳頂部から出土した。M20は若水古墳北東斜面から出土したもので、直径2.35cm。3期の新寛永と思われる。M21も新寛永と思われる。直径は2.3cmで、中央地区A 8号墳付近で出土したものである。

A10号（墳）

墳丘（第71・102図、カラー写真図版33）

位置と検出状況 若水古墳の北西側尾根稜線上に位置し、若水古墳墳裾とは約2.1mの距離であるが、その空間地は若水古墳の墳裾平坦面であり、若水古墳築造の際に旧尾根稜線を掘り割ったようにも見えることと、埋葬施設が検出されなかったことから、古墳ではなかった可能性もある。

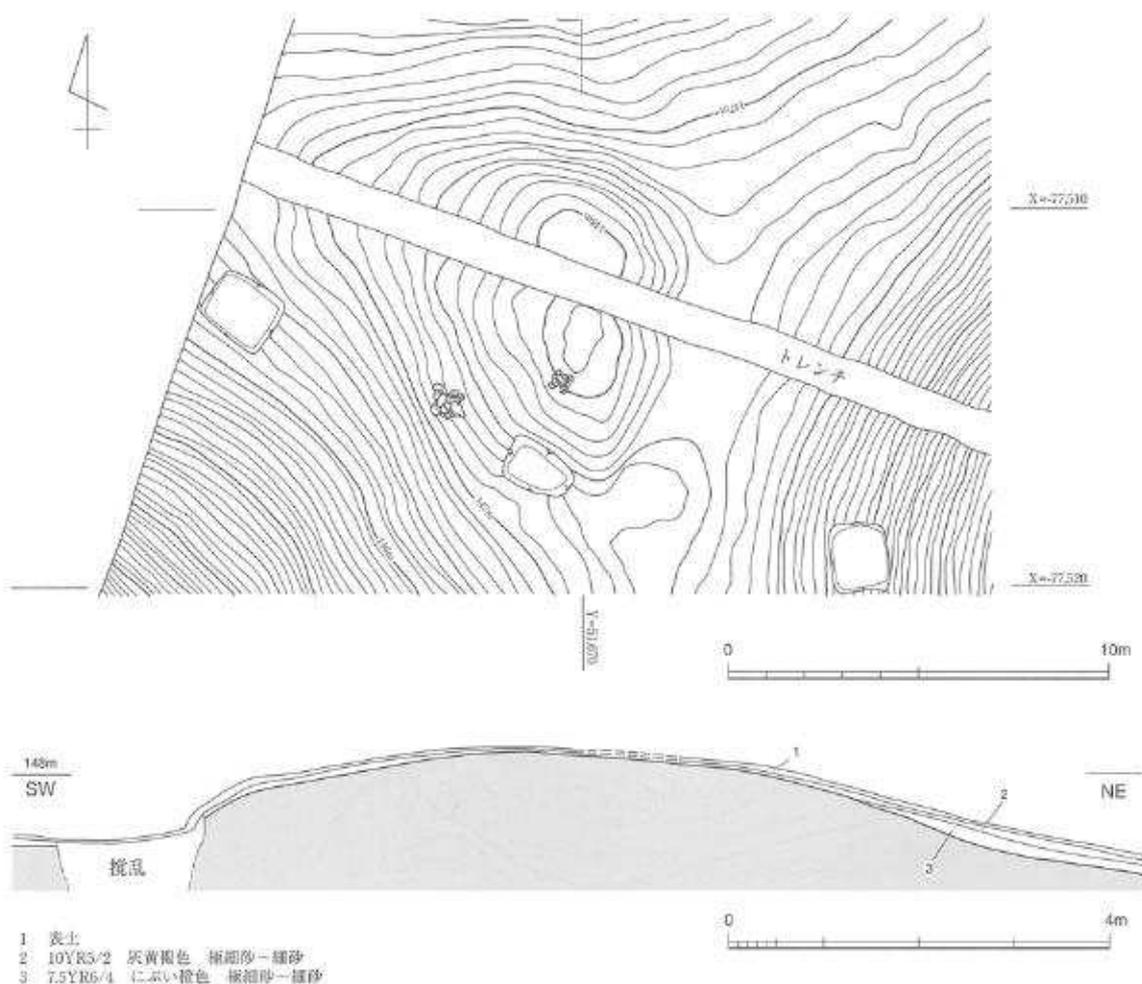
形態・規模 調査前の墳頂部の形は南北に長い楕円形を呈していたが、尾根稜線北西側と北東側および南西側の尾根両側斜面では墳裾は明確ではなかった。しかし、調査後地形の北側では、147.2m以上の等高線が弧状を呈していることから、もし墳裾とするならば、この等高線あたりとなろう。そうすると、南北長径10.0m、東西短径7.8mの規模となる。また、南東部墳裾付近では、等高線が若水古墳との空間地に大きく入り込んでいる。なお、調査前の墳頂部標高は148.2mであり、墳高は1.0mとなる。

盛土はほとんど認められないことから、古墳であれば地山削り出しとなるが、北西側墳裾は明確に削り出ししていない。また、但馬地域特有の墳墓であれば、墳頂部を平坦に削り出すことを通有としているが、本墳の墳頂部は丸く膨らんでおり、断面図の地山ラインでも弧状を呈している。

これらのことから、本墳が古墳ではない可能性があることを示している。

外部施設 本墳には葺石などの外部施設は認められなかったが、墳頂部南端および南西裾部において集石遺構が検出された。これらの集石遺構は、古墳に伴うものではないと思われる。

なお、本墳において埋葬施設は検出されず、遺物も出土しなかった。



第102図 A10号(墳)

A18号(墳)

墳丘(第71・103・104図、カラー写真図版32)

位置と検出状況 A18号墳は、前述のA10号墳とは若水古墳を挟んだ反対側に存在し、尾根稜線上に位置している。調査前から40cm程度の盛り上がりが見られた。

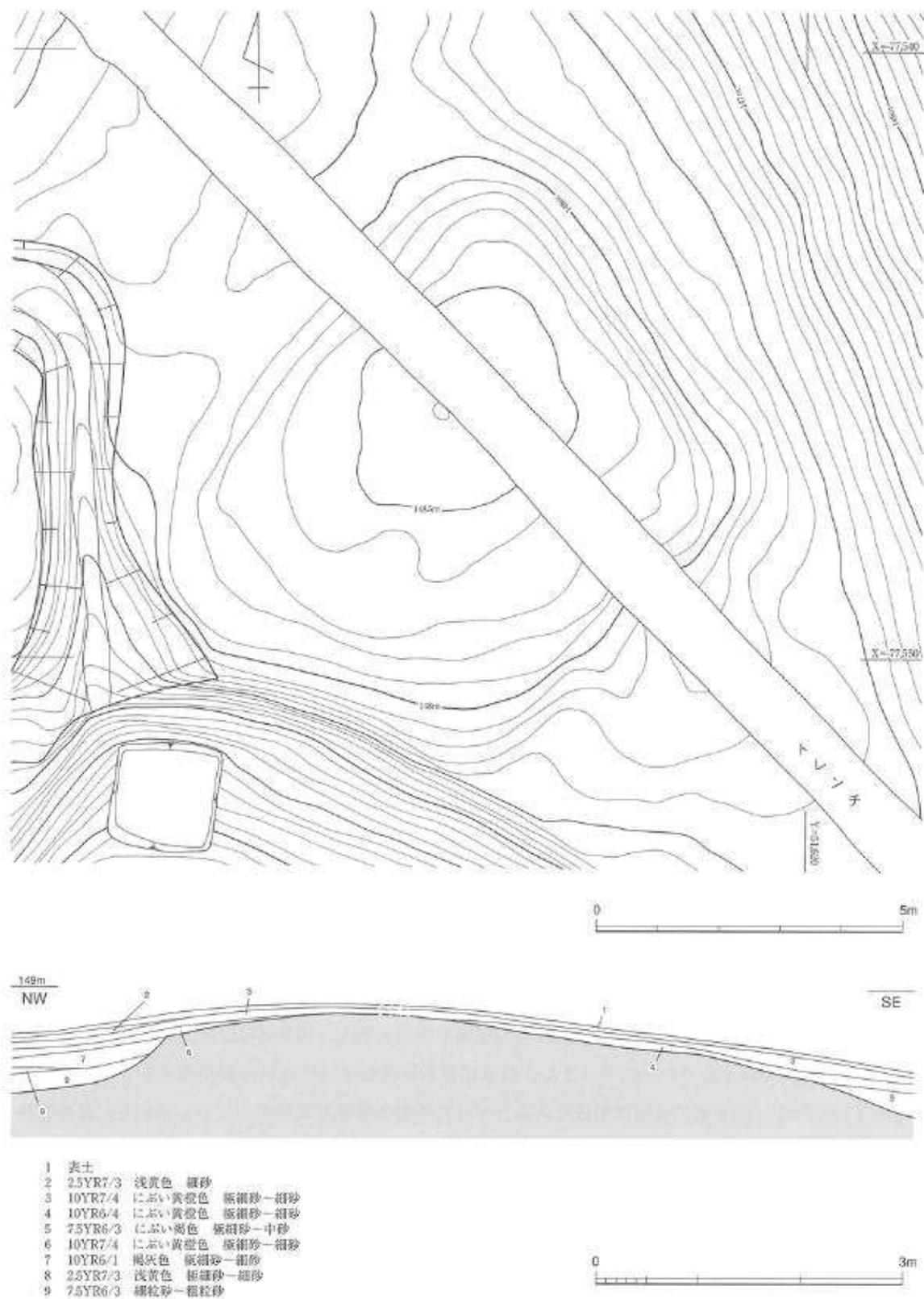
本墳においてもA10号墳と同様に、若水古墳の墳裾平坦面を挟んで南東側に位置しているが、若水古墳墳裾との間隔は約4.5mでやや広い。また、同様に若水古墳築造の際に旧尾根稜線を掘り割ったように見える。ただし、南東側の墳裾は明確である点がA10号墳の場合と異なる。しかしながら、埋葬施設が検出されなかったことにより古墳ではなかった可能性もある。

形態・規模 調査前の等高線では、標高148.0mのラインが若水古墳側を除いて円弧を描いており、本墳墳頂部の等高線では方形に近かった。

調査後においては、南西側を除いた部分の等高線が直線状を呈しており、方形に近い。北西側墳裾を標高148.0mの等高線、南東側墳裾を147.8mの等高線あたりとすると、北西-南東の規模は8.5m程度となろう。調査後の北東側および南西側墳裾は不明確であるが、仮に標高148.0mのラインとすると、北東-南西方向の規模は9.0mとなる。

墳頂部の標高は148.8mであり、調査後の南東側墳裾からの墳丘高は1.0mとなる。

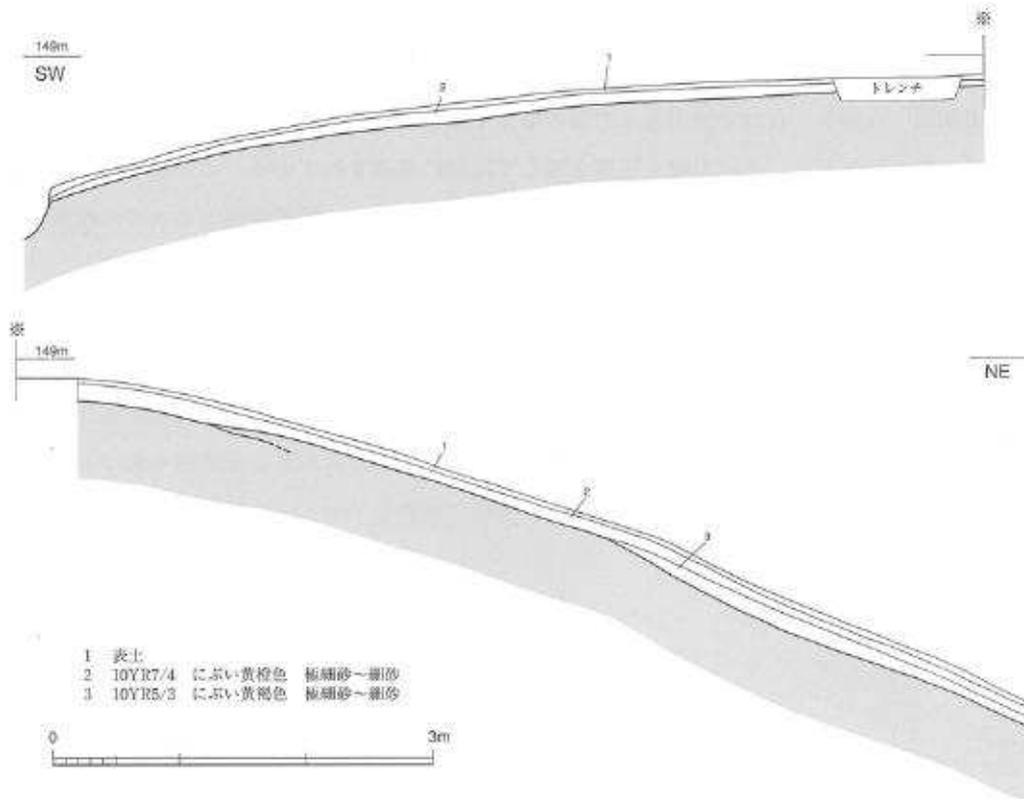
断面図をみると、盛土が認められないことから、古墳であれば地山削り出しとなるが、A10号墳と同



第103図 A18号(墳)

様に、若水古墳側以外は明確な削り出し部分が認められない。また、墳頂部もやや丸みがあるものの、A10号墳ほど丸く膨らんではおらず、むしろ平坦に近い。

以上のことに併せ、埋葬施設が検出されていないことから、本墳も古墳ではない可能性があるが、A



第104図 A18号（墳）土層断面

10号墳ほど否定的ではない。

なお、本墳においても葺石等の外部施設および埋葬施設は検出されなかったが、北東斜面から土師器片が1点出土している。

出土遺物

A18号墳から出土した遺物は土師器壺片1点に限られる。

土師器（第105図）

壺 68は複合口縁壺の肩部から口縁部にかけての破片であるが、口縁端部も欠失している。口頸部の約1/8程度残存しているものの、器表磨減や剥離が目立つ。

肩部から曲折して大きく外反しながら外上方にのびる口縁部で、外反した後さらに屈曲してやや外反しながら外上方にのびるものと思われる。屈曲後の口縁端部は高さ4cm程度になるものと思われる。

口縁屈曲部の外面での径は18.6cmである。なお、口縁屈曲部の外面の稜はややにぶいが、器表剥離のため正確な形状は示していない。

形態的特徴から、庄内後半期～布留前半期の所産である可能性が考えられる。



第105図 A18号（墳）・19号墳 出土土器

A19号墳

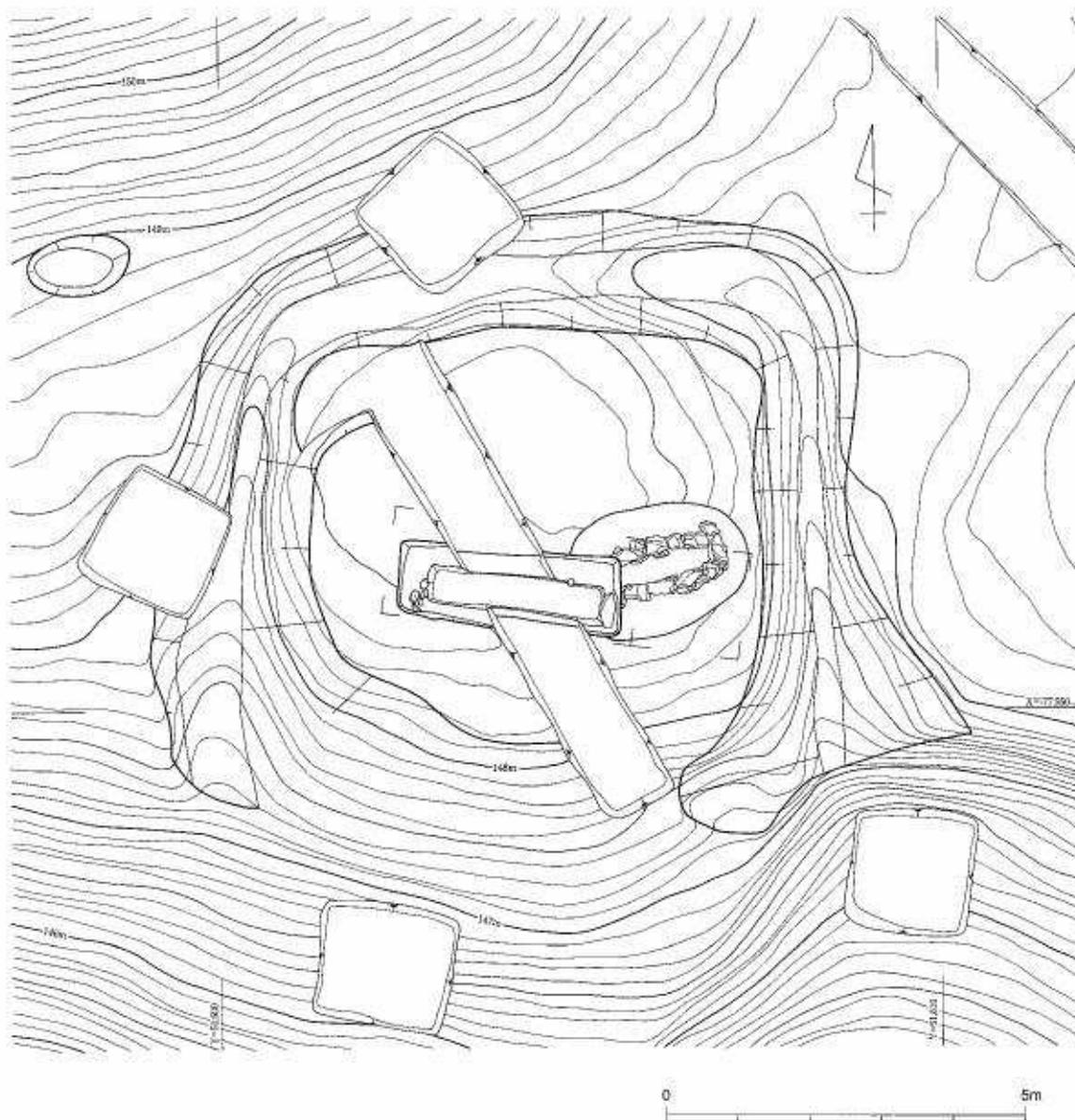
墳丘（第71・111・112図、カラー写真図版57、モノクロ写真図版22）

位置と検出状況 A10号・A18号墳が若水古墳の墳裾平坦部の外側に位置するのに対し、A19号墳は墳裾平坦部分に存在しており、若水古墳と墳裾を接して南側に築造されている。このことにより、本古墳の築造時期がA10・A18号墳とは異なることを示している。また、尾根稜線上よりも南西側に位置しており、A18号墳を避けるようにして築造されている。

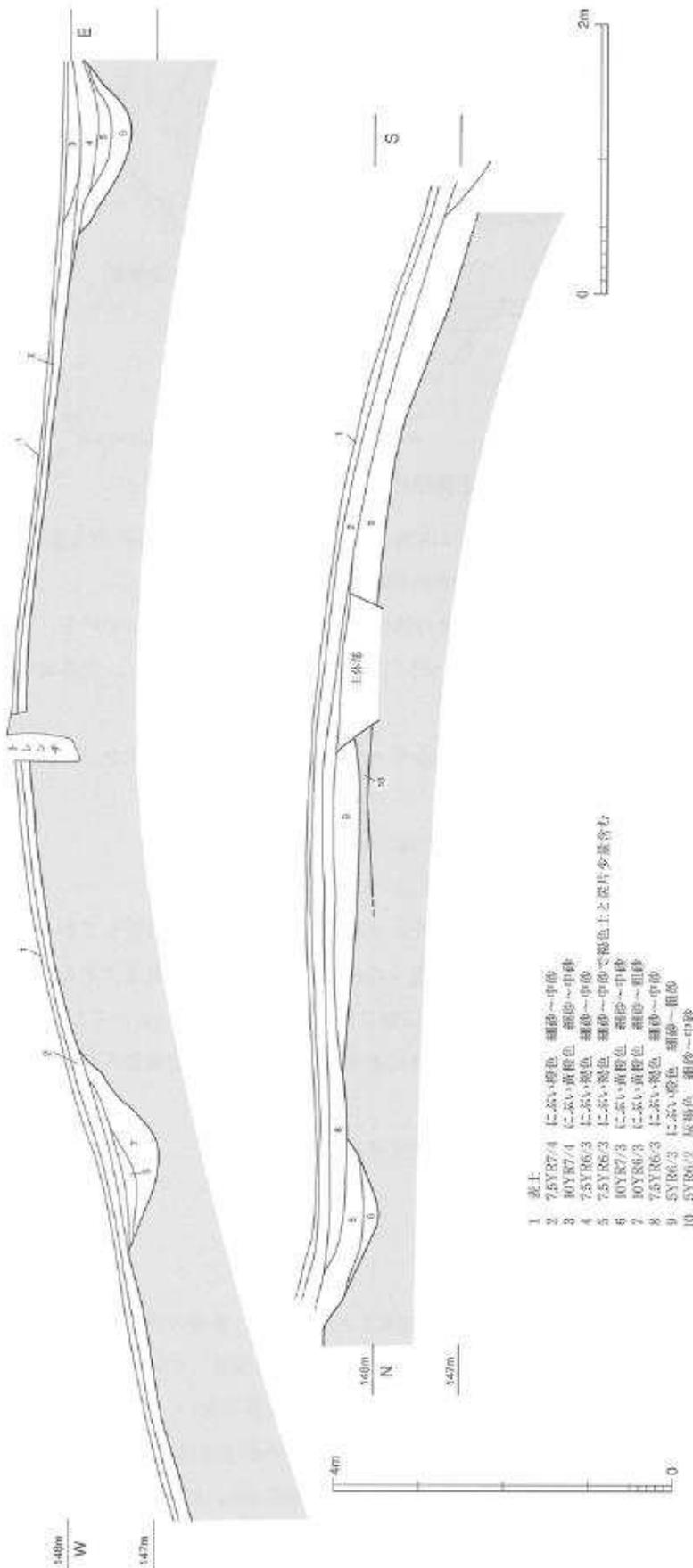
調査前においても古墳と判断されたように、瘤状に張り出しており、A18号墳との間が溝状に窪んでいた。

形態・規模 墳頂部の標高は調査前で約148.8mであり、埋葬施設検出面では148.5m前後である。

調査前の墳形は円墳のように見えたが、調査の結果、斜面下側は省略された周溝をめぐる方墳であることが判明している。また、墳丘の主軸方向は、方位に合致しており、方位が意識されていたであろうことを十分推測させる。



第106図 A19号墳 調査後平面



第107図 A19号墳 墳丘土層断面

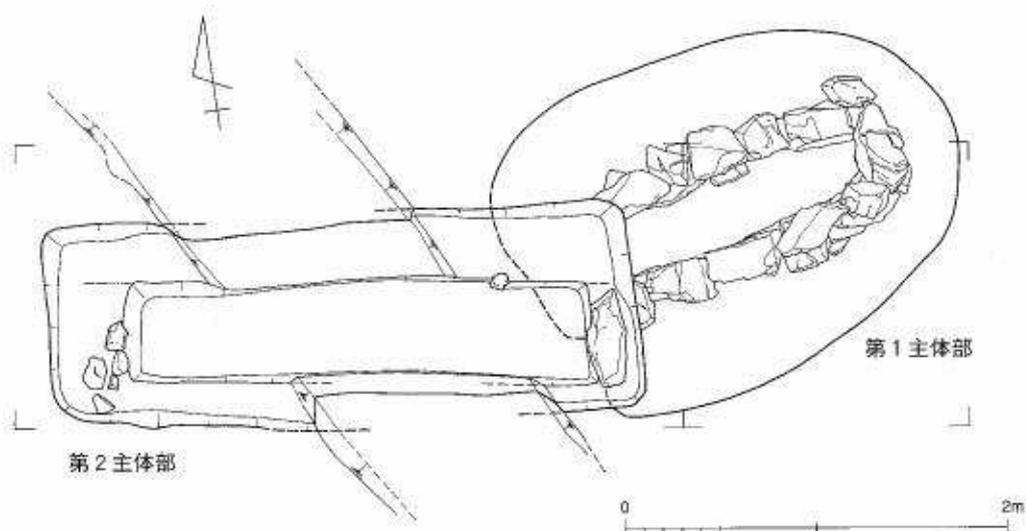
墳丘裾部での規模は東西8.0mと明確であるが、南側の墳裾は不明確である。仮に東西両側の周溝端をつないだラインを墳裾と仮定すると、南北7.5mの規模となる。また、埋葬施設検出面での墳頂部平坦面の規模は、東西6.4m、南北5.9mである。

墳頂部面はやや膨らみがあり、周溝底からの墳丘高は1.0mとなる。

いずれの断面位置も不明であるが、第107図の南北方向の土層断面図では盛土厚が約35cmである一方、東西方向ではほとんど認められないことになっている。また、南北断面図では盛土をしたうえで墓壙が掘り込まれたと解釈されているが、第107図の第9層を地山とすれば、東西方向の断面図とほぼ合致し、主体部も地山上面あたりから掘削されたことになり、両者の土層断面図の齟齬が少ない。

外部施設 A19号墳では葺石は検出されなかった。

周溝は南側を除いて明確に掘り込まれており、横断面形は「U」字形に近い。墳丘南側は斜面となっているため、築造時から掘削されなかった可



第108図 A19号墳 主体部平面

能性が高い。そのことを傍証するように、東側周溝の南端は南側の斜面下側に向けて開削されたままで、溝底のラインは墳丘側にまわりこむ気配がなく、むしろやや外側に向かっている。

北側周溝は幅1.7mではほぼ均整となっているが、西側周溝の外側肩ラインは西側に膨らんでいる。逆に、東側周溝の外側肩ラインは墳丘側に入り込んでいる。ただし、いずれの周溝においても、周溝底の墳丘側墳裾ラインは直線的で整っている。

周溝底の幅は北側周溝で60cm、東側周溝ではやや狭く40cmとなっている。また、墳丘外側からの周溝の深さは35cm程度となっている。

なお、周溝も含めたA19号墳の規模は東西約10m、南北は約8.7mである。

埋葬施設

A19号墳では、墳頂部南寄りで2基の埋葬施設が検出された。2基の埋葬施設は一部重複しており、うち1基は墳頂部中央に近い木棺墓で、もう1基は墳頂部東寄りの位置で検出された石棺墓である。

石棺墓は木棺墓の北東部と重複しているが、木棺墓東側小口部にある礎を破壊していないことから、木棺墓が後出であると判断できる。なお、木棺墓の東側小口部にある礎の下端は、石棺墓蓋石の上面には及んでいない。

以下、石棺墓を第1主体部、木棺墓を第2主体部として記述する。

第1主体部 (第108～110図、モノクロ写真図版21・22)

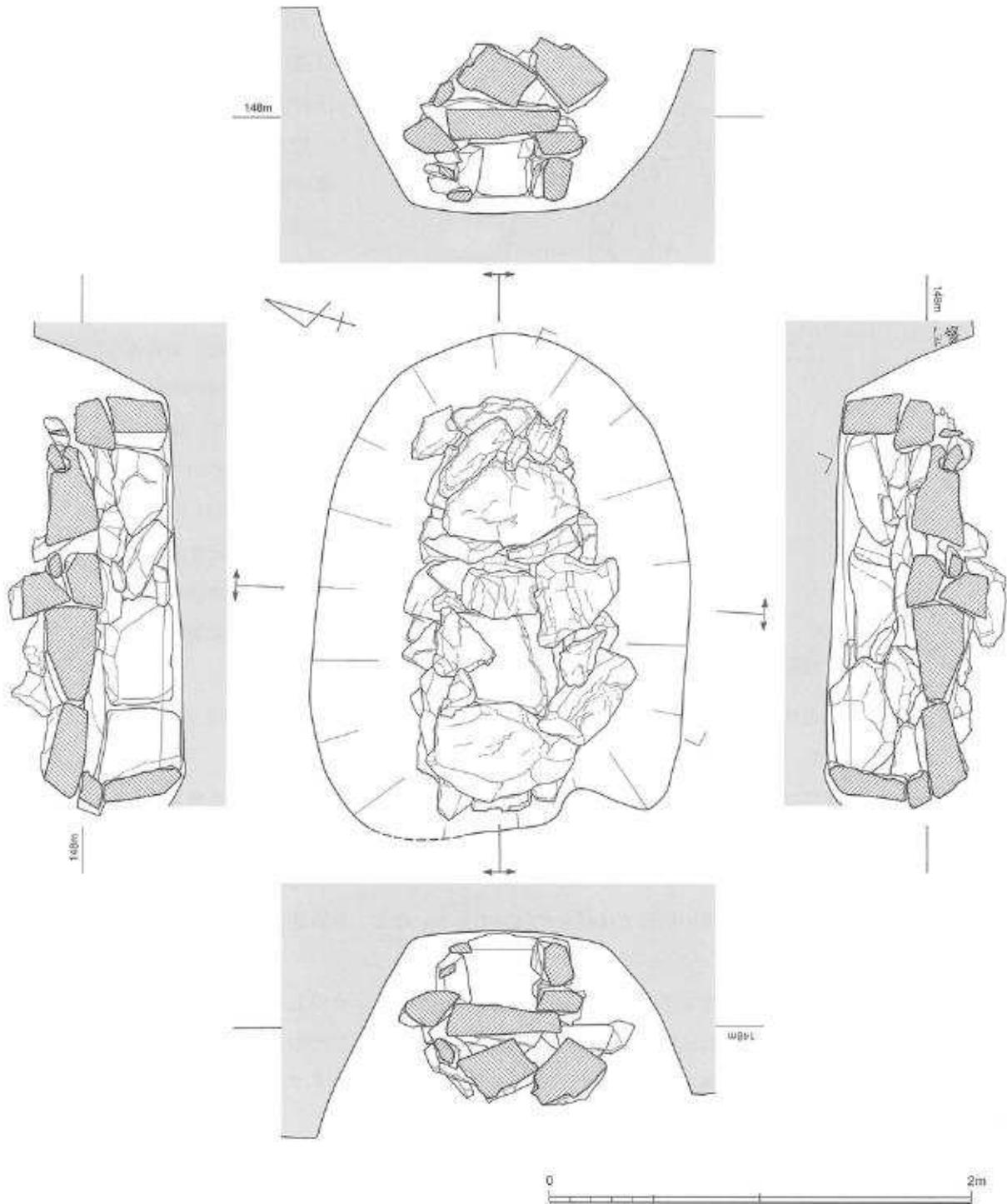
A19号墳の断ち割りによって確認された埋葬施設である。

墓壇

墓壇形態・規模 墓壇の平面形は卵形を呈し、長軸2.4m、短軸1.8mである。墓壇の西部の上端ラインが棺に近く、扶れたようになってるのは、第2主体部の墓壇下端ラインと重複しているためであることから、築造当初の墓壇平面形は楕円形で、長さは2.6m以上であった可能性が高い。

墓壇検出面の最も高い位置は標高148.5mであることから、墓壇最深部までの深さは1.0mとなり、深い。墓壇底の平面形は、図化されていないため不明であるが、長さ1.8m、幅0.9mのほぼ平坦な面となっているものの、若干傾斜しており、東端は西端よりも10cm程度高くなっている。

なお、墓壇内から遺物は出土しなかった。

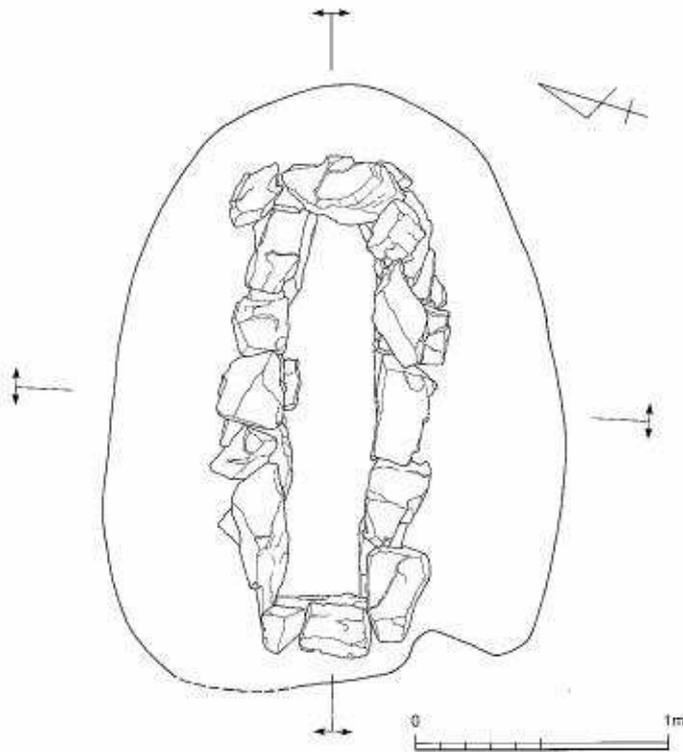


第109図 A19号墳 第1主体部

棺

棺形態・規模 墓壇のほぼ中央部に設置された組合せ式の箱式石棺である。石材は角礫を使用し、完存していた。

蓋石は長さ60cm前後、幅30cm前後の角礫を横位に架け、基本的には4枚の石材が使用されているが、東から2番目の石材は小さいためか、その上にもう1石載せられている。蓋石の間隙には小さな角礫が詰められているが、石棺長辺側にはやや大きめの角礫が使用されている。なお、最も西側の蓋石が最大



第110図 A19号墳 第1主体部 棺身平面

いは推定できるものはすべて東側および東寄りの頭位となっている。仮に本主体部も東頭位とすれば、E14° N方向となる。

棺長側面基底部には長さ40cm～60cm、幅20cm～35cmの角礫を横位に使用し、北側が横に3石、南側は横に4石並べている。基底石の上には長さ25cm～60cm、幅10cm～20cmのやや小ぶりの角礫を1段、横位に載せている。棺内中央部の天井がやや落ち込んでおり、その部分での基底石底面から蓋石内面までの高さは27cm、小口石際の最も高い部分では42cmの内高である。なお、長側壁の西部は比較的大きな石材が使用されている。

西側小口部では35cm四方程度で厚さ12cmの板状角礫を基底石とし、その上にやや小ぶりの角礫を2点載せている。東側では30cm×27cm程度で厚さ18cmの角礫を基底石とし、その上に長さ48cm、幅27cmの角礫を1点載せている。なお、調査者は小口石が側石の外側に配されるタイプとされているが、西小口石については両側石に挟まれているように看取できる。

第1主体部棺内には人骨は遺存しておらず、遺物も全く出土していない。

第2主体部（第108・111図、カラー写真図版57、モノクロ写真図版23）

第2主体部はA19号墳の東西方向の中央部、南北方向では中央より南に1m偏った位置で検出された木棺墓である。確認調査トレンチ（T17）が中央部を横断しているが、木棺は検出されていなかった。

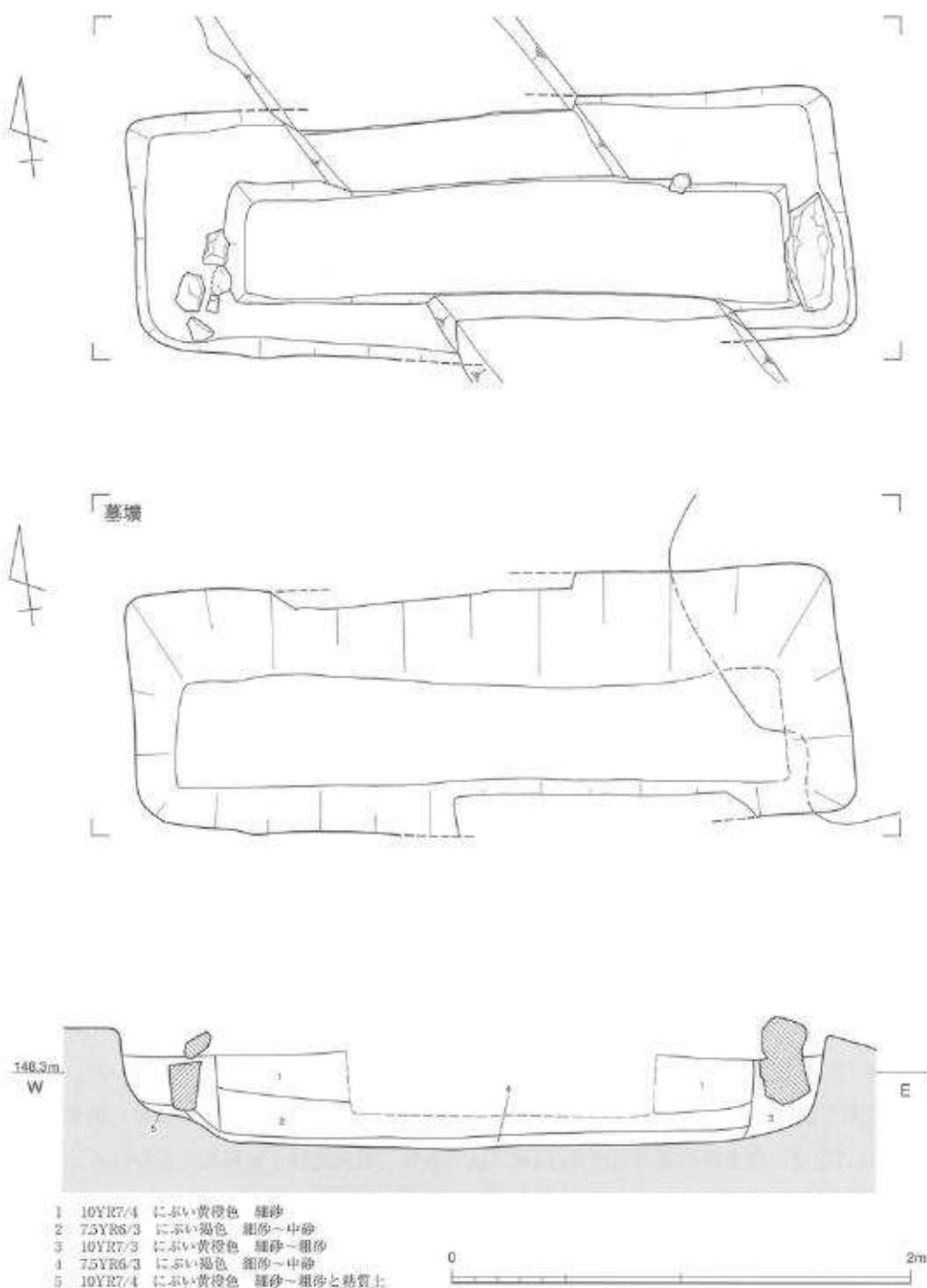
墓墳

墓墳形態・規模 墓墳は平面長方形を呈し、東西長軸3.15m、南北短軸の西端では1.05m、東端では1.11mと東端が西端に比べて6cm広くなっている。検出面から墓墳底までの深さは24cmで、底面も平面長方形を呈し、長さ2.67m、西端での幅47cm、東端幅50cmと、ここでも東側が僅かながら3cm広い。棺底はほぼ平坦で中央部がやや窪んでいるが、東側底が西側底に比べて若干高くなっている。

規模である。

天井石の上面や間隙には粘土は遺存しておらず、棺内は流入土が充満していた。

棺身内面は長さ1.6m、中央部での内幅は40cm程度であるが、西端では30cm、東端では25cmと幅が狭くなっている。棺底とされている面は、西端が東端よりも5cm程度高くなるように傾斜しており、棺内の幅も若干広いことなどから、調査者は西側頭位と判断しているが、棺底とされる傾斜方向と墓墳底の傾斜とは逆になっている。また、小口石の内高ではほとんど差がない。なお、本遺跡で調査された石棺墓のうち、頭位が確定ある



第111図 A19号墳 第2主体部

なお、墓室内から遺物は出土しなかった。

棺

棺形態・規模 検出された棺は箱形木棺で、墓室内のやや南に偏った位置で検出されている。棺痕跡部分の長さは2.48m、西側での幅53cm、東側では56cmの幅である。検出面から棺底までの深さは30cmで、棺内埋土の土層断面をみると、東側小口板を設置した後、棺底に土（第4層）を敷き、その後西側小口板を設置したと判断される。したがって、墓室内で組まれた組合せ式の箱形木棺であったことになる。

本主体部では小口部両外側に礫が配置されており、棺小口板の押さえと考えられている。本主体部の棺型式が「H」形ではなく箱形であるにもかかわらず、小口板の押さえが必要であることは、あらかじめ組まれて運ばれた棺ではなく、この墓室内で組み立てられた棺であることになる。東側の礫は長さ52cm、幅40cm、厚さ20cmの角礫1点で、横位に立てて使用されている。西側は3石で構成され、下段は長さ46cm程度、幅18cm程度の角礫を斜位にした南側と、長さ26cm、幅26cm程度の三角形の角礫を逆位にした北側の2石で構成され、北側の礫の上には15cm×10cm、厚さ7cm程度の角礫を載せている。また、その南側上部には小礫も加えている。なお、北側長側板東部に1点のみ小角礫が検出されているが、墓室内に含まれていた礫であって、長側板押さえ石として置かれたものではないであろう。

墓室幅や墓室底の傾斜および棺幅から東頭位と推定され、棺底も東側が若干高い。ただし、人骨や副葬品は出土していないため、確定することはできない。東頭位と仮定した主軸方向は、E6.5° Sである。

出土遺物

出土遺物には、周溝内から出土したとされる須恵器1点がある。

須恵器（第105図、モノクロ写真図版20）

杯 67は口縁部の一部を欠失する須恵器杯で、口径10.0cm、器高2.6cmを測る。底部外面は回転ヘラ切り後外周を削っている。外面に自然釉がかかる。TK217型式の古段階の可能性が高い。

南但馬地域では、この須恵器が示す時期の古墳はすべて横穴式石室で、木棺墓や石棺墓は構築されないとされるため、A19号墳がこの須恵器が示す7世紀中葉に築造された可能性もあるが、本遺跡の石棺墓や木棺墓および古墳と同様に、古墳時代中期後半に築造された可能性の方が高いと思われる。また、若水古墳の墳裾平坦面と重複して構築されており、若水古墳よりも後出することは明らかであろう。

A20号（墳）

墳丘（第71～73図、カラー写真図版31、モノクロ写真図版21）

位置と検出状況 若水古墳の北側墳裾平坦面より1段下がった位置に存在している。調査区内に墳丘の一部がかかる程度であったため、測量図では墳裾まで示されていないが、調査前には瘤状の張り出しが判断できた。また、A20号墳南東側斜面の上側にも張り出し部分があるが、墳墓ではないようである。

形態・規模 周溝または区画溝の大半と墳丘の一部が調査区内にあって、調査を実施した。調査後の墳丘等高線に丸みがあることから円墳と判断され、直径は7.5m程度と思われる。なお、調査前の墳頂部の標高は146.7mで、調査後の墳頂部標高は146.4mであり、墳丘高は1m程度と思われる。

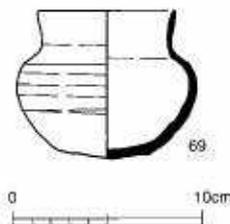
外部施設 調査の結果、斜面上側に周溝または区画溝が廻っており、溝肩ラインは弧状を呈している。また、溝肩から溝底までの高さは40cm程度である。

なお、埋葬施設は検出されなかった。

出土遺物

須恵器（第112図、モノクロ写真図版20）

短頸壺 69は周溝内から出土したほぼ完形の短頸壺である。口径7.1cm、器高7.9cmを測る。薄手で口縁部が長く、体部最大径が上位にあって丸みがあることから、TK23型式と思われる。



第112図 A20号墳 出土
須恵器

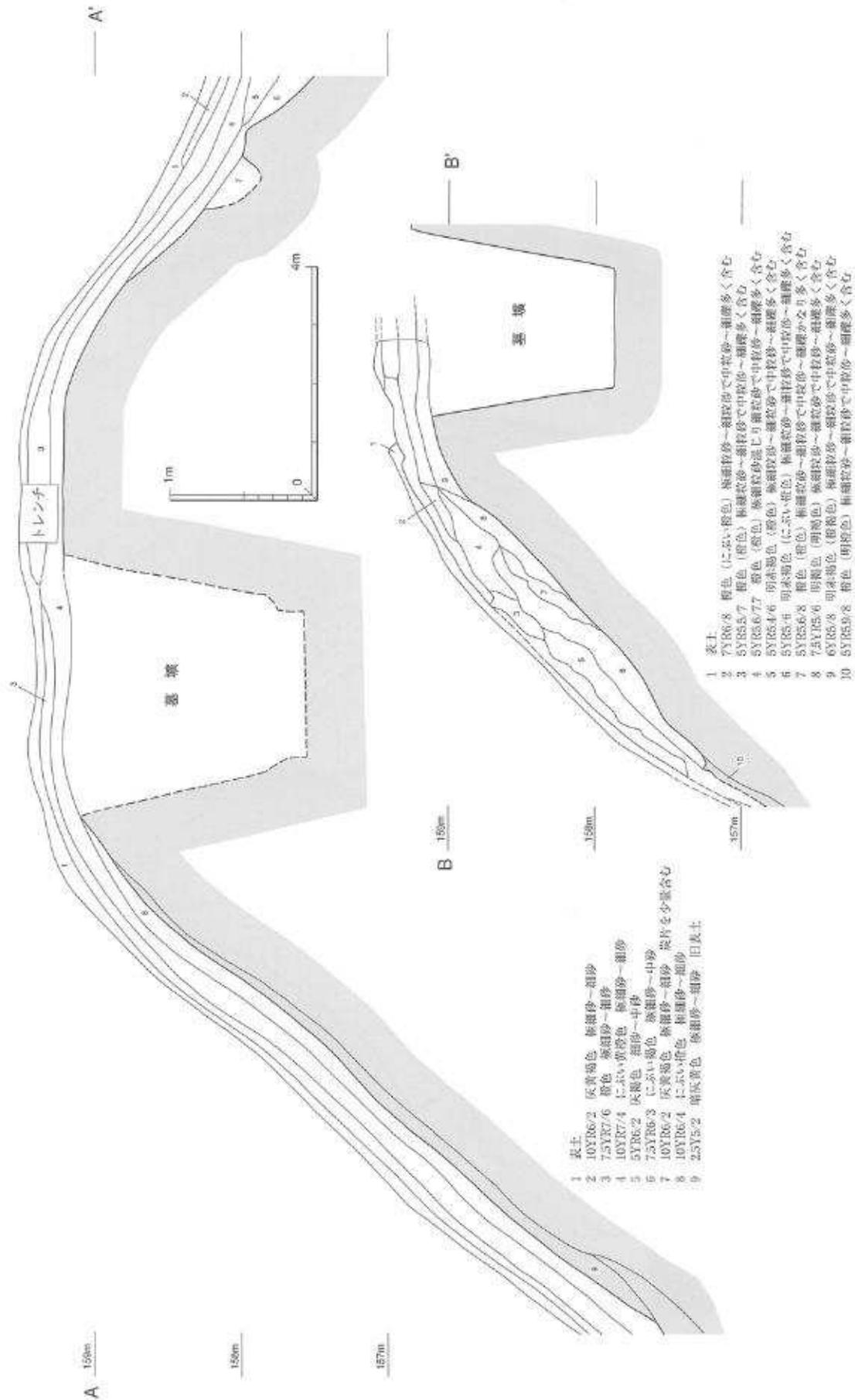
B 7号墳

墳丘 (第113・114図、カラー写真図版58・84)

位置と検出状況 中央地区東部に所在し、若水城跡主郭から北西方向にのびる尾根後線上に位置し、墳



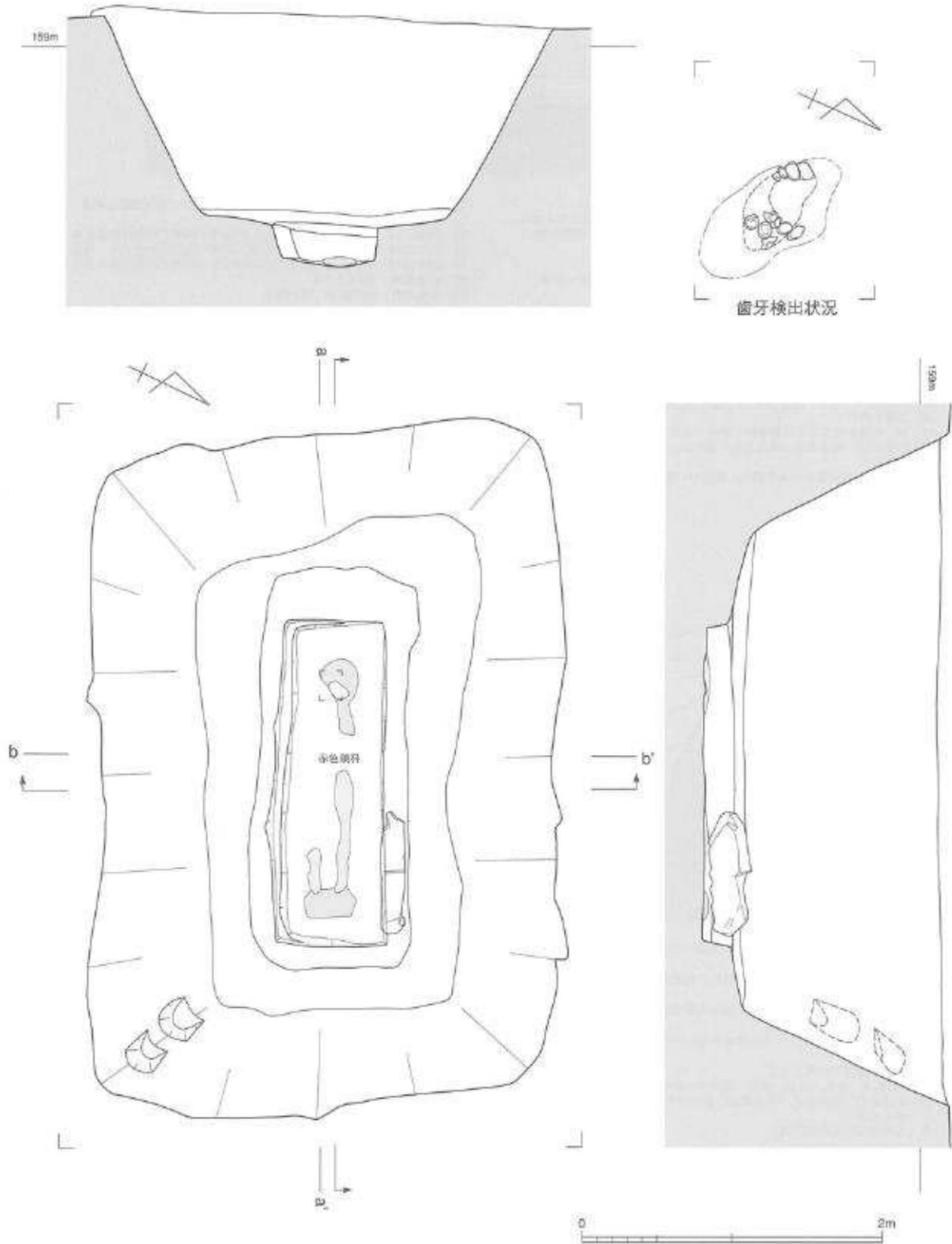
第113図 B 7号墳 調査後墳丘



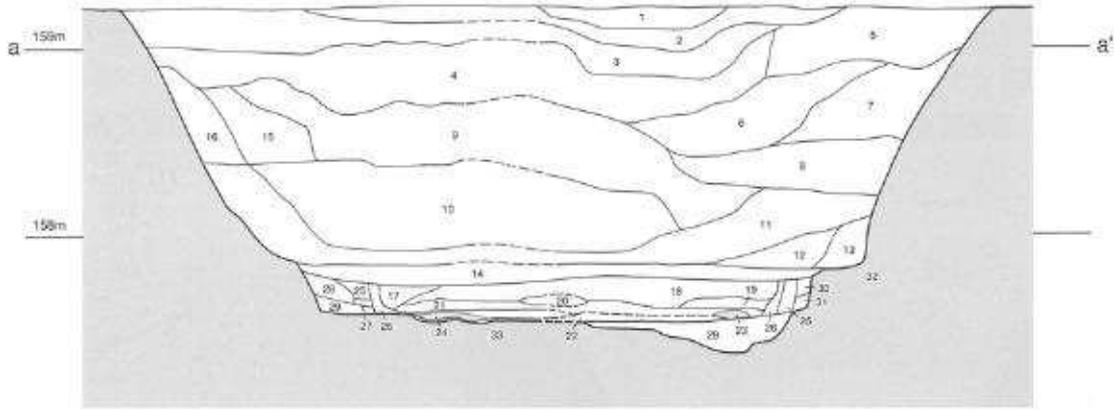
第114図 B7号墳 墳丘土層断面

頂平坦面は若水城跡下段の帯曲輪から張り出す曲輪としても利用されたと思われる。また、調査時には弥生環壕を若水城の横堀と判断していたが、本報告では前後関係が逆となり、重複関係では環壕を斜面山側の区画溝として利用して古墳が築造されたことになる。

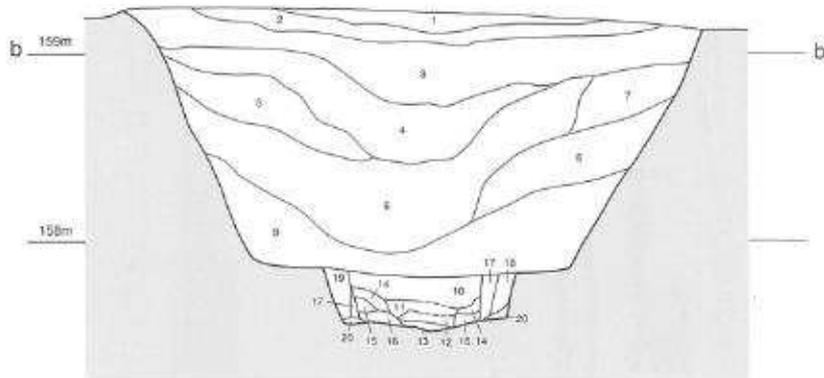
形態・規模 尾根稜線上の緩傾斜部分を加工して築造されたと思われる、地山を削って平坦面を造成し、



第115図 B7号墳 主体部



- | | |
|--|---|
| 1 7.5YR4/2 灰褐色 (灰褐色) 極細粒砂で細粒砂～細礫含む | 19 5YR5/7 明赤褐色 (濁赤褐色) 細粒砂～細礫で岩盤剝削土非常に多く混じる |
| 2 7.5YR6/5.1 棕色 (黄棕色) 極細粒砂で細粒砂～細礫非常に多く含む | 20 5YR5/5.2 明赤褐色 (明赤褐色) 細粒砂～細礫で極細粒砂混じる |
| 3 5YR5/4 におい褐色 (におい褐色) 極細粒砂で細粒砂～細礫非常に多く含む | 21 7.5YR6/6 棕色 (黄棕色) 細粒砂～細礫で極細粒砂混じる 軟質 |
| 4 6YR6/6 棕色 (におい棕色) 極細粒砂～細礫 | 22 5YR5/4/6 明赤褐色 (明赤褐色) 細粒砂～細礫で岩盤剝削土混じる |
| 5 5YR5/4/6 明赤褐色 (におい明赤褐色) 極細粒砂で細粒砂～細礫非常に多く含む | 23 赤色顔料 10R5/8 赤 |
| 6 5YR5/6 明赤褐色 (におい明赤褐色) 極細粒砂～細礫で岩盤剝削土多く含む | 24 赤色顔料 2.5YR5/8 明赤褐色 |
| 7 5YR5/5.2 明赤褐色 (明赤褐色) 極細粒砂～細礫で岩盤剝削土多く含む | 25 5YR5/4/7 明赤褐色 (明赤褐色) 細粒砂～細礫で岩盤剝削土混じる |
| 8～12 5YR5/6 明赤褐色 (におい明赤褐色) 極細粒砂～細礫で岩盤剝削土含む 下層ほど岩盤剝削土が多く混じる | 26 25層より赤みを帯びやや粘質 |
| 13 7.5YR5/4 におい褐色 (におい褐色) 極細粒砂～細礫 | 27 7.5YR5/4 におい褐色 (におい褐色) 細粒砂～細礫で岩盤剝削土混じる |
| 14 12層と同じ | 28 5YR4.5/4 におい赤褐色 (におい赤褐色) 細粒砂～細礫で岩盤剝削土混じる |
| 15・16 6層と同じだが岩盤剝削土が多く混じる | 29 5YR5/6 明赤褐色 (明赤褐色) 細粒砂～中礫で岩盤剝削土混じる |
| 17 5YR5/5.1 明赤褐色 (濁赤褐色) 細粒砂～細礫で岩盤剝削土多く混じる | 30 7.5YR5/5.2 明褐色 (明褐色) 細粒砂～細礫で岩盤剝削土混じる |
| 18 5YR5/7 明赤褐色 (濁赤褐色) 細粒砂～細礫で岩盤剝削土多く混じる | 31 5YR5/5.1 明赤褐色 (におい赤褐色) 細粒砂～細礫で岩盤剝削土混じる |
| | 32 2.5YR5/8 明赤褐色・2.5YR6/8 棕色 花崗岩盤 |
| | 33 軟質花崗岩盤 |



- | | |
|---|---|
| 1 7.5YR6/5.1 棕色 (黄棕色) 極細粒砂で細粒砂～細礫非常に多く含む 炭片微量含む | 10 上段縦断面の18層と同じ |
| 2 5YR5/4 におい褐色 (におい褐色) 極細粒砂で細粒砂～細礫非常に多く含む | 11 上段縦断面の20層と同じ |
| 3 6YR6/6 棕色 (におい棕色) 極細粒砂で細礫含む | 12 上段縦断面の21層と同じ |
| 4 上段縦断面の9層と同じ | 13 上段縦断面の22層と同じ |
| 5 5YR5/6 明赤褐色 (におい明赤褐色) 極細粒砂～細礫で岩盤剝削土多く含む | 14 5YR6/6 棕色 (棕色) 細粒砂～細礫 |
| 6 上段縦断面の10層と同じ | 15 7.5YR4.4/4 褐色 (褐色) 細粒砂～細礫で極細粒砂混じる 岩盤剝削土多く混じる |
| 7 5YR6/6 棕色 (におい棕色) 細粒砂～細礫 | 16 5YR4.4/7 赤褐色 (赤褐色) 細粒砂～細礫で岩盤剝削土少量含む |
| 8 5YR5/5.2 明赤褐色 (明赤褐色) 極細粒砂～細礫で岩盤剝削土多く含む | 17 上段縦断面の25層と同じ |
| 9 上段縦断面の11層と同じ | 18 5YR5/7 明赤褐色 (明赤褐色) 細粒砂～細礫で岩盤剝削土多く含む |
| | 19 5YR5/6 明赤褐色 (におい明赤褐色) 細粒砂～細礫で岩盤剝削土多く含む |
| | 20 上段縦断面の29層と同じ |



第116図 B7号墳 主体部埋土土層断面

その残土を斜面に盛ることによって墳丘を大きく見せていると思われる。したがって、墳頂平坦面は明確であるが、墳裾および墳形は不明確である。ただし、墳頂平坦面の形が長方形であるうえに斜面部も方形に近いことから方墳の可能性のあるものの、城の曲輪として利用される際に加工が加えられたことも考慮しておく必要がある。したがって、B7号墳築造当初の形状・規模を残していないかもしれないが、調査時には北東-南西方向に長い長方形の墳頂平坦面となっており、長さ10.2m、幅5.0m前後の規模であった。

また、調査時には墳頂部は平坦ではほぼ水平であり、墓壙上面が窪んでいなかったことから、墳頂部には盛土が存在していた可能性が高い。ただし、その高さはあまり高くなかったことが想定され、後世に曲輪として利用する際に削平されたものと思われる。

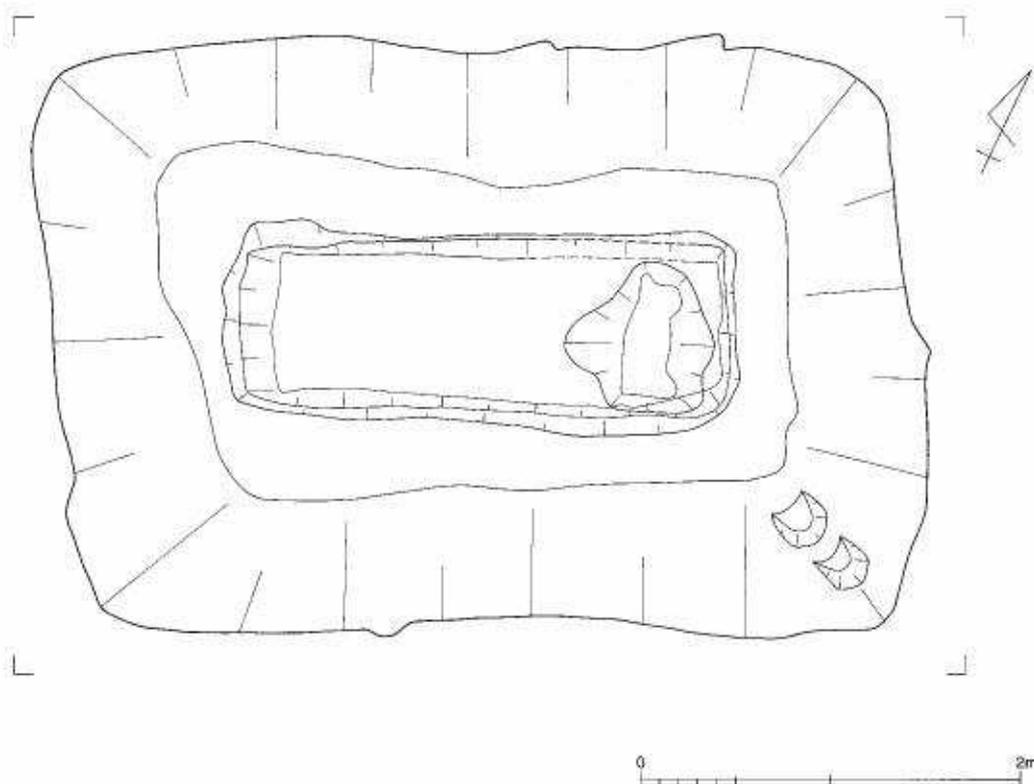
外部施設 葺石などの外部施設は認められなかったが、墳頂部南西端に溝が存在し、区画溝の可能性はある。溝は幅90cm、深さ25cmで、長さは1.7mで途切れるが、環壕にとりつく部分から始まり、斜面下側の谷部へと続いている。

埋葬施設 (第115～117図、カラー写真図版58・59・84、モノクロ写真図版24)

B7号墳の埋葬施設は、墳頂平坦面北東寄りで検出された木棺墓である。

墓壙

墓壙形態・規模 墓壙の平面形は隅丸の長方形で、北東-南西方向に長く4.8m、幅は3.2mである。墓壙底は一度水平になるが、棺部分はさらに1段深く掘り下げられており、2段墓壙の一種と思われる。この墓壙底形態は若水古墳第1・第2主体部に類似している。墓壙検出面から1段目底までの深さは1.4mで、その面はほぼ平坦で、平面形は長方形に近く、長軸3.3m、短軸1.7mである。墓壙の2段目である棺部分は長さ2.7m、幅98cmの長方形で、深さ20cm掘り込まれている。



第117図 B7号墳 主体部墓壙平面

墓壇1段目の法面は急傾斜であり、埋葬などのため墓壇底に出入するための「足掛け」が墓壇南東隅の内側稜線部分に上下2箇所掘り込まれている。この「足掛け」は幅20cm程度で、墓壇上端から上段の「足掛け」平坦面までの高さ、上段と下段間の高さの差は同じで40cm、下段から墓壇底までの高さは50cmとなっている。

なお、墓壇内からは遺物は出土しなかった。

棺

棺形態・規模 棺の痕跡は墓壇第1段底面で検出した。その平面形および棺内埋土土層断面の観察により、組合せ式の箱形木棺墓であると考えられ、同時に、長側板が短側板より10cm～20cm外側にはみ出る程度の「H」形木棺である可能性が高い。また、はみ出る部分の長さは頭位側が長いようである。なお、北側長側板の東部には板石が置かれており、長側板の押さえ石あるいは長側板が短かったために板石で代用した可能性があり、そうであれば、木石併用棺と呼ぶべきであろう。板石は長さ82cm、幅26cm、厚さ16cmで、横位に立てて設置されていた。

棺の規模は、墓壇第2段目の規模と同じであるが、埋土断面などによる短側板内側での長さは2.24m、長側板内幅では70cmで、長側板の厚さは14cm程度となる。高さは26cm確認できた。

棺内副葬品出土状況 棺内より副葬品は検出されなかったが、棺西端から45cm東側の中央部で歯牙が顎の形状のまま並んで検出され、その上下方向から両顎の歯牙を含んでいると判断される。したがって、頭位は西側となり、棺主軸はW24° S方向となる。

頭部付近と両肢部分の痕跡と思われる部分および足もとと思われる部分には赤色顔料が遺存していた。これらは、埋葬された被葬者に赤色顔料が塗布あるいは散布されていたものの痕跡であり、赤色顔料の分析結果報告では明確にされていないが、頭部に使用されたのは朱の可能性、足部にはベンガラが使用された可能性がある。

B7号墳の築造時期を示す遺物は出土しなかったが、墓壇が深い点、棺高が低い点および、墓壇底の形状が若水古墳第1・第2主体部と類似する点から、若水古墳と近い時期である可能性がある。

B8号墳

墳丘 (第118～120図、カラー写真図版84)

位置と検出状況 若水城跡主郭から北西にのびる尾根稜線上に位置し、B7号墳の墳丘斜面下方に存在している。B7号墳墳頂部平坦面との比高差は5mである。

尾根稜線部分の土層状況を確認するため、確認調査トレンチを再精査している際に石棺が検出された。また、調査時には石棺墓としていたが、墳頂部平坦面が確認できることから、古墳と判断した。

本古墳は若水城の曲輪として利用されており、墳頂部の改変が著しい。

形態・規模 尾根稜線の斜面上側を削って墳頂部平坦面を造出するもので、本地域で通常みられる階段式の古墳である。

墳頂部平坦面は、平面三日月形を呈しているが、古墳に伴う平坦面は尾根稜線下方に張り出した部分に限られるものと思われ、その北東側にのびる平坦面は曲輪による造成であろう。墳頂部は長さ8m、幅4.5mの三日月形を呈しているが、その規模に比べて斜面山側のカットが甚だしいため、曲輪による再加工の可能性が高い。なお、墳頂部の標高は154.5mである。

曲輪は横曲輪状を呈し、主郭をめぐる帯曲輪と同じように、山側に幅約2mで、深さ40cmに掘り窪め

て浅い溝状に加工すると同時に、斜面下側が幅1m程度の土塁状を呈するように造出している。この曲輪の長さは17mである。

外部施設 古墳に伴う外部施設は検出されなかった。

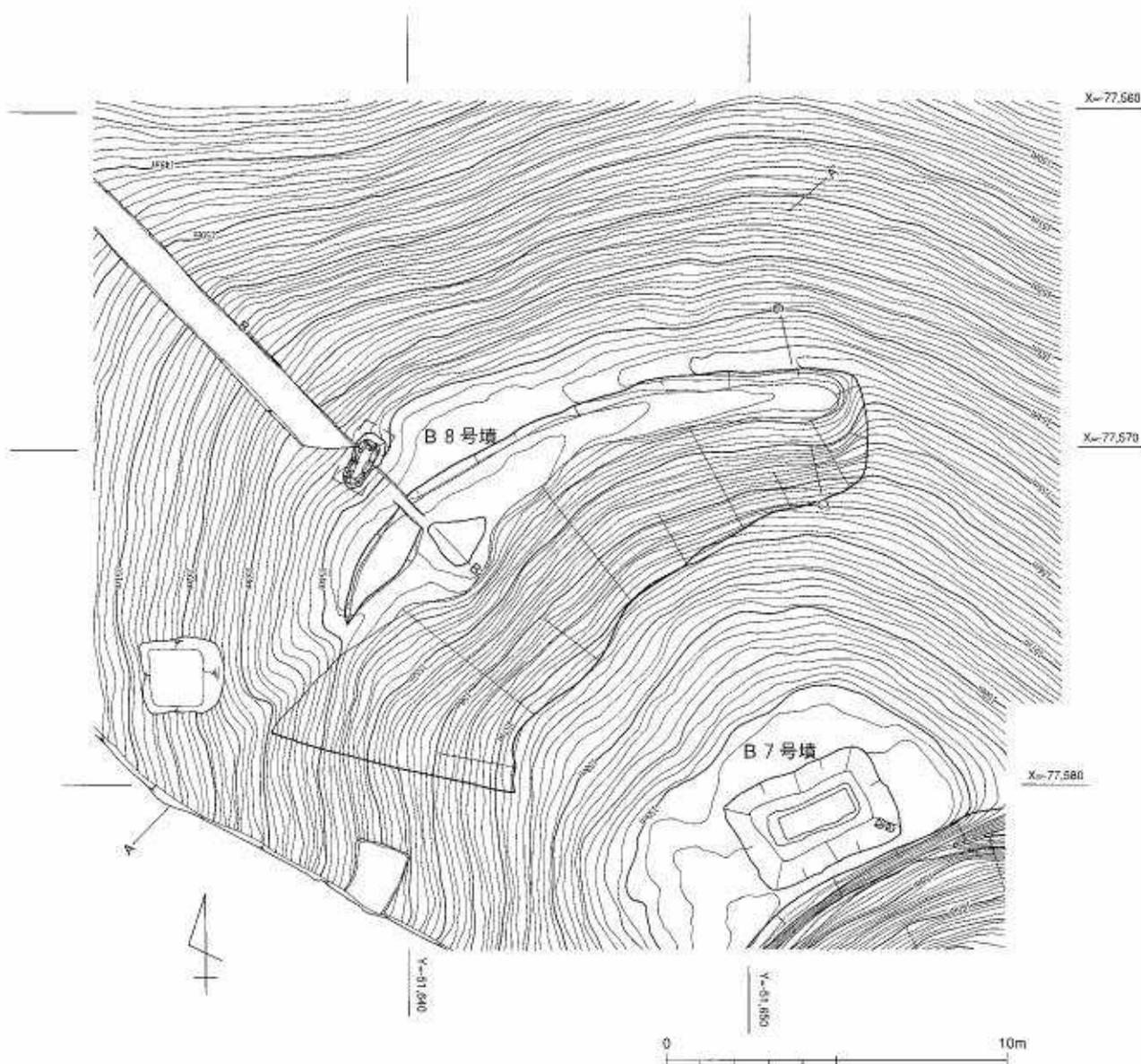
埋葬施設 (第121-123図、カラー写真図版60、モノクロ写真図版25)

B8号墳の埋葬施設は、墳頂部平坦面から少し下った部分で検出された石棺墓である。ただし、墳頂平坦面が石棺部分でやや凹んでいる形状からすると、もとは平坦面の端に位置していたことになろう。

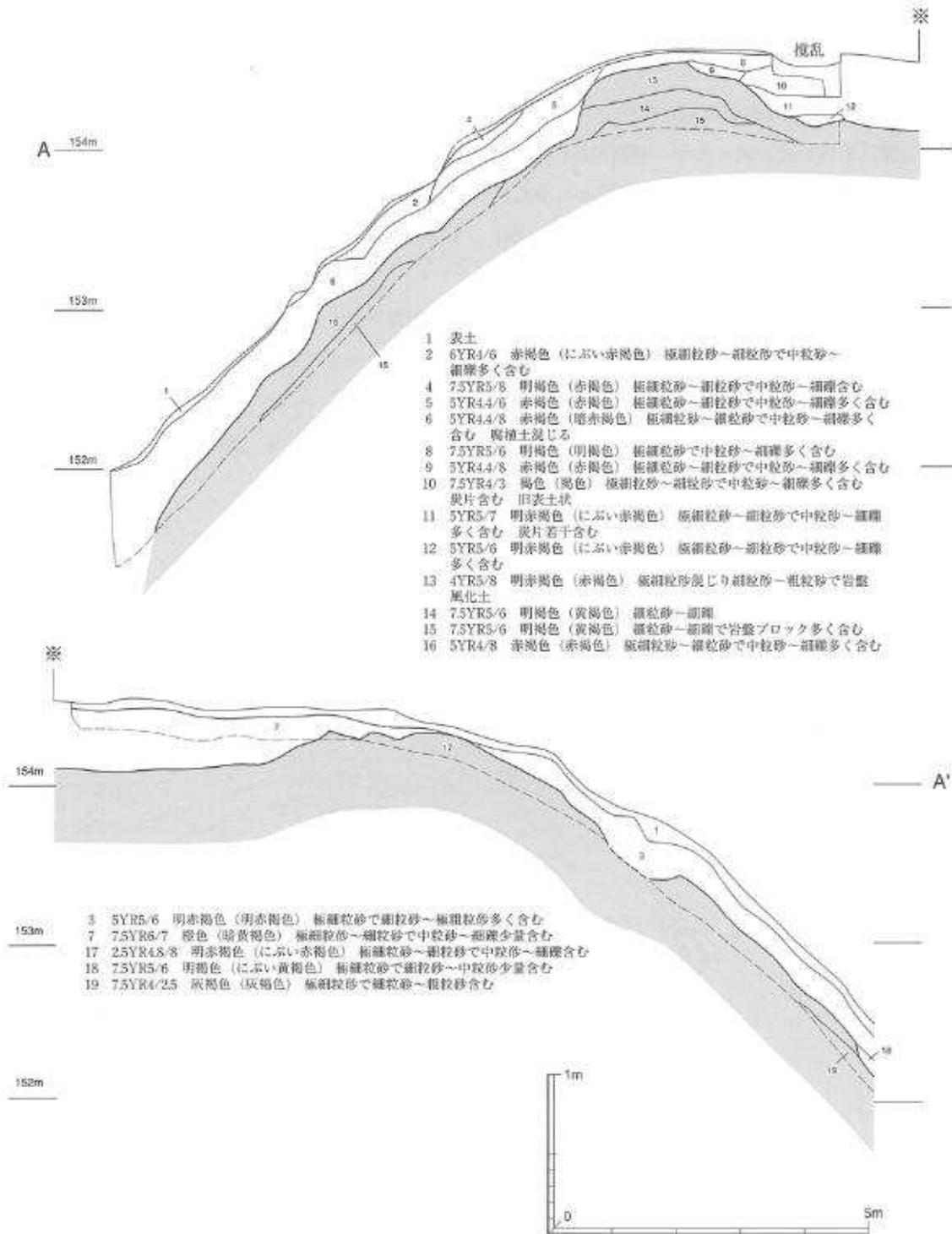
墓壇

墓壇形態・規模 墓壇は長さ1.78m、最大幅94cmで、南西側半分の幅が狭いのは確認トレンチによって墓壇上部が削平されていたためである。したがって、もとの平面形は長辺が膨らむ長方形に近く、長さはもう少し長かったものと思われる。

検出面からの深さは52cmで、北東側が南西側に比べて5cm深くなっている。墓壇底は長方形を呈し、長さ1.3m、幅46cmである。なお、遺物は出土しなかった。



第118図 B8号墳 調査後墳丘



第119図 B 8号墳 墳丘土層断面 (1)

棺

棺形態・規模 墓室内いっばいに構築された、角礫を用いた組合せ式の箱式石棺で、完存していた。

蓋石には、長さ42cm～64cm、幅28cm～35cmの4石の角礫を横位に架け、その隙間に長さ15cm～33cm、幅7cm～18cmのやや小ぶりの角礫を詰めており、間隙の一部には充填粘土が残存していた。蓋石は、棺の内面が平坦面となるように架構されていたと同時に、北東側に比較的大きな石材が使用されていた。なお、蓋石内面は中央部で弓なりにやや下がっていた。

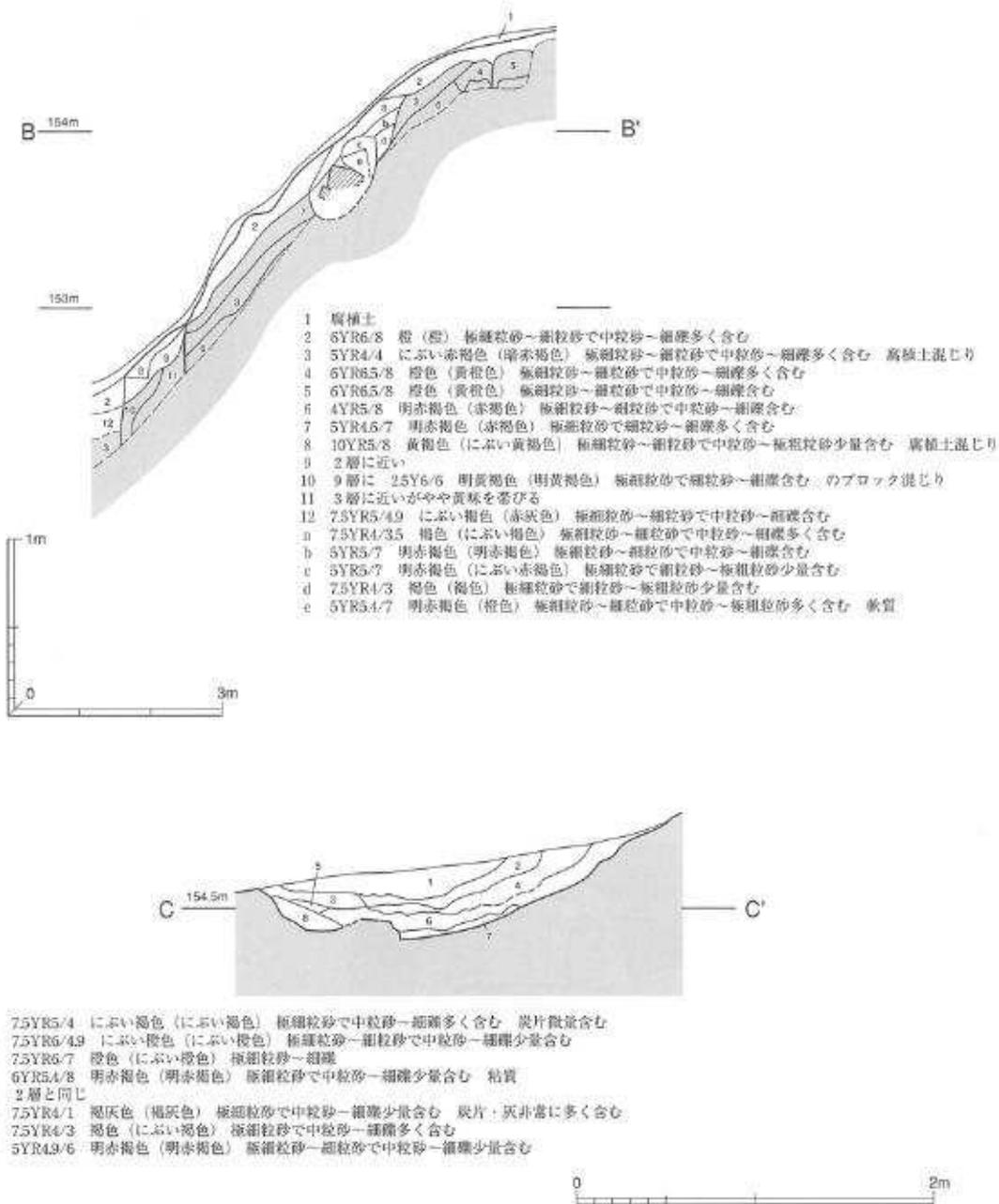
棺身は1段で、長側壁は長さ20cm～50cm、幅18cm～28cmの角礫を横位に置き、北西側で4石、南東側

では3石で構成されていた。短側壁も各1段で構成され、長さ33cm・45cm、幅30cm・32cmの角礫を横位にし、外側から長側壁に突き当てるように組まれていた。なお、礫の間隙には小角礫が詰められていた。

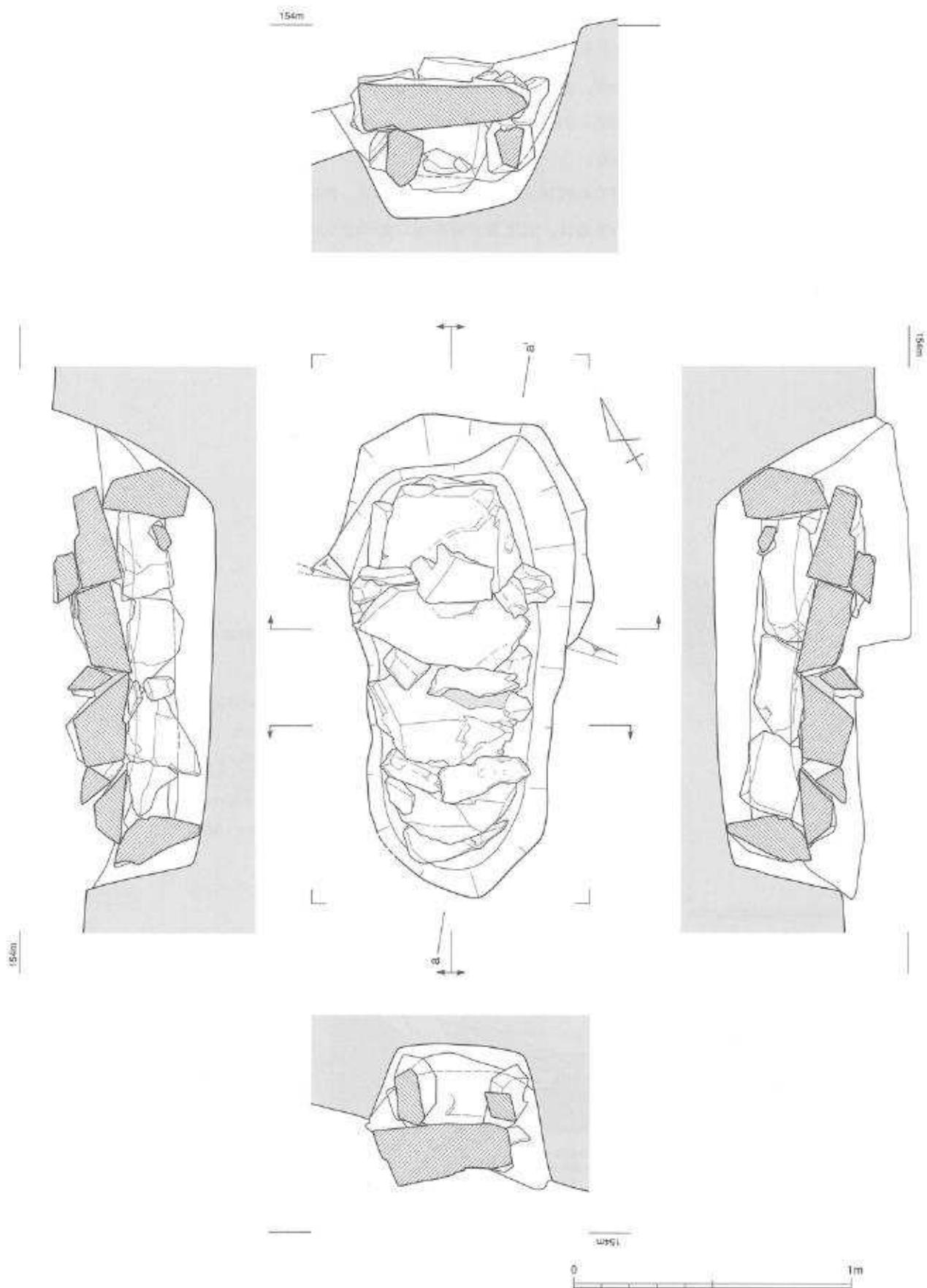
棺底には土が敷かれて平坦に近いが、北東端の底が南西端に比べて3cm高くなっている。棺内底面北東端の北西寄りには13cm×11cmの角礫と9cmの小礫が各1点置かれており、石枕と判断できることから、頭位は北東側で、N29°E方向となる。

棺の内法は、長さ1.08m、北東端での幅26cm、南西端の幅18cmで、北東端の高さは24cm、南西端では高さ18cmである。また、両短側石の下端は、北東側が南西側に比べて5cm高く、それにあわせて長側壁も傾斜している。本石棺は棺内長が短く、屈肢葬であればかろうじて収まるかもしれないが、幅も狭いことから、被葬者は大人ではない可能性がある。

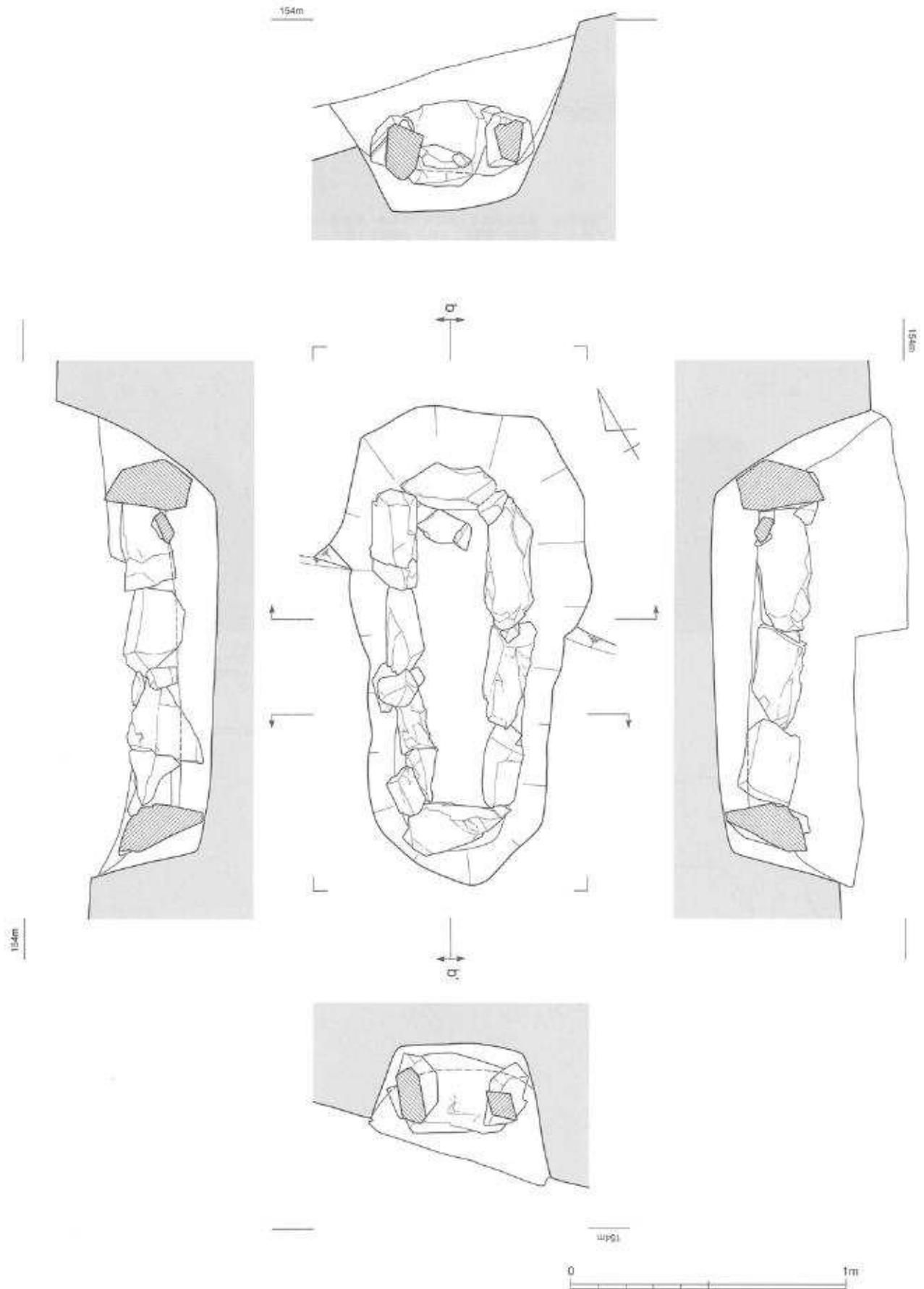
なお、棺内副葬品などは検出されず、時期は不明であるが、古墳時代中期後半の可能性が考えられる。



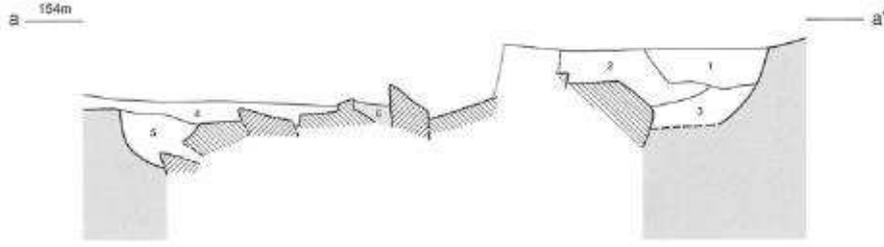
第120図 B 8号墳 墳丘土層断面(2)



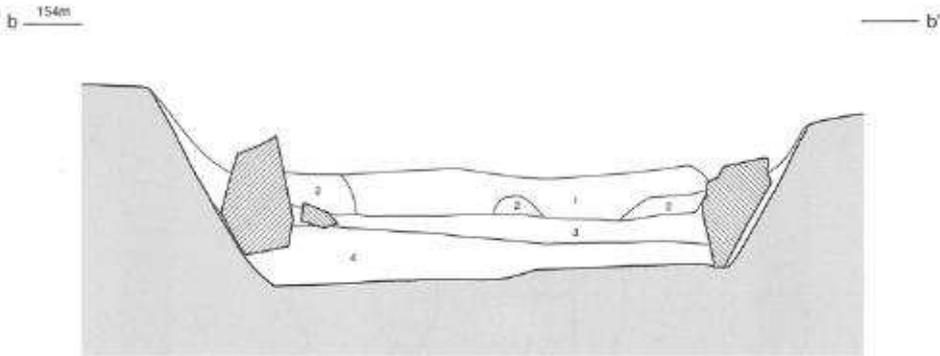
第121図 B 8号墳 主体部 (1)



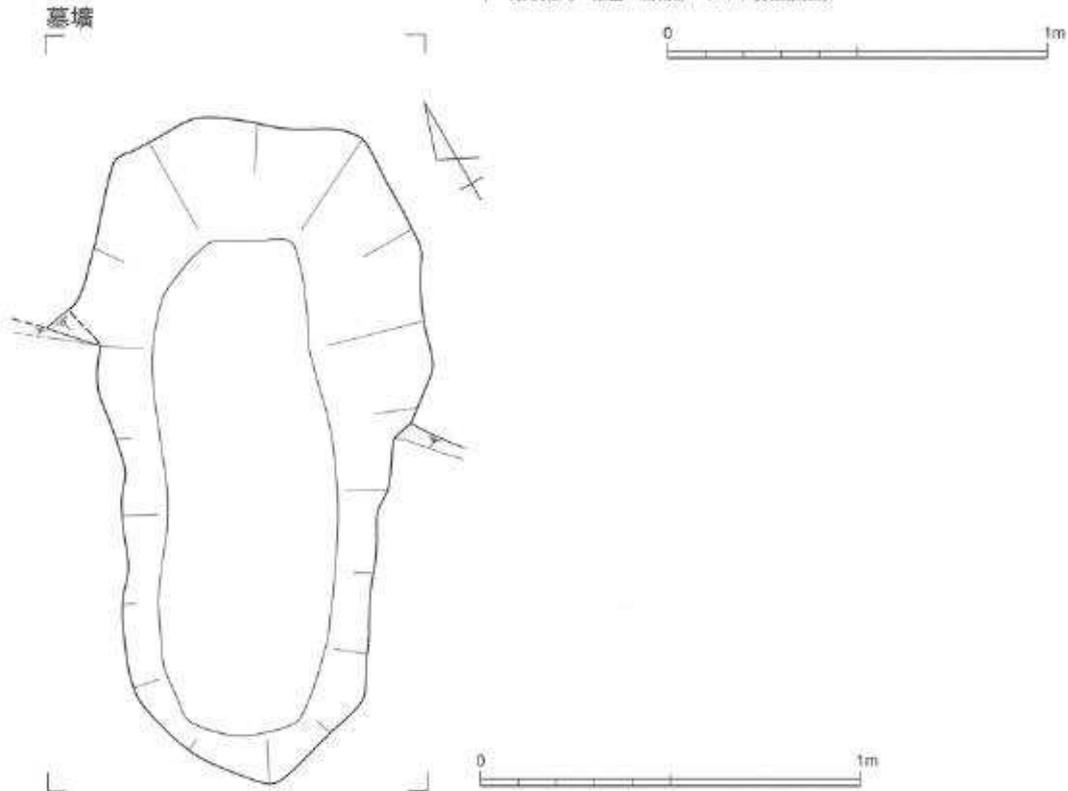
第122図 B 8号墳 主体部(2)



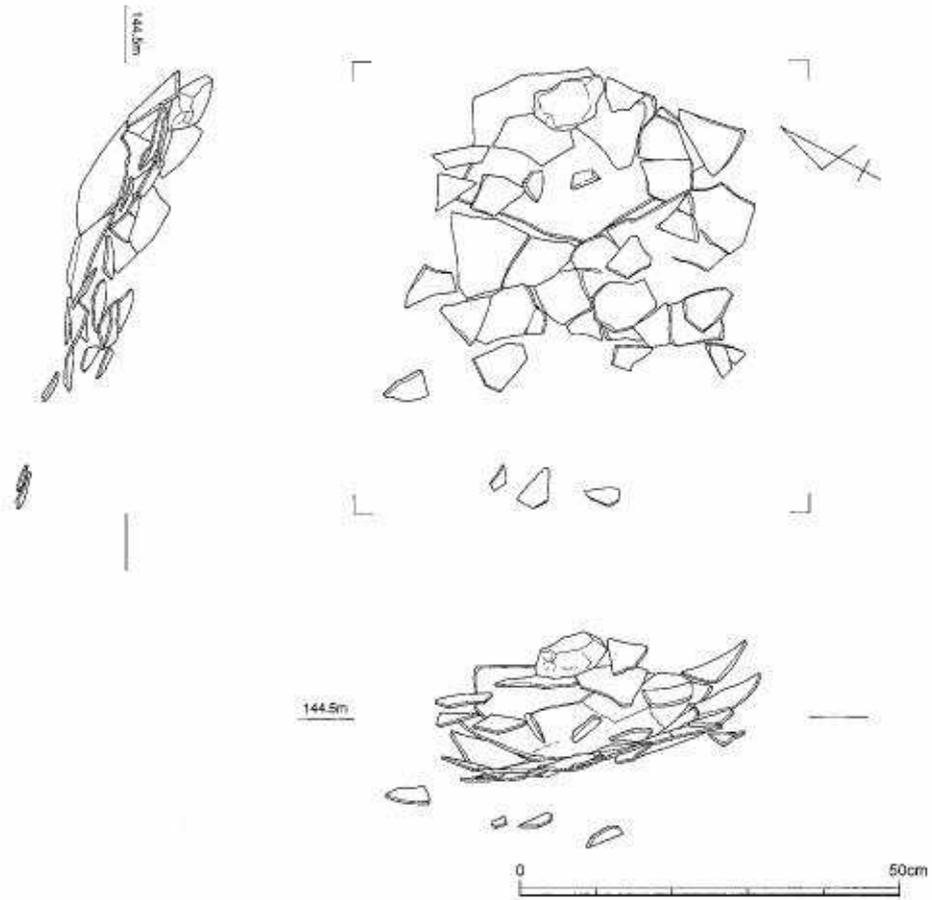
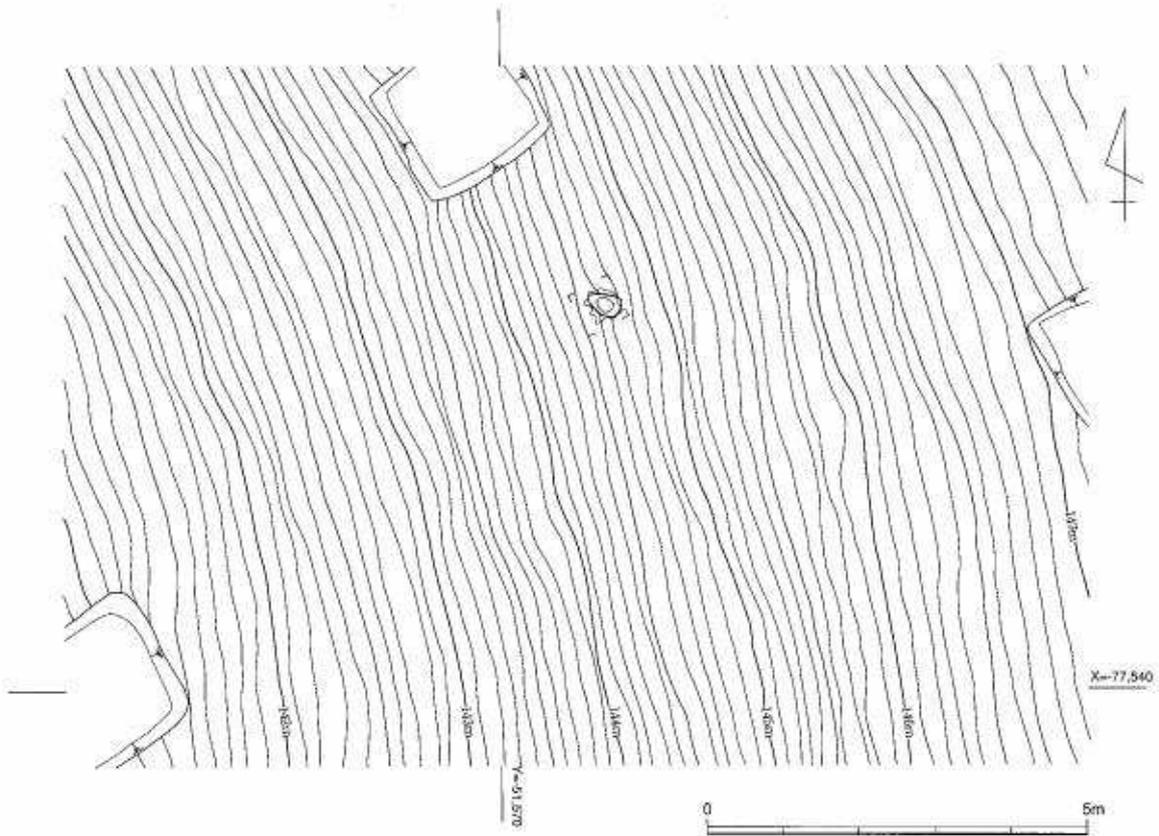
- 1 6YR5/8 明赤褐色（明赤褐色） 極細粒砂混じり細粒砂で中粒砂～細礫多く含む
- 2 8YR5/5.2 明褐色（明褐色） 極細粒砂～細粒砂で中粒砂～細礫多く含む
- 3 6YR4.6/6 明赤褐色（にぶい赤褐色） 極細粒砂で細粒砂～細礫含む 底植土混じり
- 4 5YR4.6/8 明赤褐色（明赤褐色） 極細粒砂混じり細粒砂で中粒砂～細礫多く含む
- 5 6YR4.6/8 明赤褐色（にぶい赤褐色） 極細粒砂～細粒砂で中粒砂～細礫多く含む
- 6 2.5Y7/6 明黄褐色（明黄褐色） 極細粒砂で細粒砂～細礫少量含む 間隙充填の粘土



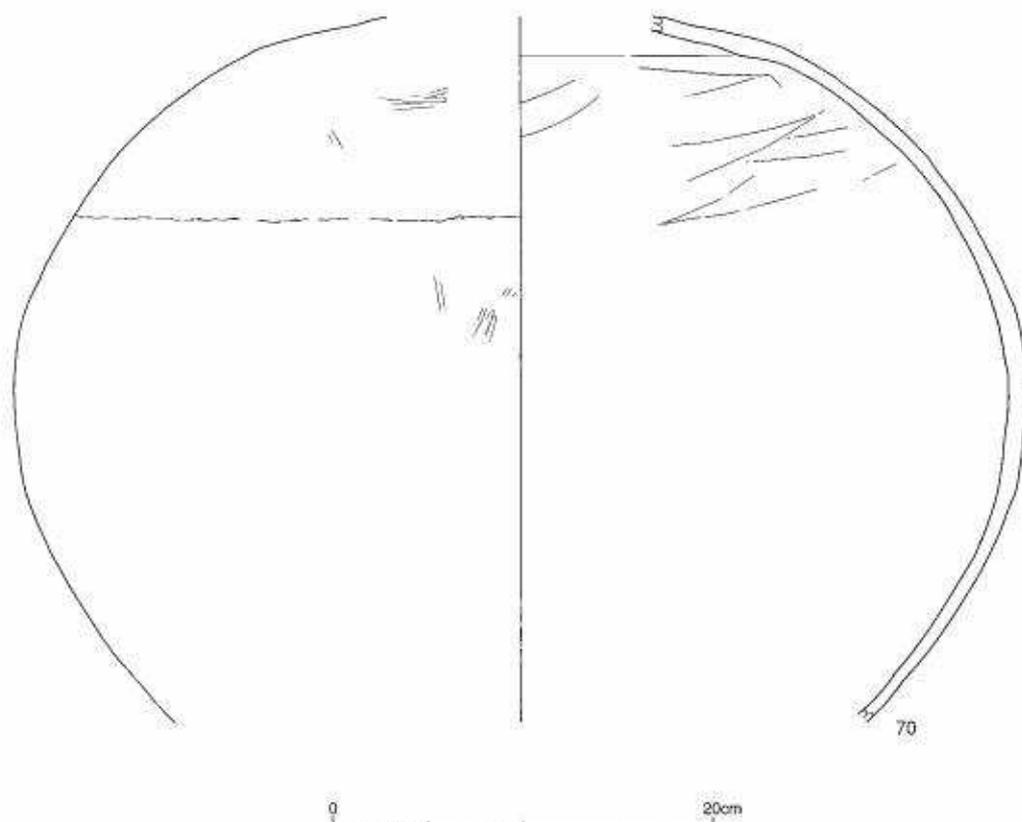
- 1 5YR5/8 明赤褐色 極細粒砂で細粒砂～細礫少量含む 軟質
- 2 10YR6/6 明黄褐色 極細粒砂で中粒砂～極細粒砂少量含む
- 3 5YR5/8 明赤褐色 極細粒砂～細粒砂で中粒砂～細礫少量含む
- 4 7.5YR6/6 棕色 細粒砂～シルト質極細粒砂



第123図 B8号墳 主体部（3）



第124図 土器棺1 (SP-C1)



第125図 土器棺1 (SP-C1) 出土土器

2. 土器棺・溝・土壙・集石

土器棺

土器棺1 (SP-C1) (第124・125図、カラー写真図版81、モノクロ写真図版20)

位置と検出状況 土器棺1は若水古墳南西側の墳裾平坦面を少し下がった所の、標高144.6mの斜面に位置している。若水古墳墳裾平坦面からは高さ約3m下側である。検出時には土師器の破片が集中していたが、棺の上部が破片となって棺底部分に落ち込んだようであった。また、1辺10cm程度の角礫が1点検出されている。

墓壙 本土器棺では墓壙は検出されていない。しかし、棺の検出状況からは、土器のみが上部から転がってきたものではなく、墓壙が存在していたものと思われる。したがって、墓壙上部は流失したものの、土器棺下面に接してわずかに残存していた可能性がある。その規模は不明であるが、棺の規模から平面60cm以上、深さ40cm以上であったと想定される。

形態 土器片は斜面上下方向の東西60cm、南北50cmの範囲に散らばっていたが、落ち込んだ破片を除くと、東西45cm、南北40cmの部分で原位置を保っていたと判断される。器種は壺である。土器底部が出土していないことから、棺の埋納方向は不明であるが、墓壙内に斜位に置かれていたものと推定される。また、上面で検出された礫は、墓壙内で棺を安定させるために置かれていた可能性もある。

出土遺物 出土遺物は70に示した壺で、棺として使用されていたものである。口頸部と底部を欠失するが、体部は丸く、最大径が中央部にあり、53cmを測る大形壺である。外面はヘラ磨きがわずかに残り、内面はヘラ削りのようであるが、不明確である。頸部の欠損は打ち欠かれたためである可能性もある。

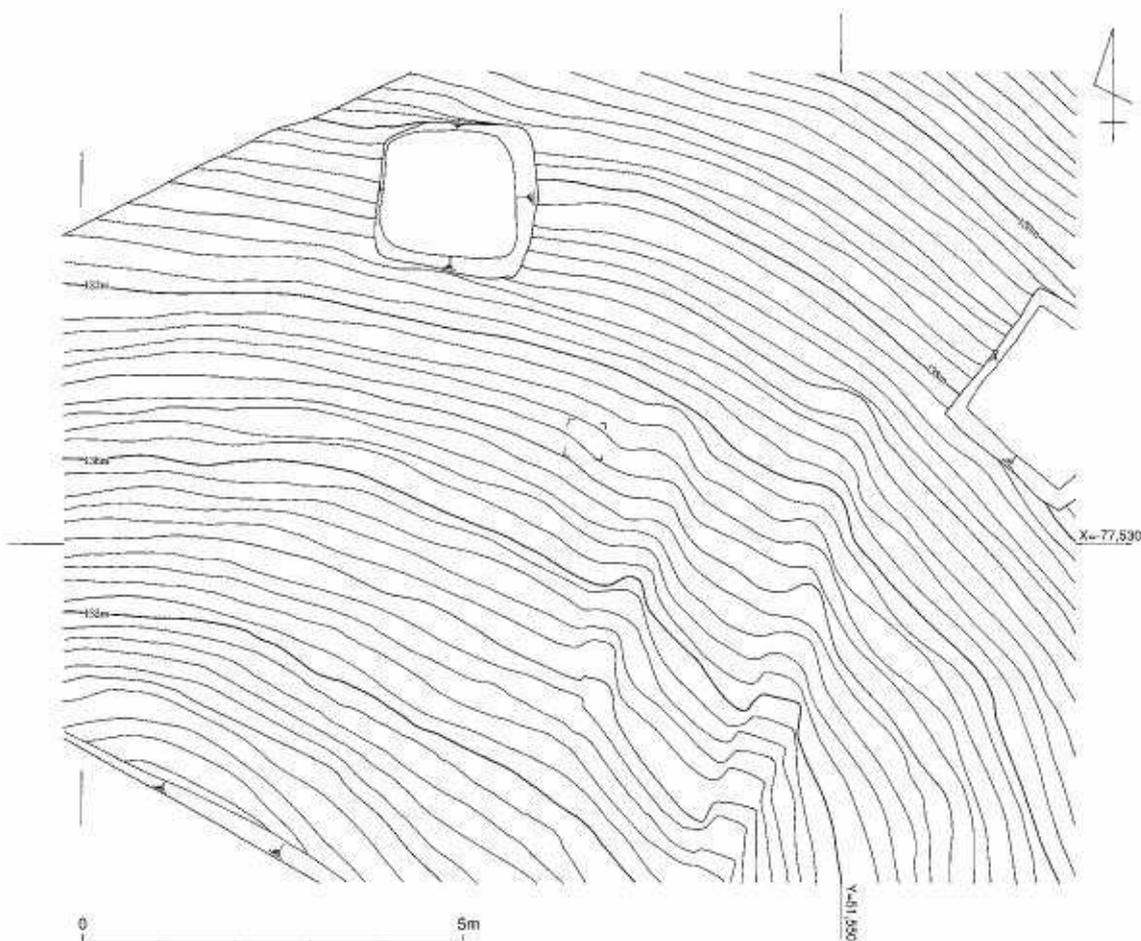
口縁部や底部が残存していないことから、詳細な時期は不明であるが、弥生後期末から古墳時代前期の所産と思われる。

土器棺2 (SP-C2) (第126~128図、カラー写真図版82、モノクロ写真図版26)

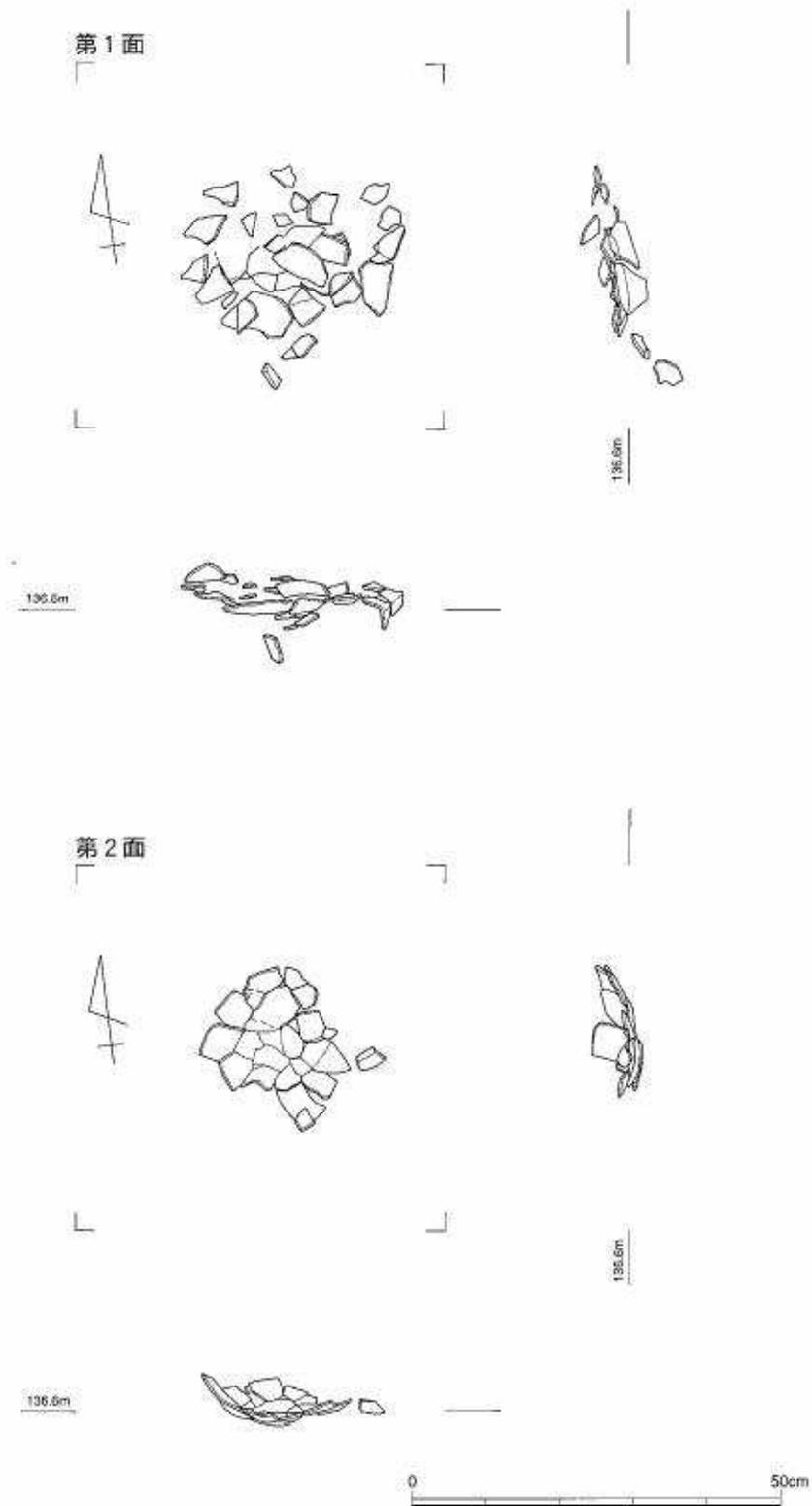
位置と検出状況 土器棺2は若水古墳南西側の斜面をかなり下がった所の、標高136.6mの斜面に位置しており、若水古墳裾平坦面の約11m下方にあたる。検出時には小片となった土器が、斜面傾斜方向の南北30cm、東西30cmの範囲に散らばり、重なっていたが、棺上部が破片となって落ち込んだものも多い。
墓壇 本土器棺においても墓壇は検出されておらず、周囲よりも土器が浮いた状態で検出されている。棺の検出状況からは、上部から転がってきたものである可能性もあるが、土器下の面が凹面を呈していたことから、墓壇の底である可能性も十分考えられる。

形態 落ち込んだ破片を除くと、北西-南東方向で20cm、北東-南西方向でも約20cmの範囲に原位置を保っていたと思われる部分が残存していた。また、口縁部の破片が東側で検出されていることから、棺の埋納方向は等高線に沿った東西方向で、口縁部を東にして横位に埋置されていたと判断できよう。棺の器種は甕である。

出土遺物 棺に使用されていた土師器甕は71に図示した。体部中央部を欠失しているため器高は不明であるが、19cm前後と思われる。丸い底部から直線的に上方にのびる体部で、口縁部はやや短く横外方に外反気味にのび、内面の体部との境は鋭い稜となる。口径24.3cm、体部径は20cm程度である。体部下

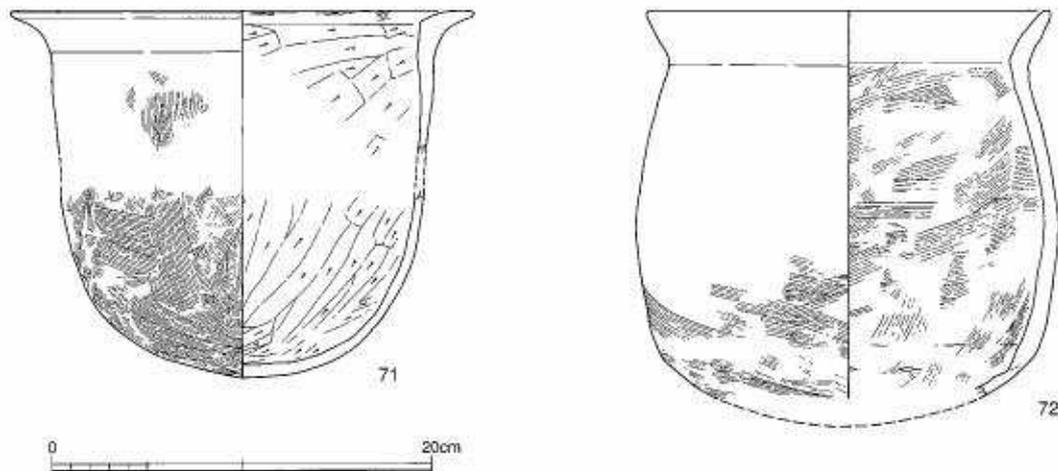


第126図 土器棺2 (SP-C2) 位置図



第127図 土器棺 2 (SP-C2) 検出状況

には黒班が認められ、体部外面は密なハケ調整、内面は縦方向を主としたヘラ削りであり、口縁部内面にもハケを施している。口縁部は断面三角形に近く、粟鹿遺跡に出土例があり、飛鳥時代のTK217型式期の所産と判断される。



第128図 土器棺2・3 (SP-C2・C3) 出土土器

土器棺3 (SP-C3) (第128・129図、カラー写真図版81、モノクロ写真図版26)

位置と検出状況 土器棺3は若水古墳墳頂平坦面上南部に存在し、第1主体部の南西側約2mの位置にある。標高は152.8mである。

検出時には円形の墓壙およびその内部に土師器が破片となって存在していた。

墓壙 墓壙平面はほぼ円形であるが、長径40cm、短径37cmと南北方向にやや長い。墓壙断面は半円形を呈し、検出面から墓壙底中央部までの深さは16cmであるが、埋土は不明である。

形態 墓壙内には、口縁部を北側にした土師器甕が割れた状態で検出されたが、完形の土器が押しつぶされた状況ではなく、体部の1/3程度の破片が置かれたように看取できる。したがって、本土器棺は完形の土師器甕を埋置したのではなく、割った破片を被せたものであると判断される。また、東側では立った状態の土器片が存在していることから、土器で囲い、覆った状態であったことを示していよう。

出土遺物 出土した土器は、72に示した土師器甕である。底面を欠失するが、丸底となり、器高22cm程度と思われる。体部は外湾および内傾しながら直立し、体部最大径はほぼ中位にある。口縁部は体部から外反して外上方に直線的にのび、端部は丸くおさめる。口径20.9cm、体部最大径は22.2cmである。体部の内外面は横あるいは斜め方向を基本としたハケ調整で、外面下半には煤が多く付着している。したがって、日常使用していた土器を転用したと判断できる。

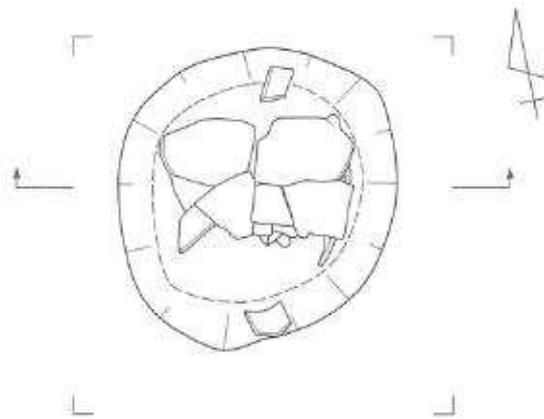
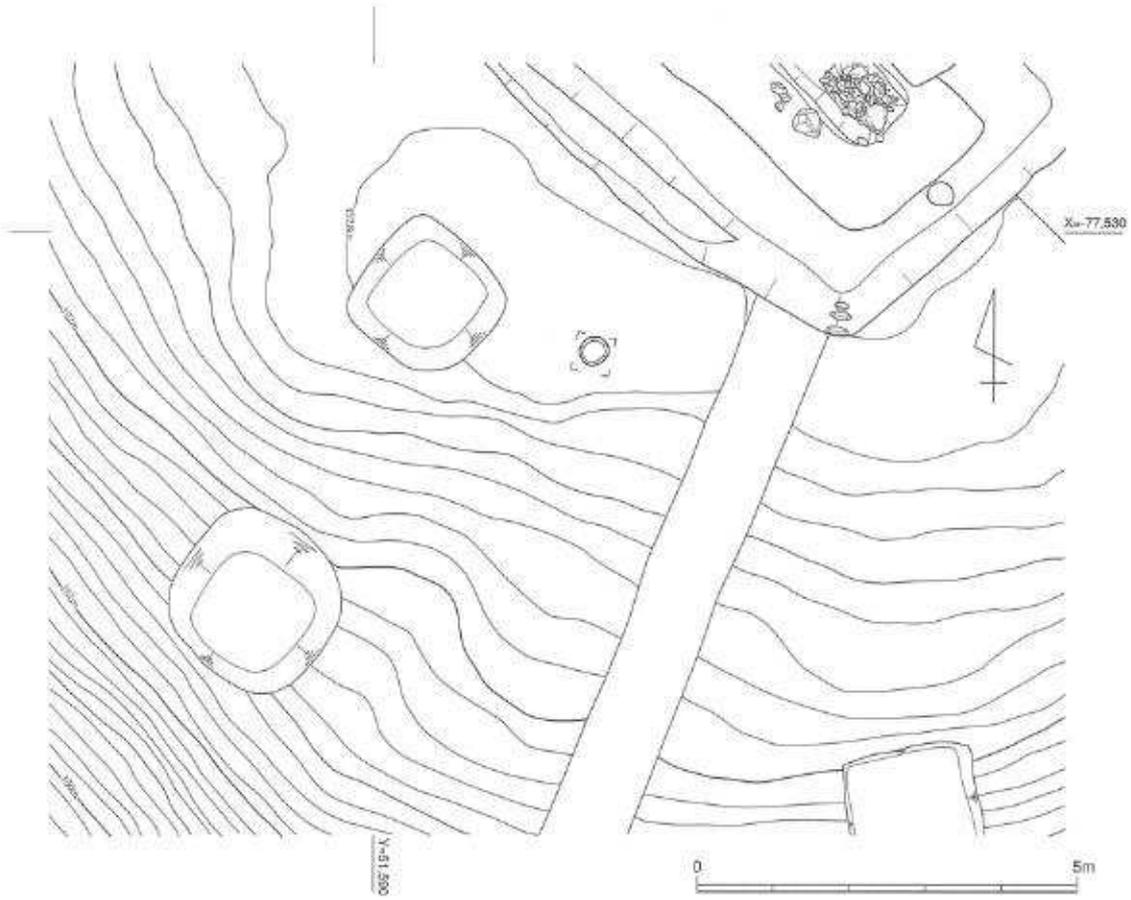
この土器も粟鹿遺跡に出土例があり、飛鳥時代のTK217型式期の所産と判断される。

溝状遺構

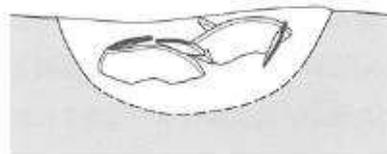
溝状遺構1 (SD-C1) (第130図)

位置と検出状況 若水古墳から南西側にのびる小支尾根に存在する溝状遺構で、若水古墳墳裾平坦面からは約3.5m下がった位置にある。この溝状遺構を周溝として、若水A21号墳と呼称されていた部分である。溝は斜面上側をカットしており、南西側に平坦面も存在していることから、古墳としての判断も頷けるものであるが、埋葬施設は検出されていない。したがって、古墳と断定するには躊躇される。

溝は、基本的には等高線と平行方向であるが、北西側はやや弓なりに西方向に曲がり、斜面下側にのびている。溝の南東側は斜面のカット部分のみである。これらを含めた溝の総延長は約12mである。溝幅は1.4mで、土層断面図をみると、第5層が盛土のようにもみえるが、溝を除外した平坦面の幅は約



150m

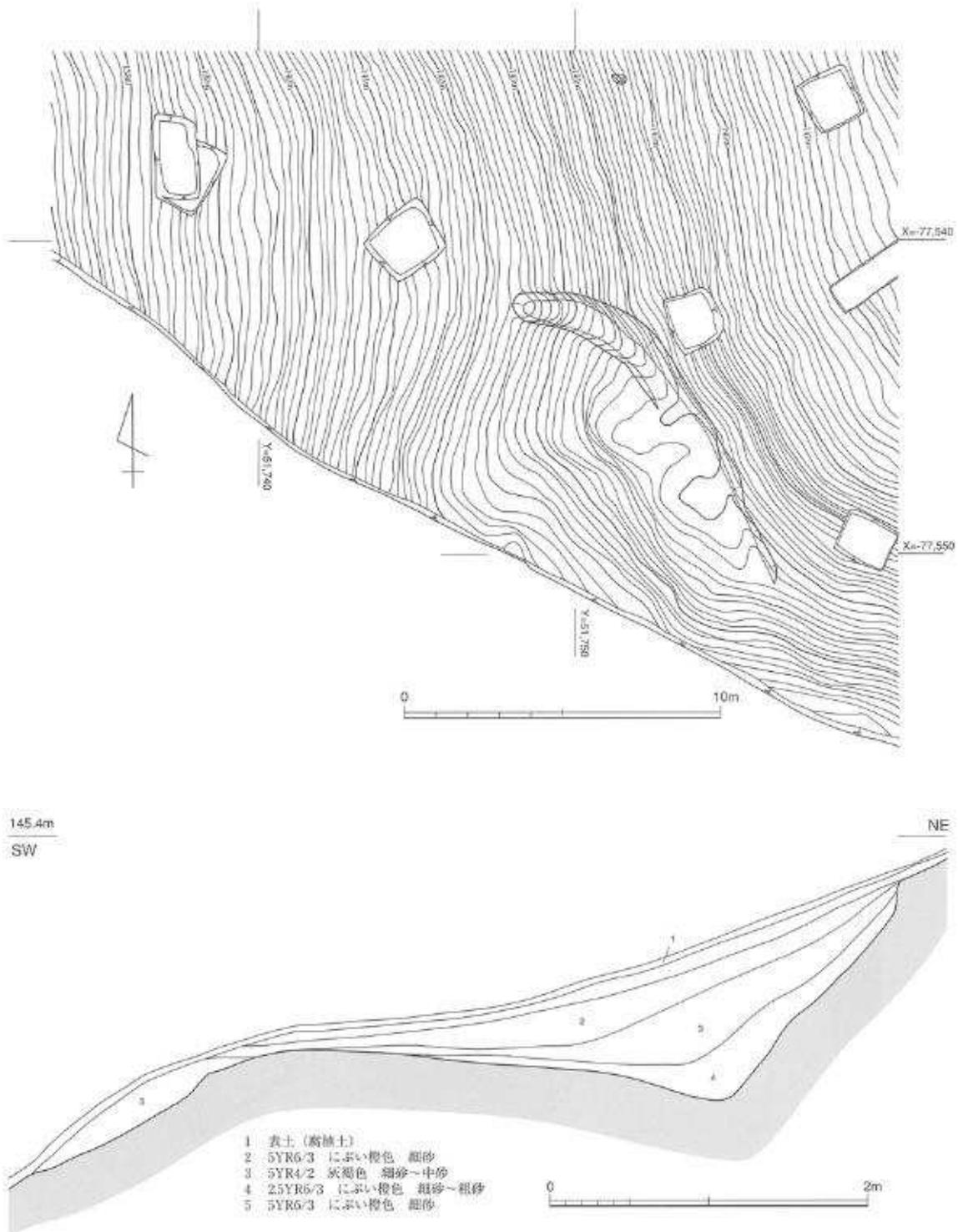


0 40cm

第129図 土器棺 3 (SP-C3)

2mと非常に狭い。特に、平坦面中央部が斜面下側に張り出すことなく少し抉れた形になっている点は、古墳平坦面としての違いが大きい。しかし、この溝および平坦面の機能は不明である。

なお、溝内および周辺から遺物は出土していない。



第130図 溝状遺構 (SD-C1)

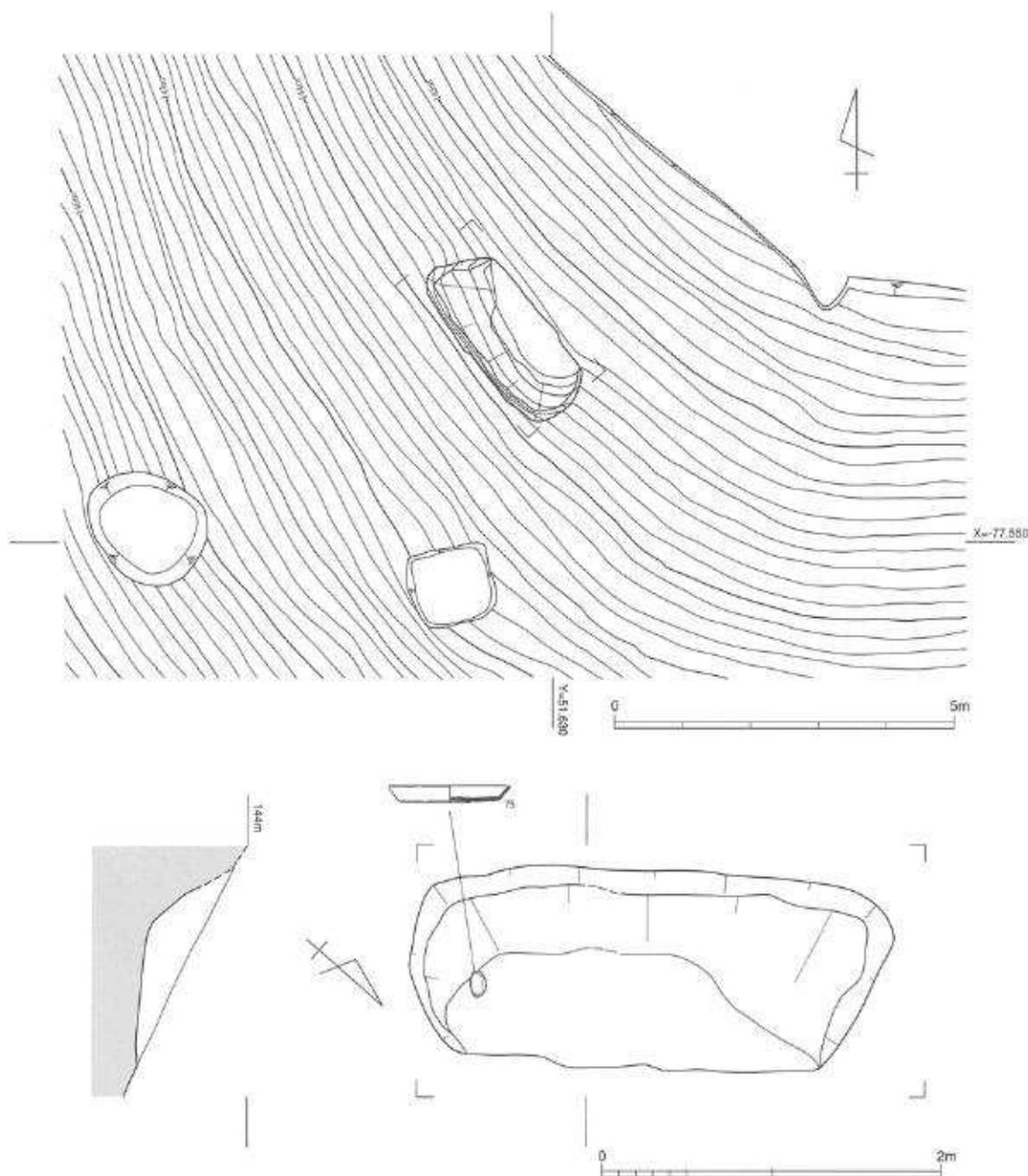
土壙

土壙1 (SK-C1) (第131・132図、カラー写真図版82、モノクロ写真図版26)

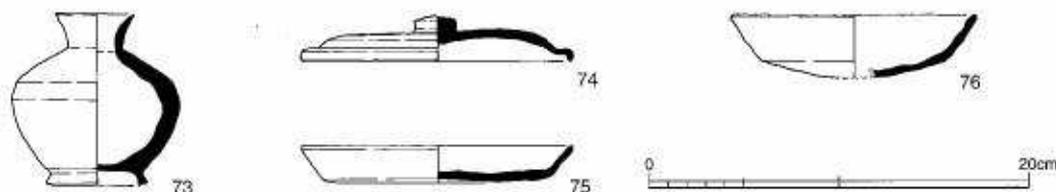
位置と検出状況 若水城跡から若水古墳に続く尾根稜線鞍部の北東側斜面に存在した。標高は143.4m～143.9mの斜面で、尾根鞍部から約4m下がった位置である。

斜面を掘削中に土器が検出されたため、周囲を精査したところ、長方形の土壙が検出された。

形態 土壙1は等高線と平行方向に長い長方形を呈し、長辺2.88m、短辺1.2mの規模である。斜面上側を掘削して、長さ2.2m、幅70cm程度の平坦面を造り出しているように見えるが、構築時には斜面下側にも立ち上がりがあったかもしれない。斜面上側の検出面から底面までの深さは約60cmである。暗茶褐色系の埋土であったと記憶しているが、記録がない。土壙南東端付近の上面に近い位置から須恵器皿が土



第131図 土壙1 (SK-C1)



第132図 谷部出土須恵器

壙内側に傾いた状態で出土している。

本土壙は墓の可能性もあるが、性格は不明である。

出土遺物 出土した須恵器は、第132図75に示した皿A 1点である。口縁端の一部を欠損するのみで、ほぼ完品である。外面ヘラ切りの平らな底部から、曲折して外上方に短くのびる口縁部で、口縁部外面ほぼ中央には浅い窪みがあり、一度軽く屈曲しているようにも見えるが、粘土紐の接合部分である可能性が高い。口径14.2cm、器高2.0cmで、平安時代初期の所産と思われる。

谷部出土遺物

若水城跡から若水古墳に続く尾根稜線北側を、調査時には谷部と呼称していたが、その部分を掘削中に土器が出土している。遺構に伴わないと判断されたこれらを一括して述べる。

土器 (第132図、モノクロ写真図版26)

須恵器 谷部から出土した土器で図示した3点はすべて須恵器である。

73は器高6.2cmの小形壺で、底部には径5.4cmの輪高台を貼り付けている。体部は丸みがあるが、上半はやや直線的である。体部最大径は中位にあり、8.8cmを測る。口縁部は大きく開かず短く外上方にのびて、端部はやや尖る。ほぼ完形品で、口径4.0cm。奈良時代末～平安時代初期と思われる。

谷部下端の黒褐色土（いわゆる「黒ボク」の二次堆積層）直上から出土しており、後述の74も同じ層の直上から出土していることから、黒褐色土は奈良時代～平安時代初期よりも前に堆積していたことがわかる。

74は杯蓋の破片で、口径は14.0cm、高さ2.3cmである。つまみは円柱状となり、口縁端部は屈曲した後下方に曲折している。天井部はやや高いがほぼ平坦である。奈良時代末～平安時代初期と思われる。谷部下端の黒褐色土直上から出土している。

76は杯身あるいは逆転前の蓋と思われる破片で、B 8号墳付近から出土している。口径12.7cm、器高3.4cmと判断される。底部は丸みがあるが、外面は回転ヘラ切りのち周囲を削っている。TK 217型式と思われる。

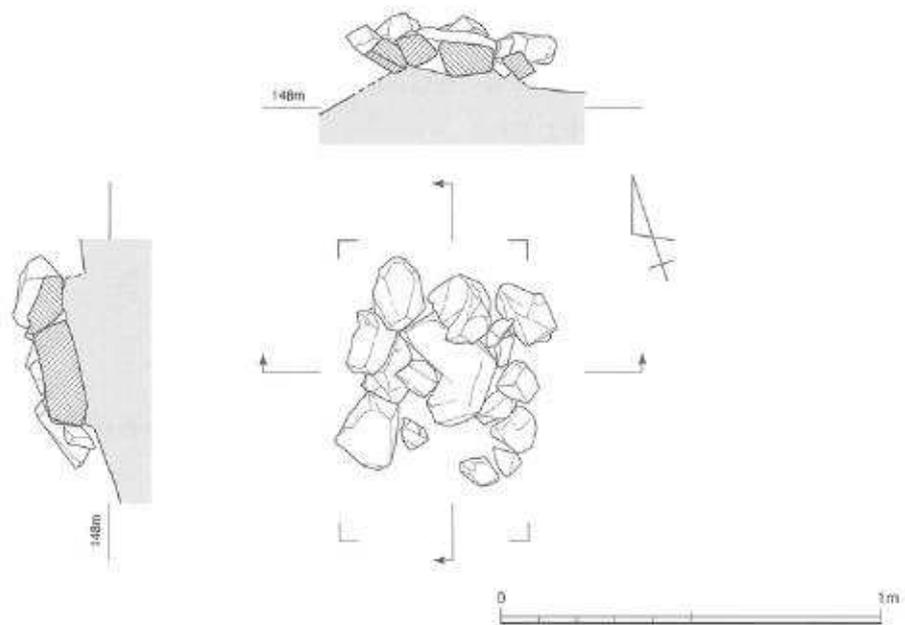
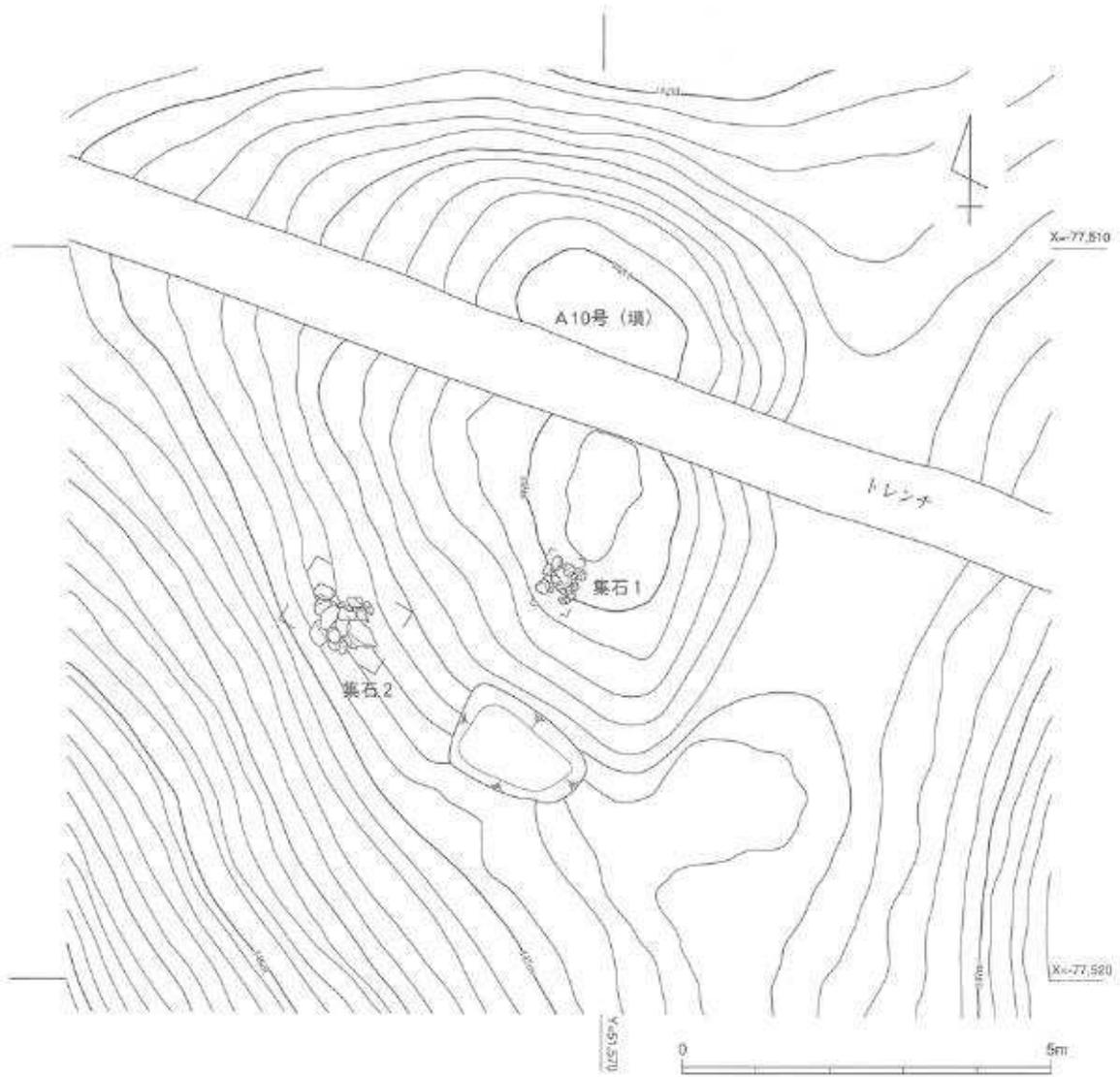
集石

集石遺構は、A10号（墳）の墳丘上および墳裾で検出されており、2基存在していた。

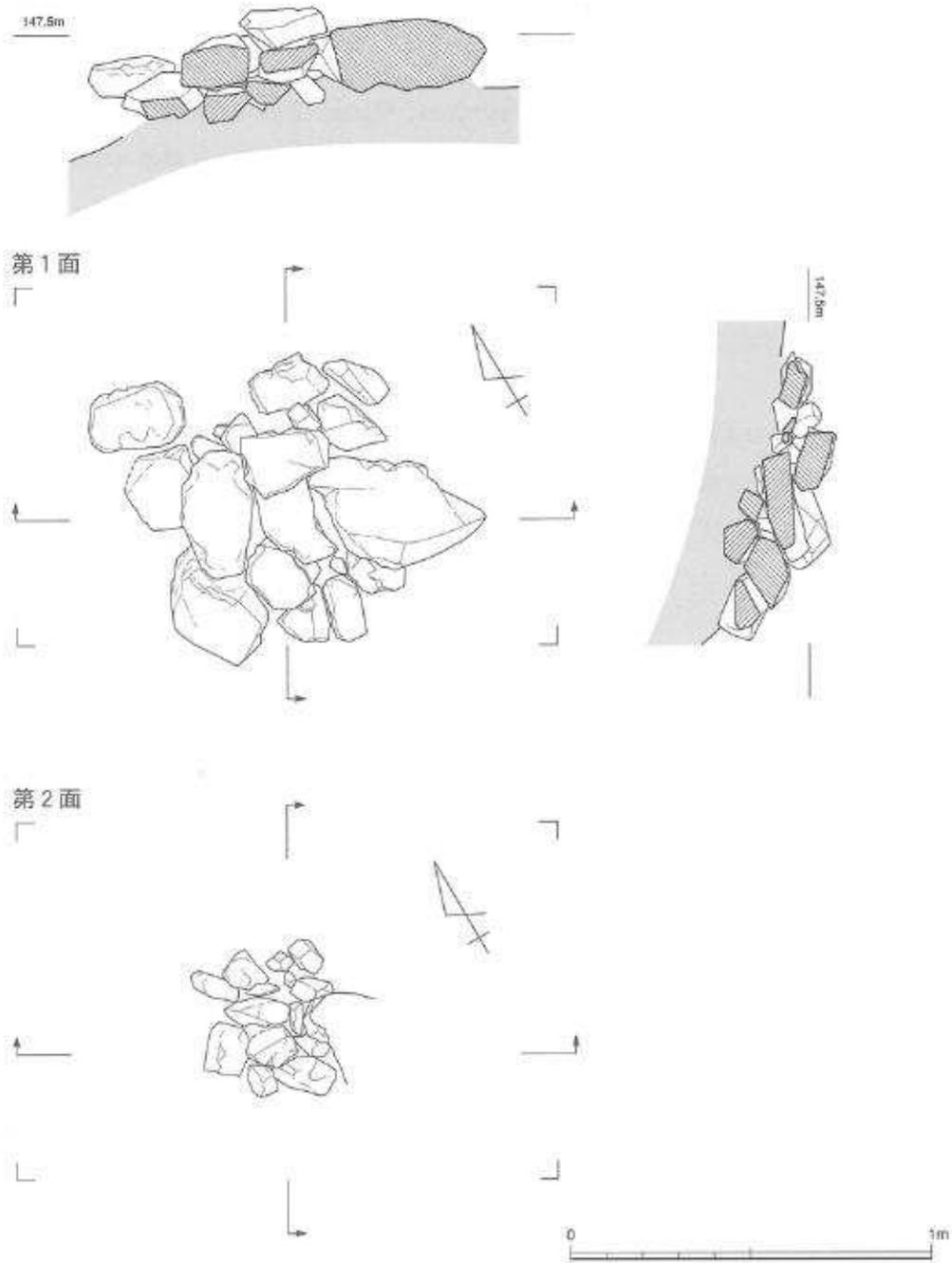
集石1 (S X - C 1) (第133図、カラー写真図版83)

位置と検出状況 集石1はA10号（墳）墳頂平坦部の南端付近に存在し、表土直下で検出された。集石1は集石2に比べてやや小規模である。

形態 角礫を用いて方形に組まれていたものと思われ、検出時には一部が欠失していたが、1辺55cm前後の方形であることが確認できた。中央には30cm×20cm程度の角礫を置き、その周囲には10cm～20cm程



第133図 集石1 (SX-C1)



第134図 集石2 (SX-C2)

度の小角礫がほぼ一列に方形を呈するように並べられていた。いずれも礫1段で構成されている。墓である可能性が推察されたため、周囲を削り込んで墓塚の検出に務めたが、墓塚は検出されなかった。

集石1およびその周辺から土器なども出土していないため時期は不明であるが、形態から中世墓の可能性もある。また、若水古墳墳頂部において10世紀頃の土器が集中していたことから、その時期の可能性もある。

集石2 (SX-C2) (第134図、カラー写真図版83・84)

位置と検出状況 集石2も表土直下で検出された。集石2は若水A10号(墳)の南西裾部の標高147.3m前後に位置し、集石1とは高さにおいて70cm低く、平面距離において2.1m隔てている。

形態 検出時の状況は、北西-南東方向に長い菱形の平面形を呈しており、長軸1.1m、短軸90cmであったが、子細に観察すると、方位と同じ方向を1辺とする方形を呈しているようである。その規模は、南北70cm、東西85cm程度である。石材は長さ20cm～35cm、幅10cm～20cmの角礫を用いて組まれているが、南東側の1石のみ50cm×30cmの大形の角礫を置いている。礫は基本的には1段積みであるが、中央の一部では2段に積まれている箇所がある。また、上面の平面実測図をみると、北西側の1石や北東側の礫を子細に観察すると、上段に使用され、組まれていた礫が転がり落ちたような状況を呈していると判断される。この方形石組み中央部の下面には、長さ10cm～20cm程度、幅5cm～10cm程度の小ぶりの礫が南北50cm、東西45cmの範囲に置かれていた。なお、この部分およびこの礫下面でも墓壇は検出されていない。

集石2およびその周辺からも土器などが出土していないため時期は不明であるが、集石1と同様に、その形態から中世墓の可能性もある。また、若水古墳墳頂部において10世紀頃の土器が集中していたことから、その時期の可能性もある。

3. 城跡

若水城跡（カラー写真図版61・65～69、モノクロ図版27）

若水城は丘陵の最高所を利用して築かれた山城で、主郭は南北方向に長い山頂部分の広い面積を占めており、南北方向にそれを取り巻くかたちで帯曲輪がめぐっている。主郭は延長110m、幅18mと細長く、周囲の土塁は認められない。また、主郭上面は自然地形をほぼそのまま残しており、特に中央南寄りの西辺に存在する虎口部分以北は、北に向かって下る緩やかな傾斜面となっており、東西方向でも特に平坦に加工したような痕跡が認められない。

道路用地として調査の対象となったのは、この主郭および帯曲輪の北西端部であり、城全体からするときわめて限られた範囲である。

主郭（第135図、カラー写真図版61・68～70）

位置と検出状況および形態 主郭北西端は自然地形のままのようであり、特に平坦面と傾斜部分の境が不明瞭であった。また、地山に含まれる自然石も多く露出して、小さな凹凸となっていることから、築城に際して平坦にするなどの加工は施されなかったようであり、後世に改変されたとも思えない状態であった。

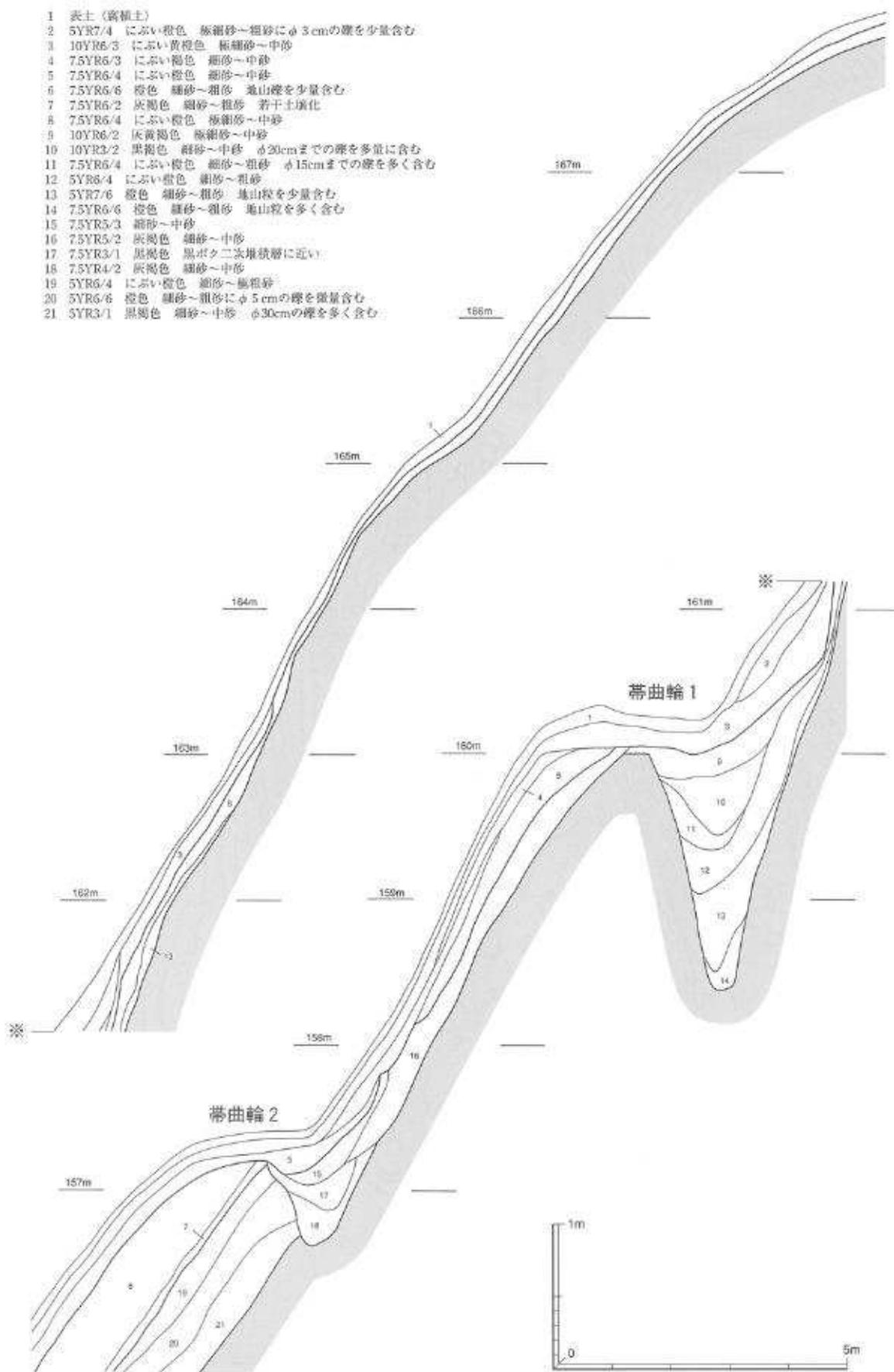
主郭については以上のように、加工が施された痕跡は認められなかったが、北面部分で石積み虎口が存在していた。

虎口（第135～139図、カラー写真図版70・71～79、モノクロ図版32）

位置と検出状況 調査前の調査区内主郭中央部分には窪地が存在し石材が散乱していたが、調査の結果、その部分が石積み虎口であることが判明した。虎口は北向きの切岸部に向かって開口しているため、帯曲輪とつなぐ階段・梯子等の昇降施設が付随していたと想定されるが、確認されなかった。ただし、帯曲輪1と帯曲輪2の間および帯曲輪2の北側斜面には多くの石材が散乱していることから、階段であった可能性が高い。そのことを示すように、虎口の開口方向延長部分である主郭と帯曲輪の間の斜面には、等高線においてもスロープ状の地形が看取できる。しかしながら、後に述べるように、横堀として調査・掘削されたため、帯曲輪1と虎口との間の階段等の痕跡は不明となっている。



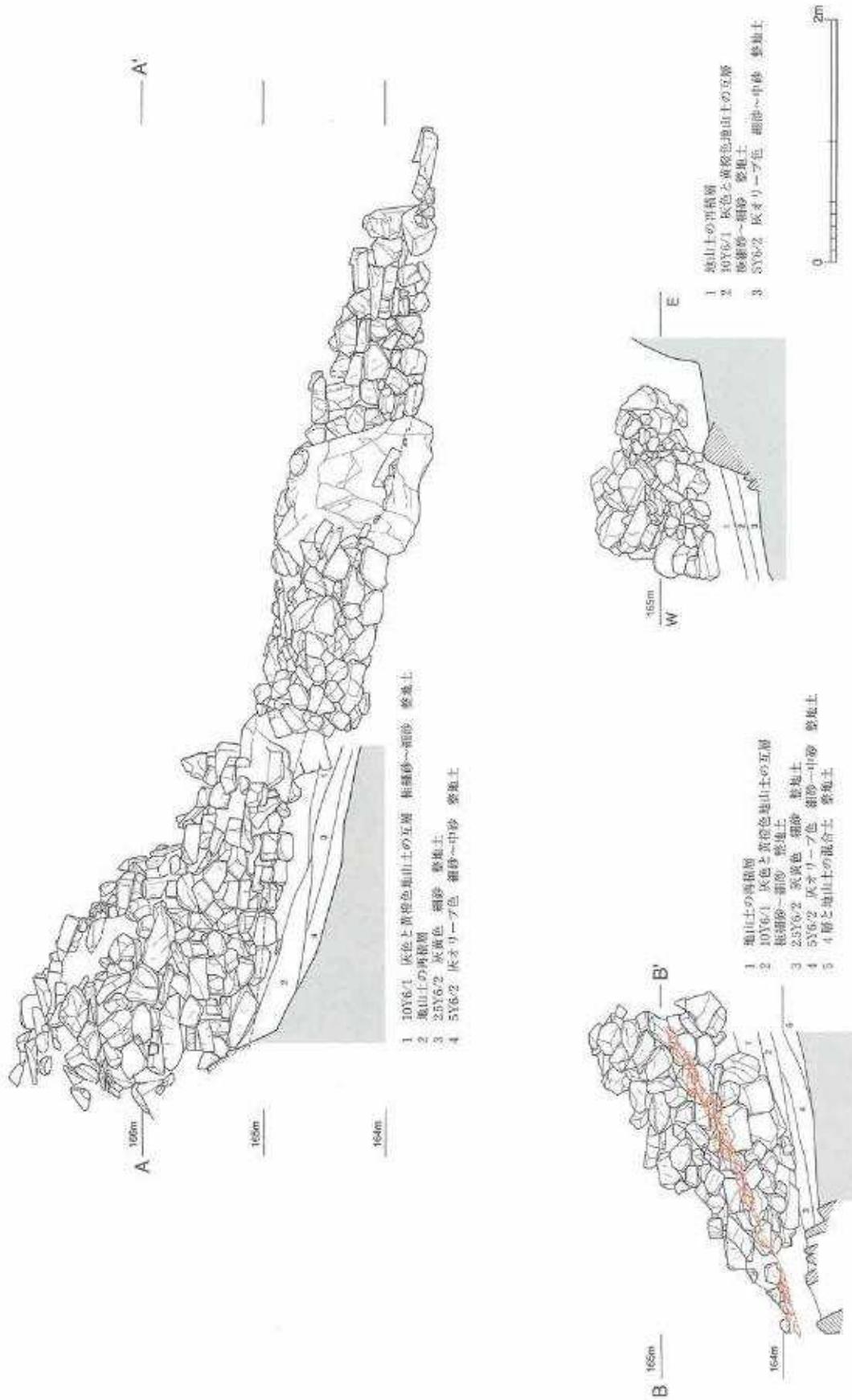
第135図 若水城跡 平面



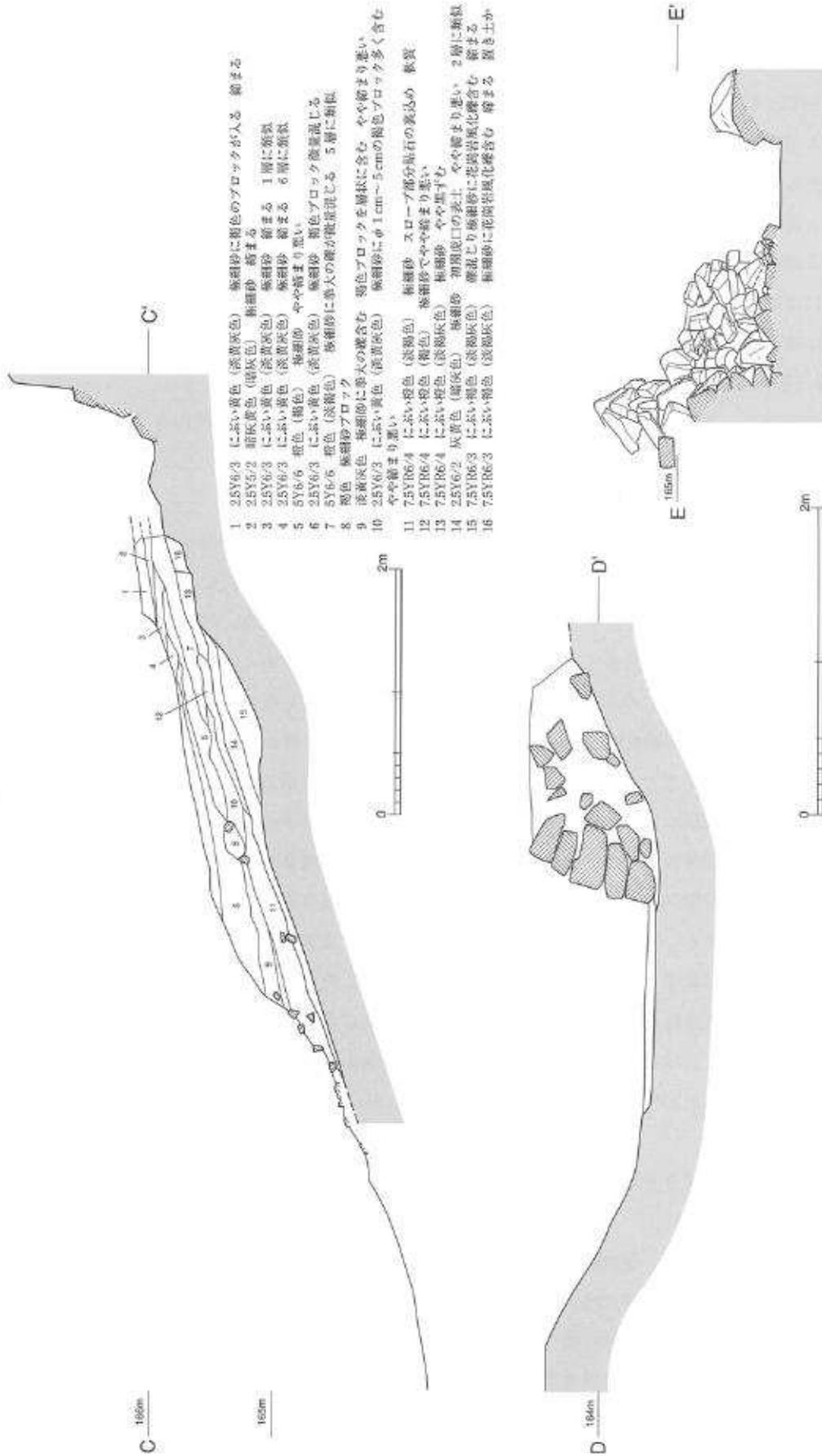
第136図 若水城跡 土層断面 (東部)



第137図 若水城跡 虎口部 平面



第138図 若水城跡 虎口部 側面・断面



第139図 若水城跡 虎口部 断面

形態 通路部分は幅約1.5m前後で通し、スロープで枡形部につながる。枡形部は一辺約2.4mの方形を意識しており、右に折れて主郭平坦部に登る。スロープ部分の床には拳大の礫を敷き詰めるが、枡形部分は土敷きの仕上げとなる。また、枡形部の正面壁と東壁部は当初より石を積まない構造となっている。したがって、右折れから主郭平坦部分への昇降部分にも石づくりの階段構造はなかった可能性が高い。通路および枡形の東壁の石積みに比べて西壁の石積みの遺存状況は良好であり、通路部分はほぼ完全な状態を留めている。

なお、使用された石材は下から運び上げたものではなく、地山内に包含される岩材を用いている。

石積み虎口の存在は、若水城が織豊系の城郭として判断できる要素である。同時期の在在系城郭の築造方法には石積み手法はなく、織豊勢力による但馬平定後の支配拠点となった竹田城や八木城、豊岡城などには城郭の石積みがみられる。

帯曲輪 (第135・136図、カラー写真図版61・72・80)

位置と検出状況 調査前の地形においてわずかながら窪みが観察され、横堀の存在が提示されていた。また、調査区外においても同様で、土塁も確認される部分が存在していた。これらのことから、横堀であるとの前提で調査・掘削を実施した。

その結果、水平幅約3m、肩部からの深さが約3mの最大規模となる横堀と判断された。しかしながら、山頂付近にある幅3m、深さ3mにもなる横堀がほぼ埋まっている点について、織豊期の城に伴う横堀として短期間に埋まってしまったことになり、不自然である。また、石積み虎口から転落したと想定される石材が斜面下方に数多く存在しており、横堀を越えて転がるのが考えにくい。同時に、調査者によれば、横堀の上部にのみ石材が認められ、埋土中には存在しなかったとのことである。横堀の埋土についても、表土から約40cm下にレンズ状に堆積した黒褐色の層があり、この層は「黒ボク」の2次堆積と思われる。斜面下方で出土した奈良時代末～平安時代初期の須恵器はこの層よりも上で検出されていることや、横堀掘削中に出土した土器はすべて弥生時代後期前半に属するものである点および、この黒褐色の層が若水城跡西隣にある芝花遺跡の弥生後期前半の木棺墓埋土にも認められる。

以上の点から、本報告においては、横堀として掘削された堀は若水城に伴うものではなく、弥生時代後期の所産と判断する。したがって、丘陵頂部を2重にめぐる弥生時代後期前半の環壕であった可能性が高く、環壕がほぼ埋まった状態を城の帯曲輪として利用したものと判断される。したがって、以下では、横堀ではなく帯曲輪として報告し、弥生時代環壕は別に項を設けることとする。

なお、朝来市域における弥生時代後期の2重環壕は和田山町大盛山遺跡に存在し、山東町の寺山古墳群(平田・長濱・池田2003)の城に伴う堀についても、弥生後期中葉の環壕である可能性が高い。

帯曲輪1

形態 調査前の測量図をみると、帯曲輪は上下2段に構築されており、上段を帯曲輪1、下段を帯曲輪2と呼称する。

調査前測量図によると、帯曲輪1はその構造から大きく2つの部分に分けることができる。東部は土塁を伴わない平坦面で、東側に向かって緩やかに傾斜している。曲輪平坦面の幅は約2mである。東端は3mほどの落差をもって同様の幅で続いているが、この段差は地すべりによるものである。

西部は土塁を伴い、平坦面が窪地状を呈している部分で、土塁上端平坦面の幅は西端で約2m、窪地底の幅も約2mであり、窪地状平坦面の山側端から土塁上平坦面北端までの幅は約6m、そこから帯曲輪2の平坦面までの高さの差は2.5m、水平距離は3.5mである。帯曲輪1の土塁の東部は徐々に低くなっ

て消失しており、東端が明確ではない。仮に標高160.4mの等高線までとすると、調査区内では北方向に張り出しながら弧状を描き、延長17mが検出されたことになる。また、土塁を伴う帯曲輪1の状態は、南西側にさらに続いており、主郭西側にある虎口部分まで確認できると同時に、主郭東側の帯曲輪においても同様の構造となっている。土塁は盛土がほとんど行なわれておらず、地山削り出しによるものと判断されている。

帯曲輪2

形態 調査前の測量図によれば、帯曲輪2は帯曲輪1の外側、すなわち約2m北側下方に位置し、帯曲輪1と平行に主郭をめぐる。

調査区内における帯曲輪2は西端を最高所として東に下ってゆく平坦な緩傾斜面となっており、平坦面の幅は約4mである。西端に近い部分では北側に張り出した部分があり、西第1曲輪と呼称した。この曲輪は若水B7号墳の墳丘平坦面を利用したものである。

帯曲輪2では、土塁として認識できる盛り上がりについては、少なくとも調査区内においては認められない。そのことは、弥生環壕では掘削土を土塁状に盛り上げていたが、城の帯曲輪として使用された際には、環壕が埋まって土塁もかなり流失して平坦面を呈していた可能性も考えられる。

東端は2mほどの落差をもって同様の幅で続いているが、帯曲輪1と同様に地すべりによるものである。また、やや窪んだ地形となっている部分があるが、流失した可能性が高い。

地すべりについては、調査中に主郭平坦面および帯曲輪の東端部分が垂直方向に最大3m、水平方向に約2m程度ずれていることを確認した。このずれについては、活断層によるものではなく、地すべりによる段差であるのご教示を寒川旭氏から得た。また、直接的な地すべりの要因として、昭和2年に発生した「北丹後地震」の可能性が高いようである。

なお、帯曲輪1および帯曲輪2ともに同じ幅と間隔を保ったまま東崖面へと抜けている。この崖面についても地すべりにより生じたものあるいは土取りによるものである可能性が高いと判断している。

4. 弥生環壕

若水域の2つの帯曲輪として利用されていたのは、弥生時代に掘られた溝であった可能性が高く、曲輪構築の際にはそれらがほぼ埋まった状態であったと思われる。また、調査区外についても、帯曲輪の位置がそのまま弥生時代の溝の位置を示していると思われるため、この溝は丘陵頂部を鉢巻状に2重にめぐることになり、環壕と呼称できよう。ただし、丘陵頂部平坦面において弥生時代の住居跡など集落の痕跡が発見されていないことから、高地性集落という名称は現段階では躊躇される。ただし、若水城跡の石積み虎口部分からも弥生土器が出土しており、丘陵頂部に弥生時代後期の遺構が存在している可能性は高い。今後、集落跡と判断されれば、2重の環壕をめぐる高地性集落と呼称できるであろう。

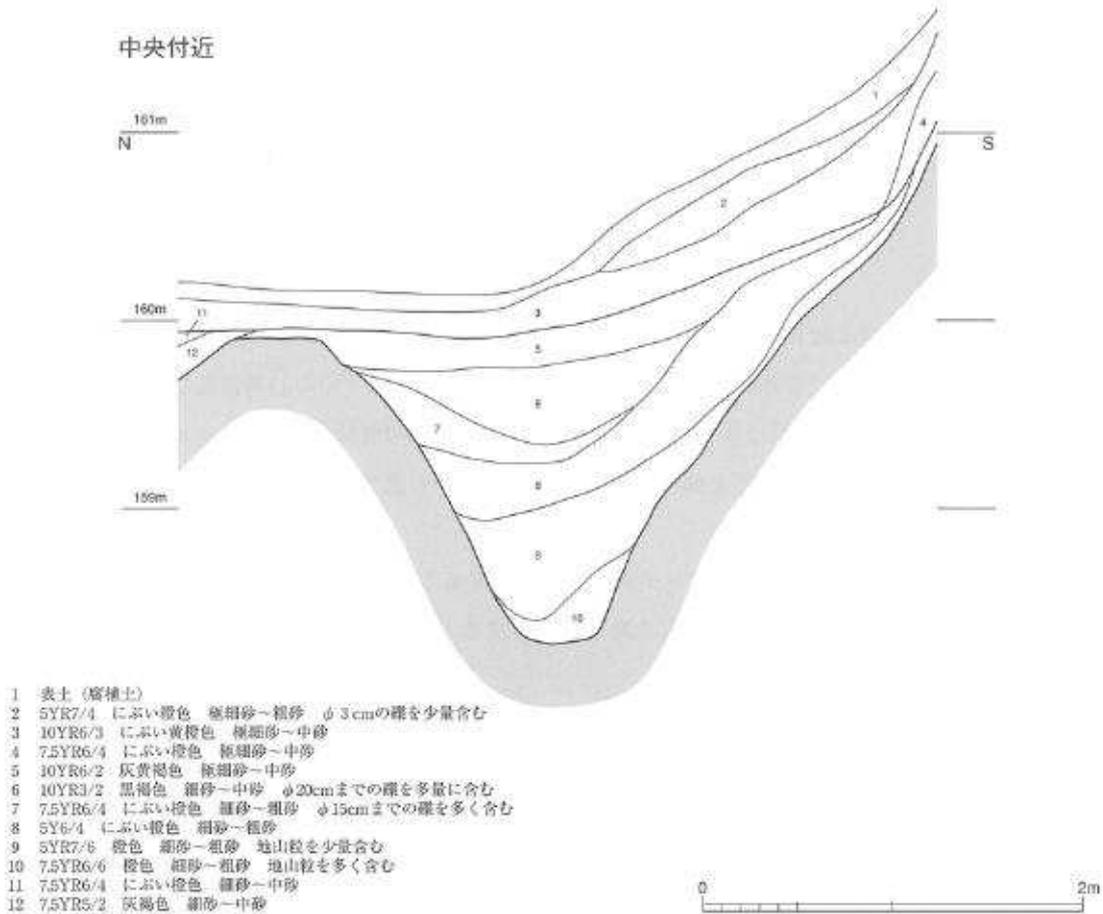
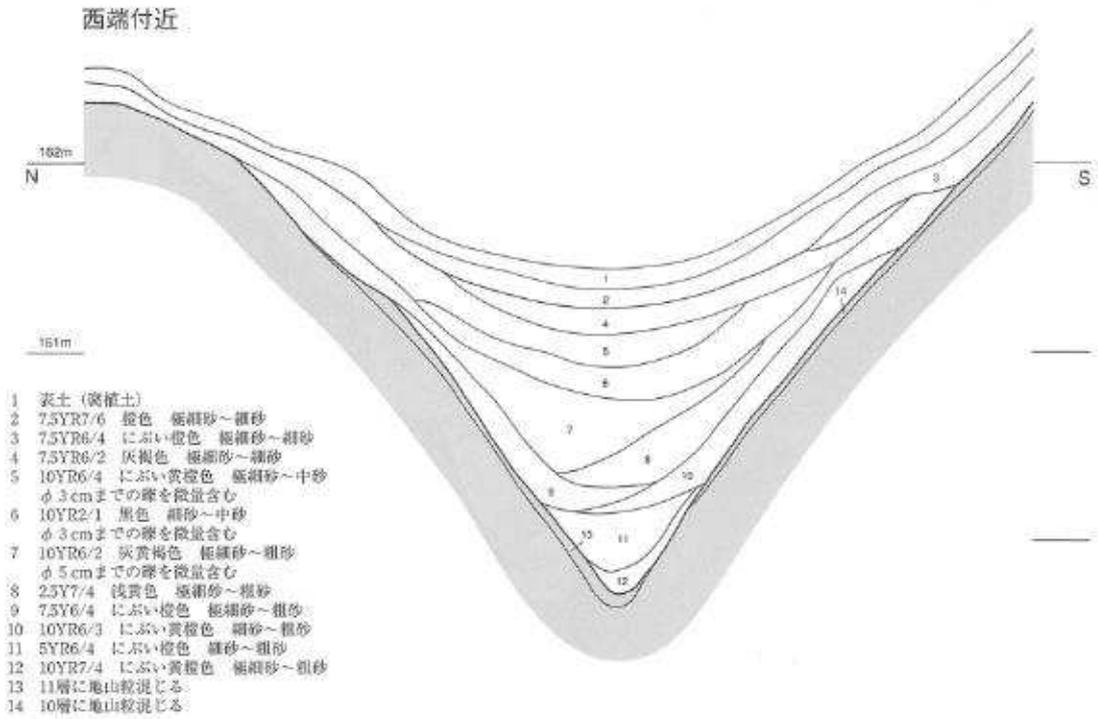
以下では、斜面上方にあり帯曲輪1として利用されていたものを弥生環壕1、帯曲輪2として利用されていた斜面下方のものを弥生環壕2として記述する。

弥生環壕1 (第140～142図、カラー写真図版61～64・72・80、モノクロ図版27)

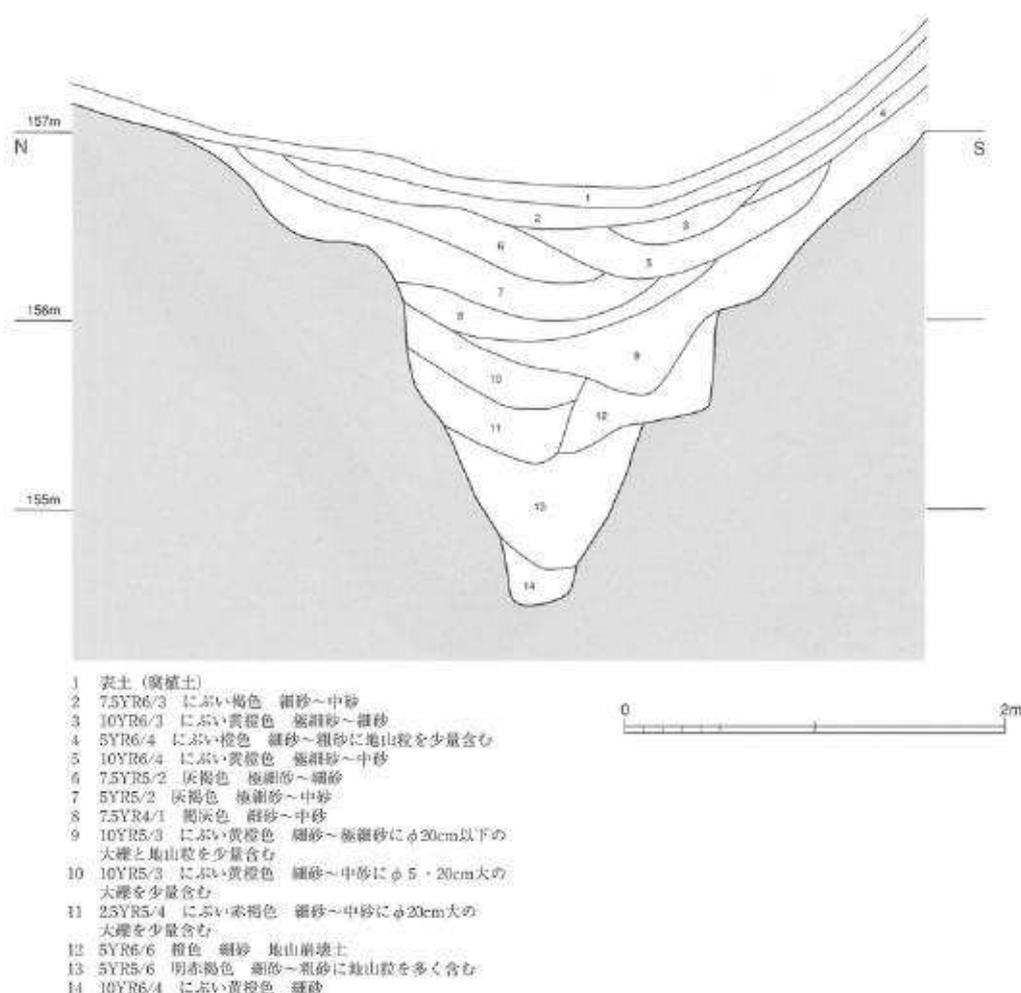
位置と検出状況 帯曲輪1と重複して下層にあり、南側である山側斜面を大きく削っている。東端は崖面へとそのまま抜けているが、当時の状況を示しているとは思えない。また、その西側では地すべりにより下方にずれている。



第140図 弥生環壕 平面



第141図 弥生環壕1 土層断面(1)



第142図 彌生環壕1 土層断面(2)

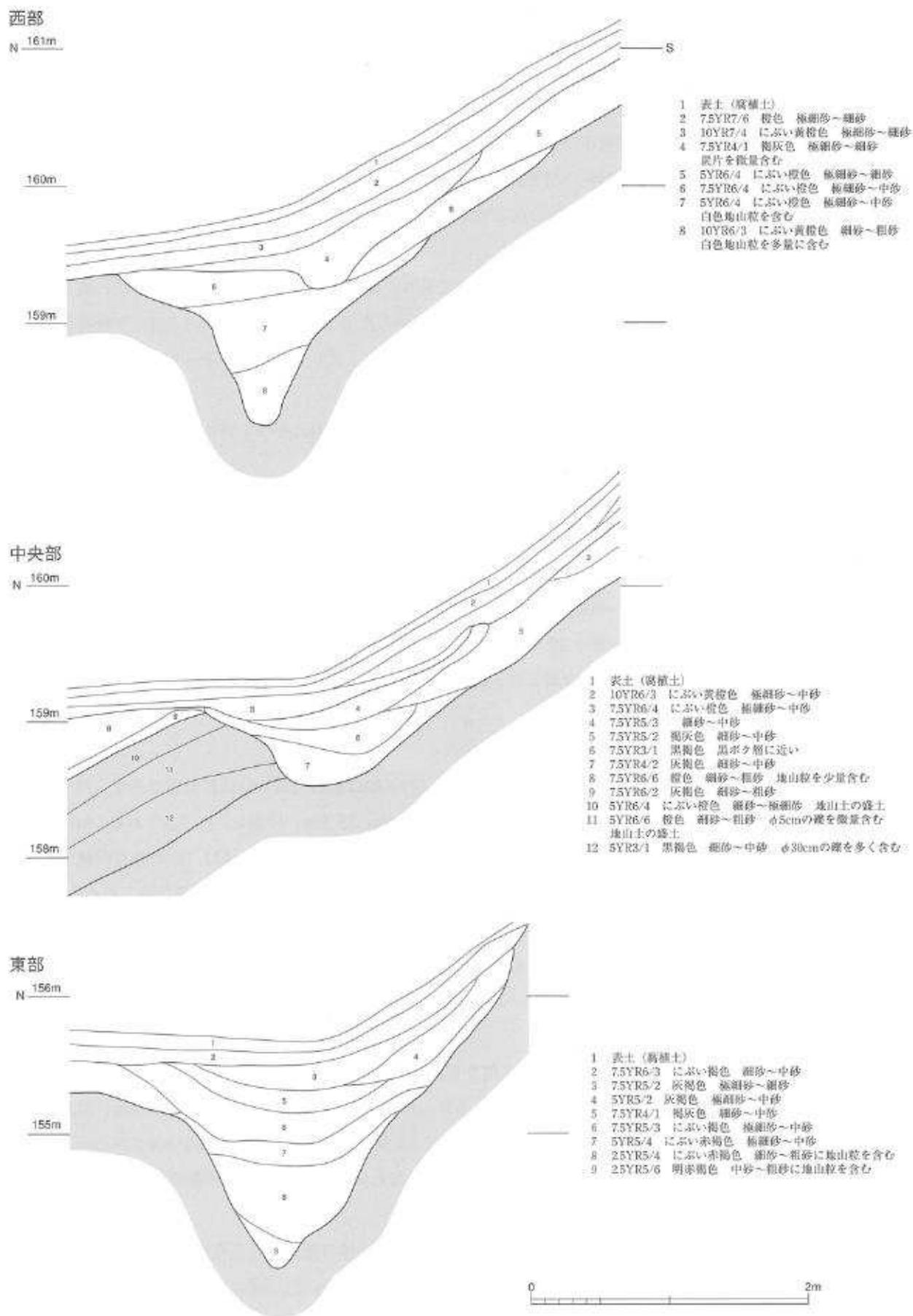
形態 上端部での最大幅は約9m、狭いところでも6.5mを測り、土塁肩部での水平幅は4.8mである。底は幅20cm程度ではほぼ一定しており、東側に向かって緩やかに傾斜している。両側面は平面・立面的にも直線的に削られており、横断面は「V」字形を呈する。斜面下側の肩部は幅40cm～2mの平坦面となっており、土塁状を呈している。斜面上側の上端と思われる所から底までの深さは最大5.5m、下側の肩部から底までの深さは約2.5mである。

溝内は黒褐色の層を挟んで、にぶい橙色や灰黄褐色を呈する上層埋土と、橙色や鈍い橙色の下層埋土に大きく分かれる。この黒褐色の層は、弥生時代後期以降から奈良時代までの間に堆積した「黒ボク」の2次堆積層である。

出土遺物は弥生土器であるが、出土層位はその記載がないため不明となっているものの、埋土上半部から出土したようである。

彌生環壕2 (第140・143図、カラー写真図版61～64・80)

位置と検出状況 彌生環壕2は帯曲輪2と重複して下層にあり、南側である山側斜面を大きく削っている。東端は崖面へとそのまま抜けており、環壕1と同様の状況である。また、その西側で地すべりにより下方にずれている点も環壕1と同じ状況である。



第143図 弥生環壕2 土層断面

調査区内環壕2の中央部分では、長さ18mにわたって壕が途切れているものの、平坦面が続いており、壕底と考えられる。この途切れている部分はちょうど谷状地形の底付近にあたることから、斜面下側の壕肩部が流失してしまった可能性が高いためと判断している。

形態 斜面上側の上部は環壕1の土塁北端にあたり、北側の上部には狭いながらも土塁状を呈する部分が残存している。その幅は狭い所で30cm、最も広い調査区西端部で40cmである。壕の両側面は西第1曲輪部分で曲がっているが、その他の部分では平面・立面的にも直線的に削られており、断面は「V」字形を呈する部分が多い。

環壕2の上部での幅は5m程度ではほぼ平均しており、環壕1よりも規模が小さい。また、底も幅15cm程度と狭いが、ほぼ一定している。斜面上側上部から底までの深さは最大約3.5m、下側肩部から底までの深さは約1mである。いずれの数値においても環壕1よりも小規模となっている。なお、土塁肩部での水平幅は約2mである。

出土遺物には弥生土器があるが、記載がないため出土層位が不明となっているものの、埋土上半部から出土したようである。

出土遺物（第144～146図、モノクロ図版28～31）

土器 環壕およびその周辺から、77～118に示した弥生土器が出土した。出土位置別にみると、93・94・98・99・103・104・110・114～116は石積み虎口部分から出土し、77・79・82・83・87・89～91・95・97・100～102・106は環壕1、80・81・88・96・105・107～109・111～113・118は環壕2出土であるが、地すべり部付近でも出土している。なお、78・85は谷部から、92はB8号墳平坦面山側裾から出土しており、土器棺であった可能性もある。

以下、器種別に述べる。

壺 77～86は壺であるが、形態により細分できる。77～80は直口壺あるいは長頸壺であり、77～79の口縁部には凹線をめぐらす。それぞれの口径は順に18.1cm、19.6cm、11.8cm、12.7cmである。81・82・84は広口壺で、口縁端部に凹線文を施す。81の頸部は112かもしれない。口径17.7cmの83も凹線文を口縁端部に施すが、甕の可能性もある。85は複合口縁壺で、直立した口縁上部外面に擬凹線をめぐらせる。口径は10.5cmである。86は口径7.4cmの脚付短頸壺である。体下部に稜があり、凹線文を施す。

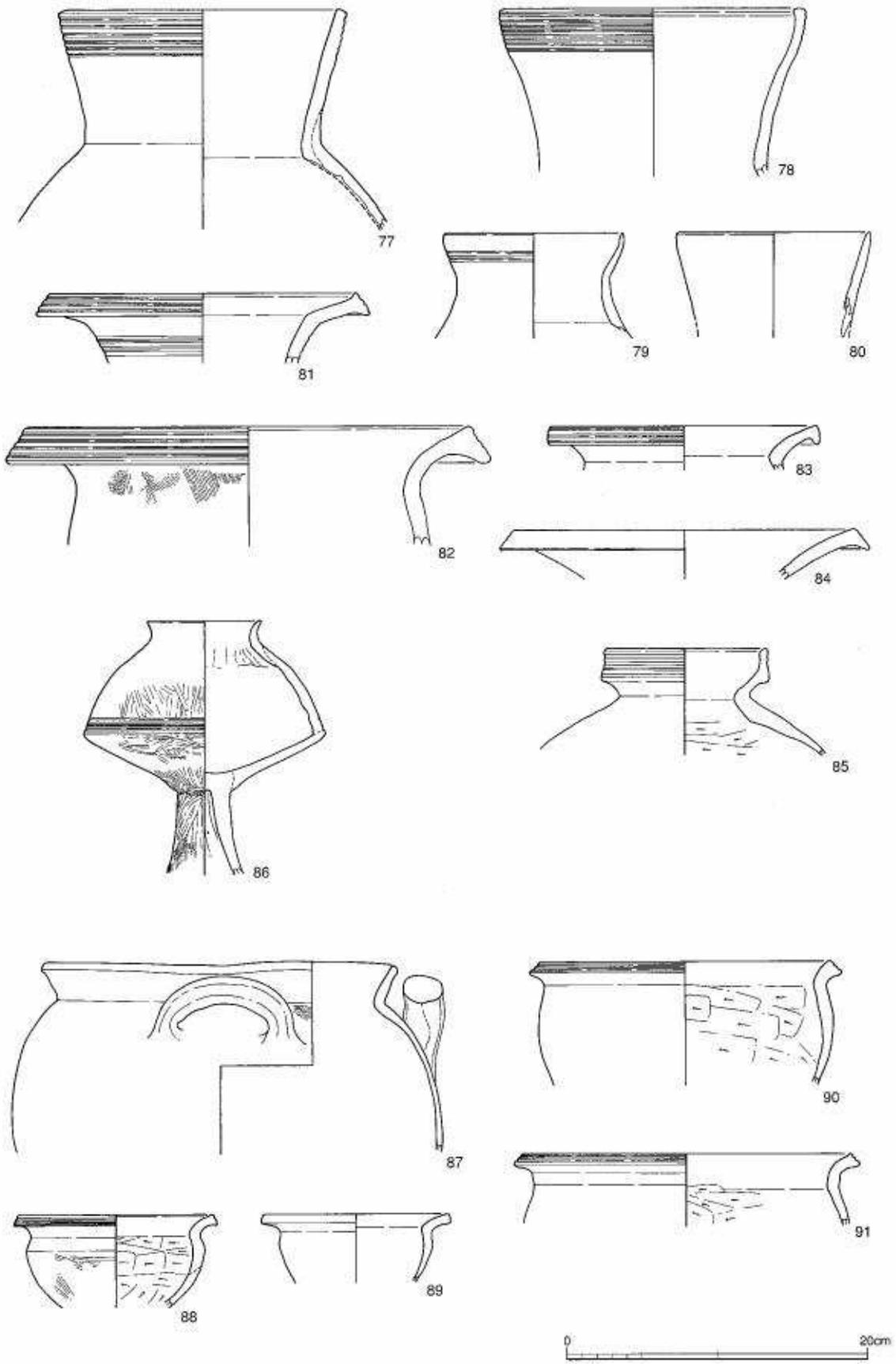
鉢 87～91は鉢である。87は把手が付く大型鉢で、口径23.1cmである。88・89は小型鉢で、88は口径12.8cmで口縁端部に3条の凹線を施している。89は口径12.2cm。90・91は口縁端部に2条の凹線を施す。口径は19.2cmと21.7cmである。

甕 92～100は甕である。体部内面はヘラ削りを施し、100以外は口縁端部を肥厚させて端面に凹線文あるいは擬凹線をめぐらす。92は壺の可能性もあり、体部の約半分を欠失する。口径15.9cm、器高22.2cm、体部最大径25.0cmを測る。93～99の口径は順に、13.9cm、17.6cm、22.9cm、33.7cm、28.2cm、15.3cm、15.5cmで、大型の96は把手付甕である。100はやや新しい傾向があり、口縁端部は肥厚しない。口径は17.5cmである。

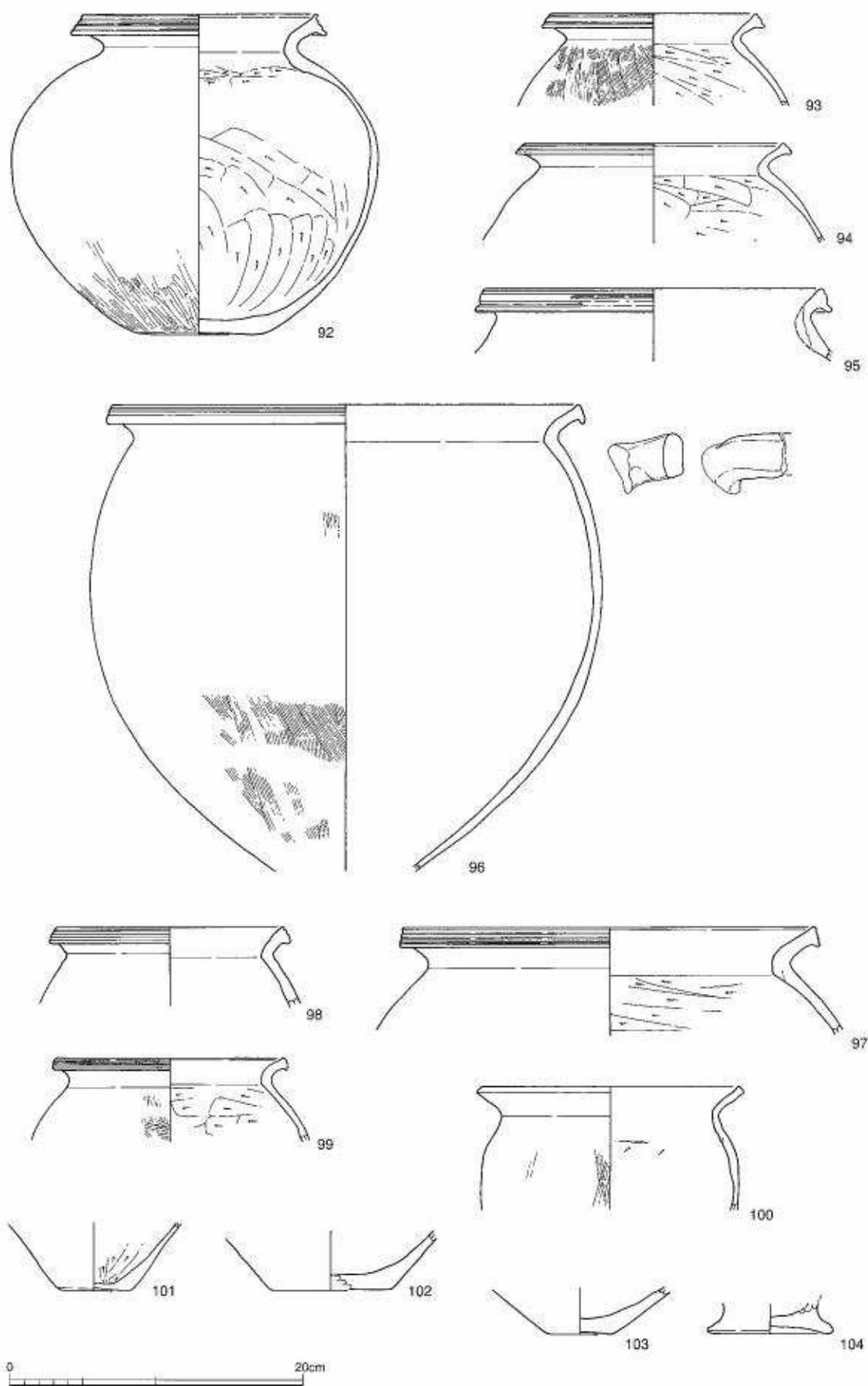
底部 101～103は壺・鉢・甕いずれかの底部である。104は鉢の底部である可能性が高い。

蓋 蓋は105・106の2点出土した。105は口径16.4cm、器高6.6cmで、106は口径13.2cm、器高5.2cmを測る。106のつまみ部分外面にはハケ工具のあたり痕が残る。

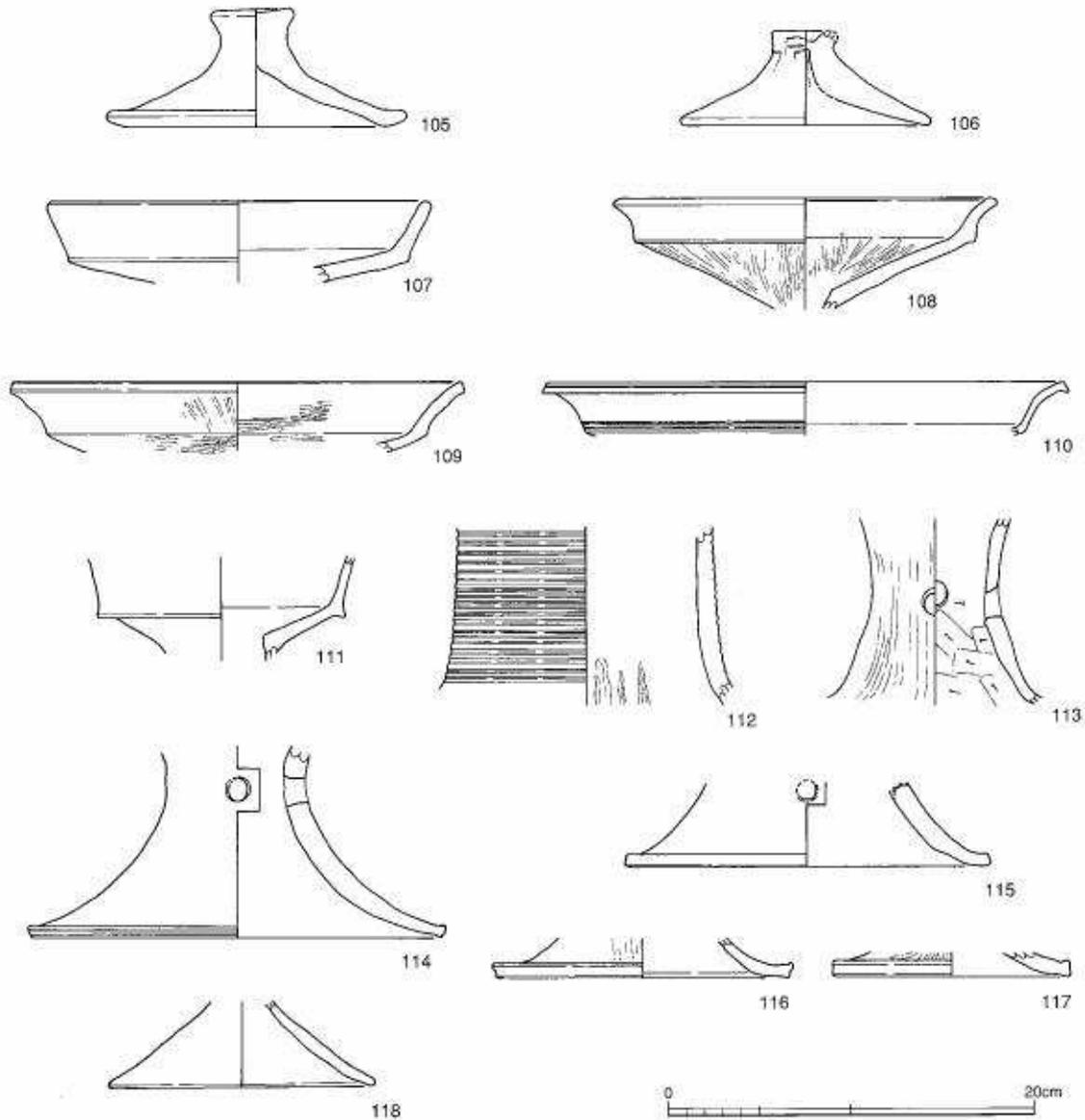
高杯 107～110は高杯杯部であるが、108は器台杯部の可能性が高い。口径は107から順に20.5cm、22.2



第144図 弥生環壕 出土土器(1)



第145図 弥生環壕 出土土器（2）



第146図 弥生環壕 出土土器（3）

cm、24.5cm、28.3cmを測る。110の屈曲部には2条の凹線が残る。

器台 111は複合口縁の器台と思われる。口縁端部を欠失するが、残存最大径は14.6cmを測る。

脚部 113は脚部の筒部であり、円形透し孔が4方向に穿たれている。凹線を多条に施す112は壺頸部の可能性が高い。114～118は脚裾部で、114・115には4方向の円形透し孔を穿っている。脚端径は順に22.6cm、20.0cmである。小型の116・117の脚端部は面をもち、径は16.1cmと13.0cmである。118は端部を丸くおさめ、径は14.2cmを測る。

若水遺跡環壕およびその周辺出土土器は、芝花弥生墓群出土土器の次の段階と思われる、既往の編年である谷本進氏の編年（谷本1992）ではV-2様式を中心に位置づけられると判断され、弥生時代後期前半に編年されるものである。しかし、全体的に和田山町大盛山遺跡出土土器と似ており、編年観がやや異なる。また、丹後地域の高野陽子氏の編年（高野2006）では、大山2式～大山3式に相当すると思われる、時期幅があるようである。詳細は第4章にゆずることとする。

5. 小結

中央地区で検出された遺構・遺物の時期は弥生時代後期～中世におよんでいる。以下、時期別に中央地区の変遷をまとめる。

弥生時代

弥生時代後期の遺構には丘陵頂部平坦部直下に掘削された2重の環壕があり、土器が出土している。土器が示す時期は朝来市和田山町所在の大盛山遺跡（田畑・中島1995）出土土器に近く、直後の可能性がある。また、山東盆地西端の終木に所在する寺山古墳群（平田・長濱・池田2003）では、平地部との比高差30m以上の尾根先端で弥生時代後期後葉～後期末の墳墓群が調査されており、墳墓群の斜面下方には最大幅6m、最大深1.5mで、断面「V」字形の溝が検出されている。この溝は山城に伴う横堀と考えられているが、戦国時代の遺物は出土しておらず、弥生後期中葉に位置づけできる土器が出土している。また、溝の埋土中には「黒ボク」の二次堆積層が中層より上部に堆積していた。これらのことから、寺山古墳群で検出された溝は弥生環壕である可能性が高いと判断され、若水遺跡環壕とほぼ同時期の環壕が山東盆地に2箇所存在していた可能性が高いことになり、他にも環壕ないし環壕集落が存在していることも考慮しておくべきかもしれない。

弥生時代末～古墳時代前期

中央地区北西部の尾根先端付近に立地していた若水古墳は、長径約41m、短径36mの円に近い墳形を呈し、墳頂部平坦面もやや楕円形で、長径24m、短径20.4mであり、墳頂部平坦面が広がっている。墳高は約5mで低平な形状を呈することから、山城の曲輪として削平された可能性も否定できない。しかし、城の山古墳など但馬地域においては、墳頂部平坦面が広く低平な形態の古墳が数多く認められることから、仮に曲輪として造成されていたとしても、削平の程度は大きくなかった可能性が高い。墓壙内に落ち込んだ土層の状況から判断すると、調査時よりも最低50cm程度は高かったことが想定される。ただし、墳頂部中央部にのみ土壇状に盛られていた可能性もある。

若水古墳の墳裾には幅3m～約5mの墳裾平坦面があり、その外周に接するようにしてA10号・A18号・A20号墳が築造されているが、いずれも埋葬施設が検出されていない。築造時期はA20号墳が古墳中期後半の可能性が高く、若水古墳とは時期が異なるが、他は不明である。また、墳裾平坦面においては、丹後の赤坂今井墓（岡林・石崎2001、峰山町教育委員会編2004）では墳裾平坦面に数多くの周辺埋葬が認められているにもかかわらず、若水古墳では全く検出されていない。したがって若水古墳は、集団墓の様相を残す赤坂今井墳丘墓とは大きく異なり、集団墓から脱却した墳墓であるといえよう。

なお、若水古墳は西地区の古墳群よりも後出し、B7号墳は若水古墳の時期に近いかもしれない。

古墳時代後期末

若水古墳の裾平坦面に存在するA19号墳が後期末の可能性が高く、土器箱2・3とほぼ同時期となる。

奈良～平安時代

中央北部の谷部で平安時代初期の土壇および土器が出土し、10世紀頃には若水古墳墳頂部に土器の集積が認められた。なお、集石が西地区を含めて3基存在したが、これらもこの時期の可能性がある。

中世

中世末頃には若水城が築かれる。主郭・帯曲輪の一部および曲輪に利用された可能性が高い古墳を調査したが、帯曲輪も埋まった弥生環壕を利用していた。なお、城の時期は明確にできなかった。

第4節 東地区の遺構と遺物

東地区は丘陵頂部北端から東側に分岐した支尾根の先端で、尾根稜線およびその西側の急斜面であり、独立した調査区である。

東地区で調査した遺構には、古墳3基（若水B1～3号墳）およびその主体部と、古墳3基（若水B4～6号墳）の裾部があり、ほかに小規模石棺を内部主体とする小規模墳墓および木棺墓・土壙などがあり、時期的には弥生時代後期および古墳時代初頭から古墳時代中期後半にかけて営まれたものが中心であろう。

1. 古墳

東地区内に存在し、調査した古墳は若水古墳群B支群の北東端に存在するB1号墳～B6号墳であるが、各古墳のほぼ全体を調査したのはB1号墳～B3号墳の3基であり、それぞれ木棺墓を埋葬施設とした主体部が検出された。B4号墳～B6号墳については、墳裾および墳裾の一部を調査したにとどまり、墳丘の大半が道路用地からはずれた調査区外にある。

また、古墳の墳頂部平坦面は、若水城の曲輪として利用されていたことが縄張図からも想定されるが、調査の結果、曲輪として加工された痕跡は検出されなかった。ただしこのことは、曲輪として利用された可能性を否定するものではない。

B1号墳

墳丘（第147～152図、カラー写真図版89、モノクロ写真図版35）

位置と検出状況 B1号墳は東地区の尾根稜線上に存在する古墳群のうち最下端に位置する。調査前の地形測量図でも平坦面が明瞭であり、階段式古墳と判断された。平坦面の調査前の標高は138.4m前後で、埋葬施設検出面の標高は138.0mである。平坦面の東部は土取りにより崖として抉られていたが、かろうじて主体部の全体を検出することができた。

形態・規模 墳丘の形態は特に意識されたものではなく、階段式古墳に通有にみられるように、斜面上側を削った残土を下側に盛り出して、主体部を設ける平坦面を造出しており、自然と円形に近づいている。墳頂部平坦面は残存長6.5m、南北方向の幅4.0mで、平面は台形に近くなると思われる。

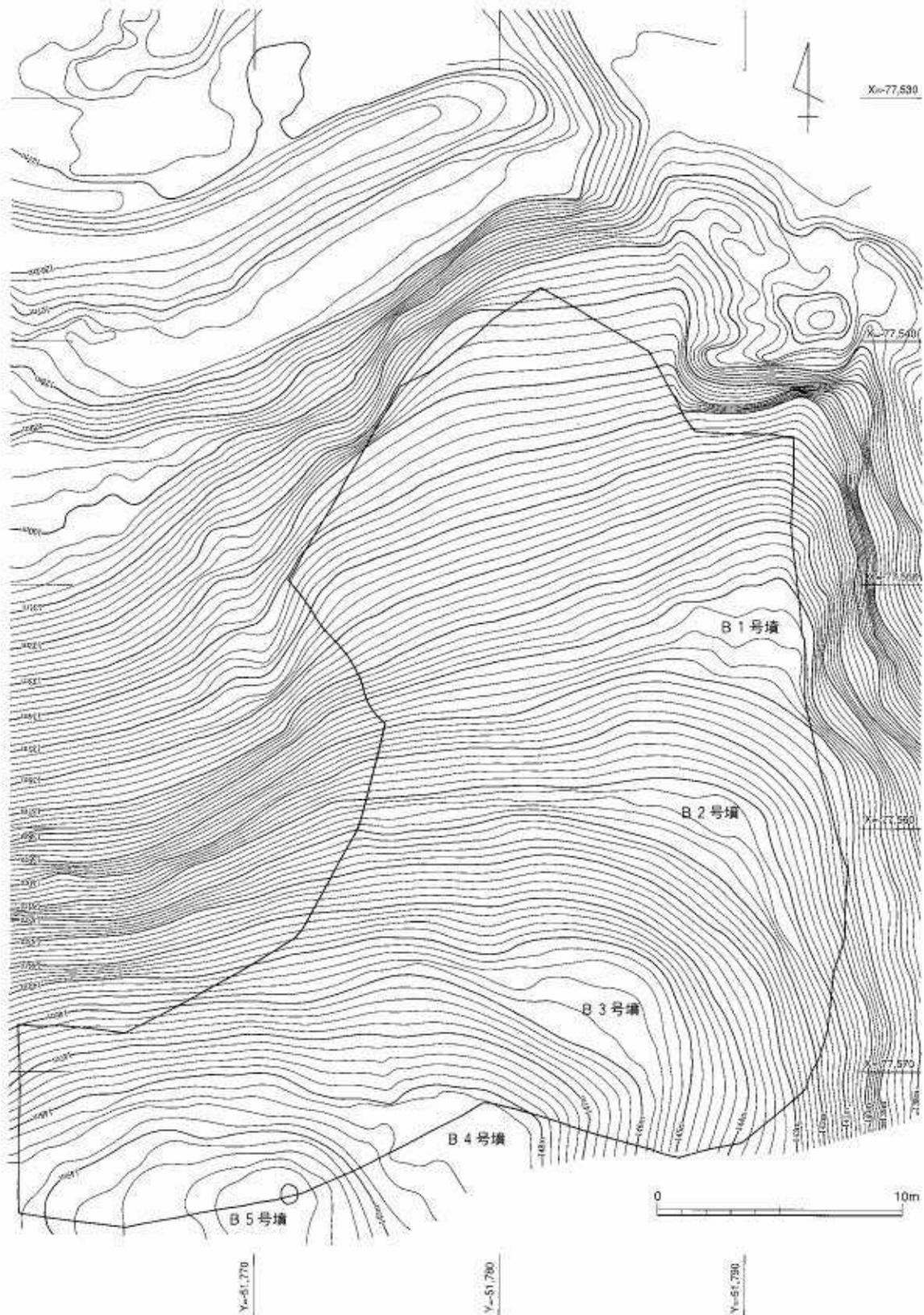
外部施設 墳丘裾を明確にする施設や、葺石などは検出されなかったが、斜面上側を直線的に削った崖面が検出され、残存長は約8m、斜面上端から主体部検出面までの高さは約1mである。平坦面東部は後世に削られて、崖面となっている。

埋葬施設（第153～155図、カラー写真図版90・91・103、モノクロ写真図版35～38）

B1号墳の埋葬施設は、平坦面のほぼ中央部で検出された木棺墓である。その長軸方向は、平坦面の長軸方向と同じで、尾根稜線方向とは直交方向である。

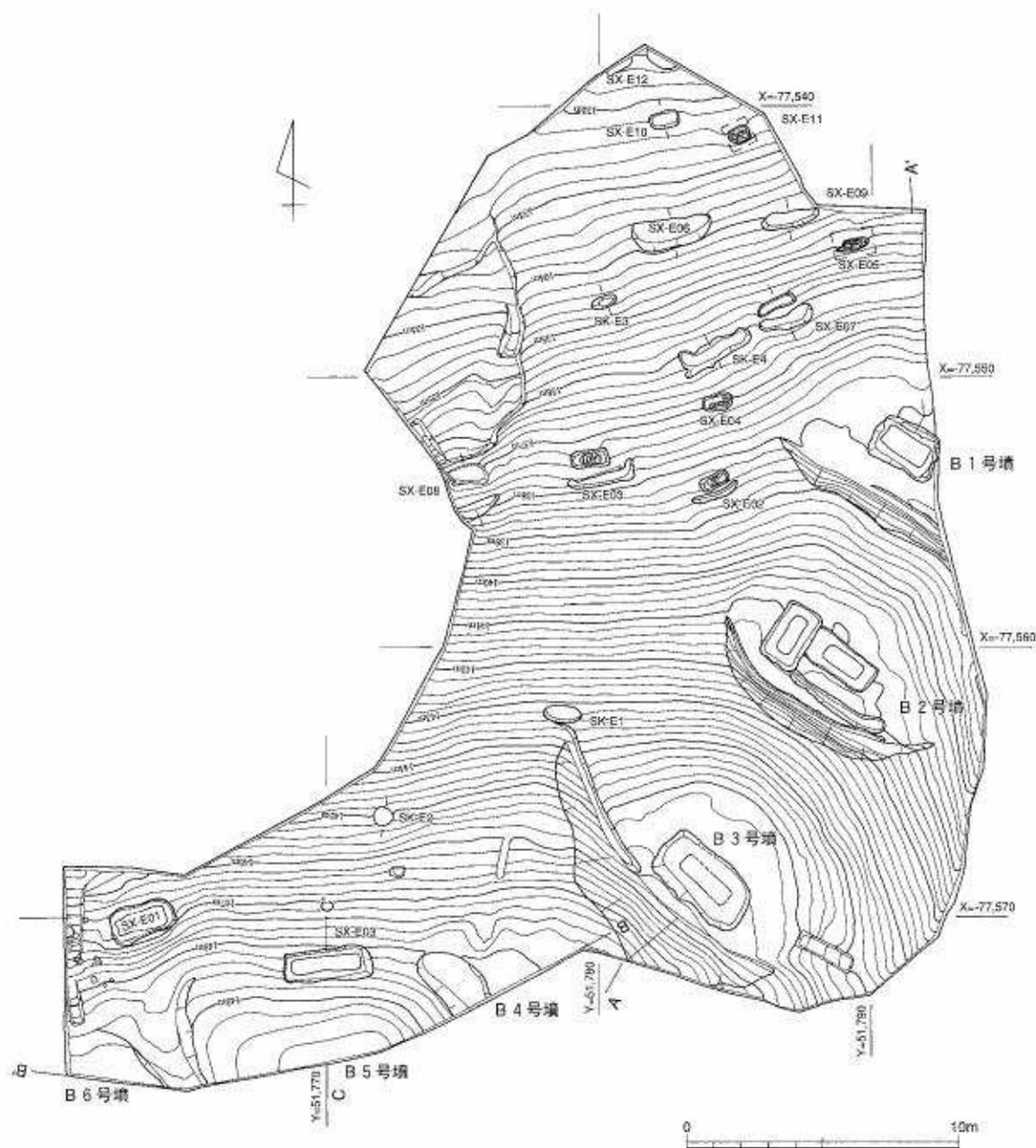
墓壇

墓壇形態・規模 墓壇の平面形は、少し歪な隅丸長方形を呈し、長軸方向で2.55m、短軸方向では1.75mの規模である。墓壇底面はやや凹凸があるが、平面形は整った長方形である。その規模は長さ1.85m、幅0.9mを測る。墓壇底面は墓壇上面の中心には存在せず、斜面山側である南西方向に偏って



第147図 東地区 調査前地形

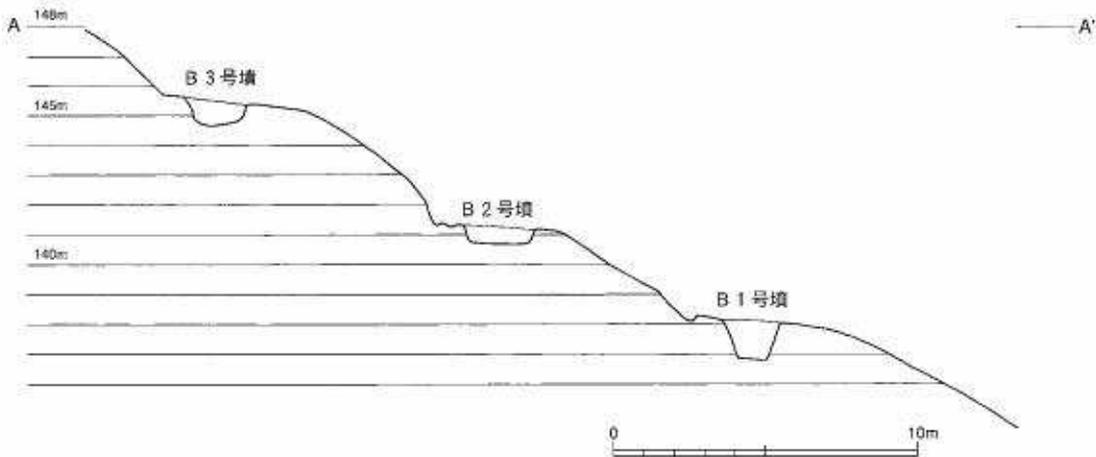
いと同時に、墓壙上面主軸方向からややずれた方向になっている。墓壙の内側面の傾斜は急で、垂直に近い部分や壁が外側に傾いた部分もある。これは、壁面となっている花崗岩盤が非常に軟質であるために、垂直に掘削することが容易である点や壁が崩落したためであると思われる。



第148図 東地区 調査後地形

墓壇検出面から底面までの深さは1.25mとかなり深い。そのためか、墓壇北東側面から南東端面にかけては検出面から約30cm下がった位置に幅15cm程度の段が「L」字形の帯状に掘り残されている。この段は墓壇内への昇降や作業するための「足掛け」とされたものであり、意識的に掘り残されたものと思われる。

墓壇内遺物出土状況 墓壇埋土下部と、墓壇検出面の棺腐朽に伴う落ち込みぎわで土器が検出された。墓壇埋土下部のものは煤が付着した壺形土器の破片で、壺として使用されていた可能性が高く、墓壇内の棺周囲に破片が散乱した状態および一部が棺内に落ち込んだ状態で検出された。この状態は「墓壇内破砕土器供献」あるいは「墓壇内破砕土器埋納」と呼ばれるもので、但馬や丹後地域の弥生時代後期に特に集中して認められ、一部周辺地域にも及んでいる埋葬時の祭祀行為である。B1号墳では、棺底



第149図 B1～B3号墳 断面

と推定される面より主として約25cm上部で検出されたが、それら土器片のほぼすべてが同一個体の破片であると同時に、検出された面がほぼ水平面であり、墓壇埋土下部の硬質埋土層の上面である。なお、土層断面観察による棺上面はさらに20cm程度上である。

以上の点から、埋葬の前には、あらかじめ板材が棺身として墓壇底で組まれており、その際には棺周囲に厚さ25cm程度の土で埋めて棺を固定している状態であった。そして、その時点では棺身の上端が墓壇埋土上面よりもいくぶん上に露出していた。なお、この状況は芝花弥生墓群においても確認している。

遺体を墓まで運んだ後、遺体を棺に納め、棺蓋を被せ、土で埋めるという手順での、一連の埋葬行為が想定されるが、破碎土器の「供献」・「埋納」行為は、棺蓋を被せた直後であり、土で埋める直前のみ行われた行為であったと判断される。想像をたくましくすれば、被葬者が日常使用していた、あるいは葬儀の際に使用された土器を墓まで持参し、遺体の納棺前後にその土器を現地で割り、棺蓋を被せた後にその破片を棺周囲および棺上にばら撒き、あるいは破片を置いて、最後の別れをしたと想定されよう。その後、棺および墓壇内を墓壇上面まで土で埋めたと考えられる。

墓壇検出面での土器出土状況は、墓壇上面まで土で埋められた後に、墓壇上に置かれた土器が棺の腐朽に伴って土が落ち込む際に傾き・転んだと判断される状態であった。置かれた位置と器種は、北西側小口部に器台1点、南西側長側部に器台と高杯各1点である。

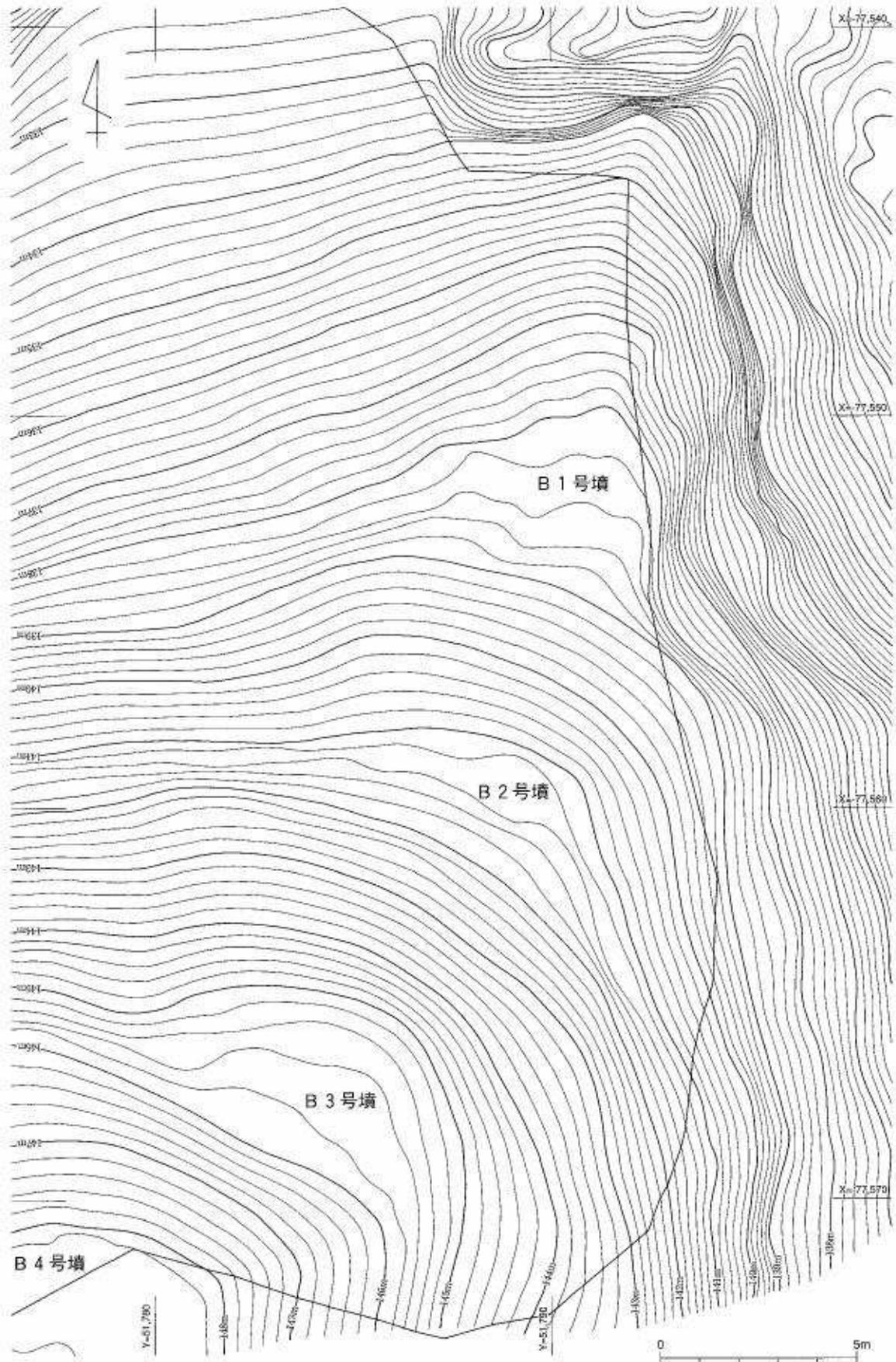
これらの土器は墓壇内ではなく、墓壇上であることから、「墓壇上土器供献」と呼ばれ、「墓壇上土器配置」または「墓壇上土器設置」と呼ぶことも可能であろう。また、これらの土器が完形品のまま置かれたかあるいは破碎されていたかについては、確実とはいえないが、大まかに割られていたと判断している。それは、やや離れた位置から出土した破片も同一個体として接合できたことによる。したがって、「墓壇上破碎土器供献」あるいは「墓壇上破碎土器配置」などとする事ができよう。

ここで注意したいのは、本地域においては弥生時代後期までは墓壇内に限られた土器供献が、本墳のように後期末～庄内期に降ると、墓壇上にも土器供献が行われるようになることである。

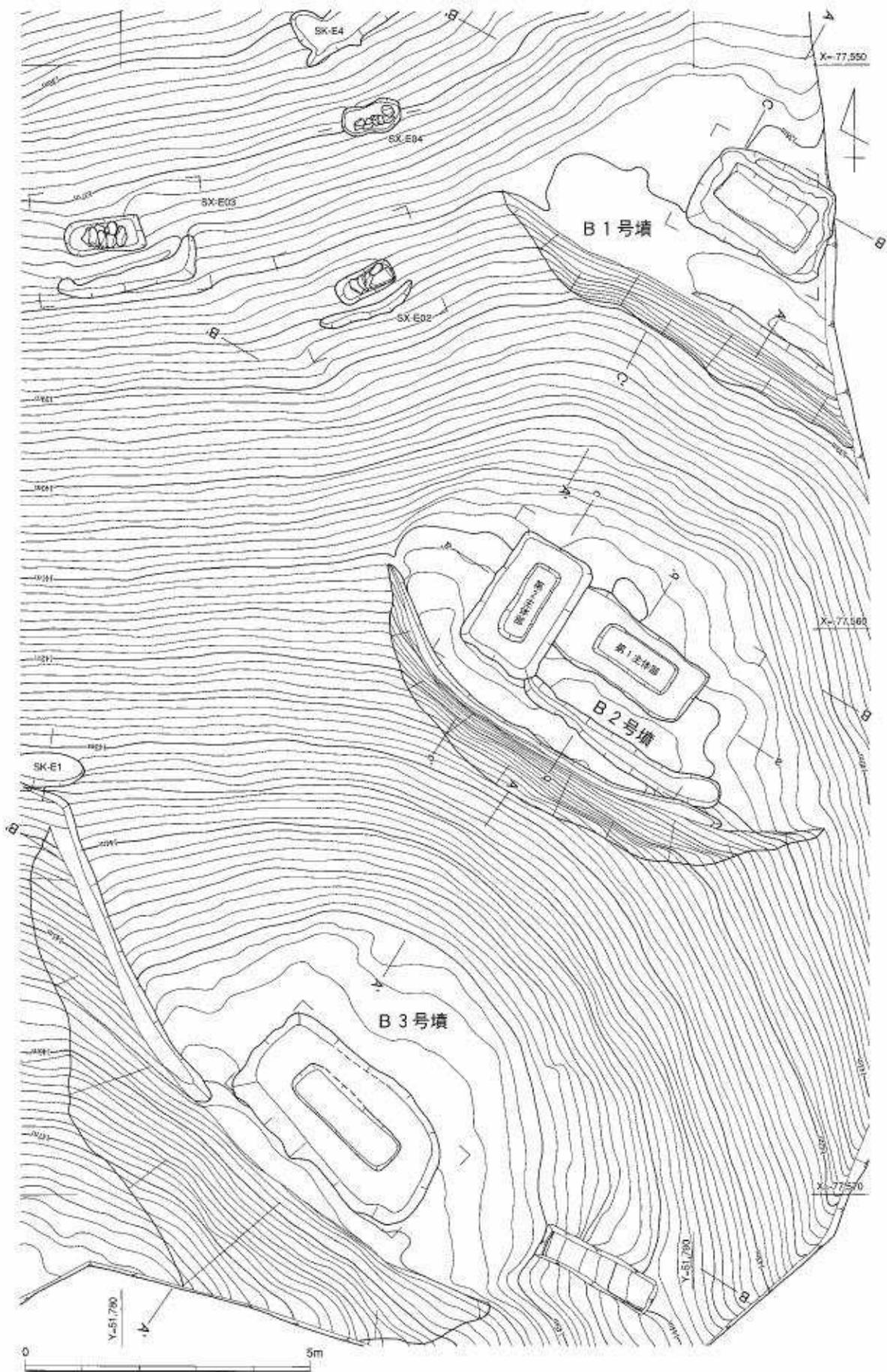
棺

棺形態・規模 B1号墳主体部の棺型式は、土層観察から、組合せ式の箱形木棺であると判断される。また、平面的な観察により「H」形とはならないようであるが、断定はさけない。

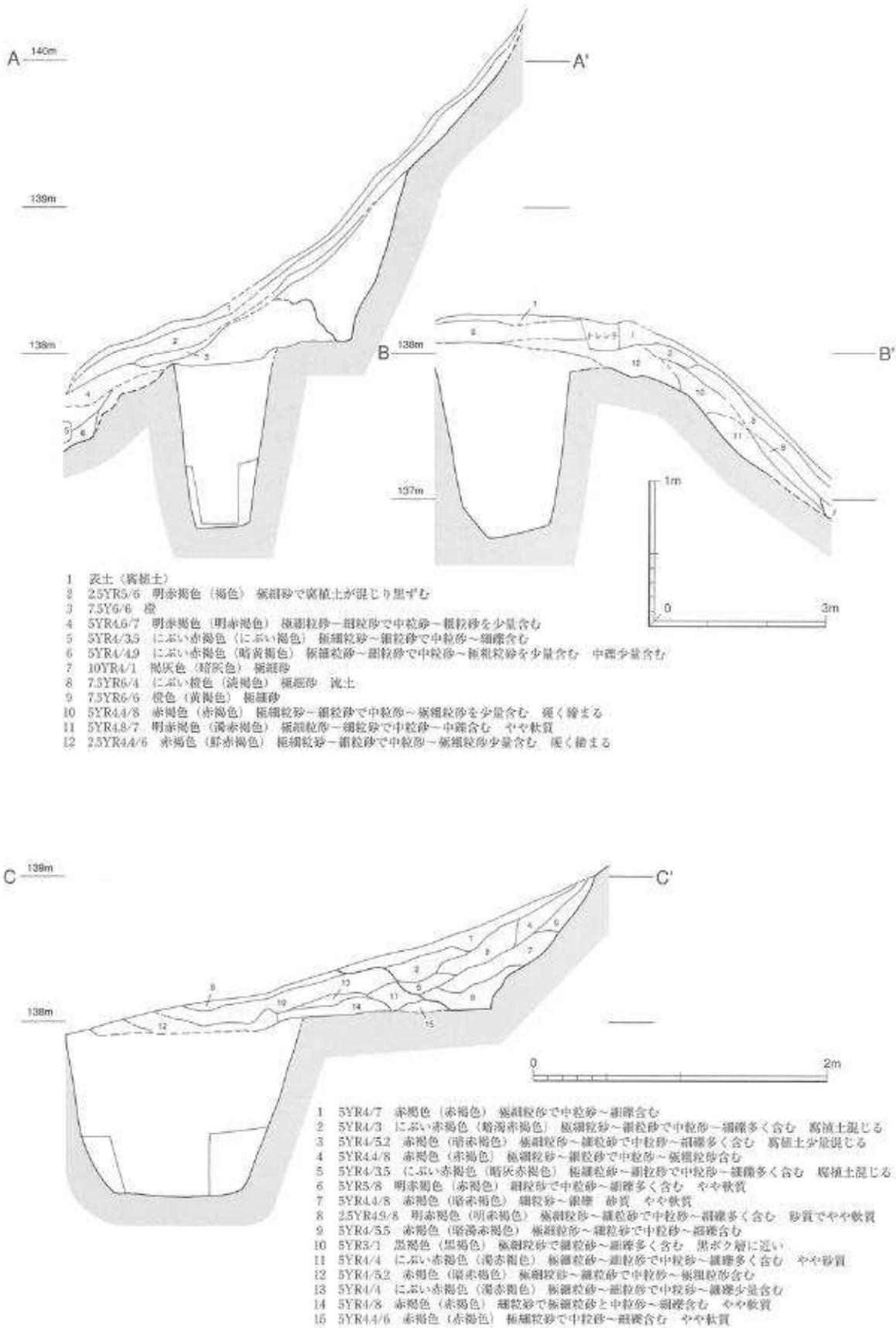
土層観察により判断できた棺の規模は、長さ1.62m、北西側の幅60cm、南東側の幅54cm、高さ42cmである。北西側の幅が広いことから、被葬者は西枕であったと想定されるが、断定できない。ただし、西



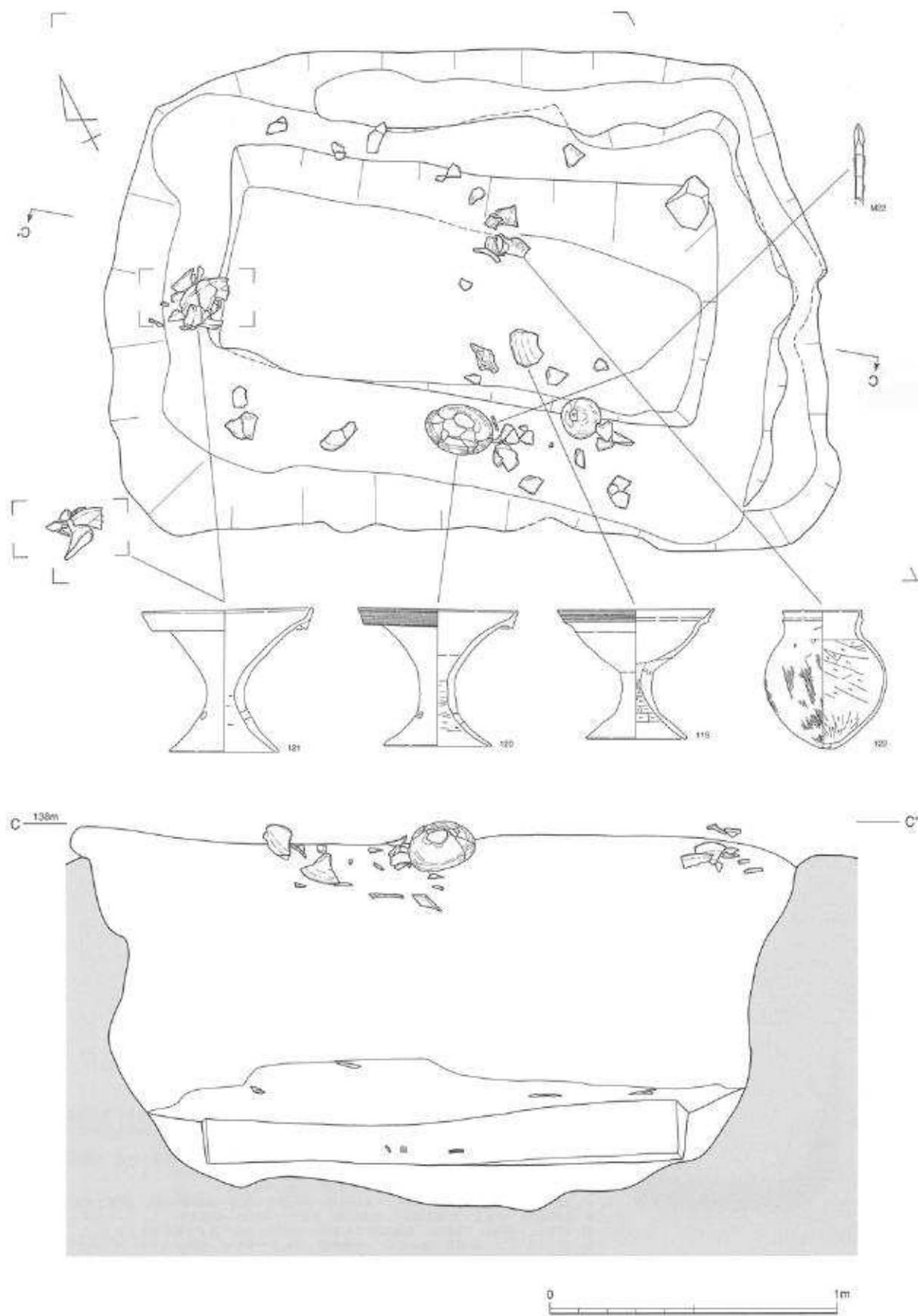
第150図 B1～B3号墳 調査前地形



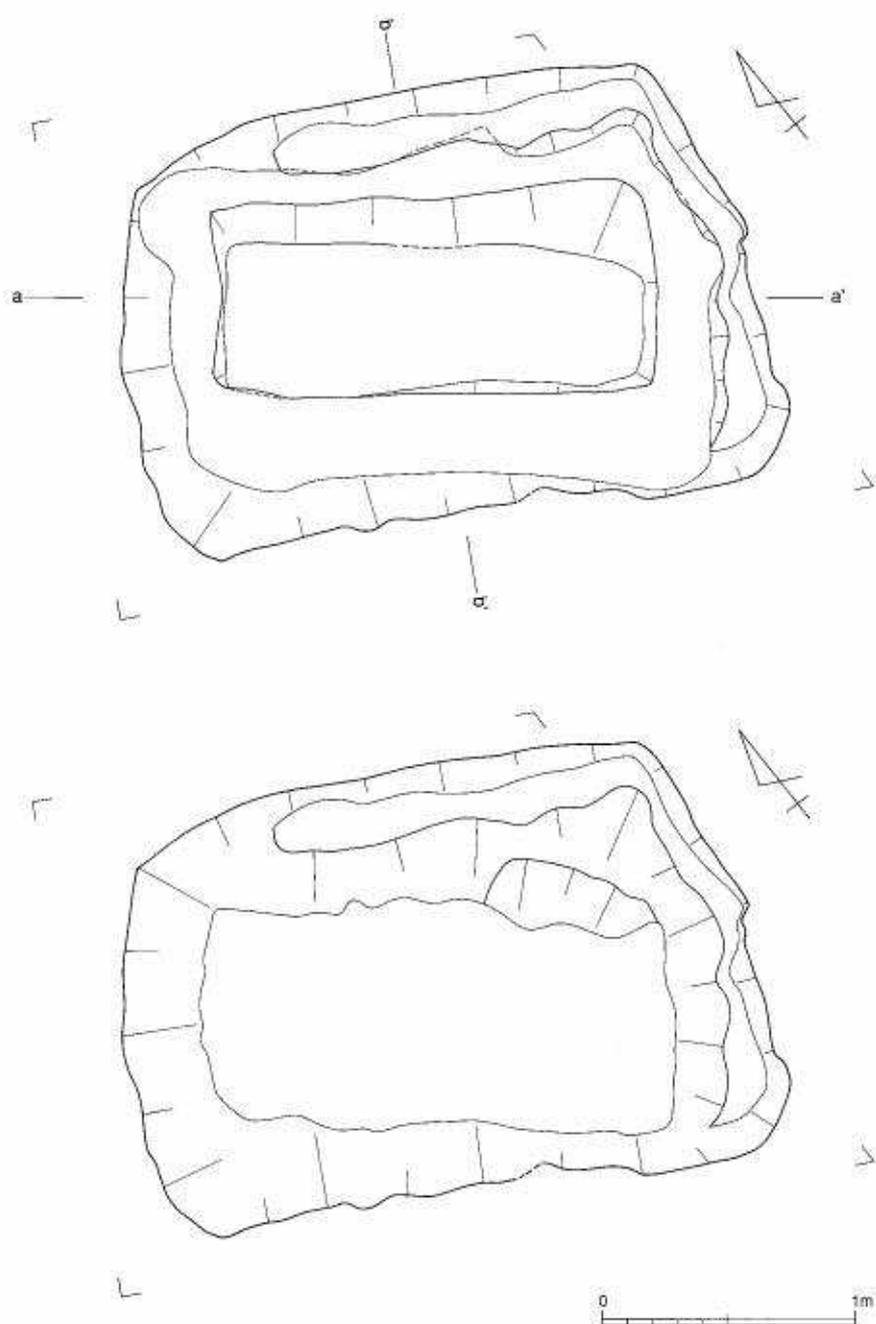
第151図 B1～B3号墳 調査後地形



第152図 B1号墳 墳丘土層断面



第153図 B1号墳 主体部



第154図 B1号墳 主体部 棺・墓壇

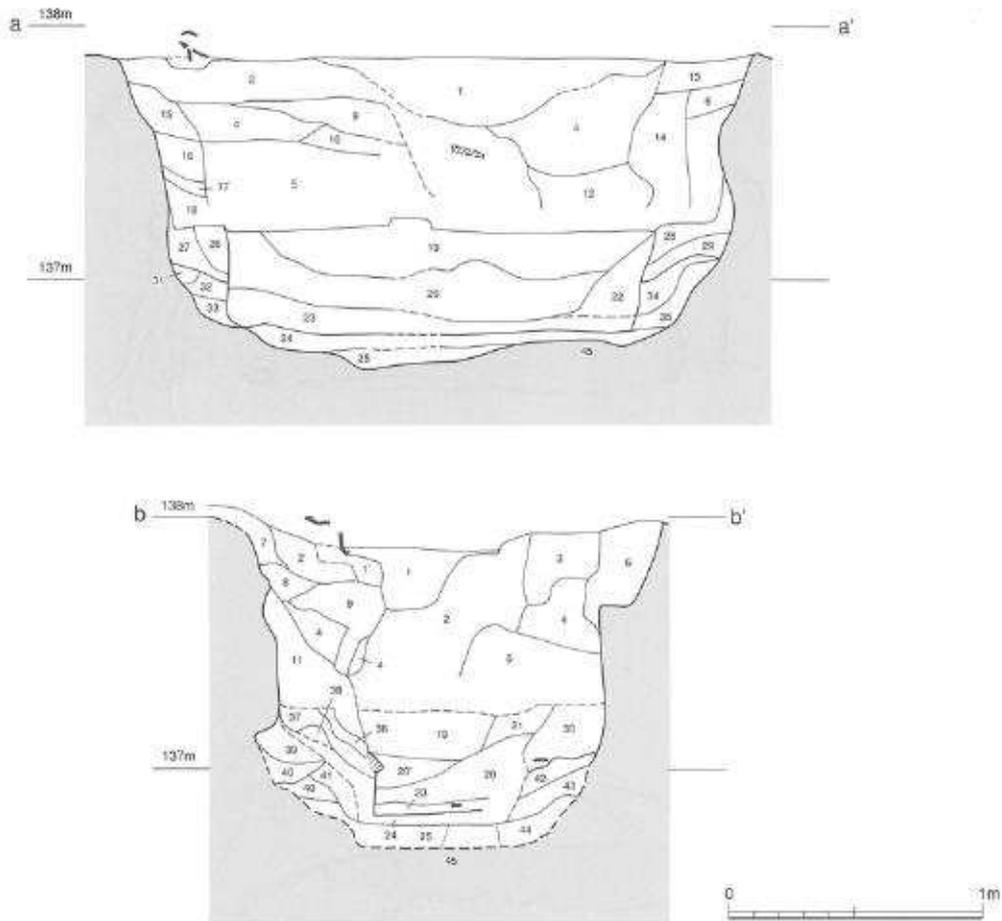
枕であるとすれば、墓壇上の供献土器のうち小口側のものは頭位側の上に置かれたことになる。

西頭位であったとすると、棺の主軸はN51° W方向となる。

棺上副葬品等出土状況 墓壇内からは鉄器が1点出土しているが、正確には、棺上に置かれたか墓壇内に置かれたと推定される鉄器が棺底付近の棺外壁から出土した、となる。被葬者が西頭位であったとすると、腰付近の右側の墓壇内あるいは右側寄りの棺上に置かれていたと推定することができよう。

出土遺物

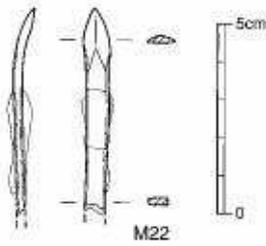
出土遺物には、墓壇内あるいは棺上に置かれたと推定される鉄器1点と、墓壇内供献土器1点および墓壇上供献土器3点があり、他に混入したと思われる土器片が墓壇上から出土している。



- | | |
|---|--|
| <p>1 5YR4/3.5 にぶい赤褐色(褐色) 極細粒砂～細粒砂で粗粒砂～細礫含む</p> <p>1' 5YR4/8 赤褐色(赤褐色) 極細粒砂～細粒砂</p> <p>2 5YR4/8 赤褐色(暗赤褐色) 極細粒砂～細粒砂で粗粒砂～細礫多く含む やや粘質</p> <p>2' 5YR4/8 赤褐色(赤褐色) 極細粒砂～細粒砂で中粒砂～極細粒砂含む</p> <p>3 5YR4.7/8 明赤褐色(明赤褐色) 極細粒砂～細粒砂で中粒砂～細礫多く含む。中礫少量含む</p> <p>4 5YR4/5.1 赤褐色(暗赤褐色) 細粒砂～中礫 軟質</p> <p>5 5YR4/4.9 にぶい赤褐色(暗赤褐色) 細粒砂～中礫 軟質</p> <p>6 5YR5/8 明赤褐色(赤褐色) 極細粒砂～中粒砂で岩鱗片含む</p> <p>7 5YR3.8/6 赤褐色(暗赤褐色) 極細粒砂～細粒砂で中粒砂～極細粒砂含む</p> <p>8 5YR4/4.5 にぶい赤褐色(赤褐色) 極細粒砂～細粒砂で中粒砂～細礫多く含む</p> <p>9 5YR4.4/8 赤褐色(明赤褐色) 極細粒砂～細粒砂で中粒砂～細礫多く含む</p> <p>10 7.5YR5/6 明褐色(明赤褐色) 粗粒砂まじり極細粒砂にφ2cm以下の中礫含む。地山風化ブロック若干含む</p> <p>11 5YR4.7/8 明赤褐色(明赤褐色) 極細粒砂～細粒砂で中礫少量含む</p> <p>12 5YR4/4 にぶい赤褐色(暗赤褐色) 細粒砂～中礫 軟質</p> <p>13 5YR4.5/4 にぶい赤褐色(明褐色) 細粒砂で粗粒砂～細礫多く含む</p> <p>14 5YR4/3 にぶい赤褐色(にぶい赤褐色) 細粒砂～中礫 軟質</p> <p>15 5YR4/4 にぶい赤褐色(明褐色) 極細粒砂～細粒砂で粗粒砂～細礫多く含む 軟質</p> <p>16 5YR4/5.1 赤褐色(にぶい赤褐色) 極細粒砂～細粒砂で中粒砂～細礫少量含む</p> <p>17 5YR4.7/8 明赤褐色(明赤褐色) 極細粒砂～細粒砂で粗粒砂～細礫少量含む</p> <p>18 7.5YR4/3 褐色(暗赤褐色) 極細粒砂～細粒砂で中粒砂～細礫多く含む 軟質</p> <p>19 7.5YR4/4 褐色(暗褐色) 細粒砂～中礫 砂質で軟質</p> <p>20 7.5YR4/6 褐色(暗明褐色) 細粒砂～中礫 砂質で軟質</p> <p>20' 5YR4/8 赤褐色(暗赤褐色) 極細粒砂でφ1cm大の風化礫含む 締まり悪い φ3mm大の礫状に極細粒砂が固まる 花崗岩礫は含まない</p> <p>21 7.5YR5/8 明褐色(暗褐色) 極細粒砂でやや締まり悪い φ1cm大の礫を微量含む 砂質 19層に較べて礫が少ない</p> | <p>22 7.5YR4.4/6.4 褐色(明暗褐色) 細粒砂～中礫 砂質で軟質</p> <p>23 5YR4.4/8 赤褐色(明赤褐色) 細粒砂～中礫 砂質で軟質</p> <p>24 10YR4/3 にぶい黄褐色(暗黄褐色) 細粒砂～中礫 砂質で軟質</p> <p>25 2.5Y4/2 暗灰黄色(暗緑灰色) 極細粒砂～細粒砂で中粒砂～中礫多く含む</p> <p>26 5YR4/4 にぶい赤褐色(暗赤褐色) 細粒砂～中礫 砂質で軟質</p> <p>27 5YR4/4 にぶい赤褐色(にぶい赤褐色) 細粒砂～中礫 砂質で軟質</p> <p>28 5YR5/6 明赤褐色(赤褐色) 極細粒砂～細粒砂で粗粒砂～細礫多く含む</p> <p>29 5YR4/6 赤褐色(赤褐色) 細粒砂～中礫 やや軟質</p> <p>30 7.5YR4/4 褐色(にぶい褐色) 細粒砂～中礫 やや軟質</p> <p>31 7.5YR4.4/6 褐色(暗赤褐色) 細粒砂～中礫 花崗岩礫の塊土</p> <p>32 7.5YR4.4/5 褐色(暗褐色) 細粒砂～中礫 やや軟質</p> <p>33 5YR4/4.9 にぶい赤褐色(にぶい赤褐色) 極細粒砂～細礫 やや軟質</p> <p>34 5YR4/5.2 赤褐色(にぶい赤褐色) 細粒砂～中礫 軟質</p> <p>35 5YR4/4.5 にぶい赤褐色(にぶい赤褐色) 細粒砂～中礫 花崗岩礫の塊土</p> <p>36 4YR5/8 明赤褐色(明赤褐色) 極細粒砂～細粒砂で中粒砂～細礫含む</p> <p>37 7.5YR4/6 褐色(にぶい褐色) 細粒砂～中礫 やや軟質</p> <p>38 4YR5/8 明赤褐色(明赤褐色) 極細粒砂～細粒砂で中粒砂～細礫多く含む</p> <p>39 5YR4/8 赤褐色(赤褐色) 極細粒砂～細粒砂で中粒砂～細礫多く含む</p> <p>40 2.5Y4/3 オリーブ褐色(暗緑灰色) 極細粒砂～細粒砂で中粒砂～中礫含む</p> <p>41 5YR4/4.9 にぶい赤褐色(にぶい赤褐色) 極細粒砂～細粒砂で中粒砂～細礫多く含む</p> <p>42 5YR5/6 明赤褐色(明赤褐色) 細粒砂～中礫 やや硬く締まる</p> <p>43 5YR4/8 赤褐色(赤褐色) 極細粒砂～中礫</p> <p>44 6YR4/8 赤褐色(暗赤褐色) 細粒砂～大礫 花崗岩礫の塊土</p> <p>45 花崗岩礫</p> |
|---|--|

第155図 B1号墳 主体部土層断面

鉄製品 (第156図、カラー写真図版94)



鉞 残存長5.5cm、刃部長1.6cm、刃部幅6.5mmで、刃部には錆があり、上方に反っている。身部は幅5mm、厚さ2mmで、柄がついていたと思われる部分が錆で膨れている。

土師器 (第157図、カラー写真図版94、モノクロ写真図版39~41)

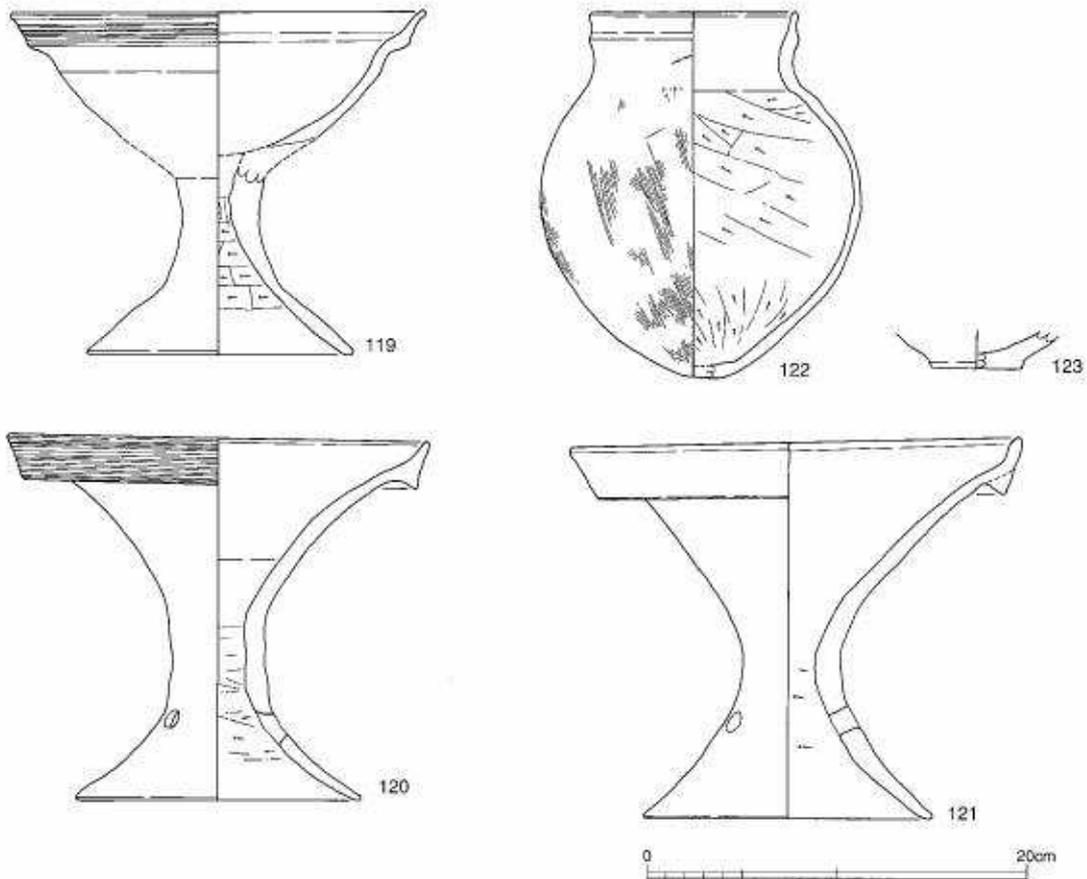
出土した土師器のうち119~121が墓壙上、122は墓壙内から出土したものである。

第156図 B1号墳 主体部出土鉄器

高杯 119は口径21.5cmの高杯で、杯部と脚部の接合部を欠失する。脚部は中空でヘラ削りを施しており、脚端径は13.9cmである。口縁部は複合になり、外面に4条の擬凹線を施している。本土器は墓壙上の南東部を中心に破片となって出土したものであり、モノクロ写真図版40に破片の展開写真を示しているが、完形品のまま置かれたものではないと思われる。

器台 120・121は器台である。120は119の高杯の西隣で出土したが、器台上部は置かれたものがそのまま割れた状態で検出された。接合の結果、ほぼ完形品となった。口径は22.0cm、器高19.5cm、脚部径14.7cmである。口縁部には7条の擬凹線を施し、脚部には円形の透孔を3方向に穿っている。

121は墓壙上の西小口部で破片が集積された状態で出土したものである。口縁端部には擬凹線を施しているが、磨滅のため図化できなかった。口径23.5cm、器高20.4cm、脚部径15.2cmで、脚部には3方向



第157図 B1号墳 主体部出土土器

に透孔を穿つ。120と非常によく似た形態である。

モノクロ写真図版41に接合前の破片展開写真を示したが、120・121ともに完形品のままではなく、少なくとも上下に二つの部分に割られてから置かれたものと判断できよう。

壺 122は墓域内下部から小破片となって出土したもので、接合の結果ほぼ完形品となった。体部はやや丸いが尖底で、口縁部は強いヨコナデにより段を作り出している。丹波・丹後系の口縁部と思われる。口径10.7cm、器高19.5cmで、体部外面下半には煤が付着しており、甕として使用されたと思われる。

墓域内出土土器は、谷本進氏の編年（谷本2000）ではV-3様式～庄内1～2式の間に含まれると思われるが、高野陽子氏の編年（高野2006）では西谷1～2式が本土器群と最も類似し、弥生後期後葉～末に編年されているものである。私見によれば庄内併行期新段階の初頭に相当すると判断され、弥生時代の最終末から古墳時代初頭の端境期ととらえている。

なお、墓域上面より弥生土器と思われる底部細片（123）が1点出土している。混入の可能性が高い。

B 2号墳

墳丘（第147～151・158図、カラー写真図版89・103）

位置と検出状況 B 2号墳はB 1号墳とB 3号墳の間にあり、調査前の墳丘平坦面は標高141.3m前後で、B 1号墳の平坦面よりも3m上方にあり、B 3号墳の平坦面よりも4.4m下方にあたる。埋葬施設検出面の標高は141.1m前後である。本墳では埋葬施設が存在する平坦面の全体を調査したが、墳丘裾の一部は崖面のため調査できなかった。

形態・規模 尾根稜線部分の斜面上側を削って平坦面を造成する、階段式と呼ばれる古墳で、埋葬施設が設けられた平坦面は北西～南東方向に長く、長軸9m、短軸4mの平面楕円形に近い。

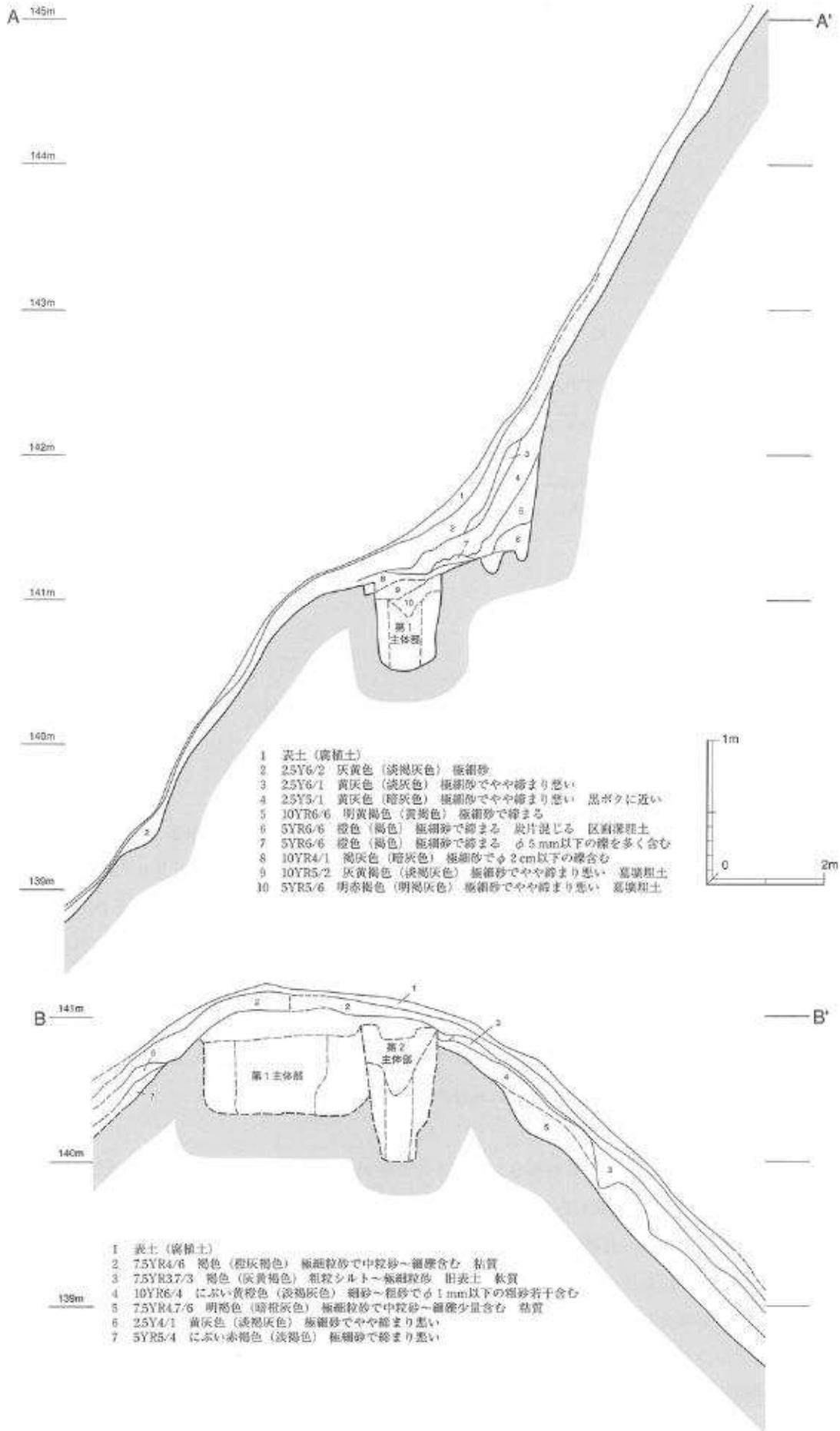
墳丘は、上記のような築造方法の古墳であるため、墳裾が明確でなく、墳形も円形に近いことが言える程度であり、意識して築造されたものではないと思われる。なお、平坦面とB 1号墳山側掘削面上端との高低差は約2mである。

外部施設 平坦面を造出させるための山側掘削面は平面三日月状を呈し、最大平面幅約1m、長さ9m、平坦面との最大高低差は1.5mである。掘削斜面と平坦面の境には幅20cm、深さ9cm程度の溝が、長さ7.3mにわたって掘削されており、排水の意味があったものと思われる。また、そのすぐ北東側にも幅38cm前後、深さ12cm程度の溝が長さ4m検出されたが、この溝は第2主体部により切られているため、第2主体部に先行することが判断される。したがって、本古墳は当初、第1主体部のみを埋葬施設としていたが、その後第2主体部も本墳に構築することになったため、平坦面を50cm程度山側に拡張したことが想定されるであろう。したがって、新旧の溝が各1条存在していることと、第2主体部によって旧の溝が切られていることの意味も説明できる。なお、第2主体部の主軸方向が第1主体部と異なっているのは、埋葬施設を設けるスペースが限られていたためであると思われる。

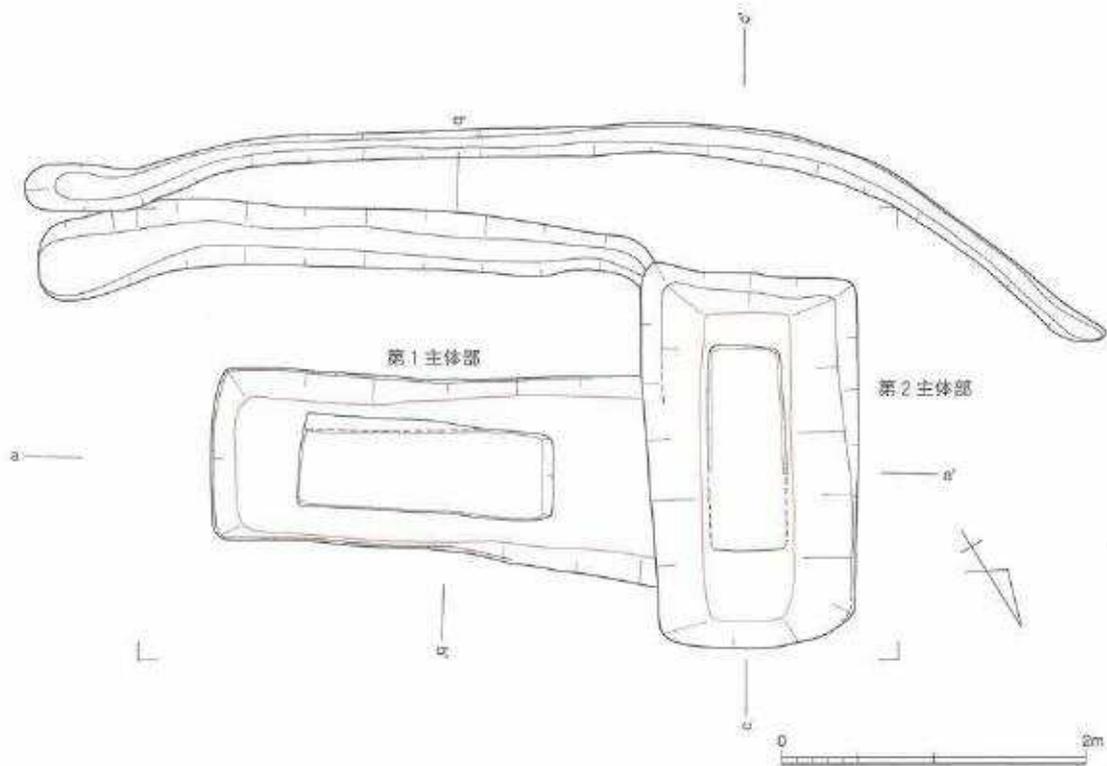
平坦面埋土にはいわゆる「黒ボク」が堆積しているが、平坦面の盛土はそれよりも下層であるため、墳丘構築時の平坦面には厚くても20cm程度の盛土が存在したにすぎないと判断されると同時に、「黒ボク」の堆積は本古墳築造以降であることがわかる。

埋葬施設（第159～161図、カラー写真図版92、モノクロ写真図版34・38・42～44）

B 2号墳の埋葬施設は主軸方向および時期を異にした2基が存在し、先行する主体部を第1主体部、後出のものを第2主体部として記述する。



第158図 B 2号墳 墳丘土層断面



第159図 B2号墳 主体部平面

第1主体部

墓壇

墓壇形態・規模 第1主体部の墓壇は平面長方形を呈するが、西側短辺が第2主体部と重複して切られているため、下端のみ残存していた。墓壇検出面での主軸方向の残存長は2.7mであるが、もとは2.8mであったと推定される。短軸の幅は1.15mである。墓壇底はほぼ水平・平坦で、長さ2.2m、幅90cmの平面長方形を呈しており、北側長側面はほぼ垂直になっている。検出面から底までの深さは62cmである。

墓壇埋土は棺を据えた後にはほぼ水平に近く堆積している。弥生時代木棺墓のように途中で一度止めた痕跡はなく、棺外側を固めながら一気に埋められているようである。

墓壇上遺物出土状況 墓壇埋土上端の上に盛られた褐色層（第158図上の第7層）から高杯3点分以上の脚部破片が出土しており、墓壇上に高杯が置かれていたと推定される。

棺

棺形態・規模 土層断面から判断される第1主体部の棺は箱形木棺であり、墓壇のほぼ中央東寄りの位置に納められている。「H」形とはならないようである。

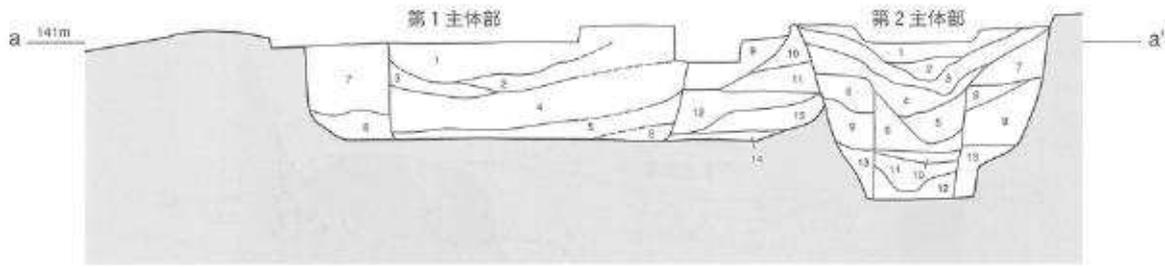
土層から判断した棺の規模は、長さ1.56m、幅56cmで、高さは50cmまで確認できた。棺内部は棺の腐朽により陥没して船底状に埋土が堆積していた。棺内からは遺物は出土しなかった。

埋葬頭位は不明であるが、B1・B3古墳が西頭位であることから、本墳でもその可能性があるものの、確証はない。仮に西頭位とした場合はW34° N方向となる。

第2主体部

墓壇

墓壇形態・規模 第2主体部の墓壇も平面長方形を呈しており、長軸2.5m、南側短辺幅1.42m、北

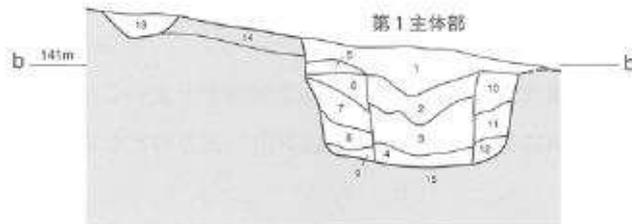


第1主体部埋土横断面

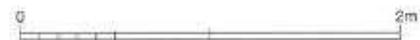
- 1 5YR6/4 にぶい橙色（淡褐色） 極細砂でφ3mm以下の礫を若干含む
- 2 5YR5/4 にぶい赤褐色（褐色） 極細砂でφ1cmとφ3mm以下の礫を若干含む
- 3 2.5Y5/6 明赤褐色（褐色） 極細砂で7層に含まれる白色礫（長石？）を多く含む
- 4 2.5Y5/4 にぶい赤褐色（褐灰色） 極細砂でφ2mm以下の礫を微量含む 粗
- 5 2.5Y5/6 明赤褐色（褐色） 極細砂でやや締まり悪い
- 6 5YR5/6 明赤褐色（明褐色） 礫混じり極細砂でφ2mm大の礫を含む やや締まり悪い
- 7 2.5YR5/6 明赤褐色（明赤褐色） 極細砂でφ3mm以下の礫を若干含む
- 8 7.5YR5/3 にぶい褐色（褐灰色） 礫混じり極細砂でφ5mm以下の花崗岩礫を含む 締まり悪い
- 9 7.5YR5/4 にぶい褐色（淡黄褐色） 極細砂でφ2mm以下の花崗岩礫を多く含む やや締まり悪い
- 10 7.5YR6/6 褐色（淡黄灰色） 極細砂でφ5mm以下の花崗岩礫をブロック状に含む 締まる
- 11 5YR5/4 にぶい赤褐色（淡褐色） 極細砂でφ2mm以下の礫を微量含む やや締まり悪い
- 12 5YR5/6 明赤褐色（褐色） 礫混じり極細砂でφ5mm以下の礫を多量に含む やや締まり悪い
- 13 5YR5/4 にぶい赤褐色（淡褐色） 極細砂でやや締まり悪い
- 14 5YR5/6 明赤褐色（褐色） 極細砂で締まる 均質

第2主体部埋土横断面

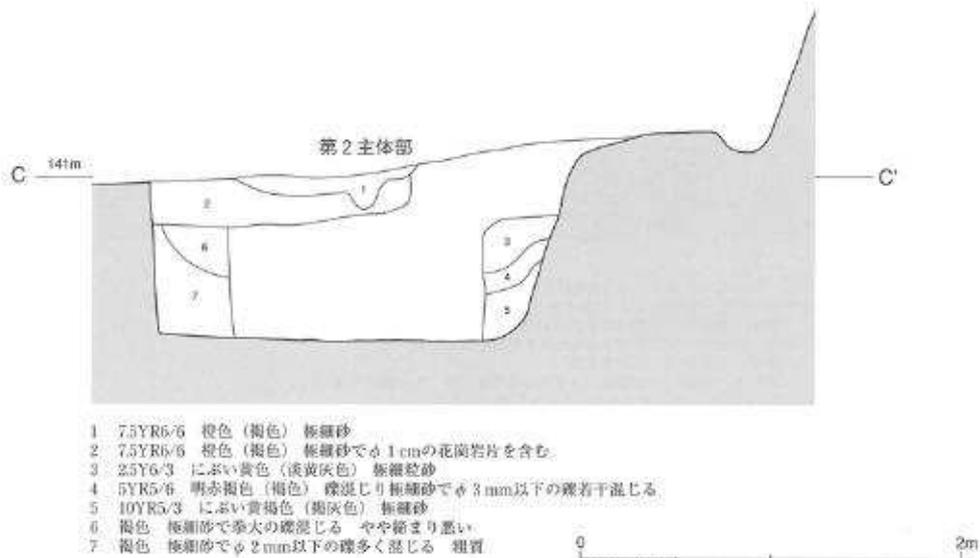
- 1 7.5YR6/6 褐色（褐色） 極細砂
- 2 7.5YR6/6 褐色（褐色） 極細砂でφ1cmの花崗岩片を含む
- 3 10YR6/4 にぶい黄褐色（淡黄色） 細砂～極細砂でやや締まり悪い
- 4 5YR5/6 明赤褐色（褐色） 極細砂でφ4mm以下の礫を多量に含む 部分的に3層のブロックを含む やや締まり悪い
- 5 7.5YR5/4 にぶい褐色（褐灰色） 極細砂で締まり悪い
- 6 10YR5/4 にぶい黄褐色（淡黄褐色） 極細砂で多大の礫を含む やや締まり悪い
- 7 7.5YR6/6 褐色（淡褐色） 極細砂でφ1cm以下の礫を若干含む やや締まり悪い
- 8 7.5YR6/4 にぶい褐色（淡黄灰色） 極細砂で5YR5/6明赤褐色（褐色） 極細砂と層厚3cm程度の互層をなす
- 9 5YR5/6 明赤褐色（褐色） 礫混じり極細砂でφ4cm以下の礫を含む
- 10 10YR5/4 にぶい黄褐色（黄褐色） 極細砂
- 11 5YR5/8 明赤褐色（褐色） 礫混じり極細砂でφ5mm以下の礫を多く含む 締まり悪い
- 12 5YR5/4 にぶい赤褐色（黄褐色） 細砂～極細砂で締まり悪い
- 13 淡黄褐色礫混じり極細砂で花崗岩礫を多く含む



- 1 5YR4/3 にぶい赤褐色（褐色） 礫混じり極細砂でφ1cm大の花崗岩礫多く含む 締まる
- 2 5YR4/3 にぶい赤褐色（褐色） 礫混じり細砂～極細砂でφ1cm大の花崗岩礫少量含む 締まる
- 3 2.5YR4/4 にぶい赤褐色（赤褐色） 極細砂で白色礫とφ2cm以下の礫を若干含む やや締まり悪い
- 4 5YR4/6 赤褐色（褐色） 極細砂 やや締まり悪い
- 5 赤褐色極細砂で6層が若干黒ずんだ色 締まる
- 6 2.5YR5/6 明赤褐色（赤褐色） 極細砂でφ2cm大とφ4mm大の礫を含む やや締まり悪い
- 7 2.5YR5/6 明赤褐色（赤褐色） 極細砂
- 8 7.5YR6/2 灰褐色（灰白色） 細砂～極細砂でやや締まり悪い 花崗岩風化石
- 9 7.5YR6/4 にぶい橙褐色（淡黄灰色） 極細砂で均質 締まる
- 10 6層と同じ
- 11 7層と同じ
- 12 7.5YR5/6 明褐色（褐色） 礫混じり極細砂でφ5cm以下の礫を多く含む 締まり悪い
- 13 褐色粗砂～極細砂でφ2mm以下の粗砂多く含む 区画埋土
- 14 赤褐色礫混じり細砂～極細砂で締まる 地山軟質岩層
- 15 7.5YR6/6 褐色（黄褐色）と2.5YR5/6 明赤褐色（赤褐色）の極細砂でφ15cm以下の礫を含む 畔を境に分かれる



第160図 B2号墳 主体部土層断面（1）



第161図 B2号墳 主体部土層断面(2)

側短辺幅は1.3mである。墓底はほぼ水平・平坦で平面長方形を呈し、墓底中心部に位置している。墓底の長さは2.07m、幅60cmで、墓底検出面からの深さは96cmである。なお、西側のみ2段墓底となっている可能性がある。

墓底埋土は埋土が水平に近くなるよう埋められているが、棺中央部分の高さまで埋まった際の上面は水平で、一度中断された可能性があるものの、小口部の墓底埋土土層断面では、その状況は認められなかった。

棺

棺形態・規模 棺は腐朽して遺存していなかったが、土層断面によって判断することができた。第2主体部も箱形木棺と思われ、墓底内ほぼ中央に納められていた。その規模は、長さ1.32m、幅48cm、高さ56cmと判断される。棺内より遺物は出土しなかった。

埋葬頭位は不明であるが、北側棺底が若干高く、棺幅も北側が若干広いことから、北頭位であった可能性があるものの、不明である。仮に北頭位とした場合はN31° E方向となる。

出土遺物

土師器 (第162図、モノクロ写真図版45)

高杯 墓底上から出土した遺物は高杯もしくは小型器台の破片4点である。124～126は脚柱部で、124・125の外面にはタタキの痕跡が残っている。内面にもタタキ痕のようなものがあるが、不明である。127は裾部で、径11.0cmを測る。端部は丸くおさめ、内面にはハケ目が残っている。

これらの土器はその特徴から、弥生時代末～古墳時代前期の間と思われるが、時期的特徴を示す部分が欠失しているため、詳細な時期を決定することができないものの、古墳時代前期の可能性が高い。



第162図 B2号墳 主体部出土土器

B 3号墳

墳丘 (第147～151・163図、カラー写真図版89・104、モノクロ写真図版44)

位置と検出状況 B 3号墳はB 2号墳とB 4号墳間の尾根稜線上に存在し、B 3号墳が位置するのは、尾根稜線方向が北東方向から北方向に折れ曲がる部分である。

調査前の調査区内では最も広い平坦面が確認でき、一瞥して階段式古墳であると判断できる状況であった。その平坦面はB 2号墳の平坦面よりも4.4m上方に位置している。調査前の平坦面の標高は145.6m前後で、埋葬施設検出面での平坦面の標高は145.4mである。

墳丘のほぼ全体を調査したが、構築時の斜面掘削部分のごく一部が調査区外にのびていたため、未調査となっている。

形態・規模 斜面山側を三日月状に削り、その残土を斜面下側に盛って平坦面を造成した古墳で、墳裾は他の古墳と同様、きわめて不明瞭となっている。なお、B 2号墳の斜面掘削部分上端からB 3号墳平坦面までの高さは2.6mである。

平坦面の外周は半円形に近く、北西-南東方向での長軸の規模は7.5m、短軸方向は4.5mの規模である。

墳丘断面図をみると、盛土と考えられる土層が平坦面中央部に残存し、北西側墳丘斜面部にも及んでいることから、埋葬施設を埋め戻した後に平坦面に土を盛っていたと判断でき、しかもB 1号墳のように平坦面に限られるような少量ではなく、墳丘斜面部にも及ぶほどの土量であったことがわかる。その高さは平坦面上面から24cm以上であったことが想定される。

外部施設 平坦面を造出するための丘陵斜面の掘削面は三日月形を呈し、長さ11.5m、平面幅2.5m、掘削部分中央の上端から平坦面までの高低差は2.1mである。掘削面下端の西側半分には幅40cm、深さ6cm程度の溝が長さ6mにわたって掘削されており、北西端が自然消滅していることから、排水のための施設であると判断される。

なお、直接本墳に伴うものとは断定できないが、東斜面表土から穿孔された土師器壺1点が完形のまま出土している。また、墳丘範囲内かどうか不明であるが、北西部分表土からは耳環が1点出土した。

埋葬施設 (第164～166図、カラー写真図版92・93、モノクロ写真図版46～48)

B 3号墳で検出された主体部は1基であり、平坦部分のほぼ中央に位置している。

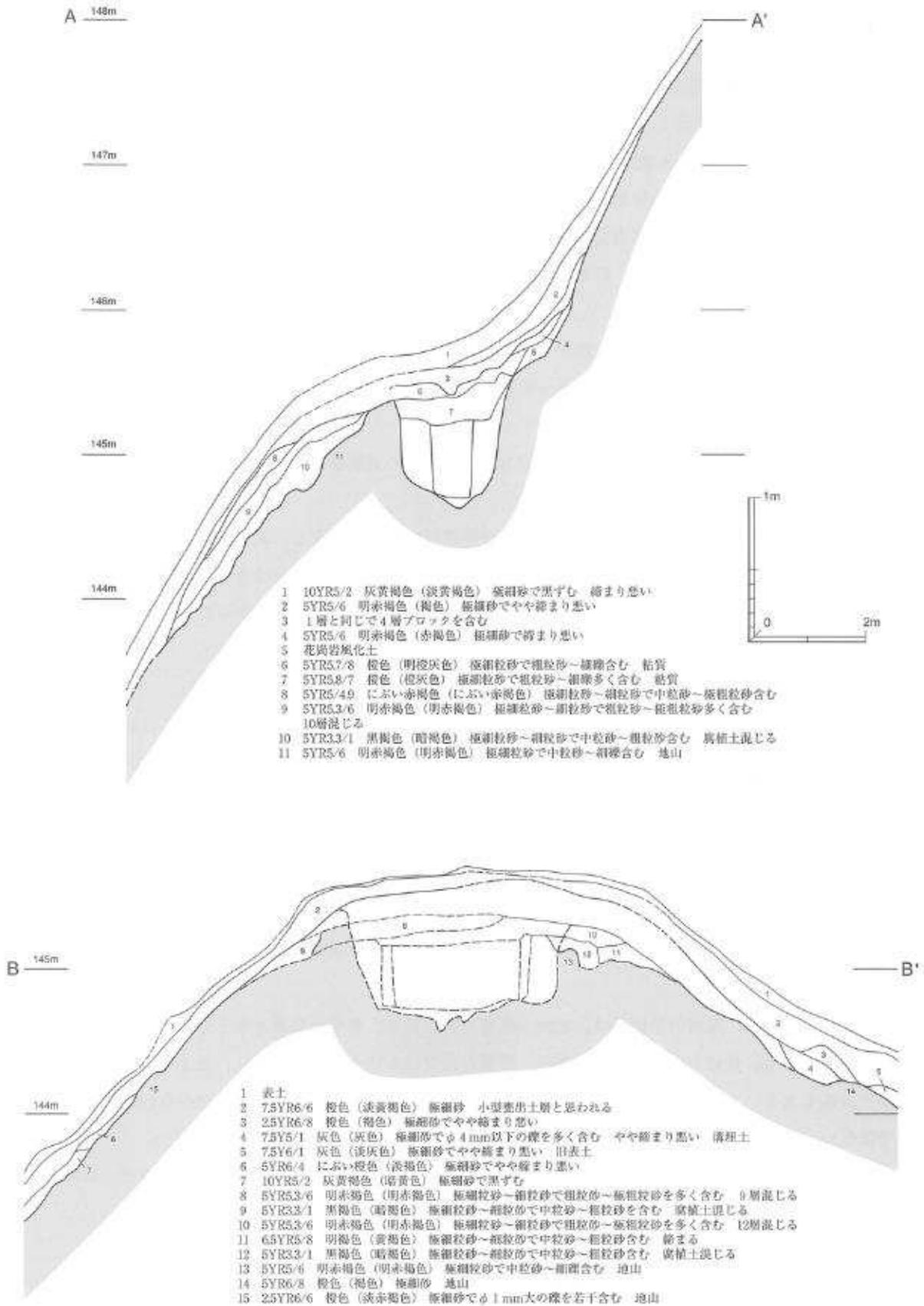
墓壇

墓壇形態・規模 墓壇の平面形は、北西-南東方向に長い、やや歪な長方形を呈し、北東部が特に丸みを帯びている。長軸方向の長さは3.96m、短軸方向では2.12mの規模であり、B 1号～B 3号墳のなかでは最も大きい。墓壇は垂直に近い急傾斜をもって掘削されており、墓壇底は細かな凹凸が多く平坦ではない。しかも中央部が皿状にやや低くなっていると同時に、南東側の底がやや高い。

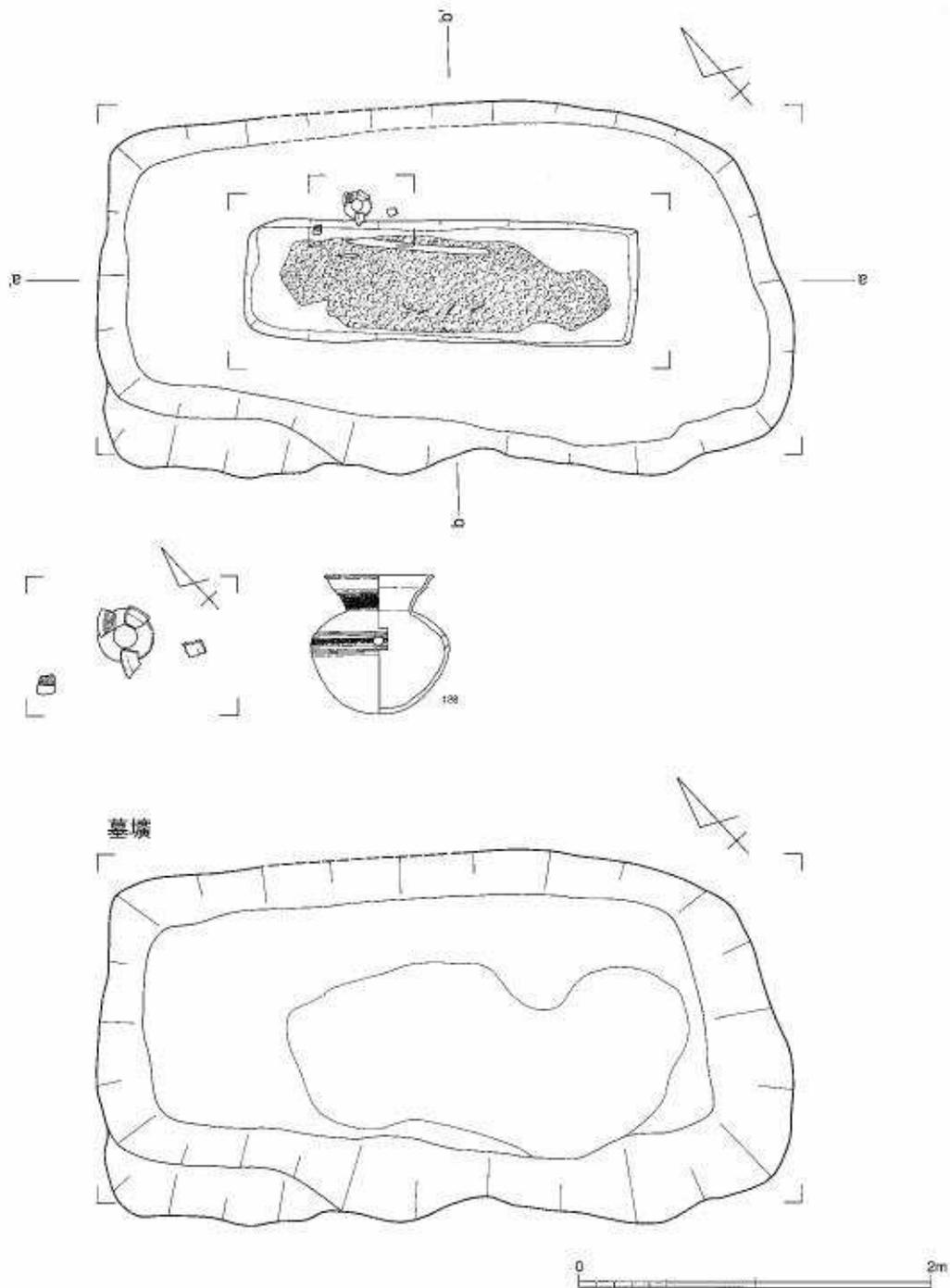
墓壇底の平面形は墓壇上面とほぼ相似形となっており、長軸3.24m、短軸1.48mの規模で、墓壇検出面から底までの深さは78cmである。

墓壇埋土は、やや粘質の土層とやや砂質の土層が交互になるようにほぼ水平に埋められていた。

墓壇上遺物出土状況 墓壇内からは遺物は出土しなかったが、墓壇検出面から須恵器が1点検出された。出土位置は北側の棺側に沿った西部で、正立状態で出土し、体部は完存していたが、口縁部は破片となって肩部上面および周囲に転がっていた。この須恵器は墓壇を埋め戻した際に上面に置かれたものであり、B 1号墳とはほぼ同じ状況であるが、完形のまま置かれた点が異なる。



第163図 B 3号墳 墳丘土層断面

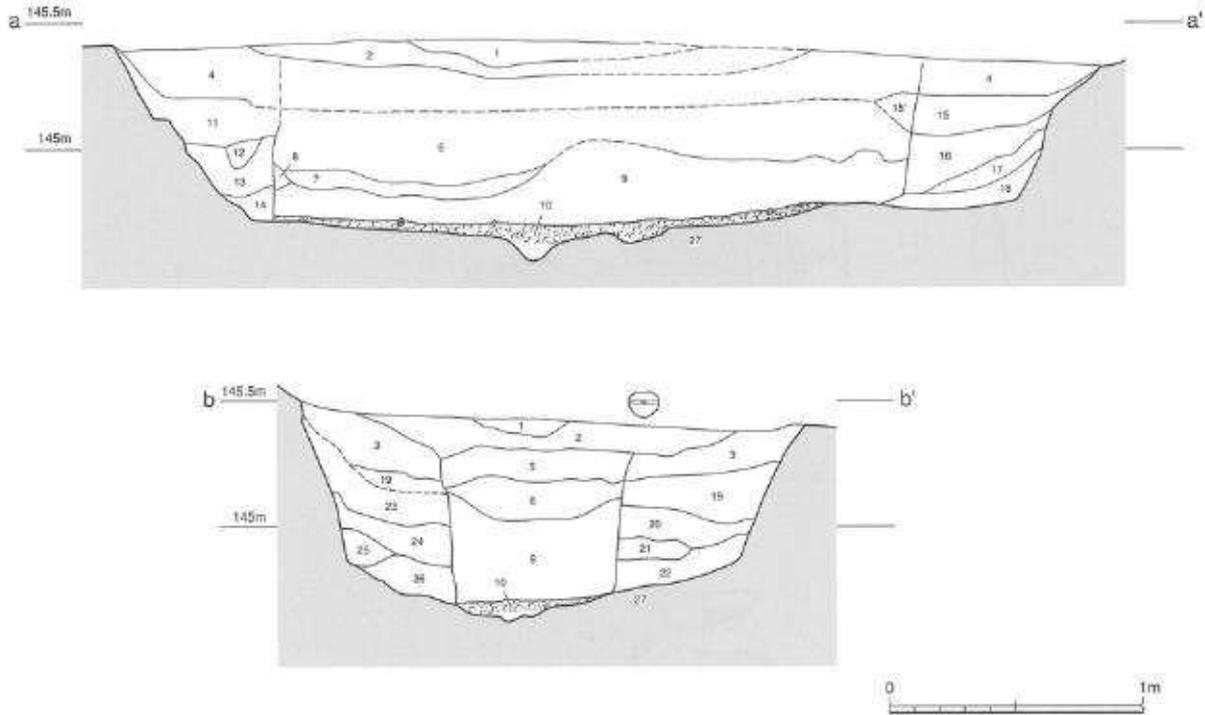


第164図 B3号墳 主体部平面

棺

棺形態・規模 棺本体は遺存していなかったが、土層関係から箱形木棺であったことが判断できる。木棺は墓壁内のほぼ中央に存在し、墓壁の主軸方向と棺の主軸方向は一致しており、後述するように北西頭位であり、 $N46^{\circ}W$ 方向である。

棺の規模は長さ2.27m、幅68cm、高さ60cmで、B1号墳～B3号墳のなかで最も大きく、棺底は礫床となっていた。礫床は直径1cm～3cm程度の川原石（円礫～亜円礫）を棺底のほぼ全面に敷いているが、やや疎らで、棺内両端部分にまでは及んでいない。また、敷かれた厚さについても、礫同士の重なり部



- 1 5YR4/4 にぶい赤褐色(灰褐色) 極細粒砂～細粒砂
- 2 5YR4/6 赤褐色極細粒砂で細粒砂混じり
- 3 5YR5/6 明赤褐色 極細粒砂～細粒砂
- 4 5YR5/6 明赤褐色 極細粒砂～細粒砂で粗粒砂を若干含む 明褐色ブロックを含む
- 5 5YR5/8 明赤褐色(赤褐色) 極細粒砂で中粒砂～極細粒砂多く含む 細粒含む 結實砂層に近い
- 6 5YR4/6 赤褐色(暗赤褐色) 極細粒砂で粗粒砂～極細砂多く含む
- 7 2.5YR4.7/8 明赤褐色(赤褐色) 極細粒砂で中粒砂～粗粒砂多く含む やや粘質
- 8 2.5YR4.8/8 明赤褐色(明赤褐色) 極細粒砂～細粒砂で中粒砂～細粒砂多く含む 軟質
- 9 5YR5/6 明赤褐色(暗赤褐色) 極細粒砂～細粒砂で中粒砂～極細粒砂含む
- 10 4YR5/8 明赤褐色(明赤褐色) 極細粒砂～極細粒砂でやや粘質 礫床部分
- 11 5YR5.4/8 明赤褐色(暗褐色) 極細粒砂～細粒砂で中粒砂～細粒砂多く含む やや硬質
- 12 5YR5/7 明赤褐色(暗褐色) 極細粒砂～細粒砂で中粒砂～細粒砂多く含む やや軟質
- 13 5YR5/8 明赤褐色(暗褐色) 極細粒砂～中粒砂で粗粒砂～細粒砂多く含む
- 14 3YR5/8 明赤褐色(明赤褐色) 極細粒砂～中粒砂で粗粒砂～細粒砂多く含む
- 15 5YR5/7 明赤褐色(明赤褐色) 極細粒砂～細粒砂で中粒砂～粗粒砂含む
- 16 4YR5/8 明赤褐色(赤黄褐色) 極細粒砂～細粒砂で中粒砂～極細粒砂含む やや硬質
- 17 5YR4.6/8 明赤褐色(明赤褐色) 極細粒砂～細粒砂で中粒砂～細粒砂含む やや硬質 花崗岩盤ブロックが大半
- 18 5YR5/7 明赤褐色(暗黄褐色) 極細粒砂混じり細粒砂で中粒砂～細粒砂含む 硬質
- 19 4YR4.4/8 赤褐色(明赤褐色) 極細粒砂～細粒砂で中粒砂～粗粒砂多く含む 花崗岩盤ブロック多く含む
- 20 4YR5/8 明赤褐色(明赤褐色) 極細粒砂～細粒砂でやや粘質 岩盤土多く含む
- 21 6YR6/8 褐色(黄褐色) 極細粒砂～細粒砂で中粒砂～細粒砂含む やや粘質
- 22 5YR5.4/8 明赤褐色(明赤褐色) 細粒砂～細粒砂で岩盤土多く含む やや粘質
- 23 6YR6/8 褐色(黄褐色) 極細粒砂で中粒砂～粗粒砂含む
- 24 5YR5/4.9 にぶい赤褐色 極細粒砂～細粒砂で中粒砂～極細粒砂含む
- 25 5YR5/4.9 にぶい赤褐色 極細粒砂～細粒砂で中粒砂～粗粒砂含む やや粘質
- 26 6YR6/8 褐色(黄褐色) 極細粒砂で中粒砂～極細粒砂含む やや硬質
- 27 軟質花崗岩盤

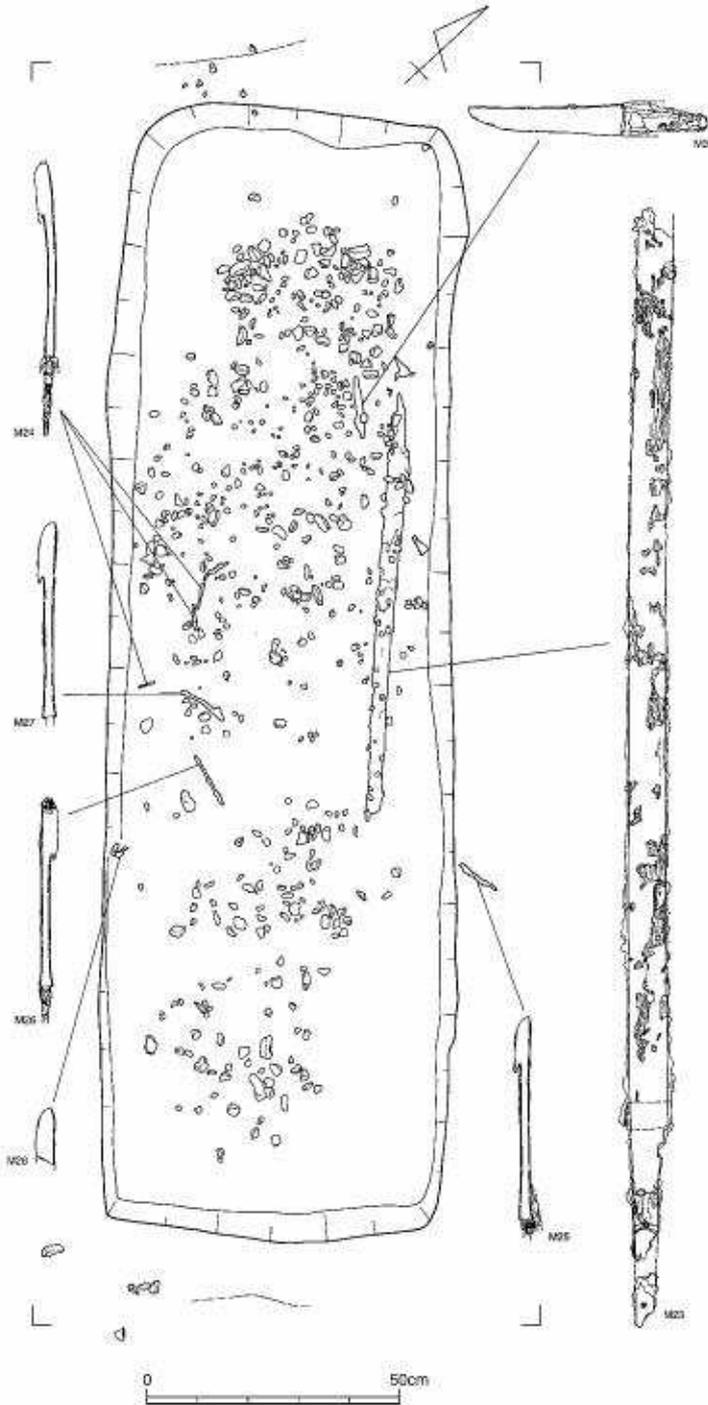
第165図 B3号墳 主体部土層断面

分が少なく薄い。底に礫床が認められたことから、木棺底板は無かったものと判断される。

棺内副葬品出土状況 棺内礫床上で鉄刀・刀子・鉄鏝といった鉄器が検出された。

鉄刀は北側棺側に沿った位置のやや西よりで検出された。切先は欠失していたが、南東方向に向けられていた。また、刃部を棺外側に向け、佩表が上側になった状態で出土した。刀子は鉄刀把部分の南西で検出され、刃部が北東側、把が南東側に向いた状態で検出された。刀子は被葬者の頭部付近に副葬される場合が多く、刀の切先は被葬者の足先側に向けられることの方が多いため、埋葬時の頭位は北西側であったと判断される。

このことは、礫床の礫量および範囲が西側に多く広く存在していたことと、墓床底の高さが東側に比



第166図 B 3号墳 主体部遺物出土状況

木の本質も遺存している。

刀子 M30に示した鉄刀子は、残存長12.6cm、刃部長8.2cm、茎部長4.5cmの両関の鹿角装のもので、関部幅は1.6cm、背幅は2.1mmである。また、関部での茎幅は1.25cmである。関部から茎部にかけて鹿角が遺存しており、直径1.8cm程度の鹿角であることが、刃部側に表面が遺存していることにより判断できる。

鉄鏃 鉄鏃は5点出土し、M24～M29に図示した。いずれも尖根系で、逆刺を有する刃部を片側にもつ長頸鏃である。全長がほぼ残存しているものはM24の1点に限られ、残存長14.4cmで、推定復元長は

べて西側の方が高くなっていることと合致する。

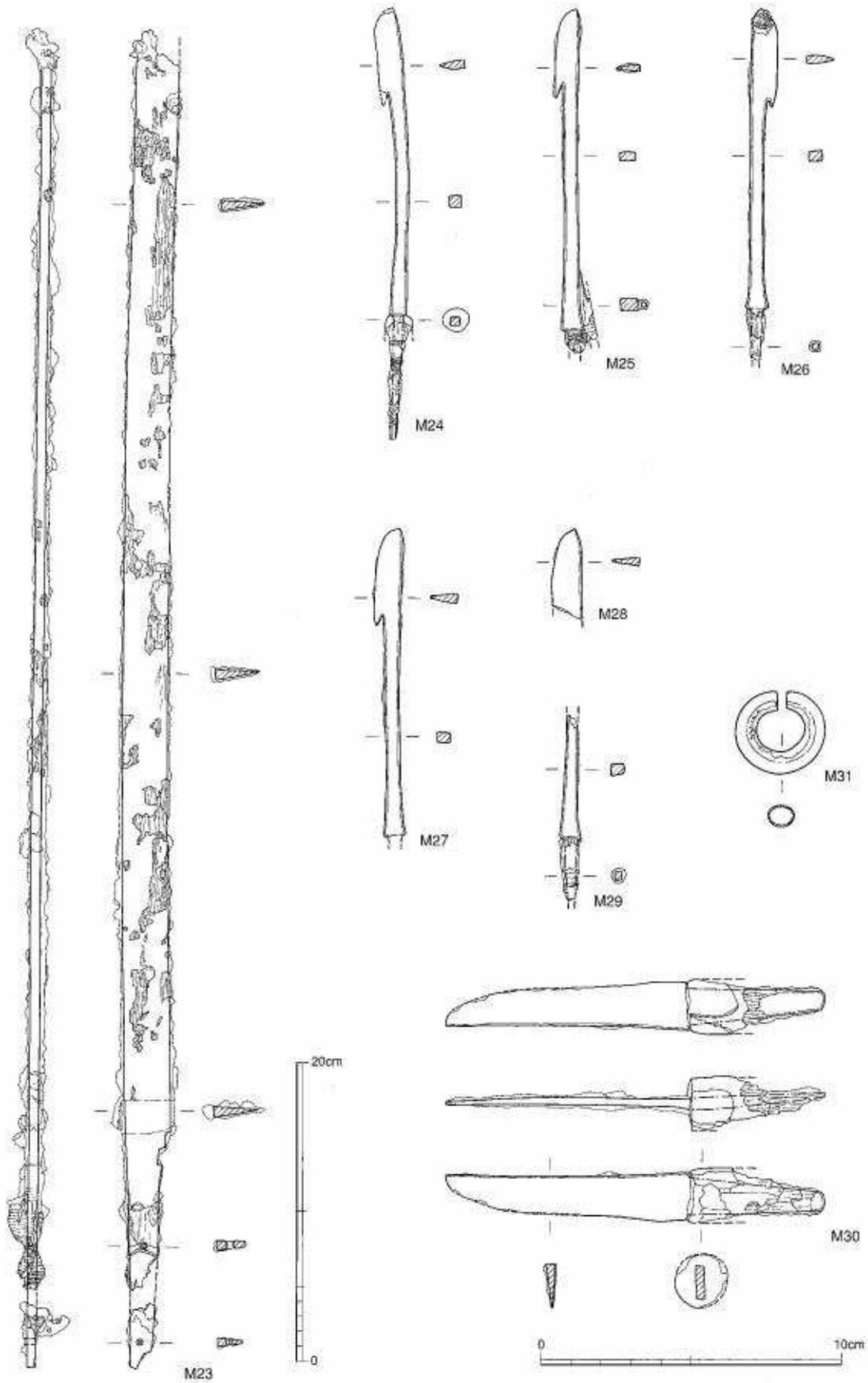
鉄鏃は主として棺内南西棺側に沿った位置で検出された。鉄鏃の方向が一定せず、棺の主軸と直交方向に近いものまであることから、棺内ではなく棺上に置かれたものが、棺の腐朽に伴って棺内に落ち込んだ可能性がある。このことは、北東側棺外で鉄鏃が1点出土していることも傍証となろう。

出土遺物

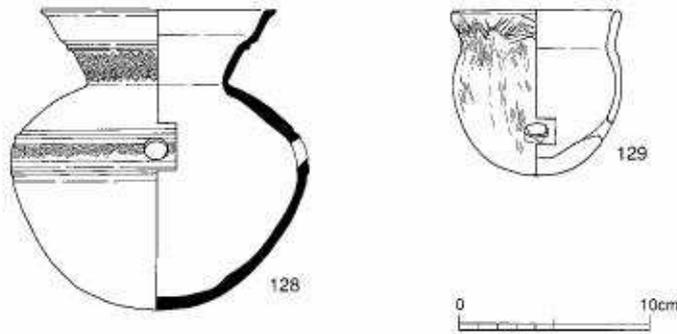
鉄製品 (第167図、カラー写真図版94)

鉄刀 M23は切先と茎部途中を欠失し、茎尻を除いた残存長は84.6cmである。関部幅は3.0cm、背幅は0.6cmで、若干背反りしている。関部は深さ3mmで、茎部は16cm程度の長さと思われる。関から0.9cmの茎部側に茎元袂が認められ、幅1.2cm、深さ2.5mmである。茎部の目釘孔は円形で、2箇所認められる。関部側は径4.8mm、茎尻側は径3.9mmである。茎尻の形態は隅袂尻となっている。

装具は腐植によりほとんど残存していないが、鞆口装具と思われる部分に痕跡が残っているようである。把部分には把木の木質と把巻が一部残存している。また、鞆



第167図 B3号墳 主体部等出土金属器



第168図 B3号墳 出土土器

14.6cmである。刃部長はM24の推定値も含めて3.0cm～3.3cmで、平均長は3.2cmである。刃部幅は8mm～10.5mmで、平均幅は8.9mmとなっている。頸部長は7.0cm～8.3cmとばらつきが多く、平均値は7.6cmとなる。頸部の断面は方形を呈し、幅4.5mmと5.0mmの2種に分かれるが、厚さとの相関関係はなく、厚さ3.5mm～4.0mmで、

平均値は3.8mmである。関は撥状に開き、幅・厚さともに頸部よりも大きくなっており、幅は5.5mm～7.5mmであるが、M24以外は7.0mm～7.5mmとなっている。茎部長は4.15cmで、M24のみ基部端まで遺存している。茎部は方形の断面を呈し、茎端にゆくにしたがって細くなっている。

矢柄の構造については、M24において観察され、茎部に糸を斜めに交差するように巻いた後、木材を被せている。口巻は観察できなかった。また、矢柄は直径0.8cmが確認できる。このような矢柄の構造は、芝花14号墳の同型式の鉄鏃において詳細に観察できるものが出土している。

なお、M25にはM26と思われる茎の先端部分が錆着している。

須恵器（第168図、カラー写真図版94、モノクロ写真図版39）

B3号墳の墓壙上から出土した須恵器は趣1点である。

趣 128は体部が完存する完形品で、口径12.2cm、器高15.9cm、体部最大径15.7cmである。体部最大径付近と頸部に波状文を描き、体部のものは上下各2条の凹線で区画している。体部最大径はやや上位にあり、体部下半は下方にやや長い。孔は径1.2cmである。全体的に薄手のつくりで、体部にはタタキ成形の痕跡が残っている。ON46型式～TK208型式と思われる。

その他の出土遺物

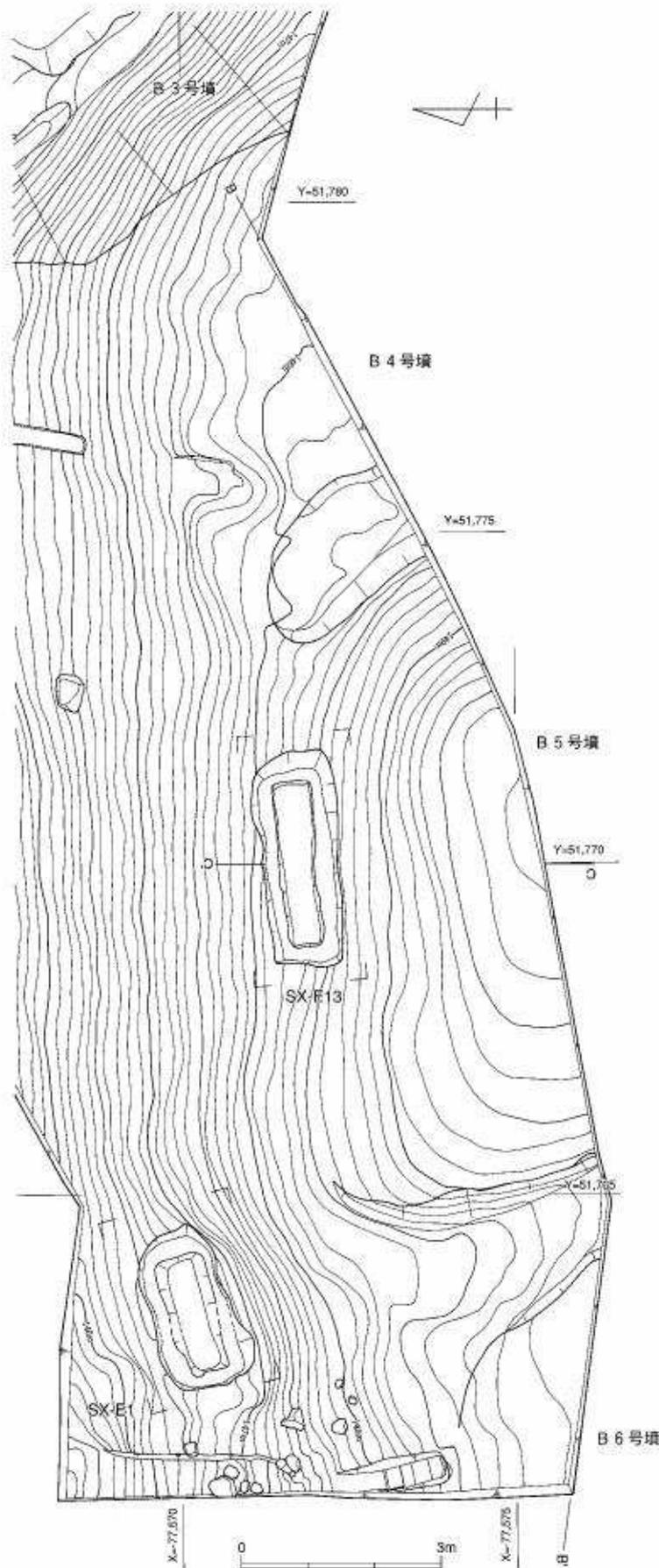
金属製品（第167図、カラー写真図版94）

耳環 墳丘西側の表土から出土した耳環はM31である。長径3.0cm、短径2.77cmの楕円形に近く、横断面も楕円形で、長径8.7mm、短径7.3cmである。重量は4.26gと軽く、中空である。内側表面および挟み部に鍍金が残存し、内側に継ぎ目と思われる盛り上がりが見取できるが、ほぼ平滑に仕上げられており、不明瞭である。

B3号墳に伴うものとは思われないが、どの古墳に伴うものであるのか不明である。

土師器（第168図、カラー写真図版94、モノクロ写真図版39・45）

壺 墳丘東側斜面の表土から出土したもので、129に図示した。器高8.8cm、口径8.6cm、体部最大径8.9cmの小形壺で、底部は丸底である。体部下半には焼成後の穿孔が1箇所あり、孔径は約8mmである。口縁部は体部から緩やかに曲折し、上方に短くのび、端部は丸くおさめる。口縁部外面には複合鋸齒文がヘラ描きされているが、精美なものではない。形態の特徴から、B3号墳と同時期である可能性が高く、平坦面から転落した可能性もある。あるいは墓壙上に須恵器とともに置かれていたものかもしれない。



第169図 B4～B6号墳 調査後地形

B4号墳

墳丘 (第147・169・170図)

位置と検出状況 B3号墳と同様尾根稜線上の稜線方向変化部分に位置し、B3号墳とB5号墳の間に存在している。墳丘の大半が調査区外にあたるが、B4号墳の平坦面は標高148.3mで、B3号墳の平坦面より2.6m上側になり、B5号墳の墳頂より1.7m下に位置している。

B4号墳の調査対象部分は、平坦面および墳丘部分の北側約1/3程度である。

形態・規模 B4号墳も斜面上側を削って平坦面を造り出しており、平坦面の平面形は半月状である。

平坦面の長軸の長さは計測できていないが、幅は約5mと広い。

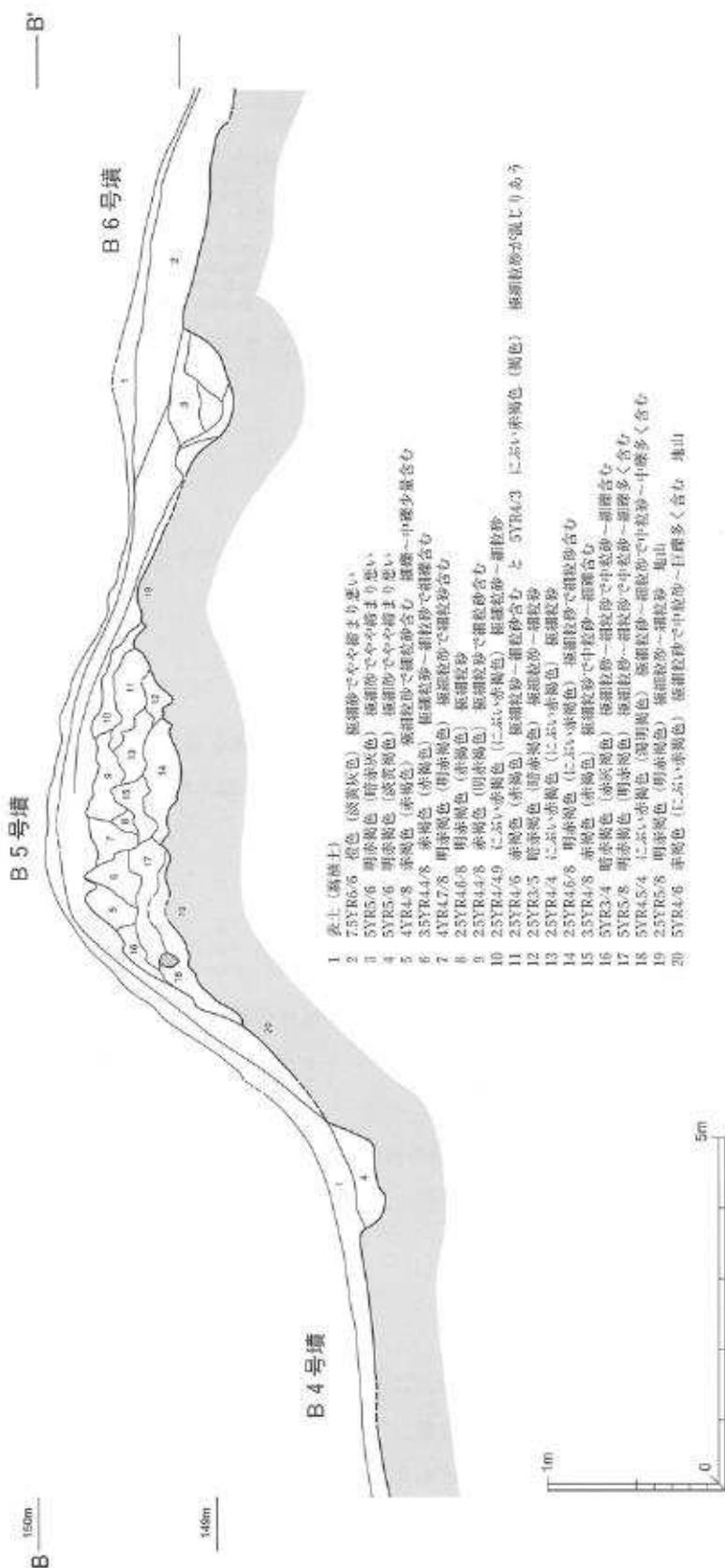
墳形についても、階段式の古墳であるため、明確ではない。

表土から約20cmの深さまで掘削したが、調査区内では埋葬施設は検出されなかった。

外部施設 明確に外部施設と呼べるものは検出されなかったが、B5号墳との間に区画溝が検出された。

溝はB4号墳の平坦面上に存在し、B5号墳の墳裾にあたる部分となる。幅1.8m、深さ15cm程度で、長さ2.5mを検出した。溝の北西端地形にあわせて自然消滅している。

B4号墳部分では、遺物は出土しなかった。



第170図 B 4～B 6号墳 墳丘土層断面

B 5号墳

墳丘(第147・169～171図、カラー写真図版104)位置と検出状況 B 5号墳も尾根稜線上に位置し、B 6号墳とB 4号墳の間に存在している。

B 5号墳の墳頂部の標高は調査前で150.0mであり、墳丘部分の約2/3が調査区外にあたる。

形態・規模 B 5号墳が立地する部分は傾斜が緩やかな尾根稜線上であるため、稜線方向の墳裾が明確であり、区画溝が設けられていた。

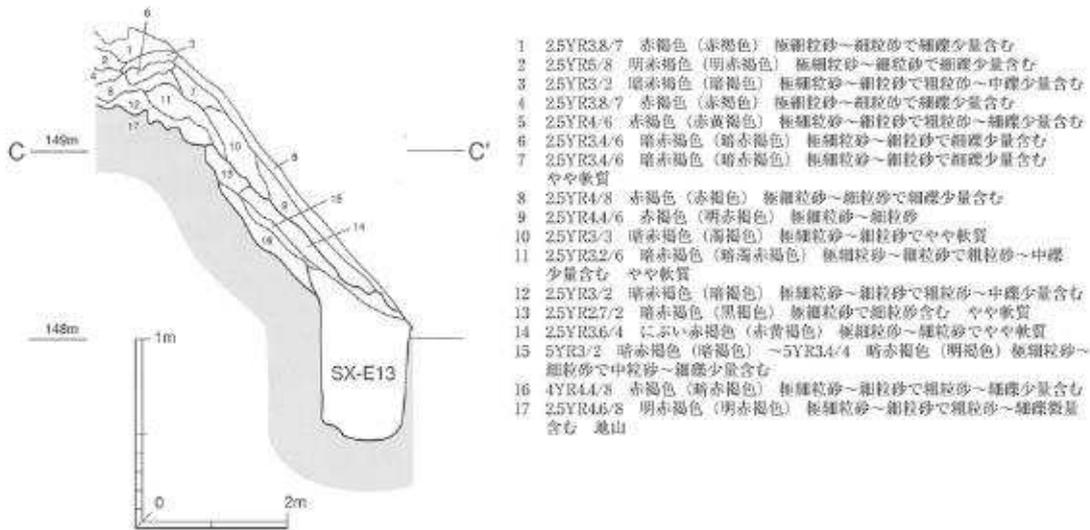
墳形は方形に近く、稜線方向での長さは約10m、を測る。

調査は、墳丘部分の盛土を表土から約70cm掘り下げたが、墳丘北部であるため埋葬施設は検出されなかった。

外部施設 青石などの外部施設は検出されなかったが、B 4号墳・B 6号墳との間に区画溝が設けられていた。

B 6号墳との間の区画溝は、幅1.5m～2.5m、深さ25cm程度で、長さ約4m検出したが、北端は地形にあわせて自然消滅している。

B 5号墳からは遺物は出土しなかったが、北側



第171図 B5号墳 墳丘土層断面

墳裾で木棺墓 (SX-E13) が存在し、北西側の斜面で表土掘削時に土器 (132) が1点出土している。木棺墓は本墳に伴う周辺部埋葬の可能性がある。

出土遺物

土器 (第177図、モノクロ写真図版45)

底部 132は弥生土器底部で、底径が6.0cmである。外面には縦方向のヘラ磨きを施しており、弥生後期と思われるが、中期の可能性もある。斜面出土であるため、高地性集落もしくは木棺墓 (SX-E13) と関係があるかもしれない。

B6号墳

墳丘 (第169・170図)

位置と検出状況 東地区の南西隅にあたり、B5号墳の西隣に位置し、尾根後線上に存在する。調査区内には墳丘の北東隅部分のみが含まれていた。

形態・規模 墳形は不明であるが、方形の可能性はある。

外部施設 B5号墳との間に区画溝が掘削されており、その溝の西肩ラインの北端はB6号墳側にまわっているように見える。他に外部施設は検出されなかった。また、遺物も出土していない。

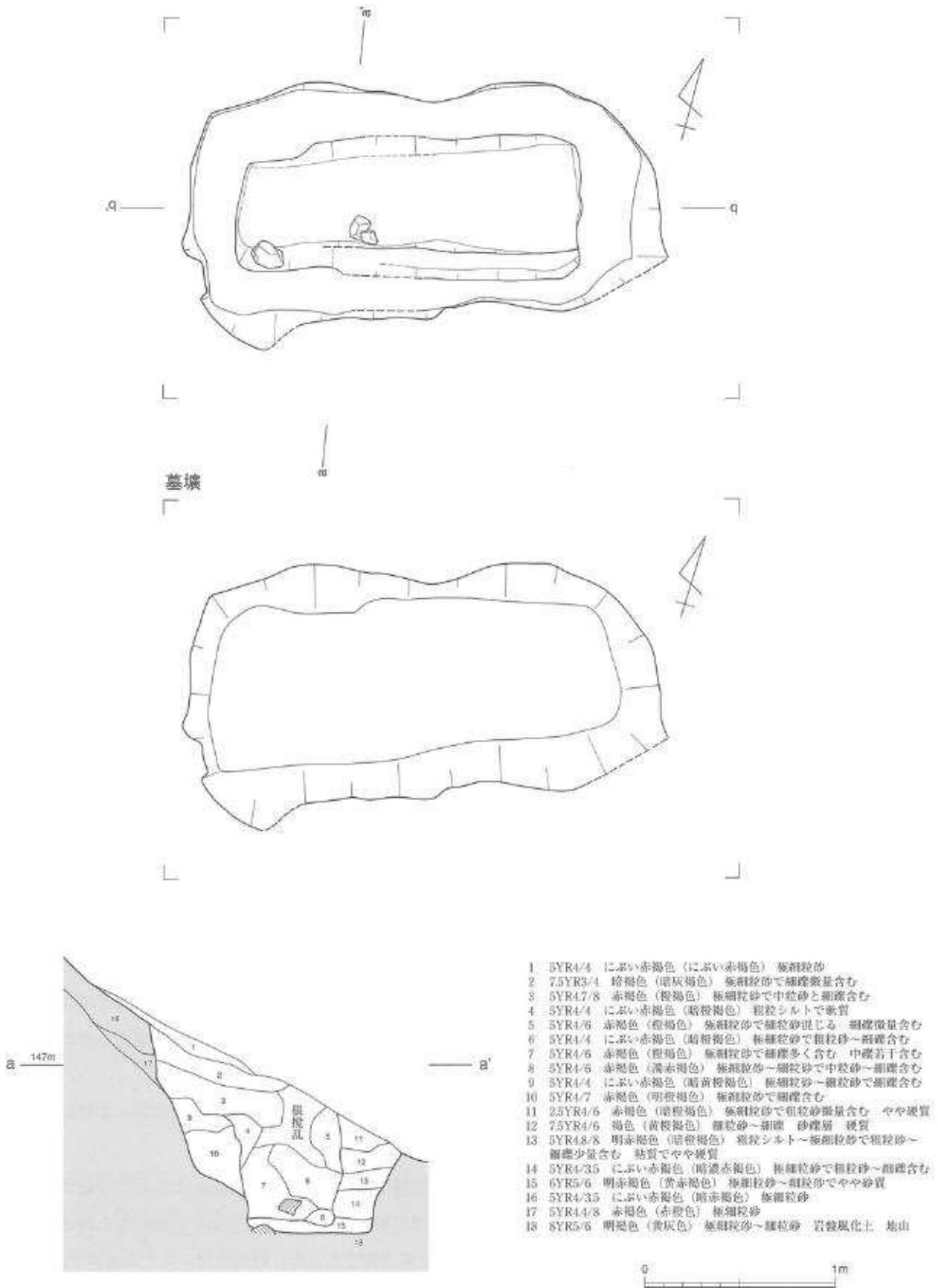
2. 小規模墳墓

東地区では、調査区内の東部から南部にかけての尾根後線上に連続して古墳が存在していたが、その北西側斜面では、上部の標高146m～149mの間には木棺墓2基、下部の標高131m～139mの間には墳丘を伴うと判断される小規模な石棺墓群を中心に、木棺墓なども存在していた。これらについて以下、記述する。

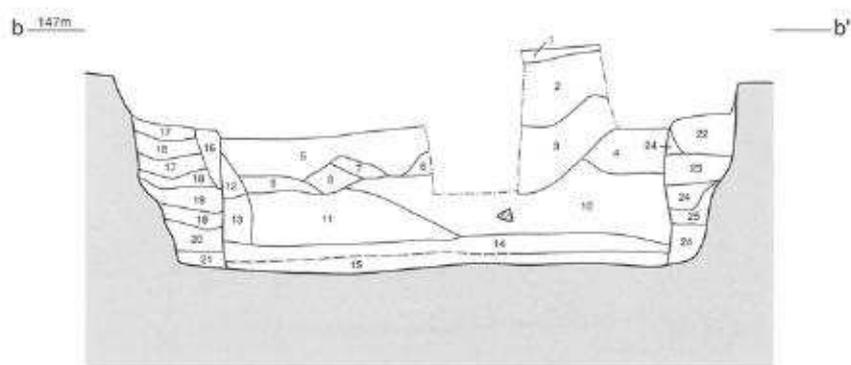
木棺墓

木棺墓1 (SX-E01) (第148・172・173図、カラー写真図版95、モノクロ写真図版49)

位置と検出状況 東地区内南西隅の急斜面に立地する木棺墓である。墳丘は存在しない。標高147.0m



第172図 木棺墓1 (SX-E01)



- 1 7.5YR3/4 暗褐色(暗灰褐色) 極細粒砂で細礫少量含む
 2 木根の腐植土(黒灰褐色) 粗粒シルトで粗粒砂-細礫含む
 3 5YR4/4 にぶい赤褐色(暗赤褐色) 極細粒砂で粗粒砂-細礫含む
 4 5YR3/6 暗赤褐色(暗赤褐色) 極細粒砂で中粒砂-細礫含む やや軟質
 5 5YR4/8 赤褐色(赤褐色) 粘質の極細粒砂と5YR4/49 にぶい赤褐色(暗灰褐色) 軟質極細粒砂が混じりあう
 6 5YR4/8 にぶい赤褐色(暗灰褐色) 極細粒砂で中粒砂-細礫含む 軟質
 7 5YR3/1 黒褐色(暗灰褐色) 粗粒シルト-極細粒砂 軟質腐植土状
 8 5YR4/49 にぶい赤褐色(暗灰褐色) 極細粒砂で軟質
 9 5YR3/1 黒褐色(暗灰褐色) 粗粒シルト-極細粒砂 軟質腐植土状
 10 5YR5/6 明赤褐色(淡橙褐色) 極細粒砂で粗粒砂-細礫含む
 11 5YR4/6 赤褐色(赤褐色) 極細粒砂で細粒砂混じる 細礫含む やや粘質
 12 5YR4/5.2 赤褐色(暗赤褐色) 極細粒砂
 13 5YR4/4.5 にぶい赤褐色(暗赤褐色) 極細粒砂で軟質
 14 6YR5/6 明赤褐色(黄赤褐色) 極細粒砂-粗粒砂でやや粘質
 15 6YR5/6 明褐色(黄灰色) 極細粒砂-粗粒砂 花崗岩風化土
 16 5YR4.5/4 にぶい赤褐色(にぶい赤褐色) 極細粒砂で粗粒砂-中粒砂含む 軟質
 17 4YR5.4/8 明赤褐色(明赤褐色) 極細粒砂-粗粒砂でやや粘質
 18 7.5YR4/6 褐色(にぶい黄褐色) 粗粒砂で極細粒砂含む 細礫少量含む
 19 5YR3/4 暗赤褐色(暗赤褐色) 極細粒砂-粗粒砂で中粒砂-細礫含む やや粘質
 20 3.5YR5.4/8 明赤褐色(明赤黄褐色) 極細粒砂-粗粒砂で粗粒砂-細礫含む
 21 5YR5/7 明赤褐色(明赤黄褐色) 細粒砂で極細粒砂含む 粗粒砂-細礫少量含む
 22 2.5Y6/4 にぶい黄色(黄灰色) 極細粒砂-細礫 砂礫層
 23 5YR5/6 明赤褐色(にぶい赤褐色) 極細粒砂-粗粒砂で粗粒砂-細礫少量含む
 24 5YR4/6 赤褐色(赤褐色) 極細粒砂で中粒砂-細礫少量含む
 25 2.5Y5/3 黄褐色(黄灰褐色) 極細粒砂-細礫 砂礫層

第173図 木棺墓1 (SX-E01) 土層断面

に存在し、主軸は等高線と同方向である。また、周囲の地山を掘削して広場を確保しているようである。

埋葬施設

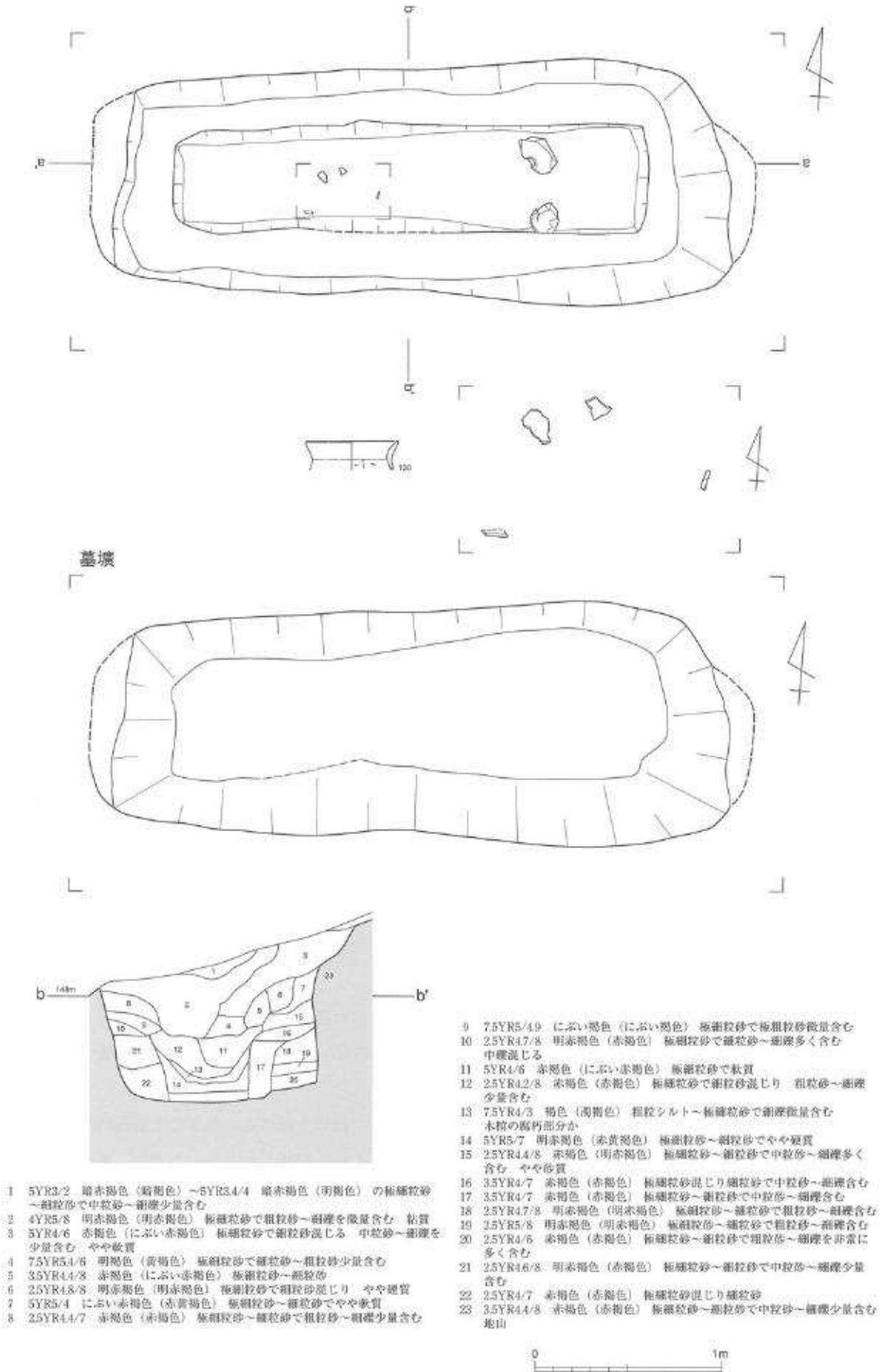
墓域形態・規模 墓域の平面形は丸みのある長方形を呈しているが、検出面の上端ラインは歪みが多い。長軸方向は東西に近く、斜面に平行しているため、山側にあたる南側の法面が広がるように掘削している。また、検出面の南北での高低差は68cmもある。

墓域検出面での長軸方向の長さは2.5m、短軸方向の幅は1.23mである。墓域底の平面形は検出面とはほぼ相似形であるが、西側幅がやや広い。底面の規模は、長軸2.16m、西端の短軸87cm、東端では66cmである。墓域底はほぼ平坦で水平に近いが、西側が約3cm高くなっている。検出面から墓域底までの深さは、南側で1.11m、北側では42cmである。

墓域内の棺との間の埋土は、ほぼ水平に埋められており、砂質層と粘質層で交互に埋めている傾向にある。墓域内から遺物は出土しなかった。

棺形態・規模 棺は遺存していなかったが、土層断面観察の結果、箱形木棺であったことが確認できた。棺は墓域内のほぼ中央に納められており、南側で角礫が数点検出されたことから、棺側板を押さえるために礫が使用されていた可能性がある。棺の平面形は長方形であるが、斜面上側にあたる南側では、山側から押された土砂によりかなり崩れていた。

棺の規模は長さ1.74m、幅45cm、高さは54cmまで確認できた。棺の主軸方向は、仮に西頭位であった



第174図 木棺墓13 (SX-E13)



第175図 木棺墓13 (SX-E13) 土層断面

とすると、 $W17^{\circ} S$ 方向となる。棺内からは礫以外の遺物は出土しなかった。

木棺墓13 (S X - E 13) (第148・174・175図、カラー写真図版103、モノクロ写真図版50)

位置と検出状況 東地区内南西部のB 5号墳北側裾に位置し、標高148.2m前後の斜面に立地している。また、木棺墓13から北側は斜面の傾斜が急に変換している。

墳丘は存在せず、主軸は等高線と同方向となっている。

埋葬施設

墓壇形態・規模 墓壇の検出面における平面形は、短辺が丸くなった長方形で、長さ比べて幅が狭いため、細長い印象を受ける。また、短辺側では上部が緩傾斜となって落ち込んでおり、2段墓壇のようになっているが、上部が崩壊したためであると判断している。したがって、墓壇検出上面での長軸規模は3.3m、短軸幅は東側が幅広く1.32m、西端での幅は1.05mである。

墓壇底の平面形は墓壇検出面の形状とほぼ相似形であるが、斜面山側である南側の上端が高い位置にあるため、南側の法面幅が広がっている。墓壇底の規模は長さ2.6m、東部の幅81cm、西部の幅は66cmである。墓壇底は平坦ではほぼ水平であるが、西側底が東側に比べて約8cm高くなっている。

墓壇検出面から墓壇底までの高さは、斜面上側である南側で90cm、北側では60cmである。なお、墓壇内からは遺物は出土しなかった。

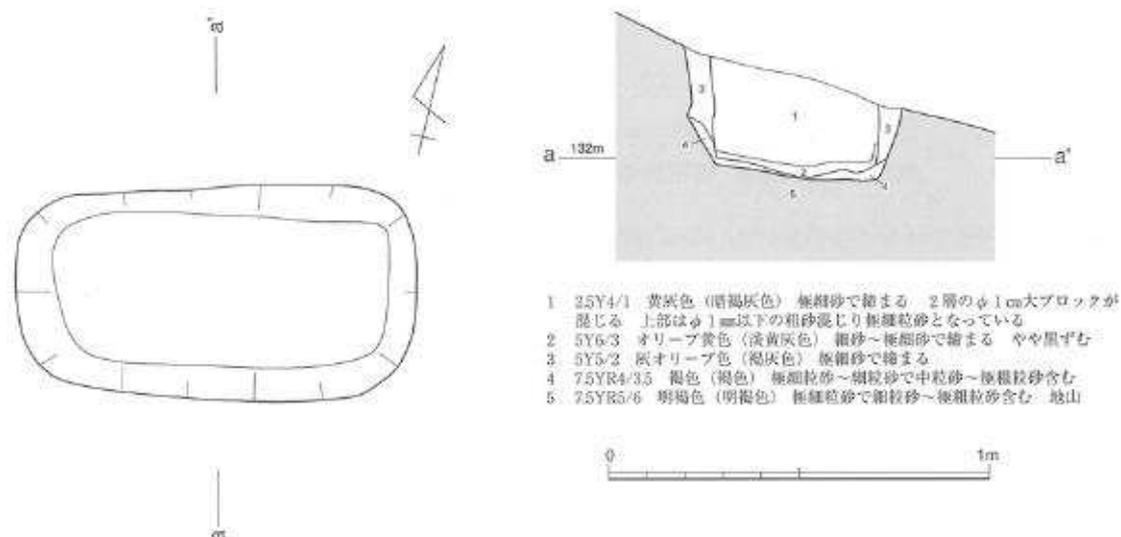
棺形態・規模 棺は腐朽して遺存していなかったが、土層断面観察の結果、箱形木棺であると判断される。棺は墓壇内の中央部に納められ、長さ2.4m、東端での幅54cm、西端での幅は42cmと東側が10cm以上広がっている。棺の高さは36cmまで確認できた。

棺内は、棺蓋の腐朽により舟底状に土砂が落ち込んでおり、棺の上面に近い高さで土師器の破片が検出された。これらの土器片は、墓壇上にあったものが落ち込んだと判断されよう。ただし、それがもとは完形品であったか破砕されていたかは不明である。

棺の東端から約50cm西側の棺底より少し上で、長さ15cm・20cm程度の自然角礫が2点検出された。その位置から、石枕であることは容易に判断できる。したがって、被葬者の頭位は東側であり、厳密には $E 5^{\circ} N$ 方向となる。

出土遺物 (第177図、モノクロ写真図版45)

土師器 130は棺上から出土した甕の口縁部片である。外上方にのびる口縁部は、端部を丸くおさめ、体部内面はヘラ削り調整である。古墳時代の所産と考えられるが、詳細な時期は不明である。口径13cm。



第176図 木棺墓10 (SX-E10)

木棺墓10 (SX-E10) (第148・176図、カラー写真図版104)

位置と検出状況 東地区北端に近い、標高132.2mの緩斜面に位置する。墳丘は認められない。他の小規模石棺墓群の北側に接して存在していることから、一連のものである可能性が高い。

埋葬施設

墓壇形態・規模 墓壇平面形は隅丸の長方形で、東西に長く、等高線と平行方向に主軸がある。長さ1.05m、幅58cmと小規模で、検出面からの深さは、斜面上側にあたる南側で31cm、北側では20cmである。

墓壇底は平坦であるが、北側にやや傾斜しており、垂直に近いあたりで掘削されている。

棺形態・規模 平面的に棺を検出することができなかったが、土層断面の観察により、木棺墓であることが判明した。木棺は墓壇いっばいに納められており、内法幅は42cmであり、長さも70cm程度であろう。きわめて小規模であることから、大人の遺体をそのまま埋葬するには不可能な大きさである。

墓壇内および棺内から遺物は出土しなかった。

SX-E12 (第148図、カラー写真図版105)

位置と検出状況 東地区北端の調査区壁際で検出された。標高は131.5m付近で、緩斜面である。墳丘は存在しない。

埋葬施設

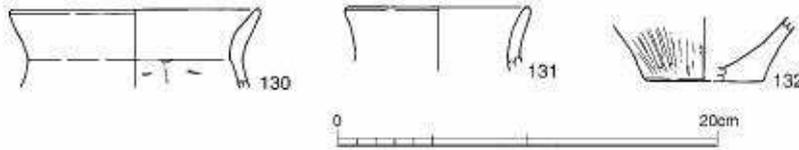
形態・規模 幅約40cm、長さ1.0mの楕円形の土壇で、底が丸いものの、形状から木棺墓の可能性があると判断したものである。木棺墓とすれば小規模なものとなる。

石棺墓

石棺墓2 (SX-E02) (第148・178図、カラー写真図版96・97・105、モノクロ写真図版51・52)

位置と検出状況 東地区北部の小石棺群中の、最も南側で最も高い位置に存在している。標高は138.3mである。石棺の斜面上側に区画溝を設けていることから、小規模ながら墳丘が存在していたと推定される。なお、石棺の主軸方向は等高線と同一方向である。

形態・規模 埋葬施設の南側斜面上に、弧状を描く区画溝を設けており、区画溝の北側上端と石棺の中



第177図 木棺墓・石棺墓等 出土土器

心との距離は約40cmで、墳丘があったとすれば、直径1m程度のものとなるであろう。ただし、溝の延長が1.65mであることから、推

定墳丘は正円形ではなく楕円形であった可能性がある。

外部施設 区画溝は、石棺墓の北側を巻くようなかたちで平面三日月形に近く、幅30cm、斜面上側からの深さ25cm、北側での深さは5cmで、横断面は「V」字形に近く、長さは1.8mである。埋土には黒褐色土が含まれていた。溝からの出土遺物はなかった。

埋葬施設

墓壇形態・規模 墓壇の平面形は、短辺が弧状を描く隅丸長方形を呈している。墓壇の最大長は1.1m、最大幅53cmで、山側検出面からの深さは56cm、斜面下側では36cmの深さである。

墓壇底は平面楕円形を呈し、長径70cm、短径35cmで、底面は北側に向かって下がっている。

この墓壇内の東寄りの位置に、箱式石棺が組まれていた。墓壇内からは遺物は出土しなかった。

棺形態・規模 箱式石棺は完存しており、垂角～垂円礫を使用し、棺蓋には25cm～33cmの石材を4～5石使用して、横架していた。その上には東側に限って長さ28cm・42cm、幅14cm・21cmの石を縦方向に使用して蓋石の上に載せている。

棺身には長さ18cm～38cm、幅9cm～20cmの板状の石材を横位に使用しており、長側壁は各2石、短側壁は各1石で構成されている。なお、西側の短側壁と長側壁および蓋石との間隙には粘土を充填していた。

石棺の内法は、長さ57cmと非常に短く、幅は東端で15cm、西端で14cmである。高さは東端で13cm、西端では9cmと東側が高くなるように構築されている。

棺底の東端には11cm前後の礫が2石置かれており、枕石と判断できることから、東側頭位であったことがわかる。また、棺底には敷土をして平坦・水平にしていた。

このような小規模な棺であるため、大人をそのまま入れることはできない。したがって、子供の埋葬用か、あるいは改葬墓の可能性はあるが、枕石の存在からすれば、子供用の墓とする方が自然であろう。

なお、SX-E02からは遺物は出土しなかった。

石棺墓3 (SX-E03) (第148・179・180図、カラー写真図版98・99・104、モノクロ写真図版52・53)

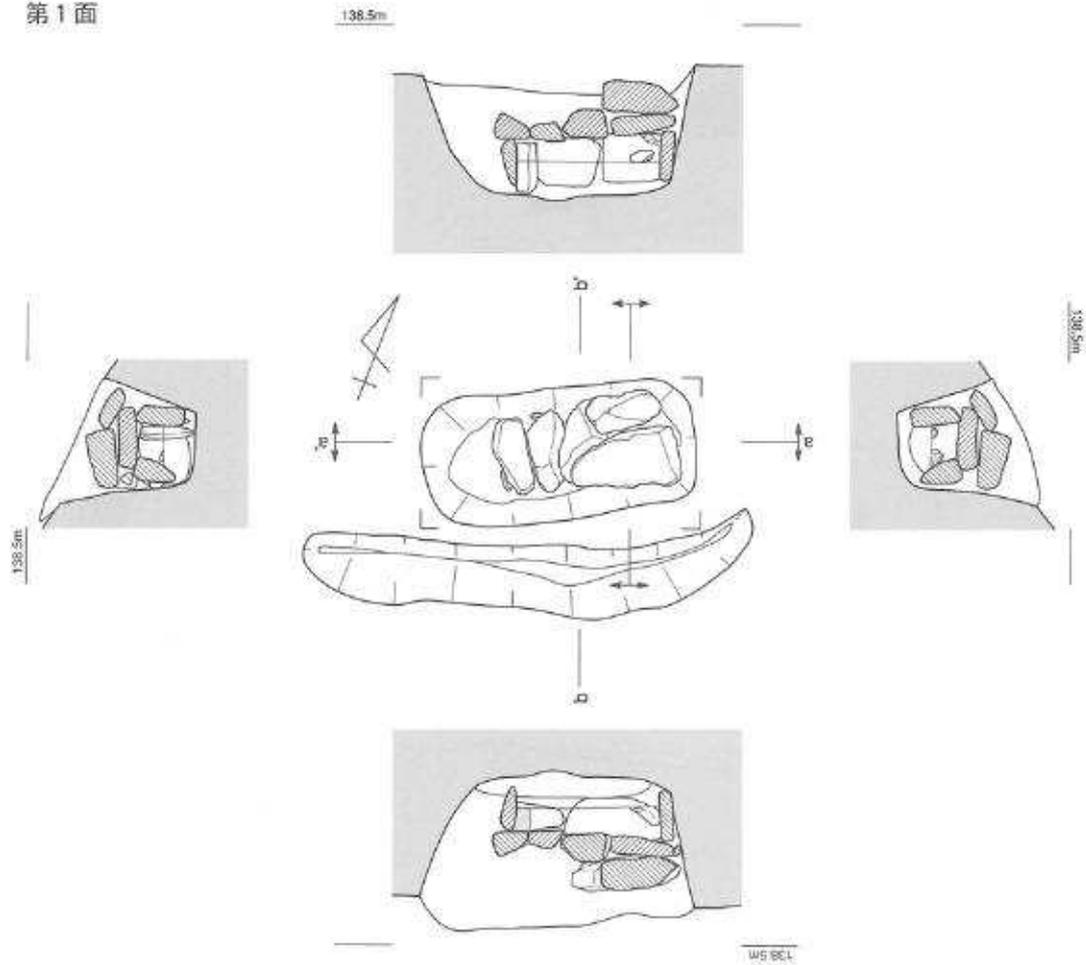
位置と検出状況 東地区北部の小石棺群中の、南側の中央部に位置しており、石棺墓2と石棺墓8の中間に存在している。標高は137.3mである。石棺の斜面上側に区画溝を設けていることから、小規模ながら墳丘が存在していたと推定される。なお、石棺の主軸方向は等高線と同一方向である。

形態・規模 埋葬施設の南側斜面上に、「[]」形の区画溝を設けており、区画溝の北側上端と石棺の中心との距離は約75cmで、墳丘があったとすれば、直径1m程度のものとなるであろう。ただし、溝で囲まれた東西方向の延長が2.1mであることから、推定墳丘は正円形ではなく楕円形であった可能性がある。

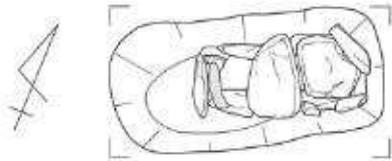
外部施設 石棺墓3の区画溝は、石棺墓の北側を巻くようなかたちで平面「[]」形を呈し、幅38cm、斜面上側からの深さ15cm、北側での深さは1cmで、横断面は「U」字形に近く、埋土は黒褐色土であった。

溝からの出土遺物はなかった。

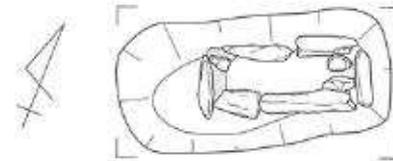
第1面



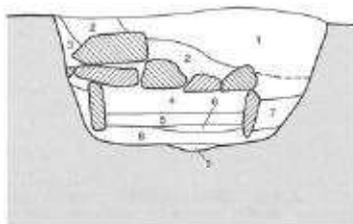
第2面



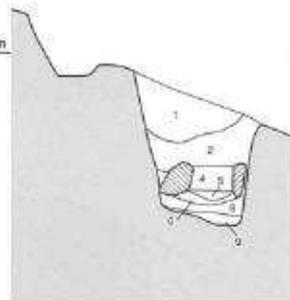
第3面



a 138.5m



b 138.5m

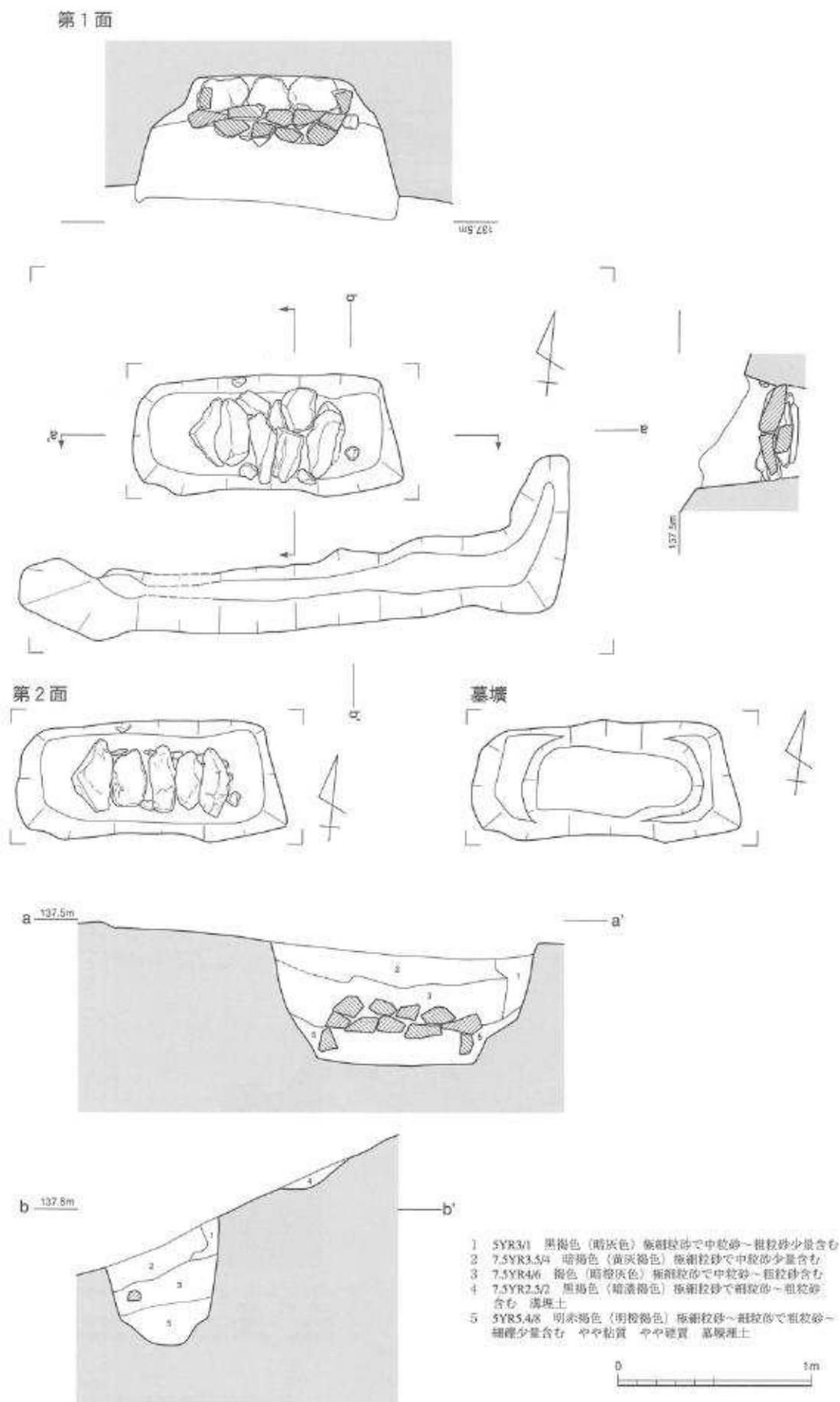


- 1 7.5YR3/2.4 黒褐色（暗黄褐色）粗粒シルト
— 極細粒砂で中粒砂—極粗粒砂含む
- 2 6YR3/1 黒褐色（暗灰褐色）粗粒シルト
— 極細粒砂で中粒砂—極粗粒砂含む 軟質
- 3 7.5YR4/6 褐色（暗橙褐色）極細粒砂で極粗粒砂—極粗粒砂含む 2層混じる
- 4 2.5Y4/1 黄灰色（淡黄灰色）細砂—極細砂で締まり悪い
- 5 2.5Y5/4 黄褐色（淡黄灰色）細砂—極細砂で粘質 締まり悪い 棺底敷土

- 6 2.5Y4/1 黄灰色（暗褐灰色）細砂—極細砂で締まる
- 7 6層と同色・同質
- 8 2.5Y6/6 明黄褐色（淡黄灰色）粗砂—極細砂で締まる 粘質
- 9 7.5YR4/1 褐灰色（暗褐灰色）細砂—極細砂で締まる 粘質

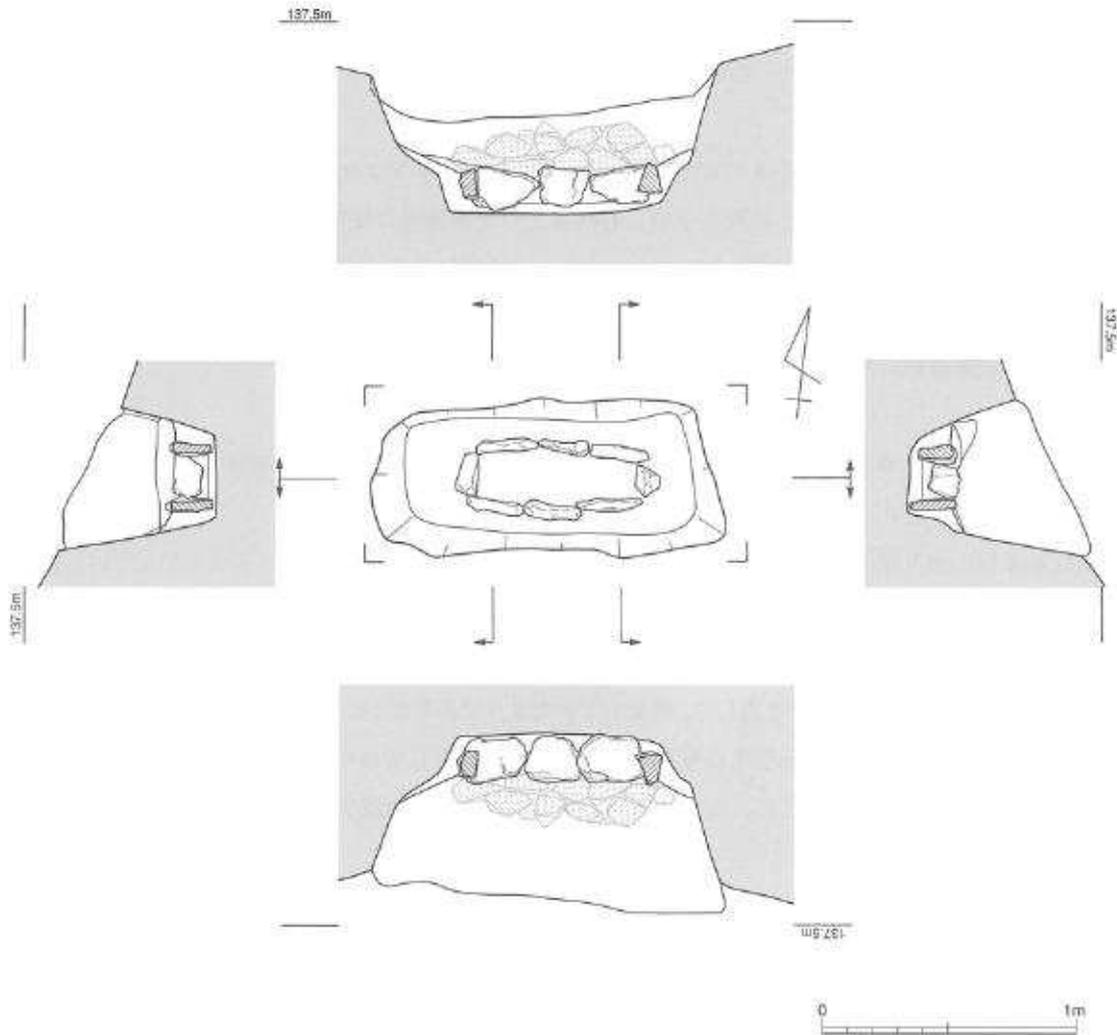


第178図 石棺墓2 (SX-E02)



第179図 石棺墓3 (SX-E03) (1)

第3面



第180図 石棺墓3 (SX-E03) (2)

埋葬施設

墓壙形態・規模 墓壙の平面形は、短辺が弧状を描く隅丸長方形を呈している。墓壙の最大長は1.4m、最大幅63cmで、山側検出面からの深さは66cm、斜面下側では41cmの深さである。

墓壙底は平面楕円形を呈し、長径93cm、短径42cmで、底面はほぼ水平で平坦に近い。

この墓壙内の中央に箱式石棺が組まれていた。墓壙内からは遺物は出土しなかった。

棺形態・規模 箱式石棺は完存しており、垂角～垂円礫を使用し、棺蓋は30cm～38cmの石材を5石横架していた。その上部には長さ23cm～38cm、幅9cm～18cmの石を横方向に重ねていた。なお、蓋石上面は、墓壙検出面から約25cm下の位置である。

棺身には長さ14cm～27cm、幅11cm～18cmの板状の石材を横位に使用しており、長側壁は各3石、短側壁は各1石で構成されている。なお、短側石は長側石に挟まれるように組まれている。

石棺の内法は、長さ64cmと非常に短く、幅は中央部がやや膨らんで21cm、東端で15cm、西端では18cmで、西側がやや広い。高さは東端で11cm、西端でも11cmと同じ高さである。

棺内西幅がやや広いことから、西側頭位であった可能性があるものの、不明である。また、棺底には敷土をして平坦・水平にしていた。

石棺墓3も小規模な棺であるため、大人をそのまま入れることはできない。したがって、子供の埋葬用か、あるいは改葬墓の可能性がある。しかし他の例からすれば、子供用の墓とする方が自然であろう。

なお、石棺墓3からは遺物は出土しなかった。

石棺墓4 (S X—E 04) (第148・181図、カラー写真図版100、モノクロ写真図版53)

位置と検出状況 東地区北部の小石棺群中の、石棺墓2の北側斜面に位置している。標高は137.0mである。石棺の斜面上側の区画溝は検出されなかったが、他の例により小規模ながら墳丘が存在していたと推定される。なお、石棺の主軸方向は等高線と同一方向である。

本石棺墓は北側壁面が流失しており、かなり崩壊していた。

埋葬施設

墓壇形態・規模 墓壇検出面での平面形は瓢形に近い楕円形を呈しており、墓壇の長径は1.1m、短径60cmで、山側検出面からの深さは約20cm、斜面下側では約5cmの深さである。

墓壇底も墓壇上面と相似形を呈し、長径96cm、短径50cmで、底面は北側に向かって下がっている。

この墓壇内の南寄りで箱式石棺の残骸が検出された。墓壇内からは遺物は出土しなかった。

棺形態・規模 箱式石棺は南側の長側壁がかろうじて残存しており、蓋石も落ち込んだ状態で2石検出された。石材は亜角～亜円礫を使用して、横架していたようであるが、その数などは不明となっている。

棺身には長さ25cm程度、幅20cm程度の板状の石材を縦位で使用しており、南側の長側壁は3石で構成されていたようである。このように、石棺墓4では南側長側壁以外は流失・落下しており、かなり崩壊していた。

石棺の内法は、短側石が遺存していないため不明であるが、南側長側壁の残存長は60cmであり、この数値は他の小規模石棺墓と近いことから、一つの目安となろう。

墓壇底は西側が高くなっているが、不確定な要素が多いことから、頭位推定の根拠とはならないであろう。

本石棺墓についても小規模な棺であることがほぼ確実であるため、他の小規模石棺墓と同様に、子供用の墓としておきたい。

なお、石棺墓4からは遺物は出土しなかった。

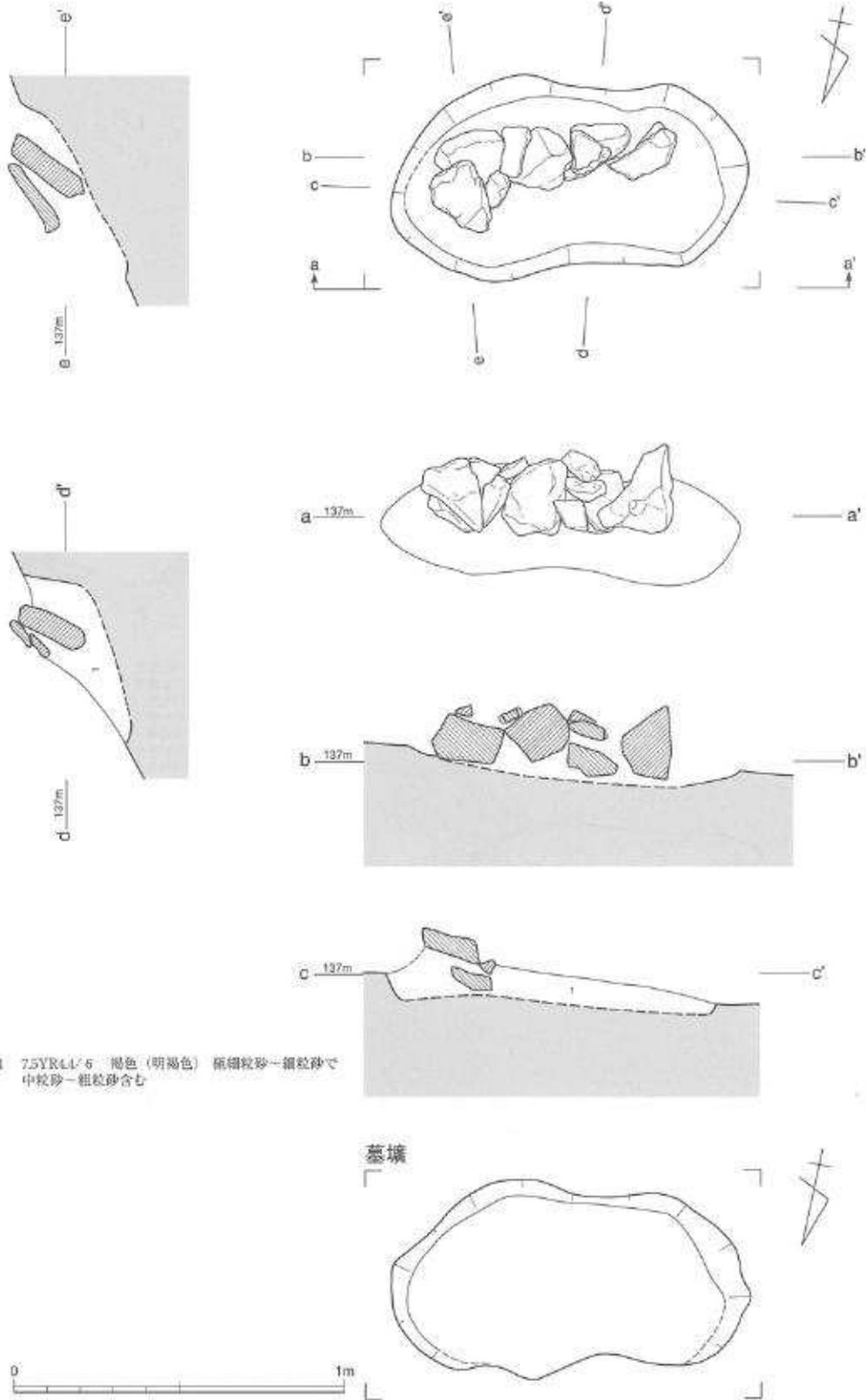
石棺墓5 (S X—E 05) (第148・182図、カラー写真図版101、モノクロ写真図版54)

位置と検出状況 東地区北部の小石棺群中の最も東に存在しており、標高は135.0mである。石棺の斜面上側には区画溝は残存していなかったが、石棺の崩壊状況から、区画溝が存在していた可能性があると思われる。したがって、小規模ながら墳丘が存在していたと推定される。なお、石棺の主軸方向は等高線と同一方向である。

埋葬施設

墓壇形態・規模 斜面下側である北側の墓壇上部が流失しているため、平面形は不確定であるが、短辺が弧状を描く隅丸長方形であった可能性が高い。残存墓壇の最大長は95cm、最大幅65cmで、山側検出面からの深さは50cm、斜面下側では15cmの深さである。

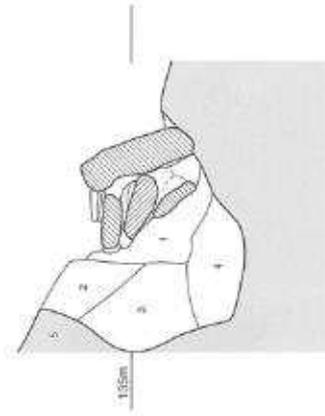
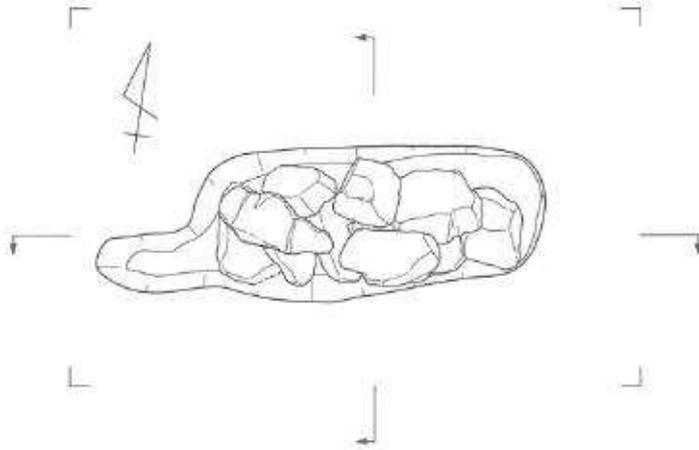
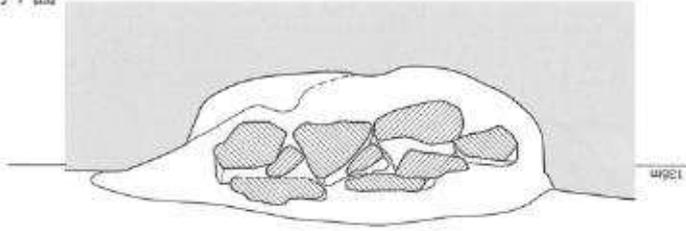
墓壇底は平面長方形を呈し、一部2段墓壇状になっている。長辺70cm、短辺25cmで、底面はほぼ水平で平坦である。



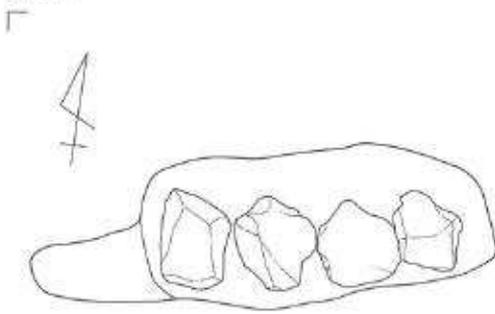
1 7.5YR4L/5 褐色（明褐色）極細粒砂～細粒砂で
中粒砂～粗粒砂含む

第181図 石棺墓4 (SX-E04)

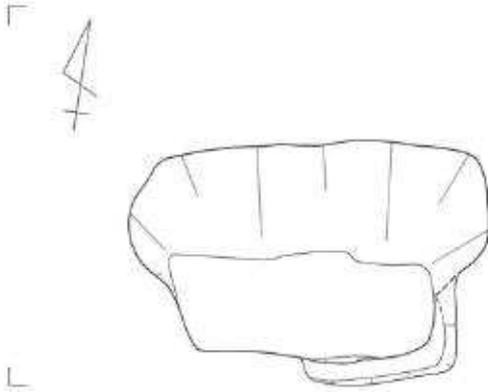
第1面



第2面



墓壇



- 1 7.5YR4/2.4 灰褐色（灰褐色）極細粒砂で細粒砂混じり。粗粒砂少量含む
- 2 7.5YR5/6 明褐色（明褐色）極細粒砂で中粒砂～細粒砂含む やや粘質
- 3 7.5YR5/6 明褐色（明黄褐色）極細粒砂～細粒砂で中粒砂～極細粒砂少量含む。粘質でやや硬質
- 4 7.5YR5/7 明褐色（明褐色）極細粒砂～細粒砂で中粒砂～極細粒砂含む
- 5 7.5YR5.6/8 橙色（橙褐色）極細粒砂で中粒砂～中粒砂含む 粘質で硬質 地山



第182図 石棺墓5 (SX-E05)

この墓壇内のほぼいっばいに箱式石棺が組まれていた。墓壇内からは遺物は出土しなかった。

棺形態・規模 石棺墓5の蓋石は完存していたが、棺身の南側壁および短側石は下から内側に滑り込むように倒れており、もとの形状は不明となっていた。また、北側側壁も上部が内側に倒れこんでいた。棺材は垂角～垂円礫を使用しており、棺蓋は長さ21cm～26cm、幅17cm～22cmの石材を4石使用して、横架していた。その上には長さ15cm～25cmの石を縦方向に使用して蓋石の上に載せていた。

棺身には長さ25cm前後、幅20cm前後の板状の石材を横位に使用していたが、壁面を構成していた石の数などは不明である。

石棺の内法も不明となっているが、蓋石の長さから、棺内の長さは80cm以下であったことが判断できる。

本石棺についても小規模であるため、子供用の墓としておきたい。

なお、石棺墓5からは遺物は出土しなかった。

石棺墓11 (SX-E11) (第148・183図、カラー写真図版102・104、モノクロ写真図版55・56)

位置と検出状況 東地区北部の小石棺群中の北東部に位置し、標高は132.5mである。石棺の斜面上側には区画溝が検出されなかったが、流失した可能性があり、小規模ながら墳丘が存在していた可能性もある。なお、石棺の主軸方向は等高線と同一方向である。

埋葬施設

墓壇形態・規模 墓壇の平面形は、短辺が弧状を描く隅丸長方形を呈している。墓壇の最大長は77cm、最大幅53cmで、山側検出面からの深さは30cm、斜面下側では12cmの深さである。

墓壇底は墓壇検出面と相似形を呈し、長さ約55cm、幅約30cmで、底面は平坦でほぼ水平である。

この墓壇内の中央やや南東寄りの位置に箱式石棺が組まれていた。墓壇内からは遺物は出土しなかった。

棺形態・規模 箱式石棺は完存しており、垂角～垂円礫を使用し、棺蓋は長さ20cm～25cm、幅10cm～20cmの石材を4石使用しており、3石は横架していた。その上には西端に限って長さ20cm、幅12cmの石を蓋石の上に載せていた。なお、東端の蓋石1石は、蓋石と側壁に載っており、棺身とは隙間が生じていた。

棺身には長さ15cm～37cm、幅10cm～20cmの板状の石材を横位に使用しているが、北西端の1石のみ縦位に立てられていた。長側壁は各2石、短側壁は各1石で構成されている。なお、短側石は長側壁の間に挟みこむ位置に立てられていた。

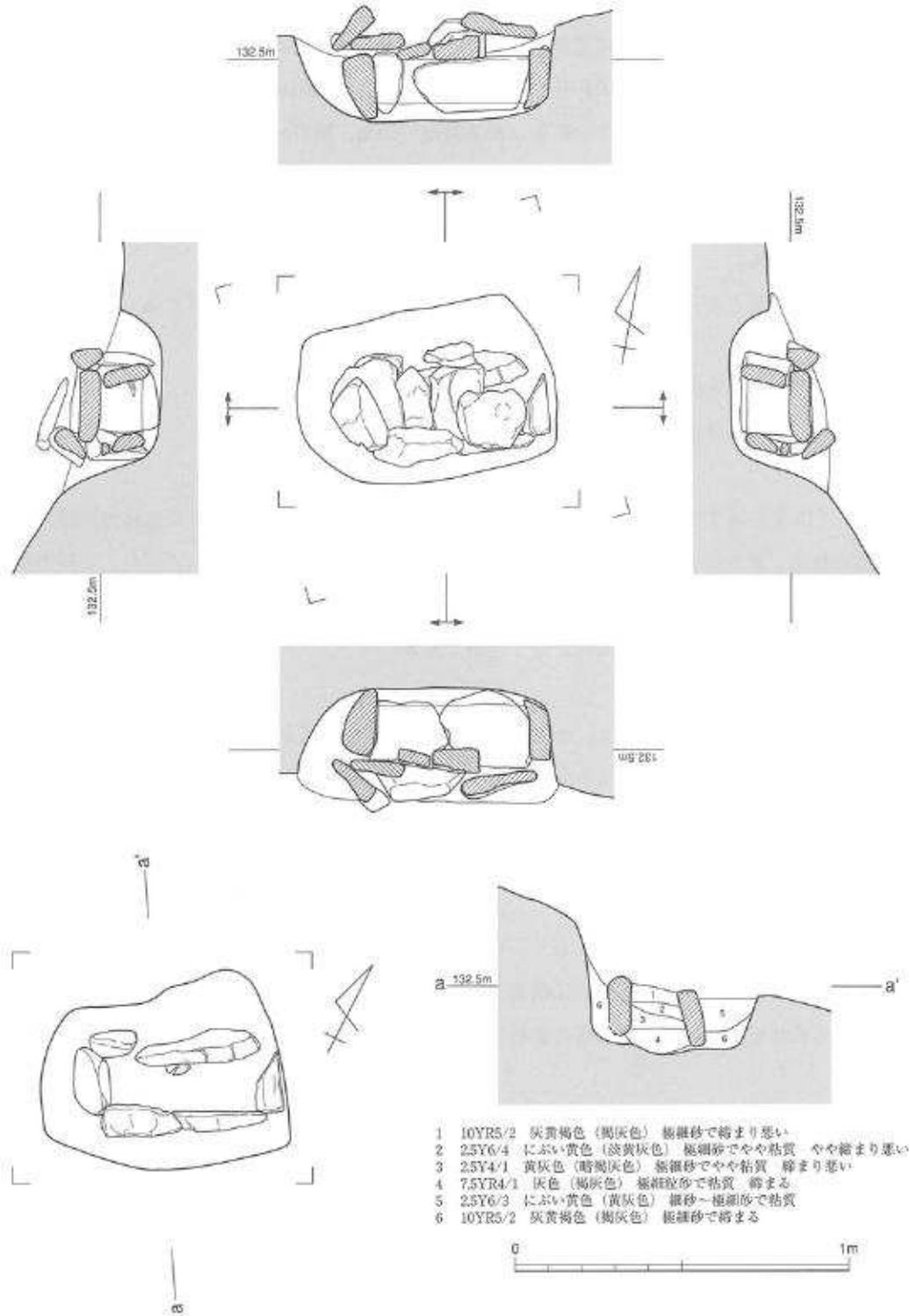
石棺の内法は長さ45cmと非常に短く、幅は東端で18cm、西端で14cmであり、東側がやや広い。高さは東端で20cm、西端では16cmと東側が高くなるように構築されている。したがって、石棺墓11の埋葬頭位は東側であった可能性がある。なお、棺底には敷土をして平坦・水平にしていた。

棺内底に接して土師器の破片が出土している。出土位置は北側壁に沿った中央部分である。この土器の性格は不明であるが、破碎土器供献の可能性もある。

このような小規模な棺であるため、大人をそのまま入れることはできない。したがって、本石棺墓についても子供用の墓とする方が自然であろう。

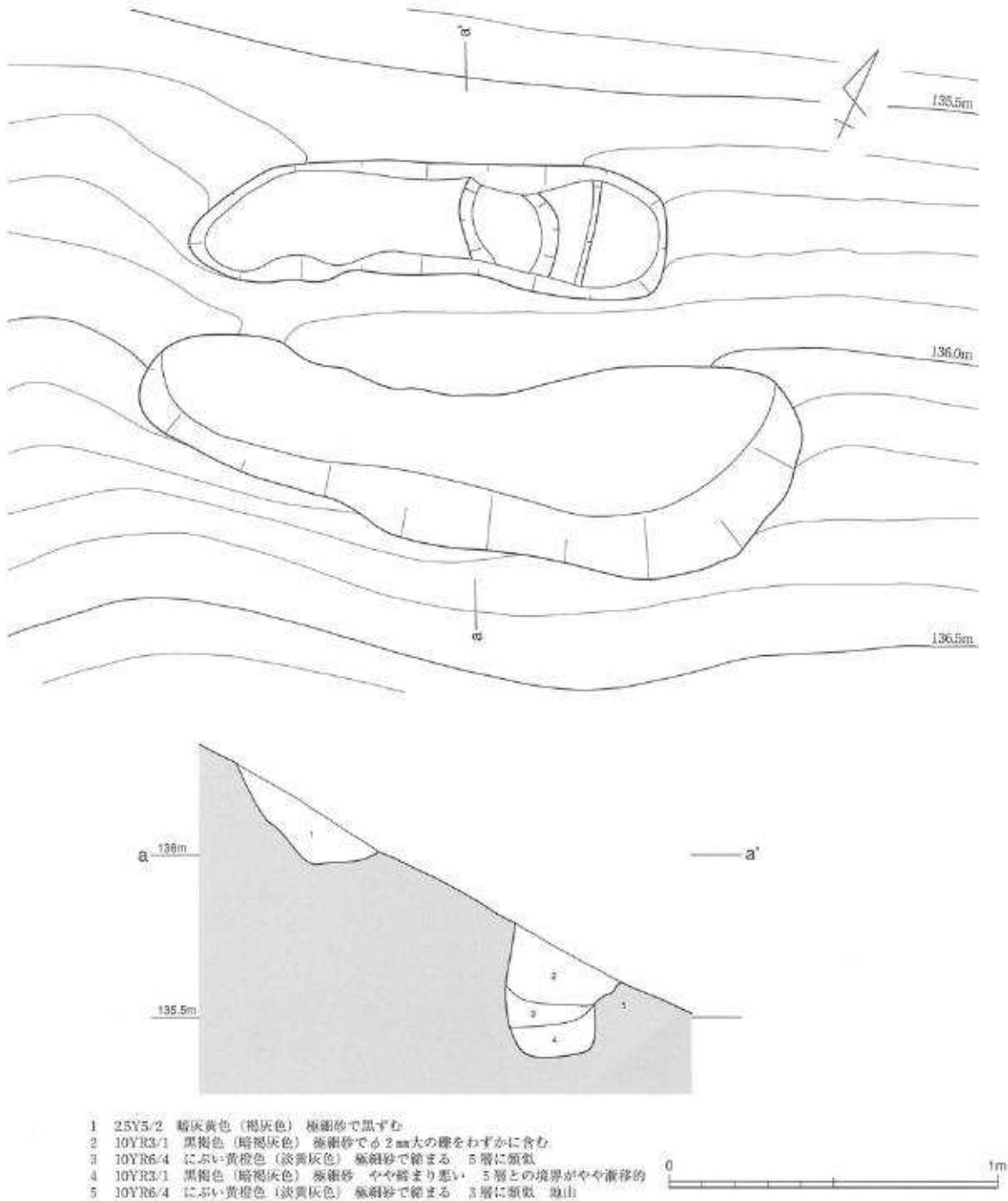
出土遺物 (第177図、モノクロ写真図版45)

土師器 131は棺内から出土した壺口縁部片である。口径は9.5cmで、約1/6の破片である。口縁部は



第183図 石棺墓11 (SX-E11)

やや外反し、端部は丸くおさめる。時期的には不明な部分が多いが、弥生時代後期後半~古墳時代中期の可能性が高く、B 1号墳~B 3号墳と時期的に重なりそうである。

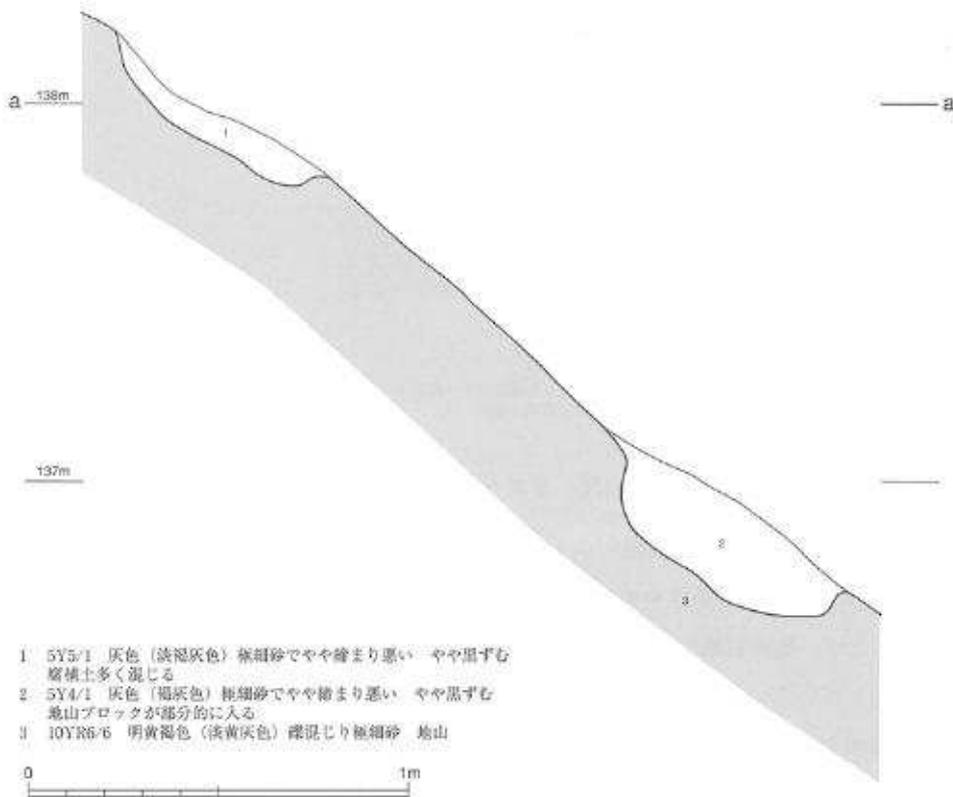
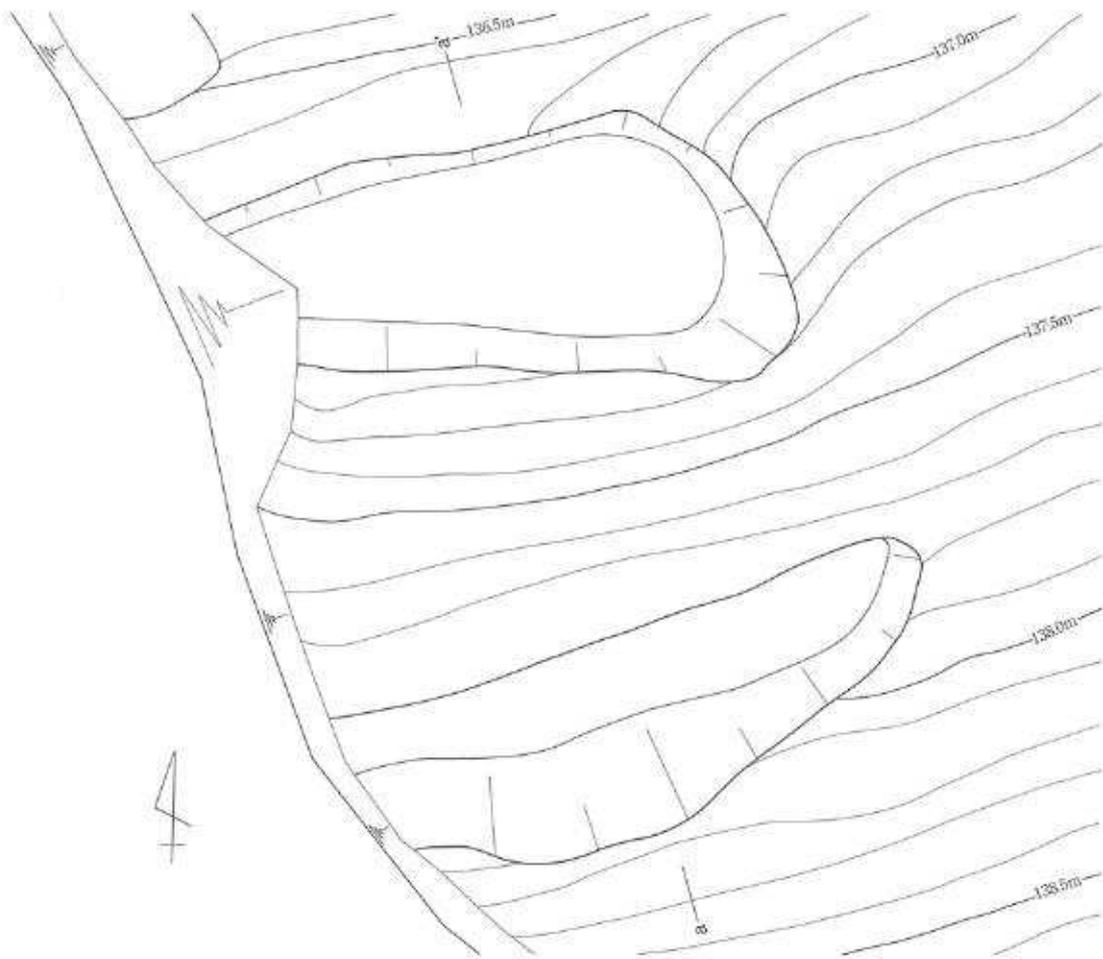


第184図 SX-E07

SX-E07（第148・184図、カラー写真図版104）

位置と検出状況 東地区北部の小石棺群中の東寄りの位置で、標高135.8mのところにある。石棺は検出されなかったが、他の石棺墓の墓壇および区画溝の関係と同様の状況を示していたことから、石棺墓であったと推定している。また、区画溝の存在から、小規模ながら墳丘が存在していたことも推定されよう。なお、墓壇と思われる土壇の主軸方向は等高線と同一方向である。

形態・規模 埋葬施設と思われる墓壇の南側斜面上に、弧状を描くように区画溝に近い段状の遺構が存在しており、区画溝の痕跡と判断している。区画溝の北側端と墓壇と思われる土壇の中心との距離は約

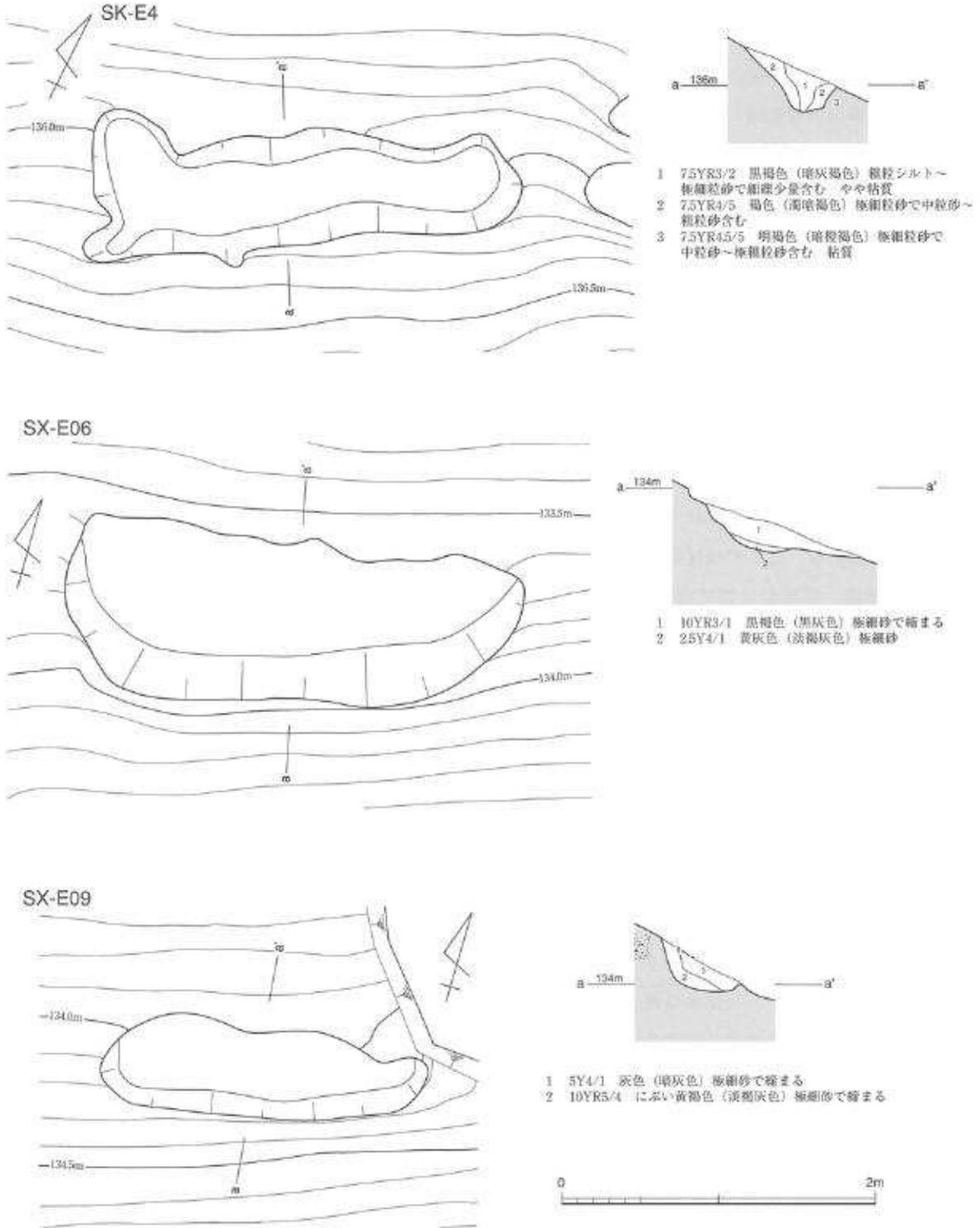


- 1 5Y5/1 灰色 (淡褐色) 極細砂でやや締め悪い やや黒ずむ
腐植土多く混じる
- 2 5Y4/1 灰色 (褐灰色) 極細砂でやや締め悪い やや黒ずむ
地山ブロックが部分的に入る
- 3 10YR6/6 明黄褐色 (淡黄灰色) 礫混じり極細砂 地山

第185図 S X - E 08

55cmで、墳丘があったとすれば、直径1m程度のもとなるであろう。ただし、区画溝の延長が約1.8mであることから、推定墳丘は正円形ではなく楕円形であった可能性がある。

外部施設 区画溝の南肩は、石棺墓の北側を巻くようなかたちで平面「U」形に近く、幅60cm、斜面上側からの深さ30cm、北側での深さは5cmで、横断面は「U」字形に近く、長さは2.0mである。埋土には淡い黒褐色土が含まれていた。溝からの出土遺物はなかった。



第186図 SK-E4・SX-E06・SX-E09

墓壇形態・規模 墓壇の平面形は、長い溝状を呈しているが、墓壇の最大長は1.44m、最大幅40cmで、検出面からの深さは40cmである。なお、S X - E07からは遺物は出土しなかった。

S X - E08 (第148・185図、カラー写真図版104)

位置と検出状況 東地区北部の小石棺群中の西端位置で、標高137.0mのところ存在している。石棺は検出されなかったが、他の石棺墓の墓壇および区画溝の関係と同様の状況を示していたことから、石棺墓であったと推定している。また、区画溝の存在から、小規模ながら墳丘が存在していたことも推定されよう。なお、墓壇と思われる土壌の主軸方向は等高線と同一方向である。

形態・規模 埋葬施設と思われる土壌の南側斜面上に、弧状を描くように区画溝に近い段状の遺構が存在している。区画溝の北側端と土壌の中心との距離は約1.1mで、墳丘があったとすれば、直径2m程度のものであるであろう。また、区画溝の延長も2m程度と推定される。

外部施設 区画溝は幅50cm、斜面上側からの深さ40cmで、横断面は「U」字形と思われる。埋土には淡い黒褐色土が含まれていた。溝からの出土遺物はなかった。

墓壇形態・規模 墓壇と思われる土壌の平面形は、歪な楕円形を呈しているが、土壌の残存最大長は1.6m、最大幅70cmで、検出面からの深さは40cmである。なお、S X - E08から遺物は出土していない。

S K - E 4 (第148・186図、カラー写真図版105)

位置と検出状況 東地区北部の小石棺群の中央付近、S X - E07の西隣で、標高136.0mの位置に存在している。土壌状の平面形状であるが、石棺墓に伴う区画溝の可能性があり、石棺墓は流失してしまった可能性もある。ここでは区画溝としておきたい。

形態・規模 平面形は歪で直線的な溝状を呈している。長さ2.7m、幅80cm、深さは40cmで、断面は「V」字形に近い。遺物は出土しなかった。

S X - E06 (第148・186図、カラー写真図版104)

位置と検出状況 東地区北部の小石棺群の中央北寄り、標高133.8mの位置に存在している。石棺墓に伴う区画溝の可能性があり、石棺墓は流失してしまった可能性もある。ここでは区画溝としておきたい。

形態・規模 平面形は半月状で浅い溝状を呈している。長さ2.9m、幅1m、深さ40cmである。

S X - E09 (第148・186図)

位置と検出状況 東地区北部の小石棺群の東端付近で、標高134.0mに存在している。石棺墓に伴う区画溝の可能性があり、石棺墓は流失してしまった可能性もある。ここでは区画溝としておきたい。

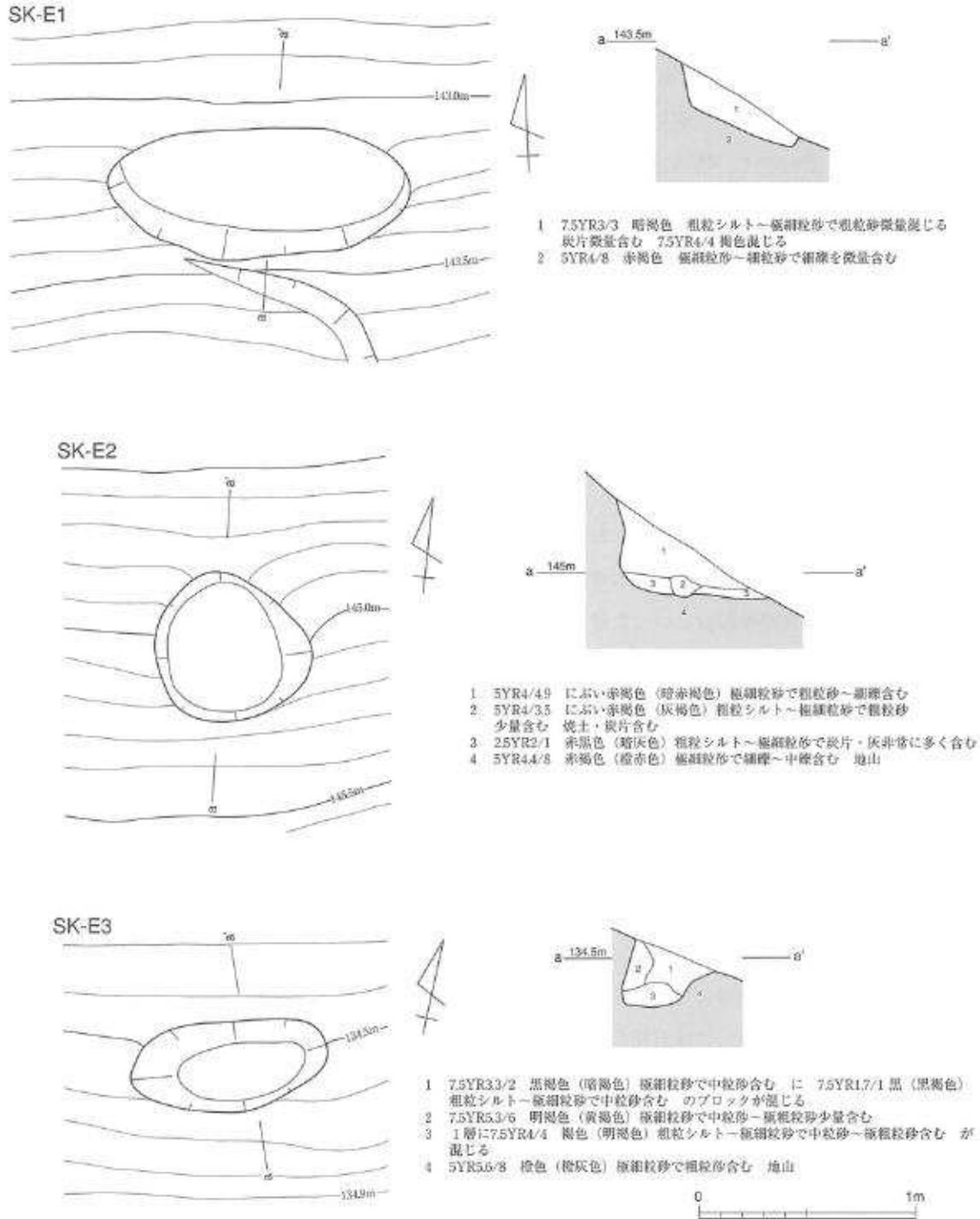
形態・規模 平面形は半月状で浅い溝状を呈している。長さ2.1m、幅60cm、深さ30cmである。

3. その他

S K - E 1 (第148・187図、カラー写真図版104)

位置と検出状況 B 3号墳の西側裾部に位置する。標高は143.2mの位置に存在している。

形態・規模 平面楕円形で浅い。溝状を呈している。長さ1.3m、幅60cm、深さ15cmである。



第187図 土壌1～3 (SK-E1～3)

SK-E2 (第148・187図、カラー写真図版105)

位置と検出状況 B5号墳の北側斜面に位置する。標高は145.0mである。

形態・規模 径70cmの円形で深さは45cmである。底は平坦で、底付近には炭・灰が多く堆積していた。

SK-E3 (第148・187図、カラー写真図版105)

位置と検出状況 東地区北部の小石棺群の西寄り中央部で検出した楕円形の土壌である。

4. 小結

東地区で調査した遺構には古墳6基、木棺墓4基、石棺墓5基、石棺墓と推定されるもの2基のほか、石棺墓の可能性のあるもの3基などがある。それらの時期は弥生時代後期～古墳時代中期後半におさまるものと思われる。以下、検出した遺構の種類別に東地区のまとめを行なう。

古墳

調査した古墳6基のうち、埋葬施設が存在する平坦面を調査したのはB1号墳～B3号墳の3基であり、B4号墳～B6号墳については墳丘の一部を調査したにすぎない。

B1号墳～B3号墳の築造時期は、B1号墳が弥生時代末～古墳時代初頭、B3号墳は古墳時代中期後半にそれぞれ築造され、B2号墳は古墳時代前期と推定される。これら3基の築造時期は斜面下側から順に築造されているものの、ほぼ同時期に連続と築造されたものではない点に注意される。また、B1号墳が築造された時期は、西地区においてA6号墳～A8号墳、A13号墳～A15号墳が築造されている時期と重なる。

さて、B1号墳の埋葬施設で認められた墓室内破碎土器供献と墓室上土器供献について、その両者が併存して行なわれる場合、破碎され墓室内に埋納された土器の器種は煤付きの甕にはば限られ、墓室上に置かれた土器は高杯や器台といった器種が基本となっている。若水B1号墳主体部の墓室内土器は壺形土器であったが、体部外面に煤が付着していたことから、甕としての機能が与えられていたと判断される。また、墓室内・墓室上の両者を併せて行なっている例は、弥生時代後期後葉の早い段階までは墳丘墓の周辺埋葬に限られていたが、弥生後期後葉の後半以降は墳丘墓の中心主体に採用されるようになり、弥生後期末～古墳時代初頭頃には墓室内破碎土器供献が行なわれなくなると、墓室上土器供献に限られてゆくといった図式が描けるものと思われる。

木棺墓および小規模墳墓

東地区において古墳以外に検出された遺構として、木棺墓および小規模な墳丘を有すると判断される石棺墓などがある。

木棺墓のうち、尾根稜線に近い部分に存在していた木棺墓2基は、大人が充分入る規模を有し、そのうちの1基(SX-E13)には石枕が設置されていた。本遺跡では石枕が設置された石棺は古墳時代中期後半にはば限られることから、その時期の所産と思われ、土器片の時期とも齟齬はない。また、B5号墳・B6号墳に伴う埋葬の可能性も高くなる。

一方、東地区内の斜面下部で検出された木棺墓および石棺墓群のうち、規模が確定しているものはすべて長さ70cm以下であり、大人をそのまま埋葬することは不可能であることなどから、子供の埋葬施設と判断される。東地区で検出された小規模木棺墓は2基、小規模石棺墓のうち確実なものが5基、石棺墓と推定されるものが2基、石棺墓の可能性のあるものが3基であり、すべてを合わせると12基にものぼる。これらは調査区内では18m×13mの範囲におさまり、子供用墓地であったと言っても過言ではあるまい。また、石棺墓は山側を削って溝を造出しており、墳丘を際立たせるために小規模ながら盛土もされていたと推定している。これらの石棺墓からは時期を明確にできる遺物は出土していないが、SX-E11のように、石枕が設置されていた例が存在していることから、古墳時代中期後半の可能性が高い。そうすると、西地区のA13号墳・A14号墳の南斜面に存在した石棺墓・木棺墓と同時期となり、大人用の墓地と子供用の墓地が区別されていた可能性も指摘できよう。なお、B3号墳とはほぼ同時期であろう。

第3章 自然科学分析結果

第1節 放射性炭素年代測定（AMS測定）

株式会社 加速器分析研究所

（1）遺跡の位置

若水古墳（A11号墳）は、兵庫県朝来市山東町栗鹿（35° 18′ 10″、134° 53′ 52″）に位置する。古墳群は、栗鹿川南側の山塊から、平野に向かって北西に延びた尾根上に立地する。

（2）測定の意義

古墳の年代を特定する。

（3）測定対象試料

測定対象となる試料は、若水古墳（A11号墳）から出土した内行花文鏡の上面に付着した有機質（1：IAAA-62749）、19層中の木炭（2：IAAA-62750）、合計2点である。

（4）化学処理工程

- 1) メス・ピンセットを使い、根・土等の表面的な不純物を取り除く。
- 2) AAA (Acid Alkali Acid) 処理。酸処理、アルカリ処理、酸処理により内面的な不純物を取り除く。最初の酸処理では1Nの塩酸（80℃）を用いて数時間処理する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。アルカリ処理では0.001~1Nの水酸化ナトリウム水溶液（80℃）を用いて数時間処理する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。最後の酸処理では1Nの塩酸（80℃）を用いて数時間処理した後、超純水で中性になるまで希釈し、90℃で乾燥する。希釈の際には、遠心分離機を使用する。
- 3) 試料を酸化銅1gと共に石英管に詰め、真空下で封じ切り、500℃で30分、850℃で2時間加熱する。
- 4) 液体窒素とエタノール・ドライアイスの温度差を利用し、真空ラインで二酸化炭素（CO₂）を精製する。
- 5) 精製した二酸化炭素から鉄を触媒として炭素のみを抽出（水素で還元）し、グラファイトを作製する。
- 6) グラファイトを内径1mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、加速器に装着し測定する。

（5）測定方法

測定機器は、3MV タンデム加速器をベースとした¹⁴C-AMS専用装置（NEC Pelletron 9SDH-2）を使用する。134個の試料が装填できる。測定では、米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOxII）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。また、加速器により¹⁴C/¹³Cの測定も同時に行う。

（6）算出方法

- 1) 年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用した。
- 2) BP年代値は、過去において大気中の炭素14濃度が一定であったと仮定して測定された、1950年を基準年として遡る放射性炭素年代である。
- 3) 付記した誤差は、次のように算出した。

複数回の測定値について、 χ^2 検定を行い測定値が1つの母集団とみなせる場合には測定値の統計誤差から求めた値を用い、みなせない場合には標準誤差を用いる。

- 4) $\delta^{13}\text{C}$ の値は、通常は質量分析計を用いて測定するが、AMS 測定の場合に同時に測定される $\delta^{13}\text{C}$ の値を用いることもある。

$\delta^{13}\text{C}$ 補正をしない場合の同位体比および年代値も参考に掲載する。

同位体比は、いずれも基準値からのずれを千分偏差 (‰; パーミル) で表した。

$$\delta^{13}\text{C} = [({}^{13}\text{A}_s - {}^{13}\text{A}_t) / {}^{13}\text{A}_t] \times 1000 \quad (1)$$

$$\delta^{13}\text{C} = [({}^{13}\text{A}_s - {}^{13}\text{A}_{\text{ref}}) / {}^{13}\text{A}_{\text{ref}}] \times 1000 \quad (2)$$

ここで、 ${}^{13}\text{A}_s$: 試料炭素の ^{13}C 濃度: ($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$)、または($^{13}\text{C}/^{13}\text{C}$)。

${}^{13}\text{A}_t$: 標準現代炭素の ^{13}C 濃度: ($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$)、または($^{13}\text{C}/^{13}\text{C}$)。

$\delta^{13}\text{C}$ は、質量分析計を用いて試料炭素の ^{13}C 濃度 (${}^{13}\text{A}_s = {}^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$) を測定し、PDB (白亜紀のペレムナイト (矢石) 類の化石) の値を基準として、それからのずれを計算した。但し、加速器により測定中に同時に $^{12}\text{C}/^{13}\text{C}$ を測定し、標準試料の測定値との比較から算出した $\delta^{13}\text{C}$ を用いることもある。この場合には表中に〔加速器〕と注記する。

また、 $\Delta^{13}\text{C}$ は、試料炭素が $\delta^{13}\text{C} = -25.0$ (‰) であるとしたときの ^{13}C 濃度 (${}^{13}\text{AN}$) に換算した上で計算した値である。(1) 式の ^{13}C 濃度を、 $\delta^{13}\text{C}$ の測定値をもとに次式のように換算する。

$${}^{13}\text{A}_s = {}^{13}\text{A}_t \times (0.975 / (1 + \delta^{13}\text{C} / 1000))^2 \quad ({}^{13}\text{A}_s \text{として} {}^{12}\text{C}/^{13}\text{C} \text{を使用するとき})$$

または

$$= {}^{13}\text{A}_s \times (0.975 / (1 + \delta^{13}\text{C} / 1000)) \quad ({}^{13}\text{A}_s \text{として} {}^{13}\text{C}/^{13}\text{C} \text{を使用するとき})$$

$$\Delta^{13}\text{C} = [({}^{13}\text{A}_s - {}^{13}\text{A}_t) / {}^{13}\text{A}_t] \times 1000 \quad (\text{‰})$$

貝殻などの海洋が炭素起源となっている試料については、海洋中の放射性炭素濃度が大気中の炭酸ガス中の濃度と異なるため、同位体補正のみを行った年代値は実際の年代との差が大きくなる。多くの場合、同位体補正をしない ^{13}C に相当するBP年代値が比較的良好その貝と同一時代のものと考えられる木片や木炭などの年代値と一致する。

^{13}C 濃度の現代炭素に対する割合のもう一つの表記として、pMC (percent Modern Carbon) がよく使われており、 $\Delta^{13}\text{C}$ との関係は次のようになる。

$$\Delta^{13}\text{C} = (\text{pMC} / 100 - 1) \times 1000 \quad (\text{‰})$$

$$\text{pMC} = \Delta^{13}\text{C} / 10 + 100 \quad (\%)$$

国際的な取り決めにより、この $\Delta^{13}\text{C}$ あるいはpMCにより、放射性炭素年代 (Conventional Radiocarbon Age; yrBP) が次のように計算される。

$$T = -8033 \times \ln [(\Delta^{13}\text{C} / 1000) + 1]$$

$$= -8033 \times \ln (\text{pMC} / 100)$$

- 5) ^{14}C 年代値と誤差は、1桁目を四捨五入して10年単位で表示される。
- 6) 校正暦年代の計算では、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV4.4.2 (Copyright 1986-2002 M. Stuiver and P. J. Reimer) を使用した。

(7) 測定結果

若水古墳から出土した内行花文鏡の上面に付着した有機質 (1: IAAA-62749) が $2530 \pm 30\text{yrB}$ 、19層中の木炭 (2: IAAA-62750) が $1610 \pm 30\text{yrBP}$ の ^{14}C 年代である。暦年校正年代 ($1\sigma = 68.3\%$) では、若水

古墳鏡上面付着有機質試料が791BC～555BCであり、縄文時代晩期後葉の年代に相当する。19層出土試料が413AD～529ADであり、古墳時代中期に相当する。若水古墳鏡上面付着試料の年代は、古墳や内行花文鏡から予想される年代よりも明らかに古い年代であり、測定された有機質が何に由来するものであるのかを明らかにする必要がある。

参考文献

Stuiver, M. and Polash, H. A. (1977) Discussion: Reporting of ^{14}C data. Radiocarbon, 19:355-363
 Reimer et al. (2004) IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0-26cal kyr BP. Radiocarbon 46, 1029-1058
 Stuiver, M., and Reimer, P. J., 1993. Extended ^{14}C database and revised CALIB radiocarbon calibration program. Radiocarbon 35:215-230

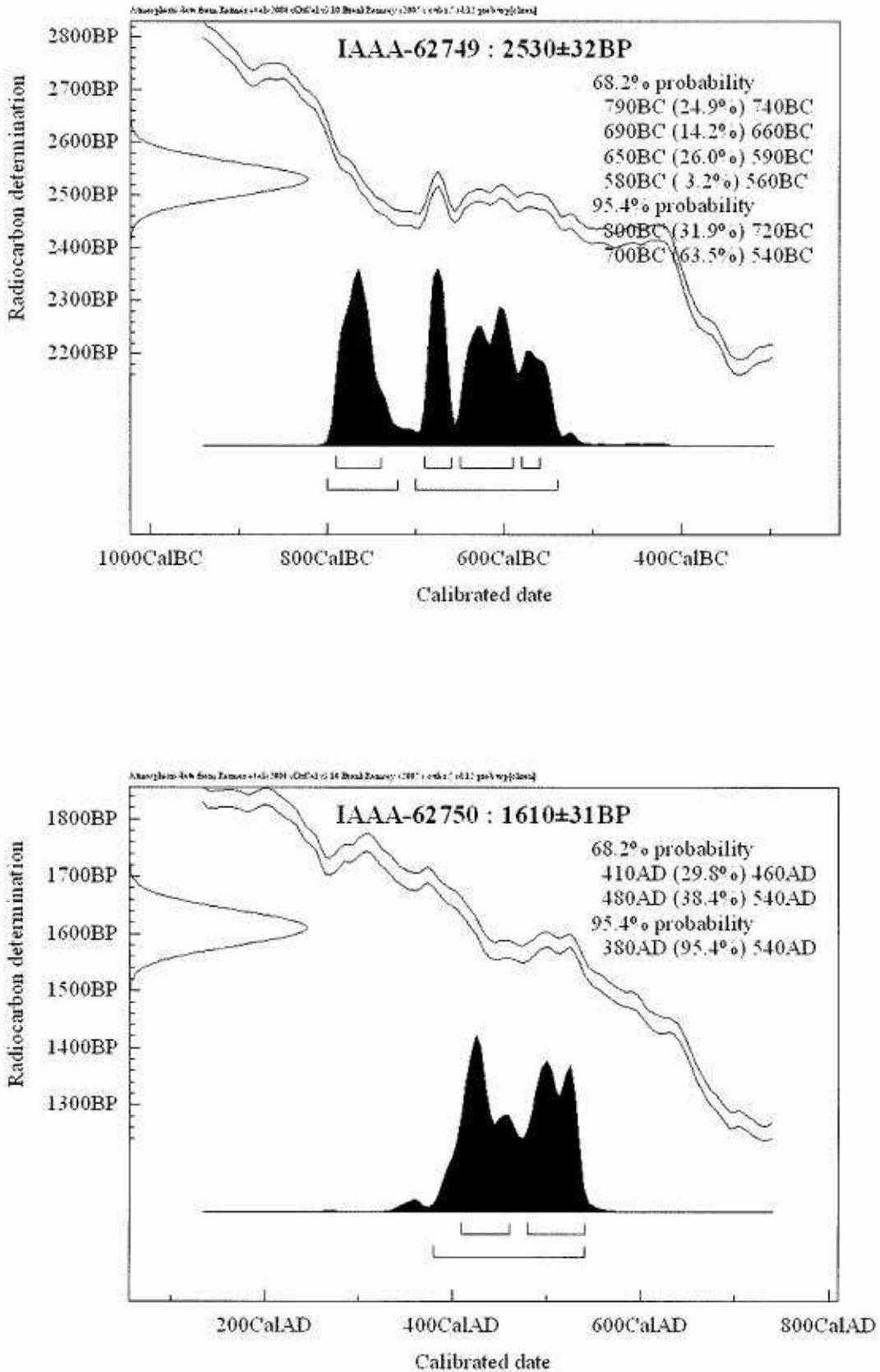
IAA Code No.	試料	BP年代および炭素の同位体比
IAAA-62749 #1655-1	試料採取場所：朝来市山東町粟鹿 若水古墳(A11号墳) 試料形態：有機質 試料名(番号)：1	Libby Age (yrBP) : 2,530 ± 30 $\delta^{13}\text{C}$ (‰)、(加速器) = -24.66 ± 0.57 $\Delta^{14}\text{C}$ (‰) = -270.2 ± 3.0 pMC (%) = 72.98 ± 0.30
	(参考) $\delta^{13}\text{C}$ の補正無し	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) = -269.7 ± 2.8 pMC (%) = 73.03 ± 0.28 Age (yrBP) : 2,520 ± 30
IAAA-62750 #1655-2	試料採取場所：朝来市山東町粟鹿 若水古墳(A11号墳)19層 試料形態：木炭 試料名(番号)：2	Libby Age (yrBP) : 1,610 ± 30 $\delta^{13}\text{C}$ (‰)、(加速器) = -28.68 ± 0.58 $\Delta^{14}\text{C}$ (‰) = -181.6 ± 3.3 pMC (%) = 81.84 ± 0.33
	(参考) $\delta^{13}\text{C}$ の補正無し	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) = -187.8 ± 3.1 pMC (%) = 81.22 ± 0.31 Age (yrBP) : 1,670 ± 30

第2表 放射性炭素年代測定結果

IAA Code No.	試料番号	Libby Age (yrBP)
IAAA-62749	1	2530 ± 32
IAAA-62750	2	1610 ± 31

ここに記載する Libby Age (年代値) と誤差は下1桁を丸めない値

第3表 参考資料：暦年較正用年代



第188圖 曆年較正結果

第2節 ガラス玉の蛍光X線分析

株式会社 パレオ・ラボ（竹原弘展）

1. はじめに

若水古墳より出土したガラス玉について、蛍光X線分析による元素分析を行い、材質の検討を行った。

2. 遺物と分析方法

分析対象遺物は、若水古墳（A11号墳）より出土したガラス小玉1点である（第4表）。時期は、若水古

分析No	遺跡	出土遺構	寸法 直径×厚(mm)	色調	備考
No1	若水古墳(A11号)	第2主体部	φ3×2.5	青緑色	水洗で出土

第4表 分析対象ガラス玉一覧

墳は第1主体部より弥生時代末から古墳時代初頭とされる飛禽鏡が出土しており、そこから大きく時間の隔たりのない時期の築造と見られている。

分析装置は特撮場製作所製 XGT-5000Type II を使用した。装置の仕様は、X線管が最大50kV・1mA の Rh ターゲット、X線ビーム径が100 μ m または10 μ m、検出器は高純度 Si 検出器(Xerophy)で、試料室の大きさは350×400×40mm である。検出可能元素はNa~U であるが、Na、Mg といった軽元素は蛍光X線分析装置の性質上検出感度が悪いので、試料中に少量含む程度ではピークを検出し難く、検出できてもその定量値はかなり誤差が大きい。本分析での測定条件は、50kV、0.40~0.50mA（自動設定による）、ビーム径100 μ m、測定時間500s、パルス処理時間P4（分解能を重視した設定）に設定した。定量分析は、標準試料を用いないファンダメンタル・パラメーター法による半定量分析を装置付属ソフトで行った。そのため、定量値は誤差を大きめに見積もっておく必要がある。

分析は、予め遺物をエタノールで軽く洗浄をした後、非破壊で行った。なお、ガラス製品の材質分析においては、人為的に露出させた完全な新鮮面が無い限り、一見透明で風化がないように見える箇所でも、実際分析してみると風化は進んでおり、化学組成には変化があるため（肥塚1997）、解釈に注意しなければならない。このことは、たとえ出土後に自然に割れてしまった破断面であっても、埋蔵中にすでにクラックが入っていて風化が進んでいることが多く、同様である。

3. 分析結果

遺物より得られたスペクトルを第189図に、検出元素と半定量分析結果一覧を第5表に示す。分析の結果、これらは鉛珪酸塩ガラスにあたるものは含まれておらず、アルカリ珪酸塩ガラスに属するものであることが判明した。検出できた元素はMgO、Al₂O₃、SiO₂、P₂O₅、SO₃、K₂O、CaO、TiO₂、MnO₂、Fe₂O₃、CuO、SrO、PbO の計13元素である。

	Na ₂ O	MgO	Al ₂ O ₃	SiO ₂	P ₂ O ₅	SO ₃	K ₂ O	CaO	TiO ₂	MnO ₂	Fe ₂ O ₃	CoO	CuO	Rb ₂ O	SrO	ZrO ₂	SnO ₂	PbO
No1	—	1.2	3.8	86.0	0.5	0.3	1.4	3.0	0.2	0.08	1.1	—	2.4	—	0.02	—	—	0.02

—：検出できず 数字は重量%

第5表 半定量分析結果一覧

4. 考察

No1

青緑色で、気泡が孔と平行に伸びていることから、引き伸ばし法による製作と考えられる（写真2）。

弥生～古墳時代のアルカリ珪酸塩ガラスとしては、カリガラス (K_2O-SiO_2 系)、ソーダ石灰ガラス ($Na_2O-Al_2O_3-CaO-SiO_2$ 系、 $Na_2O-CaO-SiO_2$ 系) がそのほとんどを占める。分析した結果、 Na_2O は検出できなかった。しかし、 K_2O も少ない。これは、本分析が完全非破壊で測定されているためと考えられる。肥塚隆保は、ガラスの風化によって起こる成分の変動について調査し、出土ガラスの表層部分は本来の組成を示さない事を明らかにしている(同上)。カリガラスにおける K_2O も、ソーダ石灰ガラスにおける Na_2O も、風化が進行すると減少することが多く、表面的には少量しか検出できないことも多い。また、本分析で使用した装置はもともと軽元素が検出しづらいため、 Na_2O については含有量が数%程度では検出できないという問題もある。一方、 CaO に着目してみると、こちらは比較的多く含まれていることがわかる。一般にカリガラスの場合は CaO が K_2O よりもはるかに少なく、1%以下であることから、当資料はカリガラスの可能性は低いと思われる。以上より、当資料はソーダ石灰ガラスであると考えられる。ただ、 Al_2O_3 と CaO についてはもともとこのような中間的な組成であるのか、それとも風化の影響によるのか不明であるが、特徴的な含有量を示さず、 $Na_2O-Al_2O_3-CaO-SiO_2$ 系とも $Na_2O-CaO-SiO_2$ 系ともつかない結果となり、判断できなかった。但し、一般的に $Na_2O-Al_2O_3-CaO-SiO_2$ 系の場合は TiO_2 や ZrO_2 の量が多いといわれており(肥塚2003)、それを考慮すると、 $Na_2O-CaO-SiO_2$ 系に近い組成であると考えられる。

着色については、ターコイズブルーとも呼ばれるトルコ石に似た青緑色をしており、銅イオンによる着色と考えられる。もし、当資料が $Na_2O-CaO-SiO_2$ 系ソーダ石灰ガラスだとすると、このタイプのガラスは青紺色がほとんどを占めるといわれており(同上)、比較的珍しい製品といえよう。

5. おわりに

今回分析したガラス小玉は、 $Na_2O-CaO-SiO_2$ 系のソーダ石灰ガラスで、古代日本アルカリ珪酸塩ガラスで代表的に見られる種類のひとつである。但し、非破壊分析であるため、極僅かながら報告されている($Na_2O \cdot K_2O$)- $CaO-SiO_2$ 系などの通常とは異なる材質の可能性も若干残ることは否めない。

また、日本におけるガラス生産については、ガラス素材の生産は7世紀後半の飛鳥池遺跡における鉛珪酸塩ガラスの生産までなく、特にアルカリ珪酸塩ガラスについては鋳型を利用した二次加工が行われていた程度だと考えられている。今回見られた $Na_2O-CaO-SiO_2$ 系のソーダ石灰ガラスは、西方のガラスに見られる組成である。製作技法としては、単色の引き伸ばし法による整形というインドパシフィックビーズの特徴を有しており、南アジア～東南アジアの製作ないし関与が推定されている。今後の南アジア～東南アジア地域における調査の進行が期待される。

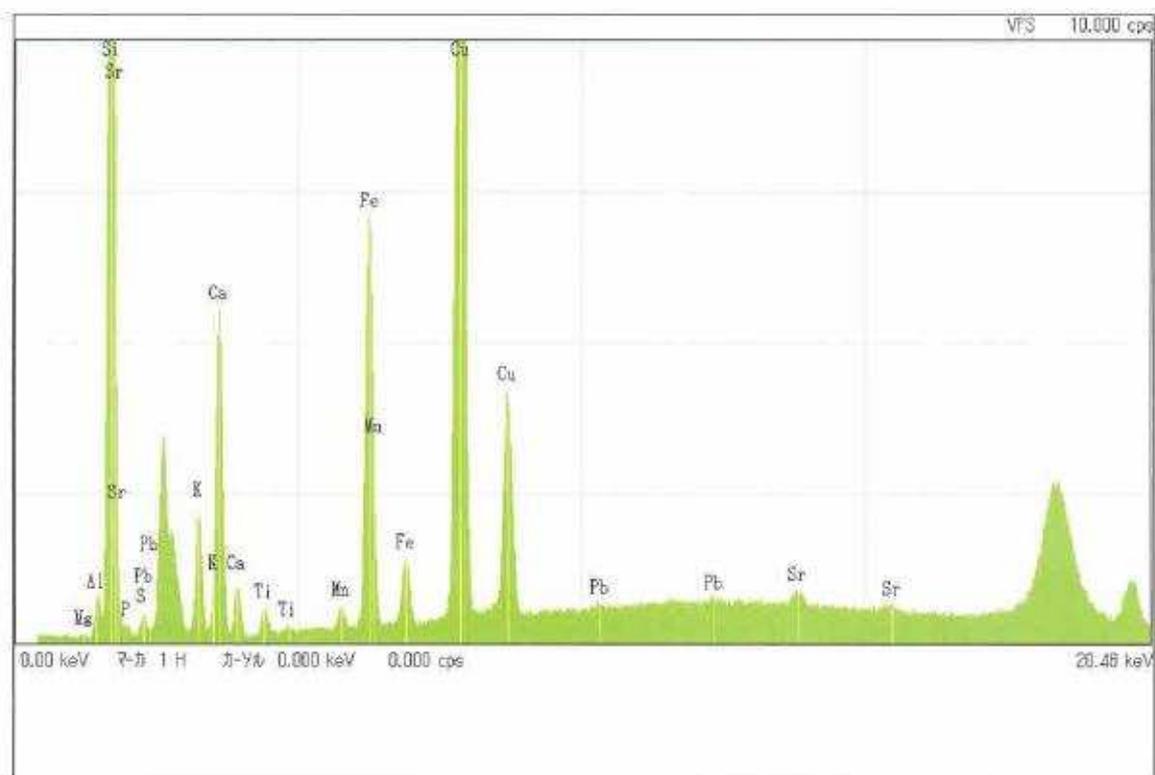
引用・参考文献

肥塚隆保 (1997) 日本で出土した古代ガラスの歴史的変遷に関する科学的研究. 東京藝術大学博士学位論文.

肥塚隆保・大賀克彦 (2000) 出土青色系ガラスの材質と着色因子について. 日本文化財科学会第17回大会研究発表要旨集, 24-25.

肥塚隆保 (2003) 日本出土ガラスから探る古代の交易—古代ガラス材質の歴史的変遷—. 遺物の保存と調査, 145-158, クバプロ.

山崎一雄 (1987) 古文化財の科学. 244-300, 思文閣出版.



第189図 若水古墳出土ガラス小玉蛍光X線分析スペクトル

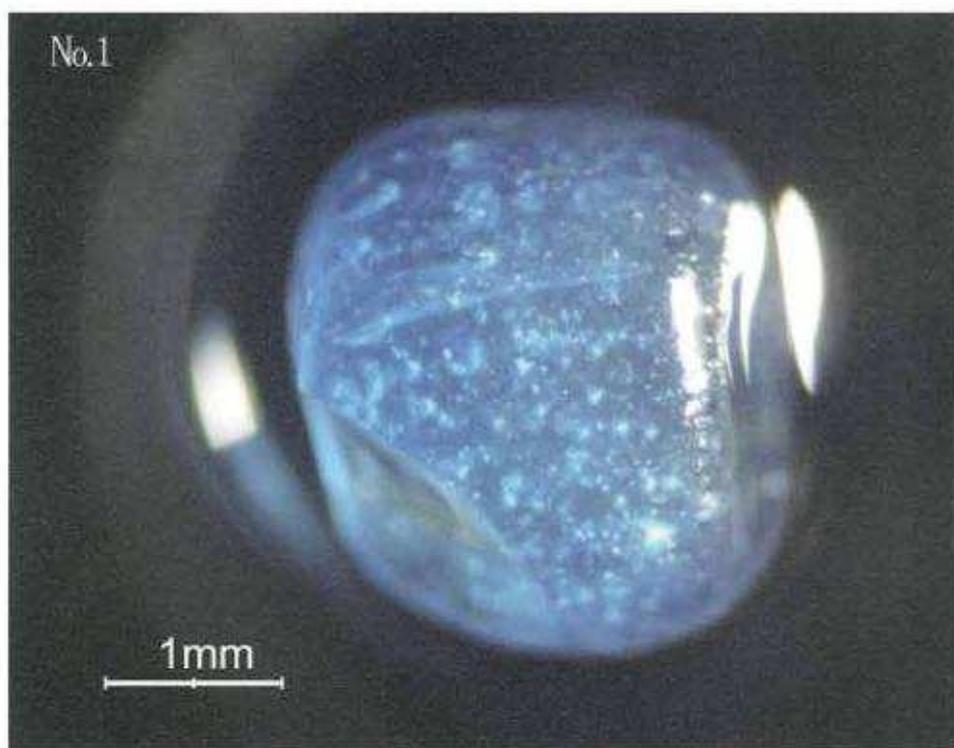


写真2 若水古墳出土ガラス小玉実体顕微鏡写真

第3節 漆塗り製品の漆膜構造調査

一 顕微鏡観察報告一

株式会社 吉田生物研究所

1. はじめに

兵庫県朝来市山東町に所在する若水古墳（A11号墳）から出土した漆膜1点について、その製作技法を明らかにする目的で漆膜構造調査を行ったので、以下にその結果を報告する。

2. 調査資料

調査した資料は、第6表に示す古墳時代の漆膜1点である。

No	品名	概要
1	漆膜	濃褐色で厚さの薄い漆膜片。漆が塗布された素地は遺存していない。

第6表 漆膜構造調査資料

3. 調査方法

第6表の資料本体の内外面から数mm四方の破片を採取してエポキシ樹脂に包埋し、塗膜断面の薄片プレパラートを作製した。これを落射光ならびに透過光の下で検鏡した。

4. 断面観察結果

塗膜断面の観察結果を第7表に示す。

No	器種	写真No	塗膜構造（下層から）		
			下地	漆層構造	顔料
1	不明	1、2	—	黒色漆1層／透明漆3層	油煙類

第7表 塗膜断面観察結果

塗膜構造：漆層のみが観察された。漆層の下部に、素地の組織や下地層の付着は認められなかった。

漆層：下層から、淡褐色の黒色漆1層と、黄褐色の透明漆3層が確認された。黒色漆層と透明漆層は色調の濃淡で区別しやすいが、3層の透明漆層の色調はほぼ同じで、層の境目はやや識別し難い。各層の層厚はきわめて薄く、漆膜全体も薄い。漆層中に、白く抜けたようにみえる部分が多数存在する。これは土中の菌類により漆膜が劣化した結果である。

黒色顔料：最下層には、油煙類の黒色粒子が黒色顔料として漆に混和されていた。

5. 摘要

兵庫県朝来市山東町に所在する、若水古墳（A11号墳）から出土した漆膜片の塗膜構造を観察した。

漆が塗布された素地の組織や、下地層については、確認できなかった。素地が確認されなかったため、これらの漆膜がどのような製品であったのかは不明である。

黒色顔料を混和した1層の上に、顔料を混和していない透明漆層が3層重なる。黒色顔料としては、油煙類の混和が認められた。このように、黒色顔料を混和した漆層の上に、複数の透明漆層を塗り重ねるという塗装は、古墳時代の漆製品によくみられるものである。



写真3 漆膜の断面写真①



写真4 漆膜の断面写真②

第4節 赤色顔料の蛍光X線分析

株式会社 バレオ・ラボ (藤根 久・中村賢太郎)

1. はじめに

若水古墳、若水古墳群は、朝来市山東町栗鹿に所在する。ここでは、各遺構において検出された赤色部分について、蛍光X線分析および顕微鏡観察を行い、赤色顔料の種類と特徴について検討した。

2. 試料と方法

試料は、若水古墳 (A11号墳) 第1主体部と第2主体部から検出された9試料、若水古墳群のB7号墳主体部3試料とA14号墳石棺墓から検出された1試料であり、合計13点の土壌試料である (第8表)。

分析No.	遺跡	遺構	No.	備考	
1	若水古墳 (A11号墳)	第1主体部		鉄器付近の赤 (赤色顔料)	
2				F2の下の土 (赤色顔料)	
3				鉄器付近の赤	
4		第2主体部	Aサンプル		
5			Bサンプル		黄褐色
6			Cサンプル1		赤色
7			Cサンプル2		白色
8			Dサンプル		白色
9					西半、棺底サンプル (朱まじる)
10	若水古墳群	B7号墳主体部		赤色顔料 頭部	
11				赤色顔料 足部	
12				足もと	
13		A14号墳石棺墓	石棺2	周囲の土 (歯有り)	

第8表 赤色顔料の分析試料とその詳細

試料は、赤みの強い粒子または塊を取り出し、試料台に固定して点分析した。なお、すべての試料について、赤色物または粘土部分を蒸留水で溶いて簡易プレパラートを作成し、光学顕微鏡で観察した。

測定は、X線分析顕微鏡 (発掘場製作所製 XGT-5000Type II) を用いた。点分析の測定条件は、X線導管径100 μ m、電圧50KV、電流自動設定、測定時間500secである。定量計算は、標準試料を用いないFP (ファンダメンタルパラメータ) 法で半定量分析を行った。

3. 結果および考察

蛍光X線分析の結果、分析No1～3では水銀が顕著に検出された。また、分析No4、No.5、No.7～10においても微量に検出された (第9表、第190・191図)。

一方、分析No4～9、No13において鉄 (Fe_2O_3) が高い割合で含まれていた (第9表、第190・191図)。なお、分析No4～8は、光学顕微鏡観察においてパイプ状ベンガラ (岡田、1997) が確認された (写真5)。

以上の結果から、分析No1～3は朱であり、分析No4～8はベンガラである (第10表)。なお、No9とNo13ではパイプ状ベンガラは確認されていないが、鉄含有量が土壌としては高いことから、ベンガラである可能性が高いと考えられる。

こうしたことから、若水古墳第1主体部において朱が利用されているが、第2主体部ではベンガラが利用されていることを示している。

赤色顔料は、主にベンガラと朱があるが、ベンガラは大きく鉄細菌系と非鉄細菌系に分かれ、千差万別の赤色をみせる。代表的な鉄細菌系のパイプ状ベンガラは、日本列島全域で縄文時代から使用されている（馬淵ほか、2003）。

朱は、硫化水銀（HgS）で天然鉱物として得ることができ、中国では辰砂と呼んでいる（馬淵ほか、2003）。日本では、主に中央構造線沿いの三重県、和歌山県、四国、九州に水銀鉱床群がある（市毛、1998）。

分析%	MgO	Al ₂ O ₃	SiO ₂	P ₂ O ₅	SO ₃	K ₂ O	CaO	TiO ₂	Cr ₂ O ₃	MnO ₂	Fe ₂ O ₃	As ₂ O ₃	Rb ₂ O	SrO	Y ₂ O ₃	ZrO ₂	HgO	total
1	0.24	0.66	3.61	0.00	30.12	0.03	0.01	0.07	0.10	0.04	0.34	0.02	0.15	0.28	0.00	0.12	64.22	100.01
2	0.66	2.81	9.16	0.00	27.02	0.23	0.01	0.03	0.01	0.03	1.14	0.01	0.12	0.29	0.00	0.03	58.44	99.99
3	0.06	8.87	20.14	0.13	23.44	0.80	0.01	0.64	0.05	0.03	9.16	0.02	0.10	0.15	0.05	0.21	36.12	99.98
4	0.00	29.71	51.07	0.25	0.51	1.13	0.02	1.30	0.02	0.05	14.67	0.01	0.02	0.01	0.01	0.02	1.19	99.99
5	0.00	29.58	52.35	0.30	0.40	1.92	0.04	1.34	0.01	0.05	12.75	0.00	0.02	0.01	0.01	0.02	1.20	100.00
6	0.00	27.60	55.92	0.20	0.11	2.18	0.17	1.23	0.01	0.33	12.23	0.00	0.00	0.00	0.00	0.01	0.00	99.99
7	0.00	26.86	55.75	0.25	0.26	2.94	0.08	0.80	0.02	0.03	12.71	0.00	0.06	0.01	0.01	0.01	0.20	99.99
8	0.21	28.42	53.03	0.02	0.20	1.60	0.11	1.05	0.00	0.15	15.03	0.00	0.00	0.04	0.01	0.07	0.06	100.00
9	0.09	25.27	59.78	0.14	0.18	2.05	0.09	0.77	0.02	0.08	11.46	0.00	0.01	0.01	0.01	0.02	0.04	100.02
10	0.00	29.83	57.85	0.45	0.15	3.56	0.12	0.64	0.00	0.03	6.92	0.00	0.02	0.00	0.12	0.21	0.08	99.98
11	0.00	12.58	83.80	0.07	0.20	0.67	0.01	0.27	0.00	0.01	2.31	0.00	0.02	0.00	0.02	0.02	0.00	99.98
12	0.00	33.01	56.61	0.14	0.23	0.72	0.00	0.20	0.00	0.03	8.93	0.01	0.03	0.01	0.06	0.01	0.00	99.99
13	0.04	29.29	50.20	0.15	0.12	2.27	0.18	0.70	0.01	0.01	16.97	0.00	0.02	0.01	0.02	0.02	0.00	100.01
最小値	0.00	0.66	3.61	0.00	0.11	0.03	0.00	0.03	0.00	0.01	0.34	0.00	0.00	0.00	0.00	0.01	0.00	
最大値	0.66	33.01	83.80	0.45	30.12	3.56	0.18	1.34	0.10	0.33	16.97	0.02	0.15	0.29	0.12	0.21	64.22	

第9表 赤色顔料の蛍光X線分析結果

分析No	遺跡	遺構	種類	
			朱	ベンガラ
1	若水古墳 (A11号墳)	第1主体部	◎	
2			◎	
3			◎	
4		△	◎	
5		△	◎	
6			◎	
7			◎	
8			◎	
9			◎	
10	若水古墳群	B7号墳主体部	△	
11				
12				
13		A14号墳石棺墓		◎

朱の標：◎が顕著、△が検出、ベンガラの標：◎が顕著でパイプ状ベンガラが確認、○は鉄含有量が高い

第10表 各試料の赤色顔料の種類

4. おわりに

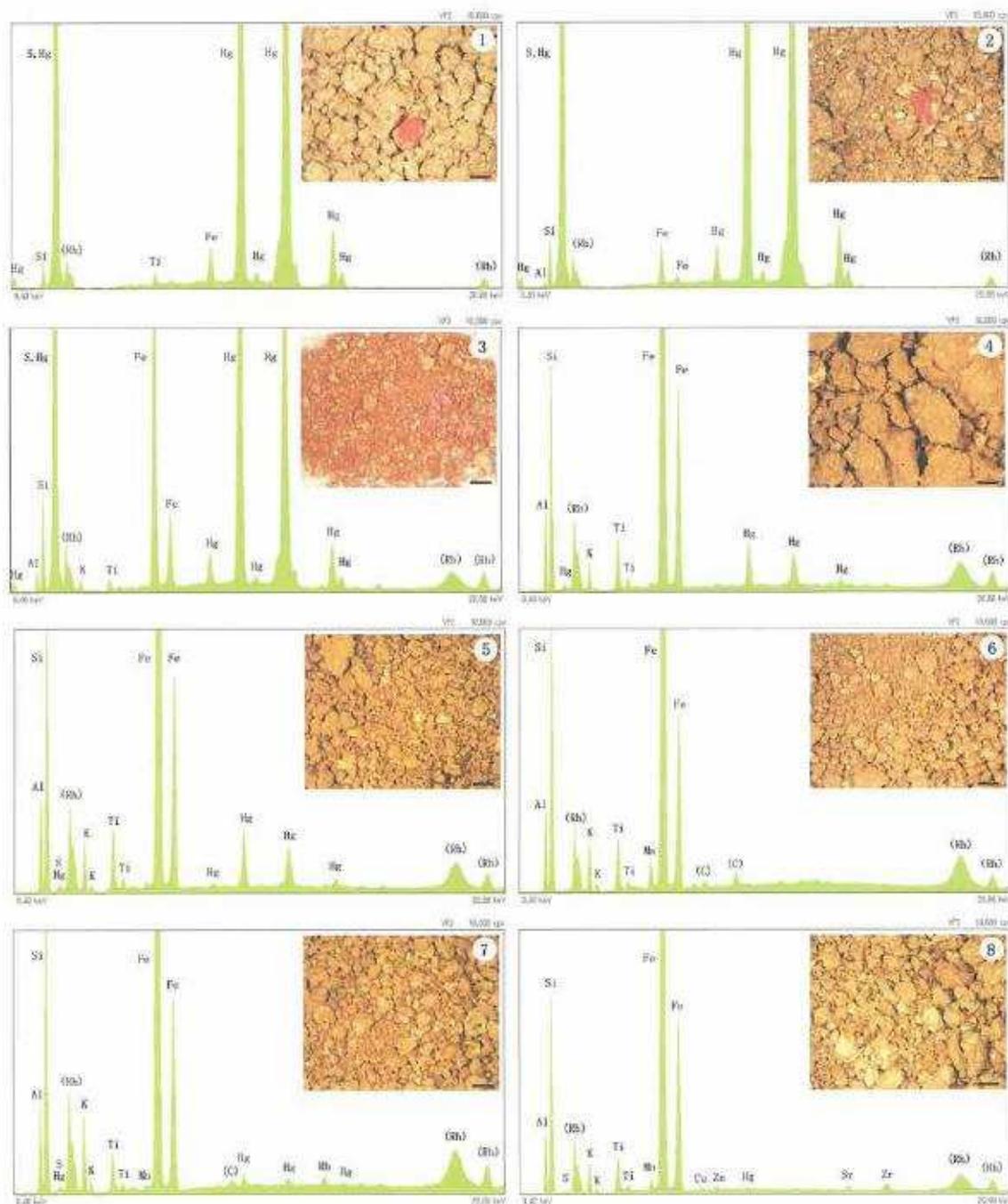
各遺構から採取された赤色土壌を検討した結果、若水古墳第1主体部において朱が検出され、第2主体部ではベンガラであることが判明した。若水古墳群B7号墳主体部において微量ながら朱が検出された。若水古墳群A14号墳石棺墓においてはベンガラ利用の可能性が高い。

引用文献

市毛 勲（1998）朱の考古学，296p、雄山閣。

馬淵久夫・杉下龍一郎・三輪嘉六・沢田正昭・三浦定俊（2003）文化財科学の事典，522p、朝倉書店。

岡田文男（1997）パイプ状ベンガラ粒子の復元，日本文化財科学会第14回大会研究発表要旨集，38-39。

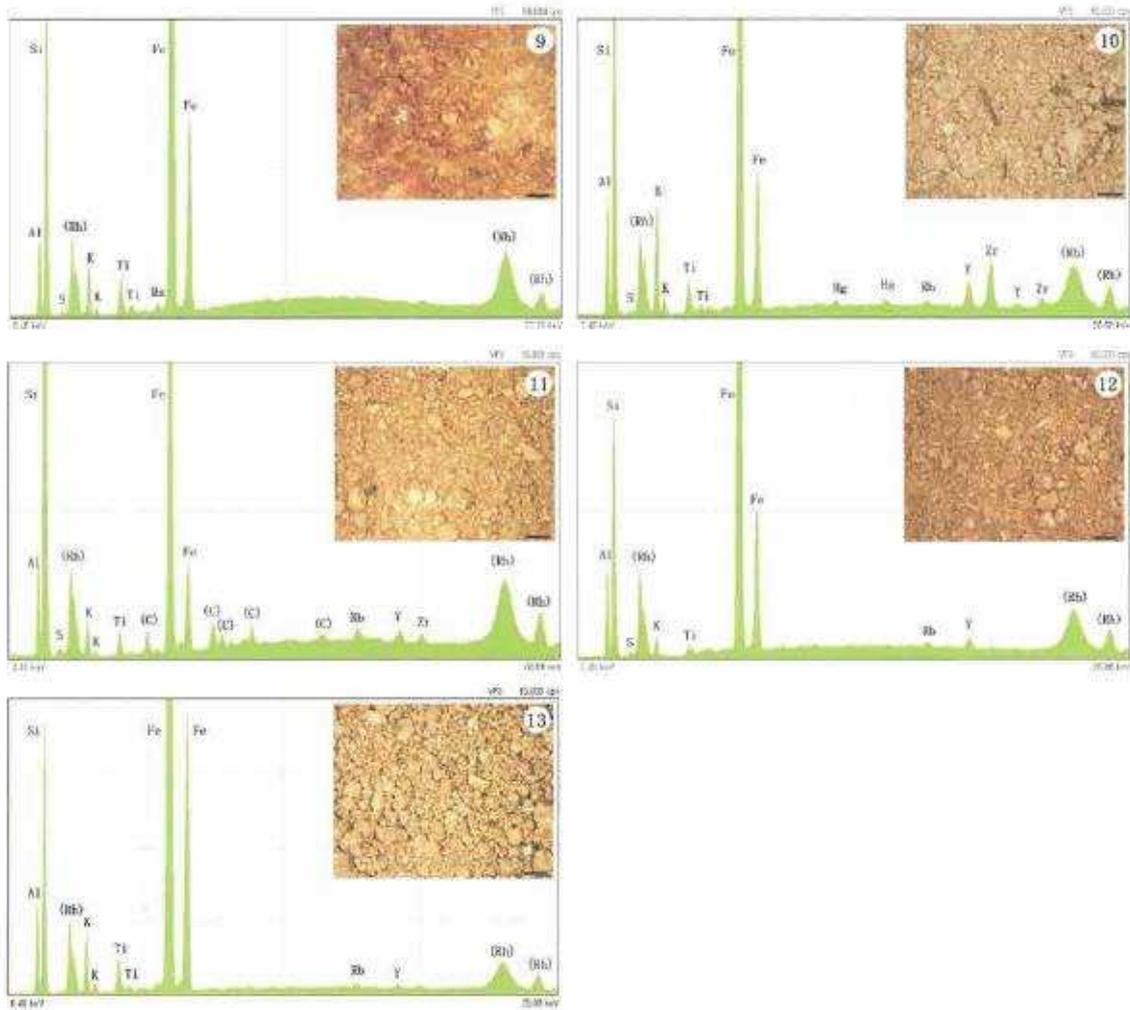


【元素記号】

Al：アルミニウム、Si：ケイ素、K：カリウム、Ti：チタン、Mn：マンガン、Fe：鉄、Cu：銅、Zn：亜鉛
 Hg：水銀、Rb：ルビジウム、Sr：ストロンチウム、Y：イットリウム、Zr：ジルコニウム
 Rh：ロジウム（管球由来）、C：結晶由来

番号は分析Noに対応（スケール：2mm）

第190図 赤色物の蛍光X線スペクトル図①

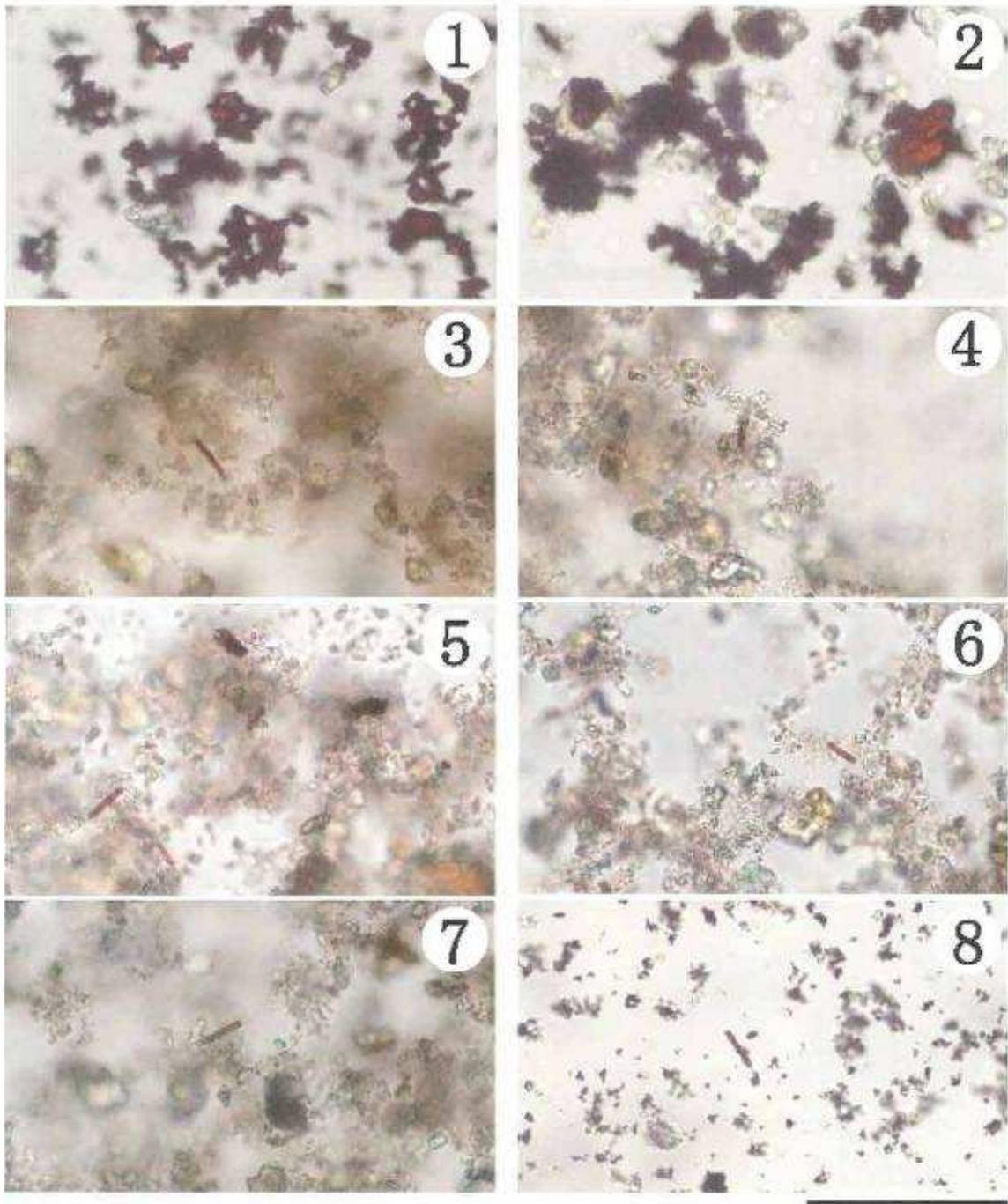


〔元素記号〕

Al：アルミニウム，Si：ケイ素，K：カリウム，Ti：チタン，Mn：マンガン，Fe：鉄，Cu：銅，Zn：亜鉛
 Hg：水銀，Rb：ルビジウム，Sr：ストロンチウム，Y：イットリウム，Zr：ジルコニウム
 Rh：ロジウム（管球由来），C：結晶由来

番号は分析Noに対応（スケール：2mm）

第191図 赤色物の蛍光X線スペクトル図②



(スケール：50 μm)

1. 朱の粒子 (分析No1) 2. 朱の粒子 (分析No3)
3. パイプ状ベンガラ (分析No4) 4. パイプ状ベンガラ (分析No5)
4. パイプ状ベンガラ (分析No5) 6. パイプ状ベンガラ (分析No6)
7. パイプ状ベンガラ (分析No8) 8. パイプ状ベンガラ (分析No15)

写真5 赤色顔料の顕微鏡写真

第4章 総括と考察

第1節 若水遺跡出土弥生土器の編年的位置

但馬地域の弥生後期土器編年については谷本進氏による業績（谷本1992、谷本2001）があるが、南但馬（南但）地域においては資料の少なさもあって詳細な変化を追うことが難しかった。しかし、本遺跡も含め、近年南但地域において発掘調査報告書が相次いで刊行され、資料の蓄積がみられるようになった。

今回、若水遺跡から出土した弥生後期土器の編年的位置づけを行うにあたって、南但地域を主眼においた但馬地域の弥生後期土器編年を組み立てる必要が生じたと同時に、これまでの調査による資料の蓄積から、ある程度の土器編年を行うことも可能であると思われた。

そこで、本節では南但地域を中心とした弥生後期土器編年を試み、それによって弥生時代の若水遺跡および出土土器の位置づけを行うこととする。

ところで、土器の様相に類似性が多い京都府の丹後地域においては、一連の墳墓資料を使った高野陽子氏による精緻な土器編年（高野2006）がなされており、今回南但馬地域の編年を考えるにあたっての指標とした。

但馬地域弥生後期土器編年

編年を行うにあたっての資料としては、但馬地域では弥生時代後期の墓に土器供献が行われていることが多く、一括性・同時性が高いものと判断されることから、これらの資料を中心に標識とし、南但地域の資料を積極的にとりあげた。ただし、それだけでは不十分であったことから、北但馬（北但）地域の資料や墳墓・墓以外の出土資料も援用し、若水遺跡出土資料も組み込んだ。また、時期設定としては、土器の様相および変化により1～11期に細分した。

それらは概ね後期第1期が弥生時代後期初頭、第2～第4期が後期前葉、第5・第6期が後期中葉、第7・第8期が後期後葉、第9～第11期が後期末葉ととらえている。

第1期 後期初頭にあたり、北但地域の東山墳墓群（瀬戸谷編1992）のうち4号墓第18主体・3号墓第4主体・4号墓第5主体出土土器を指標とした。3号墓第4主体出土土器の口縁部には因幡地域や東伯耆地域といった山陰地域との共通性が認められる。丹後地域編年では三坂神社1式に相当する。

第2期 甕は肩が張り、口縁端部を上方に拡張する。北但地域では東山4号墓第3主体や3号墓第9主体および1号墓第9主体出土土器を指標とする。南但地域では芝花弥生墓群（岸本編2008）の資料が最も古い、次の第3期にもまたがるようである。時期的には丹後地域の三坂神社2式古段階と思われる。

第3期 北但地域の東山4号墓第12主体・3号墓第1主体出土土器を指標とする。三坂神社2式新段階から3式に相当すると思われる、甕の体部最大径はやや下方になり、口縁端部の上方への拡張はややあまくなる。

第4期 丹後地域の三坂神社3式に相当すると思われる、北但地域の東山3号墓第3主体と4号墓第7主体および第17主体を標識とする。南但地域では相当する資料が今のところ明確ではない。

第5期 北但地域では東山1号墓第4-2主体および門谷遺跡群（瀬戸谷編2003）2号墓第4主体出

土土器を指標とする。南但地域では梅田東古墳群（山田編2002）17号墓および大盛山遺跡（田畑・中島1995）出土土器がこの時期に相当する。大盛山遺跡出土土器については、これまで後期初頭とされてきたが、壺口縁部については因幡地域や東伯耆地域の後期初頭頃に近い特徴を有しているものの、高杯の脚部では筒状で中空のものがきわめて限られることから、後期前葉以前まで引き上げるのには無理があると判断した。高杯杯部は有稜で直立し、脚部は外反しながら「ハ」字形に開く。当期の北但地域では、杯底部外面に把手が付く丹後地域に特徴的な高杯が存在しており、大山2式に相当する。

第6期 南但地域では若水遺跡環壕および粟鹿遺跡（深井・岸本編2007）D-SH20出土土器、北但地域では門谷2号墓第3主体出土土器を指標とする。高杯口縁部の外反がはじまり、南但地域では甕などの口縁端部が下方に若干拡張されるようになる。丹後地域では大山2式新段階～3式に相当すると思われる。

第7期 南但地域では粟鹿遺跡A-S D101とB3-S D01出土土器を指標とする。この両溝は同一溝と判断される。甕などの口縁端部が上方へ拡張しはじめる。北但地域では良好な資料に恵まれないが、大篠岡・半坂墳墓出土資料（潮崎1999）が相当し、丹後地域では大山3式新段階に相当すると思われる。

第8期 南但地域では粟鹿遺跡A-S D107やB3-S H01・S H02出土土器があり、甕などの口縁端部の上方への拡張が目立つようになり、畿内系タタキ甕が出現している。北但地域では鎌田・若宮古墳群（豊岡市立郷土資料館編1990）4号墓出土資料が本期に属すると判断し、丹後地域の西谷1式古段階に相当すると思われる。

第9期 良好な出土資料に恵まれないが、粟鹿遺跡G地区流路出土土器を指標とする。甕底部は尖底に近くなり、器台の脚部は口径に比べて小さくなる。丹後地域では西谷1式に相当すると思われる。

第10期 若水15号墳第1・第2主体部および土器棺S P-W1、B1号墳主体部出土土器を標識とするが、やや時期幅があるように思われる。器台脚部はさらに小さくなり、口縁端部を上下に拡張する丹後型の装飾器台が存在している。丹後地域の西谷1式新段階から西谷2式に相当すると思われる。

第11期 甕は器壁の薄い複合口縁となり、若水13号墳第1主体部・14号墳主体部および斜面・15号墳第5・第6主体部・S K-W4出土土器が相当する。また、箕谷遺跡（谷本1987）S D01出土資料もこの時期と思われる。丹後地域の西谷2式～3式に相当する。

小 結

南但地域を主眼にした弥生後期土器は、大勢としては丹後地域の土器に近いが、特徴的な丹後型高杯は出土していない。一方、丹後型の装飾器台が若水15号墳から出土しているが、装飾器台は丹波地域や北播磨地域にまで出土しており、その分布範囲が広いものである。

今回、大盛山遺跡を後期中葉としたが、若水遺跡とともに朝来市域における高地性集落の時期ととらえることができよう。また、後期末葉からは庄内甕の影響下にある甕が出現し、第10期にはその甕以外には、丹後地域と器種・器形がほぼ共通したものとなり、丹後地域からの影響が強くなっているものと思われる。

以上、紙数・時間的都合により粗く雑駁なものとなってしまったが、いずれ稿を改めて詳述する機会を得たいと思っている。大方のご叱正をお願いしたい。

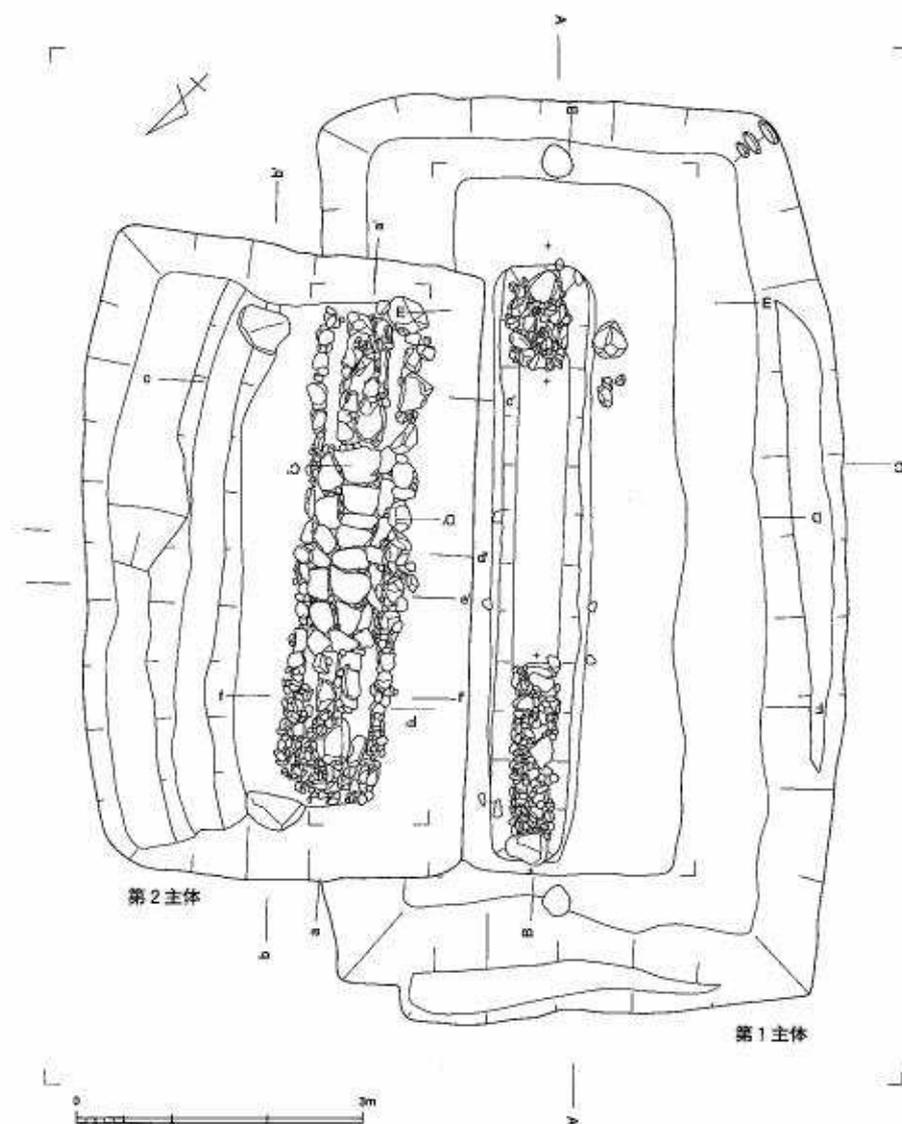


第192図 南但馬を中心とした但馬地域弥生後期土器編年試案

第2節 若水古墳の埋葬施設構造と築造時期

若水古墳（A11号墳）の埋葬施設には第1主体部と第2主体部があり、どちらの埋葬施設においても「H」形の組合せ式箱形木棺であり、長側板に挟まれた空間のうち、被葬者を埋葬した主室および第1主体部においては副葬品を納めた副室も含めた空間の短辺外側で、小口板あるいは長側板端部までの空間に礫により丁寧に詰石（小口部詰石）を行っていた。また、第2主体部では長側板の外側に棺押さえのための石積み（長側部積石）が行われており、主室部分の棺底には板石が敷き詰められていた（棺底敷板石）。

このような構造の木棺墓の類例はあまり多くないものの、周辺およびやや離れた地域においても若干例が認められる。それらのなかでも、小口部詰石については、棺小口板の押さえ石として古墳時代中期以降の例はかなり多くなっている。ただし、若水古墳のように石垣を積むように丁寧に施された例はきわめて少ない。



第193図 若水古墳 埋葬施設平面

また、若水古墳については、その築造時期を限定できる遺物が非常に限られているため、埋葬施設の構造における類例を求めることによって築造時期を推定する上での一助となる可能性があると思われる。

そこで以下、小口部詰石・長側部積石および棺底敷板石について類例により検討を行なうこととする。

埋葬施設の類似例

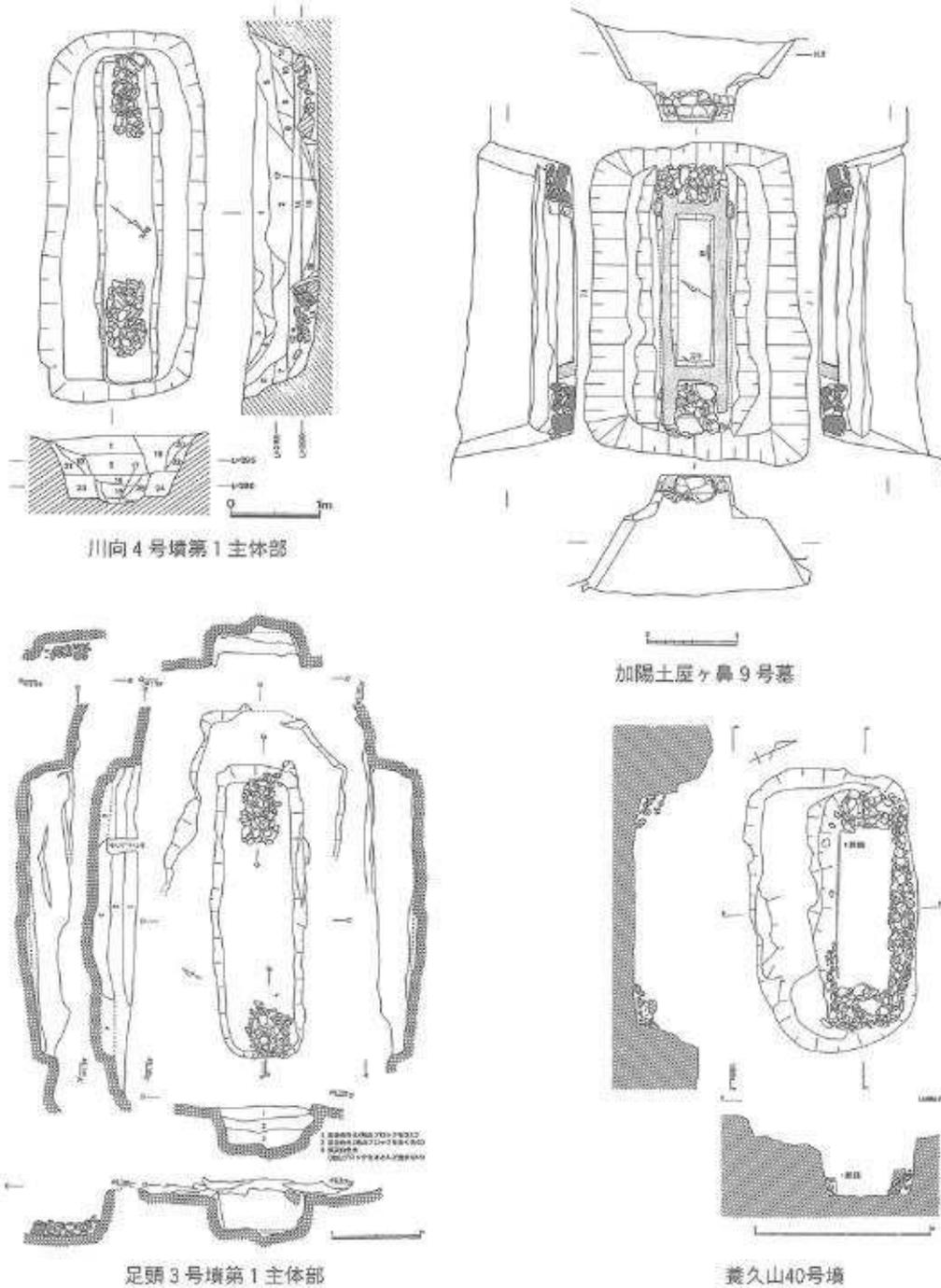
棺底敷板石 まず、若水古墳第2主体部でみられた棺底敷板石であるが、但馬地域には木棺底に小円礫を敷いた「礫床」が多く認められるが、管見によれば板石を敷いた木棺は皆無である。ただし、切石による組合せ式の箱形石棺には底板が存在する例があり、自然石による箱式石棺においても板石を敷いたものが存在している。若水古墳の西に位置する柿坪中山古墳群（樋本・加古1978）4号墳の第1主体部は石室系石棺（岸本2008）であるが、底に板石が敷かれており、若水古墳第2主体部と同様、目地も合わずに並べられていた。古墳の時期を決定する遺物が出土していないため不明であるが、古墳時代中期と推定されている。養父市の小山3号墳第1主体部（谷本・山田編1990）においても箱式石棺の底に板石が敷かれていた。時期は古墳時代前期と考えられる。これらの2例はいずれも古墳の中心主体となっている。兵庫県以外では、鳥根県安来市吉佐山根1号墳（錦田1995）の第2・第3主体部において、棺底に板石を横位に使用した敷石が認められ、その埋葬施設は中心主体となっている。時期は前方後円墳集成2期とされている。また、鳥取県大石11号墳（松下・山田1989）の埋葬施設である箱式石棺の底にも、一部分に限られるが、敷板石が認められる。

小口部詰石 次に、小口部詰石であるが、但馬地域では古墳時代中期中頃と推定される北浦13号墳（瀬戸谷編1980）主体部の例があり、時期不明であるが、香住門谷遺跡群（瀬戸谷編2003）7号墳第3主体部の例も存在する。門谷7号墳では板石を積み上げて詰石とし、同時に板石を立てて小口板としている。但馬地域で最も遡る例としては加陽土屋ヶ鼻9号墓（第194図）（瀬戸谷編1994）があり、弥生時代末～古墳時代初頭とされている。ここでは若水古墳第1主体部と同様に被葬者の頭部と足部で詰石の長さが若干であるが異なっている。京都府舞鶴市の川向古墳群（河野・福島1999）4号墳第1主体部（第194図）では、詰石の長さが90cmと1mで長いものとなっているが、長さの差はほとんどない。ここでは詰石外側面に礫の平らな面がくるようにおかれていることが観察され、諸例のうちでは若水古墳の詰石構造に最も似ている。ただし、整美で大規模な若水例と比較するとその差は大きい。また、川向4号墳の報告で類例として挙げられた宮津市柿ノ木2号墳第1・第2主体部は、5世紀前半よりも時期が遡る可能性があるとしてされている。

頭位側と足位側で詰石の長さが異なっているものとして、鳥根県足頭3号墳第1主体部例（第194図）（宮本2002）がある。詰石は長さ80cmと60cmで、残念ながら頭位は推定されていないが、若水古墳第1主体部と同様に短い方が頭位になる可能性も残されている。なお、足頭3号墳第1主体部詰石に使用されていたのは円礫～亜角礫であったため、詰石側面が直立していたかどうかは不明となっている。時期は古墳時代中期以前と推定されている。岡山県では、便木山第10土壙（神原1971）が小規模ではあるが小口部詰石がなされており、酒津式の範疇でとらえられている。

長側部積石 長側板に接した外側に棺押さえとして積石を施す例は、小口部分も包み込むかたちの礫楕円と外見上は類似するが、長側板に沿った両側にのみ列状に配されることにより、裾構造とは構造上の大きな違いがある。

鳥取県古海40号墳（谷口・藤本・神谷1996）第1主体部の積石（第195図）は、管見による長側部積石に限定した類例の中では最も若水古墳に類似している。2段墓壙の下段落ち際に2～3石を積み上げ、

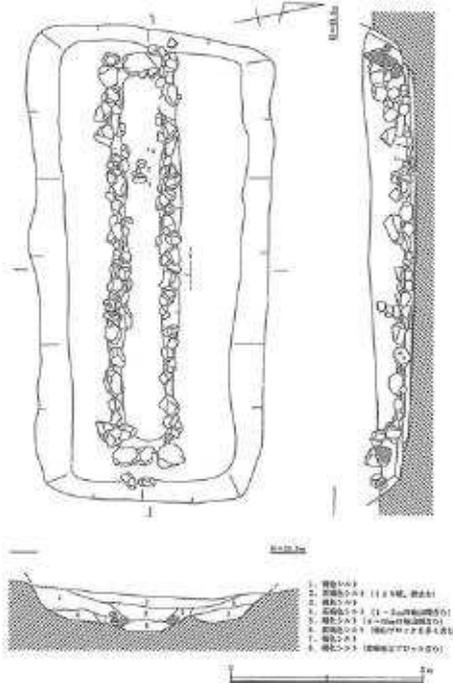


第194図 小口部詰石および長側部積石の諸例(1) (S=1:80)

小口部にも小規模ながら礫が存在していることから礫部構造の可能性もあるが、小口部の一方では長側部積石と小口部の礫には若干の隙間が存在していることから、ここに長側板が存在していたものと思われる。銅鏡・鉈・鉄鎌・土師器高杯が出土しており、古墳時代前期後半の可能性が高い。

舞鶴市川向3号墳第1主体部および第2主体部(河野・福島1999)では小礫が使用され、疎らではあるものの、長側部積石と認定できる。出土土器から布留2式の新相と判断されている。また、2号墳の埋葬施設もその可能性がある。川向3号・2号墳では明確に小口部詰石と併せた構造になっているものは認められないが、先述の川向4号墳第1主体部では小口部詰石が認められる。

若水古墳近隣の例では、柿坪中山古墳群5号木棺墓(榎本編1975)が棺内長1.5m程度の小規模なも



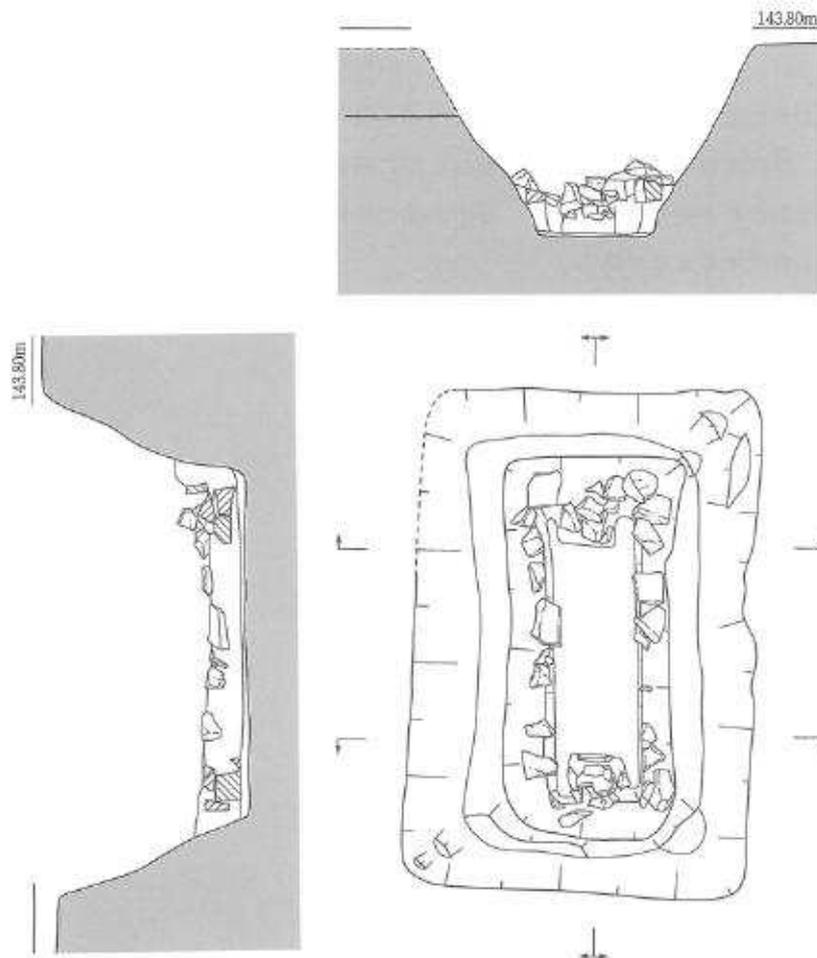
古海40号墳第1主体部

のであるうえに、長側部の石は疎らで積石とは呼べないが、両者を併せた構造の簡略されたかたちと推定される。時期は不明である。

梅田東古墳群（山田2002）11号墳第1主体部（第195図）および第2主体部でも長側部の礫は1段で疎らであることから、積石とは呼べないが、小口部詰石と共伴する例の簡略形としてとらえられよう。

時期は庄内併行期後葉とされている。また、梅田東13号墳第1主体部や14号墳第1主体部では小口部詰石に近い部分にのみ配石されるものであり、さらに省略された可能性が高い。時期は布留期とされている。

たつの市養久山40号墳（深井・市橋1988）は長径12.4mの陸橋部をもつ楕円形の墳丘で、中心主体である2号主体部（第194図）においては、棺をとりまく3方向に礫が2～4段積まれている。それらを詳細に観察すると、長側部の石積みと小口部礫の間には目地が通っており、



梅田東11号墳第1主体部

若干の隙間がある部分も認められる。棺構造は組合せ式の木棺と推定されており、積石の構築順序として小口部が長側部よりも後に積まれたためである可能性があるものの、木棺は「H」形木棺であったと想定する方が自然であろう。したがってここでは「H」形木棺であったと判断しておきたい。築造時期は、3号主体部の土器棺により弥生時代後期後半から庄内併行期とされ、そのなかでも後期末ないし庄内併行期と推定されている。

若水古墳の築造時期

以上のように、若水古墳埋葬施設の類似例をみてきたが、若水古墳第2

第195図 小口部詰石および長側部積石の諸例（2）（S=1:80）

主体部のように長側部積石と小口部詰石および棺底敷板石が共存する例は認められなかったが、棺底敷板石は古墳時代前期～中期に存在しており、地域的には山陰地域に限られている。また、小口部詰石は弥生時代末～古墳時代初頭以降に行なわれているが、古墳時代中期以前に限定すれば、但馬・丹後地域および島根県といった山陰地域に多く見られるようである。一方、長側部積石例および小口部詰石との共存例では、柿坪中山5号墓例以外はすべて中心主体に採用され、時期的には養久山40号墳が最も古く、後期末ないし庄内期とされ、その他の例でも庄内期後葉以降古墳時代前期までの短い期間に採用された構造であり、小規模墳では省略化される傾向にあると判断される。地域的には丹後・但馬や因幡といった山陰地域のほか、播磨においても認められた。

一方、若水古墳の墓壙上部から出土した甕口縁部は細片であるため、詳細な時期を述べることができないが、概ね庄内併行期から布留併行期の初期と推定される。また、第1主体部のように長さ6.3m、幅1.0mという長大な棺でありながら外寸高が50cm程度と推定される低い棺であったことは、古墳時代中期以降の木棺とは異なり、時期的に通る可能性がある。

また、長径で約41mの平面規模に対して高さ約5mという低平な墳丘形態は、墳裾を取り巻く周囲の墳裾平坦部の存在と併せて、赤坂今井墳丘墓と共通する点がある。しかし、若水古墳が円形の墳墓である点と周辺埋葬が存在しない点は赤坂今井墓と大きく異なるところである。一方、先にみた播磨地域に存在する養久山40号墳が円形の墓であり、埋葬施設および木棺形態が同じであるという推定結果に基づけば、最も類似する墳墓と判断される。

弥生時代の但馬地域においては、墳形は方形を基調としており、円形墓は小山3号墳のように布留期以降に初めて登場することが知られている。したがって、養久山40号墳との類似性において同時期とするにはやや古すぎる観があり、埋葬施設構造および墳丘形態ならびに副葬品の組み合わせから、その直後である庄内期末から布留期初頭あたりを目安としておくことが現在の段階では最も可能性が高いものと推定され、土器による推定とも合致するようである。

今後、さらなる類例の増加を待って築造時期の検討を続けてゆきたい。

第3節 若水古墳出土鏡と古墳時代開始期における但馬地域出土鏡

大手前大学 岩本 崇

1. はじめに

小稿では、先行研究をふまえて若水古墳出土鏡の位置づけを検討する。また、古墳時代前期における但馬地域の出土鏡にみる特徴を整理し、古墳出現期における但馬地域での銅鏡の受容形態の一端を考察することで、若水古墳出土鏡が副葬された背景に迫ることとしたい。なお以下の検討では、若水古墳と大きく同時期と認定できる古墳時代前期の資料を主な対象とする。

2. 若水古墳出土鏡の位置づけ

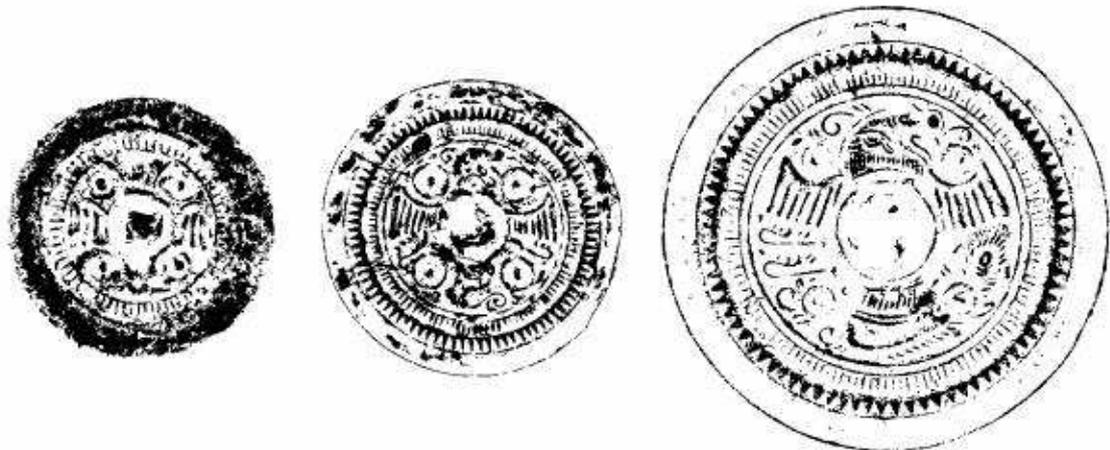
(1) 飛禽文鏡

飛禽文鏡については、岡村秀典によって「上方作」系獸帯鏡や一部の画像鏡とともに、「徐州系」の鏡群として位置づけがなされている（岡村1999）。また近年においては、中国での出土例が数多く報告されるようになり（第196図）、その分布が山東省南西部から安徽省北部に集中することが指摘され、「華北—東部系鏡群」として評価されるようになった（森下2007）。

飛禽文鏡を含む系統の生産基盤が、華北でも東部地域にあったという理解は、その他の鏡式を含めた系統的なまとまりを重視すれば、より妥当性のあるものと評価できる。年代については、飛禽文鏡に紀年鏡がないため、ほかの鏡を参考とするしかない。とくに、薄肉彫りの文様表現や円座乳の形状が共通する「上方作」系獸帯鏡の秦漢漢墓出土例から（岡村1992）、その年代は2世紀後半を中心としたものと考えておくのが現状の理解である。若水古墳出土の飛禽文鏡についても、そうした位置づけを与えておきたい。

(2) 連弧文鏡

若水古墳から出土した連弧文鏡については、すでに最古級の仿製鏡であるとの指摘がある（平田2002）。その根拠は、以下の5点である。①弧文間文様に中国鏡の要素をとどめること、②内区外周文様が葡萄



第196図 山東省棗荘市渴口漢墓出土飛禽文鏡（S=2:3）（山東省棗荘市博物館2004より）

文のみとなっていること、③四葉座間の銘文が記号化していること、④鏡背面の研磨が全面におよぶこと、⑤良質な白銅を素材とし、丁寧に製作されていること。これら5点の特徴を提示した論点は、若水古墳出土鏡が下池山古墳出土の連弧文鏡に先行する要素をもつと判断できるという点に集約できる。

しかしながら、上記した5点の根拠はいずれもきわめて重要な指摘ではあるが、製作地を決定づけるだけの材料となるかどうかについては、さらなる検討が不可欠と考える。というのは、①・②は模倣鏡など省略形式の存在が中国大陸において確認された現在においては、そもそも舶載鏡と仿製鏡を識別する指標とすることができない、③の文様要素は仿製鏡と認定する際の必要条件とはなりうるが十分条件とはならない、④・⑤については舶載鏡と仿製鏡という両者の系統的な差異を決定づけるものと論断できないからである。そこで以下では、若水古墳出土の連弧文鏡の位置づけをおこなうため、あらためて他例との比較検討を文様と形態の双方から試みる。検討に際しては、相違点をもって舶載鏡と仿製鏡を識別するのではなく、共通点を確認することをとくに重視したい。

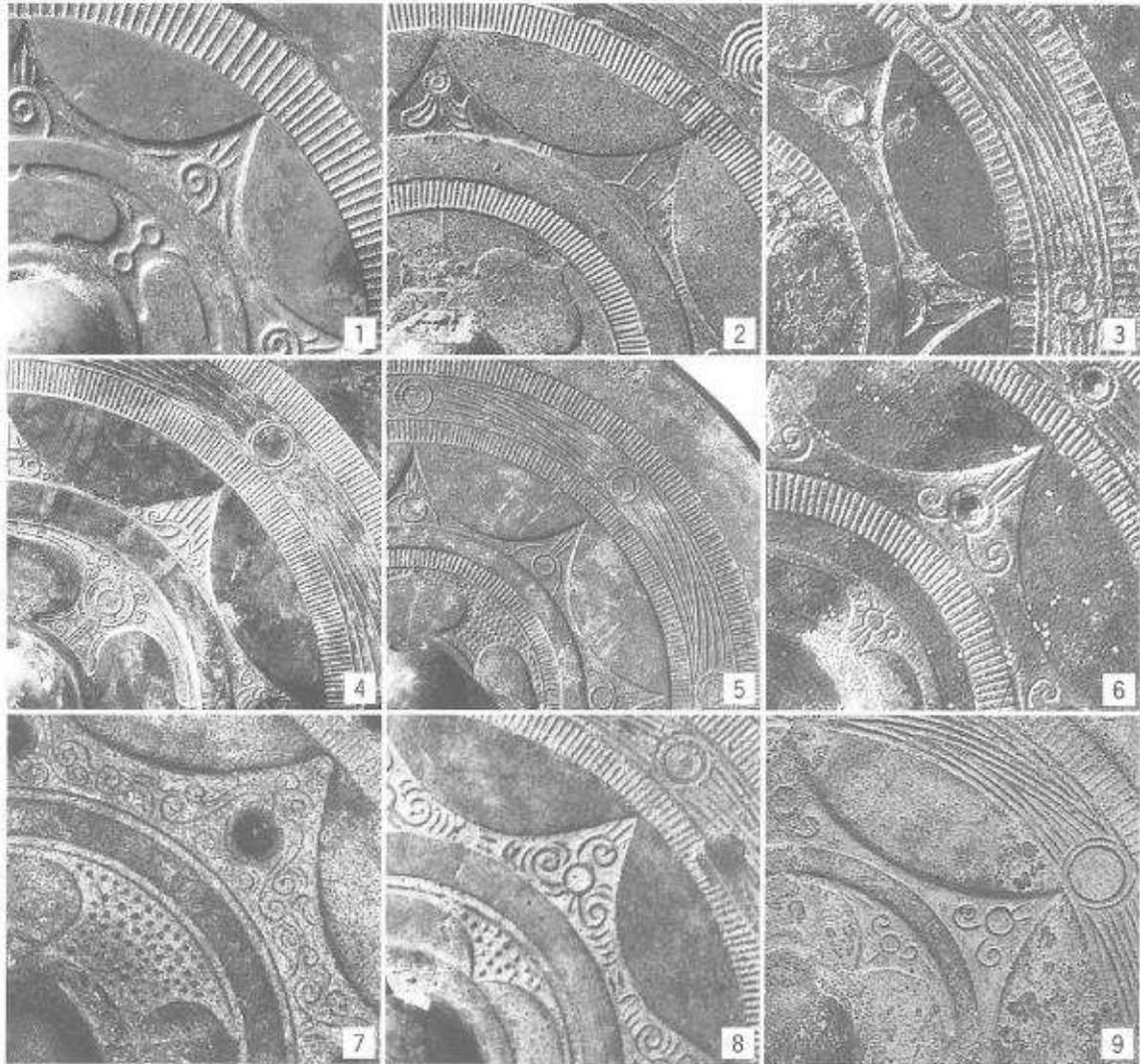
文 様 文様の比較にあたり、材料となりうるのは葉文間の文様と弧文間の文様である。若水古墳出土鏡では、葉文間に結び目文が形骸化したような図文を、連弧文間に山形文の一部と渦巻文を組み合わせたような図文を配する（第197図—1）。

日本列島で出土する後漢代の連弧文鏡のなかに、若水古墳と同様の文様をもつ例は管見では確認することができない（第197図—2・3）。このことは、対象を中国大陸出土例にまで広げたとしても、同様の状況である。岡村秀典による連弧文鏡における単位文様の分類をみると（岡村1993 p.63）、後漢代の連弧文鏡には配列する文様について一定の規則性があったと考えられる。ただし、中国鏡においても銘文が記号化した例があるように、文様の変異はさまざまな要因で生ずる可能性が高い。あるいは、当該時期の中心的な生産系統と、それ以外では作鏡姿勢に差異があった可能性もあろう。時期が下降して三国時代には、それ以前と比べて特異な文様をもつ連弧文鏡も確認されていることから、文様の一致する例がないことをもって、若水古墳出土鏡を舶載鏡とは異なる特徴をもつものとみなすことはできない。

同様にいわゆる仿製鏡においても、若水古墳出土鏡と同じ単位文様を採用する例はみあたらない（第197図—4～9）。比較的類似すると判断できるものに、葉文間文様としては矢道長塚古墳出土鏡（第197図—9）、弧文間文様としては鶴山丸山古墳出土鏡（第197図—8）があげられる。ただし、矢道長塚古墳出土鏡の単位文様は仿製鏡のなかでもほかに例がないものであり、若水古墳出土鏡との相違を系列における変異ととらえられるだけの材料がない。また、鶴山丸山古墳出土鏡の単位文様は他例でも確認できるが、単位文様の共通性がきわめて高い系列をなし、若水古墳出土鏡との関連性は低いと考える。すなわち、若水古墳出土鏡を仿製鏡として位置づける材料も基本的には存在しないのである。

以上のように文様という点においては、若水古墳出土鏡を舶載鏡と仿製鏡のいずれかに位置づけるべきであるかを判断することは困難といわざるを得ない。

形 態 つぎに形態的な特徴について比較検討を試みたい。第198図に連弧文鏡の舶載鏡と仿製鏡の断面図を示す。2～4が舶載鏡、5～8が仿製鏡である。注目すべき点としては、鈕孔の位置と外区にみる形態の異同である。舶載鏡では鈕孔下辺の位置が鈕座面より高い位置にあるのに対し、仿製鏡では鈕孔下辺の位置が鈕座面ないしは文様を刻み込むベース面と一致する。また、舶載鏡では外区上面が直線的な形態であるのに対し、仿製鏡では反りをもって縁部端へと至る。これらの異同は、時間的な経過や小系列を越えて舶載鏡と古墳時代仿製鏡に保持されるものであり、舶載鏡と古墳時代仿製鏡を識別するうえではきわめて重要な要素となりうる。



第197図 四葉座間・弧文間文様の比較（1以外の写真はすべて車崎編2002を改変）

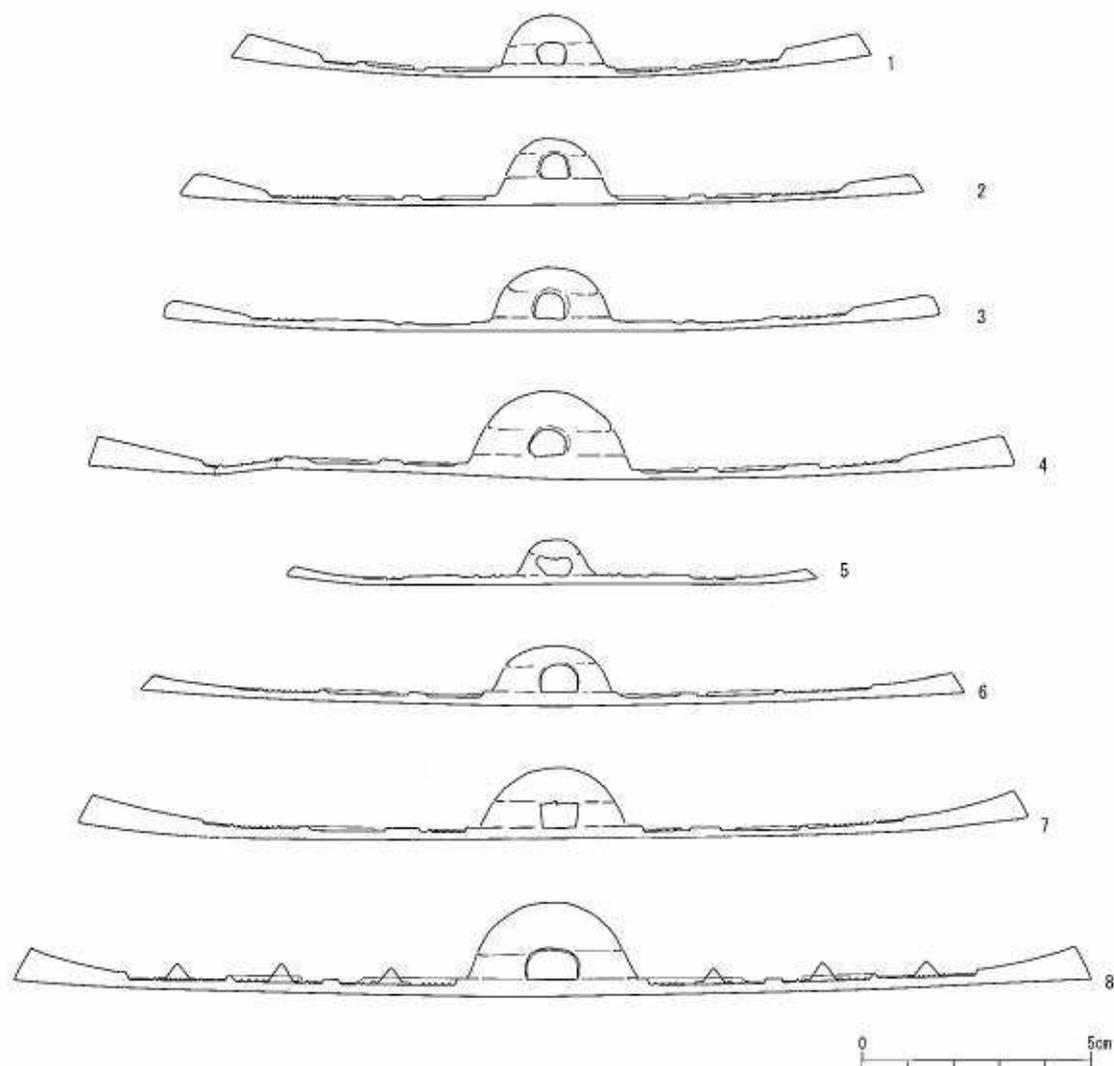
(1.若水 2.花光寺山 3.長慶寺山 4.下池山 5.松林山 6.慈願寺山 7,8.鶴山丸山 9.矢道長塚)

とくに、鈕孔下辺の位置の違いは、きわめて長い時間の流れのなかでも、両者において排他的な関係にある。

したがって、形態という点においては、若水古墳出土鏡は、鈕孔下辺の位置が鈕座面より高い位置にあり、外区上面が直線的な形態であることから、舶載鏡と共通することを確認できる。

小 結 文様・形態という2つの側面による検討にしたがえば、若水古墳出土の連弧文鏡はどちらかといえば舶載鏡との共通性がより強い製品であると考えられる。ただし、その製品が中国における鏡作りの中心的な系統によるものではない可能性を強調しておく必要がある。少なくとも現状において明確に把握できる系統の生産によるものではなく、傍系としての位置づけをおこなうはかない資料といいかえることができるであろう。

また、鑄造技術や研磨技術の高さをみる限り、その製作年代が三国時代に下降する可能性をあまり考慮することができない。なぜなら三国時代の銅鏡の多くは、鑄造欠陥も目立ち、仕上げの研磨も粗いものが多いからである。こうした点を踏まえて、あえてその製作年代を導き出すとすれば、後漢代でも末期の3世紀第1四半期ごろを、その下限年代と考えることが可能であるかもしれない。



第198図 連弧文鏡の断面形態（8のみ福永・杉井編1996）

(1.若水 2.壬生西谷 3.向野田 4.桂見2号 5.筒江中山23号 6.矢道長塚 7.鶴山丸山 8.雪野山)

3. 古墳時代開始期における但馬地域出土鏡と若水古墳出土鏡

つぎに、若水古墳に副葬された2面の銅鏡がもたらされた背景を考察するために、古墳時代前期における但馬地域出土鏡について、若干の検討をおこなう（第11表）。対象となるのは、いうまでもなく前期古墳出土鏡である。

まず、全体をみて、後漢代の銅鏡がきわめて少ないという特徴がある。仿製鏡の比率は出土鏡の半数を占めるが、一般的傾向がそうであるように小型鏡が圧倒的多数となる。仿製鏡のあり方としては、直径12.0cmを超える例がほとんど存在しないという点に注目できる。いっぽうの大型鏡である三角縁神獸鏡は全体の20%弱である。三角縁神獸鏡は墳丘が30mを超える古墳で出土する傾向をよみとることができる。残る30%近くが、魏晋代の銅鏡や、特異な特徴を有する舶載鏡であり、全体のうちではかなりの高比率を占める。

第11表 但馬地域における前期古墳出土鏡

所在	鏡式	古墳名	面径(cm)	墳丘形態(規模m)
豊岡市	方格規矩四神鏡	森尾古墳第1竪穴式石槨	12.9	方墳(35×24)
豊岡市	三角縁新作徐州銘四神四獣鏡	森尾古墳第2竪穴式石槨	25.4	方墳(35×24)
豊岡市	三角縁陳是作同向式神獸鏡	森尾古墳第3竪穴式石槨	22.6	方墳(35×24)
豊岡市	三角縁波文帯三神三獣鏡	小見塚古墳	21.3	円墳?(不明)
豊岡市	仿製細線式獸帯鏡	小見塚古墳	18.8	円墳?(不明)
豊岡市	仿製珠文鏡	カチヤ古墳	6.4	円墳(20)
豊岡市	仿製獸形鏡	立石107-1号墳	12.4	古墳(約10)
豊岡市	連弧文鏡	中ノ郷・深谷1号墳第2主体部	破片4.5	方墳(21×19)
豊岡市	仿製連弧文鏡	中ノ郷・深谷1号墳第4主体部	9.5	方墳(21×19)
豊岡市	不明	長谷・ハナ1号墳	破片9.5	古墳(約10)
豊岡市	仿製珠文鏡	長谷・ハナ4号墳第3主体部	5.2	方墳(11×7)
豊岡市	仿製獸形鏡	下安良城山古墳2号石棺	11.93	円墳(20)
豊岡市	仿製菱文鏡	箱根山6号墳	9.26	円墳(不明)
豊岡市	方格銘四獣鏡	入佐山3号墳第1主体部	12.35	方墳(36×23)
豊岡市	仿製獸形鏡	入佐山3号墳第1主体部	8.46	方墳(36×23)
豊岡市	仿製獸形鏡	御座敷遺跡1号竪穴式石槨	9.7	不明
豊岡市	仿製獸形鏡	御座敷遺跡2号竪穴式石槨	9.88	不明
豊岡市	仿製連弧文鏡	田多地3号墳第1主体部	6.6	方墳(30?)
豊岡市	仿製珠文鏡	田多地引谷5号墳	7.3	不明
養父市	仿製連弧文鏡	西家の上山頂古墳	10.0	不明
朝来市	飛禽文鏡	若水古墳	9.1	円墳(40)
朝来市	連弧文鏡	若水古墳	14.1	円墳(40)
朝来市	三角縁獸文帯三神三獣鏡	城の山古墳	24.1	円墳(36×30)
朝来市	三角縁獸文帯三神三獣鏡	城の山古墳	22.1	円墳(36×30)
朝来市	三角縁波文帯三神三獣鏡	城の山古墳	21.6	円墳(36×30)
朝来市	斜縁獸帯鏡	城の山古墳	14.8	円墳(36×30)
朝来市	唐草文鏡	城の山古墳	15.5	円墳(36×30)
朝来市	方格規矩鳥文鏡	城の山古墳	15.5	円墳(36×30)
朝来市	仿製連弧文鏡	筒江中山23号墳	11.7	円墳(27)
朝来市	連弧文鏡	向山2号墳第2主体部	10.2	方墳(10.6×6.5)
朝来市	仿製珠文鏡	東南山2号墳	6.0	円墳(16×14)
朝来市	仿製重圈文鏡	新堂見尾1号墳	5.65	円墳(25)
養父市	仿製龜鏡	沖田1号墳	17.1	円墳(23×19)

全体において比較的高比率を占める、魏晋代の銅鏡や特異な特徴を有する舶載鏡は、中国大陸における鏡作りの中心地で製作されたものではなく、周辺地域で製作されたものとする。但馬地域においては、三角縁神獸鏡以外の魏晋鏡の出土頻度は高い。さらに、古墳じたいの年代は下降するものの、古墳時代前期のうちに流入したと考えられるものまで検討の対象とすれば、ほかに茶すり山古墳の連弧文鏡や、馬場19号墳の方格規矩鳥文鏡、沖田11号墳の方格T字文鏡が該当する資料となる。これらを含めて、古墳時代前期に流入した可能性のある銅鏡という観点でとらえなおせば、その出土数が全体に占める割合はさらに高くなる。

こうした但馬地域で出土する三角縁神獸鏡以外の魏晋鏡の多くは、直径が12~17cm前後にあり、直径12cm以下の例がほとんどを占める仿製鏡のあり方とはきわめて対照的である。いっぽうで、上述したこれら魏晋鏡の生産系統が周辺地域に属するものである可能性や、出土総数における割合の高さを考慮すれば、但馬地域出土の魏晋鏡のすべてが王権から分配されたものであるとは考えにくい。すなわち、そのうちのいくつかは、個別の流通経路によって流入した可能性も考えるのである。

前節での検討において、若水古墳出土鏡が時期的には後漢代に位置づけられる、あるいは併行するものとする考え方を指摘した。また、但馬地域ではそもそも後漢鏡が少ないという事実やそれ以前にさかのぼる舶載鏡がほとんど確認できないという点を考慮すれば、少数ながら出土している漢鏡は当地域に流入した初期の銅鏡であると評価することが可能である。先に可能性を指摘した魏晋鏡にみる流入経路の多様性をふまえるならば、但馬地域における初期の銅鏡流入形態についても同様に、王権との関係だけで成立していたとは考えにくい。前節で指摘した若水古墳出土鏡群の位置づけをふまえれば、日本

海沿岸域という地理的特性を基盤とした、対外交渉によってこれらの鏡がもたらされた可能性を指摘できる。さらに、そうした流通形態はほかの文物を含めた多岐のものに影響を与えたはずであり、時代という枠組みに縛られることなく長期にわたって継続したものとする。

4. まとめ

小稿では、若水古墳から出土した2面の銅鏡の位置づけを確認し、そのうえで2面の銅鏡が但馬地域にもたらされた背景を考察した。そのうえで、検討に不十分な点も多いが、若水古墳出土鏡群が2世紀後半から3世紀第1四半期までに製作され、王権などのような列島内における一元的な流通を介することなく、日本海沿岸域における対外交渉によってもたらされた可能性を指摘した。

しかしながら、他地域との比較や小地域内のあり方を検討に十分盛り込むことができず、定量的なデータも示すことができなかった。そうした問題点の克服については、今後の課題とし、後稿に期すこととしたい。

引用文献

- 岡村秀典 1992 「浮彫式獸帯鏡と古墳出現期の社会」『出雲における古墳出現を探る—松本古墳群シンポジウムの記録—』出雲考古学研究会 pp. 98-115
- 岡村秀典 1993 「後漢鏡の編年」『国立歴史民俗博物館研究報告』第55集 国立歴史民俗博物館 pp. 39-83
- 岡村秀典 1999 『三角縁神獸鏡の時代』歴史ライブラリー66 吉川弘文館
- 車崎正彦編 2002 『考古資料大観5 弥生・古墳時代 鏡』小学館
- 山東省棗荘市博物館 2004 「山東棗荘市湯口漢墓」『考古学集刊』第14集 文物出版社 pp. 80-160
- 平田博幸 2002 「若水A11号墳の調査」『シンポジウム古代但馬の王墓をめぐる』兵庫県教育委員会 pp. 1-6
- 福永伸哉・杉井健編 1996 『雪野山古墳の研究』雪野山古墳発掘調査団
- 森下章司 2007 「銅鏡生産の変容と交流」『考古学研究』第54巻第2号 考古学研究会 pp. 34-49

参考文献

- 池田征弘 2008 「土器の変遷」『柿坪遺跡』兵庫県文化財調査報告 第326冊 兵庫県教育委員会
- 池田征弘編 2007 「加都遺跡Ⅱ」兵庫県文化財調査報告 第324冊 兵庫県教育委員会
- 石井智大 2003 「北近畿の弥生墳墓における二種の土器出土状況とその意義」『香任門谷遺跡群』豊岡市文化財調査報告書第34集 豊岡市教育委員会
- 石崎善久・高橋あかね 1995 「金谷古墳群（1号墓）発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第66冊（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 伊野近富・竹原一彦・河野一隆 1998 「国営農地（丹後東部地区）関係遺跡平成9年度発掘調査概要 浅後谷南城跡・浅後谷南墳墓」『京都府遺跡調査概報』第84冊（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 今田昇一編 2001 「左坂古墳（墳墓）群G支群」大宮町文化財調査報告第20集 大宮町教育委員会
- 岩田文章・岩田珠美・植野浩三 2000 「妻木晩田遺跡と西伯寄弥生集落の動態」『妻木晩田遺跡洞ノ原地区・晩田山古墳群発掘調査報告書』淀江町埋蔵文化財調査報告書第50集 淀江町教育委員会
- 岩本崇 2003 「棺内陳敷をもつ組合式箱形木棺」『大手前大学史学研究所紀要 オープン・リサーチ・センター報告』第3号 大手前大学史学研究所
- 魚津知克 2000 「鉄製農具副葬についての試論」『第7回鉄器文化研究集会 表象としての鉄器副葬』鉄器文化研究会
- 岡崎正雄編 1989 「岡田2号墳」兵庫県文化財調査報告 第68冊 兵庫県教育委員会
- 岡田晃治・肥後弘幸・細川康晴・倉本まり子・森正 1987 「国営事業地開発関係遺跡昭和61年度発掘調査概要 帯城墳墓群Ⅱ」『埋蔵文化財発掘調査概報』（1987）京都府教育委員会
- 岡林峰夫・石崎善久 2001 「赤坂今井墳丘墓 第3次発掘調査概要報告」峰山町文化財調査報告第21集・京都府遺跡調査概報第100冊 峰山町教育委員会・（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 甲斐昭光編 2005 「加都遺跡Ⅰ」兵庫県文化財調査報告 第285冊 兵庫県教育委員会
- 勝瀬利栄編 1997 「塩津山古墳群 一般国道9号（安来道路）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書西地区Ⅵ 建設省松江国道工事事務所・島根県教育委員会
- 河野一隆 1994 「国道176号関係遺跡発掘調査概要 白米山北古墳」『京都府遺跡調査概報』第57冊（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 河野一隆 1995 「奈具墳墓群・奈具古墳群」『京都府遺跡調査概報』第65冊（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 河野一隆・福島孝行 1999 「川向古墳群」『京都府遺跡調査概報』第87冊（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 神原英朗 1971 「便木山遺跡発掘調査報告」岡山県営山陽新住宅市街地開発事業用地内埋蔵文化財発掘調査概報（2）山陽団地埋蔵文化財発掘調査団
- 岸岡貴英 1991 「京都府出土の装飾器台について」『京都府埋蔵文化財論集』第2集（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 岸本一宏 2008 「9号墳埋葬施設の名称」『芝花弥生墓群・古墳群』兵庫県文化財調査報告 第345冊 兵庫県教育委員会
- 岸本一宏編 2003 「茶すり山古墳調査概報」兵庫県教育委員会
- 岸本一宏編 2008 「芝花弥生墓群・古墳群」兵庫県文化財調査報告 第345冊 兵庫県教育委員会
- 岸本一宏・鈴木敬二・池田征弘 2008 「和賀向山1号墳・芝ヶ端古墳・芝ヶ端遺跡・芝花古墳群」兵庫県文化財調査報告 第329冊 兵庫県教育委員会
- 楠正勝 2003 「装飾器台の成立と展開」『庄内式土器研究』XXVI-庄内式併行期の土器生産とその動き一越の国を中心とした庄内式併行期の土器様相 庄内式土器研究会
- 西条古墳群発掘調査団 2009 「西条52号墓発掘調査の記録」『弥生墓からみた播磨』第9回播磨考古学研究会の記録 第9回播磨考古学研究会実行委員会
- 山東町教育委員会 1988 「五反田・馬場遺跡群現地説明会資料」一播磨屋本店山東工場予定地埋蔵文化財発掘調査一山東町教育委員会 2004 「新堂見尾1号墳現地説明会資料」
- 瀬崎誠 1999 「半坂墳墓群発掘調査概要報告」『とよおか発掘情報』第7号 豊岡市出土文化財管理センター
- 白数真也 2003 「丹後の弥生時代の首長層と王墓」『弥生時代の墳墓と祭祀』第11回京都府埋蔵文化財研究集会一発表資料集一 京都府埋蔵文化財研究会
- 白数真也・肥後弘幸・長谷川達・高田健一ほか 2000 「大風呂南墳墓群」岩滝町文化財調査報告書第15集 岩滝町教育委員会
- 杉山秀宏 1988 「古墳時代の鉄鏡について」『橿原考古学研究所論集』第8 創立50周年記念 吉川弘文館
- 瀬戸谷皓編 1980 「北浦古墳群」豊岡市文化財調査報告書第26集 豊岡市教育委員会
- 瀬戸谷皓編 1992 「上鉢山・東山墳墓群」豊岡市文化財調査報告書第26集 豊岡市教育委員会
- 瀬戸谷皓編 1994 「加陽土屋ヶ鼻遺跡群」豊岡市文化財調査報告書第29集 豊岡市教育委員会
- 瀬戸谷皓編 2002 「妙楽寺墳墓群」豊岡市文化財調査報告書第32集 豊岡市教育委員会
- 瀬戸谷皓編 2003 「香任門谷遺跡群」豊岡市文化財調査報告書第34集 豊岡市教育委員会
- 高野陽子 2006 「古式土器器編年集一 丹後地域一擬内線文系土器の様式と変遷一」『古式土器の年代学』（財）大阪府文化財センター
- 田辺昭三 1981 『須恵器大成』角川書店
- 谷口恭子・藤本隆之・神谷伊鈴 1996 「山ヶ鼻遺跡Ⅱ」（財）鳥取市教育福祉振興会
- 谷本進 1987 「箕谷古墳群」八鹿町文化財調査報告書第6集 八鹿町教育委員会
- 谷本進 1992 「但馬地域」『弥生土器の様式と編年一山陽・山陰編一』木耳社
- 谷本進 2001 「但馬における庄内併行期の土器の様相」『北近畿の考古学』両丹考古学研究会・但馬考古学研究会
- 谷本進・山田宗之編 1990 「小山古墳群・東家の上遺跡」八鹿町文化財調査報告書第9集 八鹿町教育委員会
- 田畑基 1988 「森・向山遺跡」『兵庫県埋蔵文化財調査年報 昭和60年度』兵庫県教育委員会
- 田畑基 2002 「小特集：兵庫県北部における集落の様相 南但馬における弥生集落の動向」『みずほ』第37号 大和弥生文化の会
- 田畑基 2004 「考古学から見た和田山」『和田山町史』上巻
- 田畑基・中島雄二 1995 「大盛山遺跡」和田山町文化財調査報告書 第7集 和田山町教育委員会

- 常盤井智行・黒田恭正 1983 『丹後大山墳墓群』丹後町文化財調査報告第1集 丹後町教育委員会
- 徳原多喜雄・植野浩三編 1995 『ブラ山・ボラ山』水上郡埋蔵文化財発掘調査報告書第2集 青垣町・水上郡教育委員会
- 豊岡市立郷土資料館編 1990 『鎌田・若宮古墳群』『豊岡市文化財調査報告書集 1989年度』豊岡市文化財調査報告書23 豊岡市教育委員会
- 中川寧 1996 『山陰の後期弥生土器における編年と地域関係』『鳥根考古学会誌』第13集 鳥根考古学会
- 中川渉編 1993 『内場山城跡』兵庫県文化財調査報告第126冊 兵庫県教育委員会
- 中村弘編 1999 『向山古墳群・市条寺古墳群・一乗寺経塚・矢別遺跡』兵庫県文化財調査報告 第191冊 兵庫県教育委員会
- 鎌田剛志 1995 『吉佐山根1号墳の調査』『一般国道9号(安来道路)建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書10』建設省松江国道工事事務所・鳥根県教育委員会
- 野島永・高野陽子 1999 『近畿地方北部における古墳成立期の墳墓(1)』『京都府埋蔵文化財情報』第74号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 野島永・高野陽子 2000 『近畿地方北部における古墳成立期の墳墓(2)』『京都府埋蔵文化財情報』第76号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 野島永・高野陽子 2002 『近畿地方北部における古墳成立期の墳墓(3)』『京都府埋蔵文化財情報』第83号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 橋本勝行 2001 『今市古墳群・墳墓群・経塚発掘調査概報』大宮町文化財調査報告第19集 大宮町教育委員会
- 長谷川達 1999 『丹後発掘』特別展図録30 京都府立丹後郷土資料館
- 肥後弘幸 1991 『丹後地域の弥生墓制』『京都府埋蔵文化財論集』第2集 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 肥後弘幸 1994 『墓壙内破砕土器供献—近畿北部弥生墳墓土器供献の様相—』『みずほ』第12・13号 大和弥生文化の会
- 肥後弘幸 1996 『家族墓へのアプローチ—北近畿後期弥生墳墓の場合—』『京都府埋蔵文化財論集』第3集 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 肥後弘幸・今田昇一・橋本勝行 1998 『三坂神社墳墓群・三坂神社裏古墳群・有明古墳群・有明横穴群』大宮町文化財調査報告書 第14集 大宮町教育委員会
- 榎本誠一編 1975 『柿坪中山古墳群』第1集 山東町教育委員会
- 榎本誠一・加古千恵子編 1978 『柿坪中山古墳群』第2集 山東町教育委員会
- 榎本誠一編 1972 『城の山・池田古墳』和田山町・和田山町教育委員会
- 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 2002 『地域文化財展 古代但馬の王墓』兵庫県教育委員会
- 兵庫県教育委員会主催 2002 『シンポジウム古代但馬の王墓をめぐる』資料 兵庫県教育委員会
- 兵庫県教育委員会 2004 『兵庫県遺跡地図』
- 平田博幸ほか 2001 『若水古墳群』『平成12年度 年報』兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
- 平田博幸ほか 2002 『若水城跡・若水古墳群』『平成13年度 年報』兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
- 平田博幸・長濱誠司・池田征弘 2003 『寺山古墳群』『平成14年度 年報』兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 および調査担当者の御教示。
- 深井明比古・市橋重喜 1988 『釜久・乙城山』兵庫県文化財調査報告 第58冊 兵庫県教育委員会
- 深井明比古・岸本一宏編 2007 『粟鹿遺跡』兵庫県文化財調査報告 第323冊 兵庫県教育委員会
- 福島孝行 2003 『いわゆる丹後地域方形台状墓概念の再検討』『弥生時代の墳墓と祭祀』第11回京都府埋蔵文化財研究集会—発表資料集— 京都府埋蔵文化財研究会
- 藤田淳・鈴木敬二・柏原正民 2003 『カヤガ谷墳墓群・大谷墳墓群・坪井遺跡』兵庫県文化財調査報告 第259冊 兵庫県教育委員会
- 松井潔 1997 『東の土器、南の土器—山陰東部における弥生時代中期後葉～古墳時代初頭の非在地系土器の動態—』『古代吉備』第19集 古代吉備研究会
- 松井敬代 1991 『破砕土器の埋納について』『但馬考古学』第6集 但馬考古学研究会
- 松井敬代 2002 『小特集：兵庫県北部における集落の様相 北但馬における弥生集落の動向』『みずほ』第37号 大和弥生文化の会
- 松下利秀・山田正年 1989 『大口遺跡群発掘調査報告書』青谷町教育委員会
- 松本哲・門脇豊文・岩田文章・妹尾活明 2000 『まとめ 土器の分類と編年』『妻木晩田遺跡発掘調査報告Ⅳ<洞ノ原・松尾城地区>』大山町埋蔵文化財調査報告書第17集 大山スイス村埋蔵文化財発掘調査団・大山町教育委員会
- 丸山次郎 2001 『弥栄町内遺跡発掘調査報告書』弥栄町文化財調査報告代19集 弥栄町教育委員会
- 峰山町教育委員会編 2004 『赤坂今井墳丘墓発掘調査報告書』峰山町埋蔵文化財調査報告書第24集 峰山町教育委員会
- 宮村良雄 1992 『豊岡の弥生墓と墓壙内破砕土器供献』『上鉢山・東山墳墓群』豊岡市文化財調査報告書第26集 豊岡市教育委員会
- 宮本正保 2002 『足頭古墳群』『主要地方道赤道インター線道路改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』鳥根県教育委員会
- 森正 1992 『176号関係遺跡発掘調査概要 内和田古墳群』『京都府遺跡調査概報』第49冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 森下篤・辻健二郎 1991 『船阪・黒田工業団地予定地内遺跡群発掘調査概報』園部町文化財調査報告書第8集 園部町教育委員会
- 山田清朝 2002 『梅田東古墳群』兵庫県文化財調査報告 第241冊 兵庫県教育委員会
- 横島勝則・丸山次郎 1998 『大田南古墳群／大田南遺跡／矢田城跡第2次～第5次発掘調査報告書』弥栄町文化財調査報告第15集 弥栄町教育委員会
- 吉識雅仁編 2008 『柿坪遺跡』兵庫県文化財調査報告 第326冊 兵庫県教育委員会
- 渡辺昇・田畑基 1985 『筒江遺跡群Ⅰ』兵庫県文化財調査報告 第31冊 兵庫県教育委員会
- 和田山町教育委員会 1994 『但馬・和田山 史跡・竹田城跡』
- 和田山町教育委員会 2002 『宮ノ本遺跡宮ノ本地区』宮ノ本遺跡第3次発掘調査現地説明会資料